青森県埋蔵文化財調査報告書　第641集

酪農（３）遺跡

－国道 279 号むつ南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告－

【第１分冊　本文編１】

２０２４年3月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書　第641集

酪農（３）遺跡

－国道 279 号むつ南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告－

【第１分冊　本文編１】

２０２４年3月

青森県教育委員会

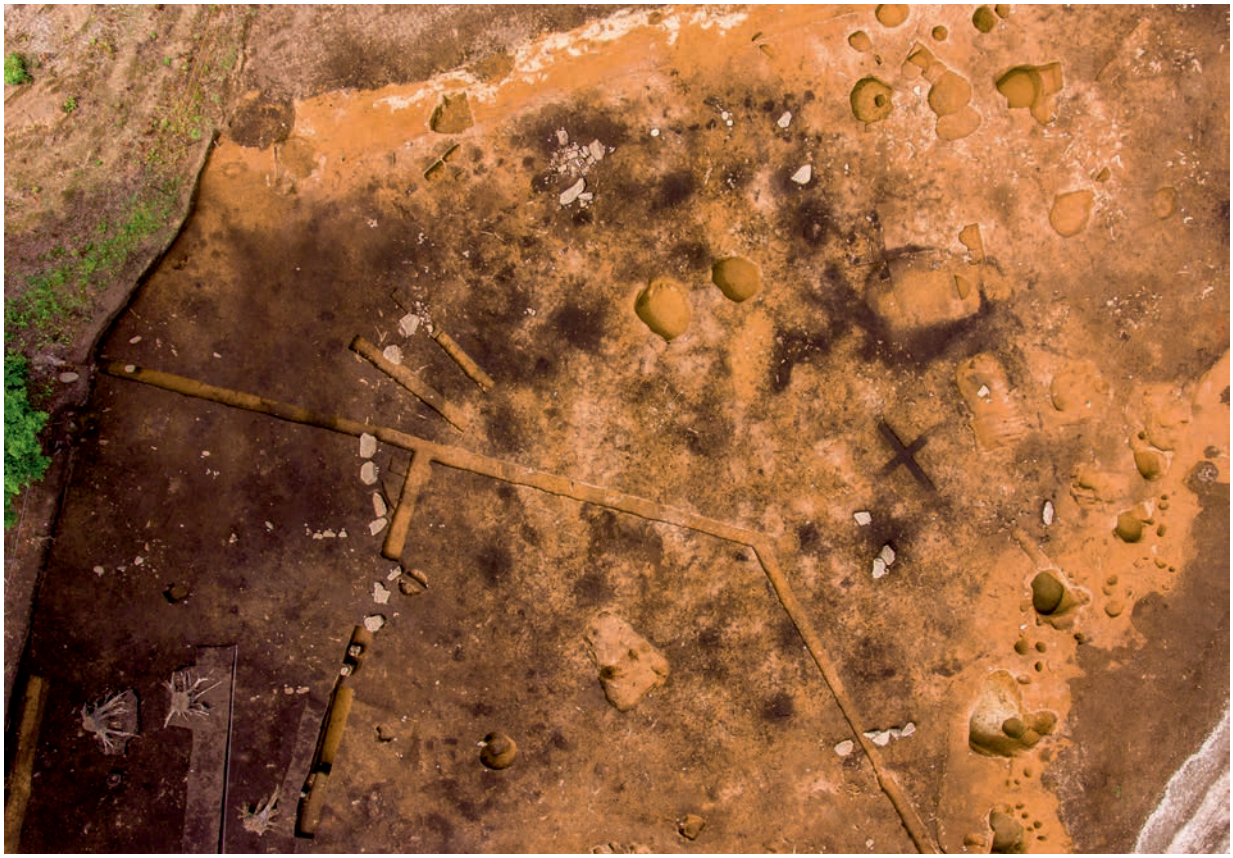
酪農（３）遺跡　調査区遠景（東から）

酪農（３）遺跡　調査区遠景（北から）

巻頭写真１

酪農（３）遺跡　調査区近景（上が北）

巻頭写真２



環状列石（上が北）

環状列石（南西から）

巻頭写真３

第３号配石遺構　検出状況（南から）

第３号配石遺構　精査状況（西から）

巻頭写真４

第４号配石遺構　検出状況（南東から）

第 100 号土坑　配石出土状況（南西から）

巻頭写真５

第１号捨て場　遺物出土状況（南東から）

第１号捨て場　土層断面（東から）

巻頭写真６

土器集合（後期初頭中心）

土器集合（後期初頭新段階（小牧野３期）中心）

巻頭写真７

土器集合（後期前葉（十腰内Ⅰ式）中心）

土偶集合

巻頭写真８

第 1 号捨て場出土土偶（図 310-1）（撮影：小川忠博）

巻頭写真９

磨製石斧集合

砥石集合

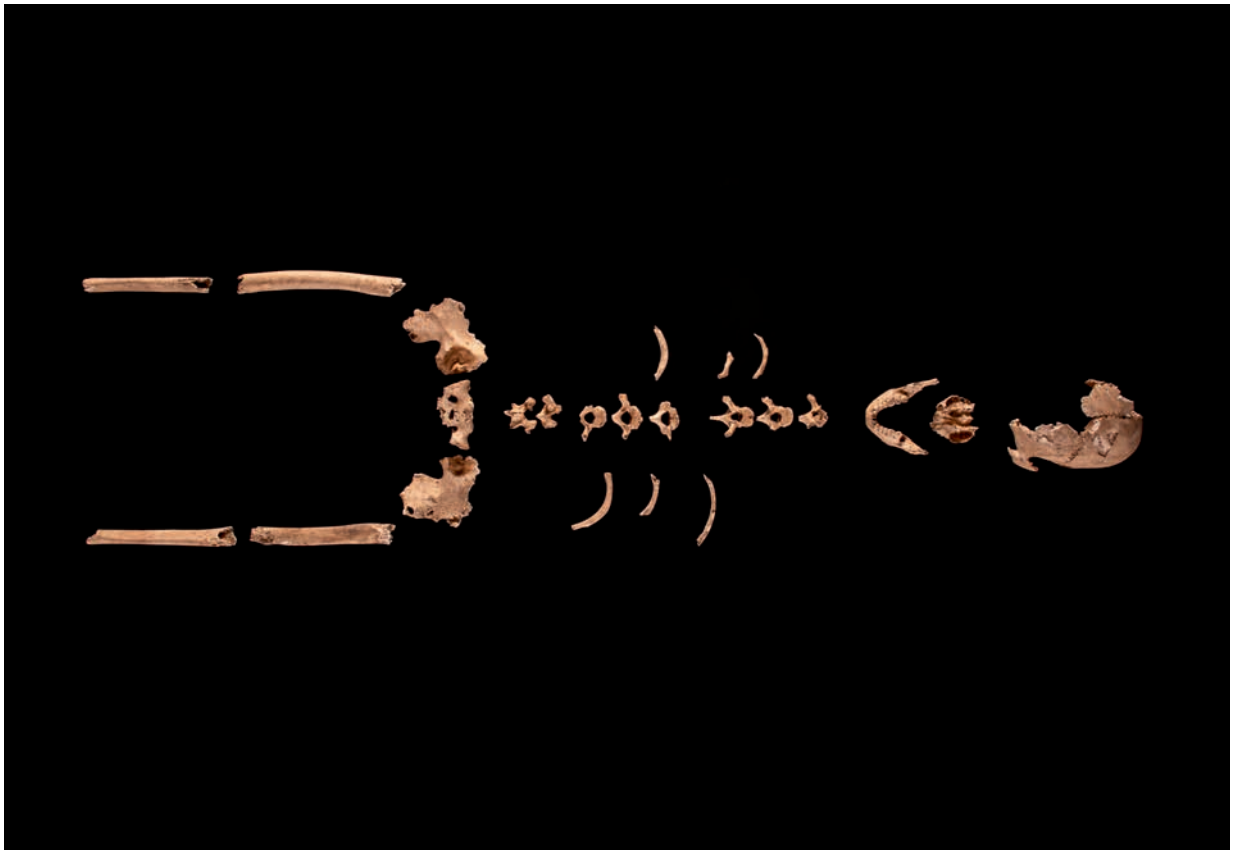
巻頭写真 10

磨石Ⅳ類集合

球状礫集合

巻頭写真 11

第 7 号土器埋設遺構　土器棺（図 163-5）出土状況（東から）



第 7 号土器埋設遺構　埋納人骨

巻頭写真 12

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、令和２・３年度に国道279号むつ南バイパス道路改築事業予定地内に所在する酪農(３)遺跡の発掘調査を実施しました。

本遺跡は、西に陸奥湾、田名部平野を挟んで釜臥山を望む台地に立地し、周囲には縄文時代の遺跡が多く所在します。

２か年に及ぶ発掘調査の結果、主に縄文時代後期前半の集落跡が見つかりました。集落は主に縄文時代後期初頭から営まれ、掘立柱建物跡が環状に巡り、後期前葉に環状列石が形成されるまでの過程が明らかになりました。また、多量の土器や石器に加え、青森県内でも珍しい完全な形の大型の土偶をはじめとする、土製品や石製品といった貴重な遺物が出土しました。本遺跡の南側には近い時期の環状集落である内田(１)遺跡があり、当時は大規模な集落が複数営まれていたことも明らかになるなど、下北半島の縄文文化を考える上で欠かせない成果となりました。

本報告書は、それらの調査成果をまとめたものです。この調査成果が今後、埋蔵文化財の保護のために広く活用され、また地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護に対して御理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、御指導、御協力をいただきましたむつ市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和６年３月

青森県埋蔵文化財調査センター
所　長　　渡　部　泰　雄

例　言・凡　例

1　本書は、青森県県土整備部道路課による国道279号むつ南バイパス道路改築事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが令和２年度と３年度に発掘調査を実施した、むつ市酪農（３）遺跡の発掘調査報告書である。発掘対象面積は4,700㎡、発掘面積は4,485㎡である。

2　酪農（３）遺跡の所在地は、青森県むつ市大字田名部字内田地内、青森県遺跡番号は208048である。

3　発掘調査と整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。

4　発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	令和２年５月12日～令和２年10月30日
	令和３年６月15日～令和３年11月26日
整理・報告書作成期間	令和３年４月１日～令和４年３月31日
	令和４年４月１日～令和５年３月31日
	令和５年４月１日～令和６年３月31日

5　本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、野村信生総括主幹、小山浩平・秦光次郎・佐々木雅裕文化財保護主幹、長谷川大旗・折登亮子文化財保護主事が担当した。

6　発掘調査の成果の一部は、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合においては本書が優先する。

7　発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

基準点測量	株式会社知立造園CUBIC事業部青森営業所
遺構測量	東北測量株式会社
空中写真撮影	株式会社シン技術コンサル東北支店
	有限会社無限
再葬土器棺墓取り上げ	株式会社スタジオ三十三
再葬土器棺墓内の人骨等実測図作成	株式会社知立造園CUBIC事業部青森営業所
３Ｄスキャナーによる地形測量	株式会社青秋
モザイク写真作成	株式会社シン技術コンサル東北支店
環状列石構成巨礫の重量計測・洗浄	株式会社阿部重組
環状列石構成礫の石材及び供給源の同定	弘前大学大学院理工学研究科
石製品石材同定分析	フォッサマグナミュージアム
リン・カルシウム分析	株式会社パレオ・ラボ
黒曜石産地同定分析	株式会社パレオ・ラボ
動物遺体同定	株式会社パレオ・ラボ
微細遺物抽出	株式会社イビソク仙台支店
土器等水洗い・注記作業	株式会社イビソク仙台支店
石器等水洗い作業	第一合成株式会社

土器実測図作成	株式会社アルカ
	株式会社シン技術コンサル東北支店
剥片石器実測図作成	株式会社ラング
剥片石器・石製品実測図作成	株式会社アルカ
礫石器実測図等作成	株式会社知立造園 CUBIC 事業部青森営業所
土製品実測図等作成	株式会社ラング
	株式会社シン技術コンサル東北支店
遺物写真・遺物集合写真撮影	有限会社無限
遺物写真切り抜き・回転業務	株式会社知立造園 CUBIC 事業部青森営業所
環状列石等の見通し図作成	株式会社知立造園 CUBIC 事業部青森営業所
遺構図調整業務	株式会社知立造園 CUBIC 事業部青森営業所

８　出土した人骨の人類学的分析は、青森中央学院大学看護学科准教授、藤澤珠織氏に依頼した。

９　出土した人骨の炭素・窒素安定同位体比分析による食性解析及び放射性炭素年代測定は、東京大学総合研究博物館教授、米田穣氏に依頼した。

10　石器等の石質鑑定は佐々木実調査員･島口天調査員に依頼し、他の調査員にも協力を得た。地形･地質の原稿執筆は島口天調査員に依頼した。

11　発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

12　本書に掲載した遺跡位置図等は、国土地理院発行の 25,000 分の１地形図「むつ」、「城ヶ沢」、「蒲野沢」、「近川」を複写･加筆して使用した。

13　測量原点の座標値は、世界測地系(JGD2011)に基づく平面直角座標第Ｘ系による。

14　挿図中の方位は、世界測地系（JGD2011）の座標北を示している。

15　遺構については、その種類を示す略号と算用数字の通し番号を付した。遺構に使用した略号は次のとおりである。

SIー竪穴建物跡､SBー掘立柱建物跡､SPーピット(柱穴を含む)､SKー土坑､SRー土器埋設遺構、
SVー溝状土坑､SDー溝跡､Pitー遺構内柱穴､STー捨て場

16　遺物について使用した略号は以下のとおりである。

Ｐ－土器、Ｓ－石器、Ｃ－炭化材、

17　土層の色調表記等には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄)を使用した。

18　基本土層の層序番号にはローマ数字を、遺構内堆積土の層序番号には算用数字を使用した。

19　遺構配置図などの縮尺は任意に定め、図中にスケールと縮尺率を示した。

20　遺構実測図の縮尺は、１/60を基本とし､状況に応じて1/30も使用した｡遺構の位置を示すものとして４ｍグリッド、もしくは近隣の４ｍグリッド杭から任意に計測した点を掲載した（例：『ＩH34 から北に２ｍ、東に１ｍ』→ＩH34 グリッド交点杭から、北に２ｍ、東に１ｍの点を示す）。

21　遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海抜標高を付した。

22　遺構図に使用した網掛けと記号は、以下のとおりとした。なお、図中に凡例のある場合はそちらが優先される。

：床面硬化範囲、柱穴柱痕跡　　：柱穴柱当たり　　：遺構被熱範囲

●：土器　　▲：石（剥片石器、礫石器、自然礫）　　■：土壌サンプル

23　遺物図に使用した網掛けは、以下のとおりとした。なお、土器実測図に使用した網掛けは各図で凡例を示した。

：剥片石器光沢範囲、礫石器スリ範囲　　：剥片石器黒色付着物範囲

：土製品黒色物質付着範囲　　：土製品赤色顔料付着範囲

24　遺物実測図には、挿図毎に１から通し番号を付した。

25　遺物実測図の縮尺は、原則として土器・礫石器は１／３、剥片石器・製品類は１／２とした。規模が大きいものは適宜縮尺を変え、図中に対応するスケール等を示した。

26　縄文原体は『日本先史土器の縄紋』（山内清男 1979 先史考古学会）を参考にし、記述はそれに従った。土器観察表の表記は以下の基準とした。

(1) 結節回転文→結回、単軸絡条体第○類→単絡○、結束第○種→結束○、側面圧痕→側圧

(2) 縄文原体の回転の場合は種類の後に回転方向を記載した。充填縄文等では省略したものもある。

(3) 隆帯・貼付状の文様は直後に括弧書きした。

(4) 縄文原体以外の土器文様については以下のように省略した。

口縁部が肥厚し沈線文が施されるもの→口縁肥厚（下端沈線／横位沈線）、折り返し口縁→折返、波状口縁→波状、隆帯を縁取る沈線文→隆帯文（両端沈線／上端沈線／下端沈線）

(5) 炭化物・煤の付着は備考欄に「黒色物質付着」と記載した。

(6) 赤色顔料や白色物質を混和した粘土を化粧土として貼付し焼成しているものは「○化粧土塗布」、漆に顔料を混ぜ塗布し塗膜が確認されるものは「○漆塗布」、装飾として赤色顔料を塗布するものは「赤色顔料塗布」、わずかな付着で装飾か判断できないものは「赤色顔料付着」、漆やアスファルトの可能性がある光沢のある黒色物質は「黒色物質（光沢あり）付着」と文様・備考欄に記載した。

(7) 波状口縁の波頂部が残存しており単位数がわかるものは括弧内に「○単○残」として記載した。口縁～胴部の文様帯数・単位数がわかるものは括弧内に「○帯○単」として記載した。

(8) 口径と底径が復元可能なものについては、観察表に参考として推定値を記載した。また、器高については、残存値も記載した。推定値は［　］、残存値は（　）で表記した。

(9) 内面調整にみられるミガキについては、光沢があるものをミガキとした。

27　石器・土製品・石製品の観察表中で用いた（　）は残存値を表す。

28　遺物写真の各番号は、遺物実測図と共通番号を付した（例：図５－３は『５－３』と表記）。また、縮尺は遺物図版に準拠したが、統一はしていない。写真のみ掲載した遺物は写真図版で通し番号を付した。

29　発掘調査及び整理、報告書作成に際し、下記の機関及び個人から御協力、御指導を得た（敬称略、五十音順）。

むつ市教育委員会、阿部昭典、梅田浩司、工藤竹久、小林克、小山卓臣、佐々木実、千田政博、根岸洋、根本直樹

目　次

【第１分冊　本文編１】

巻頭写真
序
例言・凡例
目次・挿図目次・表目次・巻頭写真図版目次

第１章　調査概要
第１節　調査に至る経過……1
第２節　調査の方法……1
第３節　調査・整理体制とそれぞれの経過……3

第２章　遺跡の概要
第１節　歴史的環境……8
第２節　周辺の地形と地質について……12
第３節　基本層序……16
第４節　遺物の整理について……18

第３章　検出遺構と出土遺物
第１節　概要……33
第２節　環状列石・配石遺構……34
第３節　竪穴建物跡……59
第４節　掘立柱建物跡・ピット……67
第５節　焼土遺構……85
第６節　土坑……92
第７節　土器埋設遺構……152
第８節　溝状土坑……156
第９節　溝跡……157

【第２分冊　本文編２】

第10節　第１号捨て場（ST１）……1
第11節　遺構外出土遺物……142

第４章　自然科学分析
第１節　遺構採取土のリン・カルシウム分析（１）……160
第２節　遺構採取土のリン・カルシウム分析（２）……169
第３節　再葬土器棺墓（SR７）内の縄文時代人骨……175
第４節　人骨の炭素・窒素安定同位体分析による食生活の推定と放射性炭素年代……180
第５節　動物遺体（１）……186
第６節　動物遺体（２）……192

第７節　黒曜石製石器の産地推定……199
第８節　石製品の岩石種同定……202
第９節　環状列石構成礫の石材および供給源……204

第５章　総括
第１節　環状列石・配石遺構……222
第２節　掘立柱建物跡……232
第３節　縄文土器……240
第４節　石器……261
第５節　土製品……279
第６節　土器片利用土製品・土器片錘……284
第７節　石製品……290
第８節　遺跡の変遷……296

表
引用参考文献
報告書抄録
奥付

【第３分冊　写真図版編】
遺跡・遺構写真……１
遺物写真……149

報告書抄録
奥付

挿図目次

図１　路線図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
図２　遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
図３　段丘分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
図４　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図５　遺物分類図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
図６　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
図７　遺構配置図（拡大）・・・・・・・・・・・・・・・・・29
図８　環状列石配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
図９　環状列石見通し図・・・・・・・・・・・・・・・・・159
図10　環状列石　主体部（１）・・・・・・・・・・・・161
図11　環状列石　主体部（２）・・・・・・・・・・・・162
図12　環状列石　主体部（３）・・・・・・・・・・・・163
図13　環状列石　張出部（１）・・・・・・・・・・・・164
図14　環状列石　張出部（２）・・・・・・・・・・・・165
図15　環状列石　構成礫（１）・・・・・・・・・・・・166
図16　環状列石　構成礫（２）・・・・・・・・・・・・167
図17　第１号風倒木・・・・・・・・・・・・・・・・・・・168
図18　配石遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・169
図19　第１・２号配石遺構・・・・・・・・・・・・・・・169
図20　第３号配石遺構（１）・・・・・・・・・・・・・・170
図21　第３号配石遺構（２）・・・・・・・・・・・・・・171
図22　第４号配石遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・172
図23　第１号竪穴建物跡（１）・・・・・・・・・・・・173
図24　第１号竪穴建物跡（２）・・・・・・・・・・・・174
図25　第２号竪穴建物跡（１）・・・・・・・・・・・・175
図26　第２号竪穴建物跡（２）・・・・・・・・・・・・176
図27　第２・３号竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・177
図28　第３・４号竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・178
図29　第５号竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・179
図30　第６・７号竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・180
図31　第８・９号竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・181
図32　第10号竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・182
図33　第11・12号竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・183
図34　第12・13号竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・184
図35　第13・14号竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・185
図36　第14号竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・186
図37　第１号掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・187
図38　第２・３・19・23・24号掘立柱建物跡（１）・・188
図39　第２・３・19・23・24号掘立柱建物跡（２）・・189
図40　第２・３・19・23・24号掘立柱建物跡（３）・・190
図41　第４号掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・191
図42　第５・６・７・18・25号掘立柱建物跡（１）・・192
図43　第５・６・７・18・25号掘立柱建物跡（２）・・193
図44　第５・６・７・18・25号掘立柱建物跡（３）・・194
図45　第５・６・７・18・25号掘立柱建物跡（４）・・195
図46　第８・15・26号掘立柱建物跡（１）・・・196
図47　第８・15・26号掘立柱建物跡（２）・・・197
図48　第９・10・17号掘立柱建物跡（１）・・・198
図49　第９・10・17号掘立柱建物跡（２）・・・199
図50　第11・21号掘立柱建物跡（１）・・・・・・200
図51　第11・21号掘立柱建物跡（２）・・・・・・201
図52　第12・27号掘立柱建物跡・・・・・・・・・・202
図53　第13号掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・203
図54　第14号掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・204
図55　第16・20・22号掘立柱建物跡（１）・・・205
図56　第16・20・22号掘立柱建物跡（２）・
　　第28号掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・206
図57　ピット（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・207
図58　ピット（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・208
図59　ピット（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・209
図60　ピット（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・210
図61　焼土遺構（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・211
図62　焼土遺構（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・212
図63　焼土遺構（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・213
図64　土坑（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・214
図65　土坑（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・215
図66　土坑（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・216
図67　土坑（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・217
図68　土坑（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・218
図69　土坑（６）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・219

図70　土坑（７）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・220
図71　土坑（８）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・221
図72　土坑（９）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・222
図73　土坑(10)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・223
図74　土坑(11)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・224
図75　土坑(12)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・225
図76　土坑(13)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・226
図77　土坑(14)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・227
図78　土坑(15)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・228
図79　土坑(16)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・229
図80　土坑(17)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・230
図81　土坑(18)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・231
図82　土坑(19)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・232
図83　土坑(20)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・233
図84　土坑(21)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・234
図85　土坑(22)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・235
図86　土坑(23)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・236
図87　土坑(24)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・237
図88　土器埋設遺構（１）・・・・・・・・・・・・・・・238
図89　土器埋設遺構（２）・・・・・・・・・・・・・・・239
図90　溝状土坑・溝跡・・・・・・・・・・・・・・・・・240
図91　環状列石出土土器・・・・・・・・・・・・・・・241
図92　配石遺構出土土器（１）・・・・・・・・・・・242
図93　配石遺構出土土器（２）・・・・・・・・・・・243
図94　配石遺構出土土器（３）・・・・・・・・・・・244
図95　配石遺構出土土器（４）・・・・・・・・・・・245
図96　配石遺構出土土器（５）・・・・・・・・・・・246
図97　竪穴建物跡出土土器（１）・・・・・・・・・247
図98　竪穴建物跡出土土器（２）・・・・・・・・・248
図99　竪穴建物跡出土土器（３）・・・・・・・・・249
図100　竪穴建物跡出土土器（４）・・・・・・・・250
図101　竪穴建物跡出土土器（５）・・・・・・・・251
図102　竪穴建物跡出土土器（６）・・・・・・・・252
図103　竪穴建物跡出土土器（７）・・・・・・・・253
図104　竪穴建物跡出土土器（８）・・・・・・・・254
図105　掘立柱建物跡出土土器（１）・・・・・・255
図106　掘立柱建物跡出土土器（２）・・・・・・256
図107　掘立柱建物跡出土土器（３）・・・・・・257
図108　掘立柱建物跡出土土器（４）・・・・・・258
図109　掘立柱建物跡出土土器（５）・ピット出土
　　土器（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・259
図110　ピット出土土器（２）・・・・・・・・・・・・260
図111　ピット出土土器（３）・・・・・・・・・・・・261
図112　ピット出土土器（４）・・・・・・・・・・・・262
図113　ピット出土土器（５）・・・・・・・・・・・・263
図114　ピット出土土器（６）・・・・・・・・・・・・264
図115　ピット出土土器（７）・・・・・・・・・・・・265
図116　焼土遺構出土土器・・・・・・・・・・・・・・266
図117　土坑出土土器（１）・・・・・・・・・・・・・267
図118　土坑出土土器（２）・・・・・・・・・・・・・268
図119　土坑出土土器（３）・・・・・・・・・・・・・269
図120　土坑出土土器（４）・・・・・・・・・・・・・270
図121　土坑出土土器（５）・・・・・・・・・・・・・271
図122　土坑出土土器（６）・・・・・・・・・・・・・272
図123　土坑出土土器（７）・・・・・・・・・・・・・273
図124　土坑出土土器（８）・・・・・・・・・・・・・274
図125　土坑出土土器（９）・・・・・・・・・・・・・275
図126　土坑出土土器(10)・・・・・・・・・・・・・276
図127　土坑出土土器(11)・・・・・・・・・・・・・277
図128　土坑出土土器(12)・・・・・・・・・・・・・278
図129　土坑出土土器(13)・・・・・・・・・・・・・279
図130　土坑出土土器(14)・・・・・・・・・・・・・280
図131　土坑出土土器(15)・・・・・・・・・・・・・281
図132　土坑出土土器(16)・・・・・・・・・・・・・282
図133　土坑出土土器(17)・・・・・・・・・・・・・283
図134　土坑出土土器(18)・・・・・・・・・・・・・284
図135　土坑出土土器(19)・・・・・・・・・・・・・285
図136　土坑出土土器(20)・・・・・・・・・・・・・286
図137　土坑出土土器(21)・・・・・・・・・・・・・287
図138　土坑出土土器(22)・・・・・・・・・・・・・288
図139　土坑出土土器(23)・・・・・・・・・・・・・289
図140　土坑出土土器(24)・・・・・・・・・・・・・290
図141　土坑出土土器(25)・・・・・・・・・・・・・291
図142　土坑出土土器(26)・・・・・・・・・・・・・292

図143　土坑出土土器(27)・・・・・・・・・・・・・293
図144　土坑出土土器(28)・・・・・・・・・・・・・294
図145　土坑出土土器(29)・・・・・・・・・・・・・295
図146　土坑出土土器(30)・・・・・・・・・・・・・296
図147　土坑出土土器(31)・・・・・・・・・・・・・297
図148　土坑出土土器(32)・・・・・・・・・・・・・298
図149　土坑出土土器(33)・・・・・・・・・・・・・299
図150　土坑出土土器(34)・・・・・・・・・・・・・300
図151　土坑出土土器(35)・・・・・・・・・・・・・301
図152　土坑出土土器(36)・・・・・・・・・・・・・302
図153　土坑出土土器(37)・・・・・・・・・・・・・303
図154　土坑出土土器(38)・・・・・・・・・・・・・304
図155　土坑出土土器(39)・・・・・・・・・・・・・305
図156　土坑出土土器(40)・・・・・・・・・・・・・306
図157　土坑出土土器(41)・・・・・・・・・・・・・307
図158　土坑出土土器(42)・・・・・・・・・・・・・308
図159　土坑出土土器(43)・・・・・・・・・・・・・309
図160　土坑出土土器(44)・・・・・・・・・・・・・310
図161　土器埋設遺構出土土器（１）・・・・・・311
図162　土器埋設遺構出土土器（２）・・・・・・312
図163　土器埋設遺構出土土器（３）・・・・・・313
図164　土器埋設遺構出土土器（４）・・・・・・314
図165　土器埋設遺構出土土器（５）・・・・・・315
図166　土器埋設遺構出土土器(６)・溝状土坑・
　　溝跡出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・316
図167　環状列石出土石器（１）・・・・・・・・・・317
図168　環状列石出土石器（２）・・・・・・・・・・318
図169　環状列石出土石器（３）・・・・・・・・・・319
図170　環状列石出土石器（４）・・・・・・・・・・320
図171　環状列石出土石器（５）・配石遺構出土
　　石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・321
図172　竪穴建物跡出土石器（１）・・・・・・・・322
図173　竪穴建物跡出土石器（２）・・・・・・・・323
図174　竪穴建物跡出土石器（３）・・・・・・・・324
図175　竪穴建物跡出土石器（４）・掘立柱建物
　　跡出土石器（１）・・・・・・・・・・・・・・・・325
図176　掘立柱建物跡出土石器（２）・ピット出土
　　石器（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・326
図177　ピット出土石器（２）・焼土遺構出土石
　　器・土坑出土石器（１）・・・・・・・・・・・327
図178　土坑出土石器（２）・・・・・・・・・・・・・328
図179　土坑出土石器（３）・・・・・・・・・・・・・329
図180　土坑出土石器（４）・・・・・・・・・・・・・330
図181　土坑出土石器（５）・・・・・・・・・・・・・331
図182　土坑出土石器（６）・・・・・・・・・・・・・332
図183　土坑出土石器（７）・・・・・・・・・・・・・333
図184　土坑出土石器（８）・・・・・・・・・・・・・334
図185　土坑出土石器（９）・・・・・・・・・・・・・335
図186　土坑出土石器(10)・・・・・・・・・・・・・336
図187　土坑出土石器(11)・・・・・・・・・・・・・337
図188　土坑出土石器(12)・・・・・・・・・・・・・338
図189　土坑出土石器(13)・・・・・・・・・・・・・339
図190　土坑出土石器(14)・・・・・・・・・・・・・340
図191　土坑出土石器(15)・・・・・・・・・・・・・341
図192　土坑出土石器(16)・・・・・・・・・・・・・342
図193　土坑出土石器(17)・土器埋設遺構出土
　　石器・溝状土坑出土石器・・・・・・・・・343
図194　遺構内出土土製品（１）・・・・・・・・・・344
図195　遺構内出土土製品（２）・・・・・・・・・・345
図196　遺構内出土土製品（３）・・・・・・・・・・346
図197　遺構内出土土器片利用土製品（１）・347
図198　遺構内出土土器片利用土製品（２）・348
図199　遺構内出土土器片利用土製品（３）・349
図200　遺構内出土土器片利用土製品（４）・350
図201　遺構内出土土器片利用土製品（５）・351
図202　遺構内出土土器片錘・足形付土版・
　　貝製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・352
図203　遺構内出土石製品（１）・・・・・・・・・・353
図204　遺構内出土石製品（２）・・・・・・・・・・354
図205　遺構内出土石製品（３）・・・・・・・・・・355

表目次

表１　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９
表２　SQ3 重複関係表・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
表３　SQ4 重複関係表・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

巻頭写真図版目次

巻頭写真１　上段　酪農(３)遺跡　調査区遠景
　　下段　酪農(３)遺跡　調査区遠景
巻頭写真２　酪農(３)遺跡　調査区近景
巻頭写真３　上段　環状列石
　　下段　環状列石
巻頭写真４　上段　第３号配石遺構　検出状況
　　下段　第３号配石遺構　精査状況
巻頭写真５　上段　第４号配石遺構　検出状況
　　下段　第100号土坑　配石出土状況
巻頭写真６　上段　第１号捨て場　遺物出土状況
　　下段　第１号捨て場　土層断面
巻頭写真７　上段　土器集合(後期初頭中心)
　　下段　土器集合(後期初頭新段階
　　(小牧野３期)中心)
巻頭写真８　上段　土器集合(後期前葉
　　(十腰内Ⅰ式)中心)
　　下段　土偶集合
巻頭写真９　第１号捨て場出土土偶(図310-1)
巻頭写真10　上段　磨製石斧集合
　　下段　砥石集合
巻頭写真11　上段　磨石Ⅳ類集合
　　下段　球状礫集合
巻頭写真12　上段　第７号土器埋設遺構
　　土器棺(図163-5)出土状況
　　下段　第７号土器埋設遺構
　　埋納人骨

第１章　調査概要

第１節　調査に至る経過

国道279 号むつ南バイパス道路改築事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱については、青森県教育庁文化財保護課（以下、文化財保護課）と青森県県土整備部道路課及び下北地域県民局地域整備部（以下、事業者）が平成20 年度から継続的に協議及び現地確認を行っており、状況が整い次第、文化財保護課が試掘・確認調査を実施してきた。これまでには、一里小屋遺跡、酪農（１）遺跡、斗南丘（５）遺跡、内田（１）遺跡、内田（２）遺跡、酪農（３）遺跡及びその隣接地等で試掘・確認調査が実施され、遺跡の範囲変更や新規登録が行われている（青森県埋蔵文化財調査報告書第510・536・549・560・573・615 集）。

酪農（３）遺跡は、令和元年度に行われた文化財保護課による試掘調査の結果、縄文時代の遺構と遺物が確認され、遺跡の範囲変更が行われた。また、試掘調査結果を受け、同年度に文化財保護課と事業者が協議を行い、令和２年度に青森県埋蔵文化財調査センター（以下、埋文センター）が発掘調査を行うこととなった。

令和２年度に開始された発掘調査では、当初の予測を上回る量の遺構や遺物が確認され、さらに県内でも稀少な環状列石が存在することが明らかとなった。このため、文化財保護課と事業者、埋文センターの三者で協議を行い、令和２年度は調査期間を延長して対応し、さらに令和３年度にも発掘調査を実施することとなった。

文化財保護法第 94 条第１項による土木工事等のための発掘に関する通知は、下北地域県民局長から令和２年１月９日付け下県局整備第 1109 号で提出され、これを受けて工事着手前の発掘調査の実施が、青森県教育委員会教育長から令和２年１月 20 日付け青教文第 1245 号で通知されている。

なお、本事業ではこれまでに、本遺跡の他、斗南丘（５）遺跡、酪農（１）遺跡、内田（１）遺跡、内田（２）遺跡の発掘調査が行われ、『斗南丘（５）遺跡』、『酪農（１）遺跡』、『内田（１）遺跡』、『内田（２）遺跡』、『内田（２）遺跡Ⅱ』（青森県埋蔵文化財調査報告書第 555・568・592・602・619集）の５冊の報告書が刊行されている。

第２節　調査の方法

１　発掘作業の方法

環状列石を有する集落跡であることから、遺構調査に重点を置き、集落の時期・構造・変遷過程等を把握できるよう発掘調査を進めた。

［測量基準点・水準点・グリッド設定］遺構測量に用いた測量基準点及び水準原点の設置は委託により、調査区内に４級基準点を９点打設した。調査区内における主要基準点の位置及び公共座標値は遺構配置図に示した。グリッドは国土座標（世界測地系）を基準として４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。原点Ⅰ A- ０は平面直角座標第Ⅹ系のⅩ＝142, 400 Ｙ＝33, 300とした。各グリッドは南から北方向にローマ数字（Ⅰ～Ⅲ）とアルファベット（Ａ～Ｙ）を、西から東方向に算用数字を１から付け、南西隅の組み合わせで呼称した。

[基本土層] 基本土層は上位からⅠ層、Ⅱ層とローマ数字を付けた。細分が必要な場合は小文字のアルファベットや枝番号等を付けた。
[表土等の調査] 主に表土であるⅠ層の除去には、重機を用いて掘削の省力化を図った。巨礫を複数検出したことから配石遺構等が検出される可能性が高く、使用時には慎重を期した。
[遺構名] 年度毎に遺構番号の付し方が異なったこと、遺構を調査した結果、検出時に付した遺構種別と異なる場合が多かった事があり、本報告では調査後の遺構内容を精査した上で、遺構名を種別毎の通し番号に振り直した（第２分冊　遺構名一覧表)。なお、遺物の注記は調査時のものを使用している。
[遺構の調査] 遺構の検出は主に基本土層のⅢ層上面で行ったが、調査地点により堆積状況が異なるため、慎重に作業を進めた。土層観察用ベルトは、遺構の形態や大きさ等に応じ、基本的に竪穴建物跡は４分割、土坑や柱穴は２分割となるよう設定した。遺構内の各堆積土層には算用数字を付け、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。捨て場では地形に合わせて任意にベルトを設定した（第２分冊　図 208)。遺構図は平面・断面共にトータルステーションによる測量で得た 3 次元座標データを基に、株式会社 CUBIC 製「遺構実測支援システム」を用いて作図した。また、環状列石の構成礫及び検出面での等高線作成は「３D スキャナー計測」を委託により行った。
[遺物の記録]出土状況が良好な遺物は出土位置の記録を行い､写真撮影等を行った上で取り上げたが､それ以外はグリッド単位で層位毎に取り上げた。
[写真撮影] 写真撮影は原則として35㎜モノクロームフィルム、35 ㎜カラーリバーサルフィルム、および約 2,620万画素のデジタルカメラ、1,605 万画素のコンパクトデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の検出・精査状況、完掘後の全景等を記録した。なお、調査区の遠景等は委託でドローンにより撮影した。

２　整理・報告書作成作業の方法

[図面類の整理] 遺構図は株式会社 CUBIC 製「遺構くん」､「トレースくん」を用い、平面図と堆積土層断面図の調整･計測を行った。３D スキャナー計測を行ったものに関しても DXF データを｢遺構くん」で読み込み調整等を行った。図面の測量点等については､エクセルファイル(.xlsx形式及び.csv形式)で HDD 及び長期保存用ブルーレイディスクに保存した。
[写真類の整理] 35㎜モノクロームフィルムと35㎜カラーリバーサルフィルムは撮影日順に整理してネガアルバムに収納した｡デジタル写真は撮影内容を示すファイル名に変更した上で遺構順に整理し、HDD 及び長期保存用ブルーレイディスクに保存した。
[遺物の洗浄・注記] 令和２年度出土遺物の洗浄・注記作業は埋文センターで、令和３年度出土遺物は委託で行った。注記は調査時の遺構名で行っており、調査年度、遺跡名、遺構名、出土層位、取り上げ番号を略記した。直接注記できないものは、収納した袋に記載した。
[報告書掲載遺物の選別] 遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構の構築・廃絶時期を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料､帰属時期･型式･器種などの分かる資料を主として選別した。
[遺物の観察・図化] 資料は表面を充分に観察した上で、各遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化し、観察表を作成した。
[遺物の写真撮影] 写真撮影は委託により行い、質感や製作技法等を表現するよう留意して撮影した。

遺物写真の切り抜きも委託により行った。

［自然科学分析］委託・依頼により実施した（詳細は例言・凡例参照）。

［遺物のトレース・版下作成］土器・石器等のトレース・図版の版下の作成は、アドビ株式会社製Illustrator、InDesignを用いた。

［遺物の収納］遺物は報告書掲載遺構名を基に収納した。このため、収納箱に記載している遺構名と注記は異なっているものが多い。なお、掲載外遺物に関しては、旧遺構名のまま収納した。

第３節　調査・整理体制とそれぞれの経過

１　発掘調査体制と調査経過

［令和２年度］

調査担当者　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	佐藤　禎人	（令和５年３月　定年退職）
次長（総務ＧＭ）	川村　和夫	（令和５年３月　定年退職、現東青教育事務所総務課主幹専門員）
調査第一ＧＭ	鈴木　和子	
調査第一ＳＭ	齋藤　正	（現調査第二SM）
文化財保護主幹	中村　哲也	（発掘調査担当者　現総括主幹調査第一SM）
文化財保護主幹	小田川哲彦	（発掘調査担当者）
文化財保護主幹	佐藤　智生	（発掘調査担当者）
文化財保護主事	藤田　祐	（発掘調査担当者　現文化財保護主査）
文化財保護主事	長谷川大旗	（発掘調査担当者）
文化財保護主事	折登　亮子	（発掘調査担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員	藤沼　邦彦	前弘前大学教授（考古学）	
〃	関根　達人	国立大学法人弘前大学人文社会科学部教授	（考古学）
〃	上條　信彦	国立大学法人弘前大学人文社会科学部准教授	（考古学）（現教授）
〃	藤澤　珠織	青森中央学院大学看護学部専任講師	（自然人類学）（現准教授）
〃	山口　義伸	元青森県立浪岡高等学校教諭	（地質学）
〃	島口　天	青森県立郷土館学芸課長	（地質学）
〃	児玉　大成	青森市教育委員会事務局文化財課チームリーダー（現文化遺産課主幹）	（考古学）

（調査の経過）

５月12日に調査器材を搬入して調査を開始した。平場では表土を除去して間もなく弧状に配置された礫や配石遺構、複数の遺構プランを検出した。また、斜面地には遺物捨て場が形成され、遺物の含有量も多いことが明らかとなった。このため当初予定の8月28日で調査終了することは不可能

であると判断し、今後の調査の進め方について事業者、文化財保護課、当センターで協議を行った。結果、調査は令和２・３年度の２か年で行うこととなり、令和２年度は環状列石と思われる範囲と捨て場以外を終了させることとし、期間は10月30日まで延長することなった。また、令和２年度中に事業者に引き渡す範囲が明示されたため、調査はそこから優先的に進めていくこととし、職員及び発掘作業員を増員する事も決まった。

引き渡し範囲の調査と並行して、平場エリアの検出作業を行い約 50 個近い礫を検出した。礫は断続的に分布するものの全体として円環を意識した配置となっており、３基の直線上に伸びる張出部、２基の土器埋設遺構などが伴っていると考えられた。また、表土除去後の地形や土層の所見から地形改変が行われた可能性が考えられ、環状列石であることが明らかとなっていった。８月に上條調査員､児玉調査員の現地鑑定を受け今後の調査方針などを確認した。９月上旬には山口調査員、島口調査員による現地鑑定を行い、環状列石構成礫の石質鑑定を行った。９月中旬には令和２年度引き渡し範囲の調査が終了したことから、３者（事業者、文化財保護課、埋文センター）立ち会いの下で引き渡しを行った。これ以降、調査は次年度へ繰り越しとなった範囲の一部を先行して行うこととした。９月下旬には関根調査員、上條調査員、児玉調査員の現地鑑定を受け、環状列石などの調査成果を説明し、今後の調査方針について指導を受けた。

10 月上旬、土器埋設遺構内に人骨を検出し、10 月中旬には少なくとも長管骨のほか頭蓋骨が遺存する再葬土器棺墓であることが判明した。残りの調査期間で全ての記録作業を行うことが困難と判断したため、土器棺部分を発泡ウレタンで保護した後に、下位の土壌ごと切り取り、センターへ持ち帰って棺内の記録作業を行うこととした。切り取り作業は業者に委託した。10 月中旬には報道発表を行い、調査成果を公開した。下旬には次年度調査範囲をブルーシートなどで覆うなどの養生を行った。10 月 30 日には調査機材等を撤収し令和２年度の調査を終了した。

［令和３年度］

調査担当者　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	葛西　浩一	（令和４年３月　定年退職）
総務ＧＭ	油布　恵美	（現青森県立図書館奉仕課長）
調査第一ＧＭ	鈴木　和子	
調査第一ＳＭ	齋藤　正	（現調査第二 SM）
文化財保護主幹	野村　信生	（発掘調査担当者　現総括主幹調査第二 SM）
文化財保護主幹	平山　明寿	（発掘調査担当者）
文化財保護主幹	小山　浩平	（発掘調査担当者）
文化財保護主事	長谷川大旗	（発掘調査担当者）
文化財保護主事	折登　亮子	（発掘調査担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員	関根　達人	国立大学法人弘前大学人文社会科学部教授	（考古学）
〃	上條　信彦	国立大学法人弘前大学人文社会科学部教授	（考古学）
〃	山口　義伸	元青森県立浪岡高等学校教諭	（地質学）

調査員　島口　天　　青森県立郷土館学芸課長　（地質学）
〃　　児玉　大成　　青森市教育委員会事務局文化財課チームリーダー（考古学）
（現文化遺産課主幹）

（調査の経過）

６月 15日に調査器材を搬入して調査を開始した。前年度に養生された崩落防止用の土嚢袋やブルーシートを撤去するのに１週間要した。環状列石の調査は構成礫、内側・外側の地形等を３次元データ化することから始め、３Ｄスキャナー計測を委託して行った。７月上旬には関根調査員、上條調査員、児玉調査員らによる現地鑑定を行い、今後の調査方針等の確認を行った。構成礫の産地推定については島口調査員に石質鑑定を依頼し様相を踏まえた上で、想定される産地周辺の現地調査を行った。捨て場は包含層を掘り進め、７月中旬にドローンにより全体の遺物出土状況を撮影した。撮影後、遺物を取り上げさらに掘り進めたが、遺物の出土量と土量が想定を超えることから、以降の各段階の全体写真は省略し、個別の写真で対応することとした。

８月に入ると環状列石及び配石遺構の調査が進み、礫を取り外し下位にある遺構の調査を行う必要が出てきたことから、現地見学会を開催し公開後に取り上げることとした。９月中旬、礫の取り上げも概ね終了し、列石周辺も遺構の最終検出面であるＶ層面まで掘り下げたことにより、検出作業がほぼ終了した。これ以降は、調査の終了する 11 月下旬まで遺構精査を継続し、11 月中旬には調査区の引き渡しについて事業者と文化財保護課を交えて３者協議を行い、これに基づいて埋め戻し作業を行った。11 月 26 日に調査機材を撤収し全ての調査が終了した。

２　整理体制・報告書作成作業の経過

［令和３年度］

整理主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長　　葛西　浩一（令和４年３月　定年退職）
総務ＧＭ　　油布　恵美（現青森県立図書館奉仕課長）
調査第一ＧＭ　　鈴木　和子
調査第一ＳＭ　　中村　哲也
文化財保護主幹　　野村　信生（現総括主幹調査第二 SM）
文化財保護主幹　　小田川哲彦
文化財保護主幹　　秦　光次郎

専門的事項に関する指導・助言

調査員　島口　天　　青森県立郷土館学芸課長　（地質学）
〃　　藤澤　珠織　　青森中央学院大学看護学部准教授　（自然人類学）

（整理の経過）

土器・石器・製品類は仕分けと数量計測を行った後、整理作業を開始した。土器は遺構、グリッド毎の単位で接合を始め、その後、遺構間・グリッド間・遺構＋グリッド間と範囲を広げた。接合

後は順次復元・実測作業へと移行した。７月には組み上がった土器の中から一部先行して実測委託を行った。石器は器種毎に分類し、８月には剥片石器の一部を実測委託した。また、砥石、台石・石皿類などの接合を行った。土壌サンプル内の微細遺物抽出作業は４月上旬に委託して行った。10月はリン・カルシウム分析、黒曜石産地同定、動物遺体同定など自然科学分析を委託したほか、2回目の土器実測委託を行った。遺構図は平面図と断面図の調整を行ったほか、重複関係などの確認、計測などを行った。各種遺物は実測作業を進め、一部についてはデジタルトレースを行った。調査員に依頼し、石器類の石質鑑定を行った。遺構写真類はデジタルデータの現像などを行い、報告書掲載写真の選別等を行った。遺物写真の撮影は委託した。

［令和４年度］

整理主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	和田　和夫	（現青森県総合学校教育センター所長）
総務ＧＭ	油布　恵美	（現青森県立図書館奉仕課長）
調査第一ＧＭ	鈴木　和子	
調査第二ＳＭ	野村　信生	
文化財保護主幹	秦　光次郎	
文化財保護主幹	佐々木雅裕	
文化財保護主幹	小山　浩平	
文化財保護主事	長谷川大旗	
文化財保護主事	折登　亮子	

専門的事項に関する指導・助言

調査員	関根　達人	国立大学法人弘前大学人文社会科学部教授	（考古学）
〃	上條　信彦	国立大学法人弘前大学人文社会科学部教授	（考古学）
〃	佐々木　実	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師	（地質学）
〃	島口　天	青森県立郷土館学芸課長	（地質学）
〃	児玉　大成	青森市教育委員会事務局文化遺産課主幹	（考古学）

（整理の経過）

４月はモザイク写真合成、石製品の石材同定、動物遺体の同定、リン・カルシウム分析、微細遺物抽出作業のほか、環状列石構成礫の重量計測・洗浄を委託で行った。重量計測は巨礫をトラッククレーン、洗浄は高圧洗浄機を用いて行った（写真 26）。令和３年度調査分の土器接合を開始した。遺構、グリッド毎の単位で接合を始め、最終的には令和２年度の出土土器とも接合を行った。接合後は順次復元・実測作業へと移行した。実測委託は６月、９月に行った。石器は器種毎に分類し、９月には剥片石器の一部と土・石製品類の実測委託を行った。

10 月には遺構線種等の統一や図面の調整を行い、遺構名の振り替えも行った。遺構写真は掲載用の写真を選別し、デジタル現像を行った。遺物は実測図の確認と併せて観察表の作成を行った。島口調査員、佐々木調査員に依頼し、石器類の石質鑑定を行った。掲載遺物の写真撮影・写真切り抜き作業は業者に委託して行った。11 月には土器・土製品、12 月には礫石器の実測委託を行った。

２月には遺物の収納作業を行った。３月には遺構図、遺物図、写真図版の版組を行った。

［令和５年度］

整理主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	渡部　泰雄
次　長	稲葉　克徳
総務ＧＭ	佐藤　真理
調査第一ＧＭ	鈴木　和子
調査第二ＳＭ	野村　信生
文化財保護主幹	秦　光次郎
文化財保護主幹	小山　浩平
文化財保護主事	長谷川大旗
文化財保護主事	折登　亮子

（整理の経過）

４～９月は原稿・版下が揃い次第、報告書の割付・編集作業を行った。10月には印刷業者を入札・選定し、契約事務を完了した。その後印刷業者へ原稿及び版下を入稿し、校正及び出土遺物・記録類の整理を行った。１月からは記録類、遺物の収納作業を開始した。３月15日、校正を経て、報告書を刊行した。（小山）

第２章　遺跡の概要

第１節　歴史的環境

下北半島に位置するむつ市には、青森県で確認された4,846箇所の遺跡のうち、185箇所が所在する(令和５年12月現在)。市内には縄文時代前期後葉の円筒下層ｃ式の良好な資料が出土した女館貝塚、縄文時代中期後葉の標式遺跡である最花遺跡、縄文時代晩期の遺跡である二枚橋(２)遺跡、弥生時代中期前葉の標式遺跡である二枚橋(１)遺跡など学史上著名な遺跡も多い。平成24年には二枚橋(２)遺跡出土品のうち、1,308点が重要文化財に指定されている。

下北半島はその形から「まさかり」に例えられ、「まさかり」の基部に当たる部分に田名部低地が位置している。田名部低地に面する段丘上には、本遺跡を含め多くの遺跡が分布しており、縄文時代前期・後期、平安時代の遺跡が多い(図２)。本遺跡は標高25m前後の段丘上に立地する縄文時代早期から後期の遺跡である。主体となる後期初頭から前葉には集落が営まれており、後期前葉には環状列石が構築されている。本遺跡が位置する東側の段丘上では、主に縄文時代中期後葉から後期前葉の遺跡が確認されている。この地域では、むつ市教育委員会や国道279号むつ南バイパス道路改築事業に伴い平成25年から青森県埋蔵文化財調査センターが断続的に発掘調査を行っており、遺跡の内容が明らかになってきている。以下に発掘調査が行われた遺跡について記載する。

最花遺跡は本遺跡の北東約1.5㎞に位置している。平成26年に北側の最花貝塚と南側の最花南遺跡が統合され、最花遺跡として登録されている。縄文時代中期後葉の土器型式である最花式の標式遺跡であり、最花貝塚とされていた北側からは、骨角器、ヤマトシジミを主体とする貝類、魚類・鳥類・哺乳類の骨が出土している(むつ市教育委員会1978)。最花南遺跡とされていた南側からは、縄文時代早期中葉・中期末葉の土器や平安時代の竪穴住居跡が１軒検出されている(むつ市教育委員会1984・1985)。

上道遺跡は本遺跡の北約１㎞に位置している。土砂採掘により詳細は不明であるが、縄文時代前期末葉・後期初頭から前葉の土器や小竪穴状遺構(土坑・柱穴など)が検出されている(むつ市教育委員会1981、成田2011)。また、土砂採掘は隣接地にも及び、土砂採掘時に土器・石器などの遺物が採集されている。採集された遺物の一部は報告されており、出土地を「品ノ木」とした縄文時代後期前葉の土器・土製品が大量に報告されている(中村2018・2019・2020)。

斗南丘(５)遺跡は本遺跡の北約500mに位置している。縄文時代中期末葉から後期初頭の集落跡で、竪穴住居跡２軒・土坑６基(フラスコ状など)・焼土遺構２基などが検出されている(青森県教育委員会2015)。

酪農(１)遺跡は本遺跡の北約750mに位置している。縄文時代中期後葉から後期前葉の集落跡で、緩斜面に27棟の竪穴建物跡が楕円形に配置しており、その内側からは柱穴や土坑が検出されている。このほかに、平安時代の製炭土坑が検出されている(青森県教育委員会2016)。

内田(１)遺跡は沢を挟み本遺跡の南に隣接している。縄文時代後期と平安時代の集落跡で、縄文時代後期では竪穴建物跡３棟・掘立柱建物跡24棟・柱穴366基・土坑134基(フラスコ形主体)・埋設土器３基・捨場遺構５箇所などが検出されており、平面形状が方形と六角形の掘立柱建物跡や柱穴群が２箇所で弧状に配置されていた。遺物は土器・石器・土製品・石製品が大量に出土しており、ベンガラ

の容器と考えられる鳥形土器、舟形土製品、多数の土偶・土器片利用土製品が出土している。このほかに、貝刃と考えられるバカガイ・ハマグリ製の貝製品、アサリを主体とした貝類、魚類・鳥類・哺乳類の骨が出土している(青森県教育委員会2018)。

内田(２)遺跡は本遺跡の南約３㎞に位置している。縄文時代の狩猟場であり、本地域で初見となる後期旧石器時代のナイフ形石器が出土している。このほかに、縄文時代後期前葉の土器・石器や土坑３基・焼土遺構３基が検出されている(青森県教育委員会2019)。

令和４年には農場施設建設に伴いむつ市教育委員会により、本遺跡北側の試掘調査が行われている。調査の結果、縄文土器の小片が１点出土したのみで遺構は検出されなかったが、調査対象区域外の南西側緩斜面地で、縄文土器や石鏃などの散布が確認されている(むつ市教育委員会2023)。

なお、この地域における環状列石・配石遺構については、中島全二がかつて酪農二号から五号が存在し、酪農五号のみが残存することを報告している(中島1960)。その後、土地造成に伴い昭和45年にむつ市教育委員会により、酪農５号として発掘調査が行われている。酪農５号の詳細な位置は不明で、現在の酪農(５)遺跡の南側かその付近に位置したと考えられる。調査の結果、30点ほどの川原石で構築されたＡ群配石遺構と11点の扁平な川原石で構築されたＢ群配石遺構が検出され、縄文時代後期の土器片が１点出土している(橘1971)。配石遺構について視野を下北半島全域に広げれば、六ヶ所村大石平(１)・(２)遺跡から列状に配置する配石遺構(青森県教育委員会1985・1986・1987)、同村上尾駮(２)遺跡から中央広場の周囲に配置する配石遺構群(青森県教育委員会1988)、東通村札地遺跡から列状の配石遺構(清水1958・江坂1959)が検出されている。

本遺跡周辺の段丘上には、本遺跡の主体となる縄文時代後期の遺跡が多く分布しており、遺跡間に何らかの関係があったことが考慮される。上道遺跡は遺物の内容や出土量から、大規模な遺跡であったことが推測される。内田(１)遺跡は本遺跡に隣接し、環状を呈する集落構造や出土遺物の様相から、本遺跡と深い関わりがあったことが考えられる。環状列石は本遺跡以外では、酪農(５)遺跡の南側かその付近に存在した可能性も考えられるが、周辺の遺跡ではほかに確認されていない。このことは環状列石が特殊な遺構であり、遺跡間の関係性を考える上で重要であることを示している。

(野村)

表１　周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名	所在地	時　代	種　別
208007	内並木(1)遺跡	大字田名部字赤川ノ内並木	縄文(前･後)	散布地
208008	内並木(2)遺跡	大字田名部字赤川ノ内並木	縄文(後)	散布地
208009	内並木(3)遺跡	大字田名部字赤川ノ内並木	縄文(早･前･後)	散布地
208010	内並木(4)遺跡	大字田名部字赤川ノ内並木	弥生(後)	散布地
208030	土手内遺跡	大字田名部字上道	縄文(前･後)、平安	集落跡
208043	斗南丘(1)遺跡	大字田名部字斗南岡	縄文(後)、平安	散布地
208044	斗南丘(2)遺跡	大字田名部字斗南岡	縄文(後)	散布地
208045	斗南丘(3)遺跡	大字田名部字斗南岡	縄文(中)、平安	散布地
208046	斗南丘(4)遺跡	大字田名部字斗南岡	平安	散布地
208047	酪農(1)遺跡	大字田名部字斗南岡	縄文(後)、平安	集落跡
208048	酪農(3)遺跡	大字田名部字斗南岡、字内田	縄文(後)	集落跡、環状列石
208049	酪農(5)遺跡	大字田名部字内田	縄文(前･後)	散布地
208050	酪農(10)遺跡	大字田名部字内田	縄文(後)	散布地
208051	酪農(20)遺跡	大字田名部字内田	縄文	散布地
208052	最花遺跡	大字田名部	縄文(早･前･中･後)、平安	集落跡、貝塚
208065	品の木遺跡	大字田名部字斗南岡	縄文(前)、平安	散布地
208075	上道遺跡	大字田名部字上道	縄文(後)	集落跡
208182	斗南丘(5)遺跡	大字田名部字斗南岡	縄文(後)	集落跡
208183	内田(1)遺跡	大字田名部字内田	縄文(後)、平安	集落跡
208185	内田(2)遺跡	大字田名部字内田	縄文(後)	集落跡

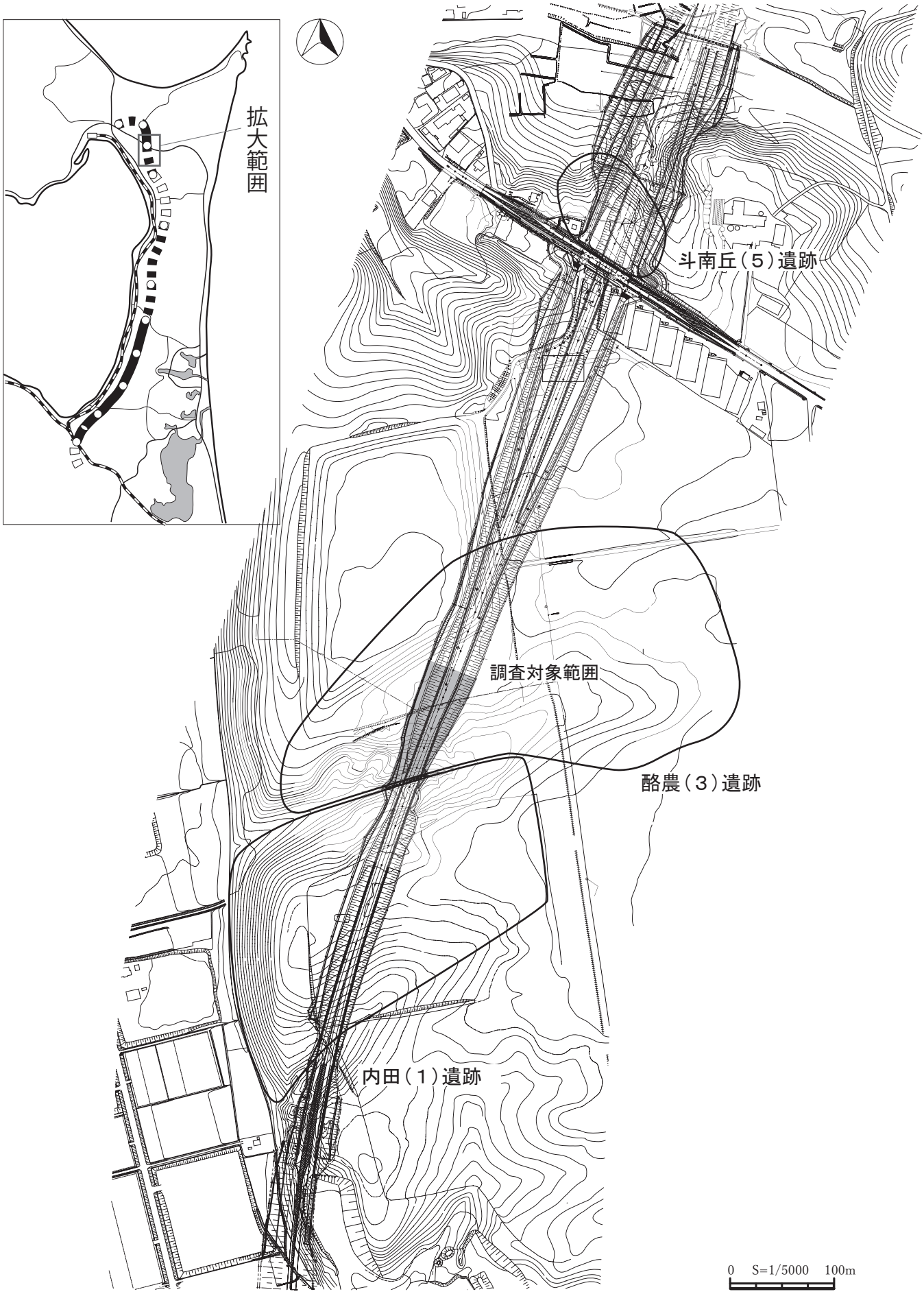


図１　路線図

図２　遺跡位置図

第２節　周辺の地形と地質について

島口　天（青森県立郷土館）

１　遺跡周辺の地形・地質

酪農（３）遺跡が所在する下北地域の地形・地質について、小池ほか（2005）を引用して述べる。

下北半島は津軽海峡と陸奥湾にはさまれ、北北東方向の上底（約25km）と下底（約45km）をもつ台形状をなし、東は田名部平野に、西は津軽海峡に面している。半島全体は恐山山地と総称される山頂標高700mほどの緩やかな形状をもつ山地であり、標高400 - 500mほどに低高性のある侵食小起伏面が認められる。東半部には800mほどの恐山火山とその北にむつ燧岳が位置し、火山フロントの一部をなしている。半島西部の山地は、先新第三系を核としてそれをおおう中・上部中新統と鮮新統から主に構成されている。

下北丘陵は、頂部の標高が500mほどで、南北幅約50km、東西幅12kmほどの細くのびた東北日本外弧の地形単元である。丘陵北半部は、石灰岩などを主とするジュラ紀の付加体である尻屋層群（対馬・滝尻，1977）などからなる桑畑山（400m）を中心とした丘陵である。南半部は尻屋層群をおおう中・上部中新統である猿ヶ森層（堆積岩類と安山岩類）と、さらにそれをおおう西側の鮮新統の砂子又層（堆積岩類）から構成される。

下北丘陵と下北半島の間にある盆状の凹地にはさらに第四系が厚く堆積しており、田名部平野と呼ばれている。これらの地層を基盤として、東岸にも西岸にも第四紀後期の海成段丘群が連続的に分布するとともに、もともと堆積域であった田名部平野ですら陸化に転じて、海成段丘・河成段丘群からなる台地の面積が広い。

２　遺跡内の地形・地質

小池・町田編（2001）のむつ図幅によると田名部平野周辺には、海成面がmT_{5c}、mT_{5e}、mT_{7}、mT_{9}、mT_{11}、mT_{15}、mT_{17}の７面、河成面についてはfT_{5c}、fT_{5e}、fT_{9}の３面が識別できる。mT_{5c}とmT_{5e}は大湊よりも東の海岸によく分布するが、大湊よりも西では発達が悪く、幅はそれぞれ最大でも250m程しかない。大湊よりも西側では、mT_{5e}よりも高位に比較的定高性のある地形面がいくつか認識できるが、これらはすべて恐山起源の火砕流と泥流の堆積面であって、海成面ではない。

旧汀線高度は、mT_{5c}が10-15m、mT_{5e}が約20-30m、mT_{7}が約40m、mT_{9}が約65m、mT_{11}が約110m、mT_{15}が約250m、mT_{17}が300m以上である。これらの段丘のうち、Toyaを風成で載せ、厚い段丘構成層を持ちかつ分布の幅広いmT_{5e}を酸素同位体ステージ5eに対比している。しかし他の段丘については、段丘の順序を酸素同位体ステージの奇数番に当てはめただけであるので対比の精度は低い。

酪農（３）遺跡は、むつ市から太平洋側に向かう国道338号の南側、標高25m前後の段丘面上に位置する。この標高は海成面mT_{5c}とmT_{5e}の中間付近であるが、むつ図幅内で酪農（３）遺跡が位置する場所にはmT_{5e}が分布している。図３に遺跡周辺の段丘分布を示した。

酪農（３）遺跡が立地する段丘面の南側は、南方に連続する段丘面に刻まれた小谷に向かって下

る緩斜面となっている。段丘面上では上から下へ、表層となる黒～黒褐色土（Ⅰ～Ⅲ層）、表層からローム質土への漸移層（Ⅳ層）、ローム質土（Ⅴ層）、段丘を構成する砂質土（Ⅵ・Ⅶ層）が順にみられる（写真１）。一方、緩斜面ではⅤ層下底を境に地滑りを起こし、斜面下部にⅢ～Ⅴ層が混在して斑模様にみえる地滑り堆積物が堆積している（写真２）。このため、斜面上部ではⅣ・Ⅴ層を欠き、砂質土を表層が直接覆う。

Ⅵ層上面まで掘り下げた地形面の等高線からは、緩斜面の中間付近で斜度が非常に小さくなり、その下方では緩急が繰り返される地形となっていることがわかる。これは段丘面に小谷が刻まれる時期に形成された地形と考えられ、このような地形を覆ったⅢ～Ⅴ層は斜度が比較的大きな斜面上部で地滑りを起こし、斜面中間付近から下部に堆積したと考えられる。

３　環状列石や石器・石製品等の石材

①環状列石

環状列石に使用されていた巨礫には人による加工痕は確認できず、表面が摩耗して角に丸みがある亜角～亜円礫で、自然のままの状態で遺跡に持ち込まれたと考えられる（写真３）。肉眼鑑定による石質が安山岩またはデイサイトであったことと文献調査から供給源は恐山である可能性が考えられ、釜臥山や障子山から流れ出ている南麓の戸沢川と永下川の支流・熊沢で実地調査を行った。しかし、両河川とも川原に同質の巨礫はなく、河岸の堆積物中に若干確認することができた（写真４）。

この後、巨礫11点について岩石薄片の岩石主要成分および微量元素の蛍光X線分析法による分析が行われ、恐山火山釜臥山溶岩９点（安山岩）、恐山火山障子山溶岩１点（デイサイト）、泊火山岩類１点（安山岩）の３つのタイプに分類された。この結果により、巨礫の供給源の多くは恐山である可能性が高いことが判明したが、実地調査の結果からは、縄文人が恐山の麓まで巨礫を採取しに行ったとは考えにくい。

岩井・奈良（1971）の項目「火山泥流」には、屏風山、荒川岳、釜臥山、障子山などの東方および南方斜面には、安山岩のブロックおよび大礫が大量に混じったローム質の粘土が分布し、屏風山から釜臥山にかけての東斜面の火山泥流はかなり厚いと記載されている。この火山泥流中から安山岩ブロックや大礫を掘り出した可能性もあるが、大雨などによって火山泥流を侵食するように土石流が発生し、山麓から田名部平野までブロックや大礫が運ばれ、それが地表に露出したものを採集したことも考えられる。

１点だけ泊火山岩類の安山岩に分類されているが、泊火山岩類の分布域（下北丘陵南部）からは田名部川と青平川が田名部平野に流れ込んでおり、やはり土石流によって田名部平野まで運ばれてきたものを採集したことが考えられる。

②石器・石製品等

石器・石製品の石質について肉眼鑑定を行った結果、一部に花崗閃緑斑岩が確認された。尻屋層群には尻屋崎の尻屋灯台が建つ真下に分布している石英閃緑ひん岩が含まれている（対馬・滝尻、1977）が、現在、ひん岩という名称は用いず斑岩に含めることもあり、この石英閃緑ひん岩を花崗閃緑斑岩とした。

尻屋層群には緑色岩も含まれており、ヴァリオライト様玄武岩・玄武岩質凝灰岩・普通輝石粗粒玄武岩・普通輝石黒雲母閃緑岩の４岩種が認められている。石製品の中には、粗粒玄武岩や閃緑岩としたものもいくつかあり、これに相当することが考えられる。

花崗閃緑斑岩と緑色岩は尻屋崎周辺の海岸で採集できるが、対馬・滝尻（1977）によると中位および低位段丘構成層中の段丘礫にはみられないようである。よって、段丘を河川が侵食しても洗い出された岩石にこれらは含まれず、田名部平野や周辺の段丘崖でこれらの岩石は採集できない可能性がある。このため、これらの石材は尻屋崎周辺まで採集に行っていたか、石材が尻屋崎周辺の住人から伝わってきた可能性が考えられる。

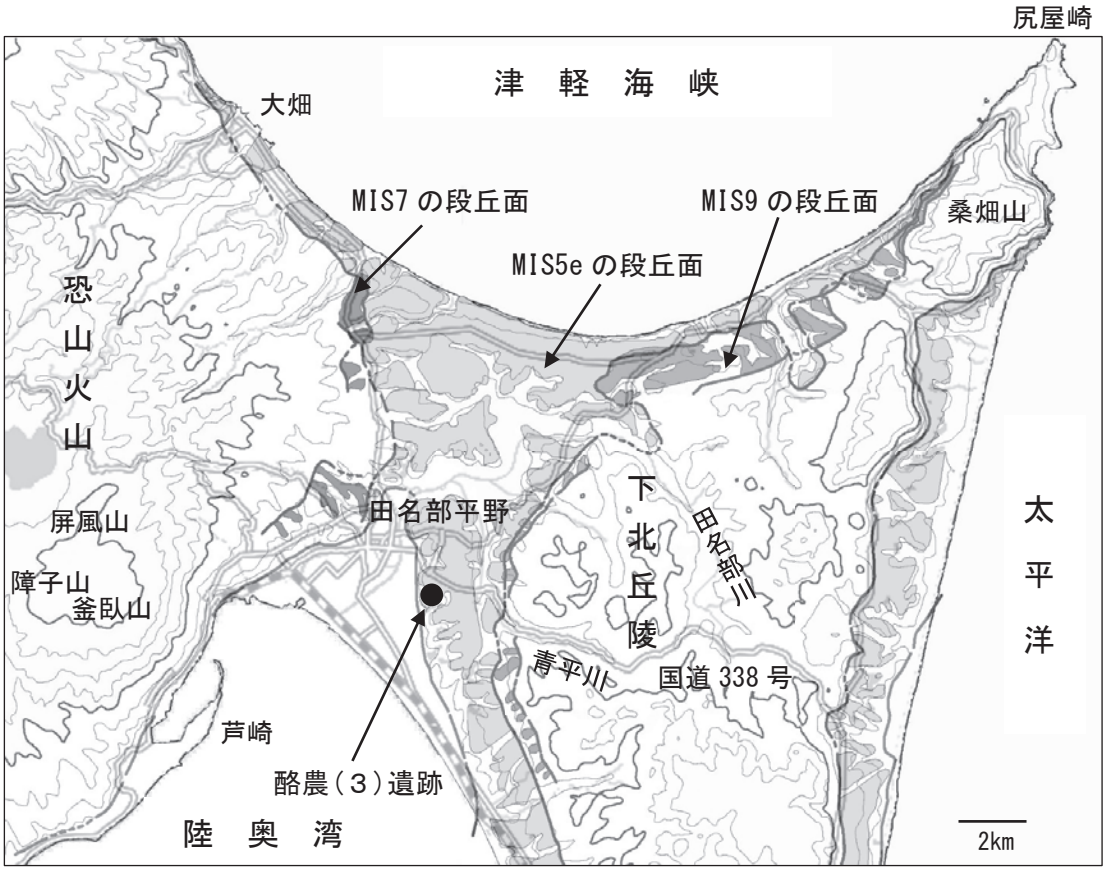
引用文献

岩井武彦・奈良正義（1971）５万分の１表層地質図「大湊」．土地分類基本調査「大湊」，青森県，p.23-35.

小池一之・町田　洋編（2001）日本の海成段丘アトラス　日本Ⅰ［北海道・東北］ CD-ROM．東京大学出版会.

小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦編著（2005）日本の地形３　東北．東京大学出版会，355p.

対馬坤六・滝尻文敦（1977）尻屋崎地域の地質．地域地質調査研究報告（５万分の１地質図幅），地質調査所，36p.



MIS9 の段丘面：酸素同位体ステージ９に形成された面
MIS7 の段丘面：同ステージ７に形成された面
MIS5e の段丘面：同ステージ５ｅに形成された面

図３　段丘分布図［小池・町田編（2001）を元に作成］

写真１　段丘面上の遺構内壁面に見られた地層Ⅳ～Ⅶ層

写真２　斜面下部に見られた地滑り堆積物（起伏があり斑模様）

写真３　風倒木に巻き込まれた巨礫

写真４　戸沢川の左岸側道路壁面に露出する安山岩巨礫

第３節　基本層序

遺跡内における基本層序は調査区の東壁、西壁、及び深さのある土坑壁面で確認した(図 4･6、写真 1･2)。基本土層は前節で述べられているようにⅠ～Ⅶ層を確認できた。斜面部ではⅢ層上位に遺物を大量に含んだ人為堆積層を検出した。土層は、層相の違いからａ～ｄや１～６などに細分した。各層の概要は以下の通りである。

Ⅰ層　　表土　縄文時代の遺物を含む。

Ⅱ層　　10YR2/1　黒色土

黒色土を基本としたシルト質土層で、白頭山－苫小牧火山灰と思われる火山灰粒を含む。本層下位には縄文時代の遺物が若干含まれる。

調査区全体に 20 ～ 30 ㎝の層厚で堆積している。

Ⅲ－１～６層　　10YR2/2 ～ 4/4　黒褐色土～褐色土層

Ⅴ層由来の褐色ロームを主体とした人為堆積層で、縄文時代後期初頭～前葉の遺物が大量に含まれている。また、本層上面では環状列石が検出されていることから、基本的には列石構築以前の堆積層と捉えることができる。しかし、列石よりも新しい段階の土器も出土していることから、列石後も遺物を含んだ土砂の廃棄行為があったと考えられる。

調査区東側や南側の斜面地に 20 ～ 60 ㎝の層厚で堆積している。

Ⅲ層　　10YR2/2　黒褐色土

黒～黒褐色土を基本として、砂粒が若干含まれる。また、縄文時代の遺物を含む地点もある。20 ～ 60 ㎝の層厚で調査区内に安定して堆積しているが、環状列石の内側部では欠層しⅤ層面が拡がっていることから、列石構築時に造成が行われた証左として捉えられる。

斜面部ではａ～ｄ層に細分される。また、斜面下位では本層にクラックが入り堆積が乱れる地点もあることから、地点によっては地滑りを起こした可能性もある。

Ⅳ層　　10YR4/4　褐色土

ローム質土。漸移層で、本層上位には遺物が含まれる地点もある。

Ⅴ層　　10YR4/6 ～ 5/6　褐色～黄褐色土

ローム質の地山。層厚 20 ～ 30 ㎝で堆積するが、斜面部では欠層している。地滑りによるものと考えられる。

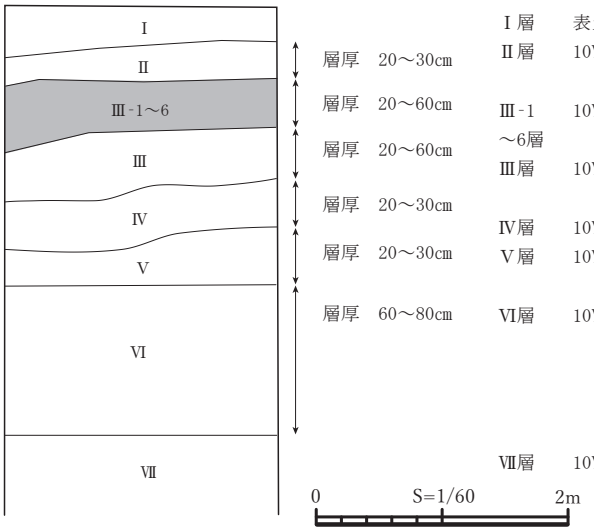
Ⅵ層　　10YR5/6 ～ 6/3　黄褐色土～にぶい黄橙色土

砂質土。層厚 60 ～ 80 ㎝で堆積する。所により径 10 ～ 20 ㎝大の砂質ブロックが密集する地点がある。

Ⅶ層　　10YR8/1　灰白色土

砂質土。堅くしまりがある。　　（小山）

遺跡内における土層柱状図



Ⅰ層	表土		
Ⅱ層	10YR2/1	黒色土	B-Tmと思われる火山灰粒含む。 本層下位には縄文時代の遺物が含まれる。
Ⅲ-1 ～6層	10YR2/2～ 4/4	黒褐色土～ 褐色土	縄文時代後期初頭～前葉の人為堆積層。 １～６層に細分される。
Ⅲ層	10YR2/2	黒褐色土	砂粒含む。縄文時代の遺物包含層。 斜面部ではａ～ｄ層に細分される。
Ⅳ層	10YR4/4	褐色土	ローム質土。漸移層。本層上位には遺物が含まれる。
Ⅴ層	10YR4/6～ 5/6	褐色～ 黄褐色土	ローム質の地山。斜面部では欠層する。
Ⅵ層	10YR5/6～ 6/3	黄褐色土 にぶい黄橙色土	砂質土。黄褐色砂と黄橙色砂がある。 所により径10～20㎝大の砂質ブロックが密集 する地点もあり。
Ⅶ層	10YR8/1	灰白色土	堅くしまった砂質土層。

地点別土層図（作図位置は図6参照）

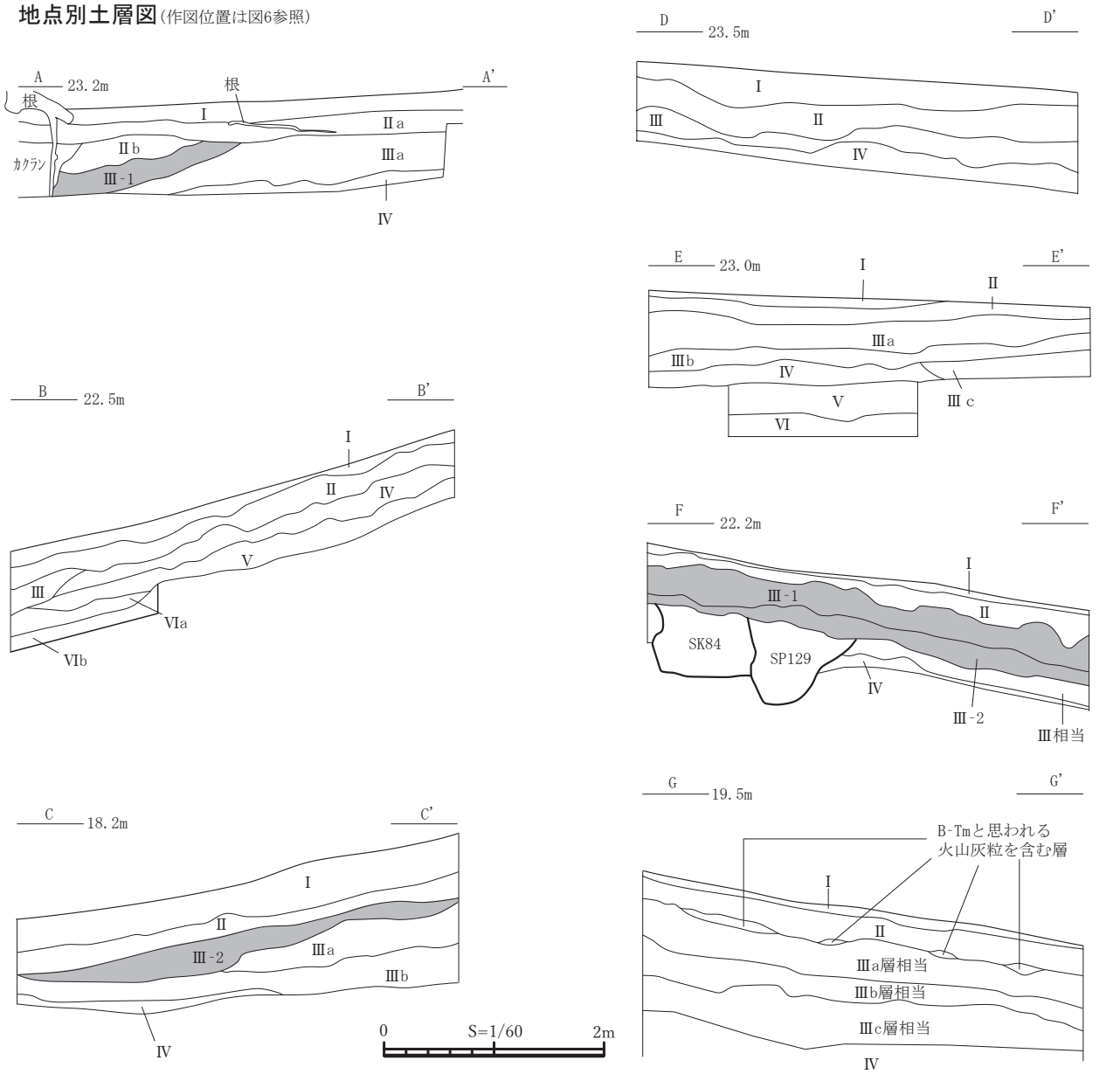


図４　基本土層

第４節　遺物の整理について

第１項　縄文土器

本遺跡からは、縄文時代早期中葉から後期前葉の土器が出土しており、後期初頭から前葉が主体となっている。以下に出土土器の整理について記載するが、器種の分類、部位の名称は主に後期初頭から前葉を対象としたものである。

１　編年的位置づけ

縄文時代早期中葉の土器は、破片のみで出土点数が少ないことから、貝殻・沈線文系土器として一括した。円筒下層ｄ式は細分し、ｄ1式は前期後葉、ｄ2式は前期末葉とした。円筒上層a式は破片のみで出土点数が少ないことから、細分を行わず中期前葉とした(青森県教育委員会2017)。

縄文時代後期初頭から前葉は、『青森県史』に準拠し以下のとおりとした（青森県2013)。後期初頭の土器は、県史で後期１期(後期初頭古段階)、後期２期(後期初頭新段階)に位置づけられている。本報告では初頭を古段階と新段階に分けて分類を行った。古段階は中期末葉の大木10式併行に後続する土器で、牛ヶ沢(３)式(成田1989)を使用する。新段階は弥栄平(２)式(成田1989)・沖附(２)式(成田1989)、小牧野３期(児玉1999)を使用する。後期前葉の土器は、県史で後期３期(後期前葉「十腰内Ⅰ群」併行)の土器とし、第１段階から第３段階への変遷としている。本遺跡ではこのうち第１段階と第２段階が出土しており、本文中においては十腰内Ⅰ式とし、第１段階・第２段階を使用した。

なお、文様が縄文のみと無文で、詳細な時期が判断し難いものは、後期初頭から前葉とした。網目状撚糸文は後期初頭新段階から前葉とし、網目・格子状沈線文は後期前葉の十腰内Ⅰ式とした。

２　器種の分類

器種は深鉢形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・壺形土器・注口土器・蓋形土器などを確認した(以下、形土器は省略)。鉢・浅鉢には台部が付く台付鉢・台付浅鉢がある。壺には焼成前に切断され、蓋と身に分けられた切断壺がある。

後期初頭新段階から前葉を主体とした深鉢・鉢・浅鉢の分類は、出土土器の特徴から以下の基準とした。深鉢は器高が口径より大きなもの。鉢は器高が口径以下で、口径の３分の２より大きなもの。浅鉢は器高が口径の３分の２以下のもの(甲野1953、藤村1983)。

３　部位の名称

部位の名称は図５-1を基本とし、鉢・浅鉢は深鉢に準じて、壺には肩部も使用した。また、器種によって台部・注口部なども使用した。　(野村)

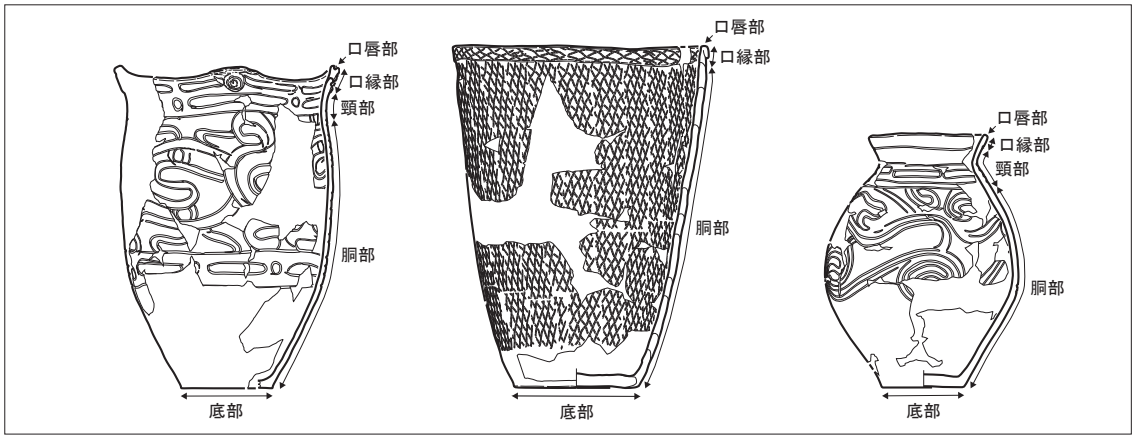


図５-１　部位の名称

第２項　石器

剥片石器類と礫石器類に大別し整理を行った。母岩から剥片を剥ぎ取り、それに加工を施したものを剥片石器類とし、これに素材である剥片や母岩となる原礫・石核も含めた。主に珪質頁岩や玉髄質珪質頁岩、チャートなどが石材として選択されている。一方、採取してきた礫そのものを使用しているものを礫石器類とした。石材としては安山岩やデイサイト、砂岩などが選択されている。

石器の計測はもっとも長い軸を長軸（長さ）とし、これと直交する軸を短軸（幅）、高さの最大値を厚さとした。観察表中で（　）表記しているものは破損品の現存値である。また、図中におけるアスファルトの可能性を含む黒色付着物及び光沢の範囲についてはトーンを用いて示した。なお、自然科学分析をおこなっていないため、アスファルトと断定できるものはない。

石鏃：尖端部が作出されている刺突具で基本的に長さ 50 ㎜、幅 30 ㎜以下のものとしたが、基準値以外のものでも形態から判断して本器種に含めたものが若干数ある。分類は茎部の有無で大別し基部形態からさらに細分した。

Ⅰ類－有茎鏃

1－茎部の作出が顕著なもの

2－茎部の作出が弱く尖基に近い形状のもの

Ⅱ類－無茎鏃

1－尖基鏃

2－平基鏃

3－凹基鏃

Ⅲ類－基部欠損により上記の細分ができないもの

石錐：石槍の一種で、尖頭部と茎部を有しているものを本類とした。

石槍：両面調整により尖頭部が作出され、木葉形したものを本類とした。

両面調整石器：両面調整により器体はほぼ整えられているが尖端部の作出が弱いもの、または石槍の破損品と思われるものを本類とした。

石匙：剥片の一端につまみ部が作出される石器。つまみ部に対する刃部の位置で以下のように細分した。なお、つまみ部の作出が弱くても、位置・調整度合いから認定できたものは本器種に含めた。

Ⅰ類－縦形

Ⅱ類－横形

Ⅲ類－斜型

石篦：撥形や短冊形を呈し、器体端部に掻器的な刃部が作出されるもの。

大石平型石篦：碇形をした掻器を本類とした。刃部は円刃状になるものが多い。

石錐：断面厚のある尖端部を有し、穿孔を目的として用いられたであろう刺突具。

Ⅰ類－全面に両面調整が施され棒形状になるもの

Ⅱ類－錐部にのみ両面調整が施されているもの

Ⅲ類－錐部のほかに削器的刃部を有しているもの

Ⅳ類－石鏃からの転用品

楔形石器：方形状ないしは長方形状で、対となる辺に階段状剥離が認められるもの。

スクレイパー：規格的な形態をもたず、連続する調整剥離で刃部を作出しているもの。また、二次加工が施されていなくても、微細剥離が連続している辺を有しているものはこれを刃部と認定し本器種に含めた。刃部角の状況から削器と掻器に大別した。

Ⅰ類－削器

1－刃部が１辺のもの

2－刃部が２辺以上あるもの

3－微細剥離が連続している辺を有しているもの

Ⅱ類－掻器

二次加工剥片：二次加工が施された剥片。(リタッチドフレイク (R･F))

Ⅰ類－石鏃や定形石器類の素材段階、または未成品と思われるもの

Ⅱ類－それ以外のもの

異形石器：両面調整が施された多角形の剥片で上記のいずれにも当てはまらないもの。石偶の可能性のあるもの。

石核：剥片を剥離した残りの素材。

原礫：加工は認められないが、石器母岩への使用を意図して遺跡内に持ち込まれたと考えられるもの。

両極剥片：素材の両端に打撃痕が認められるもので、両極技法により打割されたと考えられる剥片。

剥片：二次加工痕、微細剥離痕の認められないもの。チップ類も含む。

磨製石斧：破損状況により大別し、研磨の程度、残存部位によって細分を行った。

Ⅰ類－完形もしくは略完形品

1－両面共に全面研磨

2－両面共に部分的

ａ：刃部を研磨しているもの

ｂ：刃部以外を研磨しているもの

3－全く研磨されていないもの

Ⅱ類－破損品

1－基部が残存しているもの

2－刃部が残存しているもの

ａ：刃部を研磨しているもの

ｂ：刃部が研磨されていないもの

Ⅲ類－小破片及び胴部片

砥石：磨面のある礫石器で、次のような特徴を有するものを砥石とした。

Ⅰ類－湾曲した砥面を有しているもののほか、砥面内に溝状の傷があるもの

Ⅱ類－大型礫の器面に鏡面のように滑らかな砥面を有しているもの

※台石が含まれている可能性もある

Ⅲ類－台石・石皿類の破損品を２次利用しているもの

Ⅳ類－破損品

磨石：器面及び側縁に磨痕を有するもの。なお、磨痕と共に敲打痕や凹み痕などを併せ持つものも多く有り、それら複合機能を有したものも本類に含めた。使用部位から以下のように細分した。

Ⅰ類－器面に剥離加工が施され、側面に磨痕を有するもの

Ⅱ類－側面に磨痕を有するもの

１－側面の他に器面に磨痕、敲痕があるもの（側面ｽﾘ＋器面ｽﾘ＋器面ﾀﾀｷ）

２ａ－側面の他に器面に磨痕があるもの（側面ｽﾘ＋器面ｽﾘ）

ｂ－側面の他に器面に敲痕があるもの（側面ｽﾘ＋器面ﾀﾀｷ）

３－側面のみのもの（側面ｽﾘ）

Ⅲ類－器面に磨痕を有しているもの

１－磨痕の他に敲痕を有しているもの（器面ｽﾘ＋器面ﾀﾀｷ）

２－磨痕のみのもの（器面ｽﾘ）

Ⅳ類－多面的な磨痕や、敲痕が混在したような使用痕跡を有しているもの。

１－１側面を使用しているもの

２－２側面を使用しているもの

３－側面を３面以上使用しているもの

４－器面を含むほぼ全面を使用しているもの（多面体）

５－破損品

Ⅴ類－破損品で残存率の悪いもの

敲石：使用痕跡が敲打痕のみのもの。

Ⅰ類－使用痕跡が浅く、器面が荒れる程度のもの

Ⅱ類－使用痕跡が深く、凹痕となるもの

加工礫：剥離加工が主として施されているもの。

石錘：紐掛け用と思われる抉りが施されているもの。

Ⅰ類－長軸上に抉りが施されているもの

Ⅱ類－短軸上に抉りが施されているもの

Ⅲ類－長軸上と短軸上に抉りが施されているもの

Ⅳ類－破損品

球状礫：球状をした礫を一括した。器面に微細な稜を有しているもののほか、自然礫も含めた。

Ⅰ類－厚さと長さの比率が 0.9 以上のもの

Ⅱ類－厚さと長さの比率が 0.8 以上のもの

Ⅲ類－厚さと長さの比率が 0.8 未満のもの

石皿

Ⅰ類－有縁又は有脚のもの

Ⅱ類－縁、脚部がなく擂り鉢状の凹みを有しているもの

台石：大型の礫素材で、打撃痕と思われる小さな凹みを有しているもののほか、広い磨面を有しているものも含めた。

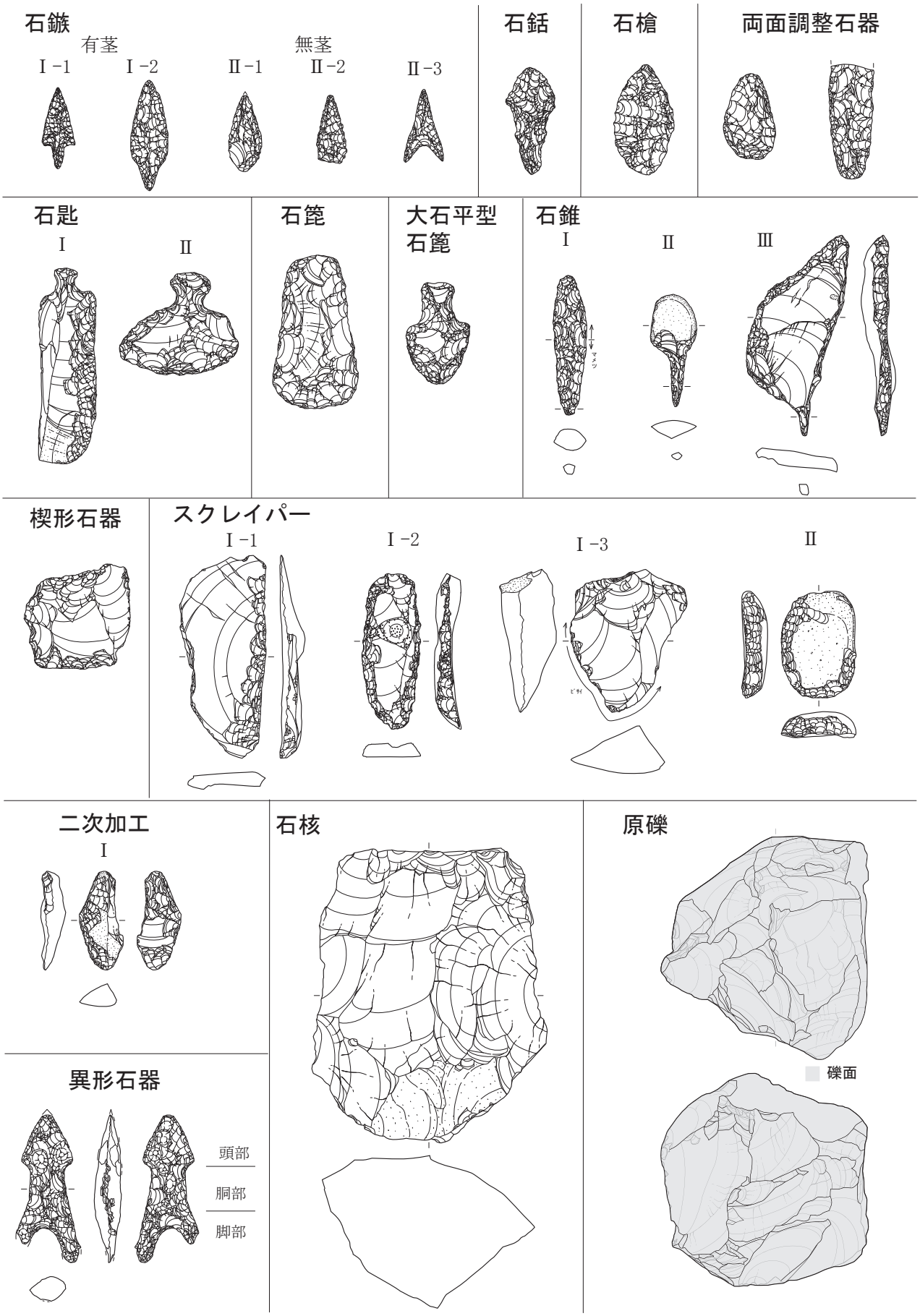

石鏃
有茎
Ⅰ-1
Ⅰ-2
無茎
Ⅱ-1
Ⅱ-2
Ⅱ-3
石錐
石槍
両面調整石器
石匙
Ⅰ
Ⅱ
石篦
大石平型
石篦
石錐
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
楔形石器
スクレイパー
Ⅰ-1
Ⅰ-2
Ⅰ-3
Ⅱ
二次加工
Ⅰ
石核
原礫
礫面
異形石器
頭部
胴部
脚部

図５－２　石器分類図（１）

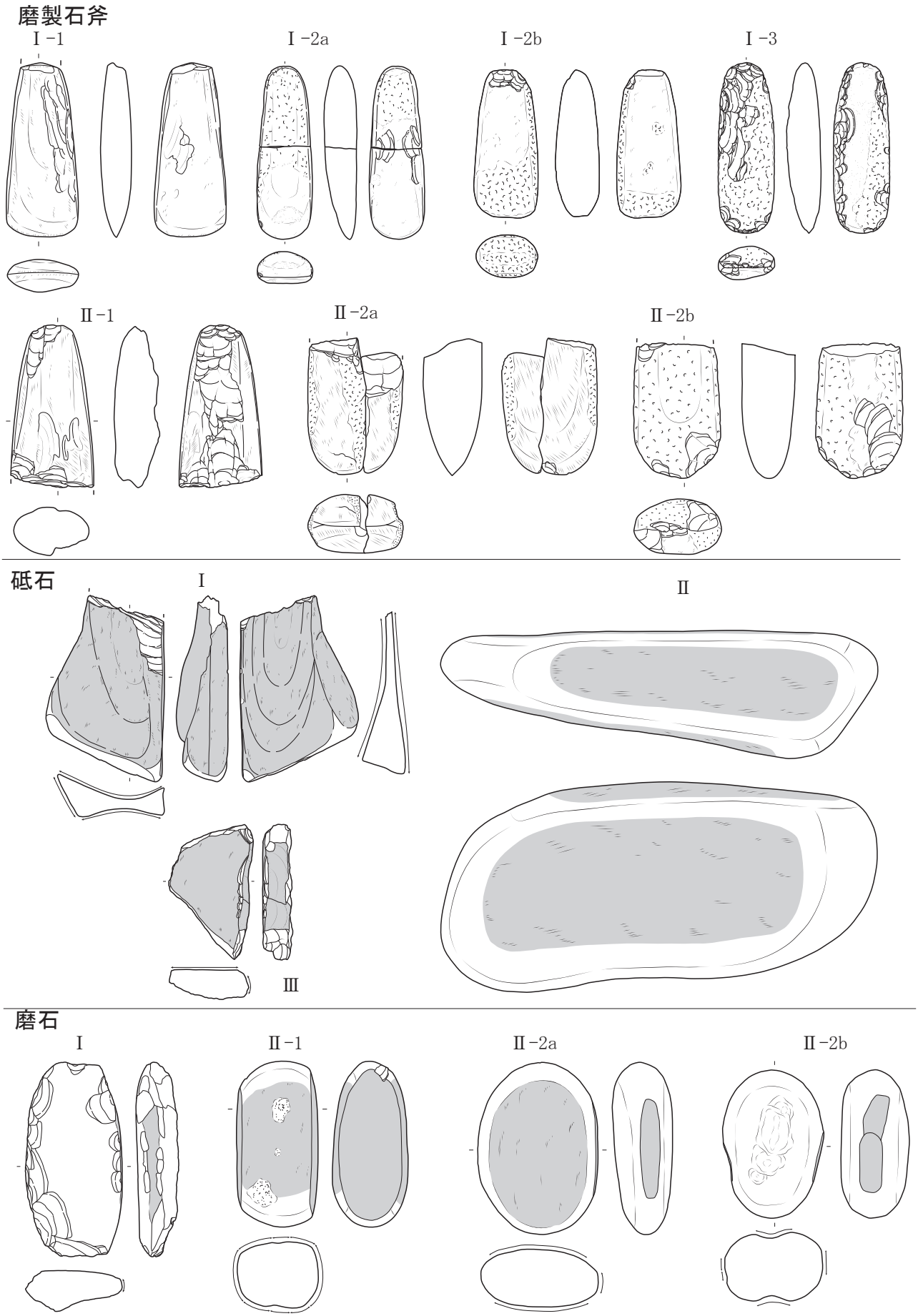


図５-３　石器分類図（２）

図５－４　石器分類図（３）

第３項　土器片利用土製品

１　土器片利用土製品の基準

土器片の周縁を敲打や研磨の加工により、円形などに整形したものである。ただし、周縁に抉りがあり、錘と考えられるものについては土器片錘とした。

２　周縁の加工

周縁の加工により、以下の３種類に分類した。括弧は観察表中の表記である。

・周縁が敲打されたもの(敲打)。
・周縁が部分的に研磨されたもの(部分研磨)。
・周縁の全周が研磨されたもの(全周研磨)。

３　平面形状の分類

平面形状は以下の８種類に分類した(図５－５)。ただし、中間的なものも多い。

・円形：円形・楕円形のもの。
・半円形：半円形・半楕円形のもの。
・方形：正方形・長方形のもの。
・多角形：五つ以上の線分で囲まれた平面形状のもの。
・三角形：三角形のもの。
・鏃形：三角形の一辺が凹んでいるもの。
・扇形：扇形・逆しずく形のもの。
・不整形：上記の形状に当てはまらないもの。

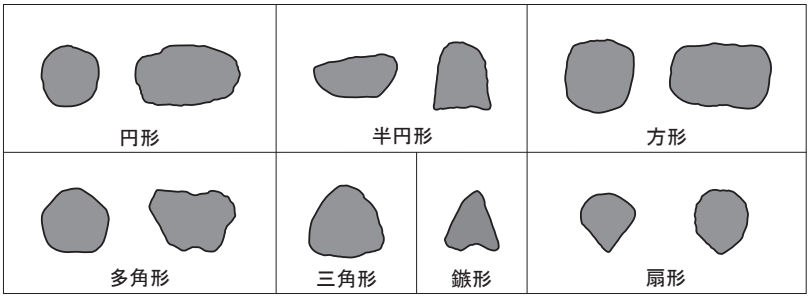


図５－５　平面形状

４　実測と表現の基準

実測図は土器片としての上下、または平面形状を基準に作図した。欠損は他の部分と比較して判断し、欠損部には推定線を図示した。研磨痕は範囲を図示し、周縁の加工により、敲打・部分研磨・全周研磨がわかるものとした(図５－６)。

なお、遺構内出土品は全て掲載し、第１号捨て場・遺構外出土品は選択して掲載した。

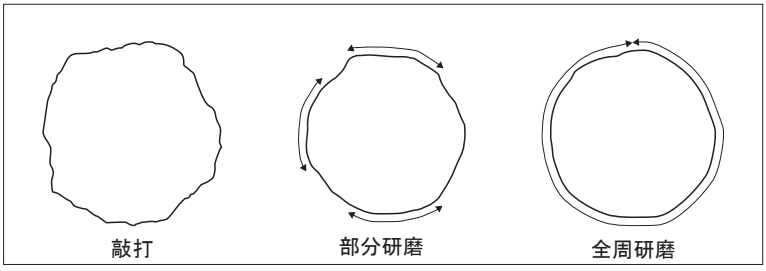


図５－６　周縁の加工

５　観察表の表記

欠損品の残存値は、(　)表記とした。また、欠損部以外の周縁が全て研磨されたものは、全周研磨と表記した。文様の表記・原体の表記・時期の表記は、土器に準拠した。微量な付着物などについては、表記していないものもある。　(野村)

第４項　石製品

石製品は下記のとおり分類し、それ以外は不明石製品とした。分類にあたっては、環状列石を有する複数の遺跡の石製品を統一した器種で分類・分析した佐賀桃子(2023)の分類を参考にした。扁平円礫・搬入礫は一部を写真で掲載したほかは、全点を図化掲載した。

石棒類：棒状で、断面形状が円形のもの。小形で男根形状のものや自然礫を転用した製品も含む。

石冠：断面形状が三角形に成形されているもの。

石刀類：棒状で断面が扁平で、片側に刃部が作出されるもの。

碗状石製品：内面に凹みを作出しているもの。鉢形に成形されているもの。

有孔石製品：穿孔等により孔を有するもの。未成品も含む。

岩版類：板状に成形されたもの。

三角形岩版：板状で、平面形状が三角形の成形されたもの。

球状石製品：球状やそれに近い形状に成形されたもの。

線刻礫：刻目が入るもの。

円形岩版：板状で、平面形状が円形に加工されたもののうち、加工痕跡が明瞭なもの。

軽石製品：軽石を上記以外の形状に加工しているもの。

扁平円礫：円形岩版に寸法が近似した礫で、加工痕跡が不明瞭なもの、加工痕跡がないもの。

搬入礫：遺跡内で産出しない礫で、何らかの製品の素材の可能性があるものや、形状等が特殊なもの(雨だれ石など)。

(長谷川)

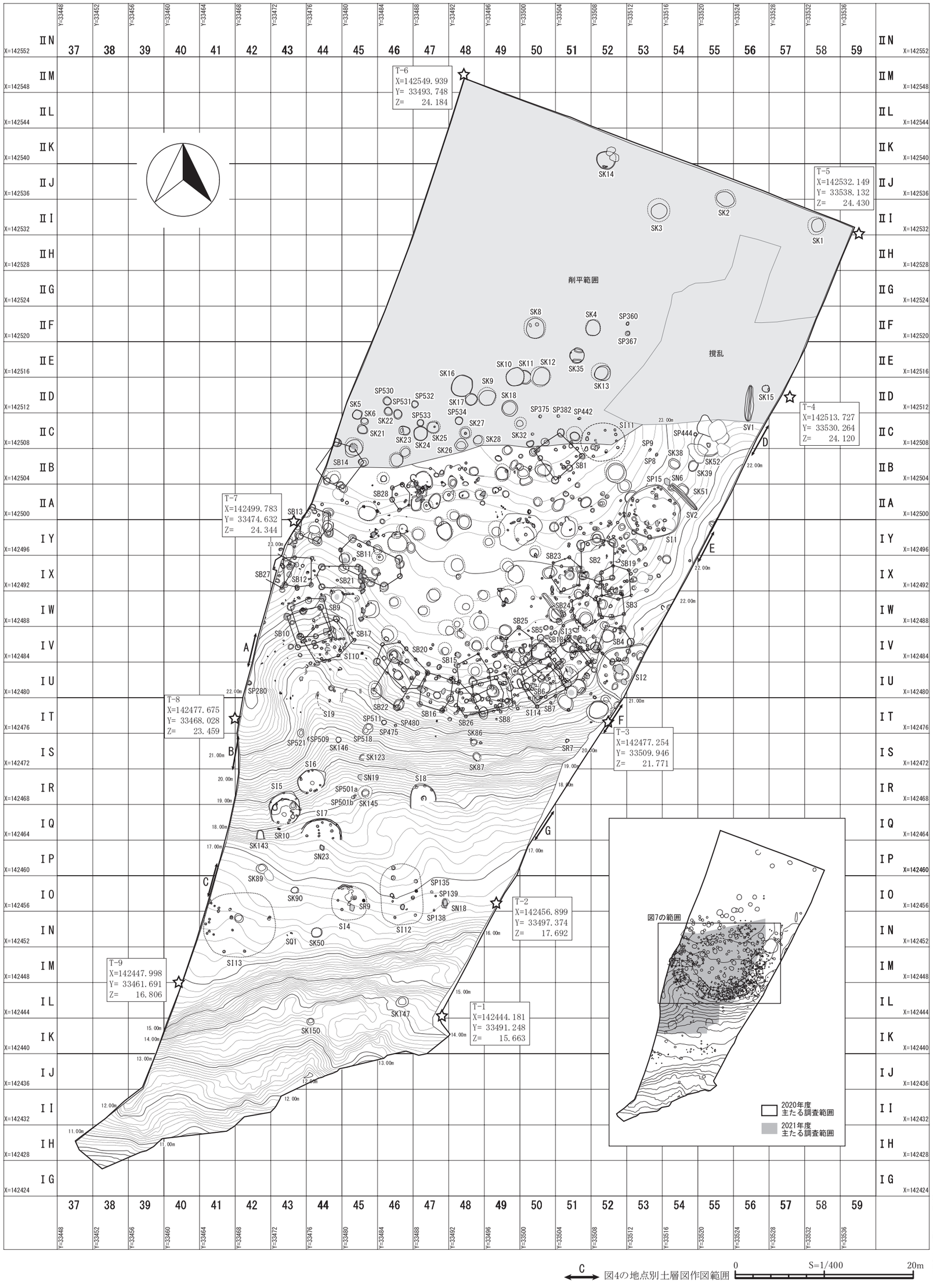

T-6
X=142549.939
Y= 33493.748
Z= 24.184
T-5
X=142532.149
Y= 33538.132
Z= 24.430
T-4
X=142513.727
Y= 33530.264
Z= 24.120
T-3
X=142477.254
Y= 33509.946
Z= 21.771
T-2
X=142456.899
Y= 33497.374
Z= 17.692
T-1
X=142444.181
Y= 33491.248
Z= 15.663
T-9
X=142447.998
Y= 33461.691
Z= 16.806
T-8
X=142477.675
Y= 33468.028
Z= 23.459
T-7
X=142499.783
Y= 33474.632
Z= 24.344
削平範囲
撹乱
図7の範囲
2020年度
主たる調査範囲
2021年度
主たる調査範囲
図4の地点別土層図作図範囲
S=1/400
0
20m

図６　遺構配置図

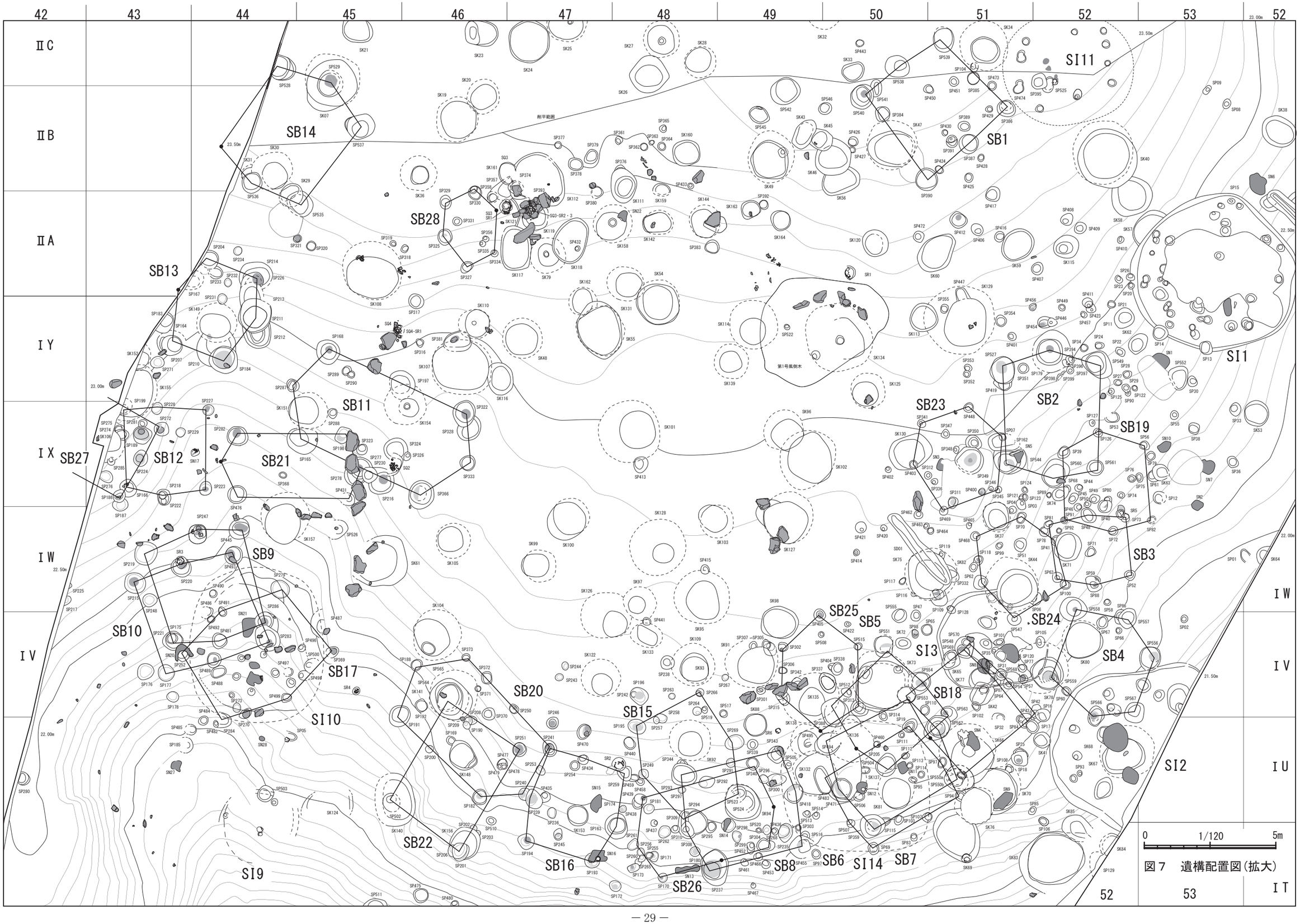

42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
ⅡC
ⅡB
ⅡA
ⅠY
ⅠX
ⅠW
ⅠV
ⅠU
ⅠT
SB1
SB2
SB3
SB4
SB5
SB6
SB7
SB8
SB9
SB10
SB11
SB12
SB13
SB14
SB15
SB16
SB17
SB18
SB19
SB20
SB21
SB22
SB23
SB24
SB25
SB26
SB27
SB28
SI1
SI2
SI3
SI9
SI10
SI11
SI14
0
1/120
5m

図７　遺構配置図(拡大)

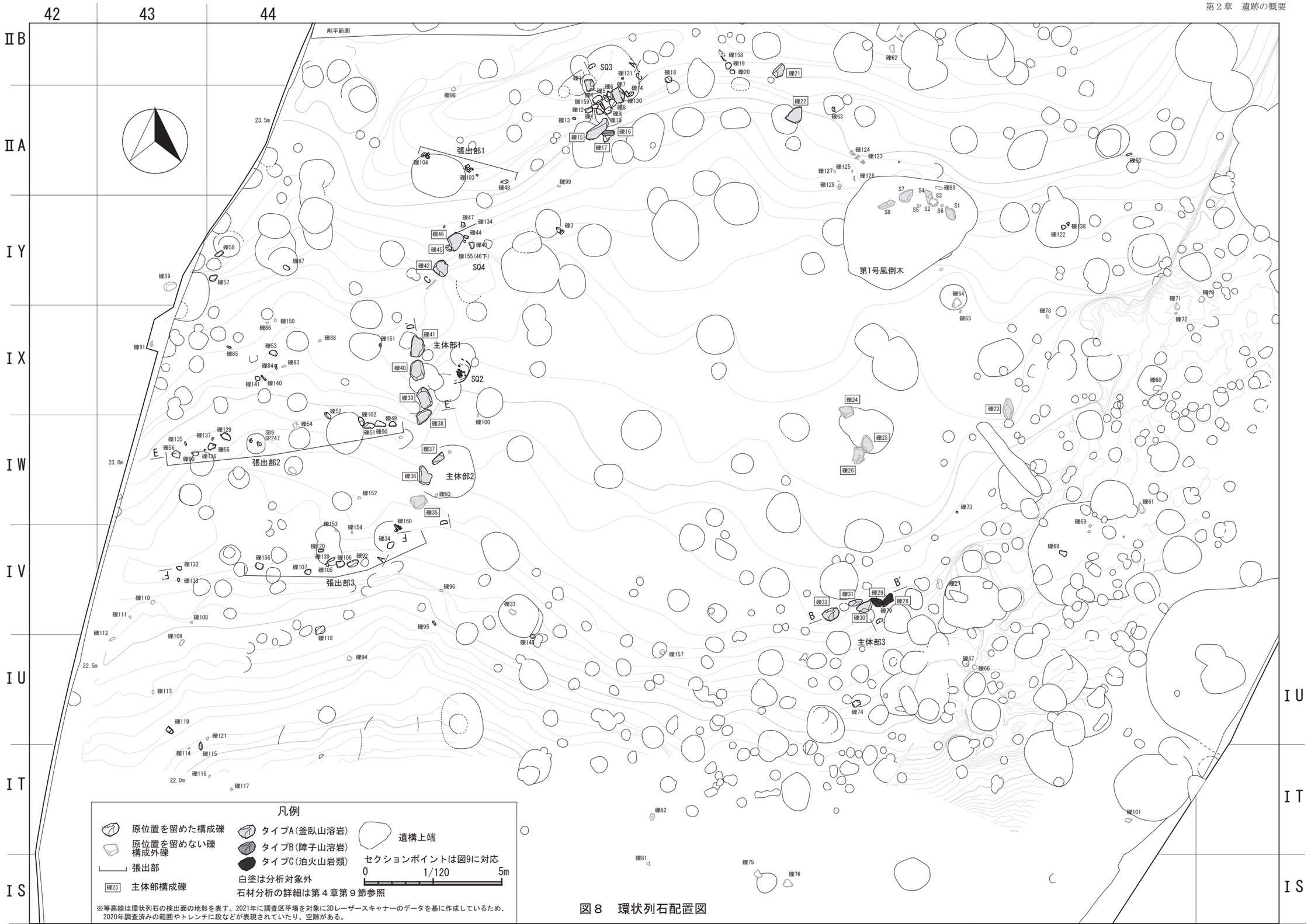

42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
ⅡB
ⅡA
ⅠY
ⅠX
ⅠW
ⅠV
ⅠU
ⅠT
ⅠS
削平範囲
23.5m
23.0m
22.5m
22.0m
張出部1
張出部2
張出部3
主体部1
主体部2
主体部3
SQ2
SQ3
SQ4
第1号風倒木
凡例
原位置を留めた構成礫
原位置を留めない礫
構成外礫
張出部
主体部構成礫
タイプA(釜臥山溶岩)
タイプB(障子山溶岩)
タイプC(泊火山岩類)
白塗は分析対象外
石材分析の詳細は第４章第９節参照
遺構上端
セクションポイントは図9に対応
0
1/120
5m
※等高線は環状列石の検出面の地形を表す。2021年に調査区平場を対象に3Dレーザースキャナーのデータを基に作成しているため、
2020年調査済みの範囲やトレンチに段などが表現されていたり、空隙がある。

図８　環状列石配置図

第３章　検出遺構と出土遺物

第１節　概要

縄文時代早期～後期前葉の遺構・遺物を確認した。対岸に位置する内田(１)遺跡では縄文時代後期中葉～晩期の土器や、平安時代の遺構・遺物を確認したが、本遺跡では該期の痕跡は確認していない。土器・石器・土製品・石製品を合わせて段ボール箱668箱の遺物が出土した。この他、人骨、動物・植物遺存体等(段ボール箱45箱)、環状列石構成礫103個を確認した。遺構は、環状列石(配石遺構４基のうち３基が伴う)、竪穴建物跡14棟、掘立柱建物跡28棟、ピット572基(うち163基は掘立柱建物跡構成ピット、うち43基は竪穴建物跡構成ピット、それ以外が366基)、焼土遺構27基(うち５基は竪穴建物跡の炉)、土坑165基(フラスコ状土坑98基、その他の土坑67基、うち１基は竪穴建物内土坑)、土器埋設遺構10基(うち１基は竪穴建物内埋設土器)、溝状土坑２基、溝跡１条、捨て場１箇所を確認した。なお、竪穴建物跡のうち３棟、掘立柱建物跡のうち26棟は整理作業段階で認定した。

調査区は平坦面と斜面地を含み、北から削平部分(旧A区: ⅡBライン以北)、平場(旧B区: IU～ⅡBライン)、斜面地(旧C区: IQ～Tライン)、緩斜面地と谷に向かう急斜面地(旧D区:IMライン以南)となっている。ⅡBライン以北では、フラスコ状土坑の下半部のみが残存する状況であった。数十cm以上削られているとみられ、本来の地形としては北側が高くなる緩斜面地と推測される。多くはフラスコ状土坑であったが、掘立柱建物跡を構成するピットの下半部とみられる遺構もある。

IU～ⅡBラインは、沢地形・斜面地を埋めることで最終的に平坦面となった範囲である。中央部には配石遺構を伴う環状列石が構築され、列石内部は漸移層を欠失しており、削平された可能性がある。列石下部やその外縁部には掘立柱建物跡が環状に巡る。竪穴建物跡は環状列石以前のもので、中央部にはなく東西に構築される。フラスコ状土坑や浅い土坑は縄文時代中期後葉～後期前葉の様々な時期のものがあり、調査区のほぼ全面に構築され、後期初頭新段階(小牧野３期)以降のものが多い。焼土遺構・土器埋設遺構も中央部には作られず列石ライン～外縁に構築され、土器埋設遺構の一部は列石に伴う可能性が高い。

IQ～Tラインは、南側に向かって下がる斜面地にST１が形成されており、包含層形成後の現況も斜面地となっていた。縄文時代中期末葉～後期前葉にかけて場所を変えながら廃棄行為が続けられ、後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)には斜面下半部は居住域となっている。ST１東部は中期後葉から遺構の構築や土砂の廃棄が活発に行われたエリアで、後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式期)以降には、包含層を掘り込んで再葬土器棺墓(SR７)が構築されている。

IM～Pラインは、平場に近い緩斜面地で、主に前期末葉(円筒下層ｄ2式)と後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)の竪穴建物跡、土坑、土器埋設遺構が構築される。ILライン以南は、内田(１)遺跡との間に走る沢に向かう急斜面地となっており、遺構・遺物は少ない。

なお、調査区のうち北側削平部分(旧A区)、平場・斜面地東側(旧B・C区東側)、緩斜面地と急斜面地(旧D区)は主に令和２年度、環状列石を含む平場・斜面地の中央部と西側(旧B・C区中央部・西側)は主に令和３年度に調査を行った。　(折登)

第２節　環状列石・配石遺構

第１項　概要

環状列石は、主体部と張出部、配石遺構から構成され、礫の数は103点である。主体部は、直径約19mの円環上に、列石が３箇所と単独の礫が配置される。隙間なく円環上に配置されるのではなく、全体として円環を成している。張出部は、主体部の西側に３箇所あり、列状に西に延びる。配石遺構は３箇所あり、２基(SQ３・４)には土器埋設遺構が伴い、主体部に先行して構築される。環状列石は、平場において最も新しい遺構である。環状列石・配石遺構の構築時期はいずれも後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられ、第５章第１節で詳述した。

１　検出

環状列石は、調査開始前には見えておらず、現況では確認できなかった。表土除去や木根除去時(Ⅲ層検出前)に主体部の礫を検出した。南側の主体部３はⅡ層中でも礫が埋まり切っておらず、木根除去時には礫の上半を検出した(写真９)。西側の主体部１・２は、Ⅲ層上面の遺構検出時に礫の上半を検出した(写真26)。撹乱で移動した主体部を構成していた礫(礫23～26)は表土中で検出した。他にも撹乱で動いたと思われる10～30kgの比較的小型の礫数個が表土中に含まれ、構成礫であった可能性がある。東側に位置する張出部は、一部を主体部と同じ段階のⅢ層上面で検出した。礫の多くはⅢ層中に埋没しており、Ⅲ層精査中に検出した。SQ３も、Ⅲ層上面での遺構検出時に、礫15の付近で環状の配石を検出した。

礫の多くは、下部の遺構堆積土の上に構築される。礫の調査段階で、下部遺構のプランを確認できたものは少なく、前述のとおりⅢ層の精査中に検出した。下部遺構は礫の取上げ後にⅢ層の精査・掘削を進めるなかで検出した。このため、下記の個別の記載において［位置・確認］では、礫の掘方検出時に認識していた層位を示し、［重複・関連遺構］で下部遺構等の関係を記載する。

２　環状列石内側の削平

環状列石内側の削平については次の複数の観点から、遅くとも環状列石構築段階には行われたと考えられる。なお、環状列石の周辺にはⅡ層以下が残っているため、縄文時代以降の削平(撹乱)は少なく、本節の環状列石内側の削平は縄文時代に行われたものと考えられる。

環状列石の検出時、内側は表土直下がⅣ層で、外側にはⅢ層が取り囲むように堆積していた(図207)。土器の出土量も同様の傾向を示し、環状列石の内側は他と比べて明らかに出土量が少ない(図206)。

礫の配置からは、環状列石の構成礫やSQ３が、内側に向く段差に斜めに配置されている(図９・写真４・５)。構成礫は、主体部１の礫41(写真７)、主体部２の礫36(写真８)、SQ３の礫15～17(写真18)、SQ４の礫42・46(写真24・25)が削平で生じた段差に、張り付くように内側に向かって斜めに据えられている。SQ３も南東向き斜面の地形に構築されており、円環に直交する軸で作成した土層断面から確認できる(図20・21、写真22)。

環状列石検出時に作成した３Dスキャナーによる段彩図(写真６)からも、内側の不自然な地形が確認できる。特に北側、西側において、環状列石外側と比べ低くなっていることがわかる。なお、南側

の主体部３は、礫の配置や掘方から平場に据えられており、北側のように列石内外の段差はなかったと思われる。

削平のタイミングについては、環状列石や配石遺構が、斜めに配置されることから、少なくともこの構築前と考えられる。環状の構造は、前段階の後期初頭新段階(小牧野３期)で、環状列石より内側にも掘立柱建物跡を環状に巡らせる環状集落が構築される。このため、小牧野３期に環状の内側に堆積するⅢ層や前時期の遺構堆積土を削平し、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)に、環状列石を構築する際に、さらに削平の範囲を広げた可能性が想定できる。だが、小牧野３期の削平の痕跡は、削平範囲の拡張により失われたと考えられ、調査では確認できなかった。

削平により生じた土は、東西に造成されたと思われる。造成土により、環状列石の東西は地形が斜面から緩斜面に変化している。これは、環状列石検出時の地形(図８)と完掘時のⅣ層の地形(図６)の比較、土層観察ベルトでの人為堆積層の検出などから明らかである。特に西側は顕著で、ⅠU-43グリッド周辺は、埋没谷が造成により緩斜面に大きく変化している。東側も同様に急斜面が緩斜面に変化している（図206～212)。

３　構成礫

(１)構成礫の認定

環状列石主体部は円環の線上に位置する弧状・列状のまとまりを認定し、主体部１～４とした。加えて、北東側で個別に検出した礫21・22は、主体部１～４の構成礫と同程度の大きさで、円環の線上に近いことから、主体部の構成礫と考えた。また、表土等から出土した礫(礫23～26)は、撹乱で原位置を保たないものの、主体部の礫に相当する大きさのため主体部構成礫であった可能性が高いと考えた。第１号風倒木は、堆積土中に主体部構成礫相当の巨礫を５点含んでおり、円環の線上に近接する。このため、主体部もしくは配石遺構が風倒木により撹乱を受けた可能性を考えた。張出部は、環状列石の東側に３基検出した。列状に構成礫が並ぶ様相である。張出部の構成礫は、主体部より小型である。

主体部や張出部の線上以外で、単独で出土した10㎝以上の礫は環状列石を構成する可能性があるため、基本的に全点を断割りし記録を行った。このうち、基本的に掘方を有するものを、意図的に配置された礫と考え、構成礫と認定した。掘方が検出できない礫や撹乱で原位置を保たない礫、下部遺構に伴う礫は構成外礫と考えた。だが、構成外礫の中には、掘方と下部遺構の堆積土とを区別できず、認定できなかった礫を一部に含んでいる可能性もある。

以上により、発掘調査では160点の礫を記録し、環状列石構成礫として103点、内訳は主体部25点、配石遺構20点、第１号風倒木９点、張出部24点、それ以外の構成礫25点を認定し、残り57点は撹乱や別遺構に伴う礫といった理由で構成外の礫とした。なお、図８には、構成礫と構成外礫を区別したうえで記録した礫を全て掲載した。

(２)礫の調査・整理方法

発掘調査において、環状列石・配石遺構の構成礫は、礫のまとまりごとに平面図、断面図を作成した。調査員の現地鑑定に基づき、礫１点ごとに、整理台帳を作成した。台帳では、石材、礫の調査所

見や寸法、重複関係などを記載し、調査の段階ごとに更新した。台帳を整理し、第２分冊 環状列石観察表を作成した。構成礫は取上げ後、全点を青森県埋蔵文化財調査センターに持ち帰り、整理作業において長軸、短軸、厚さを計測した。重量の計測においては概ね50kgを超えるものはトラッククレーンに付属する重量計(0.5kg単位)を用いて、礫を吊り下げて計測した(写真26)。円磨度は、五十嵐(2006)やPowers(1953)を参考に目視で判断した。礫の洗浄にあたっては、高圧洗浄機を用いて、できる限り土壌などの汚れを取り除いた(写真26)。その後、分析のサンプルをハンマー等で採取した(写真26)。現在は、埋文センターの管理する収蔵庫で保管している。

(３)礫の産出地の調査

環状列石の構成礫は、主体部においては重量50kgほどのものが多く、最大は126kgである。構成礫の産出地を調査段階で推定するために、島口調査員(地学)による石質鑑定を発掘調査現場で実施した。その結果、ほとんどが火山岩のデイサイトと安山岩とされた。

次に、その産出地を調査するために、同種の岩石が露出していると思われるところを現地調査した(第２章第２節)。現地調査は２回行い、島口調査員の同行を得た。１回目は、遺跡の東方を流れる青平川や田名部川を調査し、50kgを超える巨礫は確認されなかった。２回目は、遺跡の西方にある恐山の溶岩の可能性を考え調査を行った。遺跡から恐山までは田名部低地帯、むつ市街地を挟むため、むつ市街地にそそぐ河川は下流に行くに従い河川改修されており、巨礫はほとんど確認されなかった。恐山の溶岩の巨礫を探すため、釜臥山や障子山から流れ出る南麓の河川を調査し、環状列石の岩種に近い礫を複数採取することができた。これにより恐山に由来する可能性が高まった。

この結果を踏まえ、恐山や岩石について専門に分析・研究を行っている、弘前大学大学院理工学研究科の丸山哲弥氏・佐々木実氏(調査員)・折橋裕二氏に構成礫の自然科学分析を委託し、蛍光X線分析などを実施した(第４章第９節)。分析にあたっては、構成礫のうち比較的大きなもの、特徴的な岩相の37点を対象とした。礫の表面は風化しているため、ハンマー等で割り、風化していない面から試料を採取した。分析は28点のうち11点を蛍光X線分析し、残り17点はそれを参考に分類した。この結果３種類に分類でき、25点が恐山火山の釜臥山溶岩由来、１点が恐山火山の障子山溶岩由来、２点が新第三紀中新世の泊安山岩類由来とわかった。

上記の分析対象外の礫は、肉眼で石質を鑑定した。デイサイトと安山岩の区別は蛍光X線分析においては珪酸(SiO_2)の含有量に基づく。肉眼鑑定では非破壊で行うため、色調や主な造岩鉱物の含有量などに基づく。このため、蛍光X線で分析した礫は安山岩が多く、肉眼鑑定した礫はデイサイトが多い結果となった。肉眼鑑定でデイサイトとした礫にも、蛍光X線分析で安山岩とされた礫に岩相が似るものが見られるため、釜臥山溶岩由来の安山岩が含まれる可能性がある。下記の岩石名の記載においては、蛍光X線分析で得られた岩石名を優先して記載した。肉眼鑑定と併せて、肉眼でタイプ分類した礫(蛍光X線分析対象外)は、本文中では岩石名は記載せずタイプ名のみを記載した。

構成礫の多くは火山岩(安山岩、デイサイト)で、恐山火山の釜臥山溶岩に由来することが明らかとなった。恐山火山の溶岩の分布範囲までは、遺跡から８～10㎞程離れている。分布範囲まで直接採取に行ったのではなく、土石流によって田名部平野まで運ばれてきたものを採集した可能性が指摘された(第２章第２節、第５章第１節)。

（４）礫の抜き取り痕

東～西側の円環の延長線上などで、礫の抜き取り痕の可能性がある黒褐色土のプランを検出した。円環付近のプランを精査した結果、浅く、不整形な底面が多く、周囲の撹乱や下部に広がる遺構の堆積土などとの見分けがつかなかった。プランは円環の延長線以外にも分布していた。本遺跡の礫の掘方は下部が不整形なものが多く、環状列石の下部に前時期の遺構が広がり多くの礫が下部遺構の上位に構築されている。このような状況のため、本遺跡では下部遺構や撹乱と区別して礫の抜き取り痕を単独で認定するのは困難であり、今回の調査では積極的に評価しなかった。

第２項　環状列石

１　主体部

主体部は、円環を基調に３つの弧状・列状の列石（主体部１～３）と単独で配置される礫で構成される。撹乱で移動した礫や風倒木に巻き込まれた礫もある。円環の直径は礫15と礫30の距離から19ｍである。主体部の構成礫は25個でこのうち20個は原位置を保ち、５個は撹乱の影響を受けている。主体部の礫は40～126kgの亜角礫～円礫を使用している。礫は掘方内に据えられ、多くは平坦面を上方に向けるが、円環の内側に向かって傾斜する礫(36・41)や、逆に傾斜する礫(39)もある。

（１）主体部１（礫38～41）

礫38(図10、写真７)

[位置・確認] ⅠW-45グリッド、Ⅲa層で検出した。

[重複・関連遺構] SB21SP431の上に構築される。掘方が礫39の掘方と重複し、礫39の掘方が古い。

[掘方・構築方法] 掘方は平面でも確認でき、底面に凸凹がみられる。礫は平らな面を上に、水平に据えている。南西側に木根撹乱があり、姿勢は完全に原位置を留めない可能性がある。

[石材] 長軸70.0cm、重量58.0kgの板状の亜円礫で、石材分析の結果タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)の安山岩を使用していることが分かった(第４章第９節)。

礫39(図10・91、写真７)

[位置・確認] ⅠX-45グリッド、Ⅲa層で検出した。

[重複・関連遺構] SB21SP278・431の上に構築される。掘方が礫38の掘方と重複し、礫39の掘方が古い。

[掘方・構築方法] 円環の内側を向いて傾斜するように構築されており、掘方もそれに沿っている。掘方は平面で検出した。

[石材] 長軸78.0cm、重量82.0kgの板状の亜角礫で、表面が褐色に劣化し、剥落が顕著にみられる。石材分析の結果タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)を使用していることが分かった(第４章第９節)。

[出土遺物]土器は、掘方から総重量50.3gが出土し、後期初頭新段階(弥栄平(２)式)の深鉢(図91-１)を図示した。

[時期] 後期初頭新段階(弥栄平(２)式)以降に構築され、礫38より古い構築である。

礫40(図10、写真７)

[位置・確認] ⅠX-45グリッド、Ⅲa層で検出した。

[重複・関連遺構] SB11SP277、SB21SP278の上に構築される。

[掘方・構築方法] 上面が水平になるように据えられており、掘方は平面でも検出でき、底面は凸凹である。東側に根撹乱が入るが姿勢や位置は原位置を保っている。

[石材] 長軸74.0cm、重量126.0kgと本遺跡で最も重い。上下面が平坦の亜円礫で、石材分析の結果タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)の安山岩を使用していることが分かった(第４章第９節)。

[出土遺物] 土器は、掘方から総重量88.7gが出土した。このうち、時期などがわかる個体は含まれなかった。

礫41(図10・91、写真７)

[位置・確認] ⅠX-45グリッド、Ⅲa層で検出した。

[重複・関連遺構] SB21SP198、SP323の上に構築される。

[掘方・構築方法] 円環の内側を向いて傾斜するように構築されており、掘方も同様に傾斜している。掘方の下面に根撹乱が入るが、原位置を保つ。

[石材]長軸75.0cm、重量101.5kgの扁平の亜角礫で、石材分析の結果タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)の安山岩を使用していることが分かった(第４章第９節)。

[出土遺物] 土器は、掘方から総重量150.1gが出土した。このうち、後期初頭新段階(弥栄平(２)式)の深鉢(図91-２)、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の深鉢(図91-３)を図示した。

[時期] 後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)以降に構築された。

(２)主体部２(礫35～37)

礫35(図11、写真７・８)

[位置・確認] ⅠW-45グリッド、Ⅱ層中で検出した。

[掘方・構築方法] Ⅱ層の上に乗り、掘方は確認できず、底面レベルが他の礫より高いため撹乱により原位置を保っていないと判断した。

[石材] 長軸61.0cm、重量67.0kgの不定形で扁平な亜角礫で、石材分析の結果タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)を使用していることが分かった(第４章第９節)。

礫36(図11、写真７・８)

[位置・確認] ⅠW-45グリッド、Ⅲ-２層で検出した。

[重複・関連遺構] SK61の上に構築される。

[掘方・構築方法]平面では２層がⅢ-２層中で確認できる。断面は礫直下の１層に撹乱が混じるため、当初は撹乱で動いている礫と考えた。だが、掘方２層を平面で検出し、断面でもⅢ-２層の掘り込みを確認したため、原位置を保つと判断した。姿勢は根撹乱により上へ起こされている可能性がある。

[石材] 長軸70cm、重量74kgの不定形な亜角礫で、石材分析の結果タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)を使用していることが分かった(第４章第９節)。

［出土遺物］土器は掘方から総重量31.5gが出土した。このうち、時期などがわかる個体は含まれなかった。

礫37(図11、写真７・８)

［位置・確認］ⅠW-45グリッド、Ⅲ-２層で検出した。

［重複・関連遺構］SK61の上に構築される。

［掘方・構築方法］平らな面が上になるように、掘方内に頂部を埋めて構築している。南西側に根撹乱があるため、当初は動いている礫と考えた。だが、掘方１層が平面で確認でき、断面でもSK61の堆積土を掘り込んでいることを確認できるため原位置を保つと判断した。根撹乱により姿勢は動いている可能性がある。

［石材］長軸54.0㎝、重量50kgの三角柱状の円礫で、石材分析の結果タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)を使用していることが分かった。

［出土遺物］礫37に伴う遺物は出土しなかった。だが、礫の東側で、礫より下位のSK61堆積土上部から後期初頭新段階(小牧野３期)の土器が重なって出土した(図71、図128-12)。出土レベルが礫より下位のため、環状列石構築時には埋没していたと考え、SK61に伴う遺物と判断した。

［時期］SK61から後期初頭新段階(小牧野３期)の土器が出土し、それより新しい構築である。

(３)主体部３(礫28～32・79)

礫28～31・79(図11・91、写真８・９)

［位置・確認］ⅠV-49グリッド、Ⅳ層で検出した。東西方向に並んでいる。

［重複・関連遺構］礫30はSK135・SB25SP315の上に、礫28・29はSK135・SP342の上に構築される。礫の重なりや掘方の重複から、古い順に礫31→30→29→28と、西から東へ据えられている。礫79は小礫で、礫28と29の間で検出した。

［掘方・構築方法］掘方は黒褐色土で、Ⅳ層中で明瞭に検出でき、礫の取り外し後も明瞭に黒褐色土のプランが確認できた。礫28・29は同一の掘方である。掘方の深さは礫の下端から10～13㎝である。底面は凸凹である。礫28と30は、掘方に横位で据えられ、礫の下端レベルは一致する。礫29・31は立位で、礫の下端レベルは一致する。礫31は根入りが14㎝と他より深く、礫下端がⅣ層内にあるため、Ⅳ層に突き立てて周囲を掘方で埋めるように構築していると思われる。

［石材］礫28は、長軸50.0㎝、重量42kgの三角柱状の円礫で自然と思われる楔状の窪みがある。礫29は、長軸51.0㎝、重量59.5kgの楕円形の円礫で、この列では最も重い。礫30は、長軸70.0㎝、重量46.5kgの扁平な三角形の亜円礫である。礫31は、長軸56.0㎝、重量43.0kgの扁平柱状の亜角礫である。礫79は流紋岩の小礫である。

石材分析の結果、礫30・31はタイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)で、礫30は安山岩であった。礫28・29がタイプC(泊安山岩類)で、礫29は安山岩を使用していることが分かった(第４章第９節)。

［出土遺物］礫28～31の掘方から総重量72.2gの土器が出土した。このうち、時期などがわかる個体は含まれなかった。礫の下部を調査する掘方埋土を含むトレンチから292.1gの土器が出土し、後期初頭新段階(沖附(２)式)～前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の土器２点を図示した(図91-４・５)。４は後期初

頭新段階(沖附(２)式～小牧野３期)の深鉢で、５は後期初頭新段階(小牧野３期) ～前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の浅鉢である。
[時期] 礫より下位のトレンチから、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の土器が出土したため、それ以降の構築である。

礫32(図11、写真８・９)
[位置・確認] ⅠV-49グリッド、Ⅳ層で検出した。
[重複・関連遺構] 礫31から南西側約40㎝に位置する。
[掘方・構築方法] Ⅳ層直上に構築されており、掘方は平面では確認できず、断面では西側でわずかに確認できるのみであった。
[石材] 長軸60.0㎝、重量43.0kgの扁平楕円形の亜角礫で、周囲が打ち欠かれている可能性がある。石材分析の結果、タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)を使用していることがわかった(第４章第９節)。
[出土遺物] 土器は、掘方から総重量17.0gが出土した。このうち、１層から出土した後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の口縁部片(図91-６)を図示した。
[時期] 掘方の土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)以降に構築された。

(４)主体部構成礫(単独)
礫21(図12、写真９)
[位置・確認] 最も北に位置し、ⅡB-48グリッド、Ⅳ層で検出した。
[重複・関連遺構] 礫21の西側に礫18・19も等間隔で弧状に並ぶ。礫18・19は円環上に位置するものの、主体部構成礫と比べて小型のため、主体部以外の構成礫として後述する。
[掘方・構築方法] Ⅳ層を掘込む浅い掘方がある。
[使用石材] 長軸50.0㎝、重量40kgの不定形で扁平な亜角礫である。石材分析の結果、タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)を使用していることがわかった(第４章第９節)。

礫22(図12、写真９)
[位置・確認] ⅡA-48グリッド、SK144の上面で検出した。
[重複・関連遺構] SK144の上に構築される。
[掘方・構築方法] SK144を掘込む浅い掘方がある。掘方の一部に撹乱が入るが、掘方はⅣ層を掘り込んでいたと思われる。礫の南西に撹乱があり、礫直下にも撹乱を確認した。だが、撹乱の下に残存した掘方を検出したため、概ね位置は動いていないと判断した。礫の姿勢は撹乱で動いている可能性がある。
[使用石材] 長軸72.0㎝、重量71.5kgの上下が平坦の亜角礫で、台石の可能性もあるが明確な使用痕は確認できなかった。石材分析の結果、タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)を使用していることがわかった(第４章第９節)。

礫42(図22、写真24・25)

[位置・確認] ⅠY-45グリッド、Ⅲ-２層中で検出した。

[重複・関連遺構] SQ４の礫45・46と弧状に配置される。礫46と据え方が似ている。

[掘方・構築方法] 掘方はにぶい黄褐色土で、南西側を欠くものの、検出面で50(残存値)×61㎝の楕円形と推測され、深さは27㎝である。礫は断面が三角形で、最も長く平坦な斜辺が円環の内側を向くように据えられる。礫の背面(西側)に根撹乱があるため、姿勢は本来より立ち上がっている可能性がある。礫46と上端は同標高でトップは標高23.65ｍ前後で視認できる。下端レベルは礫42の方が深い。

[使用石材] 長軸70.0㎝、重量70.0kgで、断面三角形基調で扁平な角礫を使用している。石材分析の結果、タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)を使用していることがわかった(第４章第９節)。

[出土遺物] 掘方からは出土しなかった。北西側から土偶(図335-１)が出土した。

(５)主体部を構成していた可能性のある撹乱で移動した礫

礫23(図12、写真９)

[位置・確認] ⅠX-50グリッド、Ⅱ層中で検出した。

[構築方法] Ⅱ層の上に乗り、他の構築礫より底面レベルが上位である。配置は、環状列石の弧状を想起させるものの、検出面や底面の高さから、撹乱により移動していると考えられる。

[使用石材] 長軸77.0㎝、重量84.5kgの長楕円形の亜角礫である。石材分析の結果、タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)を使用していることがわかった(第４章第９節)。

礫24～26(図12、写真10)

[位置・確認] ⅠX・W-49グリッド、Ⅰ層で検出した。

[構築方法] Ⅰ層の上に乗り、他の構築礫より上位である。環状列石の内側に位置し、大きく移動していると考えられる。

[使用石材] 礫24は、長軸48.0㎝、重量45.0kgの台形短冊形の亜角礫である。礫25は、長軸58.0㎝、重量64.5kgの不定形の亜円礫である。礫26は、長軸65.0㎝、重量61.5kgの不定形で扁平の亜角礫である。３点とも石材分析の結果、タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)で、礫24は安山岩を使用していることがわかった(第４章第９節)。

２　張出部

主体部の西側で列状の礫の配置を３か所で検出し、張出部１～３とした。認定にあたっては、列状に礫が配置されているもの、ある程度等間隔で配置されているものとした。張出部はⅢ層中に構築されており、Ⅲ層上面で主体部構成礫と同じタイミングで検出した礫や、Ⅲ層の精査や掘削がある程度進んだ段階で検出した礫がある。主体部構成礫が長軸50㎝以上、重量40kg以上に対し、張出部構成礫は長軸30㎝以下、重量20kg以下と小型の礫を使用している。

張出部１(図13・91、写真10)

[位置・確認] ⅡA-46グリッドから北西方向へ延びる。３つの礫が等間隔に並び、礫48はSQ３とSQ４の間に位置する。礫103・104はⅢa層、礫48はⅣ層、SK108の上で検出した。

[重複・関連遺構] 礫103・104はSK108の上位に位置する。

[掘方・構築方法] ３箇所で等間隔に配置されている。標高約23.7ｍで３個同時に見通せる。礫104は複数の破砕礫が、浅い掘方に配置されている。礫103は３個の礫が小穴状の掘方に配置されている。礫48は小穴状の深い掘方である。

[使用石材] 礫103は、長軸26.5㎝で重量5.4kgと長軸21.0㎝で重量6.2kgの個体がある。礫104は、長軸21.6㎝で重量4.6kgである。礫103・104は、凝灰岩の扁平円形の礫である。礫48は、長軸28.2㎝、重量8.3kgのデイサイトの板状の亜角礫を用いている。

[出土遺物] 土器は礫104の掘方から後期初頭新段階(弥栄平(２)式) ～後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)が出土した。総重量は、27.7gで２点を図示した(図91-７・８)。７は後期初頭新段階(弥栄平(２)式)の深鉢で、８は後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)の深鉢である。礫48・103の掘方を含むトレンチから後期初頭新段階～前葉の土器(図91-９)が出土した。

[時期] 礫104は掘方の土器から十腰内Ⅰ式第２段階以降に構築された可能性がある。

張出部２

礫49から西へ延び、礫56まで続く。礫52の東側と西側に分けて記述する。なお、礫54はⅡ層が礫直下に入るため撹乱で原位置を保たないため、構成礫と認定しなかった。また、礫129と54の間に等間隔に、SB9SP247が所在する(図49)。SP247は、柱穴から石冠が４点(図204-１～４)まとまって出土した特徴的な遺構である。石冠の出土レベルは、石冠の上端が礫129の下端と同じか張出部より下位で、張出部完掘後に検出した。このため張出部と認定しなかった。礫102・52・54・SP247・礫129は等間隔に配置されることから一連の遺構の可能性もある。

東側　礫49～52・102(図13・91・167、写真11・182)

[位置・確認] ⅠW-45から東へ延びる。礫49～52はⅢ層で検出した。

[重複・関連遺構]SK157の上に位置する。礫50の掘方と礫51・102の掘方が重複し、礫50の掘方が古い。

[掘方・構築方法] 標高23m付近で全ての礫を見通せる。礫51・102は西へ傾斜し、他は水平である。掘方はいずれもⅢ層を掘り込む。礫52の掘方は検出が困難である。礫51と102は同一の掘方で、礫50の掘方に切られる。一方で、礫51は礫50の掘方の上に構築される。このため、短期間に礫50・51・102を据えたと考えられる。

[使用石材] 礫の寸法は、30～40㎝、重量は７～15kgと大きさが揃っている。いずれもデイサイトの亜円礫～円礫である。礫49は、台石(図167-１)を転用している。礫50は意図的に打ち欠いており、礫52と102は節理で割れている。

[出土遺物] 礫49～51の下部に設定した掘方を含むトレンチから後期初頭新段階(弥栄平(２)式～小牧野３期)の土器(図91-10～14)が出土した。

[時期] 礫49～51の下部のトレンチから、後期初頭新段階の土器が出土したため、それ以降の構築の可能性がある。また、SB9よりも新しい可能性が高い。

西側　礫55・56・90・129・135～137(図14・167、写真11・12・182)

[位置・確認] IW-43から東へ延びる。Ⅲa層で検出した。

[重複・関連遺構] 礫90はSB9SP219の上に位置する。

[掘方・構築方法] 礫55・56・90・129は等間隔で弧状に並ぶ。いずれも掘方は、Ⅲa層に似るが、混入物の有無で区別できる。礫55・90は根入りが深い。礫55は掘方が浅く、礫129の掘方上端は近くの木根により、検出が困難である。礫129上面と礫55下面、礫55上面と礫90上面が同じレベルである。このため、４個見通せる状態にするには、凸凹に据える必要がある。礫135～137の検出レベルは、標高約22.9ｍで他の構成礫と一致するが、掘方は検出できなかった。このため、張出部２を構成するために集石した一部の可能性もある。

[使用石材] 寸法は礫55・56・90・129は、長軸27～32㎝、重量6.4～19.3kgと大きさは揃っている。礫135～137は、6.4～14.8㎝、重量は0.2～0.9kgである。

礫129は安山岩類で他はデイサイトを用いている。礫56は砥石(図167-３)、礫129は石皿(図167-４)、礫137(図167-２)・135は磨石が転用されている。礫55・129は板状の礫である。

張出部３

礫160から西へ延び、礫156まで続く。礫132・133は礫156から離れているため、張出部と認定しなかった。礫160・34、礫92～107、礫156に分けて下記で記載する。

礫34・160(図14・91、写真12)

[位置・確認] ⅠV-45グリッドに位置する。Ⅲ-１層で検出した。

[重複・関連遺構] 礫34はSP487の上に位置する。

[掘方・構築方法] 礫34の掘方は下部遺構を掘り込んでいる。礫160は当初、集石遺構として精査したが、同一母岩の破砕礫と判明し、張出部の線上に位置することから、単独の構成礫と考えた。

[使用石材] 礫34は、長軸31.7㎝の重量7.8kgで、礫160は、複数の破片から構成され、重量は合わせて1.7kgである。いずれもデイサイトで、礫34は意図的に打ち欠いた亜円礫である。

[出土遺物] 礫160の周辺のⅡ層から小牧野３期～十腰内Ⅰ式第１段階の土器(図91-15・16)が出土した。15は赤漆が塗布された鉢と思われる土器である。

礫92・105～107・120・139(図14・168、写真12・182)

[位置・確認] ⅠV-44グリッドから西へ延びる。Ⅲ-１層で検出した。

[重複・関連遺構] 礫105・106・120・139はSB10SP283の上、礫156はSI10の貼床の上、礫105・107はSI10のピットの上に位置する。礫139と礫105は掘方が接する。礫92の掘方と礫106の掘方が重複し、礫106の掘方が古い。

[掘方・構築方法] Ⅲ-１層を掘り込んで構築される。礫92・106～107は上端が概ね揃う。礫107・139は大きい礫を使用しており、根入りが深く、短辺が見えるように配置している。

[使用石材] 寸法は、礫92が最も大きく、長軸43.6㎝、重量14.1kgで、礫106・107・120・139は長軸22.7～32.5㎝、重量は12.1～18.9kgとサイズが似る。礫105は長軸15.5㎝、重量0.8kgと小型で、流紋岩の磨石(図168-１)を転用している。他の礫はデイサイトを使用している。礫120は打ち欠きの可能性がある。

礫156(図14・168、写真12)

[位置・確認] ⅠV-44グリッド、Ⅲ-１層で検出した。

[重複・関連遺構] SI10の貼床の上に位置する。

[掘方・構築方法] 掘方は、Ⅲ-１層を掘り込む。直下に根撹乱を含み、同標高の礫107などと比較すると上位で検出した。根撹乱が礫直下に入るが、掘方とⅢ-１層の層理面を検出できたため、大きく位置は動いていないと思われるが、上に移動している可能性はある。

[使用石材]長軸30.4㎝、重量7.7kgのデイサイトの台石(図168-２)を転用し、周囲を打ち欠いている。

３　主体部以外の単独構成礫

構成礫は、主体部構成礫より小型で、張出部のようにまとまりが見いだせない礫のなかで、基本的に掘方が確認できたものを認定した。第１号風倒木も本項で詳述する。

礫３(図15、写真12)

[位置・確認] IY-46グリッド、Ⅳ層で検出した。SQ３とSQ４の間、張出部１の延長で主体部より内側に位置する。張出部１から離れているため、別遺構と認識した。

[重複・関連遺構] SK110と重複し本遺構が新しい。

[掘方・構築方法] Ⅳ層を掘り込む浅い掘方を平面及び断面で検出した。堆積土は根が入り込み撹乱土にも似るが、礫の外周に沿って検出したため掘方と認識した。

[使用石材] 長軸28.2㎝、重量6.0kgの赤色で板状の亜円礫である。石材はデイサイトで、意図的な打ち欠きの可能性がある。

礫18(図15、写真12・13)

[位置・確認] ⅡB-47グリッド、Ⅳ層で検出した。SQ３の東側で環状列石の円環のライン状に位置する。礫が小型のため主体部には含めず構成礫と認定した。

[重複・関連遺構] SP380と重複し、本遺構が新しい。

[掘方・構築方法] Ⅳ層を掘り込む掘方を平面・断面で検出した。

[使用石材] 長軸26.5㎝、重量7.8kgの扁平円状の亜角礫で、石材は流紋岩である。

礫19・20・158(図15・写真13)

[位置・確認] ⅡB-48グリッド、Ⅲ層下位で検出した。礫21の東側で３個を近接して検出した。

[掘方・構築方法] いずれもⅣ層を掘り込む掘方を平面と断面で検出した。礫19と20は掘方の底面と礫の上面が揃うため、一連の構築が考えられる。礫158は上面から根撹乱が入り込み、残存状況が悪い。礫19・20より掘方と礫の底面が低い。同一の掘方から複数に割れて検出したため、凝灰岩製の台石を割って埋めた、もしくは撹乱により破砕したと考えられる。

[使用石材] 礫19は、長軸24.3㎝、重量3.4kgの円盤状の円礫で、石材はデイサイトである。礫20は長軸18.5㎝、重量2.8kgで、デイサイトの台石を転用している。礫158は撹乱で破損し、原形は不明であるものの、凝灰岩で扁平な使用痕が一部に確認できるため、台石を使用していた可能性がある。

［出土遺物］土器は礫19の掘方から総重量15.2g、礫20の掘方から総重量15.8gが出土したものの、時期がわかる個体は含まれなかった。

礫57・58(図15、写真13)

［位置・確認］ⅠY-43グリッド、Ⅲ-２層中で検出した。

［重複・関連遺構］礫58はSB13SP164・SP207と重複し本遺構が新しい。

［掘方・構築方法］Ⅲ-２層を掘り込む浅い掘方を平面と断面で検出した。礫58は北東側に向かい斜めに据えられる。

［使用石材］礫57は、長軸31.7㎝、重量10.1kgの円礫である。礫58は、長軸35.0㎝、重量8.3kgの赤褐色で台形の円礫である。石材はいずれもデイサイトである。

礫53・84・85・140・141(図15・168・170、写真13・14・182・183)

［位置・確認］ⅠX・Y-43・44グリッド、Ⅲ-１層中で検出した。張出部２の北側に位置する。礫140と141は近接する。

［重複・関連遺構］礫85と53の間にSN17が位置する。礫83は礫84の東側に位置するが、他の礫より上位のⅡ層中で検出したため構成外礫とした。

［掘方・構築方法］検出した掘方はいずれもⅢ-１層を掘り込む。礫85は掘方とⅢ層の層相が近似し、検出が困難のため、構成外礫の可能性もある。礫53と礫140・141は礫の上面が概ね揃う。礫140は深い掘方内に短辺を下に据えられる。礫84は、半割した同一礫で、礫53より少し上位で検出し、掘方は検出できなかった。だが、Ⅲ-２層中で検出したことや、半割した同一礫がまとまって出土した状況から構成礫と認定した。

［使用石材］礫53は、長軸31.3㎝、重量3.1kg、扁平なデイサイトである。礫84は、長軸14.8㎝、重量0.5kgで、軽石の台石(図168-３)を使用している。礫85は長軸17.0㎝、重量1.0kgの三角形の亜角礫のデイサイトである。礫140は、長軸26.4㎝、重量8.2kgで、安山岩の台石(図170-２)を転用している。礫141は、長軸18.2㎝、重量2.4kgで、流紋岩製の台石(図170-３)である。加熱による破損が認められ、破断面にも擦痕があることから、破損後も使用された石器が、環状列石の構成礫として転用されている。

礫63(図16、写真14)

［位置・確認］ⅡA-49グリッドに位置する。

［重複・関連遺構］SK163の上に位置する。

［掘方・構築方法］掘方は浅くしまりがなく、撹乱の可能性があるものの、礫に沿って層理面を検出した。掘方内に頂部を下に埋めている。

［使用石材］長軸21.0㎝、重量3.2gで、不定形の亜角礫のデイサイトを用い、意図的に周囲を打ち欠いている。

礫74(図16、写真14)

[位置・確認] ⅠU-49グリッドに位置する。

[重複・関連遺構] SP300の上に位置する。北側の主体部３より斜面下部に位置するものの、礫の下部の標高が22.6ｍと一致する。

[掘方・構築方法] 長辺を下に配置する。掘方の上端は確認できなかったが、Ⅳ層とは異なる堆積土を検出した。

[使用石材] 長軸30.2㎝、重量5.8kgで、板状の角礫のデイサイトを使用している。

礫80(図16、写真14)

[位置・確認] ⅡA-52グリッド、Ⅳ層で検出した。

[掘方・構築方法] Ⅳ層中に短辺を下に突き刺すように構築し、暗褐色の掘方を検出した。

[使用石材] 長軸20.3㎝、重量3.2kgで、板状のデイサイトの角礫を用いた台石を打ち欠いている。

礫87(図16・168、写真15)

[位置・確認] ⅠY-44グリッド、SP189の上位で検出した。

[重複・関連遺構] SB13SP189の上に位置する。

[掘方・構築方法] 小穴状の掘方に礫が斜めに立つように据えられる。

[使用石材] 長軸27.0㎝、重量4.8kgで、流紋岩の台石(図168-４)を転用している。

礫95(図16・169、写真15・182)

[位置・確認] ⅠV-45グリッド、Ⅲ-２層中で検出した。

[掘方・構築方法] 掘方は平面、断面で確認した。堀方は浅く、Ⅲ-２層と層相が似る。

[使用石材] 長軸19.0㎝、重量1.6kgで、流紋岩の砥石(図169-１)を転用している。

礫118(図16、写真15)

[位置・確認] ⅠV-44グリッド、Ⅲ-２層中で検出した。

[掘方・構築方法] 自然地形の南向き斜面と逆向きで据えられている。掘方は平面・断面で検出した。

[使用石材] 長軸36.3㎝、重量13.2kgで、不定形のデイサイトの亜角礫を使用している。

礫115・119(図16・169・170、写真15・183)

[位置・確認] ⅠU-43グリッド、Ⅲ-２層中で検出した。

[掘方・構築方法] いずれも長辺を下に、水平に据えられている。浅い掘方を平面・断面で検出した。

[使用石材] 礫115は、長軸31.6㎝、重量4.8kgで有溝でナツメ形の砥石(図169-２)を転用している。礫119は、長軸29.7㎝、重量2.2kgで凝灰岩の有縁の石皿(図170-１)を転用している。

礫122・138(図16、写真15)

[位置・確認] ⅠY-51グリッド、Ⅲ-１層中で検出した。

［重複・関連遺構］SK129の上に位置する。
［掘方・構築方法］礫122の堀方は下部遺構堆積土を掘り込む浅い掘方で、礫138は深い掘方で、互いの層相が近似していた。
［使用石材］礫122は、長軸17.3㎝、重量1.3kg、板状のデイサイトの角礫、礫138は長軸13.5㎝、重量0.7kg、板状のデイサイトの亜円礫の砥石を用いており、半分に折損している。

礫132・133(図16、写真15)
［位置・確認］ⅠV-43グリッド、Ⅲ-２層中で検出した。
［掘方・構築方法］いずれも板状礫を用い、礫132は立位、礫133は横位に据えられている。掘方内堆積土はいずれもⅢ-２層と近似していた。
［使用石材］礫132は、長軸22.9㎝、重量3.2kgで、デイサイトの板状の砥石を使用している。礫133は、長軸13.3㎝、重量0.4kgで、凝灰岩の扁平楕円形の磨石を転用している。

礫145(図16、写真15)
［位置・確認］ⅠV-46グリッド、Ⅲ-１層中で検出した。
［重複・関連遺構］SK141、SP190の上に位置する。
［使用石材］長軸28.7㎝、重量7.4㎝で、デイサイトの四角錘状の円礫を用いている。
［掘方・構築方法］深い掘方の上に立位で据えられている。

第１号風倒木(図17・171、写真16・183)
［位置・確認］ⅠY・ⅡA-49・50グリッド、Ⅳ層中に埋没する礫の一部とⅣ層の周囲にドーナツ状の黒色土が巡る状況を確認した。SK134の精査時には、遺構壁面に礫が突き刺さっている状態を検出した。
［重複・関連遺構］SK114・134の上に位置する。SR１が近接する。
［構造］９個の礫を検出し、風倒木中の礫の周囲に黒色土が検出できるため、掘方を伴っていた可能性がある。４個の巨礫は南北に弧状配置されていた可能性がある。
［使用石材］９点の礫のうち４点は主体部でみられるような巨礫で、Ｓ１は、長軸60.0㎝、重量59.0kgの不定形な亜角礫である。Ｓ４は長軸60.0㎝、重量42.0kgの扁平な亜角礫で、節理で割れている。Ｓ７は、長軸58.0㎝、重量67.5kgで、不定形な角礫である。Ｓ８は、長軸66.0㎝、重量61.0kgの不定形な亜角礫である。
　他の５個は比較的小型で、礫89はデイサイトの扁平円礫の台石(図171-１)を転用している。Ｓ２は板状の凝灰岩の亜円礫、Ｓ３は凝灰岩の三角形柱状の亜円礫で意図的に折損しており、Ｓ５はデイサイトの不定形な円礫、Ｓ６は球状の花崗閃緑斑岩の磨石を用いている。
　Ｓ１・４・７・８は石材分析(第４章９節)の対象とした。分析の結果いずれもタイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)、Ｓ１・７は安山岩を使用していることが分かった。
［小結］主体部構成礫と同規模、同石材の礫がまとまって出土した。配置が環状列石の円環のライン状に近いことから、主体部もしくは配石遺構が風倒木によって撹乱を受けた可能性がある。また、SR１が配石等に付随する遺構であった可能性がある。

第３項　配石遺構

第１号配石遺構(図19、写真16)

[位置・確認] ⅠN-43グリッド、Ⅲ層中で検出した。SI13とSK50の間に位置する。

[掘方・構築方法] Ⅲ層中に板状の礫２個を平面でハの字状に立てている。掘方は東側の礫では平面でも検出でき、黒褐色土中に黒色土の堆積土が確認できた。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 周辺の遺構から、後期初頭～前葉の可能性がある。　(長谷川)

第２号配石遺構(図19、写真16)

[位置・確認] 調査区中央西側の平場、ⅠX-45グリッドに位置している。環状列石周辺の土層観察用トレンチ上で、小礫の集積として確認した。

[重複] 本遺構精査後にSP216(後期初頭新段階)・324・326を検出している。

[掘方・構築方法] 遺構西側はトレンチで欠失している。土坑状の掘方に小礫17個が密集して置かれている。礫の最上部は標高22.9mである。掘方の平面形状は楕円形と推測され、底面は平坦で壁は外傾して立ち上がる。平面規模は検出面で84×(23)cmで、深さは14cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、人為堆積と考えられる。

[使用石材] 小礫はすべて自然礫で、角が取れた円形・楕円形のものが多い(写真16)。石材は鉄石英や珪質頁岩が多いと思われるが、石質鑑定を行っていないため詳細は不明である。

[出土遺物] 礫以外の遺物は出土していない。

[小結] 遺構の重複関係から後期初頭新段階以降で、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の環状列石構成礫の標高に近いことから、関連する遺構の可能性が高い。　(折登)

第３号配石遺構(図20・21・92～95・171・197、写真17～23・149・150・183・192)

本遺構は、環状列石主体部構成礫(礫15～17)、環状配石等の礫(礫１・４～17・130・131・159)、埋設土器３基(SR１～３)から構成される。環状配石は構築順序などから、北側(礫１・４)、北西側(礫５～８・14・130)、南東側(礫９・11・12・159)に分類できる。環状配石内には埋設土器(SR２・３)、石棒(礫10)が配置される。下記で、(１)遺構の概要、(２)環状列石主体部構成礫、(３)環状配石等の礫、(４)その他礫、(５)土器埋設遺構等の順で詳述する。

(１)遺構の概要

[位置・確認] 調査区の北側の平場、ⅡA・B-47グリッドに位置している。表土除去直後に礫15などの巨礫や礫４・５などの配石遺構を検出した。下部の遺構は、本遺構の精査段階では検出できておらず、精査完了後に遺構プランを検出した。精査時は、遺構下部の層相が一様でないため、遺構が風倒木痕や旧表土としての構築土(Ⅲ層やⅣ層相当)の上に構築された可能性を想定していた。

[重複] SK79・112・117・119・121、SP374・393の上に構築され、本遺構が最も新しい。SB28が近接する。調査時の所見や整理における遺物の接合状況などを検討し、本遺構の構築開始から完了までの構築順序を表２に整理した。詳細な重複状況は下記の個別遺構で記載した。

個々の配石や土器埋設遺構の重複関係を参考に、構成要素をまとめて前後関係を整理すると、形成過程は７段階に分類できる。各段階の変遷図は第５章第１節で詳述した。変遷は、①SR１→②環状配石南東側→③SR２設置→④SR３設置・環状配石北西側→⑤石棒(礫10)等によるSR２倒壊→⑥環状列石主体部・環状配石北側→⑦壺(図94-１)投棄の順序が推定できる。壺(図94-１)は複数段階にみられるが破片の大部分は⑦で出土した。後述するように、SR２や壺の破片が礫の下端にかかるように出土した例があるため、これらの破損時、礫は全体が露出した状態のものが多かったと考えられる。

[出土遺物] 土器は、土器埋設遺構を除き総重量11,226gが出土した。礫の掘方や土器埋設遺構から出土した遺物は各項で記載し、ここでは、本遺構の構築土から出土した遺物について記載する。構築土は、本遺構構築時に堆積していた土で、下部遺構堆積土の遺物、構築前に混入した遺物(遺構外)も含む可能性がある。

土器は、SQ３北東側からまとまって出土した(図93-２、95-５～７・11)。検出レベルは礫１・７の下面と同じである。図95-７は浅鉢と思われ、ほかは深鉢である。図93-２・95-５～７は口縁部・胴部片で長楕円文などの沈線文が施文され、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)に位置づけられる。図93-２は小牧野３期の可能性もある。図93-２は同一個体がSR２の掘方内の胴部下位と同レベルと、礫６下位から出土したことから、図93-２とSR２設置が同時期で、礫６より古い可能性がある。他にも同時期の破片(図95-３・４・８～10・13・14)を図示した。図95-４と８は同一個体の可能性があり、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の深鉢である。

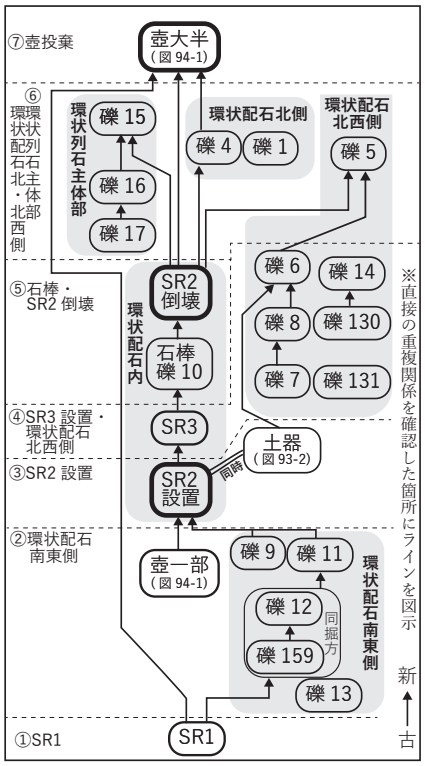


表２　SQ３　重複関係表

石器は、構築土から石鏃１点(図171-３)が出土し、珪質頁岩製で有茎である。他に、玉髄質珪質頁岩製の両極剥片１点、玉髄質珪質頁岩製の剥片13点が出土した。土製品は土器片利用土製品が１点(図197-１)出土し、単軸絡条体第５類が施文される後期前半の個体を使用している。

[小結] SR１～３、上から散布された壺(図94-１)の時期から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の構築である。配石、埋設土器、壺の散布、主体部礫設置が複数段階で行われる。SR２や壺の破損時に礫は多くが露出していた。その間、堆積土がほとんど形成されておらず、短期間で行われたと考えられる。

(２)環状列石主体部構成礫

礫15～17(図20・21・95、写真20・21)

[位置・確認] SQ３の南側に位置する。

[重複] ３つの礫は重複しており、礫17→礫16→礫15の順に新しい。礫15の掘方からSR２と同一個体の土器(図95-２)が出土し、SR２の倒壊後に配置されたと考えられる(SR２倒壊→礫15)。

[掘方・構築方法] いずれも下部遺構堆積土やⅣ層を掘り込む掘方を検出した。礫15は直下に木根が

入るものの、巨礫のため原位置を保つと思われる。南東斜面の地形に沿って少し斜めに据えられている。礫16・17は間に木根が入るため、いずれも姿勢は動いている。一方で下部に掘方の黒褐色粘土質シルトが確認でき、平面的な位置は大きく動いていないと推定できる。

[使用石材] 礫15は、長軸が102㎝で103.5kgと大型で、各面が平坦な柱状の亜角礫で、断面は三角形基調である。礫16は長軸50㎝で19.5kgで、柱状の亜円礫である。礫17は、長軸26.0㎝、7.5kgと小型で三角形の板状の円礫で、礫11と形態が似る。

石材は、礫15・16を石材分析の対象とし、礫15はタイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)の安山岩、礫16は分析対象で唯一のタイプB(恐山火山の障子山溶岩)のデイサイトを使用していることがわかった(第４章第９節)。礫17は肉眼鑑定でデイサイトと判断された。

[出土遺物] 土器は、礫15の掘方から総重量242.9gが出土した。このうち、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の２点を図示した(図95-１・２)。１は深鉢の口縁部片で、横位の沈線文が施文される。２は壺の口縁部でSR２(図93-１)の同一個体の可能性があるが、本体に接合しない。石器は礫15の掘方から石皿の破片が出土した。

[小結] 出土土器から後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の配置である。

(３)環状配石等の礫

ア　環状配石北側の礫

礫１(図20・21、写真20・21)

[位置・確認] SQ３の北側に位置し、礫15～17の対の位置にある。

[重複・関連遺構] 礫１下端レベルで、礫に近接して壺(図94-１)が出土した。礫１が下端まで露出した状況で壺が投棄された可能性が想定できるため重複関係は示さない。

[掘方・構築方法] 円環の内側へ向く斜面の地形に沿って、下部遺構の堆積土を掘って配置している。掘方は暗褐色粘土質シルトである。検出面からの掘方の深さは礫９と同様である。短軸を内側に向け配置する。

[使用石材] 長軸43㎝で16.0kgの短冊状の亜角礫である。長軸両端の欠損部は意図的な打ち欠きの可能性がある。石材分析の結果、タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)を使用していることがわかった(第４章第９節)。

[出土遺物] 掘方から台石・砥石の破片が出土した。

礫４(図20・21、写真21～22)

[位置・確認] SQ３の北東側、礫１と礫10の間、礫９の対に位置する。

[重複] 礫４の直上に壺(図94-１)が乗る(礫４→壺(図94-１))。礫４の直下からSR２(図93-１)の大型の胴部下位の破片が崩れたままの位置を保って出土したことから、SR２の倒壊直後に礫４が配置されたと考えられる(SR２倒壊→礫４)。

[掘方・構築方法] 掘方はない。SR２の直上に、覆いかぶさるように北西に向かって斜めに配置される。検出面は環状配石の中で最も高く、最終段階の配置が考えられる。

[使用石材] デイサイトで、長軸59㎝、9.9kgの板状の亜角礫を使用している。

イ　環状配石北西側の礫

礫５・６・８(図20・21、写真20)

[重複] 礫６・８が礫７の上に乗り、礫５・６が礫８の上に乗り、礫６にもたれかかるように礫５が配置される(礫７→礫８→礫６→礫５)。礫５下面にSR２の同一個体の土器が付着し、礫とSR２本体の間からもSR２の同一個体片が多く出土したため、礫５はSR２倒壊直後に設置された可能性がある(SR２倒壊→礫５)。土器(図93-２)がSR２の掘方内の胴部下半と同レベルと礫６の下部から出土したため、土器(図93-２)とSR２設置は同時で、礫６より古い(土器(図93-２)・SR２設置→礫６)。礫７・８とSR２の前後関係は、礫６～８の配石が近接すること、土器（図93-２）などの土器が同レベルで礫より下位から出土したことから、SR２設置より新しい一連の配石と考えた。以上から、SR２設置・土器(図93-２)→礫７→礫８→礫６→SR２倒壊→礫５の順に新しい。

[掘方・構築方法] いずれも掘方を確認できた。礫６は断面で、黒褐色シルト質粘土の掘方を確認した。礫５は、他より深い黒色粘土質シルトの掘方を平面でも確認できた。礫５の掘方は礫８の掘方を掘り込む。礫８は断面で掘方を確認し、礫６と同様の層相である。据え方は、礫８が南東向きの斜辺地形と逆に傾き、礫６は地形に沿い、礫５は深い掘方に立てるように据えている。礫は近接しており、短期間にまとめて据えたと思われる。

[使用石材] 礫５は不定形の亜角礫、礫６は扁平円形の角礫で、大きさが近似したデイサイトである。礫８は少し大型で板状の亜角礫でデイサイトを使用している。

[出土遺物] 礫６の下から被熱した頁岩製の礫(S-２)が出土した。

礫７(図20・21、写真20)

[重複・関連遺構] 礫６と接し、礫８が上に乗るため、両者より古い(礫７→礫８→礫６)。

[掘方・構築方法] 掘方は、混入物のない黒褐色粘土質シルトを平面でも検出した。直下に木根が入るものの、原位置を保つ。

[使用石材] 長軸が59.0㎝、46kgの大型の扁平な亜角礫で、周囲を打ち欠いている。石材分析の結果、タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)を使用していることがわかった(第４章第９節)。

礫14・130・131(図20・21・171、写真20・183)

[重複・関連遺構] 礫14が礫130の上に乗り、礫130と礫７は近接するが重複していない(礫14→礫130)。

[掘方・構築方法] 礫14は掘方がなく、小型の礫で下部に木根撹乱が入るが、原位置を保つ可能性がある。礫130は、礫７より下位で、掘方は平面でも確認した。礫131は掘方がなく小型のため下部遺構に伴う礫で、SQ３構成外礫の可能性もある。

[使用石材] 礫14はデイサイトで板状礫の亜角礫である。礫130は流紋岩の砥石(図171-３)を使用しており、使用面を下に向けた状態で出土した。礫131はデイサイトの亜円礫である。

ウ　環状配石南東側の礫

礫９(図20・21、写真20～23)

[位置・確認] SQ３の南東側、礫４の対に位置する。

[重複] SR２と壺(図94-１)が上に乗る(礫９→SR２設置→壺(図94-１))。

[掘方・構築方法] 掘方は下部遺構堆積土を掘り込む。断面のみで確認した。円環の内側に向かう斜面地形を掘り込んで底面と上面が水平になるように据えている。礫のレベルは礫11や12と近似する。

[使用石材] デイサイトで、長軸32.3cm、9.2kgの小型で板状の亜円礫を使用している。

礫11(図20・21、写真21)

[位置・確認] 礫５の対に位置する。

[重複] 掘方が礫12・159の掘方と重複し、礫11が新しい(礫12・159→礫11)。SR２の多くの破片が上に乗る(礫11→SR２設置)。一方で、SR２破片は礫11下位の掘方内からも出土した。SR２破片は礫11直下からは出土しておらず、礫11の下位まで露出した状態でSR２が破損したと考えれば、破片が下部にかかるように落ち込んだ可能性を想定でき、明確に新旧は示さないと考える。

[掘方・構築方法] 掘方は暗褐色粘土質シルトで、平面でも確認できる。礫の頂部を掘方内に据え、平坦面を上にしている。礫のレベルは礫159より上位で礫12と同じである。

[使用石材]長軸30.６ｃｍ、6.5kgで、板状三角形の円礫のデイサイトを使用している。上面が被熱し、南東側の頂部が打ち欠きで欠損する。礫17と形状が近似する。礫11・12・159は岩相が似る。

[出土遺物] 土器は、掘方から総重量86.2gが出土し、時期などがわかる個体は含まれなかった。

礫12・159(図20・21、写真21)

[位置・確認] SQ３の西側、礫15の対に位置する。礫159は他の礫より検出面が低く、土器や堆積土で精査当初は見えていなかった。

[重複] 同一の掘方に据えられる。礫159の上に礫12が乗る(礫159→礫12)。本掘方が礫11掘方と重複し、本遺構の方が古い(礫159・12→礫11)。掘方からSR１の破片が出土し、本遺構の方が新しい(SR１→礫159・12)。壺(図94-１)の破片が礫12の西側の掘方から出土した。わずかな重複であるため、礫12の全体が露出した状態で壺が散布されて入り込んだ可能性を想定でき、明確に新旧は示さないと考えられる。

[掘方・構築方法] 同一の掘方に礫12と159が配置される。礫12は斜めに159の上に乗るものの、直下に撹乱が入るため、姿勢は原位置を保たない可能性がある。礫159は上面を平坦面に掘方内に水平に据えられている。

[使用石材] いずれもデイサイトで、礫12は長軸32.0cm、9.2kgで、被熱した短冊状の亜円礫である。礫159は長軸27.0cm、4.8kgで、板状の亜円礫で、３箇所を意図的に折損されている。礫11・12・159は岩相が似る。

[出土遺物] 土器が、礫12・159の掘方から総重量65.8gが出土した。このうち時期などが明らかな個体は出土しなかった。

礫13(図20・21)

[確認] 他の礫より検出面が高く、下部に木根撹乱が入るため、原位置を保っていないと判断した。

[使用石材] 台石・砥石の破片で被熱痕跡があり、円礫を意図的に折損した可能性がある。

エ　環状配石内の石棒　礫10(図20・21・203・写真20～22・195)

[位置・確認] SR２・３の内側、礫４と礫９の間に位置する。

[重複] SR２・３より新しい(SR２・３→礫10)。礫10によりSR２が破損した可能性がある(SR２設置→礫10→SR２倒壊)。

[掘方・構築方法] 掘方はない。環状列石の内側に先端を向けて倒れており、SR２の破片も同じ方向に延び、断面では図210右下-00'の３・４層が土器とともに同方向へ傾斜していることが確認できる。このため、SR２の南東方向は礫10により倒壊した可能性がある。礫10は、直下から出土したSR３の上に立てていた可能性も想定できる。

[使用石材] デイサイト製の石棒(図203-１)で、三角柱状の自然礫を打ち欠いて折損させた礫を使用している。擦痕がわずかに側面に確認できる。西側側面に被熱痕跡がある。

(４)土器埋設遺構等

第３号配石遺構内　第１号土器埋設遺構(図20・21・92・94、写真21・149・150)

[確認] SQ３の北西側、礫１と礫４の間から壺(図94-１)を取り外した後に検出した。検出面(胴部最大径付近)は、環状配石の構成礫の下面と概ね同じである。

[重複・関連遺構] 壺(図94-１)が上に乗る(SR１→壺(図94-１))。礫12・159の掘方から本遺構の同一個体の破片が出土した(SR１→礫12・159)。

[構造] 掘方は下部のSK121の堆積土を検出面から38㎝ほど掘り込む。平面でも確認でき、平面形は60㎝×50㎝の不整形で、掘方の中心に土器が埋設される。正立の壺(図92-１)の胴部最大径より下半部が埋設され、土器の姿勢はほぼ水平で若干北側に傾く。土器の上半は壊れた状態で出土し、破片は土器内からまとまって出土したため、胴部上半より上は露出していた可能性がある。埋設後に、上から壺(図94-１)が投棄されたことにより、上半が破損した可能性がある。

[堆積土] 掘方は下部遺構の堆積土を掘り込む暗褐色粘土で、周囲と色調で区別できる。土器内の堆積土は暗褐色土とにぶい黄褐色土である。墓の可能性を検討するために、土器内堆積土１層と２層の土壌のリン・カルシウム分析を行った。１層の試料からリンとカルシウムが明らかに多い箇所が検出され、歯や骨に由来する可能性が高いとされた(第４章第２節)。

[出土遺物] 土器は、総重量8,192.2gが出土した。このうち、埋設土器１点(図92-１)を図示した。１は後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の壺で、肩～底部が残存し、頸部は穿孔が僅かに確認でき、胴部は隆帯で上下に区画され、上部は長楕円形・円形による区画内にS字状入組文が２帯５単位で施文される。沈線間に赤色の化粧土が塗布されており、焼成時に何かが接触したとみられる部分では、剥落や文様外への流出がみられる。

[時期] 埋設土器の時期から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の構築と考えられる。

第３号配石遺構内　第２号土器埋設遺構(図20・21・93・94・203、写真21～23・149・150・195)

[確認] 環状配石内に構築され、土器は北西から南東に広がって出土した。

[重複] 環状配石内では、直上にSR３が入れ子状態で重複し、上に礫10が乗る(SR２設置→SR３→礫10)。

環状配石北側とは、SR２の倒壊後の胴部下半の破片(外面が上)の上に礫４が乗る(SR２倒壊→礫４)。

環状配石北東側とは、礫５直下にSR２の土器が付着し、礫とSR２の間からSR２と同一個体の破片が出土したため、SR２倒壊後に礫を配置したと思われる(SR２倒壊→礫５)。SR２掘方内の胴部下半と同レベルから出土した土器(図93-２)が礫６下部からも出土した(図93-２・SR２設置→礫６)。

環状配石南東側とは、礫９・11・159にSR２の土器が乗る(礫９・11・159→SR２)。一方で、礫11の底面より下部の掘方内からも同一個体が出土した。だが、掘方との重複はわずかで、礫11全体が露出した状態で、破損時の破片が入り込んだ可能性が考えられる。

環状配石主体部とは礫15掘方から倒壊後に伴う本遺構の同一個体の破片(図95-２)が出土した(SR２倒壊→礫15)

壺(図94-１)とは、本遺構や、礫４の上に多く乗る。一方で、掘方(図21-00’３・４層)や南東側から本遺構の破片に混じって一部が出土した。このため、本遺構の埋設前と埋設後に投棄され混入したと考えられる。

以上から、環状配石南西側(礫９・11・159)・壺の一部(図94-１)→SR２設置→環状配石北西側(礫６～８・14・130)→SR３→礫10→SR２倒壊→礫５→環状列石主体部(礫15)→環状配石北側(礫４)→壺の大半(図94-１)の順に新しい。

[掘方・構築方法] 掘方は、礫10下面から12cmほど掘り込む。正位に壺(図93-１)が埋設され、北西側は原位置を保つ。南東側は、礫10に沿って土器が倒れており、掘方堆積土も一緒に土器に沿って倒れている。このため、南西側は礫10が立位でSR3の上に配置され、それが倒れた衝撃で壊れた可能性がある。北西側は、図21-00’５層の上に外面を上に胴部下半が滑り落ち、直上に礫４が乗る様相のため、北西側は内側からの衝撃により壊れた可能性がある。また、５層は倒壊時には堆積しており、SR２は胴部下半が10cmほど地中に埋設されていたと言える。胴部上半より上の部位が出土していないことから、あらかじめ打ち欠いた土器を埋設していた可能性がある。SR２とSR３の間には堆積土があり、意図的に埋めてからSR３を配置したか、堆積までの時間差が想定できる。

[堆積土] 掘方は、暗褐色～にぶい黄褐色粘土質シルトで、礫10により動いたため、周囲の堆積土と混ざった部分がある。土器内堆積土は黒褐色粘土質シルトが主体で、周囲と色調などで区別できる。墓の可能性を検討するために、土器内堆積土２層の土壌のリン・カルシウム分析を行った。いずれもリンが１％を超える箇所は検出されなかった(第４章第２節参照)。

[出土遺物] 土器は総重量5,373.7gが出土した。このうち、２点を図示した(図93-１・２)。１は埋設土器で、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の壺で、胴～底部が残存する。底部は円形に欠損するため、打ち欠きの可能性があるものの、明確な痕跡は確認できなかった。胴部上半は長楕円形文が縦位・横位に５単位施文され、下部に隆帯文で無文部と区画される。２は、前述のとおり、SR２内と礫６下部などから出土し、後期初頭新段階(小牧野３期)～前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の深鉢の胴部片である。

[小結] 後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の遺構である。環状配石の内部に埋設され、SR３と入れ子状で、礫10によって破壊される。

第３号配石遺構内　第３号土器埋設遺構(図20・21・93、写真22・23・149)

［確認］SR２の掘方を断ち割り、側面を精査する段階で間層を挟んで入れ子状に埋設(配置)されていたことを確認し、埋設土器として認定した。

［重複］SR２と礫10の間に位置する(SR２設置→SR３→礫10)。

［掘方・構築方法］掘方はなく、SR２底面から20㎝程上位(図21右下-00’断面の２層)に位置する。このため、SR２の土器内を土で埋めてから配置した、もしくは堆積が進んだ後の設置が想定できる。礫10の下面からは、0-0’断面での１層を挟んで５㎝ほど下部に位置する。正位ではなく、胴部の大型破片２点が入れ子状に埋設される。底部は東側の礫159付近から出土した。出土状況からSR２の埋設後、上位にSR３の胴部片２つを敷き、上に礫10を配置したと思われる。ここから、SR３はあらかじめ打ち欠いた破片を、礫10の台座のようにSR２の内側に敷いた可能性がある。

［堆積土］土器と礫10の間の１層は、黒褐色シルトで、しまりが弱い等で２層以下と区別できる。

［出土遺物］土器は、総重量502.7gが出土した。埋設土器１点を図示した(図93-３)。３は、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の浅鉢で、胴部以下が残存する。胴部は３本組沈線の弧状文が施文され底部には笹の木葉痕がある。

［時期］後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の構築である。

壺(図94-１)(図20・21・94、写真19・150)

［確認］SQ３の環状配石から北西側の広範囲に広がって出土した。環状配石礫の外形を概ね検出した段階で多くを検出した。

［重複］破片が環状配石の礫やSR１・２の上から出土したため、SQ３の最終段階で投棄されている。土器の部位の位置を保って出土しなかったため、ある程度の大きさの破片の状態で投棄した可能性が高い。

一方で、SR２の掘方(図21右下-00’断面での３・４層)、南東のSR２破片群の中、礫12・159の掘方(図20-LL’の３層)、SP374堆積土から数片ずつ出土した。SP374堆積土の土器は、ごく小破片で本体と接合しないため混入の可能性が高い。礫12とは、わずかな重複であるため、礫12の全体が露出した状態で壺が散布されたため入り込んだ可能性を想定でき、明確に新旧は示さないと考えられる。

前述の前後関係と逆転する出土状況であるため、土器の散布が複数回にわたると考えられるものの、大半はSQ３の最終段階で投棄されたと考えられる。複数回投棄されたことにより土器は大きく２つに分かれて、欠損部が多い可能性がある。

［土器］壺で、口縁～底部が残存し、胴部に赤色化粧土が塗布される。口縁部から胴部と胴部から底部で大きく２つに分かれ、接点はわずかである。口縁部は小波状口縁で、口縁～肩部にかけて刺突が施文される隆帯が付く。頸部には隆帯付の橋状取手がつき、取手直下に穿孔がある。胴部は最大径下部で隆帯で区画され、上部には長楕円形や円形文の内側に入組文が配置される。これらの特徴から後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)に位置づけられる。

［小結］後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の中で、複数回にわたり投棄された。　(長谷川)

第４号配石遺構(図22・95・96・171、写真24～26・150・183)

本遺構は、土器埋設遺構１基と大型の主体部構成礫(礫45・46)、小型の礫(礫43・44・47・134・155)で構成される遺構である。下記では、(１)概要、(２)環状列石主体部構成礫、(３)その他の礫、(４)土器埋設遺構の順で詳述する。

(１)遺構の概要

[位置・確認] 調査区中央西側の緩斜面上、ⅠY-45・46に位置している。Ⅲ層上で巨礫・土器の集中として確認した。大型の礫46と同様の掘方内に礫45が、周辺に礫43・44・47が配置され、約50cm南西側に大型の礫42が配置されている。

[重複] 重複遺構はない。木根が遺構下部にも到達しており(写真25中段)、遺構の一部を壊している。また、一部の土層はトレンチで欠失している。

[出土遺物] 土器は埋設土器(SQ4SR1:図96-1)や、その周辺に廃棄された土器片(図95-16・17)を合わせ、合計7,035.0gが出土した。精査時は埋設土器の同一個体が周辺に散在していると判断していたが、別個体が混在して廃棄されていた(図22左上・中段)。また、礫46掘方内から336.7g出土しており(図95-15)、このうち１点は埋設土器の把手部分で接合した(写真26左上)。

[小結] 次項(２)～(４)で詳述するが、土器埋設遺構は文様等から後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)に属する。礫44・47は土器埋設遺構と同じ掘方内の上部に設置されている可能性が高い。大型礫46の下部からは埋設土器の同一個体が出土しており、礫45は礫46と同一の掘方内に設置されている。よって、土器埋設遺構→礫45・46の前後関係はあるものの、第３号配石遺構と同様短期間に構築されたと考えられる。埋設土器の特徴がよく類似することから、第３号配石遺構とは近い時期であると推測される。リン・カルシウム分析の結果としては含有値は低いが、埋設土器は大型の壺であり、葬送に関する遺構の可能性が想定される。

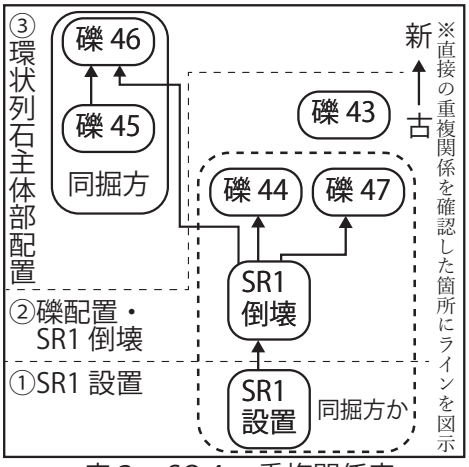


表３　SQ４　重複関係表

(２)環状列石主体部構成礫　礫45・46・134・155(図22・95・335、写真24～26・171)

[重複] 巨礫45は46が被さるように配置されており(写真25右下)、掘方の掘削→礫45→礫46の順に構築したとみられる。礫134・155は掘方内から出土した礫石器である(図171-4・5)。埋設土器の壺(図96-1)の頸部に付されている橋状把手のうち１点が礫46下部から出土しており(写真26左上)、SQ4SR１→礫46の構築順序が把握される。礫46の設置時にはすでに埋設土器の一部が壊れていたか、もしくは壺の上部に礫46が配置されたことにより、胴部破片の一部が正立で刺さり一部が壊れて周辺に散った可能性が挙げられる。

[掘方・構築方法] 礫45と46は同一の掘方内に構築される。礫45・46の掘方は東側を欠失しているが検出面で(65)×70cmの楕円形で、深さは29cmである。礫46は西側の列石内側を向くように傾いており、礫45・46のトップは標高23.6m前後、下部は23.3m前後と差がある。掘方内堆積土は暗褐色土である。

［使用石材］礫45は長軸34.3cm、重量11.2kg、赤褐色の楕円形の円礫で、石材は安山岩である。礫46は、長軸67.0cm、重量69.0kgで、断面は三角形基調で扁平な角礫である。礫46は、石材同定の結果、タイプA(恐山火山の釜臥山溶岩)の安山岩を使用していることが明らかとなった(第４章第９節)。
［出土遺物］礫46の掘方からは土器336.7gが出土した。礫46直下では、SR１と同一個体で接合した把手、土器の無文の底部(図95-15)、メノウ製磨石の礫134(図171-５)、デイサイト製磨石の礫155(図171-4)が置かれていた(写真26左上)。遺構外の出土遺物として扱っているが、礫45と42の間から土偶(図335-１)が出土した。
［時期］礫46の下部から後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)のSR１の同一個体が出土していることから、SQ4SR１の設置→近い時期に礫46、及び同一掘方内の礫45を設置したと考えられる。

（３）その他の礫　礫43・44・47(図22、写真24・25)
［重複］礫44・47や周辺の土器破片(図22左上)を取り上げた後にSQ４SR１の埋設土器及び掘方を確認しており(図22左下)、後述するがSR１→礫44・47の順に同じ掘方内に配置されたとみられる。
［掘方・構築方法］礫44・47共にSR１の掘方プランに近接して配置されている。土器片が密集しており平面形では確認できなかったが、礫44・47共に断面では掘方内に配置されていることが確認でき(図22右)、礫個別の掘方ではなくSR１と一連の掘方内に構築された可能性が高い。特に礫44は埋設土器と同一個体の破片と近接し、正立状態で配置されている(図22中段)。礫44は標高23.5m前後、礫47はやや高く標高23.55m前後で上部が確認できる。
　礫43は精査開始時にすでに浮いた状態で(写真24下)、掘方等は確認できず取り上げたが、礫44・47と同規模であり共に配置されていた可能性もある。
　土器埋設遺構の掘方と一連の可能性があるが、礫44掘方内堆積土は暗褐色土、礫47掘方内堆積土は黒褐色土、土器破片周辺の堆積土は黒褐色土主体である。
［使用石材］礫43は長軸26.5cm、重量4.6kgのデイサイトの自然礫である。礫44は、長軸19.3cm、重量3.2kgの安山岩製の台石破片である。礫47は、長軸24.5cm、重量4.1kgの安山岩の自然礫である。
［時期］礫44・47共にSR１と同一掘方内の上部に構築されている可能性が高く、SR１設置後近い時期に配置されたとみられる。礫43は伴う可能性があるものの調査では確定できなかった。

（４）土器埋設遺構（SQ４-SR１）(図22・95・96、写真24・25・150)
［確認］上述したように、礫44・47周辺では礫と土器破片が密集していた。精査開始時は破片・礫が密で方向等に規則性がなく、掘方等は確認できなかったため(写真24下)、土器片の集中部とも思われた。規則性のない土器の破片を取り上げつつ精査を進めたところ(図22左側)、標高23.3m付近で土器埋設遺構の掘方と正立で埋設された埋設土器を確認できた。
［重複］上記(２)(３)で記載した。
［掘方・構築方法］埋設土器は胴部下半の無文部のみが正立で埋設されており、側縁には二重に埋設されるように一部の破片が立った状態で刺さっており、その上部には同一個体の口縁部～胴部上半の破片が不規則に密集した状態であった(写真24下)。接合の結果ほぼすべてが同一個体であったが(図96-１)、わずかに別個体の破片が共に出土している(図22・図95)。

掘方は検出面では42×40cmの円形、深さは24cmである。上述のように土器が出土し始めた面では破片が密集しており掘方の検出が困難であり、礫44・47は共に断面で掘方が確認でき一連のものと思われるため、掘方は確認された規模よりもやや大型で深い可能性がある。

［堆積土］掘方内堆積土は暗褐色土・褐色土、埋設土器内堆積土は褐色土である。遺構の性質及び遺物を包含することやロームブロックが混じることから人為堆積とみられる。

リン・カルシウム分析を土器内堆積土(図22-H-H'断面１層)で実施した(第４章第２節)。その結果、リンが１％を超えるような箇所は検出されなかった。サンプリングは慎重に行ったものの、土器内堆積土にも撹乱が多く及ぶため、サンプリング試料に撹乱土が混在した可能性もある。

［出土遺物］埋設土器(図96-１:総重量5772.0g)の壺は、長楕円形の沈線を組み合わせ菱形状のモチーフが描かれ、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)に属する。現状では赤色は薄くなっているが光沢があり、沈線の外側は赤化粧土を塗布していたとみられる。残存部は少ないが口縁部は小波状であると思われ、頸部の橋状把手の直下には円形の透かし孔をもつ等、第３号配石遺構内の壺(図94-１)と同様の特徴的な作りである。輪積痕で水平に割れている部分が数段確認されており、特に肩部では故意に打ち欠いた可能性もある(第５章第３節)。

埋設土器と別個体の破片(総重量1263.0g)は２点(図95-16・17)を図示した。16は、充填縄文後に沈線が再描出され、後期初頭新段階(小牧野３期)に属する。掘方からやや離れて出土しており混在した可能性がある。17は、口縁部に長楕円形の沈線文、胴部に単軸絡条体第５類が施されており、埋設土器と時期とみられる。深鉢の大型破片であり埋設土器と共に設置された可能性が高い(図22左側)。

［小結］埋設土器から後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の構築である。　(折登)

第３節　竪穴建物跡

第１号竪穴建物跡(図23～24・97・171、写真27・150・151・183・246)

[位置・確認] ＩＹ～ⅡA-52～54グリッドに位置する。撹乱土を除去した際、Ⅳ～Ⅴ層間に形成された床面と壁の立ち上がりを確認した。

[重複] ST１の形成過程で構築され、SK57、SP13・14・20・26と重複する。新旧関係はSK57より新しく、SP13・14・20・26とは不明である。また、撹乱によって中央部の堆積土と床面を失っている。

[構造] 平面形状は不整な円形で、主軸方位はＮ-80° -Wをとる。開口部6.37ｍ×6.03ｍ、深さ86㎝、床面積は26.25㎡である。壁は、Ⅲ～Ⅳ層内に若干外傾して構築される。床面は、Ⅳ層下位～Ⅴ層上面に若干の起伏をもって形成され、全体で約４° 東に傾斜する。炉跡は、床面中央から南寄りの位置で１基検出し、平面規模68×50㎝の地床炉である。ピットは32基検出した。開口部径11～61㎝、深さ８～63㎝で柱痕は検出できず、主柱構成については不明である。

[堆積土] ２層以下は板状、塊状の地山土が多く混入し、人為的な埋め戻し土であると考えられる。

[出土遺物] 炉、Pit13、その他の堆積土から、弥栄平(２)式～小牧野３期に相当する土器(図97-１～４)が計9,933.2g出土した。石器は、堆積土から石鏃(図171-６)１点、両極剥片(図171-７)４点、磨石（図171-８）１点のほか、スクレイパー１点、剥片25点、球状礫３点、台石・砥石片２点と、扁平円礫が２点(写真246-１・２)出土した。

[時期] Pit13の出土土器から、後期初頭新段階の弥栄平(２)～小牧野３期と考えられる。　　(秦)

第２号竪穴建物跡(図25～27・98・99・172・194、写真28・29・151・183・190)

[位置・確認] 調査区中央東側の緩斜面上、ＩT-52及びＩU・V-52・53グリッドに位置している。調査区東壁の先行トレンチで遺物の集中と遺構の立ち上がりを確認したため、ST１上にベルトを設定して掘り下げたところ、床面直上遺物及び炉・ピットを確認し建物跡と認定した。

[重複] 炉の火床面、硬化面を除去したところでSK67・68を検出したことから本遺構が新しく、SK41には上部を壊されるため本遺構の方が古い。SB4SP556・SP566・SP567や、SP93と重複するが新旧関係は不明である。また、後述するが調査時に堆積土最上位と考えていた層はST１包含層に相当するとみられ、建物跡全体を被覆する。

[構造] 平面形状は不整楕円形である。床面は調査区東・南側の斜面地に向けてやや傾斜する。壁はやや外傾して立ち上がっているが、先行トレンチ部分等では壁は検出できなかった。検出面(上端)の長軸長は6.72ｍ、短軸長は(4.24)ｍであるが、本遺構の東側半分が調査区外にあるため長軸・短軸方向は逆になる可能性もあり、主軸方位は不明である。深さは50㎝前後、床面積は確認部分で19.514㎡ほどである。床面中央部には、厚さ３㎝程度の貼床と考えられる不整形の硬化範囲が形成されている。炉は地床炉で、上記の硬化範囲が焼けたような炉１と、そのすぐ南東側に炉２を検出した。炉１・２共にSK67・68の堆積土上に構築され、調査区南東側に向け傾斜している。ピットは12基検出され、Pit１～３、Pit６・８・12は列状に配置される。Pit９はプランから建物内土坑の可能性もある。

[堆積土] 11層に分層した。炭化物や焼土・ロームブロック、遺物を多く含むことから、暗褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。当初１層としていたやや明るい暗褐色土はST１Ⅲ-１層に相当し、

調査区東壁断面で建物跡内外に一定の厚さで堆積することを確認した。

[出土遺物] 土器は総重量23,272.3gが出土し、後期初頭古段階の牛ヶ沢(３)式、後期初頭新段階の弥栄平(２)式を主体とする(図98-１～図99-７)。復元個体の多くは床面上に堆積する３層の直上や、堆積土下部の６層や廃棄焼土を含む８層中から出土している(図98-１～５:３層、図98-６～図99-２・99-７:８層、図99-３・４:６層)。床面より数cm高く建物廃絶直後に廃棄されたとみられる(写真29遺物出土状況１・２)。調査区東壁側では、口縁部に縄の側面圧痕を施す牛ヶ沢(３)式(図98-６)と、沈線による三角形区画文で一部地文縄文が磨り消される弥栄平(２)式(図98-７)が同じレベルから出土している(図25)。炉１周辺でも、隆帯区画内に文様が施される牛ヶ沢(３)式(図98-１)と地文縄文に沈線文が施される弥栄平(２)式(図99-３)がほぼ同じレベルで出土している。炉１・２下部のSK67では牛ヶ沢(３)式の個体が多く出土しているが、両遺構間での遺物の混在は考えにくい。図99-７はSI３出土破片と接合し、図99-３も同一個体の可能性がある。石器は石鏃３点、スクレイパー５点、二次加工剥片２点、両極剥片２点、剥片33点、石核１点、磨石５点、球状礫１点、敲石１点、石皿破片１点が出土している(図172-１～11)。図172-11の敲石は図98-８・99-１と近接して出土したもので、台石を打ち欠いて利用したものである。土製品はミニチュア土器４点、焼成粘土塊８点が出土している(図194-１)。

[時期] SK67との重複関係からは大木10式併行・牛ヶ沢(３)式以降で、建物廃絶後の廃棄土器は牛ヶ沢(３)式・弥栄平(２)式を含むことから、SK67埋没後の牛ヶ沢(３)式新段階～弥栄平(２)式期に建物が構築・機能していたとみられる。ST１Ⅲ-１相当層出土破片の様相は本遺構堆積土内出土土器と大きく変わらない(隆帯・縄の側面圧痕・刺突が施される牛ヶ沢(３)式と、磨消縄文が主体だが縄文地沈線も含む弥栄平(２)式の破片が共に出土している)ことから、建物廃絶→復元個体の廃棄→土砂の廃棄(ST１の形成)は時間を空けず行われたとみられる。

第３号竪穴建物跡(図27・28・99・173・197・203、写真30・31・183・184・195・246)

[位置・確認] 調査区中央東側の平場、ⅠV・W-51・52に位置している。ST１上で炉を確認したため周辺を精査したところ、暗褐色土の広がりを確認した。

[重複] ST１精査前に確認したことから、包含層形成後に構築された可能性が高い。硬化範囲除去後に検出したことから、SP57、SP77、SP101、SP120は本遺構よりも古い可能性が高い。SK42、SK65に本遺構上部、SP31・35に炉が切られ、SN８は本遺構の上面で検出しており本遺構よりも新しい。また、SB18SP568・569・570及びSP548に硬化範囲の縁辺が切られており、新しい可能性が高いが、土層断面では新旧関係を確認できなかった(図28B-B'ライン)。SK77・SP87は硬化範囲がわずかに被覆しているが建物跡精査中に検出しており、SK78は本遺構精査後に検出したがプランの一部は視認できており(写真30上)、新旧関係が判断し難い。ほか、SK44、SB4SP559、SB24SP547、SP6、SP54、SP105、SP128と重複するが新旧関係は不明である。

[構造] 平面形状は楕円形である。床面はわずかに南東側に向けて傾斜している。壁は外傾するか緩く立ち上がるが、東側では調査により削平されており確認できなかった。主軸方位は、N-83.05°-Eである。検出面(上端)の長軸長は3.97m、短軸長は3.63mである。深さは34.3cm、床面積は推定部分を多く含むが12.051㎡ほどである。炉は地床炉で、中央やや東側から１基検出され、周辺には厚さ

６cm程度の不整形の硬化範囲が確認された。ピットは炉の周辺に列状に並ぶ３基を本遺構に伴うものと判断したが(Pit２・５・６)、Pit２・５の堆積土中には硬化範囲は確認できないことから、新しいものの可能性もある。

[堆積土] 暗褐色土を主体とした自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は総重量5,158.3gが出土し、後期初頭新段階から後期前葉の破片を掲載した(図99-７～９)。図99-７はSI２出土破片と接合している。石器はスクレイパー２点、二次加工剥片３点、両極剥片１点、剥片10点、磨石４点、球状礫５点が出土した(図173-１～５)。土製品は土器片利用土製品４点、焼成粘土塊１点が出土した(図197-２～５)。石製品は凝灰岩製の装飾品(勾玉)１点が出土した(図203-２)。ほかに扁平円礫が２点出土した(写真246-３・４)。

[時期] ST１上面に構築されることや出土遺物から、後期初頭新段階～後期前葉と考えられる。SI２との接合関係からは弥栄平(２)式前後の可能性もある。　(折登)

第４号竪穴建物跡(図28・99、写真31・32)

[位置・確認] ＩN～0-44～45グリッドに位置する。Ⅲ層の精査中、硬化面を伴う貼床と焼土面、壁溝の一部を検出した。

[構造] 壁が検出されないため規模・平面形は不明だが、溝、炉等との位置関係から径約４mの円形であったと推測される。北側の溝は壁溝の残存部分と考えられ、残存長163cm、最大幅29cm、深さ17cmである。床は黄褐色ロームの混土からなる厚さ２cm前後の貼床で、炉から壁溝にかけて145×70cmの範囲で検出され、上面には硬化が認められた。炉は推定範囲の中央部で検出され、平面規模52×30cmの地床炉である。SP142～144は開口部径39～56cm、深さ28～57cmの柱穴で、竪穴建物跡の主柱を構成したものと考えられる。

[堆積土] 壁溝内は黒褐色土主体の堆積土である。部分的に貼床で覆われており、構築時の人為的な堆積と考えられる。

[出土遺物] 炉内から、十腰内Ⅰ式の土器(図99-10・11)計351.7gが出土した。

[時期] 炉内出土土器から、後期前葉の十腰内Ⅰ式と考えられる。　(秦)

第５号竪穴建物跡(図29・100・101・173・197・203、写真32・33・152・184・195)

[位置・確認] 調査区南側の斜面下方、ＩQ・R-42・43グリッドに位置しており、Ⅳ層で黒色土の広がりとして確認した。

[重複] ST１の形成過程で構築されている。

[構造] 平面形状は隅丸方形である。床面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がっているが、斜面下側の壁は検出できなかった。上端の長軸長は3.56mほど、短軸長は3.46mである。深さは94cm、床面積は9.511㎡ほどである。主軸方位はN-18°-Wである。床面の北側には、厚さ６cmほどの貼床とも考えられる硬化面が弧状に形成されている。北側はPitの配置や土層断面から、拡張やテラスであった可能性も考えられる。炉は中央よりやや南側で１基検出された。焼土面から立石状の礫が検出されたが、埋没過程に混入したとも考えられる。ピットは15基検出され、中軸を挟み東西で検出されたPit４・７は主柱穴と考えられる。また、SR10が南側に隣接している。

[堆積土]黒色土や黒褐色土を主体としている。A土層の断面に南壁が想定されたが確認できなかった。
[出土遺物] 土器は後期前葉の十腰内Ⅰ式が出土している。総重量は10,157.6ｇで、８点図示した(図100-１～図101-１)。図100-３～５は十腰内Ⅰ式第２段階の深鉢で、Pit７の柱痕下位から出土しており、柱を抜き取った後に廃棄されたことが考えられる。図101-１は十腰内Ⅰ式第１段階の深鉢で、SI６から出土した破片と接合した。剥片石器は堆積土から石匙１点(図173-６)・二次加工剥片１点・両極剥片１点・剥片２点、Pit７からスクレイパー１点(図173-９)が出土している。礫石器は堆積土から磨石１点(図173-７)・台石１点(図173-８)・礫破片５点、Pit３から磨石１点、Pit４から礫破片１点、Pit７から磨石１点(図173-10)・石皿破片１点・礫破片１点が出土している。７(磨石)は北側の床面から出土した。Pit７の石皿破片は、検出面から出土しており、SB８SP237・ST１(ⅠQ-42・45グリッド)から出土した破片と接合した。土製品は焼成粘土塊１点・土器片利用土製品２点(図197-６・７)が出土している。石製品は有孔石製品(未成品)が１点出土している(図203-３)。
[時期] 出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)と考えられる。

第６号竪穴建物跡(図30・101・102・173・197・203、写真34・152・153・184・192・195・246)
[位置・確認] 調査区南側の斜面下方、ⅠR-43・44グリッドに位置しており、Ⅲ・Ⅳ層で黒褐色土の広がりとして確認した。
[重複] ST１の形成過程で構築されている。
[構造] 平面形状は楕円形である。床面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がっているが、斜面下側の壁は検出できなかった。上端の長軸長は3.38m、短軸長は2.56mほどである。深さは70㎝、床面積は5.922㎡ほどである。主軸方位はN-56° -Eである。炉は中央から１基検出され、炉の西側は床面が硬化した状態であった。ピットは南北の壁際から９基検出された。
[堆積土] 黒褐色土を主体としている。
[出土遺物] 土器は後期前葉の十腰内Ⅰ式が出土している。総重量は17,825.3ｇで、９点図示した(図101-２～図102-５)。図102-２は壺の下半部と考えられ、底部中央に打欠による穿孔がある。剥片石器は石鏃１点(図173-11)・両面調整石器１点・スクレイパー１点・石核１点・両極剥片３点・剥片10点が出土している。礫石器は磨石１点、敲石１点(図173-12)、石錘２点(図173-14)、球状礫４点(図173-13)、石皿破片２点、台石・砥石破片１点、礫破片９点、自然礫１点が出土している。台石・砥石破片はST１(ⅡB-53グリッド)から出土した破片と接合した。土製品は土器片利用土製品が３点出土している(図197-８～10)。石製品は円形岩版１点(図203-4)・扁平円礫１点(写真246-5)が出土している。
[時期] 出土土器や遺構の配置状況から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)と考えられる。

第７号竪穴建物跡(図30・102・175、写真35・153)
[位置・確認] 調査区南側の斜面下方、ⅠP-44及びⅠQ-43・44グリッドに位置しており、Ⅳ層で確認した。
[重複] ST１の形成過程で構築されている。
[構造] 北側を検出したのみで、詳細は不明である。平面形状は楕円形と推定される。土層断面では、

床面は平坦で壁は外傾して立ち上がっている。残存する規模は4.34×3.6m、深さは24cmである。主軸方位はN-１° -Eと推定される。炉は１基、ピットは９基検出された。

［堆積土］黒褐色土を主体としている。

［出土遺物］土器は後期初頭から前葉と考えられるものが出土している。総重量は829.3ｇで、７点図示した(図102-６～12)。６は深鉢で、炉の焼土から出土した。石器は砥石１点・石錘１点(図175-１)・礫破片３点が出土している。土製品は焼成粘土塊が１点出土している。

［時期］出土土器から、後期初頭から前葉と考えられるが、詳細は不明である。　（野村）

第８号竪穴建物跡(図31・103・175・194・197、写真36・154・184・190・192)

［位置・確認］調査区南側の斜面下方、ⅠR-46・47グリッドに位置しており、Ⅳ層で黒褐色土の広がりを確認した。検出できたのは斜面側の地山を掘り込んだ半円状のプランで、斜面下方にあたる残りは前年度に調査が行われており既に掘り下げられていた。

［重複］本遺構埋没後にST１のⅡb層が堆積している。

［構造］平面形は円形を基調としたものと思われる。床面は斜面側へ向かってわずかに傾斜しているが、概ね平坦である。壁高は最も深い斜面側の北壁側で約40cm、西壁側20cm、東壁側10cmで、いずれもやや外傾して立ち上がっている。主軸方位は、N-１° -Eでほぼ真北を向いている。上端長軸長は2.9m、短軸長は(1.8m)で、現存する床面積は(3.9㎡)である。長軸線上のほぼ中央から55cm×(52cm)、最大深さ８cmほどの浅い掘り込みを検出した。底面は被熱しており、炉に伴う施設であると考えられる。被熱規模は長軸30cm、短軸(13cm)で、最大３cmの厚さで被熱している。北壁際からピット３基を検出した。Pit３はほぼ垂直に掘り込まれているのに対して、Pit１・２は床面側に10度前後傾いて掘り込まれている。

［堆積土］３・４層からは遺物が多量に出土しており、ST１のⅢ-１層に相当する可能性がある。

［出土遺物］土器は後期前葉の十腰内Ⅰ式を主体として総重量11,333ｇ出土した(図103-１～８)。図103-１・２は床面直上から、３～８は堆積土中から出土したものである。図103-１は十腰内Ⅰ式の深鉢、２は十腰内Ⅰ式の浅鉢で完形個体である。なお、堆積土中から出土した図103-４・５は十腰内Ⅰ式第２段階とみられる深鉢、浅鉢の破片である。石器は石鏃１点(図175-２)、磨製石斧１点、スクレイパー１点、両極剥片２点、二次加工剥片２点、剥片９点、磨石３点(図175-４・５)、砥石１点(図175-３)、台石・砥石破片１点、礫破片１点、石皿破片１点が出土した。土製品は環状土製品(図194-２)、ミニチュア土器(図194-４)、鐸型土製品(図194-３)の３点のほか、土器片利用土製品が７点出土した(図197-11～18)。図197-12・13は十腰内Ⅰ式の破片を素材とした土器片利用土製品である。

［時期］床面直土出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式)と考えられる。

第９号竪穴建物跡(図31・103・197、写真37・154)

［位置・確認］調査区南側の斜面西側、ⅠT・U-44グリッドに位置している。ST１を掘り下げ中に土器埋設炉を検出した。周辺を面的に広げたところ、ピット２基を検出したほか、ベルトで壁の立ち上がりを確認したことから建物跡とした。

［重複］ST１の主要堆積層であるⅢ-１・２層が建物跡全体を被覆しており、これ以前の建物跡と考え

られる。また、埋没沢(図６)がある程度埋まった段階で構築されている。

[構造] 床面レベルで検出したため壁はほぼ検出できず全体形・規模等は不明である。なお、床面硬化範囲や、貼床範囲などは検出されなかった。炉は立石＋土器埋設炉で火床面のすぐ脇にデイサイトを素材とする大型の扁平礫が一つ設置されている。火床面は40×(20)㎝、最大７㎝の厚さで被熱している。床面と同レベルから検出したピット２基を本遺構に伴うと認定した。

[堆積土] 黒色土の単層である。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階～後期前葉の土器が993ｇ出土した(図103-９・10)。図103-９は炉体土器で、胴部に単軸絡条体５類が縦回転施文されている。石器は剥片１点が出土したが図示しなかった。土製品は後期初頭～前葉の土器片を素材とした土器片利用土製品が１点出土した(図197-18)。

[時期] 炉体土器から後期初頭新段階～後期前葉と考えられる。

第10号竪穴建物跡(図32、写真37・38)

[位置・確認] 調査区西側の中央東側の平場、ⅠV・W-43・44グリッドに位置している。ST１のⅢ-１層を掘り下げ中に立石炉を検出した。周辺を面的に拡げたところ、炉周辺にピットや硬化面を検出したことから建物跡とした。

[重複] SB９・10・17と重複する。SB９を構成するSP286、SB10を構成するSP283は硬化面より新しいことから、SB９・10は本遺構より新しい。また、SB17を構成するSP252の検出面はⅢ層面であり、ST１堆積以前の構築物であると考えられるため本遺構の方が新しいと考えられる。また、ST１の主要堆積層であるⅢ-１層が建物跡全体を被覆しており、本層堆積以前の建物跡と考えられる。

[構造] 床面で検出したため壁は検出できず全体形・規模等は不明である。硬化面は4.7ｍ×(3.5ｍ)の規模で検出した。炉は２基検出した。炉１は立石炉で火床面(57㎝×55㎝、最大15㎝厚)の東側に厚みのある板状礫が設置されている。炉２は地床炉で41㎝×26㎝の規模で被熱している。炉と同レベルから検出した７基のピットを本遺構に伴うピットとして認定した。

[堆積土] 床面直上からⅢ-１層が堆積しており、建物跡の堆積土は検出されなかった。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[時期] 検出層位から後期初頭新段階～後期前葉と考えられる。ST１に堆積しているⅢ-３・４層上に床面が構築されていることから、ある程度斜面が埋まった状況で構築されており、より後期前葉に近い段階にあると考えられる。

第11号竪穴建物跡(図33・104・175、写真38・154・184)

[位置・確認] 調査区東側の斜面落ち際、ⅡB・C-51・52グリッドに位置している。Ⅲ層面を掘り下げ時に土器埋設炉を検出した。周辺を面的に拡げたところ、炉、ピットを検出できたことから建物跡とした。

[重複] SP525より新しい。

[構造] 土器埋設炉は土器の外周が幅14㎝、厚さ６㎝ほど被熱しているが、土器内の堆積土は被熱していない。本遺構に伴うピットとしては土器埋設炉と重複するSP525や比較的規模の大きいSP395を除き、規模が揃うピット11基を認定した。なお、SP474は本遺構に伴う可能性もある。

［堆積土］暗褐色土を主体として２層に分層した。
［出土遺物］後期初頭新段階の土器を主体として1,150ｇの土器が出土した。図104-１は炉体土器である。RLを縦位回転施文した後に連結する横位の沈線が施されているもので、後期初頭新段階の弥栄平(２)式に比定される。石器は石鏃１点(図175-６)、磨製石斧１点、球状礫１点、砥石１点、剥片１点が出土した。
［時期］炉体土器から、後期初頭新段階(弥栄平(２)式)と考えられる。　（小山）

第12号竪穴建物跡(図33・34・104・175、写真39・154・184)
［位置・確認］ＩＮ～P-46～47グリッドに位置する。Ⅲa層でSN25、Ⅲb層でSR８を、Ⅳ層でSP130～134・136・137・140・141を検出し、複数棟の建物を構成する施設群と判断した。
［構造］壁、床面ともに検出されなかったが、うち１棟は柱穴、炉との位置関係等から長軸約７ｍの楕円形であったと推定される。推定範囲の南半部に位置するSN25は長軸63cm、短軸47cmの不整形焼土で、南東側約20cmに位置する23cm×11cmの焼土範囲とともに地床炉になると考えられる。SR８は長軸35cm、短軸30cm、深さ21cmの掘方に、正位の深鉢土器が埋設される土器埋設遺構である。検出面では、掘方の内外で埋設土器上部の破片が散乱しており、埋設後からⅢ層堆積の過程で削平を受けたと考えられる。ピットはSP130～134・136・137・140・141の９基が検出された。開口部規模22×51cm、深さ18～52cmで、SP133・136からは柱痕が検出されている。
［堆積土］SR８の掘方はⅢb層を掘り込む黒褐色土で、土器内の堆積土は黒褐色土である
［出土遺物］SR８から円筒下層ｄ１式(図104-２ａ・２b)、SP131から十腰内Ⅰ式(図104-３)、SP132から小牧野3期～十腰内Ⅰ式(図104-４)、SP133からは後期初頭新段階と十腰内Ⅰ式第２段階(図104-５～７)の、計2,817.7gの土器と、スクレイパー１点(図175-7)が出土した。
［時期］SR８出土土器とピットの配置形状から、SR８、SN25、SP130・136・137・140・141で構成される建物は前期後葉の円筒下層ｄ１式期と考えられる。SP131～134については、SP132・133出土土器と配置形状から後期前葉の十腰内Ⅰ式の建物として分離される可能性がある。

第13号竪穴建物跡(図34・35・104・174、写真40・155・184)
［位置・確認］ＩＭ～０-41～43グリッドに位置する。Ⅲa層中でSN24、Ⅲ層中でSK165、Ⅳ～Ⅴ層上面でSP145～161を検出し、同一の竪穴建物を構成する施設群であると判断した。
［重複］SN24はST１の形成過程で構築されている。
［構造］壁、床面ともに検出されなかったが、柱穴、炉との位置関係等から径約８ｍの円形であったと推定される。SN24は検出面での長軸50cm、短軸40cmの不整楕円形で、Ⅲa層が最大12cmの厚さで赤褐色に被熱している。ピットとの配置関係より、本建物跡に伴う地床炉と考えられる。SK165は開口部103×95cm、底面79×63cmの楕円形で、深さ12cmの鍋底状の断面形状である。本竪穴建物の建物内土坑に相当する。SP145～161は開口部径60～19cm、深さ18～77cmで、SP158からは柱痕が、SP148の底面中央からは長11×幅11×厚７cmの扁平な礫が検出されている。本建物の壁柱や主柱を構成する柱穴と考えられる。
［堆積土］SK165は、比較的均質な黒色土が堆積する。

［出土遺物］土器は、SK165の１層検出面から十腰内Ⅰ式の鉢形土器(図104-８)が、SP145の堆積土から後期初頭新段階(図104-９・10)、SP149の堆積土から小牧野３期～十腰内Ⅰ式(図104-11)が出土した。石器は、推定範囲内の堆積土から石皿１点(図174-１)、磨石２点(図174-３・４)、磨製石斧１点(図174-５)、SP146から石鏃１点(図174-２)が出土した。
［時期］SP149出土土器から、後期前葉の小牧野３期または十腰内Ⅰ式と考えられる。（秦）

第14号竪穴建物跡(図35・36・104、写真41・114・155)
［位置・確認］調査区中央東側の斜面落ち際、ⅠU・T-49・50及びIU-51グリッドに位置している。ST１上面で焼土遺構SN11・12、SK132・136・137上面で硬化範囲を確認した。SN12と硬化範囲はいずれも標高22.3～22.4m前後とほぼ同じく、SN11も標高22.5m前後と近いことから、整理作業の過程で一連の建物跡として認定した。
［重複］ST１精査前に確認しており、包含層形成後に構築されている。上部に硬化範囲が重なるSK132・136・137、SB7SP483、SN11が重なるSP113、SN12が重なるSP506よりも新しい。SB６SP471にもわずかに硬化範囲が被覆するが、縁辺のみでありSP471に切られる可能性もある。その他多数の遺構が建物跡推定範囲内に重複しているが、新旧関係は不明である。
［構造］硬化範囲は、平面形では図示したように不整形に確認されたが、断面ではSK136にも被覆しておりやや北側に延びる可能性がある(図36D-D’ライン)。また、周辺の掘立柱建物跡を構築するとみられるピットを除き、規模が揃うピット13基(SP83・95・103・111・112・114・115・303・495・505・513・514・516)を本遺構に伴うと認定した。ピットの配置から建物跡の平面形状は長軸5.5m程度の楕円形と推定される。炉２基のうち、SN11は地床炉、SN12は立石土器埋設炉である。被熱範囲の上面はやや硬化し、土器の掘方底面付近まで焼けている。根撹乱により礫の掘方は確認できなかったが、土器と共に埋設されたとみられ、土器と板状礫の平坦面が接するように設置されている。西側のSP495・513・514、東側のSP103・111・115は炉２を挟み主柱穴となる可能性がある。
［堆積土］炉、硬化範囲のみの確認のため不明である。
［出土遺物］SN12の埋設土器はLR縦回転の地文で、底面には網代圧痕が残る(図104-12)。埋設された板状礫は自然礫である。
［時期］ST１範囲内では中期末葉～後期初頭古段階の出土が多い地点に構築されていること、本遺跡内では土器埋設炉は後期初頭新段階に多いこと、土器底面の網代圧痕は本遺跡では中期末葉～後期初頭古段階を主体としつつ後期初頭新段階(小牧野３期)までみられることから、後期初頭古～新段階の可能性がある。（折登）

第４節　掘立柱建物跡・ピット

掘立柱建物跡は発掘調査で２棟、整理作業の過程で25棟(ピット計163基)を認定した。その後、別規格であるがSB28の１棟（ピット５基）を認定した。

調査開始期当初から、土坑として検出した遺構プランの一部は大型の柱穴であることを確認しており、掘立柱建物跡を構成することを想定していた。しかし、遺構の重複が激しいことや、調査期間の都合等から、調査段階では建物跡を復元することはほとんどできなかった。

このため、発掘調査時は単独の土坑、柱穴として精査し、調査終了後に建物跡を復元した。図面上の平面配置、柱痕・断面図による柱規模の比較、底面のエレベーション図作成等の作業を行って、建物プランを想定し、整理作業担当者による検討を重ねて、認定する建物跡を決定した。SB1・14のみ、令和２年度調査終了後に図面を整理し、令和３年度調査中に現地で視認することができたため、これらのプランを基準として建物跡を推定した部分が大きい。建物跡を構成する柱穴に建物ごとの枝番号は付さず、遺跡全体のピットの通し番号(SP番号)を使用した。あくまでも図面上での作業であり、遺構重複のためか柱穴が確認できなかった例や、想定プラン同士が重複し柱穴が重なる例、プランが歪な例などもあり、不十分な認定の建物もある(第５章第２節で詳述)。

基本的なプランは、１間×１間＋張出部(１×１＋棟)の６本柱で、張出部の柱の位置により、いわゆる六角形のものと樽形のものがある。その他、１間×２間＋張出部(１×２＋棟)の８本柱となるものがあるほか、SB20の１棟のみ１間×３間＋張出部の可能性を残す。１間×１間の４本柱は、対岸の内田(１)遺跡では多数確認されているが、本遺跡ではSB22の一基のみの確認となった。SB22は長方形基調であり、内田(１)遺跡の正方形基調のプランとは差異が大きい。プランが重なるものが多いことから、近接する位置への建て替えが普通であったとみられる。

建物跡は、すべて調査区中央に環状に配置される(図６・７)。その範囲は東西約40m、南北約30mであるが、西側は調査区外に、北側は削平範囲の方に数ｍ延びるとみられる。環状列石主体部は、この建物跡の環状ラインの上部～やや内側に形成されている。特に、張出部が環状方向に沿う建物跡は、南側では密に構築され、列石に沿うような配置となっている(SB５～８、SB９･10等)。一方で、張出部が環状方向に直交するような建物跡は、列石内部に入り込むような配置となるものもある(SB11･21)。北側のSB1・14は、南側に比べるとやや外縁に構築される。調査区北側のⅡBグリッドライン以北の削平範囲においても、大型の柱穴の可能性があるピットも確認されていることから(SP530～534)、本来は北側にも建物群が巡っていたと思われる。北東部、南西部、北西部にピットが希薄な空白地帯があり、環状内側への入口・通路等の可能性があるかもしれない。

遺構の時期は、後期初頭の遺物が出土するフラスコ状土坑に切られるものと(SB5SP388＜SK136(小牧野３期))、切るものがあるが(SB６・SB18SP550ab＞SK66(牛ヶ沢(３)式期)、SB14SP529＞SK７(弥栄平(２)式期)、SB14SP536＞SK30(沖附(２)式・小牧野３期))、時期不明のものも含め重複事例の大半は柱穴の方が新しい。また、後期前葉の土器埋設遺構に切られるもの(SR２(十腰内Ⅰ式期)＞SB16SP549、SR３(同)＞SB10SP220)、後期初頭～前葉の土器埋設炉の下部から検出したもの(SN16＞SB16SP193)、後期初頭新段階の土器埋設遺構の下部から検出したもの(SR５(弥栄平(２)式)＞SB３SP73)、環状列石構成礫の掘方に切られるもの(礫41＞SB21SP198)、環状列石の下部から検出した例(礫30＞SB25SP315、礫

38・39＞SB21SP431、礫40＞SB11・21SP277)等があるが、列石やその掘方を壊すものはない。出土土器は小破片で複数時期のものが混在するピットがほとんどだが、構築時期に近いとみられる最も新しい時期の破片としては、後期初頭新段階の小牧野３期や後期前葉の十腰内Ⅰ式第１段階が出土する遺構が多く、十腰内Ⅰ式第２段階の破片はSB5SP388等で少数出土するのみで少ない。

その他、建物跡を構成しないピットが366基ある。建物と同様環状部分に配置されるものが多く、環状内部に位置するものは少ない。焼土遺構も同様の状況であることから、認識できなかった竪穴・掘立柱建物跡の柱穴が大半とみられる。建物跡を構成する可能性があるものは以下の例がある。

ⅡA・B-47・48:立石炉SN22周辺のSP360～365･376～379他、南側は環状列石構築前の削平で欠失か

IX-43・44:土器埋設炉SN17周辺の調査区西壁際のSP274-285-276ライン、275-281-229ライン

IW・X-52:土器埋設遺構SR５周辺のSP92-46-50-49-80-74ライン、南側はなし

IX・Y-51・52:立石炉SN５周辺のSP400-346-121･123･124-89-68-44ライン、炉北側は撹乱により欠失

IT・U-47～49:土器埋設炉SN16･地床炉SN12～14 周辺のSP253-435-236-245ライン、SP459 -187-437ライン、SP171-255-260-265-173-172ライン、SP262-310-295-299-452-453ライン等、斜面側はなし

また、ⅡA-45・46グリッドには環状列石の張出部があり、沿うように構築された小規模なピットがみられ、張出部に伴う可能性もある(張出部 - SP320 - 321ライン、SP318-319ライン、SP327 - 325ライン、SP334 - 335･336 - 331 - 329ライン)。

環状列石との重複関係があるものは、SP216･230は列石主体部とSQ２の直下に構築され、出土土器片は弥栄平(２)式･沖附(２)式を主体とする。SP342も礫直下で、後期初頭の地文のみの破片が出土している。SP357･393はSQ３の直下で十腰内Ⅰ式第１段階前後の土器片が多い。

土器の復元個体や大破片が出土したピットが数基ある。IY-52のSP11は焼土粒を多く含む層を主体とし、十腰内Ⅰ式第１段階とみられる壺が破片で廃棄されていた(図57上、図109-17)。IX-43、SB12･27プラン内のSP189は、確認面で焼成粘土塊が出土し、堆積土中には壺が破片で廃棄されていた(図59上、図110-10)。後期初頭の牛ヶ沢(３)式～小牧野３期のいずれかに属するとみられる。IV-49･50、環状列石主体部の礫28～32に近接するSP337では、赤色顔料を塗布した十腰内Ⅰ式第１段階の浅鉢が出土している(図83･図112-８)。IY-52、SP454は単軸絡条体第５類を施す深鉢が２個体出土しており、同一個体の可能性もある(図113-10･11)。IR-45、SP501a･bは、501a＞bの新旧関係で２基が重複しており、501bは円筒下層ｄ２式の２個体、501aは胴部個体が出土しており、円筒下層ｄ２式期の土器埋設遺構の可能性がある(図59左下、図114-１～３)。IT-45、SP511はST１土層ベルトで確認したもので、細い区画内に充填縄文が施される破片と、単軸絡条体第５類が施される深鉢が共に出土しており、小牧野３期に属するとみられる(図59右下、図114-４～８･115-１)。IY-55、SP543は調査区東壁断面で確認しており、沖附(２)式とみられる浅鉢が出土している(図60下、図115-５)。

上記以外に、竪穴建物跡の構成ピットとなったものが43基あり、これらについては竪穴建物跡の図面上に深さを記載した他、各遺構の記載の中で説明している(本章第３節)。

掘立柱建物跡構成ピットの計測値は表８、遺構を構成しないピットの計測値は表９に示した。出土土器については掲載外のものも含めて概観した傾向を記載し、掲載した個体の時期は太字で示した。

第１号掘立柱建物跡(図37･105･194･203、写真43･47･195)

６基の柱穴で構成される(SP386・387・390・538・539・540)。

[位置・確認] ⅡB・C-50・51グリッドに位置する。南側ではⅣ層、削平範囲ではⅤ層で検出した。

[重複] SP540はSP541と重複し、本遺構が新しい。

[形態・規模] １間×２間のほぼ正方形を構成する。柱間距離は東西方向が3.71m(SP540 - 539間) ～4.18m(SP390 - 386)、南北方向が3.53m(SP539 - 386) ～4.07m(SP540 - 390間)で、中間は3.92m(SP538 - 387間)を測る。ピットの最下点は、北側３基は22.78～23.22m、南側３基は22.76～22.93mで南側の方が低い傾向にあるが概ね揃う。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は検出面(上端)で70～97cm、深さは80～122cmを測る。堆積土はにぶい黄褐色土を主体とする。SP386・540では、平面形や断面で柱痕跡を確認した。SP538・539・540では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

[出土遺物] 後期初頭新段階(弥栄平(２)式・小牧野３期) ～後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の破片が出土している(図105-１～８)。SP390からは鐸形土製品１点(図194-５)、SP539からは両極剥片１点、粘板岩製の石刀１点(図203-５)が出土している。

[小結] 出土土器から、後期初頭新段階以降と考えられる。

第２号掘立柱建物跡(図38・39・105・175、写真43・47～49)

６基の柱穴で構成される(SP179・527・544・549・560・561)。

[位置・確認] IX・Y-51・52グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層で検出した。

[重複] SP544は上部に立石炉SN５が構築されるほか、SP162に切られ、本遺構が古い。SP527はSP419と重複し、本遺構が新しい。SP179はSP394・396と重複するが新旧関係不明である。また、ST１の形成過程で構築されている。

[形態・規模] １間×１間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は東西方向が3.53m(SP544 - 561間) ～3.74m(SP527 - 549間)、南北方向が3.73m(SP527 - 544間) ～3.93m(SP549 - 561間)で、張出部間は4.92m(SP179 - 560間)を測る。ピットの最下点は、北側３基は22.01～22.35m、南側３基は22.13～22.15mで、特に南側３基の標高は概ね揃う。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は64～ (150)cm、深さは60～117cmを測る。堆積土は暗褐色土を主体とする。SP179・527・544では、平面形や断面で柱痕跡を確認した。SP179・544では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

[出土遺物] 後期初頭新段階(小牧野３期) ～後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の破片が主に出土した(図105-９～21)。特にSP561では２本組の弧状沈線が施される小牧野３期とみられる深鉢が出土している(図105-19)。SP544からは剥片１点、台石・砥石破片１点(写真48中)、SP549からは剥片３点、SP560からは剥片２点、ミニチュア土器１点、礫破片２点(写真49左上)、SP561からは磨石１点(図175-８)が出土した。

[小結] 出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)以降と考えられる。

第３号掘立柱建物跡(図38～40、写真43・49・50・94)

６基の柱穴で構成される(SP48・52・59・63・73・81)。

[位置・確認] IW-52グリッドに位置する。ST１土層ベルトの断面やⅣ層で検出した。

[重複] SP73はSR５(弥栄平(２)式期)精査後にプランを検出しており、本遺構が古いとみられる。SP81はSP78と重複し、本遺構が新しい。SP59はSP88と重複するが新旧関係不明である。また、ST１の形成過程で構築されており、SP52はⅢ層が被覆するが、他のピットはⅢ層除去後に確認しており、新旧関係は把握できなかった。

[形態・規模] １間×１間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は東西方向側が2.86m(SP63－52間)～2.90m(SP81－73間)、南北方向が2.08m(SP81－63間) ～2.24m(SP73－52間)で、張出部間は2.67m(SP48－59間)を測る。ピットの最下点は、北側３基は22.26～22.36m、南側３基は22.09～22.24mで概ね揃う。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は33～64cm、深さは30～67cmを測る。堆積土は暗褐色土を主体とする。SP59・63では、断面で柱痕跡を確認した。SP59では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

[出土遺物] 後期初頭古段階～新段階、時期不明の小破片が出土したが図示していない。

[小結] SR５との重複関係から、後期初頭新段階(弥栄平(２)式)以前の可能性がある。

第４号掘立柱建物跡(図41・105・175、写真44・50～52・96)

６基の柱穴で構成される(SP556・557・558・559・566・567)。

[位置・確認] IV-52・53、IW-52グリッドに位置する。SI02床面とⅣ層で検出した。

[重複] SP559はSK78(小牧野３期の可能性)、SP557はSP86と重複し、本遺構が新しい。SP86はSP557より新しく建て替えの可能性がある。SI２床面で検出したSP566・567、SI２と重複するSP556はいずれも新旧関係不明である。また、ST１の形成過程で構築されているが、Ⅲ層除去後に確認しており、新旧関係は把握できなかった。

[形態・規模] １間×１間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は東西方向側が3.40m(SP559－567間) ～3.44m(SP558－556間)、南北方向が2.22m(SP556－567間) ～2.79m(SP558－559間)で、張出部間は3.90m(SP557－566間)を測る。ピットの最下点は、北側３基は21.58～21.88m、南側３基は21.51～21.60mで、北側よりも南側が低く、東側２基が低い傾向があるが、概ね揃う。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は75～105cm、深さは34～86cmを測るが、SP566・567の上部は記録できていないため深さの値にばらつきがある。堆積土は暗褐色土・褐色土を主体とする。SP556・559・566では平面と断面で、SP557・558でも断面で柱痕跡が確認できる。SP558・559・566では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

[出土遺物] 中期末葉～後期初頭古段階、後期初頭新段階～後期前葉の幅広い時期の破片が出土している(図105-22～24)。SP556出土の牛ヶ沢(３)式土器は遺構外(ⅡC-55)出土破片と同一個体の可能性がある(図105-23・326-9)。SP556からはスクレイパー１点、SP566からは球状礫１点(図175-９)が出土している。

[小結]SK78との重複関係からは後期初頭新段階以降の可能性がある。SP556出土土器には後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)のものがあるが、小破片での出土である。一方、SP556では後期初頭古段階(牛ヶ

沢(３)式期)前後の破片も目立つ。また、本遺構周辺では中期後葉～後期初頭古段階の遺構が多いことも注意される。

第５号掘立柱建物跡(図42・43・105・132・175・194・197、写真44・52・53・94・97・115・184・190)
５基の柱穴で構成される(SP205・388・551・554・563)。１基はSK136に削平されたとみられ、確認できなかった。
[位置・確認] IU・V-50・51グリッドに位置する。ST１のⅢ層と、Ⅳ層で検出した。
[重複] SP563はSB６・18SP562と重複し本遺構が古い。一方、SP554はSB６・18SP553と重複し本遺構が新しい。土層断面・写真等からは、重複部分に根撹乱が重なっており、SP554＞SP553の切り合い関係が逆となる可能性もある(SP554とSP551・SP563の東側３基の底面レベルはほぼ揃うため構成ピットに含まれない可能性は考えにくい)。SP553・554とSK73の新旧関係は不明である。SP388はSK136(小牧野３期)と重複し本遺構が古く、SK136はSB６SP494に切られる。また、ST１の形成過程で構築されているが、東側３基はⅢ層除去後に確認しており、新旧関係は把握できなかった。
[形態・規模] １間×１間＋張出部の六角形を構成することが推定される。柱間距離は東西方向が3.22m(SP388－205間)～3.29m(SP551－563間)、南北方向が3.02m(SP388－551間)～3.06m(SP205－563間)で、張出部間は3.40m(SP554－●間(●は確認できなかったピット))前後と推定される。ピットの最下点は、東側３基は21.82～21.85m、西側２基は21.78～21.96mと概ね揃う。
[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は60～108cm、深さは64～101cmを測る。堆積土は褐色土を主体とする。SP551・554では平面と断面で柱痕跡を確認し、SP205・563でも断面で柱痕跡の可能性がある土層が確認できる。SP554・563では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。SP551底面の柱の当たりは重複するようにも見え(写真53)、柱を据え直した可能性がある。
[出土遺物] 後期初頭新段階～後期前葉の破片が出土しており、小牧野３期の破片が多く、SP388では十腰内Ⅰ式第２段階も含む(図105-25～33)。SP205出土破片と、隣接するSK81出土破片が接合している(図132-12:小牧野３期・十腰内Ⅰ式第１段階か)。SP205からは剥片２点、SP388からは剥片３点、土器片利用土製品１点(図197-19)、SP551からは二次加工剥片１点(図175-８)、楔形石器１点、環状土製品１点(図194-６)、SP562または563からはミニチュア土器１点が出土している。
[小結] SK136との重複関係からは後期初頭新段階(小牧野３期)以前で、出土土器からは小牧野３期内に収まる可能性が高い。

第６号掘立柱建物跡(図42～44・106・197、写真44・54・91・92・113～115・192)
６基の柱穴で構成される(SP359・471・494・550a・553・562)。
[位置・確認] IT-50、IU・V-50・51グリッドに位置する。ST１のⅢ層と、Ⅳ層で検出した。
[重複] SB５との重複関係は前項目を参照されたい。SB18とプランが重複するSP550ab・553・562については、精査時には１基の遺構としていたが、土層断面等の検討から、建て替えにより２基以上の柱穴があることを想定した。SP550aはSB18SP550bを建て替えたとみられ、SK66(牛ヶ沢(３)式期)と重複し本遺構が新しい。SP471はSK132・137(牛ヶ沢(３)式期)と重複し本遺構が新しい一方、SI14硬化面はわずかに被覆するが(図35)、遺構の縁辺部分であり判然としない。SP494は前述したとおり

SK136(小牧野３期)を切る他、SI14硬化面、SK132・137・138(十腰内Ⅰ式第１段階か)と重複し本遺構が新しい。SP359とSP115の新旧関係は不明である。また、ST１の形成過程で構築されており、SP550や周辺の土坑のプランは確認しにくく、Ⅲ層が被覆する可能性もあるが確認できなかった。

[形態・規模] １間×１間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は南北方向が3.53m(SP553 - 550a間) ～3.83m(SP494 - 359間)、東西方向が3.50m(SP494 - 553間) ～3.68m(SP359 - 550a間)で、張出部間は4.42m(SP471 - 562間)を測る。ピットの最下点は、東側３基は21.04～21.24m、西側３基は21.16～21.33mで概ね揃う。プラン内に立地するSI14SN11の確認面は22.6m前後で、ピットの確認面よりもやや高い。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は(70) ～107cm、深さは63～148cmを測る。堆積土は灰黄褐色土、褐色土を主体とする。SP359・471・550a・562では平面形・断面で柱痕跡を確認した。SP553では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

[出土遺物] 後期初頭古段階～後期前葉の破片が出土している(図106-１～８)。SP471からは両極剥片１点、礫破片１点、SP553からは土器片利用土製品２点(図197-20・21)が出土した。

[小結] SI14硬化範囲が被覆するならば後期初頭新段階以前であるが、SP471が切るとすればそれ以降となる。SK138との新旧関係及び、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の出土土器片がやや多いことから、後期前葉以降の可能性が高い。また、形態・規模が類似するSB５からSB６への建て替えの可能性がある。

第７号掘立柱建物跡(図42・44・106・151・175、写真44・54・55・113・114・184)

８基の柱穴で構成される(SP19・69・94・97・107・460・483・507)。

[位置・確認] IT-50、IU-49～51グリッドに位置する。ST１のⅢ層と、Ⅳ層で検出した。

[重複]SP483はSI14硬化面が被覆し本遺構が古く(図35)、SK132(後期初頭新段階)・SK137(牛ヶ沢(３)式期)と重複し本遺構が新しい。SP94とSK76の新旧関係は不明である。また、ST１の形成過程で構築されているが、ピットの多くはⅢ層除去後に確認しており、新旧関係は把握できなかった。

[形態・規模] １間×２間＋張出部の六角形を構成する (中間のSP107・460は伴わない可能性もある)。柱間距離は南北方向が3.19m(SP483 - 69間) ～3.27m(SP19 - 94間)、東西方向が3.75m(SP483 - 19間) ～3.77m(SP69 - 94間)で、張出部間は4.18m(SP507 - 97間)を測る。ピットの最下点は、東側３基は21.74m ～22.12m、西側３基は21.19～21.70mで差が大きい。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は25～108cm、深さは27～114cmを測る。SP483の規模が大きいことから値にはばらつきがある。堆積土は褐色土、暗褐色土を主体とする。SP19断面の２層は柱痕跡の可能性がある。

[出土遺物] 後期初頭新段階～後期前葉の破片が出土し、後期初頭新段階のものが多い(図106-９)。SP483出土土器は重複するSK132出土土器と接合している(図151-16)。SP97からは砥石１点が出土し、ST１(ⅠR-48)出土破片と接合している(図175-11)。

[小結] SI14との重複関係からは後期初頭新段階以前、SK132との重複関係からは後期初頭新段階以降であり、出土土器からはその段階内に収まるとみられる。また重複関係から、SB7→SI14→SB6の変遷が想定できる。

第８号掘立柱建物跡(図46・106・194・197、写真44・55・56・114・190・192)

８基の柱穴で構成される(SP237・291・293・308・343・418・455・466)。

[位置・確認] IT・U-48・49グリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。

[重複] SP308はSP310と重複し本遺構が古い。また、SP293はSP344と、SP308はSP294・SB15SP309と、SP418はSK132(後期初頭新段階)と、SP455はSI14SP516と重複し本遺構が新しい。SP237断面（図46-EE')の３層はSB26構成ピットが重複している可能性があり、本遺構が新しいとみられる。また、ST１の形成過程で構築されている。

[形態・規模] １間×２間＋張出部の六角形を構成する（中間のSP291・466は伴わない可能性もある)。柱間距離は南北方向が3.76m(SP343 - 455間) ～3.83m(SP293 - 237間)、東西方向が3.65m(SP237 - 455間) ～3.82m(SP293 - 343間)で、張出部間は4.37m(SP308 - 418間)を測る。ピットの最下点は、西側３基が21.41～21.57m、東側３基が21.40～21.66mと、南側が低くなる傾向があるが概ね揃う。プラン内に位置するSN14の確認面は22.4m前後で、SP237・455以外のピットの確認面の標高と近い。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は33～140cm、深さは38～85cmを測る。中間の２基は小型であり値にばらつきがある。堆積土はにぶい黄褐色土を主体とする。SP237・343・418・455では平面形・断面で柱痕跡を確認した。SP343では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

[出土遺物] 後期初頭新段階～後期前葉の破片が出土しており、十腰内Ⅰ式の破片が一定数ある(図106-10～23)。SP237からは両極破片１点、石皿破片１点が出土し、この石皿はSI５Pit７(十腰内Ⅰ式第２段階)、ST１(ⅠQ-42・45)出土破片と、４か所で遠距離接合している(図357)。SP293からは剥片２点、SP343からは剥片１点、SP418からは剥片１点、礫破片１点、SP455からは剥片１点、鐸形土製品１点(図194-７)、ミニチュア土器１点、土器片利用土製品１点(図197-22)が出土している。

[小結] SK132との重複関係からは後期初頭新段階以降で、出土遺物は十腰内Ⅰ式主体である。SI５Pit７との接合関係からは、十腰内Ⅰ式第２段階に位置づけられる可能性がある。

第９号掘立柱建物跡(図48・49・106・204、写真45・56・57・195)

６基の柱穴で構成される(SP219・221・247・286・445・481)。

[位置・確認] IV・W-43・44グリッドに位置する。ST１のⅢ層と、Ⅳ層で検出した。

[重複] SP221はSP175(後期前葉)が重複、SP286はSB10SP283が重複し本遺構が古い。SP221にはSN20が被覆し、本遺構が古い可能性がある。SP286はSN21、SI10の硬化面を切ることから本遺構が新しい。

SP247は、環状列石の張出部との礫129と54の間に所在する。このため確認面付近で一括して出土した石冠（図204-１～４）は、張出部の設置と同時に配置した可能性がある。また、ST１の形成過程で構築されており、SP445はST１Ⅲ-４層を切って構築される(図209)。

[形態・規模] １間×１間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は東西方向が3.60m(SP221 - 286間) ～3.82m(SP219 - 445間)、対辺が3.40m(SP219 - 221間) ～3.55m(SP445 - 286間)で、張出部間は4.28m(SP247 - 481間)を測る。ピットの最下点は、北側３基が21.42～21.65m、南側３基が21.31～21.45mで南側がやや低い傾向にあるが概ね揃う。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は59～95cm、深さは33～110cmを測る。堆積土は黒褐色土、暗褐色土を主体とする。SP247では平面形・断面で柱痕跡を確認し、SP219・221・445では断面で確認できる。

SP221・247・286・445では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。SP247は、柱痕が柱当たりから南側にずれ、堆積土層が乱れていることから、柱が抜き取られた可能性がある。

SP247からは、石冠４点(図204-１～４)、砥石１点、土器１点(図106-26)がまとまって出土した(図49右上、写真56中)。２箇所にまとまって出土し、石冠３点(図204-１～３)は北西から、２→１→３の順に重なって出土し(図49G-G')、２は１・３取上後に出土した。その他は、柱痕の中心から出土し、土器(図106-26)が砥石の直下、石冠(図204-４)の上に砥石が少し重なっていた。出土層位は、図204-３が検出面、図204-１・２・４と砥石と土器が１・２層(柱痕)となる。柱穴は上述したように柱を抜き取った可能性があり、遺物はいずれも柱穴がある程度埋まってから配置されたと考えられる。なお、石冠出土段階では柱痕跡は確認できず取上後に検出した。

[出土遺物] 後期初頭新段階～後期前葉の破片が出土している(図106-24～32)。SP247からまとまって出土した石冠４点(図204-１～４)のうち、３点(１・３・４)は形状と寸法が近似し、断面が三角形で各辺が直線的である。２は上辺と底辺が弧状で、他より成形が丹念である。３は、赤茶褐色物質と黒色物質が付着している。石材は、１が花崗閃緑斑岩、２が粗粒玄武岩、３・４がデイサイトである。砥石は板状で、デイサイトを使用している。SP286からは切断壺の破片が出土している(図106-27)。SP219からは剥片１点、SP445からは礫破片４点が出土した。

[小結] SB10及びSP175との重複関係から後期前葉以前であるが、出土土器からは十腰内Ⅰ式段階内に位置づけられる可能性がある。SP247出土遺物は、環状列石張出部と一連の可能性がある。

第10号掘立柱建物跡(図48・49・106、写真45・56・57)

６基の柱穴で構成される(SP177・215・220・283・489・493)。

[位置・確認] Ⅳ・W-43・44グリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。

[重複] SP220はSR３(十腰内Ⅰ式第１段階)精査後の検出である。SP283はSB９SP286と重複するほかSI10硬化面を切っており、本遺構が新しい。また、ST１の形成過程で構築されており、SB９がST１を切ることから、本遺構も同様の可能性がある。

[形態・規模] １間×１間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は東西方向が3.93m(SP215－493間)～4.16m(SP177－283間)、南北方向が3.66m(SP493－283間)～3.71m(SP215－177間)で、張出部間は3.92m(SP220－489間)を測る。ピットの最下点は、北側３基は21.68～21.79m、南側３基は21.27～21.47mで、南側の標高が低いが近接する３基同士の標高値は概ね揃う。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は57～102cm、深さは45～82cmを測る。堆積土は黒褐色土を主体とする。SP220では断面で柱痕跡が確認できる。SP215・220・283・489・493では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

[出土遺物] 前期後葉(円筒下層ｄ１式)、後期初頭新段階～後期前葉の破片が出土しており、後期前葉の破片が若干多い(図106-33～43)。SP177からは剥片１点、SP283からは台石・砥石破片２点が出土し、うち１点はST１(IQ-45)出土破片と接合している(図357)。

[小結] SR３との重複関係から後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)以前であり、出土土器からは後期前葉に収まる可能性が高い。SB９からSB10への南側への建て替えとみられる。

第11号掘立柱建物跡(図50・51・106・107・205、写真46・57・58・120・155・195・246)

８基の柱穴で構成される(SP165・168・197・277・287・322・333・366)。

[位置・確認] IX・Y-44～46グリッドに位置する。Ⅳ・Ⅴ層で検出した。

[重複] SP277の上部に環状列石主体部の礫40とその掘方が構築されている。SP197はSK154と、SP322はSP328と重複し本遺構が新しい。SP277の重複関係はSP278＜SP277＜SP230(後期初頭新段階～前葉)となり、SB21SP278より本遺構が新しい。また、ST１の形成過程で構築されており、SP366はST１Ⅲ層の縁辺に構築されている(図211)。

[形態・規模] １間×２間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は南北方向が3.55m(SP168－165間・SP322－366間)、東西方向が5.20m(SP165－366間) ～5.79m(SP168－322間)で、張出部間は7.33m(SP287－333間)を測る。ピットの最下点は、北側の３基は22.13～22.31m、南側の３基は22.13～22.18mと概ね揃うが、張出であるSP287は22.537m、SP333は22.39mとやや標高が高い。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は50～116cm、深さは27～101cmを測る。堆積土は暗褐色土を主体とする。SP366では平面形・断面で、SP197・322では断面で柱痕跡が確認できる。SP168・277・322・366では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

[出土遺物] 幅広い時期の遺物が出土しており、その中では小牧野３期の出土が多い(図106-44～107-14)。SP165では貝殻押引文の吹切沢式(図106-44)と、沖附(２)式・小牧野３期(図107-１・２)が共に出土している。図107-２は黒・赤色漆が塗布され、図107-９は同一個体の可能性がある。SP165からは両極剥片１点、剥片３点、礫破片１点、扁平円礫２点(写真246-６・７)、SP168からは剥片２点、球状礫１点、磨製石斧の再加工品と思われる有孔石製品の未成品(図205-１)１点、SP197からは両極剥片１点、剥片２点、SP277からは剥片１点が出土している。

[小結] 環状列石主体部との重複関係から後期前葉以前であり、出土土器からは後期初頭新段階(小牧野３期)の可能性が高い。

第12号掘立柱建物跡(図52・107、写真46・58・59・120)

６基の柱穴で構成される(SP166・199・218・223・227・228)。

[位置・確認] IX-43・44グリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。本建物の一部(SP199)は西側の調査区外に延びる。

[重複] SP166はSB27SP186と重複し本遺構が古い。SP199はSK155と、SP218はSP222と重複し本遺構が新しい。また、ST１の形成過程で構築されているが、SP199周辺にはⅢ層が堆積しておらず新旧関係は不明である。

[形態・規模] １間×１間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は南北方向が3.02m(SP166－223間) ～3.10m(SP199－227間)、東西方向が3.00m(SP199－166間) ～3.06m(SP227－223間)で、張出部間は3.38m(SP228－218間)を測る。ピットの最下点は、北側３基が22.55～22.67m、南側３基が22.18～22.53mと、北側は概ね揃うが南側はばらつきがあり、南側の方が低い。プラン内に位置する弥栄平(２)式の土器埋設炉であるSN17の確認面は23.0m前後で、ピットの確認面よりも高い。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は41～66cm、深さは12～72cmを測る。堆積土は暗褐色土、褐色土を主体とする。SP218・223・227では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

［出土遺物］後期初頭新段階～後期前葉の破片が出土している(図107-15～18)。SP166からは礫破片１点、SP199からは剥片２点が出土している。SP166の上部からは自然礫３点が出土している。
［小結］出土土器からは後期初頭新段階～後期前葉(小牧野３期～十腰内Ⅰ式)とみられる。

第13号掘立柱建物跡(図53・107、写真46・59・60・119)
５基の柱穴で構成される(SP164・184・204・211・214)。１基は調査区外に所在するとみられる。
［位置・確認］IY・ⅡA-43・44グリッドに位置する。ST１のⅢ層と、Ⅳ層で検出した。
［重複］SP164の上部に環状列石の構成礫である礫58、SP184の上部に礫87が構築される。また、SP164はSP207と、SP184はSP210と重複し本遺構が新しい。SP204とSP233の新旧関係は不明である。SP214の重複関係はSP214＜SP226＜SP212・213＜SP211であるが、プラン等からSP211・214を本建物の構成ピットとしたため、切り合い関係との矛盾が生じているが、重複によって失われた構成ピットがあった可能性も考えられる。また、ST１の形成過程で構築されている。
［形態・規模］１間×１間＋張出部の六角形が想定される。柱間距離は南北方向が3.40m(SP204 - 164間・SP214 - 184間)、東西方向が2.05m(SP164 - 184間) ～2.06m(SP204 - 214間)で、張出部間は3.2m前後(SP211 - ●間)と推測される。ピット最下点は、西側２基が22.56～22.63m、東側３基が22.12～22.64mで、SP184のみ標高値が低く他は概ね揃う。
［柱穴・堆積土］柱穴の直径は(55) ～130cm、深さは69～108cmを測る。堆積土は暗褐色土を主体とする。SP184では平面形・断面で、SP204では断面で柱痕跡が確認できる。SP184・214では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。
［出土遺物］後期初頭新段階～後期前葉の破片が出土している(図107-19～22)。壺(図107-22)は隆帯＋両端沈線で文様が描かれ、小牧野３期～十腰内Ⅰ式第１段階とみられる。SP184からはスクレイパー１点、両極剥片１点、自然礫１点(図53F-F')、SP211～213からは礫破片１点が出土している。
［小結］環状列石構成礫との重複関係から後期前葉以前であり、出土土器からは後期初頭新段階～後期前葉とみられる。

第14号掘立柱建物跡(図54・107・176・197、写真46・60・61・79・80・184)
５基の柱穴で構成される(SP528・529・535・536・537)。１基は調査区外に所在するとみられる。
［位置・確認］ⅡA ～ C-44・45グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。
［重複］SP529はSK７(弥栄平(２)式)と、SP536はSK30(沖附(２)式・小牧野３期)・SK31と重複し本遺構が新しい。SP535はSK29と重複し本遺構が古い。
［形態・規模］１間×１間＋張出部の六角形が想定される。柱間距離は東西方向が3.94m(SP528 - 537間)、南北方向が3.69m(SP537 - 535間)で、張出部間は4.91m(SP529 - 536間)を測る。ピット最下点は北側３基が22.55～22.81m、南側２基が22.59～22.61mで、SP537の標高がやや高いが概ね揃う。
［柱穴・堆積土］柱穴の直径は(82) ～108cm、深さは68～98cmを測る。堆積土は褐色土、にぶい黄褐色土を主体とする。SP529では平面で柱痕跡が確認できる。
［出土遺物］後期初頭～後期前葉の破片が出土している(図107-23～28)。SP535からは磨石１点(図176-１)、土器片利用土製品１点(図197-23)、焼成粘土塊２点が出土した。

［小結］SK７・SK30との重複関係から後期初頭新段階(沖附(２)式・小牧野３期)以降であり、出土土器からは後期初頭新段階～後期前葉とみられる。

第15号掘立柱建物跡(図46・47・107、写真44・100)

６基の柱穴で構成される(SP195・249・266・269・309・523)。

［位置・確認］IU-48・49、IV-48グリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。

［重複］SP309はSB８SP308と重複し本遺構が古い。SP523はSK94・SP524と重複し本遺構が新しい。また、ST１の形成過程で構築されている。

［形態・規模］１間×１間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は南北方向が3.98m(SP195－309間)～4.11m(SP266－523間)、東西方向が2.29m(SP309－523間)～2.64m(SP195－266間)で、張出部間は3.57m(SP249－269間)を測る。ピット最下点は、西側３基は21.69～22.08m、東側３基は21.66～22.29mで、南側の柱穴の標高が低くなる傾向があり、ややばらつきがある。

［柱穴・堆積土］柱穴の直径は32～73cm、深さは23～72cmを測る。堆積土はにぶい黄褐色土を主体とする。SP195・523では平面と断面で柱痕跡を確認した。

［出土遺物］後期初頭新段階～後期前葉の破片が出土している(図107-29～33)。

［小結］SB８との重複関係と出土遺物から、後期初頭新段階(沖附(２)式・小牧野３期)～後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)とみられる。

第16号掘立柱建物跡(図55・108・176、写真45・61)

６基の柱穴で構成される(SP163・193・194・239・241・259)。

［位置・確認］IT・U-47・48グリッドに位置する。ST１のⅢ層と、Ⅳ層で検出した。

［重複］SP193はSN16(土器埋設炉:後期初頭新段階～後期前葉)、SP259はSR２(十腰内Ⅰ式第１段階)精査後の検出である。また、SP239はSB20SP240・435と、SP259はSP459と重複し本遺構が新しい。SP241は１基として精査したが、本建物とSB16のプランの重複から、建て替えの可能性がある。また、ST１の形成過程で構築されており、SB20はST１の一部を切ることから、本遺構も同様の可能性がある。

［形態・規模］１間×２間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は東西方向が3.55m(SP259－193間)～3.65m(SP241－194間)、南北方向が2.71m(SP194－193間)～3.05m(SP241－259間)で、張出部間は3.47m(SP239－163間)を測る。ピットの最下点は、西側３基は21.37～21.58m、東側３基は21.29～21.50mでいずれも張出部がやや深くなっているが概ね揃う。プラン内に位置するSN15の確認面は22.5m前後で、北側のピットの確認面と近いが、それ以南のピットの確認面よりも高い。

［柱穴・堆積土］柱穴の直径は55～96cm、深さは38～108cmを測る。南側のピットは浅いが上記のように底面の高さは揃っている。堆積土は褐色土を主体とする。SP193・239では平面形・断面で、SP163では断面で柱痕跡が確認できる。SP193・194・241では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

［出土遺物］後期初頭～後期前葉の様々な時期の破片が出土している(図108-１～９)。SP163からは両極剥片１点、磨石１点(図176-２)、SP239からは剥片１点、磨石１点、石錘１点、礫破片２点、焼成粘土塊１点、SP241からは剥片２点が出土した。

[小結] SR２・SN16との重複関係からは後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)以前であり、出土土器からは後期初頭新段階～後期前葉とみられる。また、SB20から東側のSB16へと建て替えたものとみられる。

第17号掘立柱建物跡(図48・49・108、写真45・70)

６基の柱穴で構成される(SP252・279・284・369・491・499)。

[位置・確認] IU-44、IV-43～45、IW-44グリッドに位置する。Ⅳ層、ST１ベルト・トレンチ壁面で検出した。

[重複] SP252はSN20が被覆し本遺構が古い。また、本遺構範囲内にSI10が重複するが、SI10を先に検出したため本遺構が古いとみられる。SP284はSP482と重複し、本建物中央にSI10が位置するが、新旧関係は不明である。また、ST１の形成過程で構築されており、SP284にはⅢ層が被覆する可能性が高い(図209)。

[形態・規模] １間×１間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は東西方向が4.50m(SP252－279間) ～4.91m(SP284－369間)、南北方向が2.93m(SP252－284間) ～2.97m(SP279－369間)で、張出部間は4.18m(SP491－499間)を測る。ピットの最下点は、北側３基が21.74～22.06m、南側３基が21.21～21.99mで、SP284の標高値が低くなっている。プラン内に位置するSN21の確認面は22.2m前後で、ピットの確認面と近い。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は(33) ～70cm、深さは17～44cmを測る。SP369では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

[出土遺物] 後期初頭新段階～後期前葉の破片が出土している(図108-10～13)。

[小結] SP252を被覆するSN20は、ST１Ⅲ層(人為堆積層)の下部に堆積するⅢ層(自然堆積層)の掘削後に検出している。Ⅲ層(自然堆積層)出土遺物は少なく、Ⅲ層(人為堆積層)の遺物は、IU-44ではⅢ－１～３層から牛ヶ沢(３)式・沖附(２)式・小牧野３期が、IV-44周辺Ⅲ－４～５層は牛ヶ沢(３)式・弥栄平(２)式・小牧野３期が出土しており、廃棄の開始時期は後期初頭古段階に遡る可能性が高い。SN20はSP252の周縁のみに形成されており平面上ではピットに壊されるように見えるが、断面ではSP252の上面に被覆している(図49JJ'・写真70中)。これらから、Ⅲ層の廃棄開始以前(後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式期)に本建物が構築された可能性がある。

第18a・b号掘立柱建物跡(図42～45・108・197、写真44・54・61・62・91・92・94・192)

６基＋建て替え３基の柱穴で構成される。SB18a(建替前)はSP550b・553・562・570・568・42で構成され、18b(建築後)はSP550b・553・562・548・87・43で構成される。西側は共通の柱穴を用い、東側は、SP570→548、SP568→87、SP42→43に建て替えている。

[位置・確認] IU・V-50～52グリッドに位置する。SI３床面、ST１Ⅲ層、Ⅳ層で検出した。

[重複] SP550・553・562の重複関係については前述のSB５・６の項目を参照されたい。SP548・570は同一遺構の可能性があるSK65・SP569に切られ、SP87はSK77(十腰内Ⅰ式第１段階)に切られており、本遺構が古い。SP548・570、SP568はSI03硬化面を壊しており本遺構が新しい。SP42・43はそれぞれSP16・17精査後に確認しており、同一の遺構の可能性がある。SP562は１基の柱穴として精査したが、断面（図43GG'）の検討からは北側の４・６・７・９層が別の柱穴の可能性があり、本遺構の構成柱

と思われる。建て替えに伴う柱穴の重複関係は、SP42＜SP43のみが確認でき、SP87はSP568精査後に検出したが新旧関係は不明、SP548・570も不明である。SP42・43の新旧関係から内側(南西側)に縮小したとみられる(SB18a:SP570－568－42→SB18b:SP548－87－43)。また、ST１の形成過程で構築されている。

[形態・規模] 建て替え前のSB18aは、１間×２間のほぼ正方形を構成する。柱間距離は、南北方向では、SB18aは3.64m(SP570－42間)、SB18bは3.60m(SP548－43間)で、共通する西側は3.66m(SP553－550b間)である。東西方向では、北側でSB18aは3.09m(SP553－570間)、SB18bは2.79m(SP553－548間)、南側でSB18aは3.52m(SP550b－42間)、SB18bは3.13m(SP550b－43間)である。張出部は、SB18aは3.53m(SP562－568)、SB18bは3.15m(SP562－87)を測る。ピットの最下点は、SB18aは21.93～22.27m、SB18bは21.79～22.29mで北東側のSP548・570の標高が高い。西側はSP553が21.14m、SP562の９層部分が21.8m前後、SP550bが21.08mとかなりばらつきがある。建て替えや切り合いが最も密なエリアであり、本来の底面は削平されている可能性もある。

[柱穴・堆積土] 東側の柱穴の直径は41～70cm、深さは45～69cmを測る。堆積土は褐色土を主体とする。SP43・87では断面で柱痕跡が確認できる。SP42・87・548・553・568では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。プラン内に立地するSN４の確認面は22.6m前後で、ピットの確認面の標高と近い。

[出土遺物] 後期初頭新段階～後期前葉の破片が出土している(図108-14・15)。SB６・SB18SP553からは土器片利用土製品２点が出土している(図197-20・21)。

[小結] SK77との重複関係からは十腰内Ⅰ式第１段階以前で、出土遺物からは後期初頭新段階～後期前葉である。SB６の構成柱(SP550b・562)との重複からSB６が新しいとみられる。本遺構とSB５との前後関係は不明である。

第19号掘立柱建物跡(図38・40、写真43・62・63)

６基の柱穴で構成される(SP39・56・72・82・91・126)。

[位置・確認] IW・X-52・53グリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。

[重複] ST１の形成過程で構築されている。

[形態・規模] １間×１間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は東西方向が3.09m(SP39－56間)～3.27m(SP91－82間)、南北方向が2.56m(SP39－91間)～2.83m(SP56－82間)、張出部間は3.85m(SP126－72)を測る。プラン内に位置するSR５(土器埋設炉:弥栄平(２)式)の確認面は23.0m前後で、ピットの確認面よりも高い。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は27～51cm、深さは12～30cmを測る。堆積土は暗褐色土を主体とする。他の遺構に比べ浅いピットが多く、木の根も多く混入している。SP39・56では断面で柱痕跡が確認できる。SP82・91では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

[出土遺物] 後期初頭新段階(沖附(２)式・小牧野３期)、時期不明の小破片が出土しているが図示していない。

[小結] 出土遺物から、後期初頭新段階と考えられる。

第20号掘立柱建物跡(図55・56・108・197、写真45・63)

９基の柱穴で構成される(SP182・188・191・200・240・241・250・372・373)。SP200－182間に１基存在するとみられるが確認できなかった。

[位置・確認] IU・V-45～47グリッドに位置する。ST１のⅢ層と、Ⅳ層で検出した。

[重複]SP240はSB16SP239と重複し本遺構が古い。SP241の重複についてはSB16の項目で前述した。また、ST１の形成過程で構築されており、SP191はST１Ⅲ－４・５層を切って構築される(第２分冊図211)。

[形態・規模] １間×３間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は南北方向が3.28m(SP182－241間)～3.47m(SP191－373間)、東西方向が4.32m(SP191－182間)～4.67m(SP373－241間)で、張出部間は6.32m(SP188－240間)を測る。ピットの最下点は、北側４基が21.58～22.35m、南側３基が21.50～21.97mでばらつきが大きく、特にSP241・SP200が深いが、SP241は建て替えのためとみられる。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は29～82cm、深さは13～68cmを測る。SP182・240・250では平面で柱痕跡が確認できる。SP241・250では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

[出土遺物] 中期末葉～後期初頭新段階(小牧野３期)の破片が出土している(図108-16～18)。SP188からは自然礫２点、SP191からは土器片利用土製品１点(図197-24)、SP240からは焼成粘土塊１点、SP250からは土器片利用土製品１点(図197-25)が出土している。SP241出土遺物はSB16で前述した。

[小結] SB16との重複関係から後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)以前であり、出土土器からは後期初頭新段階(小牧野３期)とみられる。SB20→SB16の可能性が高く、SB22との関係は不明である。

第21号掘立柱建物跡(図50・51・108、写真46・58・63)

５基の柱穴で構成される(SP198・278・282・431・476)。SP282・476間に１基存在すると思われるが確認できなかった。

[位置・確認] IX-44・45グリッドに位置する。ST１のⅢ層、ST１ベルト・トレンチ壁面、Ⅳ・Ⅴ層で検出した。

[重複] 張出部の柱穴であるSP278の新旧関係はSB11の項目で前述した。SP278の上部には環状列石主体部の礫39・40とその掘方が構築されている。SP198の上部に環状列石主体部の礫42とその掘方、SP431の上部に礫38とその掘方が構築される。また、ST１の形成過程で構築されており、SP282はⅢa層、SP431はⅢb層を切り、ST１Ⅲ層の縁辺に構築されている。

[形態・規模] １間×１間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は南北方向が2.43m(SP198－431間)～2.44m(SP282－476間)、東西方向が4.04m(SP282－198間)～4.17m(SP476－431間)で、張出部間は5.01m(SP●－278間)前後と予想される。ピットの最下点は西側２基が22.14～22.18m、東側３基が22.48～22.65mで、それぞれは揃うが西側の標高値が低い。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は47～81cm、深さは18～92cmを測る。堆積土は暗褐色土、黒褐色土を主体とする。SP198では平面形・断面で、SP282では平面で柱痕跡が確認できる。SP282では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

[出土遺物] 後期初頭新段階～後期前葉の破片が出土しており、やや後期初頭新段階(小牧野３期)の破片が多い(図108-19～25)。SP278からは焼成粘土塊１点が出土した。

[小結] 環状列石主体部との重複関係から後期前葉以前であり、出土土器からは後期初頭新段階(小牧

野３期)の可能性が高い。本建物跡の南側に環状列石張出部２が構築されており、ほぼ同様の軸を持つことが注目される。

第22号掘立柱建物跡(図55・56・108・176、写真45・63・64・155・184)

４基の柱穴で構成される(SP201・251・502・564または565)。

[位置・確認] IT・U-45・46、IU-47、IV-46グリッドに位置する。ST１のⅢ層と、Ⅳ層で検出した。

[重複] SP564・565は環状列石構成礫33・145とその掘方が上部に構築される。また、SP546・565はSK141(小牧野３期)と重複し本遺構が新しい。SP201はSP206・SK156(後期初頭新段階)と重複し本遺構が新しい。また、ST１の形成過程で構築されており、SP502はST１Ⅲ-４・５層を切るSK140を切って構築される(第２分冊図211)。また、SP564・565はST１検出面で確認した遺構で、Ⅲ-１・２層を切って構築されている。張出部に位置するSP370はⅢ-１層が被覆しており(第２分冊図212)、伴わない可能性が高いと判断した。

[形態・規模] １間×１間の長方形を構成する。柱間距離は東西方向が3.26m(SP502 - 201間) ～3.27m(SP564または565 - 251間)、南北方向が4.32m(SP564または565 - 502間) ～4.49m(SP251 - 201間)である。ピットの最下点は、北側２基はSP564:22.0m前後、SP565:21.4m前後、SP251は21.90m前後で、南側２基は21.20～21.35mで、北側はSP565であれば概ね揃うが、南側が大幅に深い。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は51～166cm、深さは28～126cmを測る。堆積土は明黄褐色土を主体とする。SP251では、平面形・断面で柱痕跡が確認できるほか、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

[出土遺物] 後期初頭新段階(小牧野３期) ～後期前葉の破片が出土しており、その中では小牧野３期が多い(図108-26～30)。SP564・565はSK141と共に小牧野３期が多く出土しており、図108-29は赤色顔料が付着する壺とみられる。SP564からは剥片１点、SP565からは石匙１点、磨石１点(図176-３・４)、礫破片１点が出土している。

[小結] 環状列石構成礫との重複関係からは後期前葉以前であり、出土土器からは後期初頭新段階(小牧野３期)とみられる。

第23号掘立柱建物跡(図38・40・108、写真43・64)

６基の柱穴で構成される(SP７・341・345・403・448・469)。

[位置・確認] IW-51、IX-50・51グリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。

[重複] SP７はSP162精査後の検出であり、本遺構が古い。SP403はSK130と重複し本遺構が新しい。

[形態・規模] １間×１間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は南北方向が3.34m(SP341 - 469間)(SP448 - 345間)、東西方向が1.94m(SP341 - 448間) ～2.23m(SP469 - 345間)で、張出部間は3.50m(SP403 - ７間)を測る。ピットの最下点は、東側が22.52～22.64m、西側が22.27～22.66mで、SP469の標高が低いがそれ以外は概ね揃う。プラン内に位置するSN３の確認面は23.1m前後で、ピットの確認面の標高よりやや高い。また、ST１の形成過程で構築されている。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は27～38cm、深さは28～68cmを測る。堆積土は暗褐色土を主体とする。柱痕跡、柱の当たりは確認されなかった。

［出土遺物］SP345から後期初頭新段階～前葉とみられる破片が出土している(図108-31)。
［小結］SK130との重複関係から、後期前葉と考えられる。

第24号掘立柱建物跡(図38・40、写真43・64・65)
６基の柱穴で構成される(SP41・70・100・332・468・547)。
［位置・確認］IV-51、IW-51・52グリッドに位置する。ST１ベルト断面、Ⅳ層で検出した。
［重複］SP41はSK71精査後の検出であり、本遺構が古い。SP547はSI３と重複するが新旧関係は不明である。また、ST１の形成過程で構築されており、SP70はⅢ層が被覆するが、他のピットはⅢ層除去後に確認しており、新旧関係は確認できなかった。
［形態・規模］１間×１間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は南北方向が3.16m(SP70 - 100間)～3.34m(SP468 - 547間)、東西方向が1.87m(SP468 - 70間) ～2.34m(SP547 - 100間)で、張出部間は3.20m(SP332 - 41間)を測る。ピットの最下点は西側が22.12～22.49m、東側が22.25～22.60mとばらつきがある。
［柱穴・堆積土］柱穴の直径は36～53cm、深さは21～67cmを測る。堆積土は暗褐色土、褐色土を主体とする。SP70・100・547は断面で柱痕跡が確認できる。SP41は底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。
［出土遺物］後期初頭新段階～前葉に帰属するとみられる、地文のみ、折返口縁、赤色顔料が付着する無文の破片等が出土しているが図示していない。SP332からは剥片１点が出土した。
［小結］出土土器から、後期初頭新段階～前葉と考えられる。

第25号掘立柱建物跡(図42・45・109、写真44)
５基の柱穴で構成される(SP302・313・315・405・515)。SP388・494付近に１基重複していたとみられるが、削平のためか確認できなかった。
［位置・確認］IU・V-49・50グリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。
［重複］SP315上部に環状列石構成礫30が構築される。SP313はSK73と重複するが新旧関係は不明である。また、ST１の形成過程で構築されている。
［形態・規模］１間×１間＋張出部の六角形を構成することが推定されるが、あるいは１間×１間の４本柱の可能性もある。柱間距離は東西方向が2.87m(SP302 - 515間) ～2.94m(SP315 - 313間)、南北方向が1.78m(SP302 - 315間) ～2.318m(SP515 - 313間)、張出部間は4.382m(SP405 - ●)前後と推測される。ピットの最下点は、北側３基は21.88～22.37mとばらつきがあり、南側２基は21.79～21.85mと概ね揃う。
［柱穴・堆積土］柱穴の直径は32～66cm、深さは37～96cmを測る。SP405では底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。SP302は底面の一部がピット状を呈し、柱の当たりの可能性がある。
［出土遺物］後期初頭新段階(小牧野３期) ～後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の破片が多く出土している(図109-１～６)。SP405から出土した壺の破片は、SP407(ⅡA-52)出土破片と遠距離接合している(図109-６)。ほか、SP405からは剥片１点が出土した。
［小結］環状列石との重複関係からは後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)以前であり、出土遺物から、後期初頭新段階(小牧野３期) ～後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられる。

第26号掘立柱建物跡(図46・47・109、写真44)

７基の柱穴で構成される(SP170・237・261・292・304・340・439)。SP524・418間に本遺構を構成する柱穴があったと思われるが確認できなかった。

[位置・確認] IT・U-48・49グリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。

[重複] SP439はSP438と重複し本遺構が新しい。SB８の項目で前述したとおり、SP237の３層部分が本遺構の構成ピットに相当する可能性がある。また、ST１の形成過程で構築されている。

[形態・規模] １間×２間＋張出部の六角形を構成するが、張出のない１間×２間のプランとなる可能性もある。柱間距離は南北方向が3.09m(SP340 - 304間) ～3.13m(SP439 - 170間)、東西方向が4.30m(SP170 - 304間) ～4.42m(SP439 - 340間)で、張出部間は5.44m前後(SP261 - ●間)と推測される。プラン内に位置するSN14の確認面は22.4m前後で、ピットの確認面の標高よりも高い。ピットの最下点は、北側３基は21.91～22.22m、南側２基は21.72～21.79m、SP237の３層部分は21.9mと概ね揃うが、南側の標高が低くなる傾向がある。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は36～70cm、深さは19～44cmを測る。SP170・439では、平面形で柱痕跡が確認できるほか、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を検出した。

[出土遺物] 後期初頭新段階～後期前葉の破片が出土している(図109-7～10)。SP304からは剥片１点が出土した。

[小結] 出土土器から後期初頭新段階～後期前葉とみられ、SB８よりも古い可能性がある。

第27号掘立柱建物跡(図52・109、写真46・58・65)

３基の柱穴で構成される(SP186・224・272)。もう３基は調査区外に所在するとみられる。

[位置・確認] IX・Y-43グリッドに位置する。ST１のⅢ層と、Ⅳ層で検出した。本建物の西側は調査区外に延びる。

[重複] SP186上部に環状列石礫144とその掘方が構築される。SP186はSB12SP166と重複し本遺構が新しい。また、ST１の形成過程で構築されている。

[形態・規模] １間×２間のほぼ正方形を構成するとみられる。柱間距離は南北方向で3.10m(SP272 - 186間)を測る。ピットの最下点は22.43～22.64mと概ね揃う。

[柱穴・堆積土] 柱穴の直径は50～61cm、深さは23～41cmを測る。堆積土は黒褐色土を主体とする。SP186・224では平面形・断面で柱痕跡が確認できる。SP272では、底面付近に柱の当たりと考えられる硬化面を２箇所検出しており、建て替えの可能性がある。

[出土遺物] SP224からは中期末葉～後期初頭、SP272からは後期初頭新段階～後期前葉の破片が出土している(図109-11～13)。

[小結] SB12との重複関係及び出土土器から後期初頭新段階～後期前葉とみられる。(折登)

第28号掘立柱建物跡(図56・109、写真42)

５基の柱穴で構成される(SP325・327・329・330・334)。SP330とSP334の間に構成柱穴があったと思われるが、遺構の重複やトレンチにより検出できなかった。

[位置・確認] ⅡA-46グリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。本遺構は、柱間や柱穴などの規模が他

の建物より小型で、柱穴が欠落し、柱穴の掘り込みが浅いといった点から、当初は認定していなかった。だが、SQ３に隣接することから、他の掘立柱建物跡(SB１～27)とは性格の異なる、配石遺構に付属する小型の掘立柱建物跡や覆屋等の可能性を重視し、掘立柱建物跡と認定することとした。

［重複］欠失している柱穴は、SK121やSQ３と重複していた可能性がある。

［形態・規模］本遺跡の他の掘立柱建物跡より小型で、１間×２間＋張出部の六角形を構成する。柱間距離は南北方向が2.50m(SP330-SP334間)～2.55m(SP329-SP327間)、東西方向が1.15m(SP329-SP330間)～1.18m(SP327-SP334間)で、張出部間は2.25m前後(SP325-●間)と推測される。ピットの最下点は北西側(SP329・330・325)が23.43～23.46mと揃う一方で、南側のS327は23.19m、SP334は22.86mと不揃いである。

［柱穴・堆積土］柱穴の直径はSP334が30.1cmで、他の柱穴は54.6cm～66.2cmと規模が揃う。深さはSP327が最も浅く11.7cmで、SP325・329・330は22.5～23.4cmと揃い、SP334は48.5cmと深い。SP325は柱痕跡が確認できた。

［出土遺物］縄文土器は、SP330からは10.7gが出土し後期初頭新段階の壺を１点図示した(図109-14)。SP334からは46.6gが出土し後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の浅鉢を１点図示した(図109-15)。SP334からは46.6gが出土し後期初頭新段階～前葉の深鉢を１点図示した(図109-16)。石器はSP327の検出面から有茎で珪質頁岩製の石鏃が出土した(掲載外)。

［小結］出土土器から後期初頭新段階～後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)で、配石遺構に付属するとすれば十腰内Ⅰ式第１段階である。　(長谷川)

第５節　焼土遺構

第11・12号焼土遺構は第14号竪穴建物跡の炉、第23号焼土遺構は第７号竪穴建物跡の炉、第24号焼土遺構は第13号竪穴建物跡の炉、第25号焼土遺構は第12号竪穴建物跡の炉となり、第26号焼土遺構は欠番である。

第１号焼土遺構(図61、写真66)

[位置・確認]調査区北東側の緩斜面、ⅠY-53グリッドに位置する。ST１Ⅲ-１層を精査中に確認した。

[重複] ST１の形成過程で構築されている。南西側の一部を撹乱で欠失する。

[構造] Ⅲ-１層が赤褐色に弱く焼けている。被熱範囲の平面形状は楕円形と思われる。検出面での長軸は64㎝、短軸は残存長40㎝で、最大厚10㎝で被熱している。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 周辺の遺構や検出面から後期初頭から前葉と考えられる。　(秦)

第２号焼土遺構(図61、写真66)

[位置・確認]調査区中央東側の緩斜面上、ⅠX・W-53グリッドに位置しており、ST１Ⅲ層で確認した。

[重複] ST１形成過程で構築されたと考えられる。

[構造] Ⅲ層が赤褐色に弱く焼けている。平面形状は不整な隅丸方形である。検出面の長軸は46㎝、短軸は40㎝である。

[出土遺物] 火床面直上から縄文土器3.1gが出土しているが小破片のため掲載していない。

[時期] 検出層位から、後期初頭～後期前葉と考えられる。

第３号焼土遺構(図61、写真66)

[位置・確認] 調査区中央東側の平場、ⅠX-51グリッドに位置しており、Ⅲ層で確認した。

[重複] 撹乱に遺構東側を壊される。

[構造] Ⅲ層が赤褐色に弱く焼けている。平面形状は楕円形と推測される。検出面の長軸は46㎝、短軸は21㎝である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 検出層位から、後期初頭～後期前葉と考えられる。

第４号焼土遺構(図61、写真66)

[位置・確認] 調査区中央東側の斜面上、ⅠU-51グリッドに位置しており、ST１Ⅲ層で確認した。

[重複] 根撹乱に本遺構中央部を壊される。本遺構精査後にSK66を検出した。

[構造] 掘方内に板状の礫が設置された立石炉である。板状礫１個が立った状態で確認され、礫の平坦面が火床面側に向く。撹乱に上部を壊されるが礫は原位置に近いとみられる。Ⅲ層は褐色によく焼けており、平面形状は楕円形と推測される。検出面の長軸は76㎝、短軸は48㎝である。周辺に多数のピットが所在しており竪穴建物の炉である可能性がある(本章第４節)。

［出土遺物］出土しなかった。炉体の礫はデイサイト製の台石を利用している。
［時期］SK66との重複関係から後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式)以降である。

第５号焼土遺構(図61、写真66・67)
［位置・確認］調査区中央東側の平場、ⅠX-51グリッドに位置しており、Ⅲ層で確認した。
［重複］本遺構精査後にSB２SP544を検出した。
［構造］掘方内に板状の礫が設置された立石炉である。板状礫１個が立った状態で確認され、礫の平坦面が火床面側に向く。Ⅲ層が褐色に弱く焼けている。平面形状は三角形と推測される。検出面の長軸は37㎝、短軸は36㎝である。竪穴建物の存在を考慮しベルトをかけて精査したが立ち上がりは確認できなかった。しかし、周辺には多数のピットが所在しており竪穴建物の炉である可能性が残る(本章第４節)。
［出土遺物］周辺から後期初頭新段階～後期前葉の土器108.2gが出土したが、小破片のため掲載していない。炉体の礫は自然礫である。SB２SP544堆積土上位から礫が数点出土しており、本遺構に伴っていた礫が根撹乱等で移動した可能性もあるが、推定の域を出ない。
［時期］SB２SP544との重複関係と周辺の出土遺物から、後期初頭新段階以降である。　　(折登)

第６号焼土遺構(図61、写真67)
［位置・確認］調査区北東側に緩斜面、ⅡA-54グリッドに位置する。ST１のⅢ-１層を精査中に確認した。
［重複］ST１の形成過程で構築されている。
［構造］Ⅲ-１層が明赤褐色に被熱した範囲である。平面形状は不整楕円形で、検出面での長軸82㎝、短軸66㎝で、最大厚10㎝で被熱している。
［出土遺物］出土しなかった。

第７号焼土遺構（図61、写真67）
［位置・確認］調査区東側の緩斜面、ⅠX-53グリッドに位置する。ST１のⅢ-1層を精査中に確認した。
［重複］ST１の形成過程で構築されている。また、撹乱により西側が欠失する。
［構造］Ⅲ-１層が明赤褐色に被熱した範囲である。平面形状は不整円形で、検出面の長軸60㎝、短軸の残存長30㎝で、最大厚6㎝で被熱している。
［出土遺物］南側から後期初頭～前葉と思われる土器が出土したが、本遺構に伴う土器ではない。
［時期］周辺の遺構や検出面から、後期初頭から前葉の時期幅と考えられる。　　(秦)

第８号焼土遺構(図62、写真67)
［位置・確認］調査区中央東側の緩斜面上、ⅠV-51グリッドに位置しており、SI3直上で確認した。
［重複］本遺構精査後にSI３硬化面、SB18SP87、SK77、SP31を検出した。
［構造］Ⅲ層が明赤褐色・褐色によく焼けている。平面形状は楕円形である。検出面の長軸は60㎝、短軸は49㎝である。
［出土遺物］出土しなかった。
［時期］SB18・SK77との重複関係から後期前葉(十腰内Ⅰ式)以降である。

第９号焼土遺構(図62、写真67・68)

[位置・確認] 調査区中央東側の斜面上、ⅠU-51グリッドに位置しており、ST１Ⅲ層で確認した。

[重複] 本遺構精査後にSK70を検出した。

[構造] Ⅲ層が明赤褐色・黒褐色によく焼けている。平面形状は長楕円形である。検出面の長軸は89㎝、短軸は42㎝である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] SK70との重複関係から後期初頭古段階以降である。

第10号焼土遺構(図62、写真68)

[位置・確認] 調査区中央東側の緩斜面上、ⅠX-53グリッドに位置しており、ST１Ⅲ層で確認した。

[構造] Ⅲ層がにぶい褐色に弱く焼けている。平面形状は不整な楕円形である。検出面の長軸は54㎝、短軸は37㎝である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 検出層位から、後期初頭～後期前葉と考えられる。　（折登）

第13号焼土遺構(図62、写真68)

[位置・確認] 調査区中央の斜面、ⅠT-48グリッドに位置する。ST１のⅢ-１層を精査中に確認した。

[重複] ST１の形成過程で構築されている。SB26の柱間上に位置するが、前後関係は不明である。なお、SB26-SP170の底面は標高21.7ｍで、SN13の検出面は22.2ｍと0.5ｍの標高差がある。

[構造] Ⅲ-１層が明赤褐色に弱く被熱した範囲である。平面形状は不整長楕円形で、検出面での長軸93㎝、短軸26㎝で、最大厚３㎝ほどで被熱している。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 周辺の遺構や検出面から、後期初頭から前葉と考えられる。

第14号焼土遺構(図62、写真68)

[位置・確認]調査区中央の斜面、ⅠT～U-48グリッドに位置する。ST１のⅢ-１層を精査中に確認した。

[重複] ST１の形成過程で構築されている。SP298と重複し、本遺構が新しい。SP298は本遺構の完掘後、Ⅲ-１層を掘り下げた後に検出した。SB８・26の内側に位置し、SB８の構成柱は底面の標高21.5ｍ前後で、SN14の検出面を機能面と推定すると、互いの比高差は1.1ｍである。SPの深さは0.7～0.8ｍであるため、検出面より上位に掘り込み面があったことを想定すると、SB８に伴う遺構の可能性がある。一方のSB26は構成柱の底面が標高22.0ｍ前後で、SN14との比高差は0.6ｍである。SPの深さは0.2～0.4ｍで、SB８と同様に考えると、SB26に伴う遺構の可能性がある。このため、いずれかの建物に付属する可能性を想定できる。周辺には多数の小ピットがあり、竪穴建物の炉の可能性も残る（本章第４節)。

[構造] Ⅲ-１層がにぶい褐色に弱く焼けている。平面形状はひょうたん形である。検出面の長軸は53㎝、短軸は23㎝で、最大６㎝の厚さで被熱している。

[出土遺物] 出土しなかった。

［時期］周辺の遺構や検出面から後期初頭から前葉と考えられる。

第15号焼土遺構(図62、写真68・69)

［位置・確認］調査区中央の斜面、ⅠU-47グリッドに位置する。ST１のⅢ-１層を精査中に確認した。

［重複］ST１の形成過程で構築され、SB16の北東側の内側に位置する。SB16は検出面からの深さは0.4～1.0ｍと幅広いが、底面は標高21.6ｍ前後に揃う。SN15の検出面は22.5ｍ前後で、構成柱の底面との比高差は0.9ｍで、SPの掘り込み面が上位にあることを想定すると、SB16に伴う遺構の可能性がある。SN14同様、周辺には多数の小ピットがあり、竪穴建物跡の炉の可能性も残る。

［構造］Ⅲ-１層が橙色に弱く被熱した範囲である。平面形状は不整長楕円形である。検出面の長軸70㎝、短軸41㎝で、最大厚６㎝で被熱している。

［出土遺物］出土しなかった。

［時期］周辺の遺構や検出面から、後期初頭から前葉と考えられる。

第16号焼土遺構(図62・116、写真69・156)

［位置・確認］調査区中央の斜面、ⅠT-47グリッドに位置する。ST１のⅢ-１層を精査中に確認した。

［重複］ST１の形成過程で構築されている。また、SB16SP193と重複し、本遺構が新しい。SP193は本遺構の完掘後、Ⅲ-１層を掘り下げて検出した。東側の弧状のピット群(SP172・173・256・260・261)などと建物を構成する可能性があるが、西側はSP245の他に伴う可能性のあるピットを検出できなかったため、建物と認定せず、焼土遺構とした。

［構造］Ⅲ-１層で被熱範囲を伴う土器埋設炉である。土器掘方に焼土は伴わないため、機能面は検出面より上位と考えられる。埋設土器の内面は、剥落が顕著で、強い被熱の痕跡と考えれられる。土器内堆積土にも焼土がみられないことから、廃絶時に掻き出したと思われる。被熱範囲は長軸70㎝、短軸40㎝の不整台形で、最大厚８㎝で明赤褐色に被熱している。

［出土遺物］土器は堆積土１層から、826.3gが出土した。このうち埋設土器１点(図116-１)を図示した。後期初頭新段階～前葉の深鉢で、胴部に単軸絡条体第５類が縦に施文され、底部には笹の木葉痕がある。

［時期］埋設土器から、後期初頭新段階から後期前葉と考えられる。　(秦)

第17号焼土遺構(図62・116、写真69・156)

［位置・確認］調査区西側の緩斜面上、ⅠX-43・44グリッドに位置しており、Ⅲ-２層で検出した。当初は土器埋設遺構を想定して精査したが、被熱痕跡や焼土から立石土器埋設炉と判断した。

［重複］SB12の内側に位置するため、SB12に伴う炉跡の可能性がある。本遺構から20㎝程下位でSB12を検出した。SB12は本遺構の精査時では認識しておらず、機能面も検出できていないことから、遺構配置以外に伴うと判断する材料がない。また、礫140・147などと検出面が同レベルで、関連する遺構の可能性がある。

［構造］埋設土器の南側に焼土があり、板状のデイサイトの立石が伴う。焼土は掘方の上位で形成されている。埋設土器の東側にも土器片が配置されている。立石の表裏と土器の内面に被熱痕跡がみら

れ、立石は土器より上の範囲で顕著である。
［堆積土］土器と礫の掘方は、Ⅲ－２層を掘り込んでいる。土器内の堆積土と掘方には焼土がみられないことから、使用後に掻き出された可能性がある。
［出土遺物］土器は後期初頭新段階(弥栄平(２)式)が出土した。総重量は3,289.4gで、２点図示した(図116－２・３)。埋設土器(図116－２)は略完形の深鉢で、波状口縁で口縁部以下に入組文などが施文され、弥栄平(２)式である。埋設土器の東側から出土した破片(図116－３)は、深鉢で内面が被熱しており、縄文の上から沈線文が施文され、埋設土器と同時期に位置付けられる。
［時期］埋設土器から、後期初頭新段階(弥栄平(２)式)と考えられる。　(長谷川)

第18号焼土遺構(図63・116、写真69・70)
［位置・確認］調査区南側の緩斜面、Ⅰ0-47グリッドに位置する。Ⅲa層で礫のまとまりと焼土の範囲を確認した。
［重複］西側のSP135・138・139と建物を構成する可能性があるが、建物を構成するに十分なピットを検出できなかったため、単独の焼土遺構とした。
［構造］Ⅲa層に掘方と被熱範囲を持つ石囲炉である。東側に６個、西側に５個、計11個の礫が東西に列状に並び、南側に大きな礫を、北側に小さな礫を配置する。内側の被熱範囲は、北側に向かって滴形に広がる平面形状で、検出面での長軸100㎝、短軸60㎝で、最大厚８㎝で被熱している。礫の配置や焼土範囲の形状から、北側が開口して使用されていたと思われる。
　礫は全て単一の掘方内に据えられている。石材は、凝灰岩やデイサイト等を用いていると思われるが、石材鑑定を行っていないため、詳細は不明である。
［出土遺物］土器は堆積土１層から、125.5g、焼土内から32.1gが出土し、うち２点(図116－４・５)を図示した。４は十腰内Ⅰ式の口縁部破片、５は後期初頭新段階～前葉の口縁部破片である。石器は、玉髄質珪質頁岩の剥片が１点出土した。
［時期］堆積土出土土器から、十腰内Ⅰ式期と考えられる。

第19号焼土遺構(図63)
［位置・確認］ⅠR-45グリッドに位置する。ST１のⅢ－１層を精査中に確認した。
［重複］ST１の形成過程で構築されている。
［構造］Ⅲ－１層が褐色に焼けている。平面形状は楕円形と思われ、検出面での長軸60㎝、短軸の残存長46㎝で、最大厚10㎝で被熱している。
［出土遺物］出土しなかった。
［時期］周辺の遺構や検出面から、後期初頭から前葉と考えられる。　(秦)

第20号焼土遺構(図63、写真70)
［位置・確認］調査区西側の緩斜面上、ⅠV-43グリッドに位置しており、Ⅲ層上面で検出した。本遺構を被覆するようにST１堆積層が堆積している。
［重複］SB17SP252より新しい。また、検出層位からST１形成以前に構築されたと考えられる。

［構造］Ⅲ層が赤褐色に弱く被熱している。平面形状は不整形である。検出面の長軸は42㎝、短軸は36㎝で、最大５㎝の厚さで被熱している。
［出土遺物］出土しなかった。
［時期］検出層位から、ST１形成以前の後期初頭と考えられる。

第21号焼土遺構(図63、写真70)
［位置・確認］調査区西側の緩斜面上、ⅠV-44グリッドに位置しており、Ⅲ層上面で検出した。本遺構を被覆するようにST１堆積層が堆積している。
［重複］SB９SP286より古く、検出層位からST１形成以前に構築されたと考えられる。
［構造］Ⅲ層が赤褐色に弱く被熱している。平面形状は不整形である。検出面の長軸は73㎝、短軸は45㎝で、最大７㎝の厚さで被熱している。
［出土遺物］出土しなかった。
［時期］検出層位から、ST１形成以前の後期初頭と考えられる。

第22号焼土遺構(図63・177、写真70・185)
［位置・確認］調査区中央西側の緩斜面上、ⅡA-48グリッドに位置しており、Ⅳ層上面で検出した。
［重複］SK158より新しい。
［構造］立石炉で、長軸上の一端に扁平礫が配置されている。Ⅳ層が赤褐色に弱く被熱している。平面形状は不整形である。検出面の長軸は34㎝、短軸は30㎝で、最大７㎝の厚さで被熱している。
［出土遺物］立石炉の炉石は、砥石が転用されている(図177-２)。
［時期］十腰内Ⅰ式第１段階の土器が出土しているSK158より新しい事から、後期前葉と考えられる。
(小山)

第27号焼土遺構(図63・116、写真70)
［位置・確認］調査区西側の緩斜面上、ⅠU-43グリッドに位置しており、ST１のⅢ-１層掘り下げ中で確認した。
［重複］ST１の形成過程で構築されたと考えられる。
［構造］Ⅲ-１層が赤褐色に弱く被熱している。平面形状は不整な隅丸方形である。検出面の長軸は42㎝、短軸は36㎝で、最大５㎝の厚さで被熱している。
［出土遺物］遺構周辺の同レベルから出土した土器685ｇを本遺構のものとして取り上げた。後期初頭新段階(図116-６)、後期初頭新段階～後期前葉(図116-７・８)、十腰内Ⅰ式第１段階(図116-９)が出土している。
［時期］検出層位及び周辺の遺物から、後期初頭～後期前葉と考えられる。

第28号焼土遺構(図63・116、写真70)
［位置・確認］調査区中央の平坦面上、ⅡA-48グリッドに位置し、Ⅳ層の掘り下げ中に確認した。
［重複］ST１の形成過程で構築されたと考えられる。

［構造］Ⅲ－１層が赤褐色に弱く被熱している。平面形状は楕円形である。検出面の長軸は21㎝、短軸は17㎝で、最大４㎝の厚さで被熱している。
［出土遺物］遺構周辺の同レベルから出土した土器168ｇを本遺構のものとして取り上げた。小牧野３期(図116-10)、十腰内Ⅰ式(図116-11)が出土した。
［時期］検出層位及び周辺の遺物から、後期初頭～後期前葉と考えられる。　（小山）

第６節　土坑

第１号土坑(図64・117・177、写真71・185)

[位置・確認] 調査区北側の平場、ⅡI-58グリッドに位置しており、Ⅴ層で褐灰色シルトとにぶい黄褐色粘質土の広がりとして確認した。

[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端156×136㎝、下端202×198㎝、深さ64㎝である。底面積は3.114㎡である。

[堆積土] 黄褐色土や褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階の沖付(２)式の破片が出土している。総重量は628.9ｇで、１点図示した(図117-１)。石器は石錐が１点出土している(図177-３)。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(沖付(２)式)以降と考えられる。

第２号土坑(図64・117・177・197、写真71・157・185)

[位置・確認] 調査区北側の平場、ⅡI・J-55・56グリッドに位置しており、Ⅴ層で灰黄褐色ローム質土と黒褐色土の広がりとして確認した。

[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端204×158㎝、下端248×208㎝、深さ58㎝である。底面積は3.849㎡である。

[堆積土] 灰黄褐色ローム質土や黄褐色ロームを主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物]土器は後期初頭新段階から前葉と考えられるものが出土している。総重量は2,764.9ｇで、２点図示した(図117-２・３)。３は深鉢で、中央の下位から口縁部を南東に向けた横倒しの状態で出土した。石器は石錐１点(図177-５)・スクレイパー１点(図177-６)・剥片14点が出土している。土製品は土器片利用土製品が１点出土している(図197-28)。動物遺体は貝類が出土しており、分析の結果、ハマグリであった(第４章第５節)。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)以降と考えられる。

第３号土坑(図64・117・177、写真71・185)

[位置・確認] 調査区北側の平場、ⅡI-53・54及びⅡJ-53グリッドに位置しており、Ⅴ層でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端180×166㎝、下端260×248㎝、深さ76㎝である。底面積は5.114㎡である。

[堆積土] 黄褐色土や暗褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階の小牧野３期の破片が出土している。総重量は496.1ｇで、２点図示した(図117-４・５)。石器は石鏃１点(図177-７)・剥片３点・台石１点(図177-８)が出土しており、石鏃と台石は底面から出土した。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)以降と考えられる。

第４号土坑(図64・117・118・177・194、写真71・72・157・185・190)

[位置・確認] 調査区北側の平場、ⅡF-51・52グリッドに位置しており、Ⅴ層で黒褐色土と暗褐色土の広がりとして確認した。

[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端172×158cm、下端184×168cm、深さ54cmである。底面積は2.544㎡である。

[堆積土] 暗褐色土や褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は主に後期初頭新段階の弥栄平(２)式が出土している。総重量は6,185.3ｇで、４点図示した(図117-６～図118-３)。石器はスクレイパー１点(図177-10)・二次加工剥片１点(図177-９)・剥片39点・球状礫１点が出土している。土製品は土偶５点(図194-９～13)・ミニチュア土器２点(図194-14)が出土している。土偶は頭部２点・腕部３点である。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(弥栄平(２)式)と考えられる。

第５号土坑(図64・118、写真72)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡC・D-45グリッドに位置しており、Ⅵ層で暗褐色砂質土の広がりとして確認した。

[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は上端106×106cm、下端96×94cm、深さ16cmである。底面積は0.746㎡である。

[堆積土] 暗褐色砂質土やにぶい黄褐色砂質土を主体としている。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階から前葉と考えられる破片が出土している。総重量は185.6ｇで、１点図示した(図118-４)。石器はスクレイパー１点・剥片11点が出土している。

[時期] 出土土器から、後期初頭新段階から前葉と考えられる。

第６号土坑(図64・118、写真72)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡC-45グリッドに位置しており、Ⅵ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状は皿状である。規模は上端88×80cm、下端70×56cm、深さ10cmである。底面積は0.312㎡である。

[堆積土] 暗褐色土を主体としている。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階の小牧野３期の破片が出土している。総重量は34ｇで、１点図示した(図118-５)。

[時期] 出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)以降と考えられる。

第７号土坑(図65・118・177・198、写真72・73・158・185・192)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡB・C-45グリッドに位置しており、Ⅴ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複] SB14SP529と重複しており、本遺構が古い。

[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端206×

176㎝、下端210×192㎝、深さ94㎝である。底面積は3.349㎡である。
[堆積土] 褐色土や黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。
[出土遺物]土器は後期初頭新段階から前葉と考えられるものが出土している。総重量は2,381.2ｇで、２点図示した(図118-６・７)。６は深鉢の底部で、北東壁際の底面直上から正立の状態で出土した。石器は剥片８点・磨石１点(図177-11)が出土している。土製品は土器片利用土製品が２点出土している(図198-１・２)。
[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(弥栄平(２)式)以降と考えられる。

第８号土坑(図65・118・177・194、写真73・158・185・190・192)
[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡF-50グリッドに位置しており、Ⅴ層で黒褐色土とにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。
[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端224×200㎝、下端244×240㎝、深さ76㎝である。底面積は4.82㎡である。また底面の北側で、焼土とピットが各１基検出された。焼土範囲は径38㎝、深さは２㎝である。ピットの上端は長軸40㎝、深さは６㎝である。
[堆積土] 褐色土や黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。
[出土遺物] 土器は後期初頭新段階の沖附(２)式が出土している。総重量は4,183.5ｇで、３点図示した(図118-８～10)。８は深鉢で、中央の中位から口縁部を北西に向けた横倒しの状態で出土した。10は壺の下半部で、北壁際の中位から正立の状態で出土した。石器は石匙１点(図177-４)、西壁際の底面から礫が２点出土している。土製品はミニチュア土器が１点出土している(図194-15)。
[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(沖附(２)式)と考えられる。

第９号土坑(図65・119、写真73・74・158)
[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡD-48・49グリッドに位置しており、Ⅴ層で褐色土と黄褐色土の広がりとして確認した。
[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端190×170㎝、下端210×204㎝、深さ50㎝である。底面積は3.334㎡である。
[堆積土] 褐色土やにぶい黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。
[出土遺物] 土器は後期初頭新段階から前葉と考えられるものが出土している。総重量は5,075.9ｇで、５点図示した(図119-１～５)。１は初頭新段階の沖附(２)式・小牧野３期の浅鉢で、図152-７(SK134)と同一個体と考えられる。石器は両極剥片１点、剥片６点、台石・砥石破片１点が出土している。土製品は焼成粘土塊７点・ミニチュア土器１点が出土している。動物遺体は西壁際から、貝類や魚類・鳥類・哺乳類の骨が出土している。分析の結果、貝類はホソウミニナ・アサリ・ハマグリ・マガキ・シオフキ・オキシジミ・ウネナシトマヤガイ・シジミ属、魚類は板鰓亜綱・ニシン科・カタクチイワシ・カワハギ科・タラ科・ダツ科・スズキ属・メバル科・ヒラメ・コイ科・ボラ科・カレイ科・アイナメ科・タイ科・ハゼ科・サケ科など、鳥類はカモ科などであった。哺乳類はイタチ科などの小型哺乳類と考えられる(第４章第５節)。

［時期］堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(沖附(２)式・小牧野３期)以降と考えられる。

第10号土坑(図65、写真74)

［位置・確認］調査区中央の平場、ⅡD・E-49・50グリッドに位置しており、Ⅵ層で黄褐色ローム質土の広がりとして確認した。

［重複］SK11と重複しており、本遺構が新しい。

［構造］上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端216×200㎝、下端214×200㎝、深さ30㎝である。底面積は3.333㎡である。

［堆積土］黄褐色ローム質土や黒褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

［出土遺物］出土しなかった。

［時期］重複関係から、後期初頭新段階(沖附(２)式)以降と考えられる。

第11号土坑(図65・119・177、写真74・185)

［位置・確認］調査区中央の平場、ⅡD・E-50グリッドに位置しており、Ⅵ層で黄褐色砂の広がりとして確認した。

［重複］SK10・12と重複しており、本遺構が古い。

［構造］上部は削平されている。一部を検出したのみで、詳細は不明である。平面形状は円形と推定され、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。残存する規模は上端152×100㎝、深さ20㎝である。

［堆積土］黒褐色土や黄褐色砂を主体としている。

［出土遺物］土器は後期初頭新段階の沖附(２)式と考えられる破片が出土している。総重量は223.4ｇで、２点図示した(図119-６・７)。石器は石匙が１点出土している(図177-12)。

［時期］出土土器から、後期初頭新段階(沖附(２)式)以降と考えられる。

第12号土坑(図65・119・178・198、写真74・75・159・185・246)

［位置・確認］調査区中央の平場、ⅡD・E-50グリッドに位置しており、Ⅵ層で褐色土の広がりとして確認した。

［重複］SK11と重複しており、本遺構が新しい。

［構造］上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端198×192㎝、下端230×228㎝、深さ60㎝である。底面積は4.030㎡である。

［堆積土］褐色土や暗褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は主に後期初頭新段階の弥栄平(２)式が出土している。総重量は3,118.6ｇで、３点図示した(図119-８～10)。８は壺の上半部で、南壁際の底面から口縁部を北に向けた横倒しの状態で出土した。剥片石器は楔形石器１点(図178-１)・スクレイパー１点・剥片３点が出土している。礫石器は砥石１点(図178-５)・磨石４点(図178-２)・敲石１点(図178-３)・球状礫６点・台石１点(図178-４)が出土している。砥石は西壁際の底面、台石は北壁際の底面から出土した。敲石は底面から出土しており、ST１(ⅠR-43グリッド)から出土した破片と接合した。土製品は土器片利用土製品が２

点出土している(図198-３・４)。石製品は扁平円礫が２点出土している（写真246-11)。
[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(弥栄平(２)式)と考えられる。

第13号土坑(図66・120、写真75)
[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡD・E-52グリッドに位置しており、Ⅴ層で暗褐色土とオリーブ褐色砂の広がりとして確認した。
[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端176×166cm、下端214×192cm、深さ126cmである。底面積は3.223㎡である。
[堆積土] オリーブ褐色砂や黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。
[出土遺物] 土器は後期初頭から前葉と考えられるものが出土している。総重量は298.3ｇで、２点図示した(図120-１・２)。動物遺体は貝類が出土しており、分析の結果、ハマグリであった(第４章第５節)。
[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式)以降と考えられる。

第14号土坑(図66・120、写真75・159)
[位置・確認] 調査区北側の平場、ⅡJ・K-52グリッドに位置しており、Ⅴ層で黄褐色土と明黄褐色ロームの広がりとして確認した。
[構造] 上部と北側は削平されている。平面形状は円形、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。残存する規模は上端218×200cm、下端200×184cm、深さ24cmである。底面積は2.869㎡と推定される。また底面の南壁際で、ピットが２基検出された。Pit１の上端は長軸40cm、深さは６cmである。Pit２の上端は長軸22cm、深さは８cmである。
[堆積土] 黄褐色土や黒褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。
[出土遺物] 土器は後期初頭新段階の弥栄平(２)式が出土している。総重量は563.5ｇで、２点図示した(図120-３・４)。
[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(弥栄平(２)式)と考えられる。

第15号土坑(図66、写真75・76)
[位置・確認] 調査区東側、ⅡD-56グリッドに位置しており、Ⅴ層で黒褐色土の広がりとして確認した。
[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端84×78cm、下端78×76cm、深さ38cmである。底面積は0.161㎡である。
[堆積土] 黒褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。
[出土遺物] 土器は後期初頭から前葉と考えられる破片が183ｇ出土している。
[時期] 堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)以降と考えられる。

第16号土坑(図66・120、写真76)
[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡD・E-48グリッドに位置しており、Ⅵ層で黄褐色土と暗褐色土の広がりとして確認した。

［重複］SK17と重複しており、本遺構が古い。
［構造］上部は削平されている。平面形状は円形、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は上端246×232cm、下端232×222cmである。底面積は4.297㎡と推定される。
［堆積土］黄褐色土や暗褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は中期後葉の最花式の破片が出土している。総重量は42.1ｇで、１点図示した(図120-５)。
［時期］堆積状況と出土土器から、中期後葉(最花式)以降と考えられる。

第17号土坑(図66・120、写真76)
［位置・確認］調査区中央の平場、ⅡD-48グリッドに位置しており、Ⅵ層で褐色土と黒褐色土の広がりとして確認した。
［重複］SK16と重複しており、本遺構が新しい。
［構造］上部は削平されている。平面形状は円形、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は上端138×136cm、下端120×112cm、深さ32cmである。底面積は1.127㎡である。
［堆積土］褐色土や黒褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は後期初頭から前葉と考えられる破片が出土している。総重量は1,549.2ｇで、４点図示した(図120-６～９)。９は壺の底部で、SK25から出土した破片と接合した。石器は剥片が１点出土している。
［時期］堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)以降と考えられる。

第18号土坑(図66・120、写真76)
［位置・確認］調査区中央の平場、ⅡC・D-49グリッドに位置しており、Ⅵ層で暗褐色土の広がりとして確認した。
［構造］上部は削平されている。平面形状は円形、底面は平坦で壁はやや外傾して立ち上がっている。規模は上端178×176cm、下端150×140cm、深さ22cmである。底面積は1.676㎡である。
［堆積土］暗褐色土や黄褐色ローム質土を主体としている。
［出土遺物］土器は後期初頭新段階の小牧野３期の破片が出土している。総重量は961.3ｇで、２点図示した(図120-10・11)。石器は石核１点・剥片１点が出土している。土製品は焼成粘土塊１点・ミニチュア土器１点が出土している。
［時期］出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)以降と考えられる。

第19号土坑(図66・120・178・194・198、写真76・77・185・190・192)
［位置・確認］調査区中央の平場、ⅡB-46グリッドに位置しており、Ⅵ層で黒褐色土の広がりとして確認した。
［構造］上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端142×136cm、下端170×160cm、深さ54cmである。底面積は2.119㎡である。
［堆積土］黒褐色土や暗褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物]土器は後期初頭新段階から前葉と考えられる破片が出土している。総重量は2,155.７ｇで、３点図示した(図120-12～14)。14は深鉢の口縁部で、隣接するSK20から出土した破片と接合した。石器はスクレイパー１点・二次加工剥片１点(図178-６)・剥片５点・磨製石斧１点が出土している。土製品は土製垂飾品１点(図194-16)・土器片利用土製品４点(図198-５～８)が出土している。
[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)以降と考えられる。

第20号土坑(図66・120・178・194・198、写真76・77・160・190・192)
[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡB・C-46グリッドに位置しており、Ⅵ層でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。
[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端102×86㎝、下端134×122㎝、深さ76㎝である。底面積は1.275㎡である。
[堆積土] 褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。
[出土遺物] 土器は後期前葉の十腰内Ⅰ式が出土している。総重量は3,165.４ｇで、浅鉢を１点図示した(図120-15)。石器は剥片５点・磨製石斧１点(図178-７)・磨石１点が出土している。土製品は土偶の頭部１点(図194-17)・鐸形土製品２点(図194-18)・土器片利用土製品８点(図198-９～16)が出土している。
[時期] 堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式)と考えられる。

第21号土坑(図64、写真77)
[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡC-45グリッドに位置しており、Ⅵ層で褐色土の広がりとして確認した。
[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は上端120×102㎝、下端100×84㎝、深さ18㎝である。底面積は0.672㎡である。
[堆積土] 褐色土を主体としている。
[出土遺物] 出土しなかった。
[時期] 詳細は不明であるが、遺跡の様相から、後期初頭から前葉の可能性がある。

第22号土坑(図67、写真77)
[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡC・D-46グリッドに位置しており、Ⅵ層で暗褐色土と褐色砂の広がりとして確認した。
[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は上端100×90㎝、下端82×74㎝、深さ26㎝である。底面積は0.447㎡である。
[堆積土] 暗褐色土と褐色砂を主体としている。
[出土遺物] 出土しなかった。
[時期] 詳細は不明であるが、遺跡の様相から、後期初頭から前葉の可能性がある。

第23号土坑(図67、写真77)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡC-46グリッドに位置しており、Ⅵ層でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

[構造] 上部は削平されている。平面形状は楕円形、底面は西側が窪むが平坦で、壁はやや外傾して立ち上がっている。規模は上端128×96㎝、下端120×90㎝、深さ28㎝である。底面積は0.861㎡である。

[堆積土] にぶい黄褐色土と褐色土を主体としている。

[出土遺物] 土器は後期初頭から前葉と考えられる破片が34.8ｇ出土している。

[時期] 出土土器から、後期初頭から前葉と考えられる。

第24号土坑(図67、写真77・78)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡC-47グリッドに位置しており、Ⅵ層でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は上端160×156㎝、下端148×142㎝、深さ14㎝である。底面積は1.731㎡である。

[堆積土] にぶい黄褐色土と明黄褐色ロームを主体としている。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 詳細は不明であるが、遺跡の様相から、後期初頭から前葉の可能性がある。

第25号土坑(図67・121・178・198、写真78・159)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡC-47グリッドに位置しており、Ⅴ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[構造] 上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端128×124㎝、下端150×148㎝、深さ86㎝である。底面積は1.744㎡である。また底面の中央と北壁際で、ピットが２基検出された。Pit１の上端は径22㎝、深さは８㎝である。Pit２の上端は径16㎝、深さは６㎝である。

[堆積土] 暗褐色土や黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期前葉の十腰内Ⅰ式第１段階が出土している。総重量は2,965.9ｇで、４点図示した(図121-１～４)。１は深鉢の上半部の破片で、北壁際の中位から出土した。２～４は浅鉢の下半部で、縁辺は打欠で成形されている。３は南壁際の上位、４は北壁際の下位で、ともに正立の状態で出土した。３点の浅鉢は文様が異なっており、２は波状入組文、３は円形・長楕円形文、４は弧状文が施文されている。石器は剥片５点・磨石２点(図178-８・９)・石皿破片１点が出土している。土製品は土器片利用土製品が１点出土している(図198-17)。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられる。

第26号土坑(図67・121・178・194・198、写真78・185・190・192)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡB・C-48グリッドに位置しており、Ⅴ層で褐色土の広がりとし

て確認した。
［構造］上部は削平されている。平面形状は円形、底面は平坦で壁はやや外傾して立ち上がっている。規模は上端136×134㎝、下端96×86㎝、深さ36㎝である。底面積は0.66㎡である。
［堆積土］褐色土やにぶい黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は後期初頭新段階から前葉と考えられる破片が出土している。総重量は2,448.1ｇで、３点図示した(図121-５～７)。石器は石鏃１点(図178-10)・剥片２点が出土している。土製品は鐸形土製品１点(図194-19)・ミニチュア土器１点(図194-20)・土器片利用土製品２点(図198-18・19)が出土している。鐸形土製品は東壁際の上位から、正立の状態で出土した。
［時期］堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)以降と考えられる。

第27号土坑(図67・121・178、写真79・160・185)
［位置・確認］調査区中央の平場、ⅡC-48グリッドに位置しており、Ⅴ層でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。
［構造］上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端114×102㎝、下端138×136㎝、深さ86㎝である。底面積は1.523㎡である。また底面の中央で、ピットが１基検出された。上端は径30㎝、深さは10㎝である。
［堆積土］にぶい黄褐色土や暗褐色ローム質土を主体とした人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は主に後期前葉の十腰内Ⅰ式第２段階が出土している。総重量は5,652.4ｇで、８点図示した(図121-８～14)。石器は楔形石器１点(図178-11)・スクレイパー２点(図178-12)・両極剥片１点・剥片13点が出土している。炭化種実はクルミと考えられる堅果類が15.4ｇ出土しているが、詳細は不明である。
［時期］堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)と考えられる。

第28号土坑(図67・122・179・194、写真79・160・185・190)
［位置・確認］調査区中央の平場、ⅡC-48グリッドに位置しており、Ⅴ層で明黄褐色砂質土の広がりとして確認した。
［構造］上部は削平されている。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端100×90㎝、下端124×118㎝、深さ80㎝である。底面積は1.128㎡である。
［堆積土］灰黄褐色土や黒褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は後期初頭古段階から前葉と考えられるものが出土している。総重量は9,535.1ｇで、８点図示した(図122-１～８)。石器は石鏃３点(図179-１～３)・石錐１点(図179-４)・楔形石器１点(図179-５)・スクレイパー１点・二次加工剥片１点(図179-６)・剥片15点・磨製石斧２点(図179-７)・砥石１点が出土している。土製品はミニチュア土器が１点出土している(図194-21)。
［時期］堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)以降と考えられる。

第29号土坑(図67、写真60・79・80)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡA・B-44・45グリッドに位置しており、Ⅴ層で褐色土の広がりとして確認した。

[重複] SB14SP535と重複しており、本遺構が新しい。

[構造] 北側を検出したのみで、詳細は不明である。平面形状は円形と推定され、底面は平坦で壁はやや外傾して立ち上がっている。残存する規模は上端86×52㎝、深さ28㎝である。

[堆積土] 褐色土を主体としている。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 重複関係から、後期初頭新段階以降と考えられる。

第30号土坑(図67・122・179・198、写真80・160・185・192)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡB-44グリッドに位置しており、Ⅴ層で明黄褐色土と灰黄褐色土の広がりとして確認した。

[重複] SK31・SB14SP536と重複しており、SK31より新しく、SB14SP536より古い。

[構造] 平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。残存する規模は上端102×80㎝、下端150×136㎝、深さ74㎝である。底面積は1.741㎡と推定される。

[堆積土] 灰黄褐色土や黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期初頭から前葉と考えられるものが出土している。出土総量は4,993.2ｇで、７点図示した(図122-９～15)。石器は石鏃１点・二次加工剥片１点(図179-８)・両極剥片１点・剥片５点が出土している。土製品は焼成粘土塊１点・土器片利用土製品１点(図198-20)が出土している。動物遺体は東側の底面直上から、貝類が出土しているが、詳細は不明である。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(沖附(２)式・小牧野３期)以降と考えられる。

第31号土坑(図67、写真80)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅡB-44グリッドに位置しており、Ⅴ層で確認した。

[重複] SK30・SB14SP536と重複しており、本遺構が古い。

[構造] 北側の一部を検出したのみで、詳細は不明である。断面形状はフラスコ状である。残存する規模は上端54㎝×30㎝、深さ57㎝である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 重複関係から、後期初頭新段階(沖附(２)式・小牧野３期)以前と考えられる。　(野村)

第32号土坑(図68・123・179・198・205、写真80・160・185・192・195)

[位置・確認] ⅡC-49・50グリッド、調査区北側の削平された範囲で、Ⅴ層で炭粒などを含むにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

[構造] 平面形は円形、断面形はフラスコ形、底面は平坦である。平面規模は、上端が73㎝×69㎝、下端が138㎝×134㎝である。深さは106㎝、底面積は1.444㎡である。

[堆積土] 堆積土は６層は三角形の褐色土層で、５層以上は水平方向の黄褐色土～褐色土層で炭粒や

ローム粒を含む。いずれも人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は後期初頭～前葉が堆積土から出土した。総重量は1,835.2gで、２点図示した(図123-１・２)。図123-１は後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の完形の小型深鉢で、波状口縁で口縁・胴部下半に長楕円文、胴部に矢羽状沈線文が施文される。石器は堆積土から石篦(図179-９・10)が出土し、珪質頁岩製で寸法が近似している。他に玉髄質珪質頁岩などの両極剥片１点や剥片４点が出土した。また。自然礫が３層から４層にかけて出土した。土器片利用土製品は堆積土から２点(図198-21・22)出土した。21は後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)の破片を利用した円形の製品で部分研磨され、22は後期前葉(十腰内Ⅰ式)の破片を利用した多角形の製品で全面が研磨される。石製品は堆積土から方形の軽石製品の岩板(図205-２)が出土した。

［時期］出土土器や土器片利用土製品から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)と考えられる。

第33号土坑(図68・123・194、写真80・190)

［位置・確認］ⅡC-50グリッド、調査区北側の削平された範囲で、Ⅴ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

［構造］平面形は楕円形、断面形は箱形、底面は平坦である。平面規模は、上端が87㎝×69㎝、下端が76㎝×55㎝である。深さは22㎝と浅く、床面積は0.333㎡である。

［堆積土］黒褐色土や灰黄褐色土が主体で炭粒を含み、人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は堆積土から後期前葉新段階(小牧野３期)が堆積土から出土した。総重量は391.2gで、１点図示した。石器は堆積土から両極剥片が１点出土した。土製品は、堆積土からミニチュア土器(図194-22)が出土した。四脚付きの皿形で口縁部に三角突起と沈線文があり、赤色顔料が内外面に付着する。

［時期］出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)と考えられる。

第34号土坑(図68・123・179・198、写真81・185・192)

［位置・確認］ⅡC-51グリッド、調査区北東側の平場に位置し、Ⅴ層で灰黄褐色土の広がりとして確認した。

［重複］SB１SP104と近接し、SI11の内側に位置するが新旧関係は不明である。

［構造］平面形は楕円形、断面形はフラスコ形で、底面は若干斜めに平坦である。平面規模は、上端が113㎝×99㎝、下端が57㎝×47㎝である。深さは135㎝で、底面積は2.728㎡である。

［堆積土］５層は三角形の堆積、４層は東側から、３層は西側からの堆積で、黒褐色土～褐色土の堆積土である。２層はⅤ層由来土による埋戻し土で、その上に灰黄褐色土の１層が堆積する。いずれも人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は後期初頭～前葉が堆積土から出土した。総重量は4,293.1gで、４点図示した(図123-４～７)。図123-４は後期初頭新段階(沖附(２)式)の深鉢で、胴部に横位区画の文様が付き縄文が充填される。図123-５は後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)の深鉢で、長方形と思われる沈線文に縄文が充填される。石器は堆積土から磨製石斧(図179-11)が出土し、花崗閃緑斑岩製の未成品である。他にチャート製の磨石(図179-12)や、玉髄質珪質頁岩製の両極剥片１点、凝灰岩製の剥片１点が、堆積

土から出土した。土器片利用土製品は、堆積土から１点出土した(図198-23)。単軸絡条体第５類が施文された後期初頭新段階～前葉の破片を利用しており、方形で全面が研磨される。
[時期] 出土土器や土器片利用土製品から後期初頭新段階(沖附(２)式) ～前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)と考えられる。

第35号土坑(図68、写真81)
[位置・確認] ⅡD-51グリッド、調査区北側の削平された範囲で、Ⅴ層で炭粒の混じる黄褐色砂の広がりとして確認した。
[構造] 平面形は円形、断面形はフラスコ形で、底面には楕円形の土坑２基と小ピット１基が付属する。平面規模は、上端が162㎝×150㎝、下端が177㎝×161㎝である。深さは59㎝で、底面積は2.249㎡である。
　底面の付属土坑は、２基が南北に対に並び、寸法や底面の高さが近似する。平面形は長楕円形で、断面形は樽形である。平面規模は、北側の土坑は、上端が100㎝×46㎝、下端が88㎝×33㎝、深さは37㎝である。南側の土坑は、上端が102㎝×54㎝、下端が89㎝×36㎝、深さは39㎝である。底面の小ピットは上端が長楕円形で径が20㎝で、深さが14㎝である。
[堆積土] 土坑本体の堆積土の３層が、付属土坑の内部まで堆積していないため、３層の堆積時には南北の付属土坑は埋まっていたなど堆積までの時間差が考えられる。２層はローム粒を含むⅤ層由来の埋戻し土、１層は炭粒を含むⅥ層由来土、３層は黒褐色土の三角形の堆積である。付属土坑は、南北で層相が異なっている。南側はⅥ層由来土が単独で堆積しているのに対し、北側は、３層と類似した４層が広く介在していた。このことから、同時に開口していなかった可能性や、付属土坑の作り替えの可能性もある。いずれも人為堆積と考えられる。
[出土遺物] 遺物は出土しなかった。
[時期] 周辺の遺構や堆積土から後期初頭～前葉と考えられる。

第36号土坑(図68・123・179、写真81・160・185)
[位置・確認] ⅡB-46グリッド、調査区北西側の平場に位置し、Ⅴ層で暗褐色土の広がりとして確認した。
[構造] 平面形は不整円形、断面形はフラスコ形で、底面は平坦である。平面規模は、上端が76㎝×72㎝、下端が140㎝×134㎝である。深さは137㎝と深く、底面積は1.451㎡である。
[堆積土] 水平方向の堆積で、崩落土はない。下位から黒褐色土の６・７層、暗褐色土の４・５層が焼土や炭粒を含みながら堆積し、にぶい黄褐色土や暗褐色土の１～３層が順に堆積している。いずれも人為堆積と考えられる。
[出土遺物] 土器は、後期初頭新段階(小牧野３期) ～後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)が堆積土から出土した。総重量は2,676.4gで、５点図示した(図123-８～12)。図123-10～12はいずれも後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)の壺で、９は口縁部で橋状取手に沈線文が施文され、10は口縁～胴部で口頸部に赤化粧土が残存し、胴部に渦巻状入組文が施文され、11は頸部に刺突、胴部に波頭文が施文される。石器は４層から玉髄質珪質頁岩製の石錐(図179-13)、珪質頁岩製などの剥片が２点、堆積土から

チャート製で石錘から転用された磨石が出土している。
［時期］出土土器から後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)と考えられる。（長谷川）

第37号土坑(図68・124・179・199、写真81・82・185・192)
［位置・確認］調査区中央東側の平場、ⅠX・W-51グリッドに位置しており、Ⅲ～Ⅳ層で暗褐色土の広がりとして確認した。
［構造］平面形状は楕円形、断面形状はフラスコ状である。平面規模は検出面で106×93cm、底面で115×104cmである。深さは121cm、底面積は0.961㎡である。
［堆積土］黄褐色土・褐色土を主体とし、砂礫ブロックを含むことから人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器720.7gが出土し、うち２点を掲載した。底面直上からは単軸絡条体第１類地に波状の沈線文を施す弥栄平(２)式の可能性がある破片(図124-１)が出土しており、隣接するIV-51・52グリッドⅢ層出土破片と接合している。石器は底面直上の三角形の磨石１点(図179-14)のほか、堆積土から石箆１点、両極剥片１点、剥片３点が出土した。土製品は後期初頭新段階～後期前葉の土器片利用土製品３点(図199-１～３)、焼成粘土塊１点が出土した。
［時期］底面出土土器からは後期初頭新段階(弥栄平(２)式)の可能性もあるが小破片であり、他の出土土器や土器片利用土製品からは後期初頭新段階～後期前葉と考えられる。（折登）

第38号土坑(図68・124・205、写真82・195・246)
［位置・確認］ⅡB-54グリッド、調査区北東側の緩斜面に位置し、Ⅴ層で黒褐色土の広がりとして確認した。
［構造］平面形は楕円形、断面形は皿形で、底面は平坦である。平面規模は、上端が134cm×112cm、下端が112cm×78cmである。深さは38cmと浅く、底面積は0.704㎡である。
［堆積土］黒褐色土が主体で、ローム粒や炭粒が混入し、人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は、後期初頭～前葉が堆積土から出土した。総重量は640.4gで、２点図示した(図124-３・４)。石製品は堆積土から扁平円礫が５点出土した。図205-３は敲打成形され、他は自然礫である。石材は花崗閃緑斑岩３点(写真246-８・９、掲載外１点)、デイサイト１点(図205-３)、流紋岩１点である。
［時期］出土土器から後期初頭～前葉と考えられられる。

第39号土坑(図69・124・179、写真82・186)
［位置・確認］ⅡB-54グリッド、調査区北側の緩斜面に位置し、Ⅴ層で黒褐色土の広がりとして確認した。
［重複］北東側に撹乱がわずかに入る。
［構造］平面形は楕円形、断面形は皿形で、底面は平坦である。平面規模は、上端が125cm×106cm、下端が109cm×88cmである。深さは29cmと浅く、底面積は0.790㎡である。
［堆積土］黒褐色土が堆積し、ローム粒や焼土粒などを含み、人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は、後期初頭新段階～前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)が堆積土から出土した。総重量は

466.5gで、２点図示した(図124-５・６)。図124-６は後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の壺の胴部で、横位の沈線文が施文される。剥片石器は、堆積土から、有茎凸基の石鏃(図179-16)、両面加工でバイポーラ素材の二次加工剥片(図179-17)、石匙(図179-18)が出土した。礫石器は凝灰岩製の球状礫が２点出土した。

[時期] 出土土器から後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられる。

第40号土坑(図69・124・125・180・181・199、写真82・161・186・192)

[位置・確認] ⅡB-52グリッド、調査区北側の緩斜面に位置し、Ⅴ層で黒色土の広がりを確認した。

[重複] SK58と南東側で重複し、本遺構が新しい。

[構造] 平面形は円形、断面形はフラスコ形で、底面は平坦である。平面規模は、上端が225㎝×219㎝、下端が241㎝×226㎝と大型である。深さは178㎝で、底面積は4.396㎡である。

[堆積土] 堆積土は、下位から15・16層が黒褐色土で三角形の堆積で、それを埋めるように東側から焼土を含む褐色土の12～14層と黒褐色土主体の９～11層、黄褐色土ロームの４層が順に、褐色土の７・８層と崩落土の６層を挟みながら堆積する。その後、１～３・５層が堆積している。４層はⅤ層由来のローム土を選んで埋めている可能性がある。崩落土以外は人為堆積と考えられる。

[出土遺物]土器は、後期初頭新段階～前葉が堆積土や床面直上から出土した。総重量は10,459.6gで、10点(図124-７・８～図125-１～６)を図示した。底面直上から後期初頭新段階(弥栄平(２)式・沖附(２)式)の完形の深鉢(図124-７)が出土し、波状口縁で頸部が無文、胴部に三角形区画文と弧状文が施文される。堆積土からは後期初頭新段階～後期前葉の土器(図124-８・125-１～６)が出土した。図124-８は後期初頭新段階(小牧野３期)の完形の浅鉢で、胴部に三角形区画文、底部に円・十字文が施文される。図125-１・２は後期初頭新段階(弥栄平(２)式)の深鉢で、１は波状口縁で、頸部は無文、胴部に方形区画内に渦巻文が入り、２は胴部に連結した弧状文が上下に配置される。図125-３は後期初頭新段階(小牧野３期)、４～６は後期初頭新段階～前葉である。

剥片石器は、堆積土から楔形石器(図180-１)と両面加工の二次加工剥片(図180-２)、凝灰岩製の石核３点(図180-４・６、掲載外１点)が出土し、いずれも珪質頁岩製である。剥片は３点出土し、凝灰岩製や珪質頁岩製である。礫石器はいずれも堆積土から出土した。磨製石斧は４点出土し、図180-５は花崗閃緑岩製の未成品で、他に花崗閃緑斑岩の破損品と破片、緑色片岩製の破片１点が出土した。石皿(図181-１)は、凝灰岩製で隅丸長方形基調で底部に四脚が付く。他に凝灰岩製の球状礫が１点出土した。

土器片利用土製品(図199-４)は、堆積土から出土し、網目状沈線文が施される後期初頭新段階～前葉の破片を利用し、不整形で部分研磨される。

[時期] 底面直上の土器(図124-７)から後期初頭新段階(弥栄平(２)式・沖附(２)式)と考えられる。

(長谷川)

第41号土坑(図69、写真82・83)

[位置・確認] 調査区中央東側の緩斜面上、ⅠU-52グリッドに位置しており、ST１Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

［重複］ST１形成過程で構築されている。また、SI２と重複し、本遺構を先に検出しており新しい可能性が高い。
［構造］平面形状は円形、底面は皿状で壁は外傾して立ち上がっている。検出面の平面規模は62×60㎝、深さは20㎝、底面積は0.144㎡である。
［堆積土］黒褐色土の単層で、自然堆積と考えられる。
［出土遺物］縄文時代後期前葉とみられる小破片13.2gが出土したが図化していない。
［時期］SI２との新旧関係から後期初頭新段階(弥栄平(２)式)以降であり、出土土器からは縄文時代後期前葉の可能性が高い。

第42号土坑(図69・125・199、写真83・192)
［位置・確認］調査区中央東側の緩斜面上、ⅠV-51グリッドに位置しており、ST１Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして確認した。
［重複］ST１形成過程で構築されている。また、SI３、SK77、SP64・102と重複し、本遺構を先に検出しており新しい可能性が高い。
［構造］平面形状は円形、底面は平坦で壁は外傾して立ち上がっている。検出面の平面規模は91×78㎝、深さは18㎝、底面積は0.287㎡である。
［堆積土］黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。
［出土遺物］土器190.3gが出土し２点掲載した(図125-７・８)。いずれも十腰内Ⅰ式前後に属するとみられる。土製品では、十腰内Ⅰ式第１段階とみられる土器片利用土製品１点が出土した(図199-５)。なお、調査時の注記に「小型磨製石斧出土」と記載があるが、整理作業段階で本遺構のカードが伴うものはなくなっていた。出土地不明となっている図329-23(写真244)は本遺構出土の可能性もある。
［時期］SK77との重複関係から後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)以降で、出土土器に近い時期と考えられる。（折登）

第43号土坑(図69・125、写真83)
［位置・確認］ⅡB-49グリッド、調査区北側の平場に位置し、Ⅴ層で褐灰色土の広がりを確認した。
［重複］SK45と南東側で重複し、本遺構が新しい。
［構造］平面形は長楕円形、断面形は箱形で、底面は平坦である。平面規模は、上端が118㎝×67㎝、下端が64㎝×52㎝である。深さは20㎝、底面積は0.369㎡である。
［堆積土］灰褐色土が堆積し、炭粒を含む人為堆積土と考えられる。
［出土遺物］土器は後期初頭新段階(弥栄平(２)式)が堆積土から出土した。総重量は250.6gで、同時期の壺の胴部を１点図示した(図125-９)。堆積土下部から自然礫が出土した。
［時期］重複関係から後期初頭新段階(小牧野３期) ～前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)のSK45より新しい。（長谷川）

第44号土坑(図70・182、写真83・84・186)

[位置・確認] 調査区中央東側の緩斜面上、ⅠW-51・52グリッドに位置しており、ST１のⅢ層・Ⅳ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複] ST１形成過程で構築されている。SP６と重複するが、先に本遺構を精査しており新旧関係は不明である。

[構造] 平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。平面規模は検出面で158×146cm、底面で212×209cmである。深さは154cm、底面積は3.384㎡である。底面でごく浅いピット３基を検出し、付属遺構とみられる。

[堆積土] Ⅴ・Ⅵ層由来の黄褐色土・褐色土を主体とすることから人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は縄文施文の破片78.2gが出土しているが図化していない。石器は二次加工剥片１点(図182-１)、剥片１点が出土した。土製品は、ミニチュア土器１点、焼成粘土塊１点が出土した。

[時期] 出土土器からは後期初頭の可能性がある。　(折登)

第45号土坑(図69・125、写真83)

[位置・確認] ⅡB-49・50グリッド、調査区北側の平場に位置し、Ⅴ層でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

[重複] 北西側でSK43、南東側でSK46と重複し、本遺構はSK46より新しく、SK43より古い

[構造] 平面形は楕円形、楕円形はボウル形で、底面は平坦である。平面規模は、上端が残存部分で78cm、下端が61cm×49cmである。深さは32cm、底面積は0.253㎡である。

[堆積土] にぶい黄褐色土が堆積し、炭粒を含む人為堆積層である。

[出土遺物] 土器は、後期初頭新段階(小牧野３期) ～前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)が堆積土から出土した。総重量は46.3gで、同時期の深鉢を１点図示した(図125-10)。堆積土上部から自然礫が出土した。

[時期] 出土土器から後期初頭新段階(小牧野３期) ～前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられる。

第46号土坑(図69・125・182、写真84・186)

[位置・確認] ⅡB-49・50グリッド、調査区北側の平場に位置し、Ⅴ層で褐灰色土の広がりを確認した。

[重複] 北西側でSK45、東側でSP427、南側でSK56と重複する。本遺構はSK45より古く、SP427とSK56より新しい。

[構造] 平面形は楕円形、断面形はボウル形で、底面は平坦である。平面規模は、上端が141cm×134cm、下端が106cm×85cmである。深さは62cm、底面積は0.720㎡である。

[堆積土] 褐色土やにぶい黄褐色土が堆積し、炭粒を含む人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)が堆積土から出土した。総重量は528.9gで、同時期の深鉢を１点図示した(図125-11)。石器は堆積土から石鏃(図182-２)が出土し、有茎凸基で基部の両面にアスファルトと思われる黒色物質が付着する。

[時期] 出土土器から後期前葉(十腰内Ⅰ式第Ⅰ段階)と考えられる。

第47号土坑(図70・126・182・195、写真84・162・186・190)

[位置・確認] ⅡB-50グリッド、調査区北側の平場に位置し、Ⅴ層で黒色土や灰黄褐色土の広がりとして確認した。

[重複] 南東側に撹乱が入る。SB１の内側に位置し、新旧関係は不明である。

[構造] 平面形は卵形、断面形状はフラスコ形で、底面は平坦である。平面規模は、残存部分で上端が186㎝×136㎝、下端が194㎝×188㎝である。深さは136㎝、底面積は2.817㎡である。

[堆積土] 黒～暗褐色土とにぶい黄褐～褐色土が交互に平坦に堆積している。いずれも炭粒やローム粒などが混入する人為堆積層である。

[出土遺物] 土器は後期初頭～前葉が堆積土や床面から出土した。総重量は7,102.5gで、７点図示した(図126-１～７)。７層下部から深鉢(図126-１)、堆積土から後期初頭新段階～前葉の土器(図126-２～７)が出土した。２は後期前葉新段階(沖附(２)式)の略完形の浅鉢で、胴部に長方形文、底部に円文が施文される。３・４は後期初頭新段階(小牧野３期)の深鉢で、口縁・胴部に隆帯文がつく。６は後期初頭新段階～前葉の切断壺で、ヒゴ切断技法で円形・長方形文が施文される。７は深鉢で、折り返し口縁、全体に単軸絡条体第５類が施文される。

剥片石器は全点が堆積土から出土した。製品はスクレイパーが３点(図180-３・６、掲載外１点)出土し、３は珪質頁岩製、６は玉髄質珪質頁岩製のバイポーラ素材である。剥片は、玉髄質珪質頁岩製２点、凝灰岩製８点が出土した。礫石器は５層から凝灰岩製の磨石が２点(図182-４・６)、堆積土から凝灰岩と安山岩製の球状礫２点、凝灰岩製の石錘１点が出土した。

土製品は、焼成粘土塊が底面からまとまって出土した(図195-１～５)。いずれも直方体の破片で、内部まで焼成が及んでおらず白色である。外面には指頭圧痕(３・４)やナデ調整(１・３～５)があり、すだれ状圧痕(１・２)が確認できるものもある。搬入礫と思われる原石が２点(メノウと石英)、５層から出土した。

[時期] 出土土器から後期初頭新段階～前葉と考えられる。 (長谷川)

第48号土坑(図70、写真84)

[位置・確認] 調査区中央北側の平場、ⅠY-46・47グリッドに位置している。Ⅳ層で黒色土の広がりを確認した。

[構造] 平面形状は円形、平面規模は検出面で125×121㎝、底面で151×150㎝である。断面形状はフラスコ状である。第Ⅶ層を底面とし、深さは167㎝、底面積は1.821㎡である。

[堆積土] 開口部が狭く半裁状態では深く掘り進めることが困難であったため、土層観察は堆積土中位(図中の土層観察ライン)までとしている。記録範囲では全掘した。暗褐色土を主体とした４層に分層した。３層以下はロームを主体としていることから人為堆積、１・２層は黒色土を主体としていることから自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 遺物が出土していないため詳細は不明であるが、周辺の遺構状況から後期初頭新段階～後期前葉に位置づけられる可能性が高い。 (小山)

第49号土坑(図70・126・182、写真84・85・186)

[位置・確認] ⅡB-49グリッド、調査区北側の平場に位置し、Ⅴ層で暗褐色土の広がりを確認した。

[構造] 平面形は不整円形、断面形状はフラスコ形で、底面は平坦である。平面規模は上端で145㎝褐×143㎝、下端が198㎝×172㎝である。深さは85㎝、底面積は2.694㎡である。底面の北東側にピットがあり、上端の長軸は37㎝、深さは54㎝と、他のフラスコ状土坑の底面ピットより大型である。

[堆積土] １層は根撹乱を含む堆積土層で、２～３層が暗褐色土の厚い堆積土で、ローム粒や焼土粒を含む人為堆積と考えられる。底面ピットの堆積土も土坑の堆積土と層相が似る。

[出土遺物] 土器は、後期初頭新段階が堆積土や底面から出土した。総重量は1,663.2gで３点図示した(図126-８～10)。図126-８は底面から礫とともに出土した深鉢の下半部で、後期初頭新段階と思われる。堆積土からも同時期の土器(図126-９・10)が出土した。10は壺の口縁部で長方形の沈線文が施文される。石器は、底面から珪質頁岩製の石核(図182-７)、堆積土から安山岩製の磨石が出土した。

[時期] 出土土器から後期初頭新段階と考えられる。　(長谷川)

第50号土坑（図70・126・182・199、写真85・162・186・193）

[位置・確認] ⅠN-44グリッドに位置する。Ⅳ層上面で土器片を伴う黒褐色土の落ち込みを確認した。

[構造] 平面形状は円形で、開口部115×111㎝、底面規模115×118㎝である。壁と底面はⅣ層中に構築され、深さは22㎝、底面積は0.94㎡である。

[堆積土] 黒褐色土主体の堆積土で、全体的に遺物と炭化物粒の混入が多く、人為堆積と考えられる。

[出土遺物]堆積土１層から十腰内Ⅰ式の土器（図126-11～13）831.9g、2層から石錘（図182-8）１点、堆積土1～2層から土器片利用土製品（図199-６～７）２点が出土した。

[時期] 堆積土１層出土土器から、後期前葉の十腰内Ⅰ式期と考えられる。　(秦)

第51号土坑(図70・127、写真85・86)

[位置・確認] ⅡA-54グリッド、調査区東側の緩斜面に位置し、Ⅴ層で灰黄褐色土の広がりとして確認した。

[重複] SV２と重複し、本遺構が古い。

[構造]平面形は楕円形、断面形は箱形で、底面は平坦である。平面規模は、残存部分で上端が140㎝、下端が110㎝である。深さは38㎝、底面積は残存部分で0.598㎡である。

[堆積土] 北西側を除き、１層の堆積で、灰黄褐色土でローム破砕塊や炭粒が混入した堆積土で、人為堆積の可能性がある。

[出土遺物] 土器は、堆積土や底面から、総重量は1,054.5gが出土した。このうち後期初頭のものをを２点図示した(図127-１・２)。図127-１は、底面から出土した深鉢の下半部で、底部に網代痕がある。堆積土からも同器種(図127-２)が出土し、底部の網代痕は１とは異なる。石器は堆積土からデイサイトの剥片が出土した。

[時期] 底面出土土器から、後期初頭古段階と考えられる。

第52号土坑(図71・199、写真86)

[位置・確認] ⅡB・C-54・55グリッド、調査区東側の平場に位置し、Ⅴ層で褐色土の広がりとして確認した。

[重複]南西側は撹乱、北東側も撹乱や風倒木痕が入る。北西側でSP444と近接するが重複していない。

[構造] 平面形は円形、断面形状は皿形で、底面は平坦である。平面規模は残存部分で上端が300㎝、下端が247㎝と大型の土坑である。深さは27㎝と浅い土坑で、底面にピットがあり、深さは16㎝である。

[堆積土] 主に褐色土が水平に堆積しており、上層にローム破砕塊が多く含まれ、下層は大型のロームブロックが含まれる人為堆積と考えられる。底面ピットも一連に３層が堆積している。

[出土遺物] 土器片利用土製品(図199-８)が、堆積土から出土した。単軸絡条体第５類が施文される後期初頭新段階～前葉の破片を利用し、円形で部分研磨される。

[時期] 土器片利用土製品から、後期初頭新段階～前葉と考えられる。

第53号土坑(図70・127、写真86)

[位置・確認] ⅠX-54グリッド、調査区東側の緩斜面に位置し、Ⅴ層で黒褐色土の広がりを確認した。

[構造] 平面形は円形、断面形状はボウル形で、底面に若干の凹凸がある。平面規模は上端で96㎝×93㎝、下端で85㎝×72㎝である。深さは36㎝、底面積は0.491㎡である。

[堆積土] 黒褐色土と褐色土が形状に沿って堆積しており、１層には炭や焼土粒を含み、いずれも人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は、後期初頭新段階(弥栄平(２)式)が堆積土から出土した。総重量は51.6gで、１点図示した(図127-３)。図127-３は堆積土から出土した深鉢の口縁部で、波状文が重層し、後期初頭新段階(弥栄平(２)式)に位置づけられる。

[時期] 出土土器から後期初頭新段階(弥栄平(２)式)と考えられる。 (長谷川)

第54号土坑(図71・127・183、写真86・87・162・186)

[位置・確認] ⅠY～ⅡA-48グリッドに位置する。Ⅳ層中で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[構造] 平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。平面規模は検出面で167×154㎝、底面で130×111㎝である。壁はⅣ～Ⅵ層、底面はⅥ層中に構築され、深さは98㎝、底面積は2.13㎡である。

[堆積土] 全体が黒褐色土と黄褐色ローム混土の互層構造で、特に２層以下は人為堆積と考えられる。また、６層の東壁側に48×21㎝の範囲で貝層が形成されていた。

[出土遺物] 土器は、堆積土５層から小牧野３期が8,922.3ｇ出土した(図127-４～11)。石器は２～５層から石鏃３点、スクレイパー４点、両極剥片２点、二次加工１点含む剥片５点、磨製石斧、磨石、砥石、石皿が各１点、瑪瑙原石の搬入礫が１点出土した(図183-１～９)。また、６層の貝層からはハマグリ殻100点・アサリ殻78点が出土した(第４章第５節)。

[時期] 堆積土５層出土土器から、後期初頭新段階の小牧野３期と考えられる。

第55号土坑（図71・128・183、写真87・187）

［位置・確認］ⅠY-47～48グリッドに位置する。Ⅳ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重複］SK162と重複し、本遺構が新しい。

［構造］平面形状は楕円形、断面形状はフラスコ状で、平面規模は検出面で222×174cm、底面で187×172cmである。壁はⅣ～Ⅴ層、底面はⅤ層中に平坦に構築され、深さは84cm、底面積は2.59㎡である。

［堆積土］２～５層はⅣ層土が多く混入する人為層、６層は堆積後にずり落ちた崩落壁と考えられる。

［出土遺物］堆積土から、弥栄平(２)式、小牧野３期、十腰内Ⅰ式に相当する土器(図128-１～３)1,363.9gと、スクレイパー３点、剥片２点、石核１点の石器(図183-10～13)が出土した。

［時期］堆積土出土土器から、後期前葉の十腰内Ⅰ式期と考えられる。（秦）

第56号土坑(図69・128、写真87)

［位置・確認］ⅡA・B-50グリッド、調査区北側の平場に位置し、Ⅴ層で褐灰色土の広がりを確認した。

［重複］北西側でSK46と重複し、本遺構が古い。

［構造］平面形は長楕円形、楕円形はボウル形で、底面は平坦である。平面規模は、上端が残存部分で156cm、下端が残存部分で129cmである。深さは37cm、底面積は残存部分で0.781㎡である。

［堆積土］にぶい黄褐色土が堆積し、炭粒を含む人為堆積土である。

［出土遺物］土器は後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)が堆積土から出土した。総重量は272.4gで、２点を図示した(図128-４・５)。いずれも後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)で、４は浅鉢で、口縁部に楕円形文、胴部に斜位・波頭文が施文される。５は壺で、胴部に横位・円形文が施文される。

［時期］出土土器から後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられる。

第57号土坑(図71・128、写真87)

［位置・確認］ⅡA-53グリッド、調査区東側の平場に位置し、Ⅴ層で黒褐色土の広がりを確認した。

［重複］SI１の形成過程で構築されている。

［構造］平面形は楕円形で、断面形状は箱形で、底面は平坦である。平面規模は上端で156cm×60cm(残存値)、下端で129cm×56cm(残存値)である。深さはは37cm、底面積は0.640㎡である。

［堆積土］堆積土は黒褐色土とにぶい黄褐色土の２層で人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は後期初頭新段階が堆積土から出土した。総重量は176.5gで、２点図示した(図128-６・７)。石器は、堆積土から玉髄質珪質頁岩製の両極剥片が出土した。

［時期］出土土器から後期初頭新段階と考えられる。

第58号土坑(図69・128・183、写真87・88・187)

［位置・確認］ⅡA・B-52・53グリッド、調査区東側の緩斜面に位置し、Ⅴ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

［重複］SK40と北西側で重複し、本遺構が古い。

［構造］平面形は楕円形で、断面形は皿形で、底面は平坦である。平面規模は上端で154cm×147cm、下端で111cm×104cmである。深さは30cmと浅く、底面積は残存部分で0.944㎡である。

［堆積土］堆積土は暗褐色土主体で、炭粒やローム粒を含む人為堆積層である。
［出土遺物］土器は後期初頭(小牧野３期) ～前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)が堆積土から出土した。総重量は916.5gで、２点図示した(図128-８・９)。８は後期初頭新段階(小牧野３期)の深鉢で、弧状文が連結する。９は、後期初頭新段階(小牧野３期) ～後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の壺で、渦巻状入組文が施文される。石器は、堆積土から珪質頁岩製の楔形石器(図183-14)と剥片が出土した。
［時期］出土土器から後期初頭新段階(小牧野３期) ～後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられる。
(長谷川)

第59号土坑(図71、写真88)
［位置・確認］調査区中央東側の平場、ⅡA-51グリッドに位置しており、Ⅴ層で褐色土の広がりを確認した。
［構造］平面形状は楕円形、平面規模は検出面で132×113cm、底面で117×95cmである。断面形状は浅い皿状で、壁は開くように立ち上がる。Ⅴ層を底面とし、深さは22cm、底面積は0.877㎡である。
［堆積土］褐色土の単層である。
［出土遺物］出土しなかった。
［時期］遺物が出土していないため詳細は不明であるが、周辺の遺構状況から後期初頭新段階～後期前葉に位置づけられる可能性が高い。 (小山)

第60号土坑(図71・128・183、写真88)
［位置・確認］ⅡA-50～51グリッドに位置する。Ⅳ層で焼土塊が混入する暗褐色土の落ち込みを確認した。
［構造］平面形状は、検出面で168×121cm、底面で141×98cmの楕円形である。断面形状は箱状で、壁は底面から開くように立ち上がっている。Ⅳ層を底面とし、深さは44cm、底面積は1.05㎡である。
［堆積土］上位の暗褐色土に焼土塊、下位の褐色・黄褐色土に礫群が混入し、人為的な堆積土と考えられる。
［出土遺物］堆積土から、後期初頭新段階(小牧野３期)とみられる土器(図128-10～11)419.9gと、剥片１点が出土した。また、堆積土の北側からは台石１点(図183-16)を含む礫群が出土した。
［時期］堆積土出土土器から、後期初頭新段階の小牧野３期と考えられる。 (秦)

第61号土坑(図71・128、写真89・162)
［位置・確認］調査区西側の平場、ⅠW-45・46グリッドに位置しており、ST１のⅢ層で土器集中として確認した。
［重複］環状列石主体部の礫36・37掘方に上部を壊される。遺構西側はトレンチで削平されている。
［構造］平面形状は円形と推測され、底面は皿状で壁は外傾して立ち上がっている。上端の平面規模は197×162cm、深さは37cm、底面積は1.510㎡である。
［堆積土］暗褐色土を主体とし、上部に故意に置かれたとみられる土器が位置することから人為堆積と考えられる。中央部は撹乱により壊される。

［出土遺物］土器は総重量2,783.0gが出土した。土器破片が１箇所に密集し上下に重なるように置かれていた。横倒しというよりも故意に重ねたような状況であった(図71・写真89上)。接合するとほぼ完形の大型の深鉢で、単位数の多い波状口縁、頸部の無文部、幅狭で充填縄文が加えられる胴部文様などの特徴から、小牧野３期に属すると考えられる(図128-12)。環状列石検出当初は土器がほとんど露出しておらず、上部にⅢ層が被覆していたとみられる。石器は底面から砥石１点、堆積土から砥石・台石破片２点が出土した。

［時期］環状列石主体部との重複関係及び出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)と考えられる。

(折登)

第62号土坑(図72、写真89)

［位置・確認］ⅠY-52グリッドに位置する。

［構造］平面形状は楕円形、平面規模は検出面で84×64㎝、底面で51×42㎝である。断面形状は箱状で壁は底面から開くように立ち上がっている。Ⅳ層を底面とし、深さは24㎝、底面積は0.16㎡である。

［堆積土］２層に分層した。ロームを主体とした層が堆積しており人為堆積の様相を示している。

［出土遺物］後期前葉とみられる土器片11.7gが出土した。

［時期］遺物の出土が少なく詳細は不明であるが、周辺の遺構状況から後期初頭新段階～後期前葉に位置づけられる可能性がある。

(秦・小山)

第63号土坑(図72・129、写真90・163)

［位置・確認］調査区中央東側の斜面上、ⅠX-53グリッドに位置しており、ST１Ⅲ層で遺物集中として確認し、確認面の遺物を取り上げた後、Ⅲ～Ⅳ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

［重複］ST１形成過程で構築されており、プランの確認が困難であったことからST１包含層が被覆する可能性が高い。また、SP61と重複し本遺構が新しい。遺構東部は削平により失われている。

［構造］平面形状は円形と推測され、底面は平坦で壁は外傾して立ち上がっている。検出面の平面規模は63×59㎝、深さは22㎝、底面積は0.116㎡である。確認面の遺物の広がりから、本来の平面規模は計測値よりもやや大きいと考えられる。

［堆積土］暗褐色土を主体とし、遺物を含むことから人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は総重量2,100.8gが出土し、特に確認面で焼成粘土塊と大型の土器片がまとまって出土した(図72・写真90遺物出土状況１)。同一個体の破片は堆積土中からも出土し(写真99遺物出土状況２)、接合してほぼ完形の深鉢となった(図129-１)。平縁で器高が高くなる器形と、地文のみで口縁部のみ施文方向を変える文様構成から、後期初頭古段階と思われる。石器は剥片１点が出土した。土製品は堆積土・底面で焼成粘土塊38点、500gが出土した。

［時期］出土土器から、後期初頭古段階と考えられる。

第64号土坑(図72、写真90)

[位置・確認] 調査区中央東側の斜面上、ⅠW-54グリッドに位置しており、Ⅳ層及び東壁壁面で確認した。

[重複] ST１形成過程で構築されている。遺構東部は調査区外に延びる。

[構造] 平面形状は円形と推測され、底面は平坦で壁はやや外傾して立ち上がっている。検出面の平面規模は78×(32)㎝であるが、断面で確認できる規模はより大きくなる。深さは66㎝、底面積は0.060㎡である。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、遺物や炭化物を含むことから人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は出土していない。自然礫２点が出土した。

[時期] Ⅲ層の一部が被覆することから、後期初頭～前葉以前の構築が考えられる。

第65号土坑(図73、写真90)

[位置・確認] 調査区中央東側の緩斜面上、ⅠV-51グリッドに位置しており、SI３土層断面及びⅣ層で確認した。

[重複] SI３、SP548・569・570と重複し、本遺構が新しい。本遺構精査後にSP569を検出したが、プランが重なり同一遺構の可能性もある。

[構造] 平面形状は不整楕円形で、底面は平坦で壁はやや外傾して立ち上がっている。検出面の平面規模は79×66㎝、深さは23㎝、底面積は0.213㎡である。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、炭化物・焼土粒を含むことから人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 縄文・沈線が施される小破片56.3gが出土したが図化していない。

[時期] 重複関係と出土遺物から、後期初頭新段階～後期前葉と考えられる。

第66号土坑(図72・129・183・199、写真54・91・92・163・187・193)

[位置・確認] 調査区中央東側の斜面上、ⅠU-51グリッドに位置しており、ST１Ⅲ層、Ⅳ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複] ST１形成過程で構築されている。本遺構上部にSN４(立石炉)が構築される。SB６・18SP550abと重複し本遺構が古く、SK70と重複し本遺構が新しい。

[構造] 平面形状は楕円形と推測され、断面形状はフラスコ状である。平面規模は検出面で(152)×157㎝、底面で211×199㎝である。深さは136㎝、底面積は3.387㎡である。

[堆積土] 堆積土上部は暗褐色土主体で、中部はⅤ・Ⅵ層由来の黄褐色土を主体とすることから人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は総重量3,584.8gが出土した。底面直上からボタン状の円形貼付をもちLR縦回転地に沈線文が施される土器が出土しており、大木10式併行・牛ヶ沢(３)式に位置づけられる(図129-２、写真91下)。堆積土中からも同じく中期末葉～後期初頭古段階に位置づけられる破片(図129-３～５)が多く、隆帯を持つ牛ヶ沢(３)式も出土している(図129-６)。一方、小牧野３期とみられる土器も出土している(図129-７・８)。石器は黒曜石製のスクレイパー１点(図183-15)、剥片１点、土製品は底面直上から土器片利用土製品１点が出土した(図199-９)。分析の結果、黒曜石は北海道赤井川エリア

産であることが確認された(第４章第７節)。
[時期] 底面直上の出土土器から中期末葉(大木10式併行) ～後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式)と考えられる。プランが明瞭に確認できたのはST１をある程度掘り下げた段階であったことから、本遺構周辺では近い時期にST１の廃棄が本格化していたとみられる。

第67号土坑(図73・130・184、写真92・163)
[位置・確認] 調査区中央東側の斜面上、ⅠU-52・53グリッドに位置しており、SI２炉１・２精査後にⅤ層で暗褐色土の広がりとして確認した。
[重複] SI２と重複し本遺構が古く、ST１が上部を被覆する。また、SK68と重複し、平面の検出状況からは本遺構が新しいとみられる。
[構造] 平面形状は楕円形、断面形状はフラスコ状である。平面規模は検出面で161×127㎝、底面で213×198㎝である。深さは150㎝、底面積は3.350㎡である。
[堆積土] 上部は暗褐色土・黒褐色土、下部はⅤ・Ⅵ層由来の橙色砂層を主体とし、人為堆積と考えられる。
[出土遺物] 土器は総重量1,679.0gが出土した。地山廃棄層(17層)と下部層(18層)の境界ではLR縦回転地に縦位弧状沈線文が施される深鉢の胴部下半(図130-１、写真92)、地山廃棄層(16層)直上からは口縁部に円形貼付と側面圧痕による矢羽状文様が施される注口土器が出土した(図130-２、写真92)。１の胴部及び２の底部は打ち欠きによる欠損の可能性がある。１は縄文地に沈線文を施す大木10式併行の特徴をもつが、文様幅は細く他の出土土器から牛ヶ沢(３)式とも考えられる。図130-２・３は牛ヶ沢(３)式とみられ、４・５は１～３と近い時期と考えられる。石器は剥片４点、磨石２点が出土し(図184-１・２)、図184-１はST１(IR-50)出土破片と接合している(図358)。
[時期] 重複関係と出土土器から、後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式)前後と考えられる。

第68号土坑(図73、写真92)
[位置・確認] 調査区中央東側の斜面上、ⅠU-52・53グリッドに位置しており、SI２硬化面、炉１・２精査後にⅤ層で暗褐色土の広がりとして確認した。
[重複] SI２と重複し本遺構が古く、ST１が上部を被覆する。また、SK67と重複し、平面の検出状況からは本遺構が古いとみられる。
[構造] 平面形状は楕円形と推測され、底面は平坦で壁は直立して立ち上がっている。検出面の平面規模(112)×81㎝、深さは31㎝、底面積は(0.328)㎡である。
[堆積土] 暗褐色土を主体とし、炭化物・砂・ロームを含むことから人為堆積と考えられる。
[出土遺物] 遺物は出土していない。
[時期] SI２・SK67との重複関係から、後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式)以前と考えられる。

第69号土坑(図72・130、写真91～93・164)
[位置・確認] 調査区中央東側の斜面上、ⅠT・U-51グリッドに位置しており、ST１Ⅲ層、Ⅳ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

［重複］ST１の形成過程で構築されている。SK76と重複し本遺構が古い。
［構造］平面形状は楕円形と推測され、断面形状は中腹でフラスコ状に括れる逆台形である。底面に土器埋設遺構が構築されており、上部を欠損した深鉢(広口壺)が正位で埋められていた(図72C-C'、写真92下・93上)。平面規模は検出面で203×(170)㎝、底面で157×(134)㎝である。深さは112㎝、底面積は1.687㎡である。
［堆積土］堆積土は暗褐色土主体で、Ⅴ・Ⅵ層由来の明黄褐色砂を含むことから人為堆積と考えられる。土器埋設遺構の堆積土は黄褐色土、にぶい黄色が主体で、同じく地山由来の砂を多量に含む。なお、埋設土器内と掘方の土壌でリン・カルシウム分析を行ったが、リンが１%を超えるような箇所は検出されなかった(第４章第１節)。
［出土遺物］土器は堆積土中からは99.0g出土した。埋設土器(図130-6)は中期後葉の最花式で、上部の欠失は打ち欠きによる可能性がある。石器は剥片２点が出土した。
［時期］底面で検出した土器埋設遺構の埋設土器から中期後葉(最花式)と考えられる。

第70号土坑(図72・131・184、写真91・93・164・187)
［位置・確認］調査区中央東側の斜面上、ⅠU-51グリッドに位置しており、ST１Ⅲ層、Ⅳ層で暗褐色土の広がりとして確認した。
［重複］ST１の形成過程で構築されている。本遺構上部にSN９が構築される。SK66・76、SB６・18SP550a・bと重複し本遺構が古く、SP108と重複するが新旧関係は不明である。
［構造］平面形状は円形と推測され、断面形状はフラスコ状である。平面規模は検出面で(168)×(160)㎝、底面で(176)×160㎝である。深さは117㎝、底面積は(1.890)㎡である。底面で40×31㎝の浅いピット１基を検出し、付属施設と考えられる。
［堆積土］暗褐色土主体で、Ⅴ・Ⅶ層由来のブロックを含むことから人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は総重量1,542.5gが出土した。底面直上からは、中期末葉～後期初頭とみられるLR縦回転の地文のみの小型深鉢が出土した(図131-１、写真93下)。堆積土中からも同様の地文のみの深鉢(図131-２)や十腰内Ⅰ式とみられる破片(図131-３)が出土した。石器は堆積土下部から砥石１点(図184-５、写真93下)、堆積土から楔形石器１点が出土した(図184-４)。
［時期］重複関係と底面直上の出土遺物から中期末葉～後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式)と考えられる。

第71号土坑(図73、写真94)
［位置・確認］調査区中央東側の緩斜面上、ⅠW-52に位置しており、ST１ベルト断面及びⅣ層で暗褐色土の広がりとして確認した。
［重複］ST１の形成過程で構築されている。SP41と重複するが、先に本遺構を精査しており新旧関係は不明である。
［構造］平面形状は円形で、底面は皿状で壁は外傾して立ち上がっている。検出面の平面規模は111×100㎝、深さは31㎝、底面積は0.515㎡である。
［堆積土］暗褐色土・黒褐色土を主体とし、ロームブロック等を含むことから人為堆積と考えられる。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］ST１との重複関係から、後期初頭新段階～後期前葉と考えられる。

第72号土坑(図74・131・184、写真53・94・187)

［位置・確認］調査区中央東側の平場、ⅠV-50グリッドに位置しており、Ⅳ層で褐色土の広がりとして確認した。

［構造］平面形状は楕円形で、底面は平坦でわずかに外傾して立ち上がる。平面規模は検出面で59×44㎝、深さは35㎝、底面積は0.065㎡である。

［堆積土］褐色土主体で人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は総重量42.5gが出土した。掲載した２点は弥栄平(２)式、小牧野３期とみられる(図131-４・５)。石器は基部にアスファルトが付着する石鏃１点が出土した(図184-16)。

［時期］出土土器からは後期初頭新段階の可能性がある。

第73号土坑(図74・131・184、写真53・94・187)

［位置・確認］調査区中央東側の平場、ⅠV-50グリッドに位置しており、Ⅳ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

［重複］SB５SP554、SB６・18SP553、SB25SP313、SP314と重複するが新旧関係は不明である。

［構造］平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。平面規模は検出面で203×194㎝、底面で(228)×212㎝である。深さは118㎝、底面積は3.794㎡である。底面に付属施設とみられるピット２基を伴い、Pit１は70×51cm、深さ60cm、Pit２は33×28cm、深さ10cmである。

［堆積土］下部は暗褐色土と褐色土が互層となり自然堆積の可能性があるが、主体はⅤ・Ⅶ層由来の砂礫ブロックが混じる暗褐色・褐色土で、人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は総重量644.4gが出土した。掲載した２点は沖附(２)式・小牧野３期とみられる(図131-６・７)。石器は磨石１点、砥石１点、剥片１点が出土した(図184-６・７)。

［時期］出土土器からは後期初頭新段階の可能性がある。

第74号土坑(図73・131・184、写真94・164・187)

［位置・確認］調査区中央東側の緩斜面上、ⅠX-52グリッドに位置しており、Ⅳ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

［重複］ST１の形成過程で構築されている。SP68と重複するが、先に本遺構を精査しており新旧関係は不明である。

［構造］平面形状は楕円形で、底面は皿状で壁はわずかに外傾して立ち上がっている。検出面の平面規模は69×49㎝、深さは33㎝、底面積は0.078㎡である。

［堆積土］暗褐色土を主体とし遺物を包含することから人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は総重量541.3gが出土した。図131-９の深鉢と10の浅鉢は口縁部に長楕円形・円形の沈線文が施され、十腰内Ⅰ式第１段階とみられる。11は３～４本組の沈線文で入組文が描かれ、近い時期に位置づけられるとみられる。石器は石核１点(図184-８)、剥片６点が出土した。

［時期］出土遺物から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の可能性が高い。

第75号土坑(図74・131・132・184・199、写真95・164・187)

[位置・確認] 調査区中央東側の平場、ⅠW-50・51グリッドに位置しており、Ⅳ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複] ST１の形成過程で構築されている。SD１と重複し本遺構が古い。SK82、SP109・116・119と重複するが新旧関係は不明である。

[構造] 平面形状は楕円形で、断面形状はフラスコ状である。平面規模は検出面で182×159㎝、底面で201×193㎝である。深さは191㎝、底面積は3.070㎡である。

[堆積土] ローム主体の黄褐色土・褐色土と暗褐色土が互層をなし、炭化物や焼土ブロックを含むことから人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は総重量6,259.3gが出土した。底面直上からはほぼ完形の深鉢(図131-12)と、単軸絡条体第１類施文の深鉢胴部下半(図131-13)、砥石１点、礫破片１点が共に出土した(図74・写真95上)。12は３本組の沈線による弧状文に縦位のS字状沈線を充填するもので、波状口縁の単位数や地文縄文の施文からも小牧野３期とみられる。堆積土中からは小牧野３期・十腰内Ⅰ式第１段階の範疇とみられる浅鉢、壺が出土した(図132-１・２)。浅鉢は底辺部から底面にかけて穿孔をもつ。石器は底面直上から砥石１点、堆積土から両極剥片１点、剥片３点、磨製石斧未成品１点(図184-９)、球状礫１点が出土した。土製品は小牧野３期・十腰内Ⅰ式とみられる土器片利用土製品３点が出土した(図199-10～12)。図199-12は細い隆帯文(両端沈線)が施されており、同じ手法で入組文が描かれる図132-２の壺と同一個体とみられる。また、底面出土の土器内の土壌を水洗選別したところ、種不明の鳥類の右尺骨１点を含む骨片や貝殻片が出土した(第４章第５節)。

[時期] 底面直上の出土土器から後期初頭新段階(小牧野３期)と考えられる。

第76号土坑(図72・132、写真91・95)

[位置・確認] 調査区中央東側の斜面上、ⅠT・U-51グリッドに位置している。当初はSK70と同一のプランと考えていたが、精査中に本遺構を認識し、ベルト断面で立ち上がりを確認した。

[重複] ST１の形成過程で構築されている。SK69・70と重複し本遺構が新しい。SP94と重複するが本遺構を先に精査したため新旧関係は不明である。

[構造]平面形状は円形と推測され、断面形状はフラスコ状である。平面規模は検出面で(143)×(130)㎝、底面で149×133㎝である。深さは131㎝、底面積は1.545㎡である。

[堆積土] 暗褐色土主体で、堆積土中部と下部にⅤ・Ⅶ層由来の黄褐色土を含むことから人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は総重量224.5gが出土し、掲載した１点は最花式の可能性がある(図132-３)。石器は砥石１点、剥片１点が出土した。

[時期] SK69は中期後葉(最花式)、SK70は中期末葉～後期初頭古段階に属するとみられ、重複関係からは本遺構は中期末葉以降と考えられる。一方、出土土器は中期後葉(最花式)ではあるが小破片であり、SK69の破片が混入した後期初頭古段階のものである可能性を残す。

第77号土坑(図74・132・184・199、写真95・96・165・187・193)

[位置・確認] 調査区中央東側の平場、ⅠV-51グリッドに位置している。SI３精査後にⅣ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複] ST１形成過程で構築されている。SN８、SK42は本遺構上部に構築され新しい。SB18SP87は本遺構に壊されており古い。SP64との新旧関係は不明である。SI３硬化範囲がわずかに被覆するが、建物跡精査中に検出しており新旧関係は不明である。

[構造] 平面形状は楕円形で、底面は平坦で壁は外傾して立ち上がっている。検出面の平面規模は101×87㎝、深さは45㎝、底面積は0.394㎡である。

[堆積土] 堆積土は暗褐色土主体で、遺物を含み人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は総重量1,258.8gが出土した。掲載した１点は壺の胴部下半で、胴部地文の単軸絡条体第１類は磨り消されており、十腰内Ⅰ式前後とみられる(図132-４)。石器は石鏃１点(図184-10)、土製品は十腰内Ⅰ式第１段階とみられる土器片利用土製品１点(図199-13)が出土した。

[時期] 出土遺物から後期前葉(十腰内Ⅰ式)と考えられる。

第78号土坑(図75・132・184、写真51・96・187)

[位置・確認] 調査区中央東側の緩斜面上、ⅠV-51・52グリッドに位置している。SI３精査後に、Ⅳ層で褐色土の広がりとして確認した。

[重複] ST１形成過程で構築されている。SB４SP559と重複し本遺構が古い。また、SI３精査後に検出しているが新旧関係は不明である。

[構造] 平面形状は隅丸方形で、断面形状はフラスコ状である。平面規模は検出面で121×113㎝、底面で194×193㎝である。深さは149㎝、底面積は2.948㎡である。

[堆積土] 堆積土下部は黒褐色土で自然堆積の可能性があるが、上部は褐色土、中部は黄褐色土主体で人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は総重量84.3gが出土し、掲載した１点は細い隆帯＋両端沈線の手法が用いられ小牧野３期とみられる(図132-５)。石器はスクレイパー１点が出土した(図184-11)。

[時期] 出土遺物から後期初頭新段階(小牧野３期)の可能性がある。　(折登)

第79号土坑(図75、写真96・109・165)

[位置・確認] 調査区中央北側の平場、ⅡA-47グリッドに位置している。Ⅴ層で暗褐色土の広がりを確認した。

[重複] SK118より古い。

[構造] 平面形状は円形、平面規模は検出面で85×76㎝、底面で137×136㎝である。断面形状はフラスコ状である。Ⅶ層を底面とし、深さは151㎝、底面積は1.460㎡である。底面のほぼ中央からPit１を検出した。平面規模は27×22㎝で、深さは７㎝である。

[堆積土] ５層に分層した。堆積土の大半を占める５層は砂質が強いことやロームが混在することなどから人為堆積した様相を示している。

[出土遺物] 土器は堆積土中から後期初頭新段階(沖附(２)式・小牧野３期) ～後期前葉(十腰内Ⅰ式

第１段階)とみられる破片226.3ｇが出土した(図132-６～８)。図132-８は後期前葉(十腰内Ⅰ式)に相当する壺の口縁～頸部片で、堆積土中位から出土した。石器は出土しなかった。

[時期] 出土遺物から、後期初頭新段階(沖附(２)式・小牧野３期) ～後期前葉(十腰内Ⅰ式)と考えられる。 (小山)

第80号土坑(図76、写真96)

[位置・確認] 調査区中央東側の緩斜面上、ⅠV-52グリッドに位置している。撹乱土の除去後、Ⅴ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複] ST１の形成過程で構築されている。本遺構上部は攪乱により失われている。

[構造] 平面形状は円形で、断面形状は西側はフラスコ状、東側は直立する。平面規模は検出面で142×134㎝、底面で141×131㎝である。深さは48㎝、底面積は1.649㎡である。

[堆積土] 堆積土は黒褐色土・暗褐色土主体で、ロームを含み人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[時期] 規模や形状は他のフラスコ状土坑に類似しており、後期初頭～前葉の可能性が高い。 (折登)

第81号土坑(図76・132・185・195・199、写真97・187・191・246)

[位置・確認] ⅠU-50グリッド、緩斜面に位置し、Ⅳ層で暗褐色の広がりとして確認した。

[重複] SI14、SB６・７の内側に位置するが新旧関係は不明である。SP205・SN11・SP95が下端の上に位置するが、直接の重複関係はない。

[構造] 平面は楕円形、断面形状はフラスコ状で北側に下端が張り出し、底面は平坦である。平面規模は上端で120㎝×110㎝、下端で151㎝×139㎝である。深さは132㎝、底面積は1.535㎡である。

[堆積土] ４層に大別でき、１～６層はⅣ層以下由来の褐色土と黄褐色土の互層、７層はⅤ層由来の黄褐色土、８層は搬入土のにぶい黄色土で、９層以下はⅢ層以上由来の褐色土である。いずれも人為堆積と考えられ、埋戻し土の由来が異なるため、複数回にわたって埋戻された可能性がある。

[出土遺物] 土器は後期初頭(沖附(２)式)と後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)が堆積土から出土した。総重量は1,757.9gで、４点図示した(図132-９～12)。堆積土下位の14層から２点(図132-９・12)図示し、９は後期初頭新段階(沖附(２)式)の深鉢の口頸部片で、外面に黒色物質が付着し、12は後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の壺の胴部で外面に赤色顔料が付着する。12は、SB５(SP205)堆積土出土土器と遺構間接合している。堆積土中位の９層からも２点(図132-10・11)図示し、10は後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の壺の胴部で、外面に漆を下地に赤色顔料を塗布していると思われる。11は後期初頭新段階～前葉の深鉢の底部で、打ち欠きの可能性がある。

石器は、９層からデイサイト製の磨製石斧が出土し、ST１から出土した破片と接合した。破損後に敲石として転用されている。同じ層から凝灰岩製の球状礫が出土しており、全面に擦痕がみられる(図195-２)。土製品は堆積土からミニチュア土器が１点(図195-６)、土器片利用土製品が１点(図199-14)出土した。ミニチュア土器(図195-３)は深鉢形で胴部に沈線文と単軸絡条体第５類が横位に施文される。土器片利用土製品(図199-14)は、半円形で縄文LRが縦に施文される。石製品は堆積土から花崗閃緑斑岩の扁平円礫(写真246-10)が１点出土した。

［時期］堆積土下位(14層)出土の土器から後期初頭新段階(沖附(２)式) ～後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられる。（長谷川）

第82号土坑(図74、写真97)

［位置・確認］調査区中央東側の平場、ⅠW-51グリッドに位置しており、SK75精査後に土坑壁面で確認した。

［重複］ST１形成過程で構築されている。SD01と重複し本遺構が古い。SK75と重複するが新旧関係は不明である。

［構造］平面形状は楕円形と推測され、底面は平坦で壁は外傾して立ち上がっている。検出面の平面規模は(71)×45cm、深さは30cm、底面積は(0.053)㎡である。

［堆積土］にぶい黄褐色土の単層で、人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は沈線・縄文が施される破片28.3gが出土しているが図化していない。その中では沈線が施されるものが多い。

［時期］出土遺物から、後期初頭新段階～後期前葉の可能性が高い。（折登）

第83号土坑(図76・133、写真97・165)

［位置・確認］IT-51・52グリッド、斜面に位置し、東壁トレンチ及びⅢ層で褐色土の広がりとして確認した。

［重複］SK85と重複し、本遺構の方が古い。

［構造］平面は不整楕円形、断面形状はバケツ形で、壁は凹凸がある。遺跡内では大型の土坑で、平面規模は上端で292cm×243cm、下端で223cm×186cmである。深さは204cm、底面積は5.511㎡である。

［堆積土］堆積土は層相から２つに分かれ、１～３層と６・７層はⅢ層由来の暗褐色土、４・５層と８・９層はⅥ層以下由来の褐色砂質土である。６～９層は互層になっている人為堆積で、５層以上は土の混在が少なく厚い層のため、自然堆積の可能性もある。

［出土遺物］土器は、中期末葉(大木10式併行期)が堆積土から出土した。総重量は1,760.5gで、１点図示した(図133-１)。１は８層から出土した大木10式併行期の略完形個体で、鰭状突起が付き、胴部に錨状、J字状の磨消文が施文される。

［時期］出土土器から中期末葉(大木10式併行期)と考えられる。（長谷川）

第84号土坑(図76、写真98)

［位置・確認］ⅠT-52グリッドに位置する。調査区壁面において遺構断面を確認した。

［重複］ST１の形成過程で構築されており、Ⅲ-１・２層が遺構を被覆している。また、SP120と重複し、本遺構が古い。

［構造］平面形は円形と推測され、断面形状はフラスコ状である。計測できた長さは、開口部で84cm、底面で85cmである。ⅤもしくはⅥ層を底面とし、深さは64cmである。

［堆積土］５層に分層した。Ⅵ層由来と思われる土壌が主体的に堆積しており、人為堆積の様相を示している。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。
［時期］遺構を被覆していることから、Ⅲ-１・２層堆積前の遺構と考えられる。

第85号土坑(図77・133、写真98)
［位置・確認］ＩＴ・U-52グリッドに位置する。調査区東壁のトレンチ壁面で検出した。
［重複］ST１の形成過程で構築されており、堆積層であるⅢ-１層を掘り込んで構築されている。また、SK83と重複し、本遺構が新しい。
［構造］平面形は円形と推測され、最大計測長は開口部で92㎝、底面で47㎝である。断面形状は浅箱状で壁は底面から開くように立ち上がっている。Ⅲ層を底面とし、深さは67㎝である。
［堆積土］３層に分層した。主体を占めている２層には炭化物・ローム・遺物が多く含まれており人為堆積した様相を示している。
［出土遺物］土器は堆積土２層から後期初頭新段階(小牧野３期)とみられる土器片(図133-２・３)、後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)とみられる土器片(図133-４)など459.7gが出土した。石器は堆積土から剥片１点が出土した。
［時期］堆積土２層出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)～後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)と考えられる。（秦・小山）

第86号土坑(図77、写真98)
［位置・確認］ＩS-48グリッドの緩斜面に位置し、Ⅴ層で暗褐色土の広がりとして確認した。
［構造］平面は円形、断面形状は円柱状で、壁は直線状に立ち上がり、底面には若干凹凸がある。平面規模は上端で77㎝×72㎝、下端で62㎝×44㎝である。深さは43㎝、底面積は0.207㎡である。
［堆積土］暗褐色土で、地山のブロックが混入する人為堆積と考えられる。
［出土遺物］出土しなかった。
［時期］周辺の遺構や堆積土から後期初頭から前葉と考えられる。（秦・小山）

第87号土坑(図77、写真98)
［位置・確認］ＩS-48グリッド、緩斜面に位置し、Ⅴ層で暗褐色の広がりとして確認した。
［構造］平面は楕円形、断面形は椀形で、壁は緩く広がる。平面規模は上端で105㎝×80㎝、下端で84㎝×64㎝である。深さは33㎝、底面積は0.694㎡である。
［堆積土］暗褐色土で、地山のブロックが混入する人為堆積と考えられる。
［出土遺物］出土しなかった。
［時期］周辺の遺構や堆積土から後期初頭から前葉と考えられる。（長谷川）

第88号土坑(図77・133・199、写真98・99)
［位置・確認］調査区南側の段丘縁辺、ＩU・V-49グリッドに位置しており、Ⅴ層で赤褐色焼土の広がりとして確認した。
［重複］ST１の形成過程で構築されている。

［構造］平面形状は円形、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は上端86×86㎝、深さ26㎝である。底面積は0.499㎡である。
［堆積土］赤褐色焼土や黒褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は後期前葉の十腰内Ⅰ式の破片が出土している。総重量は252.6ｇで、１点図示した(図133-５)。石器は剥片が２点出土している。土製品は土器片利用土製品が１点出土している(図199-15)。
［時期］堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式)と考えられる。　（野村）

第89号土坑(図77・133、写真99・165)
［位置・確認］ⅠP-42グリッドに位置する。
［重複］遺構との重複はないが、南東壁を撹乱によって失っている。
［構造］平面形状は楕円形、平面規模は検出面で開口部118×112cm、底面85×72cmである。断面形状は浅箱状で壁は底面から開くように立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、深さは14cm、底面積は0.434㎡である。
［堆積土］２層に分層した。主体を占めている２層には混入物が少なく、自然堆積の様相を示している。
［出土遺物］堆積土１層から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)に相当する土器(図133-６)842.9gが出土した。
［時期］堆積土１層出土土器から、後期前葉の十腰内Ⅰ式第２段階と考えられる。

第90号土坑(図77・133、写真99)
［位置・確認］Ⅰ0-43グリッドに位置する。
［構造］平面形状は円形、平面規模は開口部86×67cm、底面69×62cmである。断面形状はフラスコ状である。Ⅴ層を底面とし、深さは40cm、底面積は0.369㎡である。
［堆積土］２層に分層した。１層にはロームブロックが多く含まれているなど、人為堆積の様相を示している。
［出土遺物］堆積土１～２層から、後期初頭新段階の小牧野３期と(図133-７)と後期前葉の十腰内Ⅰ式(図133-８・９)を含む404.6gの土器が出土した。
［時期］堆積土出土土器から、後期前葉の十腰内Ⅰ式と考えられる。　（秦・小山）

第91号土坑(図77・134・185・199、写真99・100・166・187)
［位置・確認］調査区南側の段丘縁辺、ⅠV-49グリッドに位置しており、Ⅴ層でにぶい黄褐色土と灰黄褐色土の広がりとして確認した。
［重複］SP305・307と重複しているが、新旧は不明である。
［構造］平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端140×138cm、下端197×190cm、深さ108cmである。底面積は3.009㎡である。また底面の北東壁際で、ピットが１基検出された。上端は長軸52cm、深さは54cmである。
［堆積土］にぶい黄褐色土やにぶい黄橙色土を主体とし、中位には焼土が堆積している。堆積状況か

ら、人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は後期初頭古段階から前葉が出土している。総重量は2,939ｇで、４点図示した(図134-１～４)。１は初頭古段階の牛ヶ沢(３)式に相当する深鉢で、残存率が最も良い。石器は石鏃１点(図185-３)、砥石１点、磨石１点(図185-４)、台石・砥石破片１点、礫破片１点が出土している。砥石はST１(ＩT-48グリッド)から出土した破片と接合した。土製品は土器片利用土製品が１点出土している(図199-16)。
［時期］堆積状況と出土土器から、後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式)以降と考えられるが、詳細は不明である。

第92号土坑(図77・134・185、写真100・166・187)
［位置・確認］調査区南側の段丘縁辺、ＩU-48グリッドに位置しており、Ｖ層で黒褐色土の広がりとして確認した。
［重複］ST１の形成過程で構築されている。
［構造］平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端92×92㎝、下端158×152㎝、深さ164㎝である。底面積は1.938㎡である。
［堆積土］灰黄褐色土や褐灰色土を主体とした人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は後期初頭新段階の小牧野３期と考えられるものが出土している。総重量は5,439.2ｇで、５点図示した(図134-５～９)。５は深鉢の下半部で、西壁際の底面から底部を南側に向けた横倒しの状態で出土した。剥片石器は石錐１点(図185-８)・両極剥片１点・剥片５点が出土している。礫石器は砥石２点・磨石１点(図185-10)・敲石１点(図185-９)・礫破片３点が出土している。
［時期］堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)以降と考えられる。

第93号土坑(図77・134・185・199、写真100・187・193)
［位置・確認］調査区中央の平場、ＩV-48グリッドに位置しており、Ｖ層で黒褐色土の広がりとして確認した。
［重複］SK109と重複しており、本遺構が新しい。
［構造］平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端108×106㎝、下端108×102㎝、深さ116㎝である。底面積は0.83㎡である。
［堆積土］黒褐色土や灰黄褐色土を主体とし、上位には炭化物が含まれている。堆積状況から、人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は後期初頭古段階から前葉の破片が出土している。総重量は3,229.1ｇで、５点図示した(図134-10～14)。石器は石錐１点(図185-５)・二次加工剥片２点(図185-６・７)・両極剥片３点・剥片48点・礫破片１点が出土している。土製品は土器片利用土製品が２点出土している(図199-17・18)。
［時期］堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ｉ式第２段階)と考えられる。

第94号土坑(図78、写真100)

［位置・確認］調査区南側の段丘縁辺、ⅠU-49グリッドに位置しており、Ⅴ層で灰黄褐色土の広がりとして確認した。

［重複］SB15SP523・SP524と重複しており、本遺構が古い。また、ST１の形成過程で構築されている。

［構造］平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端150×134cm、下端142×122cm、深さ116cmである。底面積は1.355㎡である。

［堆積土］明黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は後期初頭から前葉の破片が147ｇ出土している。石器は台石・砥石破片が１点出土している。

［時期］重複関係と堆積状況及び出土土器から、後期初頭新段階から前葉以前と考えられる。

第95号土坑(図78・135・185・186・199、写真101・166・187・193)

［位置・確認］調査区中央の平場、ⅠV・W-48・49グリッドに位置しており、Ⅴ層でにぶい黄橙色土の広がりとして確認した。

［重複］SP415と重複しているが、新旧は不明である。

［構造］平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端146×124cm、下端210×200cm、深さ164cmである。底面積は3.42㎡である。

［堆積土］黒褐色土やにぶい黄褐色土を主体とし、中位には炭化物が多く、５層からは貝類の動物遺体が出土している。堆積状況から、人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は主に後期初頭新段階の小牧野３期が出土している。総重量は7,327.7ｇで、５点図示した(図135-１～５)。１は深鉢で、南壁際の下位から破片がまとまって出土した。石器は石鏃１点・剥片２点・磨石２点(図185-11・12)・石錘１点(図185-13)・球状礫２点(図186-１)・加工礫１点・礫破片16点が出土している。また検出面の中央、南壁際の下位と底面から、やや大きな礫が出土した。土製品は土器片利用土製品が２点出土している(図199-19・20)。動物遺体は貝類が、北側の下位で２地点から出土している。分析の結果、シジミ属・マルスダレガイ科・ハマグリ・オキシジミであった(第４章第６節)。

［時期］堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)と考えられる。

第96号土坑(図78・135、写真101・102)

［位置・確認］調査区中央の平場、ⅠX-49グリッドに位置しており、Ⅴ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

［重複］SK102と重複しており、本遺構が古い。

［構造］平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。残存する規模は上端116×108cm、下端158×150cm、深さ130cmである。底面積は1.826㎡である。

［堆積土］にぶい黄橙色土を主体とした人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は後期初頭新段階から前葉の破片が出土している。総重量は450.2ｇで、３点図示した(図135-６～８)。石器は砥石１点・礫破片５点が出土している。

［時期］重複関係と堆積状況及び出土土器から、後期初頭新段階(弥栄平(２)式)以前と考えられる。

第97号土坑(図78・135・199、写真102・193)

［位置・確認］調査区中央の平場、ⅠV・W-48グリッドに位置しており、Ⅴ層で確認した。

［重複］SK126と重複しており、本遺構が新しい。

［構造］平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端65×64cm、下端130×119cm、深さ128cmである。底面積は1.240㎡である。

［堆積土］にぶい黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられ、２層からは貝類を主体とした動物遺体が出土している。

［出土遺物］土器は後期前葉の十腰内Ⅰ式の破片が出土している。総重量は1,819.2ｇで、３点図示した(図135-９～11)。石器は両極剥片２点・剥片３点が出土している。土製品は焼成粘土塊１点・土器片利用土製品１点(図199-21)が出土している。動物遺体は貝類や魚類・鳥類の骨が出土しており、南側の下位で弧状にめぐった状態であった。分析の結果、貝類はマガキ・マルスダレガイ科・アサリ・ハマグリ・オキシジミ・サビシラトリ、魚類は板鰓亜綱・コイ科・カサゴ亜目・スズキ属・ブリ属・タイ科・マダイ・アイナメ属・ヒラメ科・カレイ科など、鳥類はカイツブリ科などであった(第４章第６節)。

［時期］堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)と考えられる。

第98号土坑(図78・136・186、写真102・167・187)

［位置・確認］調査区中央の平場、ⅠV・W-49グリッドに位置しており、Ⅴ層でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

［構造］平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端140×120cm、下端124×108cm、深さ86cmである。底面積は1.033㎡である。

［堆積土］にぶい黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は後期初頭新段階から前葉と考えられる破片が出土している。総重量は6,320.4ｇで、４点図示した(図136-１～４)。石器はスクレイパー１点(図186-３)、剥片８点、磨石１点(図186-４)、台石・砥石破片１点、礫破片14点が出土している。礫破片は南壁際の底面からやや大きなものが２点出土した。土製品は焼成粘土塊が１点出土している。搬入礫は瑪瑙が１点出土している。

［時期］堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)と考えられる。

第99号土坑(図79・136・186、写真102・187)

［位置・確認］調査区中央の平場、ⅠW-47グリッドに位置しており、Ⅴ層でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

［構造］平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端106×86cm、下端126×120cm、深さ180cmである。底面積は1.236㎡である。

［堆積土］にぶい黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は後期初頭新段階から前葉と考えられる破片が出土している。総重量は3,251.1ｇで、

３点図示した(図136-５～７)。石器は石鏃１点(図186-２)、二次加工剥片１点、剥片６点、台石・砥石破片１点、礫破片20点が出土している。台石・砥石破片はST１(ⅠV-43グリッド)から出土した破片と接合した。搬入礫は凝灰岩が１点出土している。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられる。

第100号土坑(図79・136・137・186・195・199、写真103・167・187・191・193・246)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅠW・X-47グリッドに位置しており、Ⅴ層でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

[構造] 平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端148×140㎝、下端144×136㎝、深さ146㎝である。底面積は1.504㎡である。

[堆積土] にぶい黄褐色土や灰黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物]土器は後期初頭新段階から前葉と考えられるものが出土している。総重量は7,126.8ｇで、５点図示した(図136-８～図137-２)。石器は石核１点・剥片４点・砥石２点・磨石２点(図186-５)・礫破片25点が出土している。土製品は土偶の頭部１点(図195-７)・土器片利用土製品１点(図199-22)が出土している。石製品は扁平円礫が１点出土している(写真246-12)。中位から扁平な礫が１点出土しており、底面直上から７層上面で、30点の礫が北側を開口するよう壁際にめぐった状態で出土した。配置された礫は扁平で大きなものが多く、磨石(５)と砥石が各１点含まれている。西側の礫の内側からは、壺(図136-８)の下半部が正立の状態で出土した。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)から前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられる。

第101号土坑(図79・137・186・195・196・200、写真103・167・168・187・191・193・246)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅠX-47・48グリッドに位置しており、Ⅴ層で灰黄褐色土の広がりとして確認した。

[構造] 平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端142×134㎝、下端232×232㎝、深さ118㎝である。底面積は4.401㎡である。

[堆積土] 灰黄褐色土やにぶい黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物]土器は後期初頭新段階から前葉と考えられるものが出土している。総重量は8,357.3ｇで、８点図示した(図137-３～10)。３は鉢で、西壁際の下位から口縁部を北に向けた横倒しの状態で出土した。石器は石鏃１点(図186-６)・両面調整石器１点(図186-７)・石篦１点(図186-８)・楔形石器１点(図186-10)・スクレイパー４点(図186-９)・二次加工剥片１点(図186-11)・両極剥片３点・剥片11点・球状礫３点・礫破片39点が出土している。土製品は靴形土製品１点(図195-８)・球状土製品１点(図196-１)・土器片利用土製品３点(図200-１～３)が出土している。石製品は扁平円礫が３点出土している(写真246-13)。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)と考えられる。

第102号土坑(図78・138・186・187・200、写真101・102・168・188・193・246)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅠX-49・50グリッドに位置しており、Ⅴ層で灰黄褐色土の広がりとして確認した。

[重複] SK96と重複しており、本遺構が新しい。

[構造] 平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端186×170cm、下端226×210cm、深さ124cmである。底面積は3.7㎡である。

[堆積土] 灰黄褐色土やにぶい黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。１層は重複した土坑かピットの可能性もある。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階から前葉と考えられるものが出土している。総重量は12,477.4ｇで、５点図示した(図138-１～５)。２は初頭新段階の弥栄平(２)式の深鉢で、東側の中位から横倒しの状態で出土した。５は前葉の十腰内Ⅰ式であるが、別遺構の可能性がある１層から出土した。石器はスクレイパー１点・剥片２点・磨製石斧１点・砥石２点(図187-１・２)・磨石１点・敲石１点(図186-12)・球状礫５点(図187-３)・礫破片５点が出土している。砥石は図187-１が下位、図187-２が底面直上から出土した。土製品は土器片利用土製品が２点出土している(図200-４・５)。石製品は扁平円礫が３点出土し（写真246-14・15)、搬入礫は瑪瑙が１点出土している。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(弥栄平(２)式)と考えられる。

第103号土坑(図79・139・187・200・202、写真104・169・187・193～195)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅠW・X-48・49グリッドに位置しており、Ⅴ層でにぶい黄橙色土の広がりとして確認した。

[構造] 平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端114×96cm、下端130×128cm、深さ159cmである。底面積は1.253㎡である。

[堆積土] 灰黄褐色土やにぶい黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期前葉の十腰内Ⅰ式第１段階が出土している。総重量は3,507.2ｇで、２点図示した(図139-１・２)。石器は石鏃１点(図187-４)、剥片８点、石錘１点(図187-５)、台石・砥石破片１点、礫破片１点が出土している。土製品は土器片利用土製品３点(図200-６～８)・土器片錘１点(図202-１)が出土している。搬入礫はマンガンノジュールと考えられるものが１点出土したが、詳細は不明である(写真195-１)。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられる。　　(野村)

第104号土坑(図80・139～141・187・200、写真104・169・187・193)

[位置・確認] 調査区中央西側の斜面上、ⅠV・W-46グリッドに位置しており、Ⅴ層で暗褐色土の広がりを確認した。

[構造] 平面形状は円形、平面規模は検出面で149×130cm、底面で198×179cmである。断面形状はフラスコ状である。Ⅶ層を底面とし、深さは161cm、底面積は2.769㎡である。底面からPit１を検出した。平面規模は55×44cmで、深さは９cmである

[堆積土] 11層に分層した。ロームとの混合土が堆積するほか、遺物や炭化物なども多く含まれてい

るなど人為堆積の様相を示している。
［出土遺物］土器は後期初頭新段階(小牧野３期)とみられる破片を主体として堆積土中から10,816.6ｇ出土した(図139-３～５、図140、141-１～６)。図139-３～５は底面直上から、図140-１～５は堆積土中位からまとまって出土した土器で、いずれも小牧野３期とみられる。石器は両極剥片１点、剥片２点、磨石１点(図187-６)、礫破片２点、台石・砥石破片１点、原礫２点が出土した。土製品は後期初頭新段階～後期前葉の土器片を素材とした土器片利用土製品が４点出土した(図200-９～12)。
［時期］出土遺物から後期初頭新段階(小牧野３期)と考えられる。

第105号土坑(図80・141・205、写真104・195)
［位置・確認］調査区中央西側の平坦面、ⅠW-46グリッドに位置しており、Ⅴ層で黒褐色土の広がりを確認した。
［構造］平面形状は円形、平面規模は検出面で99×96㎝、底面で135×130㎝である。断面形状はフラスコ状である。Ⅶ層を底面とし、深さは159㎝、底面積は1.367㎡である。
［堆積土］７層に分層した。堆積土下半の６・７層はロームを主体としており人為堆積の様相を示しているが、上半の１～５層は暗褐色土を主体とし、混入物が少ない自然堆積の可能性もある。
［出土遺物］土器は後期初頭新段階～後期前葉とみられる破片3,362.0ｇが出土した(図141-７～11)。図141-７・８は底面直上から出土した破片であるが、底部片であるため詳細な型式等は不明である。図141-９～11は堆積土中から出土した破片である。図141-９・10は小牧野３期、図141-11は十腰内Ⅰ式とみられる。石器はスクレイパー１点、剥片３点、台石・砥石破片１点(接合)が出土した。この台石・砥石破片はST１のⅠT-45(斜面下方)から出土したものと接合している。石製品は１点出土した。図205-４は軽石を素材とし、円盤状に擦って成形されている。
［時期］出土遺物から後期初頭新段階(小牧野３期)～後期前葉(十腰内Ⅰ式)と考えられる。

第106号土坑(図80、写真104)
［位置・確認］調査区中央西側で調査区際にあたるⅠX-43グリッドに位置しており、西壁際のⅢ層で暗褐色土の広がりを確認した。遺構の西側約半分は調査区外へ延びている。
［重複］SP274・285と重複し、本遺構が新しい。
［構造］平面形状は円形と推測され、計測できた長さは検出面で82㎝、底面で158㎝である。断面形状はフラスコ状である。Ⅶ層を底面とし、深さは127㎝である。
［堆積土］10層に分層した。ローム質土でロームブロック等も混在することから人為堆積の様相を示している。
［出土遺物］土器は後期前葉とみられる破片を主体として堆積土中から352.3ｇ出土した。沈線間に化粧土等が付着していたものもあったが、小片であるため図示していない。石器は出土しなかった。
［時期］遺物の出土が少なく詳細は不明であるが、周辺の遺構状況から後期初頭新段階～後期前葉に位置づけられる可能性が高い。

第107号土坑(図80・142・143・187・196・205、写真105・170・191・195)

[位置・確認] 調査区中央西側の平坦面、ⅠY-46グリッドに位置しており、Ⅴ層で黒褐色土の広がりを確認した。

[重複] SP381と重複し本遺構の方が古い。また、東側でSK116と接しているが新旧関係は不明である。

[構造] 平面形状は円形、平面規模は検出面で220×187㎝、底面で238×215㎝である。断面形状はフラスコ状である。Ⅵ層ないしはⅦ層を底面とし、深さは81㎝、底面積は3.930㎡である。

[堆積土] 11層に分層した。暗褐色土・黒褐色土を主体とし、ロームブロックや遺物等を多く含むことから人為堆積の様相を示している。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階(弥栄平(２)式)とみられる破片を主体として堆積土中から9,787.8ｇ出土した(図142・143-１)。図142-１・２は堆積土中位から近接して出土、図143-１は底面直上から出土したものであるが、いずれも三角形区画文が施文された後期初頭新段階(弥栄平(２)式)に比定される土器である。また、図143-１はSK108の出土土器とも接合しており、互いに開口していた時期があったと考えられる。石器は剥片４点、磨石１点(図187-７)が出土した。土製品は土偶の胴部片が２点出土した(図196-２・３)。図196-２は遺構検出面、図196-３は堆積土中位から出土したものである。石製品は２点出土した。図205-５は凝灰岩を素材とし三角形状に擦って成形されている。また、メノウを素材とする搬入礫が出土したが図示しなかった。

[時期] 底面直上から出土した土器から後期初頭新段階(弥栄平(２)式)と考えられる。

第108号土坑(図80・143・144・187・196、写真105・106・170・171・187・191)

[位置・確認] 調査区中央西側の平坦面、ⅠY・ⅡA-45グリッドに位置しており、Ⅲ層で黒褐色土の広がりを確認した。

[構造] 平面形状は円形、平面規模は検出面で198×154㎝、底面で235×216㎝である。断面形状はフラスコ状である。Ⅶ層を底面とし、深さは153㎝、底面積は3.982㎡である。

[堆積土] 13層に分層した。７層にはⅥ・Ⅶ層由来の砂質土が厚く堆積し、３・４層中には遺物が多量に含まれていることなどから３層以下は人為堆積した様相を示している。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階とみられる破片を主体として堆積土中から19,837.3ｇ出土した(図143・144)。図143-１は近接したSK107出土遺物と接合した土器である。図143-２(後期初頭(牛ヶ沢(３)式・弥栄平(２)式)・図144-１(後期初頭新段階(沖附(２)式)は１層下位から共伴して出土した土器で、その他は堆積土一括で取り上げた土器である。図144-１・４は後期初頭新段階(沖附(２)式)の土器で、１は沈線主体の壺、４は充填縄文主体の浅鉢である。また４は、底部側縁から底面にキザミが４単位施されている。図144-３は後期初頭新段階(弥栄平(２)式)で三角形区画を有する深鉢である。石器は二次加工剥片１点(図187-８)、磨石１点(図187-９)が出土した。このほかに、図示していないがスクレイパー１点、剥片10点、石錘１点、台石１点、球状礫１点、台石・砥石破片１点、礫破片３点、原礫１点が出土した。土製品はミニチュア土器が４点出土した(図196-４～７)。図196-４・５は壺型の破片で同一個体と思われる。４は口頸部片、５は底部片である。

[時期] 堆積土出土遺物から後期初頭新段階(弥栄平(２)式・沖附(２)式)と考えられる。　　(小山)

第109号土坑(図77、写真100)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅠV-48グリッドに位置しており、Ⅴ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複] SK93と重複しており、本遺構が古い。

[構造] 平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は下端166×162㎝、深さ88㎝である。底面積は2.078㎡である。

[堆積土] 明黄褐色土や褐灰色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 重複関係から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)以前と考えられる。　(野村)

第110号土坑(図80・145・187・188・200、写真106・187)

[位置・確認] 調査区中央西側の平坦面、ⅠY-46グリッドに位置しており、Ⅲ層で黒褐色土の広がりを確認した。

[重複] 環状列石の構成礫である礫３より古い。

[構造] 平面形状は円形、平面規模は検出面で105×90㎝、底面で118×111㎝である。断面形状はフラスコ状である。Ⅶ層を底面とし、深さは158㎝、底面積は1.066㎡である。底面のほぼ中央からPit１を検出した。平面規模は16×15㎝、深さは11㎝である。

[堆積土] 10層に分層した。９・10層は黒暗褐色を基調とし、混入物が少ないことから自然堆積した様相を示している。一方、３～８層は褐色のローム質土と黒褐色が互層となるなど人為堆積した様相を示している。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階から後期前葉とみられる破片が堆積土中から2,092.5ｇ出土した(図145-１～４)。図145-３・４は沈線文を主体とした破片で十腰内Ⅰ式と思われる。石器は剥片１点、石錘２点(図187-10)、敲石１点(図188-１)が出土した。土製品は後期前葉の土器片を素材とした土器片利用土製品が２点出土した(図200-12～14)。

[時期] 出土遺物から後期初頭新段階～後期前葉と考えられる。

第111号土坑(図81・145、写真106)

[位置・確認] 調査区中央北側の平場、ⅡA・B-48グリッドに位置している。Ⅴ層で褐色土の広がりを確認した。

[重複] SP376と重複し、本遺構の方が新しい。

[構造] 平面形状は楕円形で、平面規模は検出面で132×97㎝、底面で67×49㎝である。断面形状は浅いボール状で、壁は底面の最深部から開くように立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、深さは43㎝、底面積は0.274㎡である。

[堆積土] ３層に分層した。混入物が少ないなど自然堆積した様相を示している。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階(小牧野３期) ～前葉(十腰内Ⅰ式)とみられる破片723.1ｇが堆積土中から出土した(図145-５～７)。石器は出土しなかった。

[時期] 出土遺物から、後期初頭新段階～前葉の可能性がある。

第112号土坑(図75・145、写真106・107・109)

[位置・確認] 調査区中央北側の平場、ⅡA・ⅡB-47グリッドに位置している。Ⅴ層で黄褐色土の広がりを確認した。

[重複] SQ３、SK161、SP374より古く、SP393より新しい。

[構造] 平面形状は幅広な惰円形、平面規模は検出面で224×176㎝、底面で198×166㎝である。断面形状は浅い箱状で、壁は底面から開くように立ち上がっている。Ⅵ層を底面とし、深さは66㎝、底面積は(0.930㎡)である。

[堆積土] ６層に分層した。ローム質土が主体を占めており人為堆積の様相を示している。

[出土遺物] 土器は後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式)とみられる破片を含む523.6ｇが堆積土中から出土した(図145-８・９)。石器は剥片１点が出土したほか、自然礫１点が出土した。いずれも図示していない。

[時期]遺物の出土が少なく詳細は不明である。ただ、小破片であるが後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式)とみられる土器が出土していることから後期初頭古段階に位置づけられる可能性もある。

第113号土坑(図81・145、写真107)

[位置・確認] 調査区中央東側の平場、ⅠY-50・51グリッドに位置しており、Ⅴ層で暗褐色土の広がりを確認した。

[構造] 平面形状は円形、平面規模は検出面で109×105㎝、底面で94×88㎝である。断面形状は浅い皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、深さは25㎝、底面積は0.628㎡である。

[堆積土] 暗褐色土の単層である。

[出土遺物] 土器は十腰内Ⅰ式とみられる破片97.4ｇが堆積土中から出土した(図145-10・11)。石器は出土していない。

[時期] 遺物の出土が少なく詳細は不明であるが、周辺の遺構状況から後期初頭新段階～後期前葉に位置づけられる可能性が高い。

第114号土坑(図81・145・188、写真107・171)

[位置・確認] 調査区中央北側の平場、ⅠY-49グリッドに位置している。Ⅴ層で暗褐色土の広がりを確認した。

[重複] 第１号風倒木より古い。

[構造] 平面形状は円形、平面規模は検出面で100×99㎝、底面で191×185㎝である。断面形状はフラスコ状である。Ⅵ層ないしはⅦ層を底面とし、深さは126㎝、底面積は2.712㎡である。

[堆積土] 12層に分層した。上半の１～７層はローム質土や炭化物などが多く含まれており人為堆積した様相を示している。一方、下半の８層以下は暗褐色土を主体として、混入物も少ないなど自然堆積した様相を示している。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階～前葉とみられる破片2,198.4ｇが堆積土中から出土した(図145-12～16)。図145-12は底面直上から出土した深鉢で、胴部には単軸絡条体第５類が縦位回転施文されており、後期初頭新段階～後期前葉に相当する。図145-14～16は堆積土中から出土した破片で、後期

初頭新段階(小牧野３期)とみられる。石器は二次加工剥片１点、剥片１点、磨石１点(図188-３)、礫剥片１点が出土した。また、図示していないが石製品が１点出土した。スコリアを素材としており搬入礫と思われる。

[時期] 出土遺物から後期初頭新段階(小牧野３期) ～後期前葉と考えられる。

第115号土坑(図81・145、写真107・108)

[位置・確認] 調査区中央東側の平場、ⅡA-52グリッドに位置しており、Ⅴ層で黒褐色土の広がりを確認した。

[構造] 平面形状は円形で、平面規模は検出面で98×88㎝、底面で32×31㎝である。断面形状は浅いボール状で、壁は外傾して立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、弱い凹凸がみられる。深さは38㎝、底面積は0.079㎡である。

[堆積土] ３層に分層した。遺物が相当数出土することから人為堆積の様相を示している。

[出土遺物] 土器は後期前葉(十腰内Ⅰ式)とみられる破片946.5ｇが堆積土中から出土した(図145-17～19)。石器は磨製石斧１点、台石１点が出土した。この台石はST１(ⅠX-43)から出土したものと接合している(図357)。またS-１として取り上げた遺物は自然礫であった。

[時期]出土遺物に後期初頭新段階とみられる破片が含まれていないことから、後期前葉(十腰内Ⅰ式)の可能性が高い。

第116号土坑(図81、写真108)

[位置・確認] 調査区中央西側の平坦面、ⅠY-46・47グリッドに位置しており、Ⅴ層で暗褐色土の広がりを確認した。

[重複] 西側でSK107と接しているが新旧関係は不明である。

[構造] 平面形状は円形、平面規模は検出面で123×97㎝、底面で91×71㎝である。断面形状は浅い皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。Ⅴ層ないしはⅥ層を底面とし、深さは44㎝、底面積は0.515㎡である。

[堆積土] ５層に分層した。全体的に混入物が少ない堆積土で、自然堆積した様相を示している。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 遺物が出土していないため詳細は不明であるが、周辺の遺構状況から後期初頭新段階～後期前葉に位置づけられる可能性がある。

第117号土坑(図75・145・200、写真108・109)

[位置・確認] 調査区中央北側の平場、ⅡA-46・47グリッドに位置している。Ⅴ層で暗褐色土の広がりを確認した。

[重複] SQ３の構成礫である礫15～17より古く、SK121とは不明である。

[構造] 平面形状は惰円形、平面規模は検出面で171×127㎝、底面で149×97㎝である。断面形状は浅い皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、深さは35㎝、底面積は1.233㎡である。

[堆積土] ５層に分層した。ローム質土や炭化物が多く混在しており人為堆積の様相を示している。

［出土遺物］土器は後期前葉(十腰内Ⅰ式)とみられる破片を主体として堆積土中から401.1ｇ出土した(図145-20～22)。石器は出土していないが、底面のほぼ中央から大型の自然礫が２点出土した。土製品は後期前葉の土器片を素材とした土器片利用土製品が１点出土した(図200-15)。
［時期］出土遺物から、後期前葉(十腰内Ⅰ式)の可能性がある。また、本遺構はSQ３の下位に位置していること、大型の礫も出土していることから、初期段階の環状列石に伴う遺構となる可能性もある。

第118号土坑(図75・146・188、写真108・109・188)
［位置・確認］調査区中央北側の平場、ⅡA-47グリッドに位置している。Ⅴ層で暗褐色土の広がりを確認した。
［重複］SK79、SP432より新しい。
［構造］平面形状は惰円形、平面規模は検出面で175×125㎝、底面で158×113㎝である。断面形状は浅い皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、深さは29㎝、底面積は1.449㎡である。
［堆積土］２層に分層した。混入物が少ない暗褐色土を主体とし、自然堆積した様相を示している。
［出土遺物］土器は後期初頭新段階から後期前葉とみられる破片が堆積土中から514.6ｇ出土した(図146-１・２)。石器は磨石１点が出土した(図188-２)。
［時期］遺物の出土が少なく詳細は不明であるが、後期初頭新段階～前葉の可能性が高い。

第119号土坑(図75、写真109)
［位置・確認］調査区中央北側の平場、ⅡA-47グリッドに位置している。Ⅴ層で暗褐色土の広がりを確認した。
［重複］SQ３より古い。
［構造］平面形状は惰円形、平面規模は検出面で105×102㎝、底面で83×75㎝である。断面形状は浅い皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、深さは28㎝、底面積は(0.460)㎡である。
［堆積土］暗褐色土の単層である。混入物が少なく自然堆積した様相を示している。
［出土遺物］出土しなかった。
［時期］遺物が出土していないため詳細は不明であるが、周辺の遺構状況から後期初頭新段階～後期前葉に位置づけられる可能性がある。

第120号土坑(図81・146、写真109)
［位置・確認］調査区中央東側の平場、ⅡA-50グリッドに位置しており、Ⅴ層で黒褐色土の広がりを確認した。
［構造］平面形状は円形で、平面規模は検出面で104×95㎝、底面で78㎝である。断面形状は浅い皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、深さは31㎝、推定される底面積は0.401㎡である。
［堆積土］２層に分層した。混入物が少なく自然堆積した様相を示している。
［出土遺物］土器は後期初頭新段階(小牧野３期)とみられる破片が堆積土中から37.7ｇ出土した(図146-１)。石器は出土しなかった。

［時期］遺物の出土が少なく詳細は不明であるが、後期初頭新段階(小牧野３期)の可能性がある。

第121号土坑(図75・146、写真109・110)

［位置・確認］調査区中央北側の平場、ⅡA-47グリッドに位置している。Ⅴ層で暗褐色土の広がりを確認したが、遺構プランが不明瞭であったためトレンチを設定し土層観察を優先させた。そのため、遺構の現存状況は悪い。

［重複］SQ３、SP357より古く、SK117とは不明である。

［構造］平面形状は楕円形と推測され、計測できた検出面での長さは106㎝である。断面形状は浅い皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、深さは25㎝である。

［堆積土］３層に分層した。混入物が少なく自然堆積した様相を示している。

［出土遺物］土器は後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)とみられる破片が堆積土中から22.9ｇ出土した(図146-２)。石器は出土しなかった。

［時期］遺物の出土が少なく詳細は不明であるが、周辺の遺構状況から後期初頭新段階～後期前葉である可能性が高い。

第122号土坑(図81・146・200、写真110・172・193)

［位置・確認］調査区中央南側の平場、ⅠV-47・48グリッドに位置しており、Ⅴ層で確認した。

［構造］平面形状は円形、平面規模は検出面で81×78㎝、底面で149×141㎝である。断面形状はフラスコ状である。Ⅶ層を底面とし、深さは167㎝、底面積は1.675㎡である。

［堆積土］土層観察は省略したが、底面付近で貝がまとまって出土した。

［出土遺物］土器は後期初頭新段階(小牧野３期)とみられる破片を主体として堆積土中から1,774.5ｇ出土した(図146-５～10)。図146-５は底面直上から出土した鉢の略完形土器で、入り組み状の沈線間に縄文が充填された文様構成であり後期初頭新段階(小牧野３期)に比定される。石器は堆積土中から石皿の破片２点、礫破片１点が出土した。石皿破片のうち、１点はST１(ⅠT-44)から出土したものが接合した。もう１点はSK148、ST１(IQ-45、IS-46・47、IT-44・45)から出土した複数の破片が接合した。また底面直上から自然礫が１点出土した。土製品は後期初頭新段階～前葉の土器片を素材とした土器片利用土製品が１点出土した(図200-16)。

［自然科学分析］底面直上から貝類が出土しており、水洗した結果、貝類908ｇ、骨1.2ｇ、ウロコ0.9ｇを抽出し動物遺体の同定を行った。貝類ではハマグリが多く、アサリが少ない。魚類では板鰓類(サメ・エイ類)が出土している(第４章第６節)。

［時期］底面直上出土土器から後期初頭新段階(小牧野３期)と考えられる。

第123号土坑(図81・146、写真110・172)

［位置・確認］調査区南側の斜面下方ⅠS-45グリッドに位置しており、ST１に堆積しているⅢ-１層掘り下げ後に暗褐色土の広がりを確認した。

［構造］平面形状は円形と推測され、計測できた長さは検出面で72㎝、底面で45㎝である。断面形状は浅箱状で、壁は外傾して立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、深さは25㎝である。

［堆積土］暗褐色土の単層で、混入物が少なく自然堆積の様相を示している。
［出土遺物］土器は後期初頭新段階(小牧野３期)とみられる破片を主体として堆積土中から576.5ｇ出土した(図146-11・12)。図146-13・14はST１出土土器と接合した破片である。石器は出土しなかった。
［時期］出土土器から後期初頭新段階(小牧野３期)の可能性が高い。

第124号土坑(図81・146・200、写真193)
［位置・確認］調査区南側の斜面下方ＩU-45グリッドに位置しており、ST１に堆積しているⅢ-１層掘り下げ時に任意で設定したベルト壁面で遺構のラインを確認した。
［構造］平面形状は円形を基調としたもので、計測できた長さは検出面で186㎝、底面で160㎝である。断面形状は浅い皿状で、壁はわずかに外傾して立ち上がっている。Ⅳ層を底面とし、深さは37㎝である。
［堆積土］５層に分層した。ローム主体土が堆積するほか炭化物等の混入物も多いことから人為堆積の様相を示している。
［出土遺物］土器は後期初頭新段階(弥栄平(２)式、小牧野３期)とみられる破片385.3ｇが堆積土中から出土した(図146-15・16)。石器は石皿破片１点が出土した。土製品は後期初頭新段階の土器片を素材とした土器片利用土製品が１点出土した(図200-17)。
［時期］出土遺物から、後期初頭新段階(弥栄平(２)式、小牧野３期)の可能性が高い。　　(小山)

第125号土坑(図82・146・188・205、写真110・188・195)
［位置・確認］調査区中央の平場、ＩX・Y-50グリッドに位置しており、Ⅴ層で褐灰色土の広がりとして確認した。
［構造］平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端100×94㎝、下端134×128㎝、深さ146㎝である。底面積は1.392㎡である。
［堆積土］褐灰色土や灰黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は後期前葉の十腰内Ⅰ式第２段階の破片が出土している。総重量は1,839.2ｇで、５点図示した(図146-17a～20)。石器は両極剥片２点・剥片４点・石皿１点(図188-４)・礫破片３点が出土している。石製品は不明石製品が１点出土している(図205-６)。
［時期］堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)と考えられる。

第126号土坑(図82・147・188・196・200・205、写真110・111・172・188・191・193・195・246)
［位置・確認］調査区中央の平場、ＩV・W-47・48グリッドに位置しており、Ⅳ・Ⅴ層で灰黄褐色土の広がりとして確認した。
［重複］SK97と重複しており、本遺構が古い。
［構造］平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端100×92㎝、下端194×170㎝、深さ166㎝である。底面積は2.739㎡である。
［堆積土］灰黄褐色土や黒褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は後期初頭新段階から前葉と考えられるものが出土している。総重量は6,534.3ｇで、10点図示した(図147-１～10)。10は初頭新段階の沖附(２)式・小牧野３期の深鉢で、南壁際の下位か

ら口縁部を南に向けた横倒しの状態で出土しており、SP196から出土した破片と接合した。剥片石器は石鏃２点(図188-５・６)・スクレイパー１点(図188-７)・二次加工剥片３点(図188-８・９)・両極剥片３点・剥片９点が出土している。礫石器は磨製石斧２点・砥石１点・磨石２点(図188-10・11)・礫破片20点が出土している。土製品は球状土製品１点(図196-８)・焼成粘土塊６点・土器片利用土製品１点(図200-18)が出土している。石製品は碗形石製品１点(図205-７)・扁平円礫１点（写真246-16)が出土している。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(沖附(２)式・小牧野３期)と考えられる。

第127号土坑(図82・147・148・188・189・200、写真111・173・188・193・246)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅠW・X-49グリッドに位置しており、Ⅴ層で褐灰色土の広がりとして確認した。

[構造] 平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端200×154㎝、下端196×188㎝、深さ162㎝である。底面積は2.926㎡である。

[堆積土] 褐灰色土や明黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階から前葉と考えられるものが出土している。総重量は12,819.1ｇで、10点図示した(図147-11～図148-７)。図148-１・２は前葉の十腰内Ⅰ式の深鉢で、西側の中位で台石の上から出土しており、１の北側に２が接した状態であった。１は口縁部を東に向けた横倒しの状態で、２は正立していたが上部は破損して開いた状態であった。図148-７は底部で、穿孔が１箇所施されている。剥片石器は石鏃１点(図188-12)・スクレイパー１点・石核13点(図189-１～３)・剥片142点が出土している。礫石器は砥石１点・磨石２点(図189-４・５)・石皿１点(図189-６)・台石１点・礫破片48点・原礫18点が出土している。砥石は底面、石皿は底面直上から出土した。土製品は焼成粘土塊１点・ミニチュア土器１点・土器片利用土製品７点(図200-19～25)が出土している。石製品は扁平円礫が１点出土している（写真246-17)。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式)と考えられる。

第128号土坑(図82・148・190、写真111・188)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅠW-48グリッドに位置しており、Ⅴ層でにぶい黄橙色土の広がりとして確認した。

[構造] 平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端80×74㎝、下端214×212㎝、深さ146㎝である。底面積は3.594㎡である。

[堆積土] にぶい黄橙色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階から前葉の破片が出土している。総重量は31ｇで、２点図示した(図148-８・９)。石器は底面の中央から台石が１点出土している(図190-１)。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式)と考えられる。

第129号土坑(図82・149・150・190・201、写真112・174・189・193)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅠY-50・51及びⅡA-51グリッドに位置しており、Ⅴ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複] 礫122・138(環状列石)と重複しており、本遺構が古い。SP447と重複しているが、新旧は不明である。また、ST１の形成過程で構築されている。

[構造] 平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端184×154㎝、下端270×260㎝、深さ154㎝である。底面積は5.458㎡である。

[堆積土] にぶい黄褐色土やにぶい黄橙色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期初頭古段階から前葉と考えられるものが出土している。総重量は9,326ｇで、28点図示した(図149-１～図150-14)。図150-９は深鉢で、南側の上位から口縁部を東に向けた横倒しの状態で出土した。図149-５は初頭新段階の小牧野３期の壺で、東壁際の中位から倒立した状態で出土した。上部は欠損するが、切断壺の可能性がある。図149-４は小牧野３期の深鉢で、西側の中位から口縁部を西に向けた横倒しの状態で出土した。口縁部に２箇所の貫通孔が対称的に配置されており、底部にも２箇所の刻みが対称的に配置されている。貫通孔と刻みが同一線上にあることから、紐を通して使用されたことが考えられる。図149-１は小牧野３期の深鉢の下半部で北壁際の下位、図149-３は浅鉢で西壁際の下位、図149-２は鉢で南壁際の下位から出土した。図150-14は壺の胴部で、西側に近接するSK134から出土した破片と接合した。剥片石器は二次加工剥片１点・両極剥片２点・剥片４点が出土している。礫石器は磨石１点(図190-２)・石錘２点(図190-３)・礫破片16点が出土している。土製品は焼成粘土塊１点・土器片利用土製品１点(図201-１)が出土している。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)と考えられる。

第130号土坑(図83・150・190、写真112・113・189)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅠX-50・51グリッドに位置しており、Ⅴ層で灰黄褐色土の広がりとして確認した。

[重複] SP403と重複しており、本遺構が古い。

[構造] 平面形状は円形、底面は平坦で壁はやや外傾して立ち上がっている。規模は上端160×130㎝、下端120×108㎝、深さ24㎝である。底面積は0.976㎡である。

[堆積土] 灰黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階から前葉と考えられる破片が出土している。総重量は819.９ｇで、４点図示した(図150-15～18)。石器はスクレイパーが１点出土している(図190-４)。土製品はミニチュア土器が１点出土している。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式)と考えられる。

第131号土坑(図83・151・190・205、写真113・174・189・195)

[位置・確認] 調査区中央の平場、ⅠY-48及びⅡA-47・48グリッドに位置しており、Ⅴ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複] SK54と重複しているが、新旧は不明である。

［構造］平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端100×92㎝、下端142×126㎝、深さ146㎝である。底面積は1.46㎡である。
［堆積土］灰黄褐色土や褐灰色土を主体とした人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は後期初頭新段階から前葉と考えられるものが出土している。総重量は4,291ｇで、11点図示した(図151-１～11)。剥片石器は石鏃１点(図190-５)・二次加工剥片１点・両極剥片２点・剥片６点が出土している。礫石器は砥石１点・磨石１点(図190-６)・石錘１点・礫破片12点・原礫１点が出土している。土製品は焼成粘土塊11点・ミニチュア土器１点が出土している。石製品は石冠が１点出土している(図205-９)。また底面直上で、壁側から10点の礫が出土した。出土した礫は扁平でやや大きなものが多く、砥石と石錘が各１点含まれている。
［時期］堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)から前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられる。

第132号土坑(図83・84・151・190・196、写真113・114・189・191)
［位置・確認］調査区南側の段丘縁辺、ⅠU-49・50グリッドに位置しており、Ⅴ層でにぶい黄橙色土の広がりとして確認した。
［重複］重複による新旧は、SK137＜本遺構＜SB７SP483＜SI14、SK138＜本遺構、本遺構＜SB６SP471・SB８SP418である。また、ST１の形成過程で構築されている。
［構造］上端は西側のみ検出した。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。残存する規模は上端160×90㎝、下端170×160㎝、深さ102㎝である。底面積は2.168㎡と推定される。
［堆積土］灰黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は中期末葉から後期前葉と考えられる破片が出土している。総重量は2,329.９ｇで、５点図示した(図151-12～16)。16は後期初頭新段階に相当する弥栄平(２)式の深鉢の口縁部で、SB７SP483から出土した破片と接合した。石器は石鏃１点(図190-８)・スクレイパー１点(重複する遺構から出土した可能性あり)・二次加工剥片３点(うち２点は重複する遺構から出土した可能性あり)・剥片６点(重複する遺構から出土した可能性あり)・磨石１点(図190-７)・礫破片３点が出土している。土製品は土偶１点(図196-10)・棒状土製品１点(図196-９)・ミニチュア土器２点(うち１点は重複する遺構から出土した可能性あり)が出土している。
［時期］堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階以降と考えたが、重複する遺構の土器が混入した可能性があり判断し難い。

第133号土坑(図83・151・152・191・196・201、写真114・174・189・191・193)
［位置・確認］調査区中央の平場、ⅠV-48グリッドに位置しており、Ⅴ層で灰黄色砂の広がりとして確認した。
［重複］SP441と重複しているが、新旧は不明である。
［構造］平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端80×58㎝、下端120×90㎝、深さ108㎝である。底面積は0.877㎡である。
［堆積土］灰黄色砂や灰黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。１層は砂層を挟み互層に堆積

しており、重複した土坑かピットの可能性もある。
[出土遺物] 土器は後期前葉(十腰内Ⅰ式)が出土している。総重量は3,589.7ｇで、６点図示した(図151-17～図152-４)。図151-17は浅鉢で、北壁側の下位から破片が出土した。石器は石錐１点(図191-１)・剥片２点・磨石１点(図191-２)・礫破片６点が出土している。土製品は球状土製品１点(図196-12)・焼成粘土塊６点(図196-11)・ミニチュア土器１点・土器片利用土製品２点(図201-２・３)が出土している。
[時期] 堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式)と考えられる。 (野村)

第134号土坑(図84・150・152・191・201・205、写真114・115・175・189・195)
[位置・確認] 調査区中央東側の平場、ⅠY-50・51グリッドに位置しており、第１号風倒木の土層観察面で遺構ラインを確認した。
[重複] 第１号風倒木より古い。
[構造]平面形状は円形と推測され、計測できた平面規模は検出面で154cm、底面で275×246cmである。断面形状はフラスコ状である。第Ⅶ層を底面とし、深さは130cm、底面積は5.220㎡である。底面から２基のPitを検出した。Pit１の規模は34×33cm、深さ14cmで、床面ほぼ中央から検出した。Pit２の規模は34×30cm、深さ16cmで、床面の西端から検出した。
[堆積土] 10層に分層した。１～８層はロームブロックや炭化物、遺物などの混在が多く人為堆積した様相を示している。
[出土遺物] 土器は後期初頭新段階(沖附(２)式・小牧野３期)とみられる破片を主体として堆積土中から5,912.6ｇ出土した(図152-５～10)。石器は石錐１点、楔形石器１点(図191-３)、剥片３点、磨製石斧１点、磨石２点(図191-４、５)、石皿１点(図191-６)、礫破片２点が出土した。土製品は後期初頭～前葉の土器片を素材とした土器片利用土製品が１点出土した(図201-４)。石製品は１点出土した。図205-８は凝灰岩を素材とした碗状石製品で高台が成形されている。
[時期] 出土土器から後期初頭新段階(沖附(２)式・小牧野３期)である可能性が高い。(小山)

第135号土坑(図83・152・201、写真113・115・246)
[位置・確認] 調査区南側の段丘縁辺、ⅠU・V-49・50グリッドに位置しており、Ⅴ層でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。
[重複] SB５SP388と重複しており、本遺構が古い。SP337・342と重複しているが、新旧は不明である。
[構造] 平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端106×92cm、下端220×180cm、深さ104cmである。底面積は3.143㎡である。
[堆積土] にぶい黄褐色土や褐灰色土を主体とした人為堆積と考えられる。
[出土遺物] 土器は後期初頭新段階から前葉と考えられる破片が出土している。総重量は622.3ｇで、３点図示した(図152-11～13)。石器は剥片８点、台石・砥石破片１点が出土している。土製品は土器片利用土製品が１点出土している(図201-５)。石製品は扁平円礫が１点出土している(写真246-18)。
[時期] 堆積状況と出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えたが、重複する遺構の土器が混入した可能性があり判断し難い。

第136号土坑(図83・84・153・201、写真113～116・175・193)

[位置・確認] 調査区南側の段丘縁辺、ⅠU・V-50グリッドに位置しており、Ⅴ層でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

[重複] 重複による新旧は、SK137＜本遺構＜SI14＜SB６SP494、SB５SP388＜本遺構である。また、ST１の形成過程で構築されている。

[構造] 上端は北側のみ検出した。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。残存する規模は上端72×36cm、下端166×154cm、深さ140cmである。底面積は2.064㎡である。

[堆積土] にぶい黄褐色土や灰黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期初頭が出土している。総重量は6,450.９ｇで、８点図示した(図153-１～８)。１は深鉢で、南壁際の上位から正立の状態で出土した。石器は両極剥片１点・剥片５点(うち１点は重複する遺構から出土した可能性あり)が出土している。土製品はミニチュア土器２点・土器片利用土製品２点(図201-６・７)が出土している。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)と考えたが、重複する遺構の土器が混入した可能性があり判断し難い。

第137号土坑(図83・84・153、写真113～116・175)

[位置・確認] 調査区南側の段丘縁辺、ⅠU-50グリッドに位置しており、Ⅴ層でにぶい黄褐色土の広がりとして確認した。

[重複] 重複による新旧は、本遺構＜SK132＜SB７SP483＜SI14、本遺構＜SK136＜SI14である。SP504・506と重複しているが、新旧は不明である。また、ST１の形成過程で構築されている。

[構造] 南側のみの検出で、詳細は不明である。平面形状は円形と推定され、断面形状はフラスコ状である。残存する規模は上端184×98cm、下端198×138cm、深さ90cmである。

[堆積土] 褐灰色土や明黄褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期初頭が出土している。総重量は1,621.７ｇで、１点図示した(図153-９)。９は深鉢で、南壁際の上位から底部を南に向けた横倒しの状態で出土した。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭と考えられる。

第138号土坑(図83・84・154・191、写真113・114)

[位置・確認] 調査区南側の段丘縁辺、ⅠU-49グリッドに位置しており、Ⅴ層で灰黄褐色土の広がりとして確認した。

[重複] 重複による新旧は、本遺構＜SK132・SB６SP494・SB14SP495である。また、ST１の形成過程で構築されている。

[構造] 北側のみ検出した。平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。残存する規模は上端92×80cm、下端120×110cm、深さ76cmである。底面積は1.156㎡と推定される。

[堆積土] 灰黄褐色土や褐灰色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階から前葉の破片が出土している。総重量は138.６ｇで、３点図示した(図154-１～３)。石器は剥片１点・磨石１点(図191-７)が出土している。

［時期］重複関係から、後期初頭新段階以前と考えたが、判断し難い。　（野村）

第139号土坑(図84・154・191・201、写真116・189)

［位置・確認］調査区中央北側の平場、ⅠY-48・49グリッドに位置している。Ⅴ層で確認した。

［構造］平面形状は円形で、平面規模は検出面で86×83㎝、底面で136×130㎝である。断面形状はフラスコ状である。Ⅶ層を底面とし、深さは150㎝、底面積は1.360㎡である。

［堆積土］土層観察は省略した。

［出土遺物］土器は後期前葉(十腰内Ⅰ式)とみられる破片を主体として堆積土中から2,110.7ｇ出土した(図154-４～７)。石器は石鏃１点(図191-８)、剥片４点、敲石１点(図191-９)、磨石１点(図191-10)、球状礫１点、礫破片が２点出土した。土製品は後期初頭から後期前葉の土器片を素材とした土器片利用土製品が５点出土した(図201-８～12)。図201-９・12は十腰内Ⅰ式の破片を素材としたものである。

［時期］出土土器から後期前葉(十腰内Ⅰ式)である可能性が高い。

第140号土坑(図84)

［位置・確認］調査区南側の斜面、ⅠT・U-45・46グリッドに位置している。ST１に堆積しているⅢ-１層を掘り下げ中に黒褐色土の広がりを確認した。

［重複］SP502より古い。またⅢ-１層を掘り込んで構築されている。

［構造］平面形状は楕円形と推察され、計測できた長さは検出面で201㎝、底面で153㎝である。断面形状は浅い箱状で、壁は外傾して立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、深さは66㎝である。

［堆積土］３層に分層した。ロームブロックが多く混在しており人為堆積の様相を示している。

［出土遺物］出土しなかった。

［時期］遺物が出土していないため詳細は不明であるが、ST１堆積層のⅢ-１層を掘り込んでいることから後期前葉に位置づけられる可能性が高い。

第141号土坑(図84・154、写真63・116・176)

［位置・確認］調査区南側の斜面上方、ⅠU・V-46グリッドに位置しており、SP564・565の精査時にこれらと立体的に重複する遺構として検出した。

［重複］SB22SP564・565と重複し、本遺構が古い。

［構造］平面形状は円形、平面規模は底面で196×181㎝である。断面形状はフラスコ状である。Ⅶ層を底面とし、深さは196㎝、底面積は2.849㎡である。

［堆積土］５層に分層した。１・４層は壁の崩落土と考えられる。３層は砂質ブロックが含まれており人為堆積の様相を示している。

［出土遺物］後期初頭新段階(小牧野３期)とみられる破片を主体として堆積土中から2,520ｇの土器が出土した(図154-８・10)。図154-10は底面直上から出土した略完形個体で、胴部には入り組み状の沈線文が施文されている。また、沈線内に一部赤漆が残存している。石器は剥片３点、磨石１点が出土した。

［時期］底面直上から出土した土器から後期初頭新段階(小牧野３期)の可能性が高い。　（小山）

第142号土坑(図85・155・191、写真116・117)

［位置・確認］調査区中央北側の平場、ⅡA-48グリッドに位置している。Ⅳ・Ⅴ層で黒褐色土の広がりと大型の砥石(図191-11)が斜位に刺さっているのを確認した。

［構造］平面形状は楕円形、断面形状はフラスコ状である。平面規模は検出面で107×73㎝、底面で111×91㎝である。深さは102㎝、底面積は0.826㎡である。

［堆積土］黒褐色・暗褐色土主体で、ロームブロック・炭化物を含み人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は総重量1,577.9gが出土した。掲載した３点(図155-１～３)は小牧野３期・十腰内Ⅰ式とみられる。石器は確認面で二次加工剥片１点、堆積土から剥片１点、礫破片５点、磨石(石錘転用か)１点、砥石２点が出土した(図191-11・12)。11は堆積土上部、立位で検出した砥石で、埋まっていた下部側が被熱し赤化している(写真116下)。

［時期］出土遺物から、後期初頭新段階(小牧野３期)～後期前葉(十腰内Ⅰ式)と考えられる。礫の上部は露出しており、近接する環状列石と一連のものであれば十腰内Ⅰ式第１段階である。　（折登）

第143号土坑(図85・155・191、写真117・176・189)

［位置・確認］調査区南側の斜面下方、ⅠQ-42グリッドに位置しており、Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

［重複］ST１の形成過程で構築されている。

［構造］北側のみの検出で、詳細は不明である。平面形状は楕円形と推定され、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。残存する規模は上端96×86㎝、深さ36㎝である。

［堆積土］黒褐色土を主体としている。

［出土遺物］土器は後期初頭新段階から前葉と考えられるものが出土している。総重量は2,557.3ｇで、５点図示した(図155-４～８)。４は深鉢で、検出面から出土した。石器は剥片２点、磨石２点(図191-13)、台石・砥石破片１点が出土している。台石・砥石破片はST１(IQ-47グリッド)から出土した破片と接合した。

［時期］堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階から前葉と考えられる。　（野村）

第144号土坑(図85・155・192・201、写真117・176・189・193・246)

［位置・確認］ⅡA-48・49グリッド、平場に位置し、Ⅳ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

［重複］環状列石の主体部構成礫の礫22の下に位置し、本遺構の方が古い。

［構造］平面は楕円形、断面形状は細長いフラスコ形で、底面は平坦である。平面規模は上端で109㎝×81㎝、下端で124㎝×114㎝である。深さは166㎝、底面積は1.165㎡である。

［堆積土］褐色シルト質粘土が多く、炭化物を含む。崩落土がみられず、短期間の人為堆積と考えられる。

［出土遺物］土器は、後期初頭新段階(小牧野３期)～前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)が堆積土から出土した。総重量は4,210.8gで、２点図示した(図155-９・10)。図155-９は、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段

階)の略完形の浅鉢で、口縁部から胴部にかけて沈線文(長楕円、クランク、入組文)が施文される。10は後期初頭新段階(小牧野３期)～前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の小型の壺で、胴部に入組文が施文される。石器は、堆積土からデイサイト製の敲石(図192-１)と石錘(図192-２)が出土した。他に堆積土から剥片が出土している。土製品は堆積土から後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の土器片利用土製品が１点(図201-13)出土しており、方形で一部が研磨され、網目状沈線文が施文される。石製品は堆積土から花崗閃緑斑岩の扁平円礫(写真246-19)が１点出土した。堆積土から自然礫が３層で１個、10層以下で４個出土した。いずれも堆積土中のため、投棄したものと思われる。このうちS１は安山岩製台石、S２・４・５はデイサイト、S３は凝灰岩の自然礫である。

[時期] 出土土器や土製品から、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられる。 (長谷川)

第145号土坑(図85・155・196、写真117・191)

[位置・確認] 調査区南側の緩斜面上、ⅠR-45グリッドに位置しており、ST１Ⅲb層上面で黒褐色土の広がりを確認した。

[重複] ST１の遺物包含層(Ⅲ-１層)が本遺構を被覆していることら、ST１形成以前に構築されている。

[構造] 平面形状は円形、土層観察用ベルトにおける掘り込み面での開口部規模は86㎝、底面規模は160×148㎝、断面形状はフラスコ状である。第Ⅵ層を底面とし、掘り込み面からの深さは145㎝、底面積は1.868㎡である。

[堆積土] ８層に分層した。壁の崩落を伴いながら自然堆積した様相を示している。

[出土遺物] 前期末葉とみられる破片195.７ｇが堆積土中から出土した。図155-11は波状口縁となる口縁部片で、LRの側面厚痕が波状に施されているほか、ボタン状突起が貼付されている。また、有孔土製品が１点出土した(図196-13)。

[時期] 出土土器から、前期末葉以降と考えられる。 (小山)

第146号土坑(図85・155、写真118)

[位置・確認] 調査区南側の斜面、ⅠS-44グリッドに位置しており、Ⅳ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複] ST１の形成過程で構築されている。

[構造] 平面形状は円形、断面形状はフラスコ状である。規模は上端60×58㎝、下端60×56㎝、深さ36㎝である。底面積は0.269㎡である。

[堆積土] 黒褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階の破片が出土している。総重量は271.９ｇで、１点図示した(図155-13)。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階以降と考えられる。 (野村)

第147号土坑(図85・156・201、写真118)

[位置・確認] 調査区南端の斜面、ⅠL-46グリッドに位置する。Ⅳ層で黒褐色土の広がりを確認した。

[構造] 平面形は円形、底面は水平で若干の凹凸がある。平面規模は上端で142×117㎝、下端で84×

81cmである。深さは32cm、底面積は0.537㎡である。
［堆積土］黒褐色土主体で、地山由来の粘土や焼土を含む人為堆積と考えられる。
［出土遺物］土器は堆積土から後期初頭～前葉が出土し、総重量は605.8gである。このうち２点(図156-１・２)を図示した。１は後期初頭新段階(弥栄平(２)式・沖附(２)式)の深鉢胴部で、横位の沈線文が施文される。２は、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の壺で、微隆帯文がつく。土製品は、土器片利用土製品が１点(図201-14)が出土した。単軸絡条体第５類が施文された後期初頭新段階～前葉の土器胴部を方形に打ち欠いており、縁辺が部分的に研磨されている。
［時期］堆積土出土の土器・土製品から、後期初頭新段階～前葉と考えられる。　（秦）

第148号土坑(図86・156・192、写真118・176・189)
［位置・確認］調査区南側の斜面上方、ⅠU-46グリッドに位置しており、ST１Ⅲ-１層掘り下げ時に褐色土の広がりを確認した。
［重複］ST１の形成過程で構築されている。SP169との関係は不明である。
［構造］平面形状は楕円形、平面規模は検出面で121×94cm、底面で92×91cmである。断面形状は浅い箱状で、壁は外傾して立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、深さは39cm、底面積は0.600㎡である。
［堆積土］５層に分層した。遺物や炭化物、ロームなどが多く混在しており人為堆積の様相を示している。
［出土遺物］遺物は主に検出面から出土しており、土器は後期前葉(十腰内Ⅰ式)とみられる破片を主体として3,233.2ｇ出土した(図156-５～９)。図156-７は壺の口縁～頸部片で、頸部外面には赤化粧土が塗布されている。図156-９は深鉢の胴部片でST１出土破片と接合した。石器は石核１点(図192-４)、剥片１点、磨石１点、石皿破片１点、礫破片１点が出土した。出土した石皿破片はST１、SK122から出土したものと接合した。
［自然科学分析］リン・カルシウム分析を底面付近から採取した３サンプルについて行った。結果、サンプルNO.6でリンの値が１％を超えており、骨や歯に由来する可能性が指摘された一方で、マッピング図における輝度の低さとカルシウム値が低いこともあわせて指摘されている(第４章第２節)。
［時期］出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式)の可能性が高い。

第149号土坑(図86・157、写真118・119・177・246)
［位置・確認］調査区中央西側で調査区際にあたるⅠY-44グリッドに位置しており、Ⅲ層で暗褐色土の広がりを確認した。
［重複］SP210と重複し、本遺構が新しい。
［構造］平面形状は円形で、平面規模は検出面で117×89cm、底面で152×149cmである。断面形状はフラスコ状である。Ⅶ層を底面とし、深さは125cm、底面積は1.810㎡である。
［堆積土］７層に分層した。Ⅵ・Ⅶ層由来の砂質土が主体を占めており、人為堆積した様相を示している。また底面直上から貝が少数出土した。
［出土遺物］土器は後期初頭新段階(弥栄平(２)式)とみられる深鉢4,398.4ｇが堆積土中から出土した(図157-１)。図157-１は底面から出土した土器でほぼ完形に復元できた深鉢である。土器は横転して

潰れた状況ではなく、口縁から底部付近までを１単位としたまとまりが３カ所に分かれて出土している。意図的に分割して廃棄された状況を示している。石器は石鏃１点が出土したが図示していない。石製品は扁平円礫が１点（写真246-20）出土した。

[自然科学分析]底面直上から貝類が出土しており、水洗した結果、貝類10.4ｇ、魚骨5.5ｇを抽出し、動物遺体の同定を行った。貝類ではハマグリが多く、魚類では板鰓類(サメ・エイ類)の出土が突出している(第４章第６節)。

[時期] 底面直上から出土した土器から後期初頭新段階(弥栄平(２)式)と考えられる。(小山)

第150号土坑(図85・157、写真119)

[位置・確認] 調査区南端の斜面、ⅠK-44グリッドに位置する。Ⅳ層で黒色土の広がりを確認した。

[構造] 平面形は円形、断面形は浅い椀形である。平面規模は上端で80×75cm、下端で51×48cmである。深さ25cm、底面積は0.195㎡である。

[堆積土] 黒褐色土主体で、地山由来の粘土や炭化物を含むことから人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 堆積土から総重量38.7gの土器が出土し、うち１点を図示した。図157-２は後期前葉の十腰内Ⅰ式第１段階の深鉢胴部片で、波状入組文が施文される。

[時期] 堆積土出土土器から、後期前葉の十腰内Ⅰ式第１段階と考えられる。 (秦)

第151号土坑(図86・157・192・202、写真119・177・189・194)

[位置・確認] 調査区中央西側の平坦面にあたるⅠX・Y-44・45グリッドに位置しており、Ⅲ層で暗褐色土の広がりを確認した。

[構造] 平面形状は円形で、平面規模は検出面で115×102cm、底面で144×137cmである。断面形状はフラスコ状である。Ⅵ層を底面とし、深さは101cm、底面積は1.574㎡である。

[堆積土] ４層に分層した。３・４層には貝が大量に含まれていることから、これらの層は確実に人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階(沖附(２)式・小牧野３期)とみられる破片1,741.6ｇが堆積土中から出土した(図157-３～８)。図157-３は粗製系の深鉢で、近接したSK157から出土した図159-９とほぼ同規格である。石器は堆積土中から大石平型石篦１点(図192-３)が出土したほか、貝層中から剥片が２点と貝刃(図202-4)が１点出土した。

[自然科学分析] 堆積土下位、及び底面直上から大量の貝類が出土した。これらを全量回収し水洗選別した結果、貝・巻貝・カキ類13,575ｇ、動物骨10.9ｇ、魚骨8.8ｇなどを抽出した。これらの同定を行ったところ、貝類ではアサリの出土が卓越し、次いでハマグリ、魚類ではニシン科が最も多く、次いでタラ科が多く出土している。そのほか、爬虫類ヘビ亜目の椎骨やカモ科左橈側手根骨、ヒトと思われる切歯なども認められた(第４章第６節)。

[時期] 出土土器から、後期初頭新段階(沖附(２)式・小牧野３期)と考えられる。

第152号土坑(図86、写真120)

[位置・確認] 調査区中央西側で調査区際にあたるⅠY-44グリッドに位置している。西壁際のⅢ層で暗褐色土の広がりを確認した。遺構の西側約半分は調査区外へ伸びている。

[重複] SK155より新しい。

[構造] 平面形状は円形と推測され、計測できた長さは検出面で70㎝、底面で106㎝である。断面形状はフラスコ状である。Ⅴ層ないしはⅥ層を底面とし、深さは92㎝である。

[堆積土] ３層に分層した。最も厚く堆積している１層中には、ロームブロックや炭化物が含まれており人為堆積した様相を示している。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階と思われる破片が堆積土中から290.1ｇ出土したが、小破片であるため図示していない。石器は出土しなかった。

[時期] 遺物の出土が少なく詳細は不明であるが、周辺の遺構状況から後期初頭新段階～後期前葉に位置づけられる可能性がある。　(小山)

第153号土坑(図86、写真120)

[位置・確認] 調査区南側の段丘縁辺、ⅠT・U-47グリッドに位置しており、Ⅴ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複] ST１の形成過程で構築されている。

[構造] 平面形状は円形、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は上端80×80㎝、下端74×66㎝、深さ14㎝である。底面積は0.385㎡である。

[堆積土] 黒褐色土を主体とした人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階の破片が95.6ｇ出土している。石器は剥片が１点出土している。

[時期] 堆積状況と出土土器から、後期初頭新段階以降と考えられる。　(野村)

第154号土坑(図87・158・192・202、写真120・177・189・194)

[位置・確認] 調査区中央西側の平坦面、ⅠX・Y-45・46グリッドに位置しており、Ⅴ層で暗褐色土の広がりを確認した。

[重複] SB11SP197より古い。

[構造] 平面形状は円形、平面規模は検出面で74㎝、底面で156×154㎝である。断面形状はフラスコ状である。第Ⅶ層を底面とし、深さは163㎝、底面積は1.944㎡である。底面ほぼ中央からPit１を検出した。規模は25×25㎝、深さ５㎝である。

[堆積土] 10層に分層した。ロームとの混合土が堆積しているほか、炭化物、ロームブロックを多く含んでいることから人為堆積の様相を示している。

[出土遺物] 土器は後期前葉(十腰内Ⅰ式)とみられる破片を主体として堆積土中から2,915.6ｇ出土した(図158-１～４)。石器は両極剥片３点、剥片６点、磨石６点(図192-５～９)、砥石１点、球状礫１点、礫破片２点が出土した。足形付土版は破片が３点出土した。３点は接合し、指跡の配置から右足と考えられる(図202-３)。残存値は長さ14.5・幅7.8・厚さ2.1㎝、重さ194.9ｇである。指跡は小指と薬指の一部が残存している。指の付け根部分はやや凹凸があり、小指に重なるように指１本分の凹

線が側縁に沿って施されている。胎土には砂と海綿骨針が含まれ、焼成は良好で色調は全体的に橙色であるが、指の付け根部分付近は黒色である。
[時期]出土土器に後期初頭新段階の破片が含まれていないことから、縄文時代後期前葉(十腰内Ⅰ式)の可能性がある。また、本遺構より新しいSB11は環状列石よりも古いことから、列石構築以前の遺構と考えられる。（小山・野村）

第155号土坑(図86、写真120)
[位置・確認] 調査区中央西側で調査区際にあたるⅠX・Y-44グリッドに位置している。西壁際のⅢ層で暗褐色土の広がりを確認した。遺構の西側約半分は調査区外へ伸びている。
[重複] SK152、SP199より古い。
[構造] 平面形状は円形と推測され、計測できた長さは検出面で195㎝、底面で230㎝である。断面形状はフラスコ状である。Ⅶ層を底面とし、深さは114㎝である。
[堆積土] 10層に分層した。３・４層はローム質土、５・６層はⅥ・Ⅶ層由来の砂質土層、７層以下もロームとの混合土が堆積するなど人為堆積の様相を示している。
[出土遺物] 土器は16.2ｇ出土したが小片であるため詳細は不明である。石器は出土しなかった。
[時期] 遺物の出土が少なく詳細な時期は不明であるが、周辺の遺構の状況から後期初頭新段階～後期前葉に位置づけられる可能性がある。

第156号土坑(図86・158・201・202、写真194)
[位置・確認] 調査区南側の斜面中腹にあたるⅠT-46グリッドに位置しており、ST１のⅢ-１層掘り下げ時に確認した。
[重複] SB22SP201、SP206より古く、SP202・SP203より新しい。
[構造] 平面形状は楕円形を基調としたもので、計測できた長さは検出面で114×111㎝、底面で93×91㎝でる。断面形状は浅い皿状で、壁はわずかに外傾して立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、深さは24㎝である。推定される底面積は0.729㎡である。
[堆積土] 堆積土の観察は省略した。
[出土遺物] 土器は後期初頭新段階(小牧野３期)とみられる破片を主体として堆積土中から945.3ｇ出土した(図158-５・６)。石器は剥片10点、磨石２点、礫破片１点が出土した。土製品は後期初頭～前葉の土器片を素材とした土器片利用土製品が３点出土した(図201-15～17)ほか、土器片錘が１点出土した(図202-２)。
[時期] 出土土器から、後期初頭新段階(小牧野３期)と考えられる。

第157号土坑(図87・158～160・192・193・201、写真120・177・178・189・193)
[位置・確認] 調査区中央西側の平場、ⅠX・W-44・45グリッドに位置している。Ⅴ層で褐色土の広がりを確認した。
[重複] 環状列石の張出部２を構成している礫102より古い。
[構造] 平面形状は円形、平面規模は検出面で154×133㎝、底面で191×184㎝である。断面形状はフ

ラスコ状である。Ⅶ層を底面とし、深さは165㎝、底面積は2.711㎡である。
［堆積土］14層に分層した。炭化物を多く含んだ黒褐色土、ロームを多く含んだ暗褐色土の土が互層となって堆積しており人為堆積の様相を示している。
［出土遺物］土器は後期初頭新段階(小牧野３期)とみられる破片を主体として堆積土中から11,835.1ｇ出土した(図158-７～160-１)。図159-２は完形の鉢で、底部側面から底部に穿孔が２単位施されている。図159-９は粗製系の深鉢で、近接したSK151から出土した図157-３と規格がほぼ同じである。図160-１の深鉢は、ST１(IT-46)出土の土器片と接合している。石器は二次加工剥片１点、剥片３点、磨石１点(図192-10)、石皿１点(図193-１)、加工礫１点、原礫１点、礫破片３点が出土した。土製品は後期初頭～前葉の土器片を素材とした土器片利用土製品が３点出土した(図201-21～23)。また、メノウの搬入礫が１点出土した。
［時期］出土遺物から、後期初頭新段階(小牧野３期)と考えられる。

第158号土坑(図87・160・193・201、写真121・189・194)
［位置・確認］調査区中央北側の平場、ⅡA-48グリッドに位置している。Ⅴ層でにぶい黄褐色土の広がりを確認した。
［重複］SN22より古い。
［構造］平面形状は円形、平面規模は検出面で110×107㎝、底面で147×145㎝である。断面形状はフラスコ状である。第Ⅶ層を底面とし、深さは185㎝、底面積は1.691㎡である。底面中央から径30㎝、深さ10㎝のPit１を検出した。
［堆積土］５層に分層した。ロームブロック・炭化物が多く混在しており人為堆積の様相を示している。
［出土遺物］土器は後期前葉(十腰内Ⅰ式)とみられる破片を主体として堆積土中から2,935.8ｇ出土した(図160-２～７)。石器は剥片２点、石皿１点(図193-２)が出土したほか、自然礫が１点出土している。土製品は後期初頭～前葉の土器片を素材とした土器片利用土製品が４点出土した(図201-21～24)。
［時期］出土土器から、後期前葉(十腰内Ⅰ式)の可能性が高い。

第159号土坑(図87)
［位置・確認］調査区中央北側の平場、ⅡA・B-48グリッドに位置している。Ⅴ層で褐色土の広がりを確認した。
［構造］平面形状は惰円形を基調としたもので、計測できた長さは検出面で67㎝、底面で52㎝である。断面形状は浅い皿状で壁はわずかに外傾して立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、深さは19㎝である。
［堆積土］褐色土の単層である。
［出土遺物］出土しなかった。
［時期］遺物が出土していないため詳細は不明であるが、周辺の遺構状況から後期初頭新段階～後期前葉に位置づけられる可能性がある。

第160号土坑(図87・160、写真121)

[位置・確認] 調査区中央北側の平場、ⅡB-48グリッドに位置している。Ⅴ層で確認した。

[構造] 平面形状は楕円形と推測され、平面規模は検出面で108×103㎝、底面で93×83㎝である。断面形状は箱形状で、壁は外傾して立ち上がっている。Ⅴ層ないしはⅥ層を底面とし、深さは42㎝、底面積は0.593㎡である。

[堆積土] 堆積状況の観察は省略した。

[出土遺物]土器は後期初頭新段階(弥栄平(２)式・小牧野３期)とみられる破片273.6ｇが出土した(図160-８・９)。石器は出土しなかった。

[時期] 出土遺物から、後期初頭新段階(弥栄平(２)式・小牧野３期)の可能性が高い。

第161号土坑(図75・160、写真107・109)

[位置・確認] 調査区中央北側の平場、ⅡB-46・47グリッドに位置している。Ⅴ層で暗褐色土の広がりを確認した。

[重複] SQ３、SP374より古く、SK112、SP357より新しい。

[構造] 平面形状は惰円形で、計測できた長さは検出面で84㎝、底面で78㎝である。断面形状は浅い皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、深さは20㎝である。

[堆積土] 暗褐色土の単層である。

[出土遺物] 土器は堆積土中から156.7ｇ出土した(図160-10・11)。図161-10は地文施文後に縦位の沈線が施文されており、中期後葉～後期初頭の破片とみられる。図161-11は微隆帯に沈線が施文されており、後期初頭新段階～前葉の破片とみられる。石器は出土しなかった。

[時期] 後期初頭古段階に位置づけられる可能性のあるSK112よりも新しい事から、これ以降と考えられ、SQ３の構築された後期前葉(十腰内Ⅰ式)以前には埋没したものと考えられる。

第162号土坑(図87・160・193、写真121・189)

[位置・確認] 調査区中央北側の平場、ⅠY・ⅡA-47グリッドに位置している。Ⅳ・Ⅴ層で褐色土の広がりを確認した。

[重複] SK55より古い。

[構造] 平面形状は円形、平面規模は検出面で97×74㎝、底面で106×101㎝である。断面形状はフラスコ状である。Ⅶ層を底面とし、深さは114㎝、底面積は0.917㎡である。

[堆積土] 開口部が狭く半截状態では深く掘り進めることが困難であったため、土層観察は堆積土中位(図中の土層観察ライン)までとし記録後は全掘した。４層に分層した。焼土及び、Ⅵ・Ⅶ層由来の砂質土が多量に含まれているなど人為堆積した様相を示している。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階～後期前葉とみられる破片434.7ｇが堆積土中から出土した(図160-12～14)。石器は磨石３点(図193-３)、砥石１点(図193-４)、礫破片２点が出土した。砥石は、ST１(IR-42、IS-46)で出土した破片と接合している。また、堆積土下位から15～20㎝台で規模が揃った扁平な自然礫が５～６個出土した。掘り上げてしまったが礫を並べていた可能性もある。

[時期] 出土土器と周辺の遺構状況から後期初頭新段階～後期前葉の可能性が高い。

第163号土坑(図87)

［位置・確認］調査区中央北側の平場、ⅡA-49グリッドに位置している。Ⅴ層で確認した。

［重複］環状列石の構成礫である礫63より古い。SP392と接しているが新旧関係は不明である。

［構造］平面形状は楕円形、平面規模は検出面で75×72㎝、底面で64×56㎝である。断面形は浅皿状で壁は外傾して立ち上がっている。Ⅴ層ないしはⅥ層を底面とし、深さは37㎝、底面積は0.292㎡である。

［堆積土］堆積土の観察は省略した。

［出土遺物］出土しなかった。

［時期］遺物が出土していないため詳細は不明であるが、周辺の遺構状況から後期初頭新段階～後期前葉に位置づけられる可能性がある。

第164号土坑(図87)

［位置・確認］調査区中央北側の平場、ⅡA-49グリッドに位置している。Ⅴ層で確認した。

［構造］平面形状は円形、平面規模は検出面で79×72㎝、底面で69×63㎝である。断面形は浅皿状で壁は外傾して立ち上がっている。Ⅴ層を底面とし、深さは29㎝、底面積は0.344㎡である。

［堆積土］堆積土の観察は省略した。

［出土遺物］出土しなかった。

［時期］遺物が出土していないため詳細は不明であるが、周辺の遺構状況から後期初頭新段階～後期前葉に位置づけられる可能性がある。　（小山）

第７節　土器埋設遺構

第８号土器埋設遺構は、第12号竪穴遺物跡に帰属するものとした。

第１号土器埋設遺構(図88・161、写真122・178)

[位置・確認] 調査区中央の平場、環状列石の内側のⅡA-50グリッドに位置し、Ⅳ層で土器の広がりとして確認した。

[重複] 第１号風倒木と近接するが、重複しない。第１号風倒木で破壊された礫は環状列石の構成礫や配石遺構の可能性があるため、本遺構も関連する遺構だった可能性もある。

[構造] Ⅳ層を掘り込む掘方を確認できた。正立の壺(図161-１a・b)が埋設され、土器は南側に傾いている。胴～底部の個体で、底部を打ち欠いてから埋設している。

[堆積土] 掘方堆積土は地山Ⅴ層に類似するが、炭粒の範囲などで検出できた。掘方は土器に沿って狭く掘られている。土器内堆積土は、掘方と層相が類似する。

[出土遺物] 土器は、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)が出土した。総重量は5,129.9gで、埋設土器１点を図示した(図161-１)。１は、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の壺で、胴部文様は４単位の長楕円形による方形区画内に縦位蛇行状や弧状入組文が配置され、下部は無文帯である。底部は打ち欠きで欠損する。

[時期] 埋設土器の時期から後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられる。　(長谷川)

第２号土器埋設遺構(図88・162・193・201・205、写真122・179・189・195)

[位置・確認] ⅠU-48グリッドに位置する。Ⅲ層中で土器の口縁部分を検出した。

[重複] ST１の形成過程で構築される。また、SP259と重複し、本遺構が新しい。

[構造] 掘方は開口部52×47cm、底面21×17cmの円形で、深さ39cmのU字形断面形をとる。掘方内部には深鉢土器が正位で埋設され、全体が南西方向に約20°傾斜している。

[堆積土] 掘方内は黄褐色土主体の３層、土器内は暗褐色土主体の３層に分層された。

[出土遺物] 土器は、十腰内Ⅰ式第１段階の埋設本体(図162-１)を含む4,673.3gが出土した。土器内の堆積土２層からは石鏃２点(図193-５・６)と剥片１点、土器片利用土製品(図201-25)が、検出面では石冠(図205-10)が出土した。

[時期] 埋設された土器の型式から、後期前葉の十腰内Ⅰ式第１段階と考えられる。　(秦)

第３号土器埋設遺構(図88・162・201、写真123・179)

[位置・確認] 調査区西側の緩斜面、ⅠW-43グリッドに位置し、Ⅲ層で土器の広がりとして確認した。

[重複] SB10の構成柱穴SP220の直上に位置し、本遺構が新しい。本遺構の精査時にはSP220は検出していない。SP220は、本遺構の底面から約12cm程下で検出した。また、SB９の内側に位置するものの、SB９の機能面を検出できず不明のため、重複関係は不明である。

[構造] 掘方は、焼土を掘り込んでいる状況を検出できた。深鉢(図162-２)が正位で埋設される。胴部のみの個体で口縁部などは出土しなかった。土器は南西側面がゆがんでおり、底部は南側を下に向

けた斜めに検出された。

［堆積土］掘方はⅢ層を掘り込む暗褐色土で、土器内の堆積土はロームブロックを一部に含む暗褐色土である。墓の可能性を検討するために、土器内堆積土と掘方の土壌のリン・カルシウム分析を行った。４層(土器内)の試料から、リンやカルシウムが多い箇所があり、骨や歯に由来する可能性がある一方、１～３層(掘方)の土からもリンが多い箇所が検出されているため、解釈には注意を要するとされた(第４章第１節)。

［出土遺物］土器は後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)が出土した。総重量は2,873.0gで、埋設土器１点を図示した(図162-２)。２は、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の深鉢で、胴部文様が縦位区画内に長楕円形文が矢羽状に３単位施文される。石器は、検出面から剥片が２点出土した。土器片利用土製品は、１点(図201-26)、埋設土器の底部の直上から出土した。円形で一部が研磨され、弧状の沈線文が施文されることから小牧野３期・十腰内Ⅰ式に位置付けられる。

［時期］埋設土器や土製品の時期から後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられる。

第４号土器埋設遺構(図88・163、写真123・179)

［位置・確認］調査区西側の緩斜面、ⅠV-45グリッドに位置し、Ⅲ層で土器の広がりとして確認した。浅鉢(図163-１)等の土器の散布範囲として検出し、下部の精査を行う過程で土器埋設遺構と判明した。

［構造］掘方の検出は困難であったが、Ⅲ層より若干明るい範囲を掘方と認定した。深鉢(図163-２)の直上に浅鉢(図163-１)が埋設され、いずれも正位である。２つの土器の間には１層を挟み、接していない。

［堆積土］土器の中の堆積土は掘方と同様に暗褐色土である。

［出土遺物］土器は後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)が出土した。総重量は680.5gで、同時期の２点を図示した(図163-１・２)。上位の埋設土器の浅鉢(図163-１)は、無文の完形個体で底部に笹の圧痕がある。下位の埋設土器の深鉢(図163-２)は、完形個体で頸部に波状入組文、胴部に網目状沈線文が入る。

［時期］埋設土器の時期から後期前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)と考えられる。　　(長谷川)

第５号土器埋設遺構(図88・163、写真123・124・179)

［位置・確認］調査区東側の緩斜面上、ⅠW・X-52グリッドに位置しており、ST１Ⅲ層で確認した。

［重複］ST１形成過程で構築されたと考えられる。

［構造］39.9×32.9㎝の楕円形の掘方内に、深鉢胴部下半が正立で埋設されていた(図163-３)。

［堆積土］土器内、掘方内堆積土には暗褐色土が堆積している。堆積土上部には褐色の焼土が堆積しており、調査時には廃棄焼土と捉えた。しかし、本遺跡では弥栄平(２)式の土器埋設炉が複数ある一方(SN13、SI11)、土器埋設遺構はないことから、本遺構の焼土とした層も火床面の可能性がある。なお、土器内と掘方の土壌でリン・カルシウム分析を行い、土器内試料ではリンが１%を超える箇所が認められ、骨や歯に由来する可能性が指摘されている(第４章第１節)。

［出土遺物］図163-３はRL縦回転地に沈線文が施され、弥栄平(２)式とみられる。

［時期］埋設土器の時期から、後期初頭新段階(弥栄平(２)式)と考えられる。　　(折登)

第６号土器埋設遺構(図88・163、写真124)

[位置・確認] ⅠU-49グリッド、調査区中央の緩斜面に位置し、Ⅳ層で土器の広がりとして確認した。

[構造] Ⅳ層を掘り込む浅い褐色の掘方をわずかに検出した。底部付近の土器が正位で埋設されており、根撹乱が多く入り残存状況は良くない。

[堆積土] 黒褐色土が土器の中に堆積しており、掘方やⅣ層と明瞭に区別できる。墓の可能性を検討するために、堆積土と掘方の土壌のリン・カルシウム分析を行った。土器内の堆積土試料から、リンが多い箇所があり、骨や歯に由来する可能性がある一方、底面以下の土からもリンが多い箇所が検出されているため、解釈には注意を要するとされた(第４章第１節)。

[出土遺物] 土器は後期初頭～前葉が出土した。総重量は165.2gで、埋設土器１点を図示した(図163-４)。４は後期初頭～前葉の深鉢の胴部片と底部で、底部には笹と思われる圧痕がある。

[時期] 埋設土器の時期から、後期初頭～前葉と考えられる。 (長谷川)

第７号土器埋設遺構(図89・163～165、写真125～131・180・181)

[位置・確認] ⅠS-51グリッドに位置する。ST１の精査中、Ⅲ-１層中に倒立状態の土器底部を確認した。側面図と遺構平面図の作成後、半截作業に着手した際に人骨の残存が認められたため、棺の切り取り措置を行った。以降の土器棺内の精査・記録については屋内で行っている。

[重複] ST１の形成過程で構築されている。

[構造] 掘方は開口部33×19cm、底面40×34cmの楕円形である。壁はⅢ-１・２層とⅣ層を掘り込み、Ⅴ層上部に底面が形成される。掘方内では深鉢形土器が倒立状態で埋設されており、底部が斜面下方である南側に約10°傾く。掘方の北壁でも同様の傾きが認められ、埋没後の土圧によって変形した可能性がある。土器内部の掘方底面に接して、土器４個体分の破片からなる土器敷き構造があり、その上部に人骨が累積する。最上部である埋設土器の底部側には流入土が充満する。

[堆積土] 掘方内は暗褐色土主体の堆積土である。埋設土器内部については人骨の精査を優先したため断面の観察・分層を行わなかったが、下部の土器敷き部分ではやや黄色味を帯びた褐色土が堆積し、上位に向かって暗褐色土へ漸移することを確認した。全体的にしまりが弱く、特に上半部は脆弱である。土器下半の破片が掘方に落ち込んでおり(写真126)、土器下半部に生じた空隙からの流入土であると思われる。なお、土器内堆積土はリン・カルシウム分析を行っており(第４章第１節)、ともに高い含有値が示されている。

[出土遺物] ６個体分の土器9,334.6gと人骨１個体分が出土している。図163-５は棺本体に使用されていた土器である。底面に網代圧痕が認められる地文縄文の深鉢で、特徴的な文様等を持たないため特定が困難だが、後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式)が第１候補として挙げられる。図164-１は土器敷き構造の最上層と最下層に使用された土器である。縦位の単節斜縄文と撚糸圧痕による口縁区画がなされる深鉢で、後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式)と考えられる。図164-２は土器敷き構造の２層目から、図165-１は３層目から出土しており、同じく後期初頭第１段階に相当する。図165-２は後期初頭新段階(弥栄平(２)式)の土器片だが、埋設土器の割れ口近くから出土しており、埋没後に流入した疑いがある。人骨は、下位から大まかに肋骨、脛骨、仙骨、寛骨、椎骨、大腿骨と上下顎骨を含む頭骨の順で累積している(第４章第３節)。

［時期］埋設に使用された土器の型式から、後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式)と考えられる。また、出土人骨の放射性炭素年代測定からは　4,145～3,989 cal BPの較正年代が得られている(第４章第４節)。
［小結］人骨が残存する土器棺墓であり、部位の欠落、解剖学的な位置関係の喪失から、再葬土器棺墓と解釈される。（秦）

第９号土器埋設遺構(図88・165・193、写真124・181・189)
［位置・確認］Ｉ0-45グリッドに位置する。Ⅲa層で土器片の広がりを確認した。
［構造］深鉢(図165-１)の胴部以下が正位で埋設される。掘方の平面規模は確認面で31×14cm、底面で16×８cmである。壁はⅢa層を掘り込み、深さは14cmである。
［堆積土］掘方内、土器内ともに黒色土が堆積する。
［出土遺物］土器は総重量2,165gが出土し、このうち２点(図165-１・２)を図示した。１は、埋設土器で、後期前葉の十腰内Ｉ式に相当する深鉢である。頸部に沈線、胴部は単軸絡条体第１類が施文された後に磨り消されている。２は、土器内堆積土から出土した深鉢の胴部片で、網目状撚糸文が磨り消されている。石器は、土器内堆積土から石錐１点(図193-７)が出土した。玉髄質珪質頁岩製で、周縁調整されている。
［時期］埋設土器から後期前葉の十腰内Ｉ式と考えられる。（秦）

第10号土器埋設遺構(図88・166、写真125・181)
［位置・確認］調査区南側の斜面下方、ＩＱ-43グリッドに位置しており、Ⅲ層で確認した。
［重複］ST１の形成過程で構築されている。
［構造］掘方は確認できなかった。正立の深鉢(図166-１)に、台付浅鉢(図166-３)が倒立で被せられた状態であった。その西側から深鉢の上半部の破片が出土した(図166-２)。
［堆積土］Ⅲ層相当の黒褐色土に埋設され、土器内に黒褐色土と灰黄褐色土が堆積している。
［出土遺物］土器は後期前葉の十腰内Ｉ式である(図166-１～３)。１は内外面に黒色物質が付着しており、外面は上部に付着が目立つ。
［時期］出土土器から、後期前葉(十腰内Ｉ式)と考えられる。（野村）

第８節　溝状土坑

第１号溝状土坑(図90・166・193、写真132・189)

[位置・確認] ⅡC・D-56グリッド、調査区東側の削平された範囲に位置し、Ⅴ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[構造] 平面形は長楕円形、断面形は短軸が漏斗形で長軸がフラスコ形で、軸はN-４° -Eである。平面規模は、上端が395cm×97cm、下端が395cm×13cmである。深さは105cm、面積は上端で299㎡、下端(底面積)は0.488㎡である。

[堆積土] ４層は暗褐色土の初期堆積、３層は褐色土とⅤ層由来土が混じる人為堆積、１・２層はV字の堆積で炭や焼土の混じる黒～暗褐色土で、いずれも人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式) ～前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)が堆積土から出土した。総重量は608.4gで、３点図示した(図166-１～３)。１は後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式)の深鉢で、隆線文がつく。２は後期初頭新段階(沖附(２)式)の深鉢で、波状口縁で、頂部に円文がつく。３は後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の壺で、横位や円形の沈線文が施文される。石器は、堆積土から磨製石斧が１点出土(図193-９)し、花崗閃緑斑岩製である。

[時期] 出土土器から後期初頭古段階(牛ヶ沢(３)式) ～前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)と考えられる。

第２号溝状土坑(図90・166・193、写真132・189)

[位置・確認] ⅡA-53・54グリッド、調査区東側の緩斜面に位置し、Ⅳ層で黒色土の広がりとして確認した。

[構造] 平面形は長楕円形、断面形はV字形で長軸がフラスコ形で、軸はN-47° -Wである。平面規模は、上端が401cm×59cm、下端が389cm×10cmである。深さは89cm、面積は上端で2.178㎡、下端(底面積)は0.398㎡である。

[堆積土] ２～４層は水平方向の堆積で黒～黒褐色土で炭粒や混じる人為堆積で、１層は２層の上にV字状に堆積する黒色土の自然堆積層の可能性がある。

[出土遺物] 土器は後期初頭新段階(沖附(２)式) ～前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)が出土した。総重量は2,709.2gで、３点図示した(図166-４～６)。４は、後期初頭新段階の深鉢で、頸部に長方形と思われる沈線文がある。５は後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の浅鉢で、胴部に櫛歯状の横位のクランク文と思われる文様がつく。６は、SP11と遺構間し、後期初頭新段階～前葉の壺である。

石器は、堆積土からスクレイパー１点(図193-８)、球状礫１点、磨石１点、剥片１点が出土した。スクレイパーは珪質頁岩製、球状礫は凝灰岩製で磨り面が２面あり、磨石はデイサイト製の破片、剥片は珪質頁岩製である。

[時期] 出土土器から後期初頭新段階(沖附(２)式) ～前葉(十腰内Ⅰ式第２段階)と考えられる。

(長谷川)

第９節　溝跡

第１号溝跡(図90・166、写真132)

［位置・確認］調査区東側の平場、ⅠW-50・51グリッドに位置しており、ST１Ⅲ層・Ⅳ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

［重複］ST１の形成過程で構築されたと考えられる。SK75と重複し、本遺構を先に確認しており新しい可能性が高い。

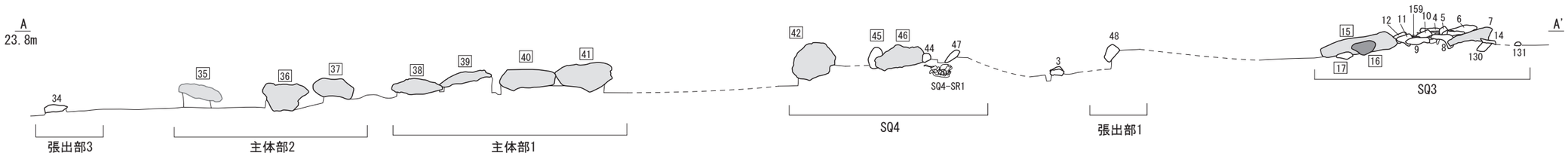
［構造］規模は345×63㎝、深さ34㎝、軸はN-57.5°-Wの細長い形状である。

［堆積土］黒褐色土を主体とする。

［出土遺物］土器は総重量246.8gが出土し、小牧野３期、十腰内Ⅰ式第２段階の可能性がある破片を掲載した。

［時期］SK75との重複関係からは後期初頭新段階(小牧野３期)以降であり、後期前葉の可能性が高い。

(折登)

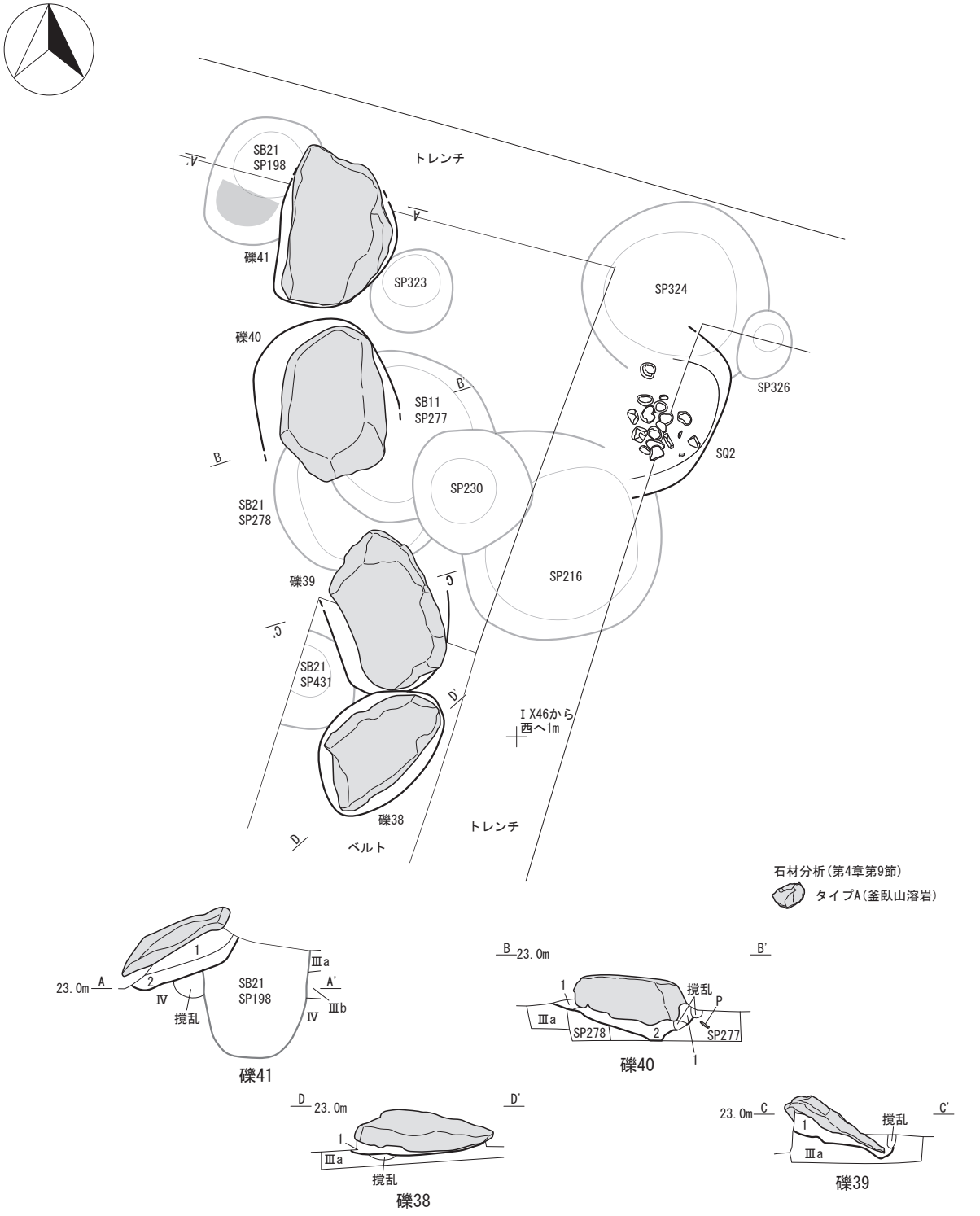


凡例

- 原位置を留めた構成礫
- 原位置を留めない礫 構成外礫
- 25 主体部構成礫
- タイプA（釜臥山溶岩）
- タイプB（障子山溶岩）
- タイプC（泊火山岩類）
- 白塗は分析対象外
- 石材分析の詳細は第４章第９節参照
- セクションポイントは図8参照
- ---- 検出面の推定線

0　S=1/60　2m

図９　環状列石見通し図



礫41（A-A'）
1層　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト 粘性中、しまり中、黄褐色ブロック（φ1㎜）を2%、上部に木根撹乱を含む
2層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト 粘性中、しまり中、黄褐色ブロック（φ0.1㎜）を1%、炭化物粒（φ0.1㎜）を1%含む

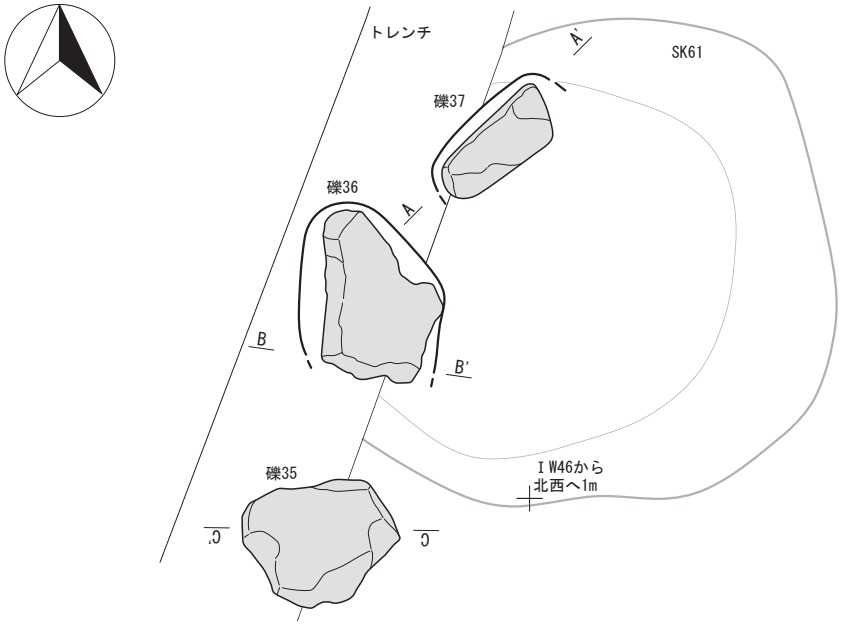
礫40（B-B'）
1層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 粘性中、しまり中強、黄褐色ブロック（φ0.1㎜）を3%、炭化物粒（φ1㎜）を3%含む
2層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中強、黄褐色ブロック（φ1㎜）を3%、炭化物粒（φ1㎜）を1%以下含む

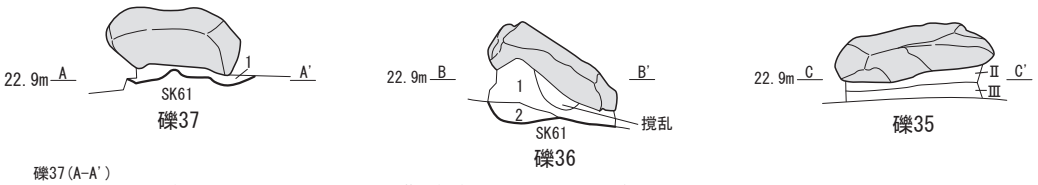
礫38・39（C-C'・D-D'）
1層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト 粘性中、しまり中、炭化物粒・黄褐色ブロック（φ1㎜）を1%含む

主体部1（礫38～41）

0　S=1/30　1m

図10　環状列石 主体部（１）

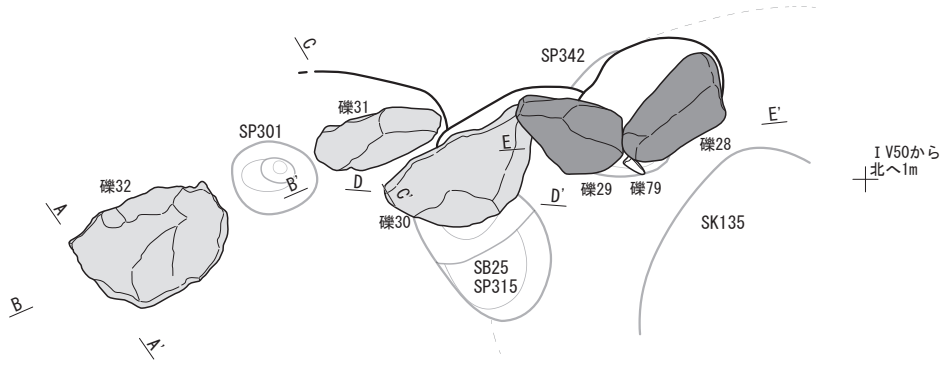


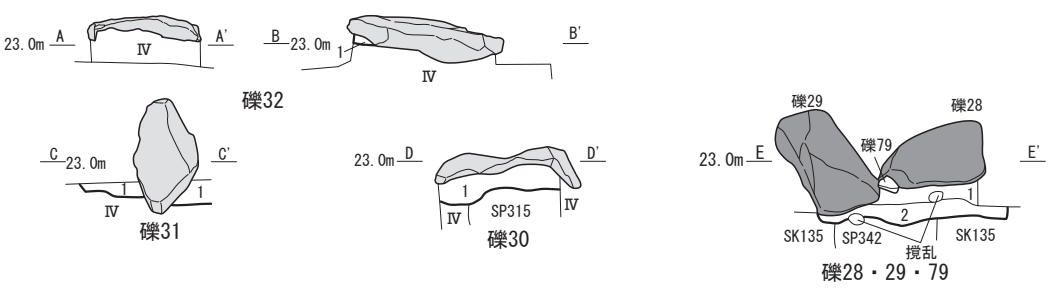


礫37(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱、しまり中弱、黄褐色ブロック(φ10㎜)を3%含む

礫36(B-B')
1層　10YR7/4 にぶい黄橙色シルト質粘土 粘性中、しまり中、炭化物粒(φ0.1㎜)、黄褐色ブロック(φ1㎜)を1%含む
2層　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中

主体部2(礫35～37)

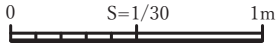




礫32(B-B')
1層　10YR3/1 黒褐色シルト質粘土 粘性中、しまり中弱、後期前葉の土器片を含む

礫28～31(C-C'～E-E')
1層　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土 粘性中、しまり中、黄褐色ブロック（φ0.1㎜）を1%、炭化物（φ0.1㎜）を1%
2層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト 粘性中、しまり中、10YR4/6褐色の粘土質シルト（φ3～5㎜）を5%、一部に根撹乱土を含む

主体部3(礫28～32・79)



石材分析(第4章第9節)

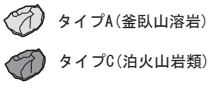
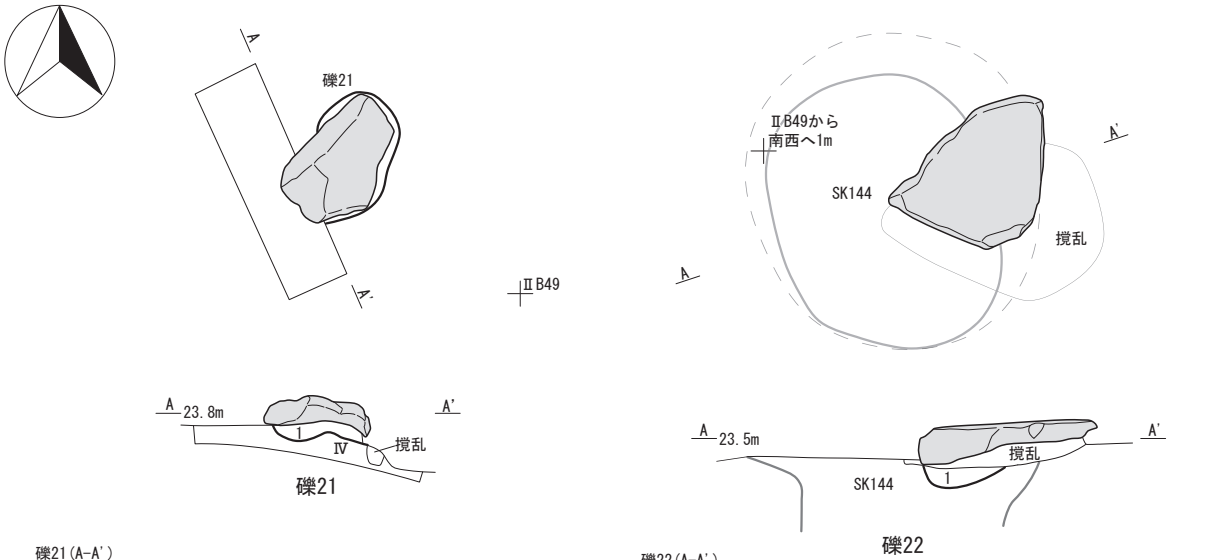


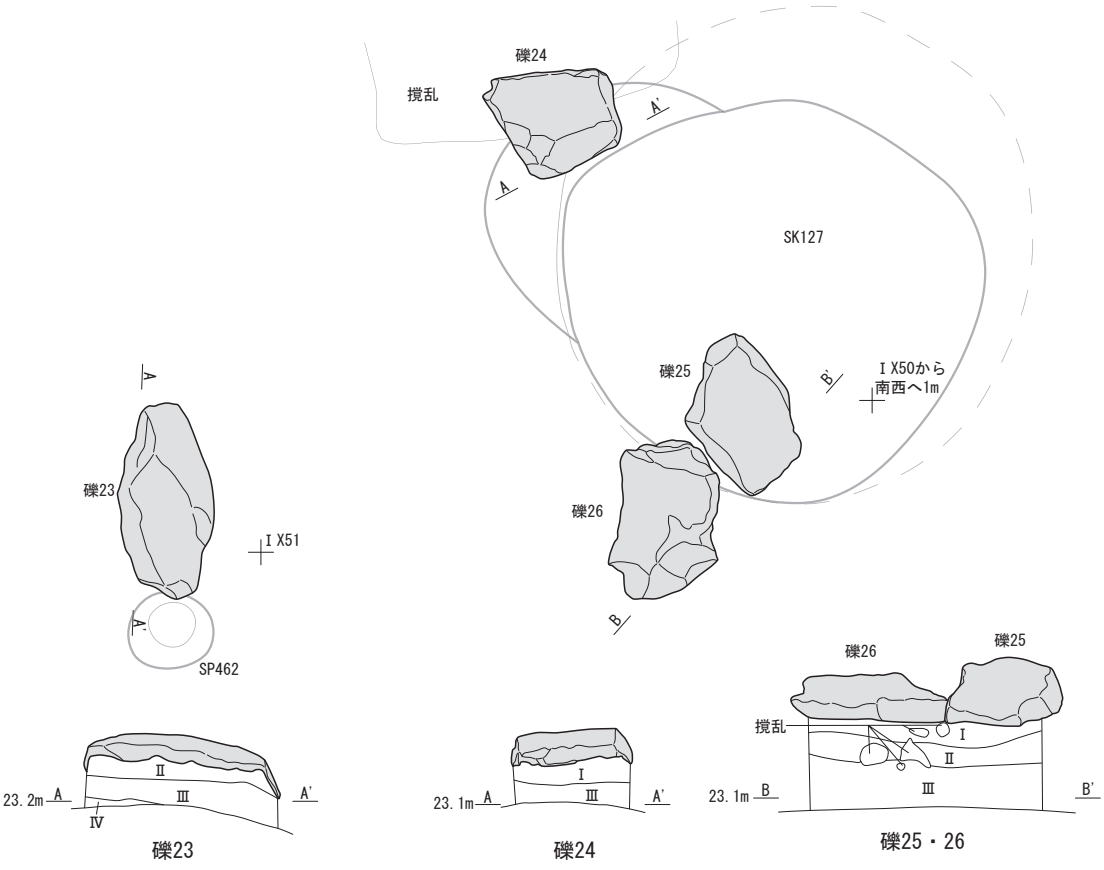
図11　環状列石 主体部(２)



礫21(A-A')
1層　10YR2/2 黒褐色土 しまり弱、粘性弱、φ1～5㎜の炭化物を1%含む

礫22(A-A')
1層　10YR3/2黒褐色シルト質粘土 粘性中、しまり中、炭化材φ1～5㎜を3%、黄褐色ブロックφ1㎜を3%含む

主体部構成礫(単独)

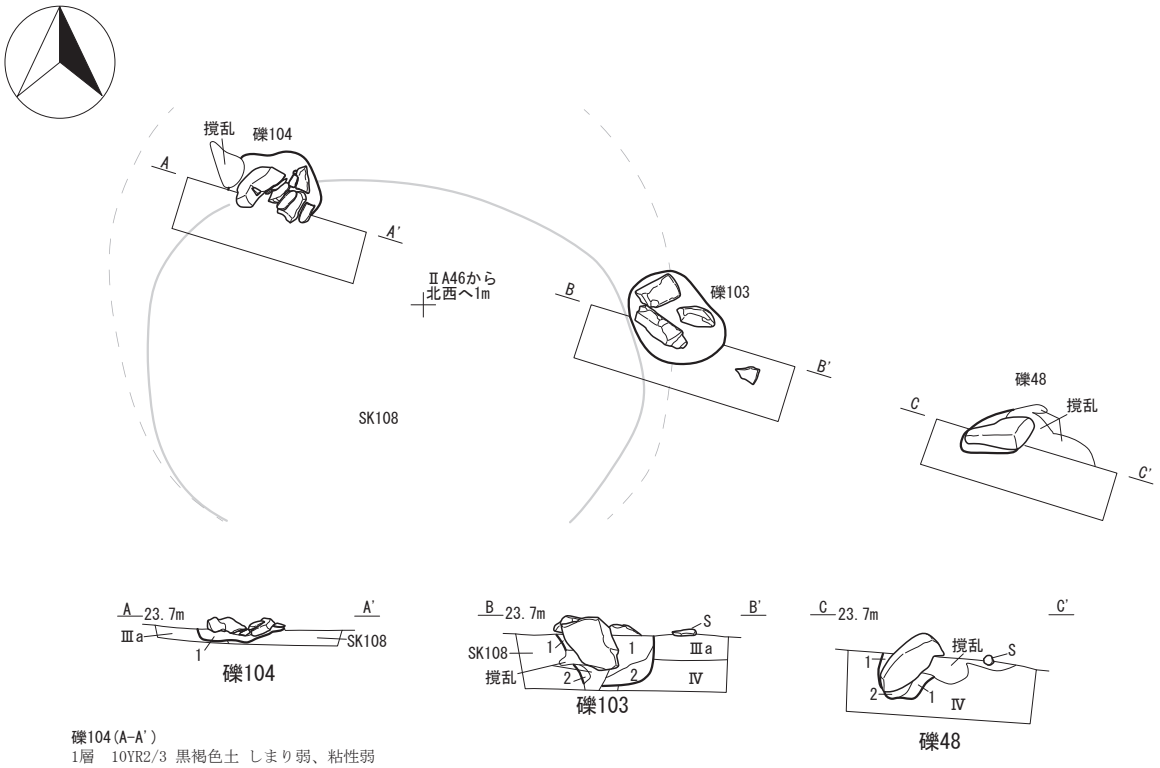


石材分析(第4章第9節)
タイプA(釜臥山溶岩)

主体部を構成していた可能性のある礫(撹乱)

0　S=1/30　1m

図12　環状列石 主体部(３)

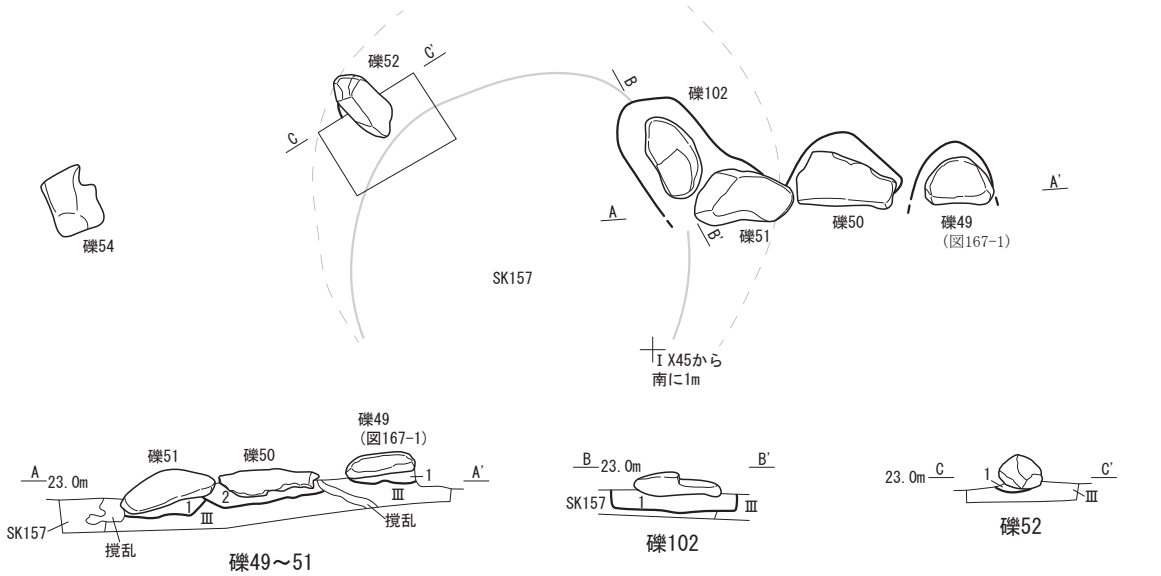


礫104(A-A')
1層　10YR2/3 黒褐色土 しまり弱、粘性弱

礫103(B-B')
1層　10YR3/2 黒褐色土　　しまり弱、粘性弱、根でもろい、φ1～5㎜ローム粒2%含む、ピット状の掘方
2層　10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりやや弱、粘性弱、ピット状の掘方

礫48(C-C')
1層　10YR4/4 褐色土　しまり弱、粘性弱、撹乱の下部にあるピット状の掘方層
2層　10YR3/2 黒褐色土 しまり弱、粘性弱、礫の下部はややしまりあり、ピット状の掘方

張出部1



礫49～51(A-A')
1層　10YR3/2 黒褐色土
2層　10YR3/2 黒褐色土　黄褐色ブロック(φ0.1㎜以下)をわずかに含む

礫102(B-B')
1層　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性弱、しまり弱

礫52(C-C')
1層　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト 粘性中弱、しまり中弱、黄褐色ブロック(φ0.1㎜以下)を1%以下含む

張出部2(東側)

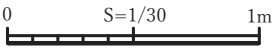
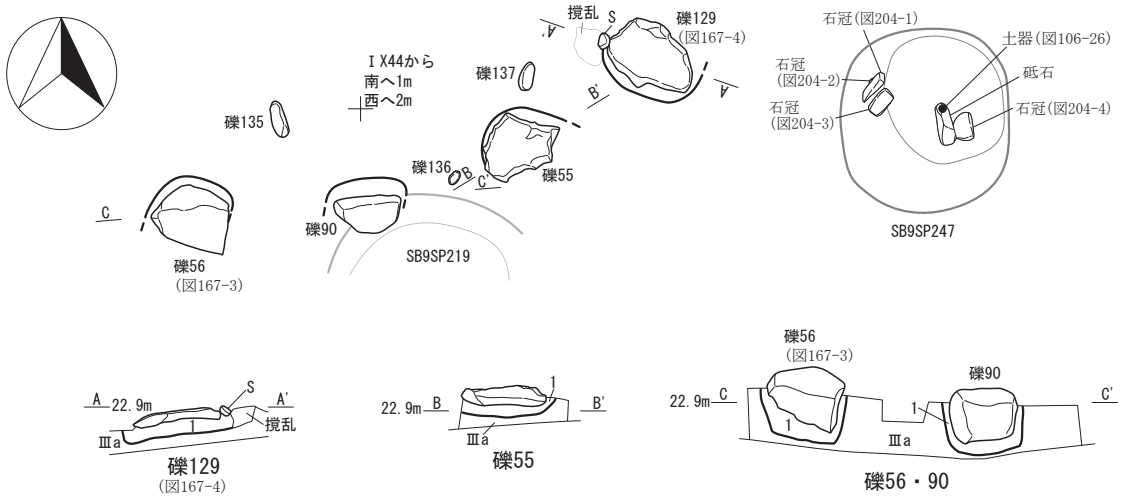


図13　環状列石 張出部(１)

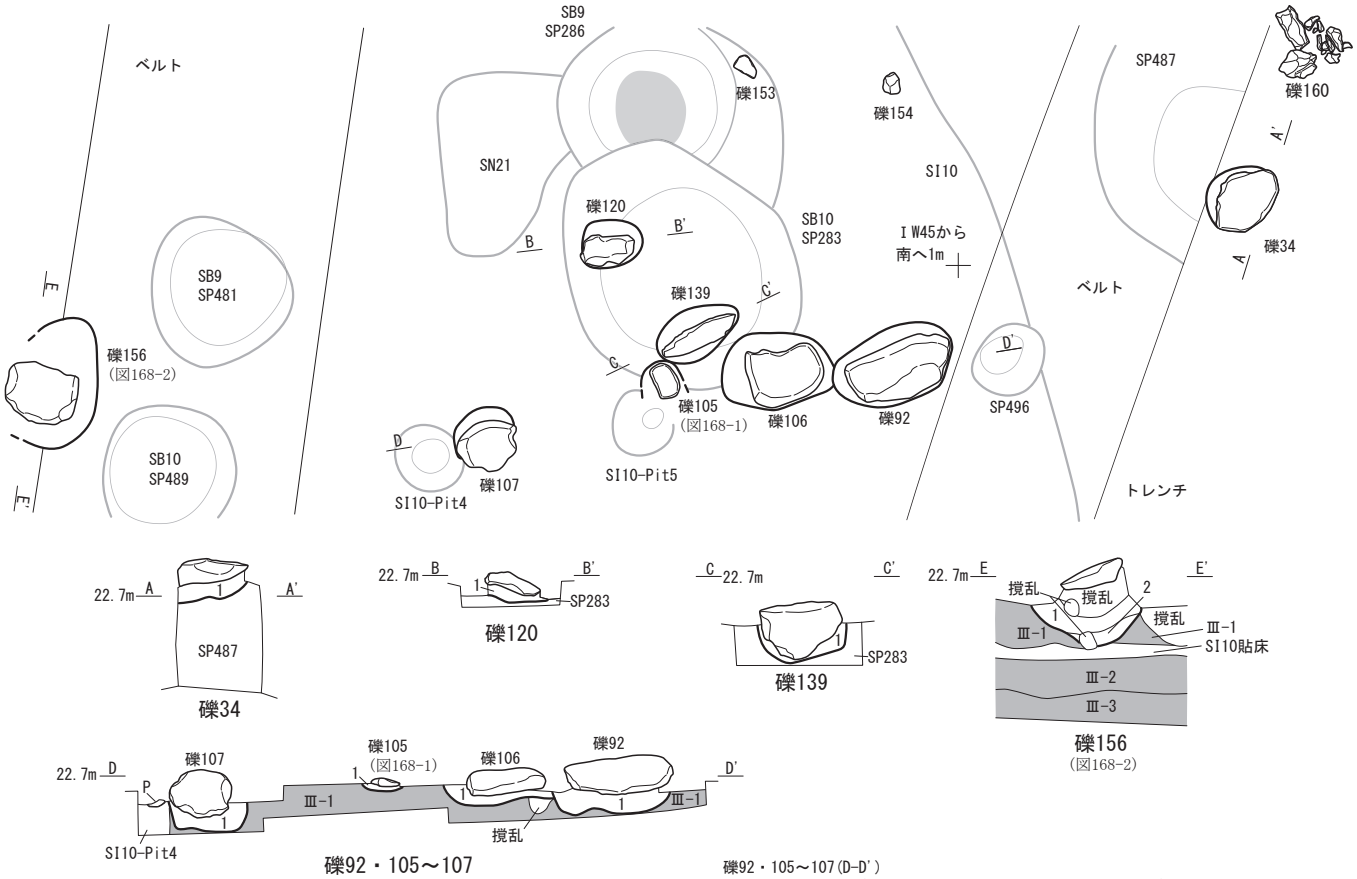


礫129(A-A')
1層　10YR2/2 黒褐色シルト質粘土 粘性中、しまり中

礫55(B-B')
1層　10YR2/2 黒褐色シルト質粘土

礫56・90(C-C')
1層　10YR2/2 黒褐色シルト質粘土

張出部2(西側)



礫34(A-A')
1層　10YR3/1 黒褐色シルト質粘土 粘性中、しまり中弱、
後期前葉の土器片出土

礫120(B-B')
1層　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中弱、しまり中弱、Ⅲ-2層の
ブロック(φ10㎜)を下部に30%含む

礫139(C-C')
1層　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土 粘性中弱、しまり中弱、
炭化物粒(φ1㎜)を1%含む

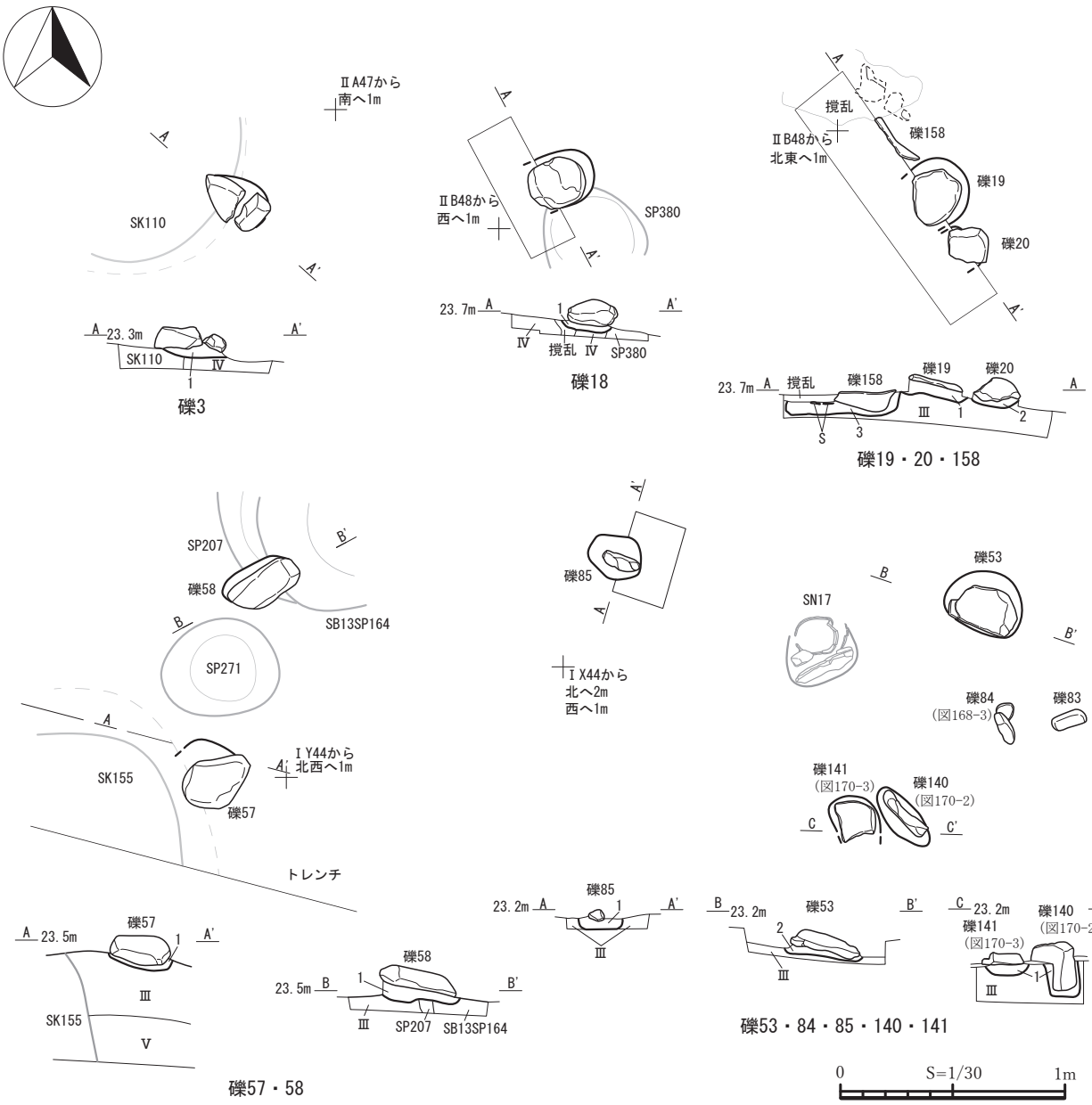
礫92・105～107(D-D')
1層　10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 粘性中、しまり中、暗褐色
(10YR3/4)シルトを10%含む

礫156(E-E')
1層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 粘性中、しまり中、
根撹乱土を上部に含む
2層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 粘性中、しまり中

張出部3

0　S=1/30　1m

図14　環状列石 張出部(２)



礫3(A-A')
1層　10YR3/2 黒褐色土 しまりなし、浅い掘方内に根が入る

礫18(A-A')
1層　10YR2/2 黒褐色土 しまり弱、粘性弱、ごく浅い掘方

礫19・20・158(A-A')
1層　10YR2/3 黒褐色土 しまり弱、ごく浅い掘方
2層　10YR3/2 黒褐色土 しまり弱、ごく浅い掘方
3層　10YR4/4 褐色シルト 粘性弱、しまり中強、炭化物粒(φ1㎜)を1%含む

礫57(A-A')
1層　10YR2/2 黒褐色土 しまり・粘性弱、浅い掘方

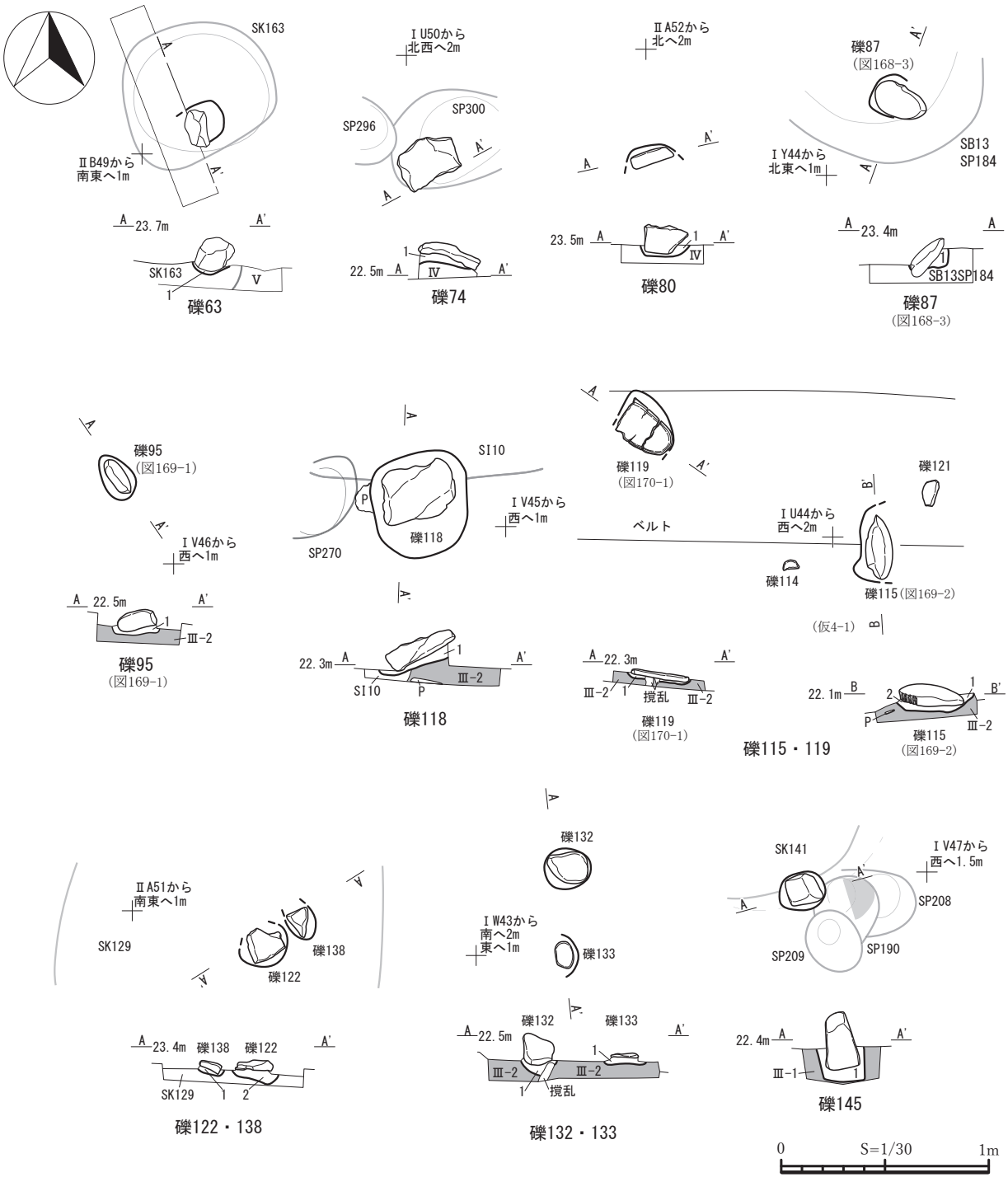
礫58(B-B')
1層　10YR2/2 黒褐色土 しまり・粘性弱、浅い掘方

礫85(A-A')
1層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト 焼土粒(φ0.1㎜)を1%、炭化物粒(φ0.1㎜)を1%含む

礫53(B-B')
1層　10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性中弱、しまり中弱、黄褐色ブロック(φ1㎜)、炭化物粒(φ1㎜) 、焼土を3%含む

礫140・141(C-C')
1層　10YR3/2 黒褐色シルト質粘土 粘性中、しまり中、焼土粒(φ0.5㎜)を2%、炭化物粒(φ0.1㎜)を1%含む

図15　環状列石 構成礫(１)



礫63(A-A')
1層　10YR2/1 黒色土 しまり無、撹乱のようにも見えるが、浅い掘方内に根が入り込む

礫74(A-A')
1層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト

礫87(A-A')
1層　10YR3/1 黒褐色土 しまり・粘性弱、ピット状の掘方

礫118(A-A')
1層　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中、しまり弱、Ⅶ層由来の砂ブロック(φ2～3㎜)を含む

礫122・138(A-A')
1層　10YR4/4 褐色粘土質シルト　粘性中弱、しまり弱
2層　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土 粘性中、しまり中、Ⅳ層のブロック(φ1㎜) を3%含む

礫132・133(A-A')
1層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト 粘性中弱、しまり弱、黄褐色ブロック(φ1㎜)を1%含む

礫145(A-A')
1層　10YR3/4 暗褐色シルト質粘土 粘性中、しまり中、炭化物粒(φ1㎜)を1%含む

礫80(A-A')
1層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト 粘性中、しまり弱

礫95(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 粘性中弱、しまり中弱

礫119(A-A')
1層　10YR3/2 黒褐色土 しまり弱、粘性弱、ごく浅い

礫115(B-B')
1層　10YR3/3 暗褐色土 しまりやや弱、粘性弱、浅い
2層　10YR3/2 黒褐色土 しまり弱、粘性弱、浅い

図16　環状列石 構成礫(２)

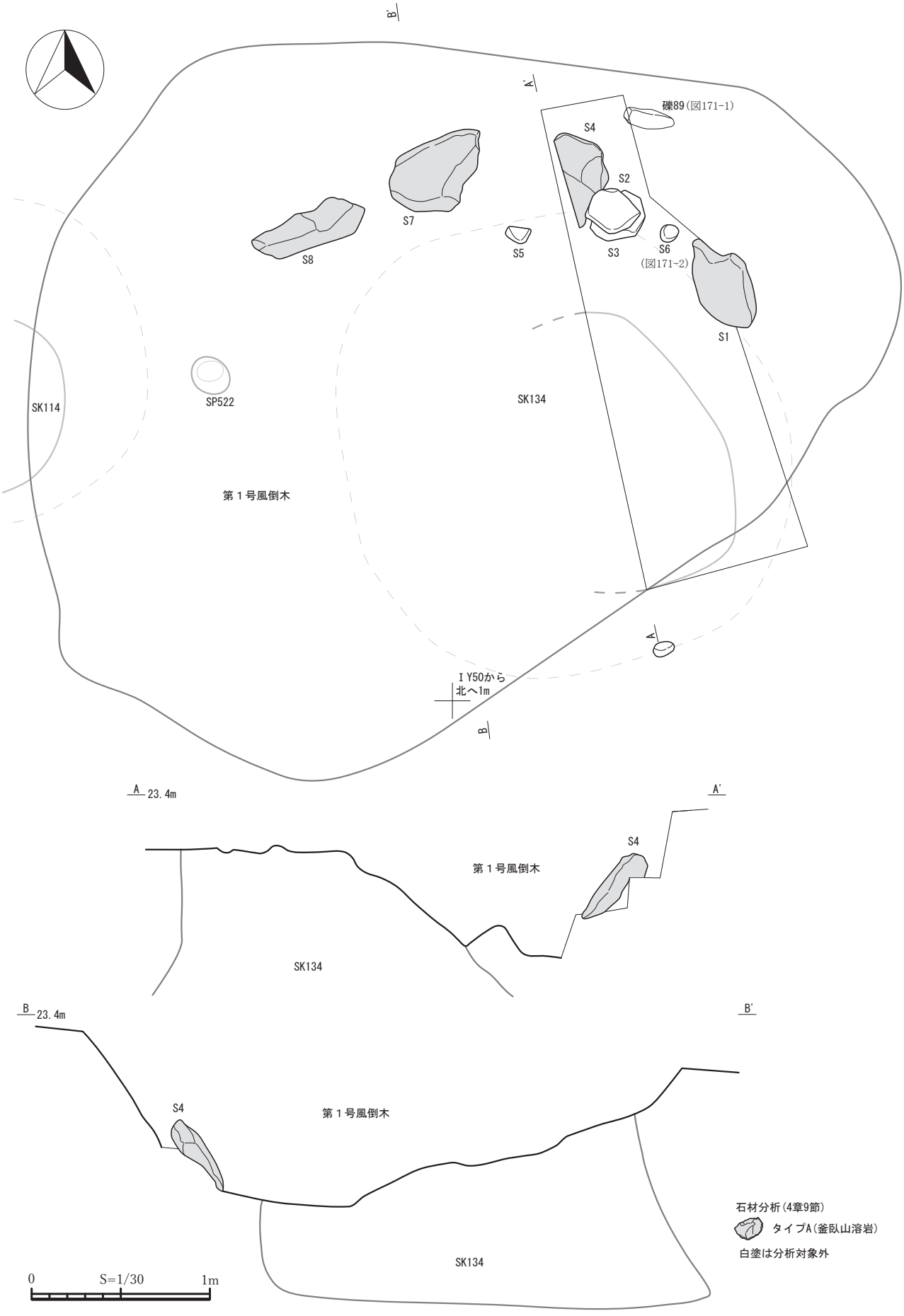
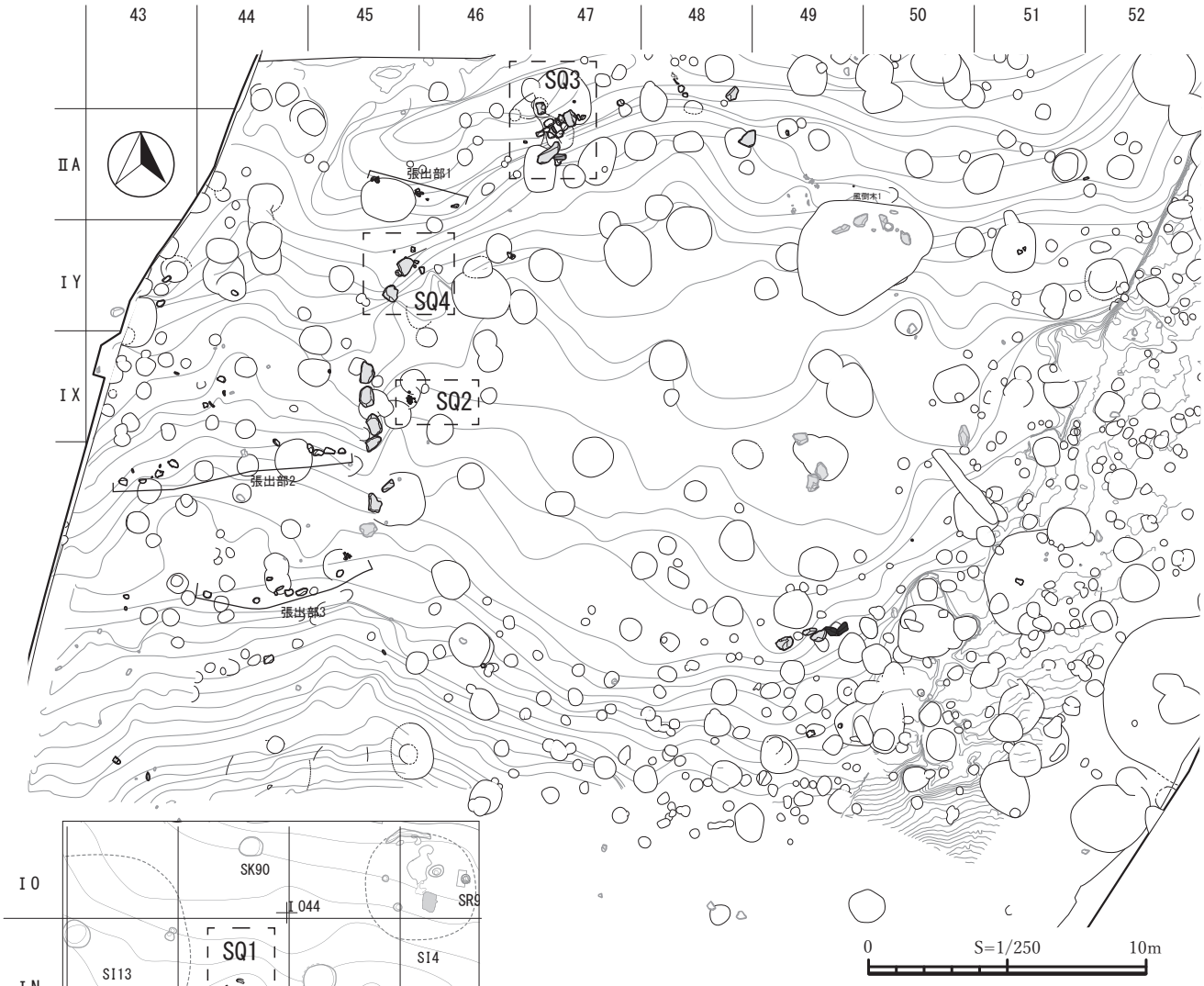

B'
A'
礫89(図171-1)
S4
S2
S7
S8
S5
S3
S6
(図171-2)
S1
SK114
SP522
SK134
第１号風倒木
A
ＩＹ50から
北へ1m
B
A
23.4m
A'
S4
第１号風倒木
SK134
B
23.4m
B'
S4
第１号風倒木
SK134
石材分析(4章9節)
タイプA(釜臥山溶岩)
白塗は分析対象外
0
S=1/30
1m

図17　第１号風倒木



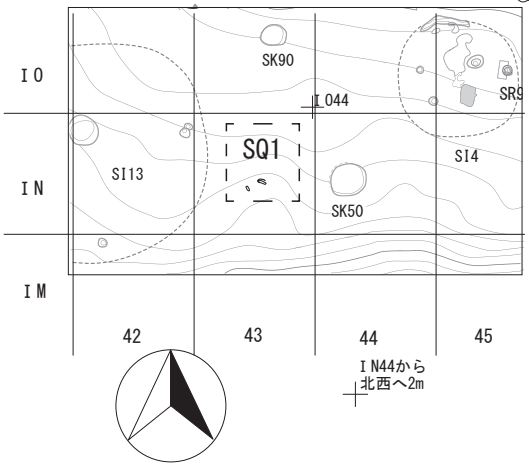


図18　配石遺構配置図

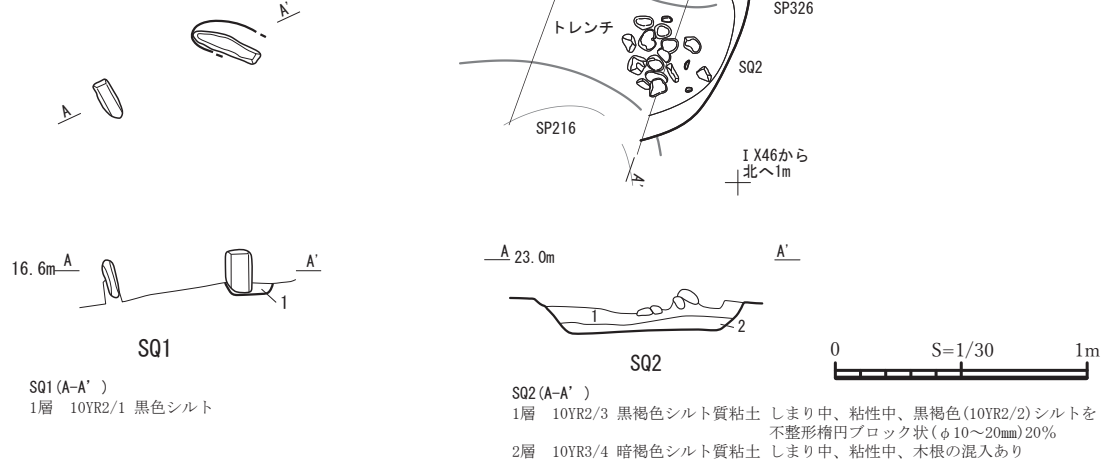
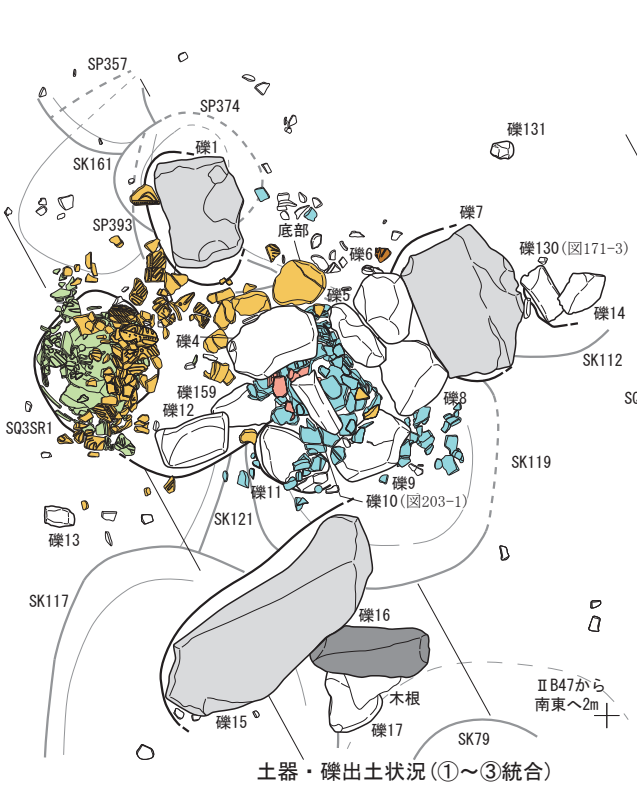
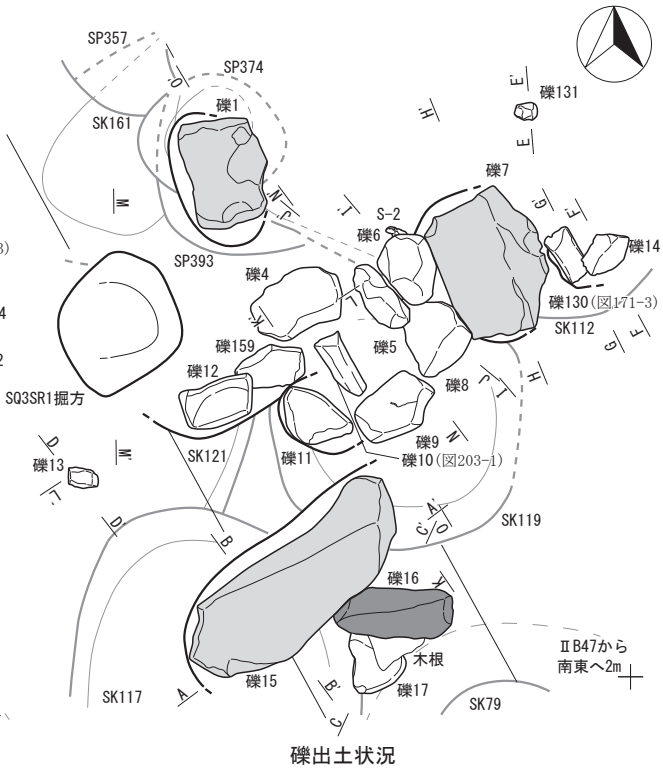


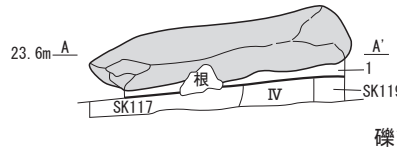
図19　第１・２号配石遺構

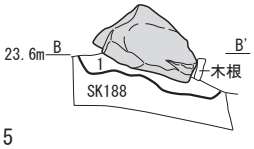


土器・礫出土状況(①～③統合)

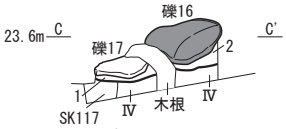


礫出土状況





礫15

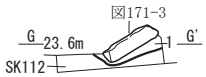


礫16・17

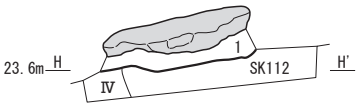
礫13

礫131

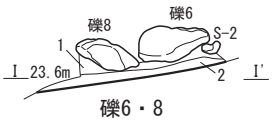
礫14



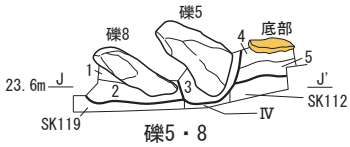
礫130



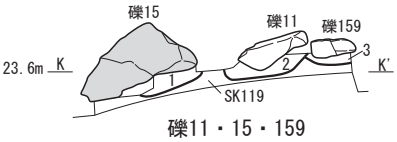
礫7



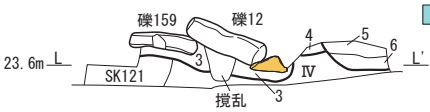
礫6・8



礫5・8



礫11・15・159



礫12・159

礫15(A-A'・B-B')
1層 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性弱、しまり強、焼土粒・炭化物粒(φ0.1㎜)1%、中央に木根

礫16・17(C-C')
1層 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性中弱、しまり弱、礫17の構築土
2層 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土 粘性中、しまり中弱、礫16の構築土

礫130(G-G')
1層 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性中弱、しまり中弱、木根撹乱土5%

礫7(H-H')
1層 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土 粘性中強、しまり中

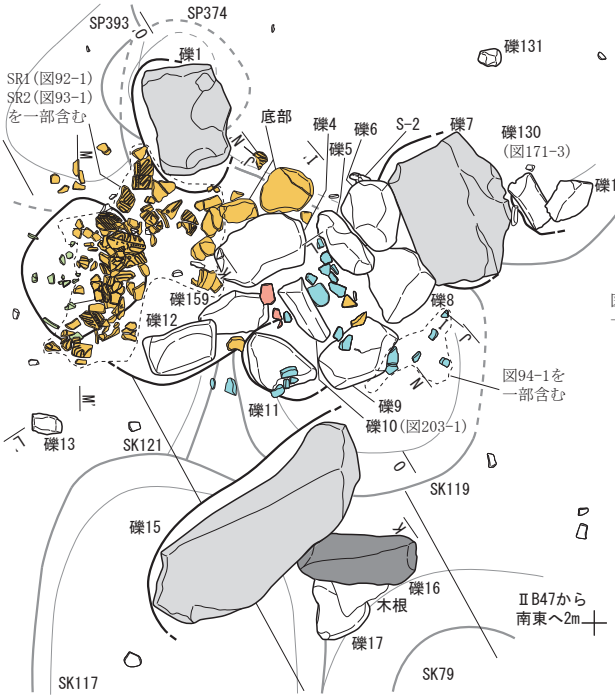
礫11・12・15・159(K-K'・L-L')
1層 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性弱、しまり強、焼土粒・炭化物粒(φ0.1㎜)1%、中央部に木根を含む
2層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト 粘性中弱、しまり中、SR2(図93-1)の土器片(φ1～2㎜)数個、焼土粒(φ0.1㎜)1%、礫11の掘方
3層 10YR4/4 褐色粘土質シルト 粘性中弱、しまり中、土器(図94-1)と別個体の土器を含む。焼土粒・炭化物粒(φ0.1㎜)1%以下、礫12・159の掘方
4層 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、しまり弱、SR2(図93-1)と別個体の土器を含む。SQ3の堆積土
5層 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、しまり弱、根撹乱層
6層 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性弱、しまり弱、根撹乱層

礫6・8(I-I')
1層 10YR2/2 黒褐色シルト質粘土 掘方
2層 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土 黄褐色ブロック(φ1㎜)1%、掘方

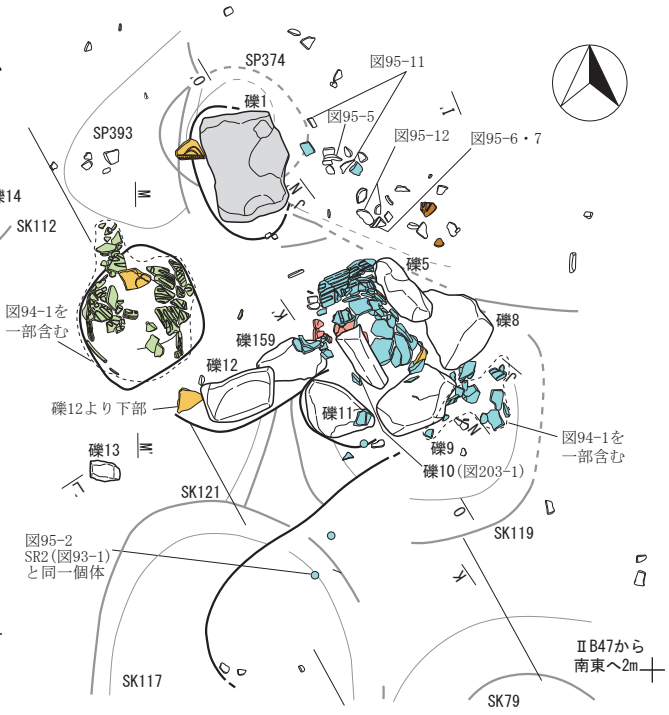
礫5・8(J-J')
1層 10YR2/2 黒褐色シルト質粘土 掘方1層目、土器(図94-1)が乗る
2層 10YR2/2 黒褐色シルト質粘土 掘方2層目
3層 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性中、しまり中、2層を掘り込む 礫5の掘方。SR2(図93-1)の土器を含む
4層 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性弱、しまり弱、3層由来の黄褐色ブロック(φ0.1㎜以下)1%以下、(φ2㎜)5%
5層 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性弱、しまり弱、焼土粒(φ1㎜)を1%、土器を含む

0 S=1/30 1m

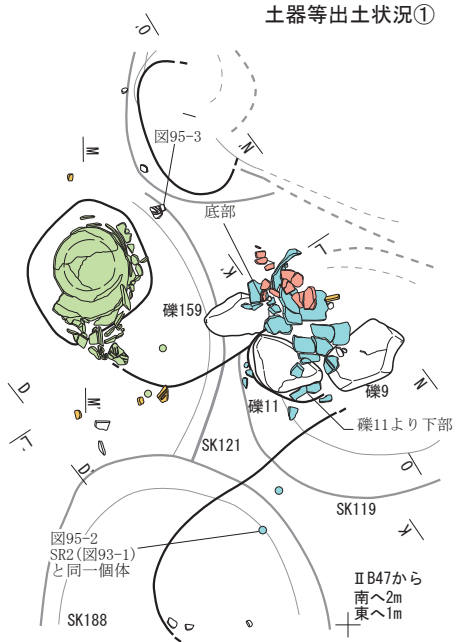
図20　第３号配石遺構(１)



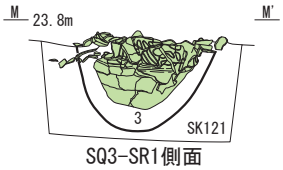
土器等出土状況①



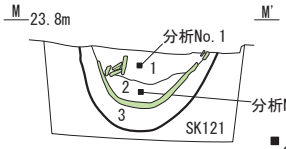
土器等出土状況②(SR検出)



土器等出土状況③(礫設置前)



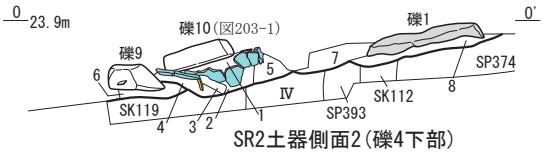
SQ3-SR1側面



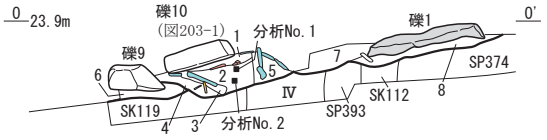
SQ3-SR1断面

■ リン・カルシウム分析(第4章第2節)

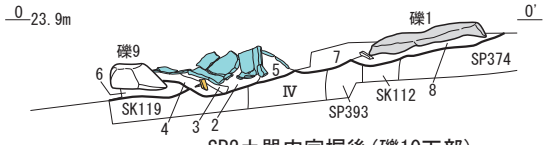
SQ3-SR1(M-M')
1層 10YR3/4 暗褐色土　しまり中、粘性弱、φ1～5㎜炭化物1%、土器内堆積土1層
2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　しまり中、粘性弱、φ1～5㎜炭化物2%、φ1～2㎜焼土粒・ローム粒1%　土器内堆積土2層
3層 10YR3/3 暗褐色粘土　しまりやや弱、粘性弱、φ1～5㎜炭化物1%、砂少量混じる。埋設土器掘方内堆積土



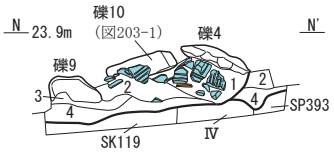
SR2土器側面2(礫4下部)



SR2土器内断面



SR2土器内完掘後(礫10下部)



SR2土器側面1(礫4取外し前)

SQ3-SR1(図92-1)
SQ3-SR2(図93-1)
SQ3-SR3(図93-3)
土器(図94-1)
土器(図93-2)

石材分析(第4章第9節)
タイプA(釜臥山溶岩)
タイプB(障子山溶岩)

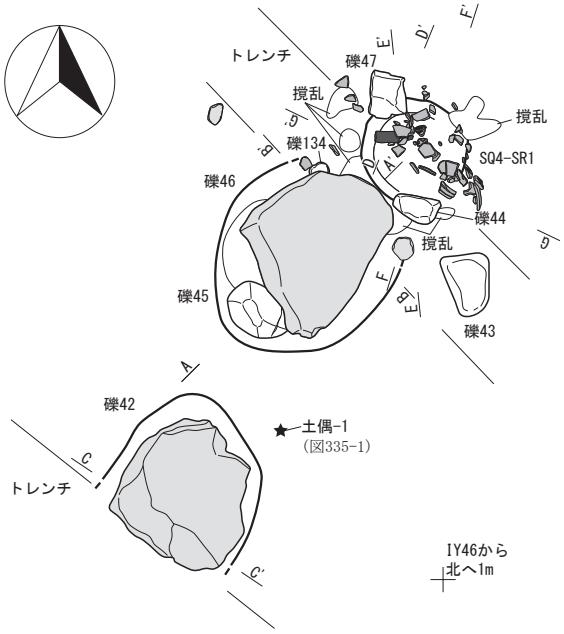
白塗は分析対象外
■ リン・カルシウム分析(第4章第2節)

0　S=1/30　1m

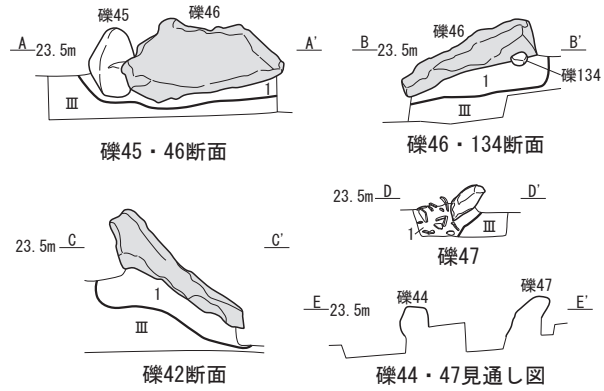
SQ3-SR2土器側面1(N-N')
1層 10YR3/2 黒褐色シルト　粘性弱、しまり弱、3・4層を掘り込む。SR2の掘方
2層 10YR3/2 黒褐色シルト　粘性弱、しまり弱、3層由来の黄褐色ブロック(φ0.1㎜以下)1%以下、(φ2㎜)5%、SR2の倒壊に伴う、1層と3層の混土層
3層 10YR3/4 暗褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中、炭化物粒(φ0.1㎜以下)1%以下、SQ3構築土の上層
4層 10YR3/4 暗褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中、炭化物粒(φ1㎜以下)1%、10YR6/8明黄褐色土(φ1㎜)1%、SQ3構築土の下層

SQ3-SR2土器側面2以降(O-O')
1層 10YR3/1 黒褐色シルト　粘性弱、しまり弱、SR3より上位の層
2層 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト　粘性中弱、しまり弱、炭化物粒(φ1㎜)1%、SR2の堆積土下層、埋設土器が壊れる前の堆積で土器小片を含む
3層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　粘性弱、しまり弱、SR2の掘方、礫10により埋設土器が壊れた際に土器と一緒に傾いた
4層 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性弱、しまり弱、焼土粒(φ1㎜)1%、土器を含む。礫10により埋設土器が壊れて入り込んだ層、5層に対応
5層 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性弱、しまり弱、褐色土ブロック(φ1㎜)を1%、土器を含む。礫10の衝撃で2層と4層が混土したと思われる層　4層に対応し、SR2、礫4が乗る。埋設土器の底部が刺さる層
6層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、炭化物粒(φ1㎜)を1%、礫9の掘方
7層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、炭化物粒(φ1㎜)を1%、黄褐色ブロック(φ1㎜)1%、SQ3の堆積土で礫4・7の上に堆積
8層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色ブロック(φ0.1㎜)1%、炭化物粒(φ1㎜)1%、礫1の掘方

図21　第３号配石遺構(２)



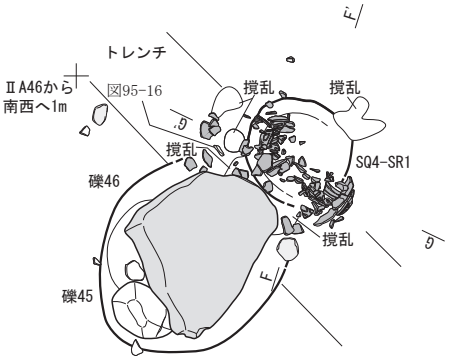
礫42～47周辺土器出土状況



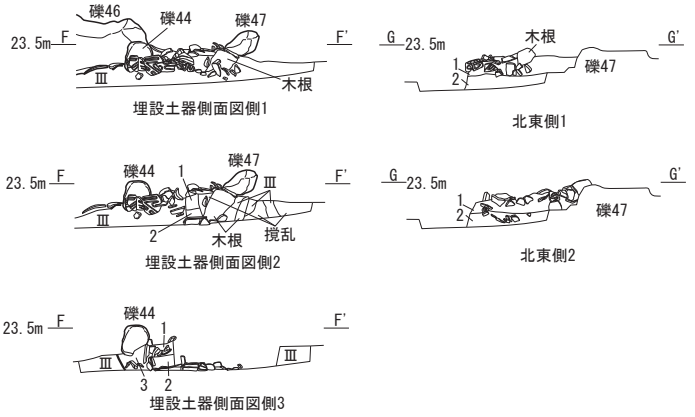
礫45・46(A-A'・B-B')
1層　10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中弱、しまり中弱、黄褐色土粒(φ0.1㎜以下)を1%
根撹乱土をわずかに含む

礫42(C-C')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性中弱、しまり弱、Ⅳ層のブロック
(φ10㎜)を8%、根撹乱土を南東側に含む

礫47(D-D')
1層　10YR2/2 黒褐色土 しまり・粘性弱

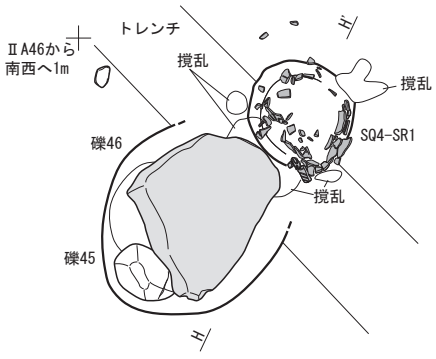


礫43・44・47下部土器出土状況(SQ4-SR1検出前)

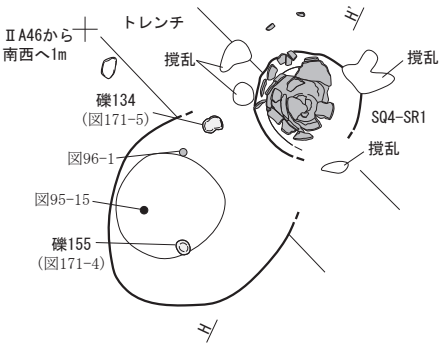


SQ4-SR1周辺土器出土状況

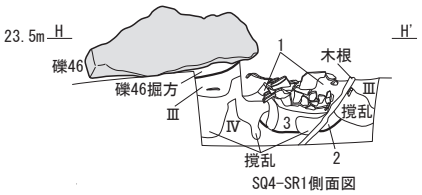
SQ4-SR1周辺土器出土状況(F-F'・G-G')
1層　10YR2/3 黒褐色土 しまり弱、粘性弱、土器多数、φ1～5㎜の炭化物1%、D-D'1層が対応か
2層　10YR2/2 黒褐色土 しまり弱、粘性弱、土器多数、φ1～5㎜の炭化物1%
3層　10YR3/4 暗褐色土 しまり弱、粘性弱、土器多数、礫44の掘方



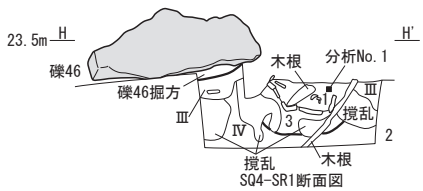
SR1検出状況



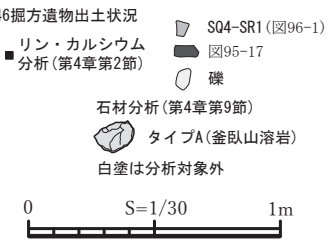
SQ4-SR1土器内完掘、礫45・46掘方遺物出土状況



SQ4-SR1側面図

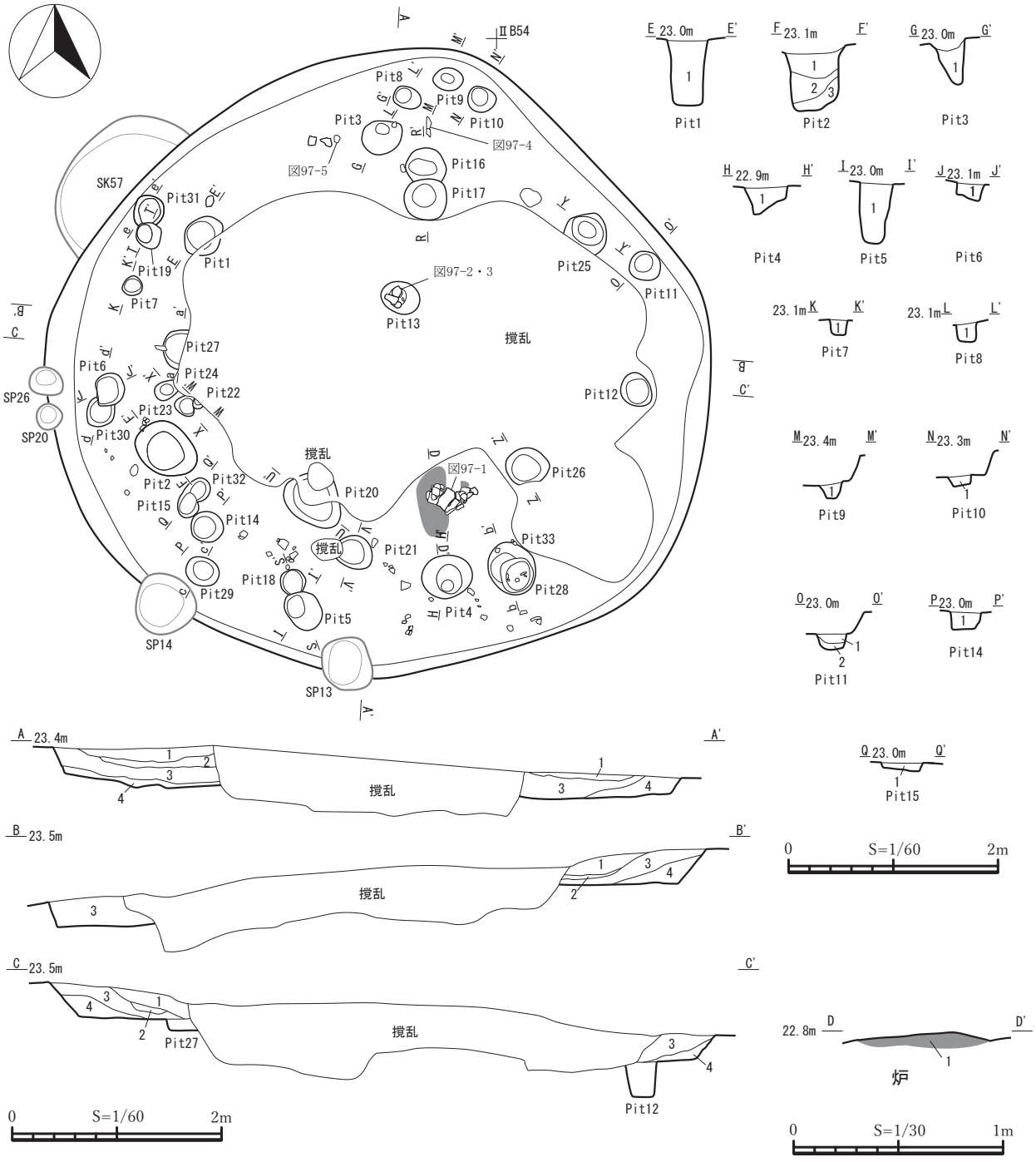


SQ4-SR1断面図



SQ4-SR1(H-H')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりやや弱、粘性弱、根が混じる、土器内堆積土
2層　10YR3/3 暗褐色土　しまり弱、粘性弱、φ1～10㎜ロームブロック1%含む、根撹乱層の可能性あり、掘方内堆積土
3層　10YR4/4 褐色土　しまりやや弱、粘性弱、φ1～10㎜ロームブロック1%、φ1～2㎜炭化物1%含む、埋設土器掘方内堆積土

図22　第４号配石遺構



SI1(A-A'・B-B'・C-C')
1層　10YR3/4 暗褐色土　φ2～20㎜炭粒、北側に多く7～10%、西側に5%、φ3～5㎜焼土粒3%混合
2層　10YR6/8 明黄褐色ローム　廃棄土、北側は塊状、西側は板状に堆積、南側と東側ベルトには見られない
3層　10YR3/2 黒褐色土　φ2～10㎜炭粒(一部板状)、φ2～5㎜焼土粒2%混合、東側と南側ベルトには10YR4/2灰褐色土混合
4層　10YR4/6 褐色土　西側ベルトで10YR5/6黄褐色ロームの混合多

炉(D-D')
1層　10R4/6　赤色土　Ⅳ層上面に焼成面形成、焼成厚最大6cm

Pit1(E-E')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒2%、φ1㎜炭粒3%混合

Pit2(F-F')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒2%、φ5～10㎜炭粒1%混合
2層　10YR4/2 灰黄褐色土
3層　10YR5/3 にぶい黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒2%混合

Pit3(G-G')
1層　10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム塊、φ5～10㎜炭粒2%混合

Pit4(H-H')
1層　10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム塊、φ5～10㎜炭粒2%混合

Pit5(I-I')
1層　10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム塊、φ5～10㎜炭粒2%混合

Pit6(J-J')
1層　10YR3/4 暗褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒1%、φ5～10㎜炭粒1%混合

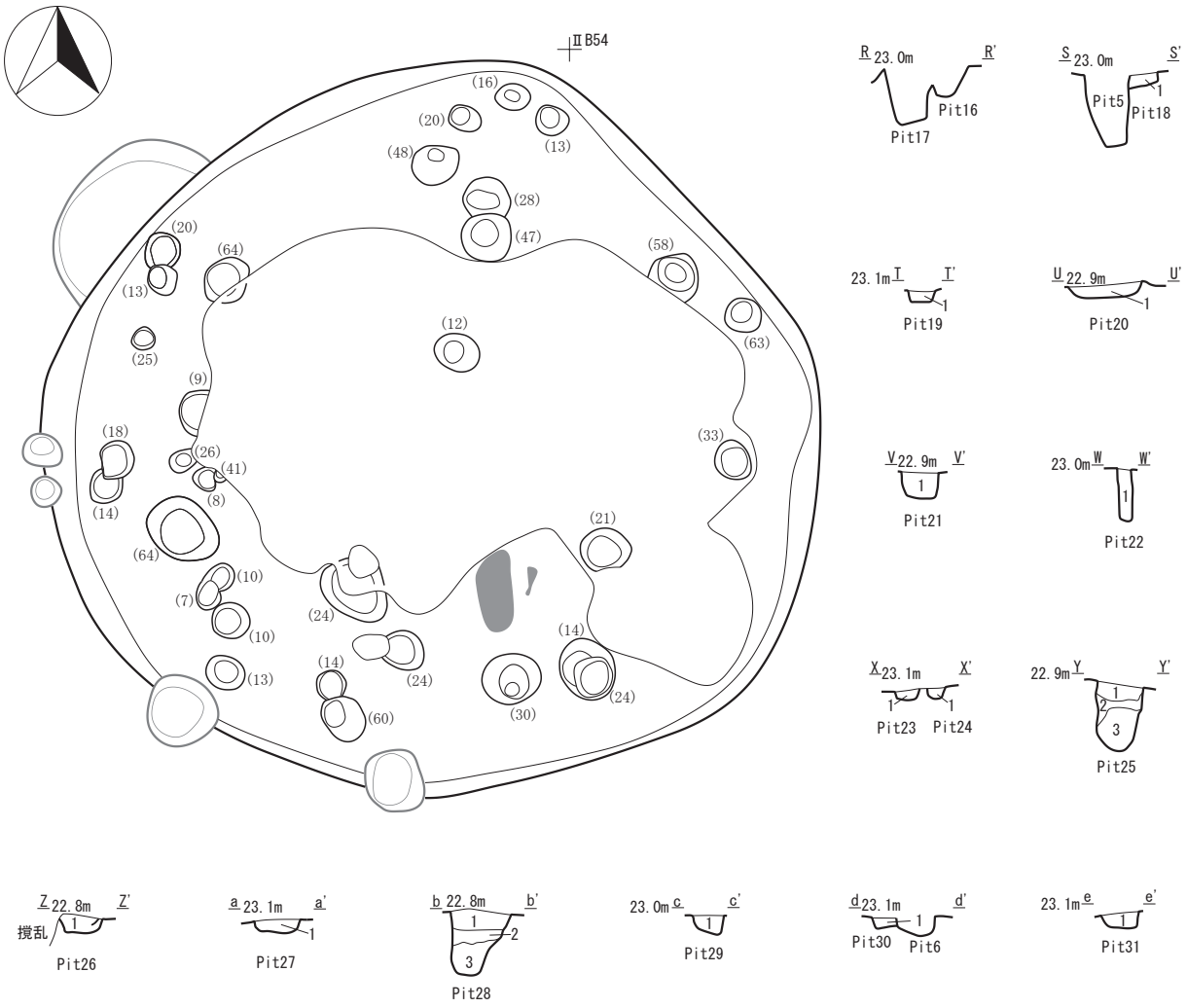
Pit7(K-K')
1層　10YR3/4 暗褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒1%、φ5～10㎜炭粒1%混合

Pit8(L-L')
1層　10YR3/4 暗褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒1%、φ5～10㎜炭粒1%混合

Pit9(M-M')
1層　10YR3/4 暗褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒1%、φ5～10㎜炭粒1%混合

Pit10(N-N')
1層　10YR3/4 暗褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒1%、φ5～10㎜炭粒1%混合

図23　第１号竪穴建物跡（１）



Pit11(O-O')
1層　10YR3/4 暗褐色土　φ5㎜炭粒1%混合
2層　10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒2%、φ5㎜炭粒1%混合

Pit14(P-P')
1層　10YR3/4 暗褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒1%、φ5～10㎜炭粒1%混合

Pit15(Q-Q')
1層　10YR3/4 暗褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒1%、φ5～10㎜炭粒1%混合

Pit18(S-S')
1層　10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒1%、φ5㎜炭粒2%混合

Pit19(T-T')
1層　10YR4/6 褐色土

Pit20(U-U')
1層　10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒1%、φ5㎜炭粒2%混合

Pit21(V-V')
1層　10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム塊、φ5～20㎜炭粒2%混合

Pit22(W-W')
1層　10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム塊、φ5～20㎜炭粒2%混合

Pit23(X-X')
1層　10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム塊、φ5～20㎜炭粒2%混合

Pit24(X-X')
1層　10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム塊、φ5～20㎜炭粒2%混合

Pit25(Y-Y')
1層　10YR3/3 暗褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒2%、φ5㎜炭粒1%混合
2層　10YR5/4 にぶい黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム塊混合
3層　10YR3/3 暗褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒1%、φ5㎜炭粒2%混合

Pit26(Z-Z')
1層　10YR4/6 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム塊、φ5㎜炭粒2%混合

Pit27(a-a')
1層　10YR3/3 暗褐色土

Pit28(b-b')
1層　10YR4/2 灰黄褐色土
2層　10YR3/2 黒褐色土　φ10㎜炭粒混合
3層　10YR4/2 灰黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム塊、φ5㎜炭粒2%混合

Pit29(c-c')
1層　10YR3/2 黒褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒5%混合

Pit30(d-d')
1層　10YR3/2 黒褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒2%、φ5～10㎜炭粒1%混合

Pit31(e-e')
1層　10YR4/4 褐色土　10YR2/2黒褐色土粒、φ5～10㎜炭粒1%混合

図24　第１号竪穴建物跡(２)

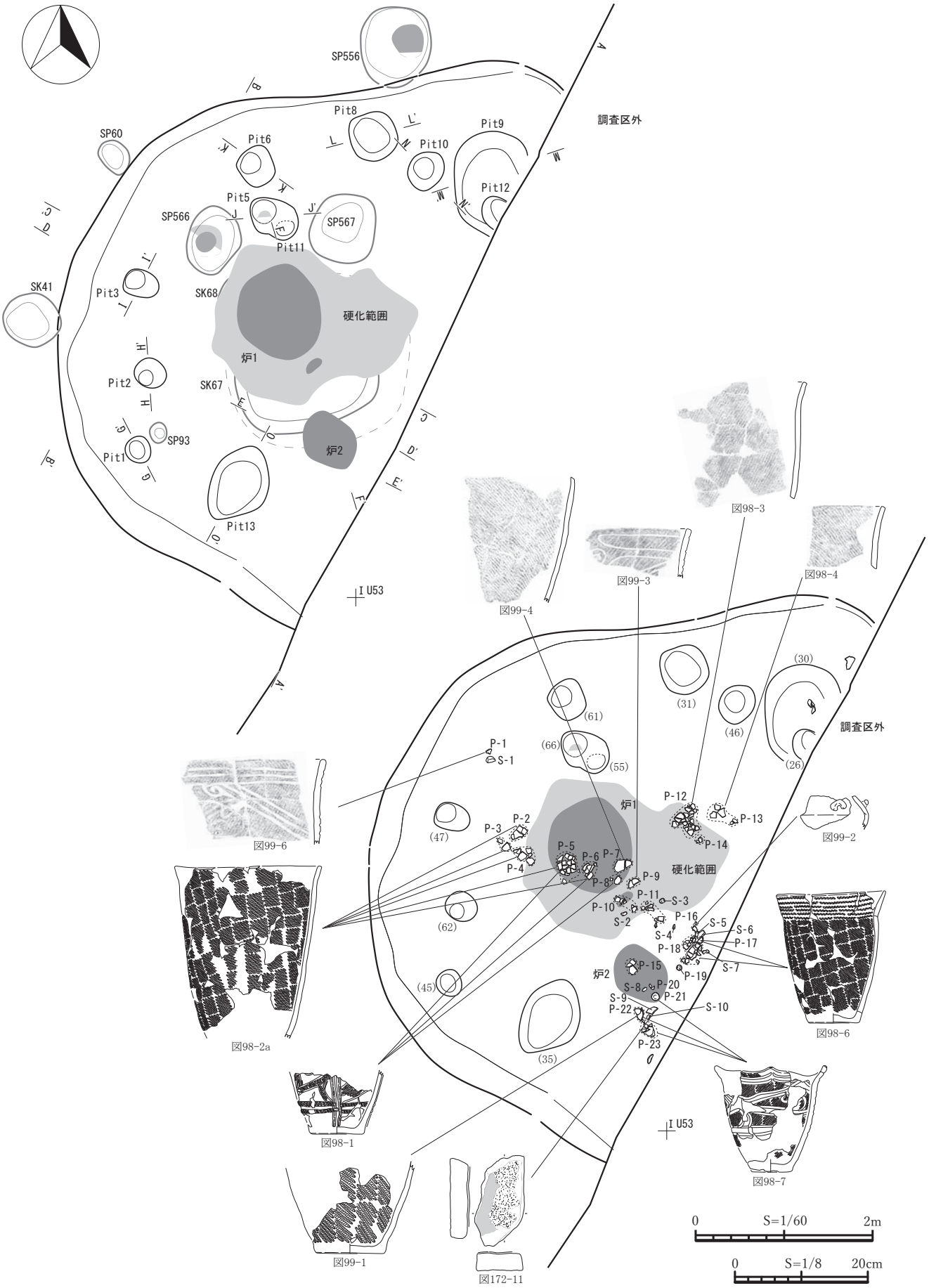
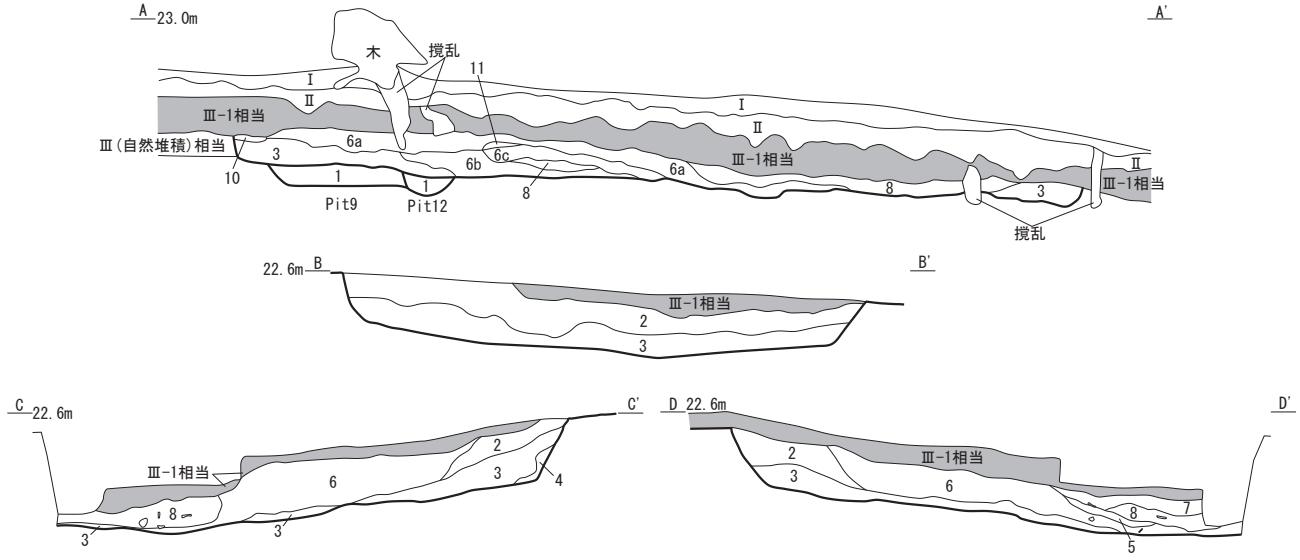


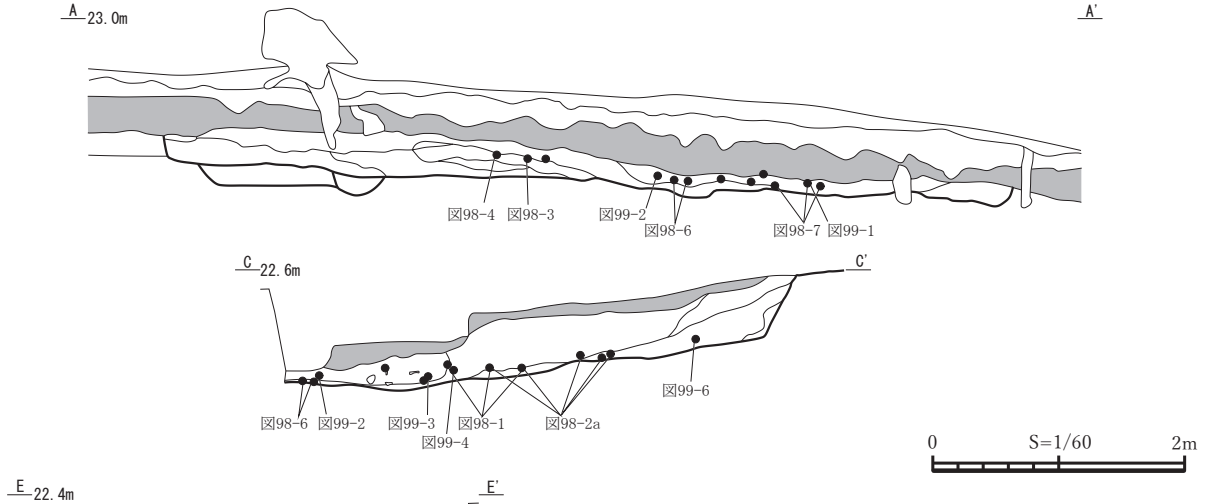
図25　第２号竪穴建物跡（１）

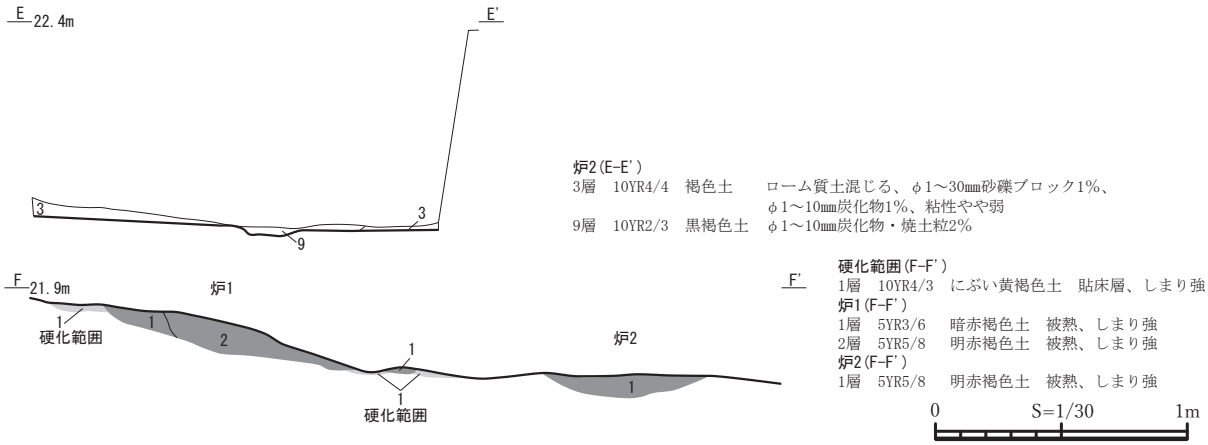


SI2(B-B'・C-C'・D-D')

Ⅲ-1層相当	10YR3/4	暗褐色土	φ1～10㎜砂礫ブロック1%、φ1～5㎜炭化物・焼土粒・ロームブロック1%
2層	10YR3/3	暗褐色土	φ1～15㎜炭化物1%、φ1～10㎜砂礫ブロック1%
3層	10YR4/4	褐色土	ローム質土混じる、φ1～30㎜砂礫ブロック1%、φ1～10㎜炭化物1%、粘性やや弱
4層	10YR5/8	黄褐色土	壁面崩落土か、粘性中
5層	10YR3/4	暗褐色土	にぶい黄褐色(10YR5/4)の粘土含む、φ1～20㎜砂礫ブロック・炭化物・焼土ブロック1%、しまり中
6層	10YR3/3	暗褐色土	φ1～20㎜砂礫ブロック10%・炭化物5%、φ1～5㎜焼土粒・ロームブロック1% 調査区東壁面では、色調等により6a～c層に細分される
7層	10YR3/3	暗褐色土	φ1～20㎜炭化物2%、φ1～10㎜焼土ブロック1%
8層	7.5YR3/4	暗褐色土	褐色(7.5YR4/6)の焼土、遺物を多量に含む廃棄焼土層、φ1～20㎜焼土ブロック2%、φ1～10㎜炭化物2%
10層	10YR4/4	褐色土	
11層	10YR4/6	褐色土	ローム主体の薄層

土器立面図





炉2(E-E')

3層	10YR4/4	褐色土	ローム質土混じる、φ1～30㎜砂礫ブロック1%、φ1～10㎜炭化物1%、粘性やや弱
9層	10YR2/3	黒褐色土	φ1～10㎜炭化物・焼土粒2%

硬化範囲(F-F')

1層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	貼床層、しまり強

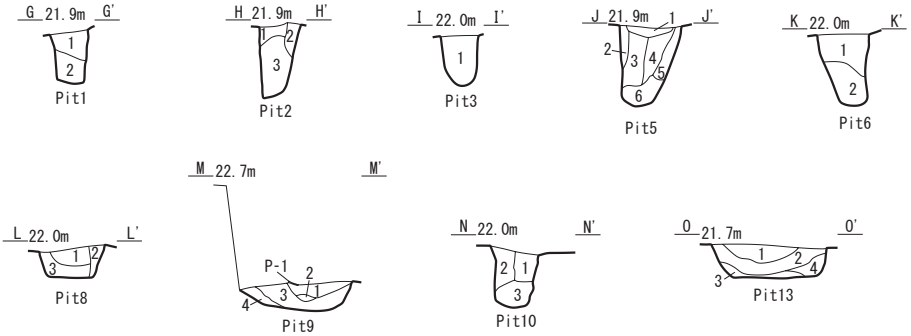
炉1(F-F')

1層	5YR3/6	暗赤褐色土	被熱、しまり強
2層	5YR5/8	明赤褐色土	被熱、しまり強

炉2(F-F')

1層	5YR5/8	明赤褐色土	被熱、しまり強

図26　第２号竪穴建物跡(２)

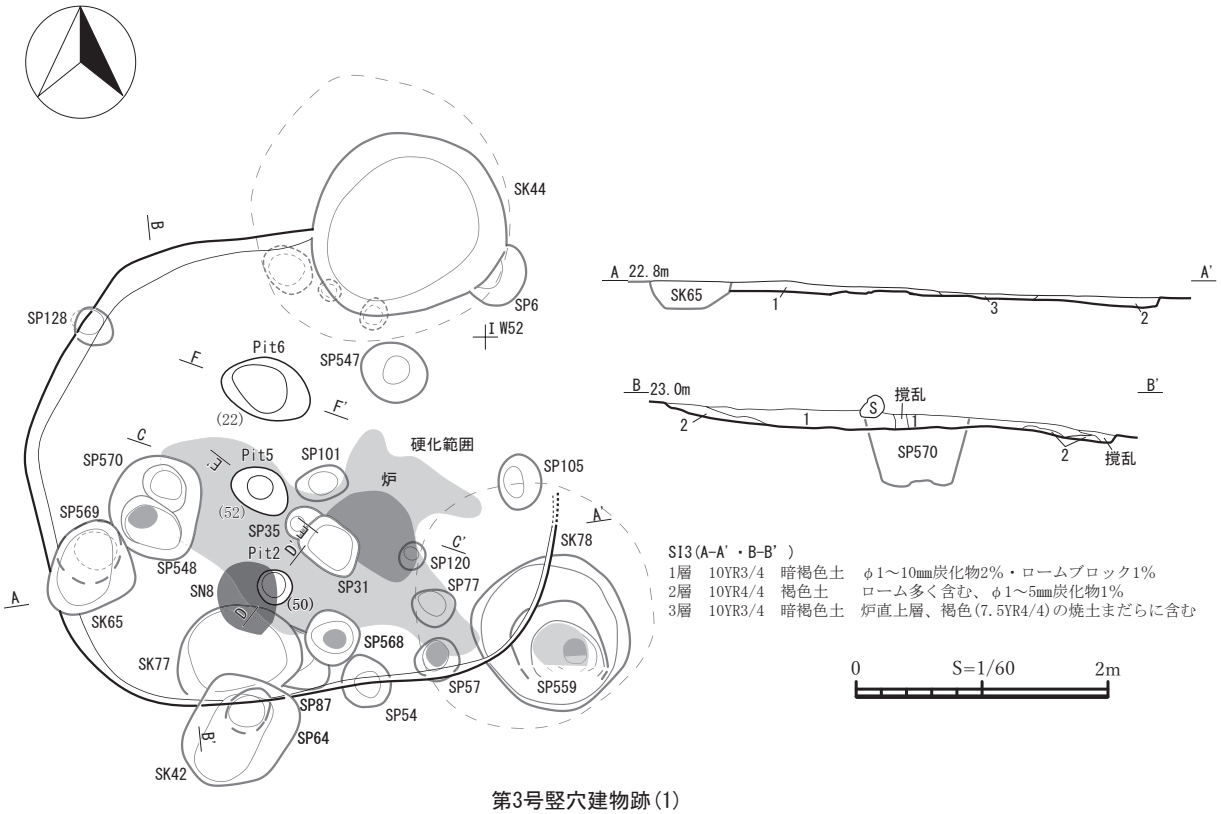


Pit1(G-G')
1層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　φ1～10㎜ロームブロック2%、φ1～5㎜炭化物1%
2層　10YR3/4　暗褐色土
Pit2(H-H')
1層　10YR4/4　褐色土　φ1～10㎜ロームブロック5%、φ1～2㎜炭化物1%、粘性・しまり中
2層　10YR4/6　褐色土　ローム主体層、粘性・しまり中
3層　10YR2/3　黒褐色土　φ1～10㎜ロームブロック1%、φ1～2㎜炭化物1%
Pit3(I-I')
1層　10YR3/4　暗褐色土　φ1～20㎜ロームブロック2%、φ1～10㎜砂礫ブロック2%、φ1～5㎜炭化物1%
上部にロームブロック、下部に礫多く含む
Pit5(J-J')
1層　10YR3/3　暗褐色土
2層　10YR4/6　褐色土　ローム主体層、粘性中
3層　10YR2/3　黒褐色土　ローム多く含む
4層　10YR2/3　黒褐色土　ローム少量含む
5層　10YR3/4　暗褐色土　褐色ローム(10YR4/6)との混土層
φ1～50㎜ロームブロック50%
6層　10YR4/6　褐色土　ローム主体層、崩落土か、粘性中
Pit6(K-K')
1層　10YR3/4　暗褐色土　φ1～10㎜ロームブロック5%、φ1～10㎜砂礫ブロック1%、φ1～10㎜炭化物1%
2層　10YR3/4　暗褐色土　含有物少ない

Pit8(L-L')
1層　10YR3/4　暗褐色土　φ1～5㎜炭化物・ロームブロック1%
2層　10YR4/4　褐色土　ロームとの混土層、裏込のような様相、しまりやや弱
3層　10YR4/4　褐色土　φ1～50㎜ロームブロック20%、φ1～10㎜炭化物1%
Pit9(M-M')
1層　10YR3/3　暗褐色土　φ1～5㎜炭化物・ロームブロック1%
2層　2.5Y7/2　灰黄色土　粘土層、粘性・しまり強
3層　10YR3/4　暗褐色土　粘土ブロック含む、φ1～10㎜ロームブロック10%
4層　10YR4/6　褐色土　ローム主体層
Pit10(N-N')
1層　10YR2/3　黒褐色土、ローム少量混じる、φ1～5㎜炭化物1%
2層　10YR2/3　黒褐色土　褐色ローム(10YR5/6)との混土層
3層　10YR3/4　暗褐色土　しまりなし
Pit13(O-O')
1層　10YR3/4　暗褐色土　φ1～10㎜炭化物・ロームブロック1%
2層　10YR4/4　褐色土　砂多量に含む
3層　10YR6/6　明黄褐色土　砂主体
4層　10YR3/2　黒褐色土　砂礫ブロック含む

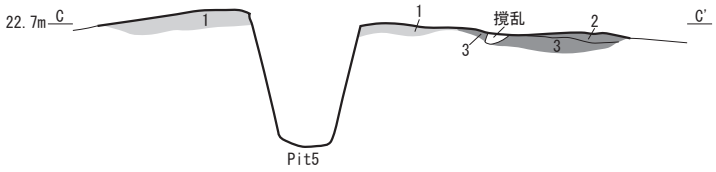
0　S=1/60　2m

第2号竪穴建物跡(3)

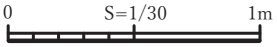


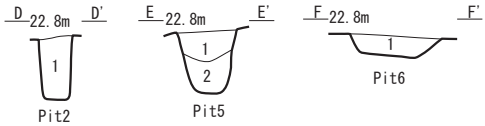
第3号竪穴建物跡(1)

図27　第２・３号竪穴建物跡

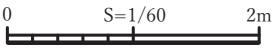


硬化範囲・炉(C-C')
1層　10YR4/6　褐色土　　貼床、φ1～5㎜炭化物・焼土粒1%、しまり中
2層　5YR4/4　にぶい赤褐色土　炉、被熱、しまり中
3層　5YR4/8　赤褐色土　　炉、被熱、しまり中

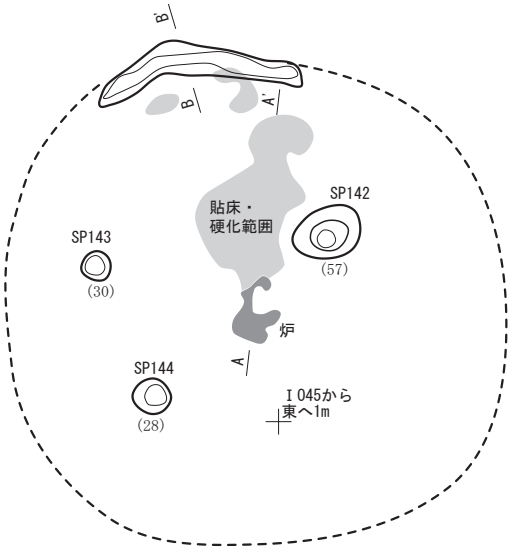


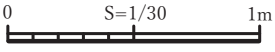


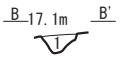
Pit2(D-D')
1層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　ローム含む、φ1～5㎜炭化物1%
Pit5(E-E')
1層　10YR4/4　褐色土　　φ1～10㎜ロームブロック、φ1～5㎜炭化物1%
2層　10YR3/4　暗褐色土　φ1～10㎜ロームブロック1%
Pit6(F-F')
1層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　φ1～10㎜炭化物1%、φ1～5㎜焼土粒1%



第3号竪穴建物跡(2)

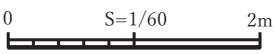






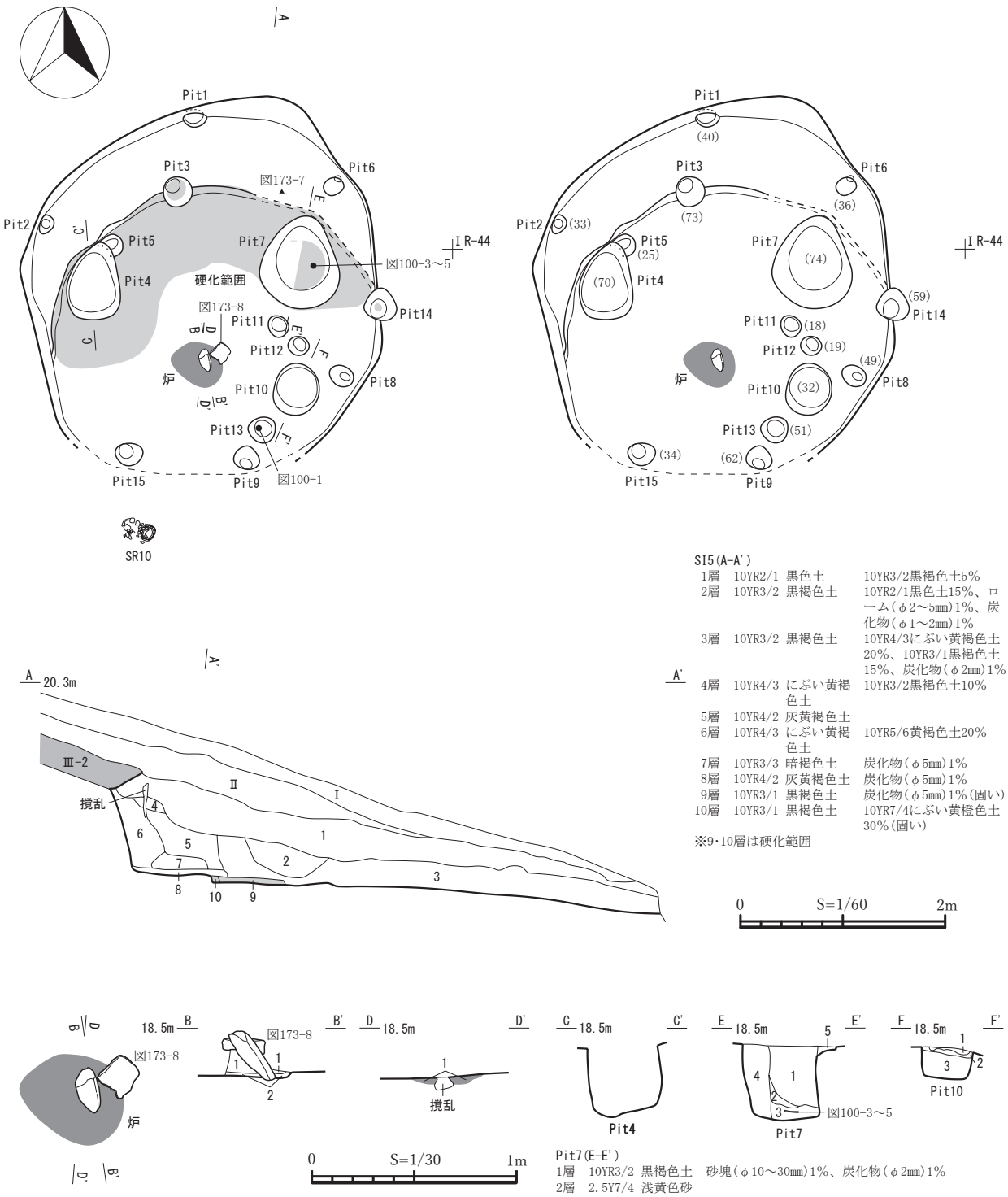
SI4(A-A')
1層　10YR5/6 黄褐色砂質・粘土質ローム　Ⅴ層主体の貼床層
2層　5YR3/6　暗赤褐色シルト　　焼土

壁溝(B-B')
1層　10YR2/2 黒褐色土



第4号竪穴建物跡

図28　第３・４号竪穴建物跡



SI5(A-A')

1層	10YR2/1	黒色土	10YR3/2黒褐色土5%
2層	10YR3/2	黒褐色土	10YR2/1黒色土15%、ローム(φ2～5㎜)1%、炭化物(φ1～2㎜)1%
3層	10YR3/2	黒褐色土	10YR4/3にぶい黄褐色土20%、10YR3/1黒褐色土15%、炭化物(φ2㎜)1%
4層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	10YR3/2黒褐色土10%
5層	10YR4/2	灰黄褐色土	
6層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	10YR5/6黄褐色土20%
7層	10YR3/3	暗褐色土	炭化物(φ5㎜)1%
8層	10YR4/2	灰黄褐色土	炭化物(φ5㎜)1%
9層	10YR3/1	黒褐色土	炭化物(φ5㎜)1%(固い)
10層	10YR3/1	黒褐色土	10YR7/4にぶい黄橙色土30%(固い)

※9･10層は硬化範囲

炉(B-B')

1層	10YR4/2	灰黄褐色土	5YR7/8橙色焼土5%、炭化物(φ3㎜)1%
2層	10YR7/4	にぶい黄橙色土	10YR4/2灰黄褐色土10%

炉(D-D')

1層	2.5YR6/8	橙色焼土	

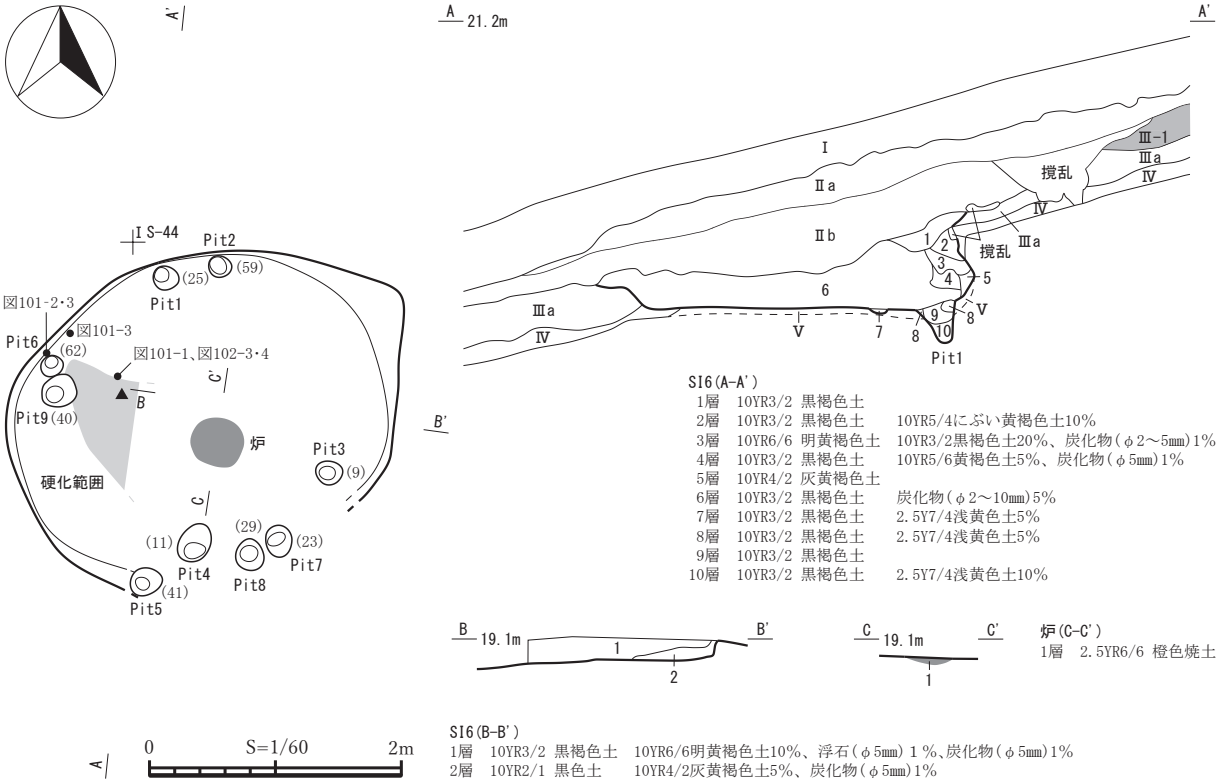
Pit7(E-E')

1層	10YR3/2	黒褐色土	砂塊(φ10～30㎜)1%、炭化物(φ2㎜)1%
2層	2.5Y7/4	浅黄色砂	
3層	10YR4/1	褐灰色土	
4層	2.5Y7/4	浅黄色砂	10YR3/2黒褐色土30%
5層	10YR3/2	黒褐色土	焼土(φ2㎜)1%、炭化物(φ2㎜)1%

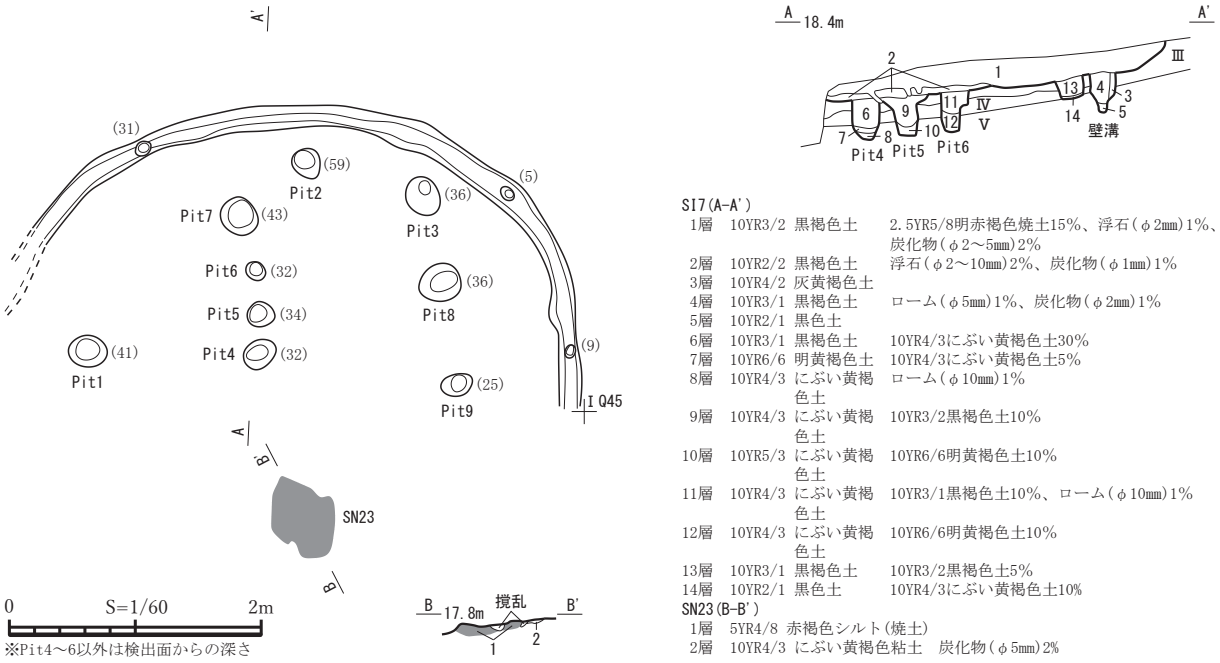
Pit10(F-F')

1層	2.5Y7/4	浅黄色砂	
2層	10YR3/2	黒褐色土	
3層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	10YR3/2黒褐色土20%

図29　第５号竪穴建物跡

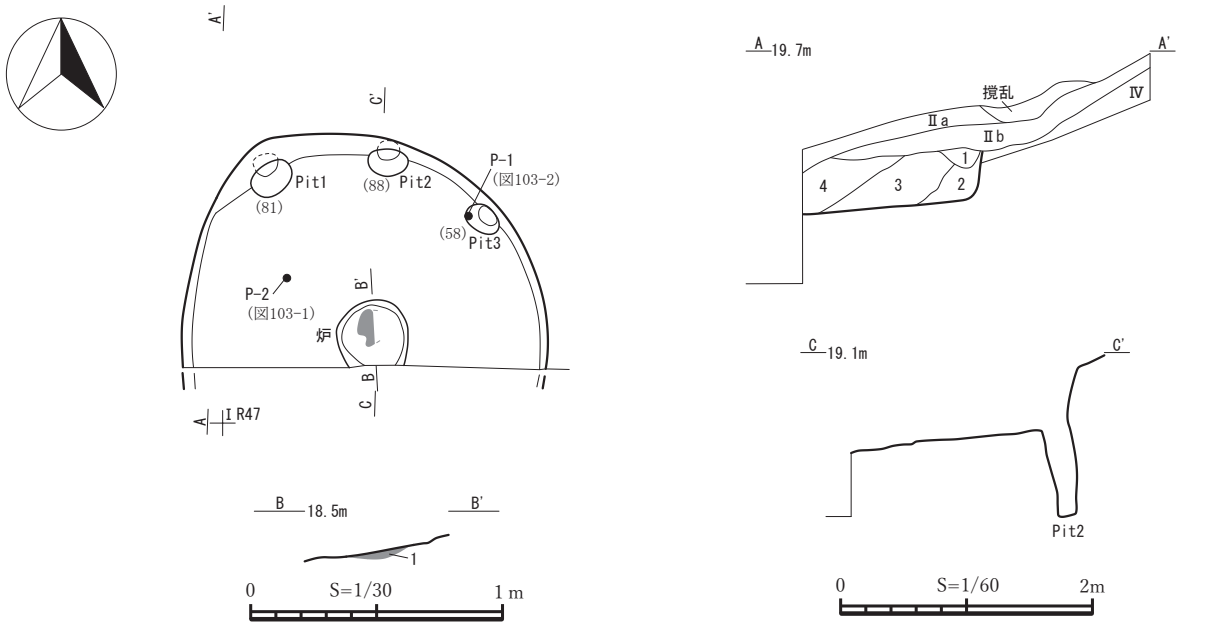


第6号竪穴建物跡



第7号竪穴建物跡

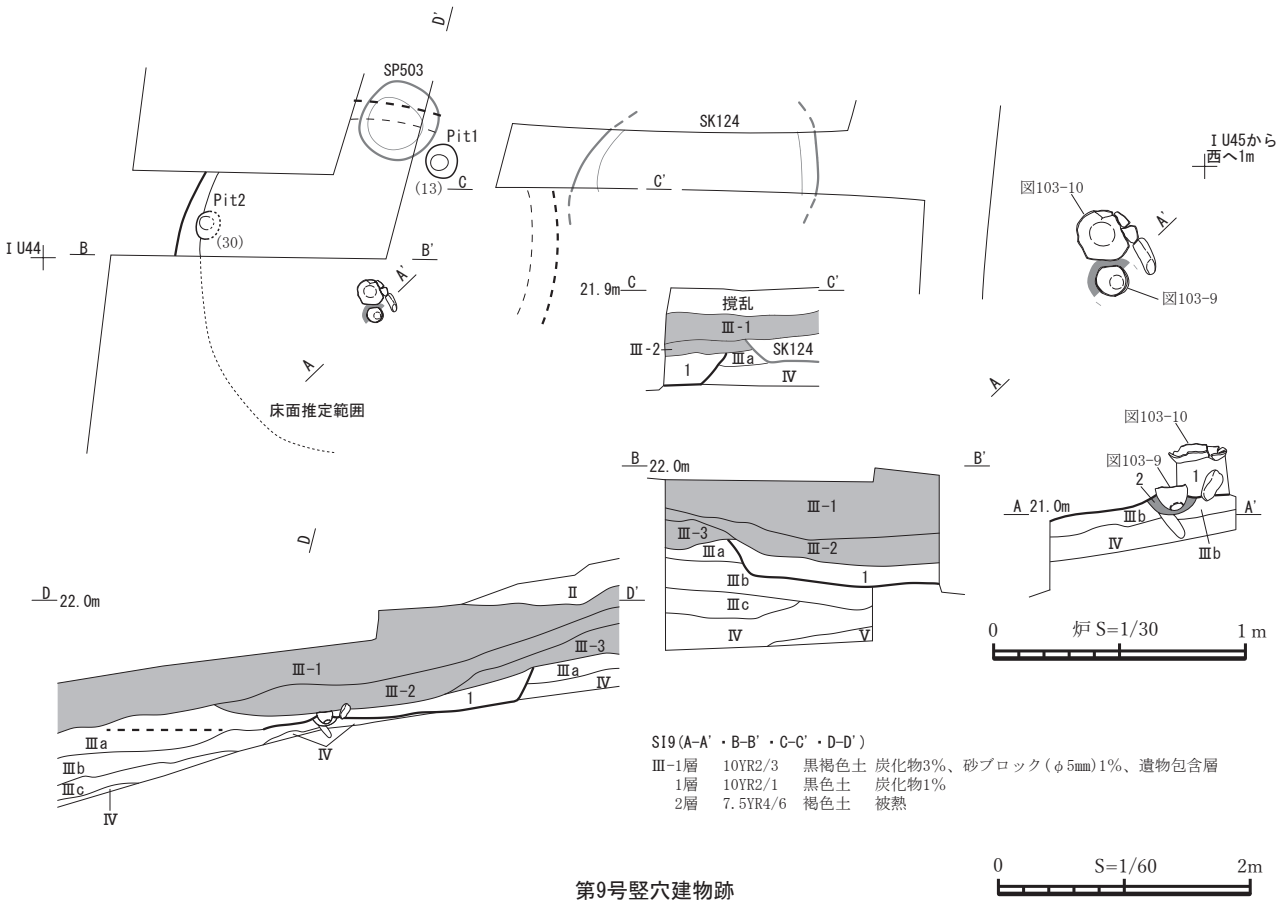
図30　第６・７号竪穴建物跡



炉(B-B')
1層　7.5YR4/6　褐色土

SI8(A-A')
Ⅱa層　10YR2/1　黒色土　B-Tm？粒、ローム粒1%
Ⅱb層　10YR2/2　黒褐色土　砂ブロック(φ1～5mm)1%
Ⅳ層　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒1%
1層　10YR2/1　黒色土
2層　10YR3/3　暗褐色土　砂ブロックφ50mm混入、ローム粒1%
3層　10YR3/4　暗褐色土　炭化物3%、遺物多量に含む
4層　10YR2/3　黒褐色土　炭化物、ローム粒1%、遺物含む

第8号竪穴建物跡



SI9(A-A'・B-B'・C-C'・D-D')
Ⅲ-1層　10YR2/3　黒褐色土 炭化物3%、砂ブロック(φ5mm)1%、遺物包含層
1層　10YR2/1　黒色土　炭化物1%
2層　7.5YR4/6　褐色土　被熱

第9号竪穴建物跡

図31　第８・９号竪穴建物跡

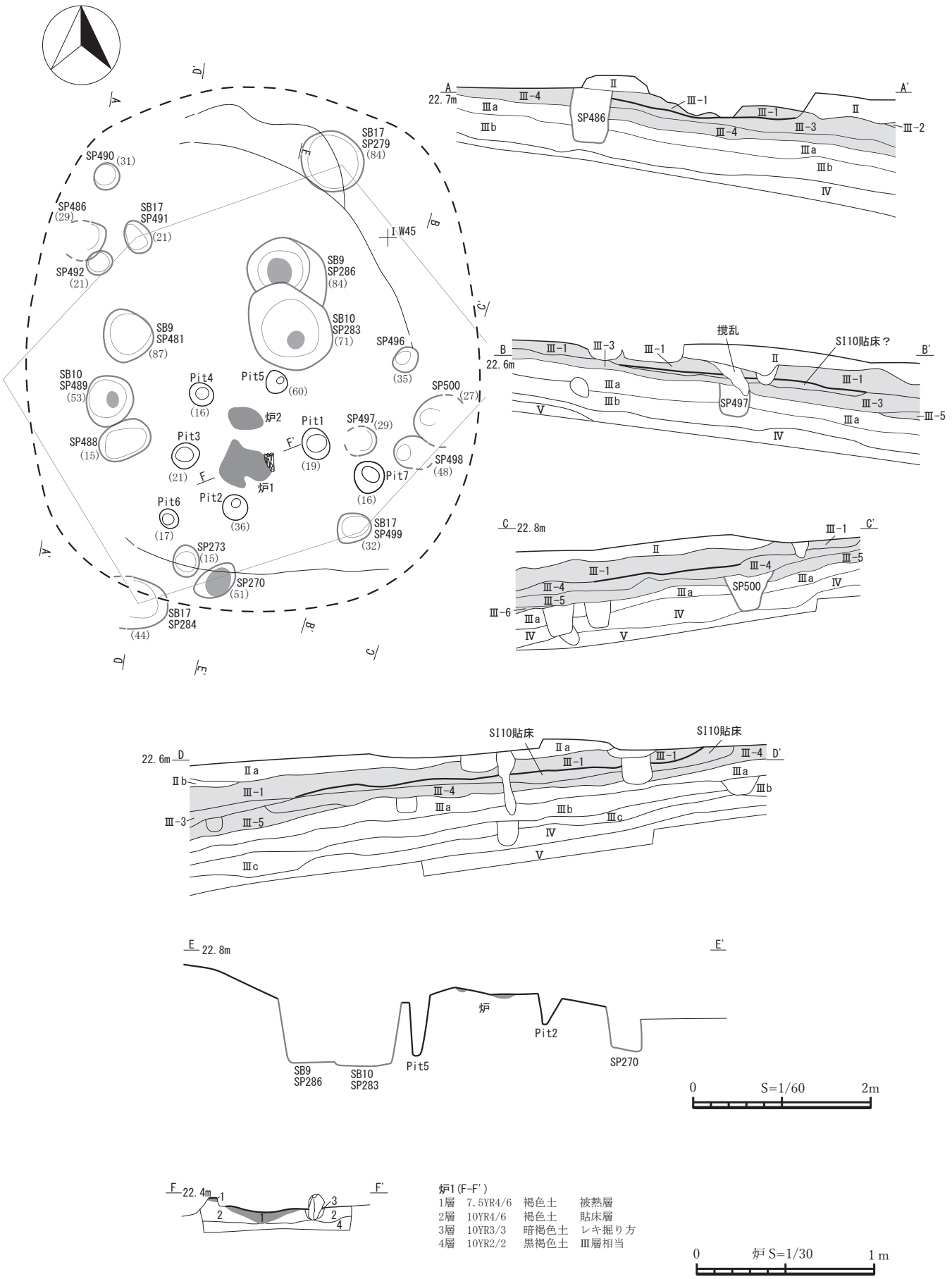
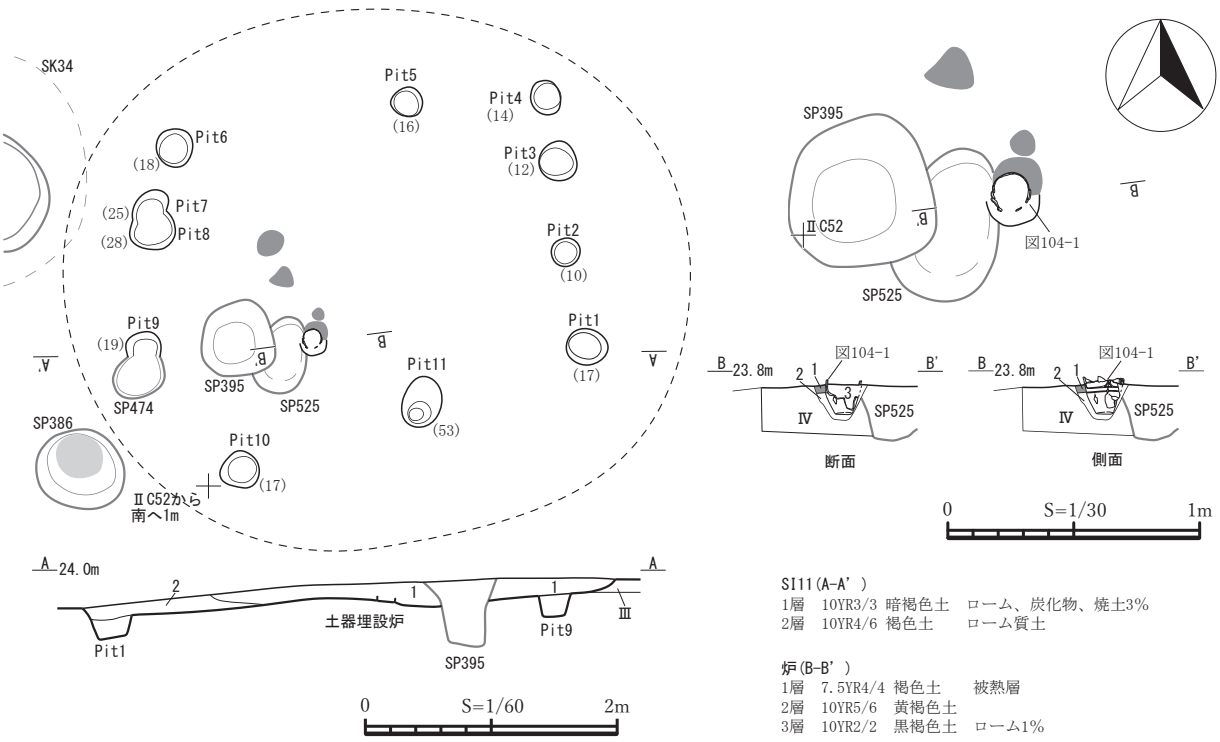


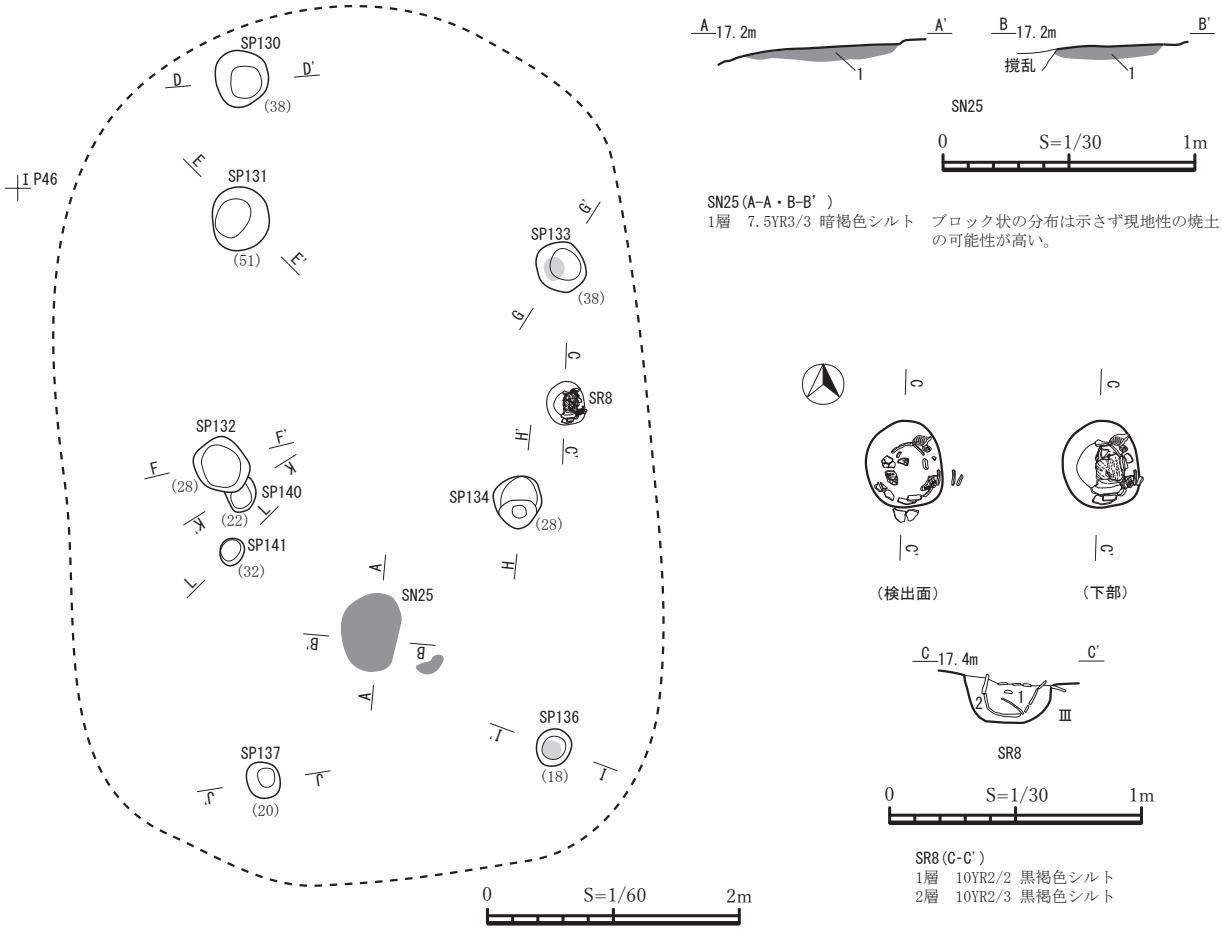
図32　第10号竪穴建物跡



SI11(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム、炭化物、焼土3%
2層　10YR4/6 褐色土　ローム質土

炉(B-B')
1層　7.5YR4/4 褐色土　被熱層
2層　10YR5/6　黄褐色土
3層　10YR2/2　黒褐色土　ローム1%

第11号竪穴建物跡

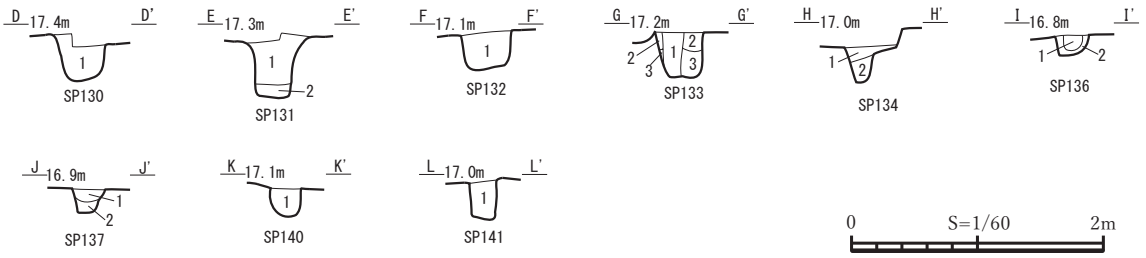


SN25(A-A・B-B')
1層　7.5YR3/3 暗褐色シルト　ブロック状の分布は示さず現地性の焼土の可能性が高い。

SR8(C-C')
1層　10YR2/2 黒褐色シルト
2層　10YR2/3 黒褐色シルト

第12号竪穴建物跡(1)

図33　第11・12号竪穴建物跡



SP130(D-D')
1層　10YR3/4 暗褐色シルト　10YR6/8明黄褐色ローム（φ10㎜）5%

SP131(E-E')
1層　10YR3/3 暗褐色シルト
2層　10YR2/3 黒褐色シルト

SP132(F-F')
1層　10YR3/3 暗褐色土　10YR5/8明黄褐色ローム(φ20㎜)10%

SP133(G-G')
1層　10YR3/3 暗褐色土　φ1～5㎜の地山粒3%、柱痕
2層　10YR3/4 暗褐色土　φ3～5㎜の地山粒7%、掘方埋土
3層　10YR3/2 黒褐色土　φ1～3㎜の地山粒2%、掘方埋土

SP134(H-H')
1層　10YR3/3 暗褐色土　φ2～10㎜の地山粒10%含む
2層　10YR3/2 黒褐色土　φ2～5㎜の地山粒3%含む

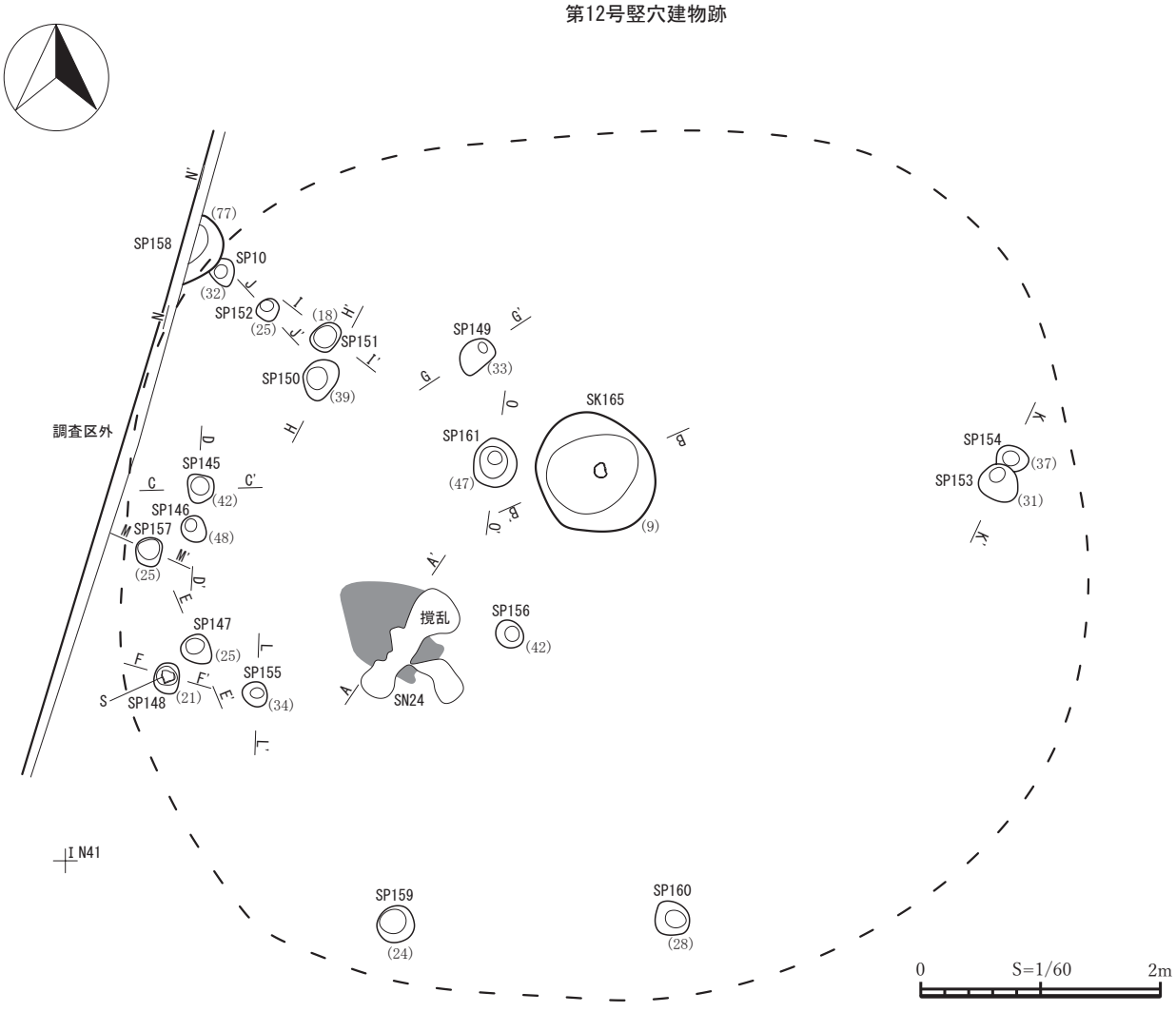
SP136(I-I')
1層　10YR2/2 黒褐色土　φ1㎜の地山粒1%、柱痕
2層　10YR2/2 黒褐色土　φ2～5㎜の地山粒5%、掘方埋土

SP137(J-J')
1層　10YR3/3 暗褐色土　φ1～3㎜の地山粒3%
2層　10YR3/4 暗褐色土　φ2～10㎜の地山粒15%

SP140(K-K')
1層　10YR3/4 暗褐色土　φ5㎜の地山粒5%

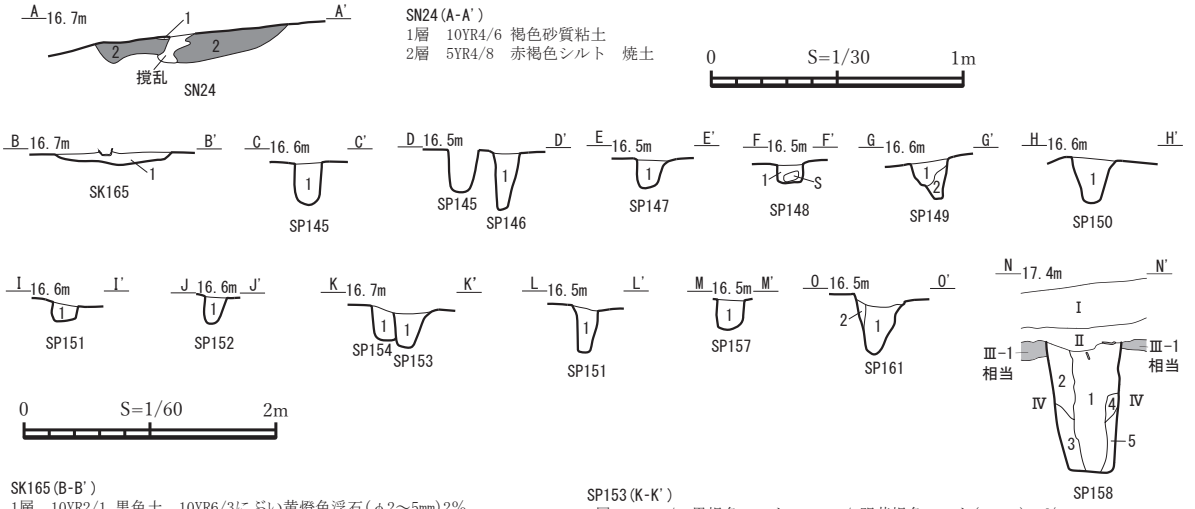
SP141(L-L')
1層　10YR3/4 暗褐色土　φ3㎜の地山3%、粘性中、しまり中。

第12号竪穴建物跡



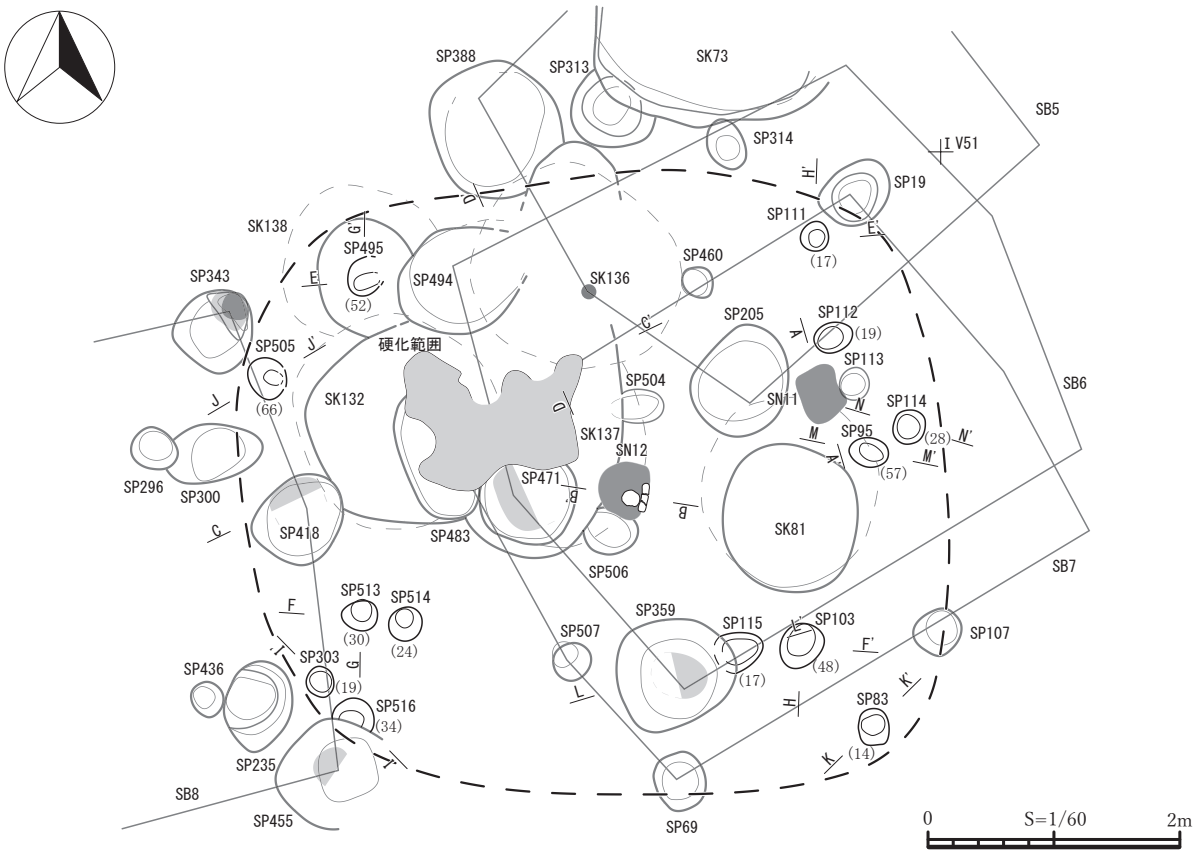
第13号竪穴建物跡

図34　第12・13号竪穴建物跡



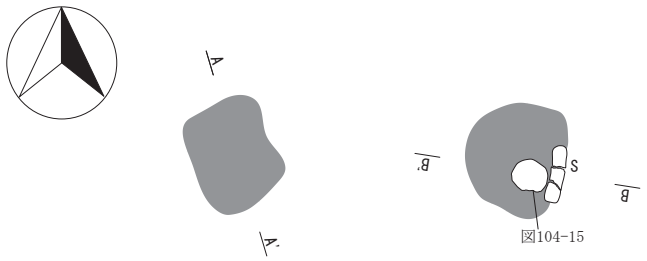
SK165(B-B')
1層　10YR2/1 黒色土　10YR6/3にぶい黄燈色浮石(φ2～5mm)2%
SP145(C-C')
1層　10YR2/3 黒褐色シルト　2.5Y6/6明黄褐色砂質ローム（φ5mm）10%
SP146(D-D')
1層　10YR2/2 黒褐色シルト
SP147(E-E')
1層　10YR2/2 黒褐色シルト
SP148(F-F')
1層　10YR3/3 暗褐色シルト
SP149(G-G')
1層　10YR2/2 黒褐色シルト
2層　10YR2/1 黒色シルト　10YR3/4暗褐色シルトブロック20%
SP150(H-H')
1層　10YR2/3 黒褐色シルト　10YR7/6明黄褐色ローム（φ10mm）10%
SP151(I-I')
1層　10YR2/3 黒褐色シルト　10YR6/4にぶい黄橙色ローム(φ5mm)5%
SP152(J-J')
1層　10YR2/3 黒褐色シルト
SP153(K-K')
1層　10YR2/2 黒褐色シルト　10YR6/8明黄褐色シルト(φ5mm)10%
SP154(K-K')
1層　10YR2/3 黒褐色シルト　しまりのない10YR5/4にぶい黄褐色ローム(φ20mm)5%
SP155(L-L')
1層　10YR3/2 黒褐色シルト　2.5Y5/6黄褐色ローム5%
SP157(M-M')
1層　10YR3/3 暗褐色シルト　10YR6/6明黄褐色ローム(φ5mm)5%
SP158(N-N')
1層　10YR3/2 黒褐色シルト　10YR4/6褐色ローム(φ2mm)20%
2層　10YR4/2 灰黄褐色シルト　10YR7/4にぶい黄橙色ローム(φ10mm)20%
3層　10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
4層　10YR3/4 暗褐色シルト
5層　10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
SP161(O-O')
1層　10YR3/2 黒褐色シルト　明黄褐色(10YR6/6)シルト質火山灰土10%
2層　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　明黄褐色(10YR6/6)シルト質火山灰土25%

第13号竪穴建物跡(2)



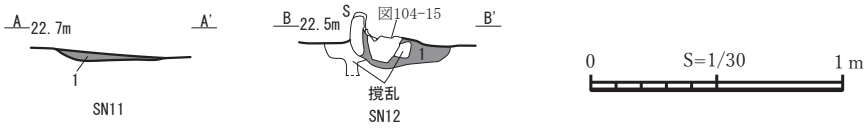
第14号竪穴建物跡

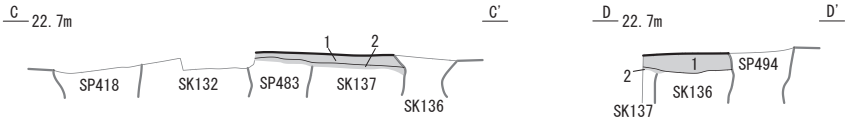
図35　第13・14号竪穴建物跡



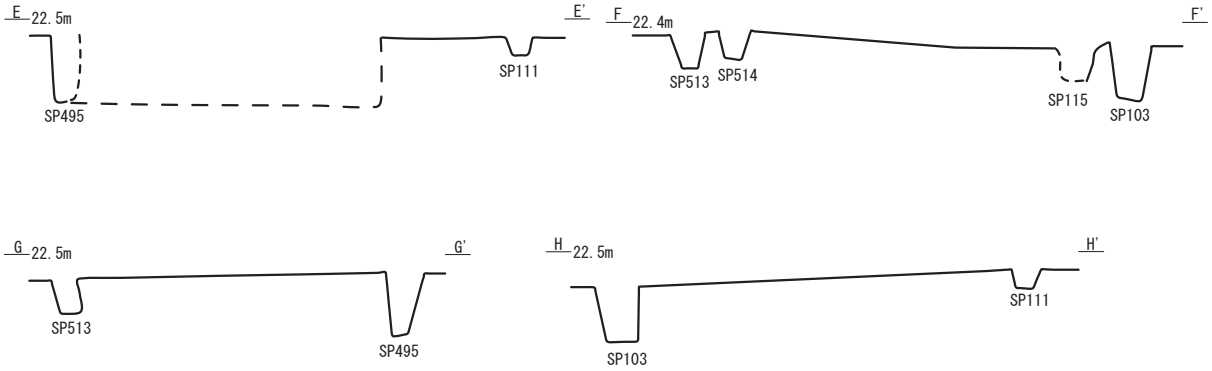
SN11(A-A')
1層　7.5YR4/4　褐色土　被熱範囲、φ1～5㎜焼土粒1%

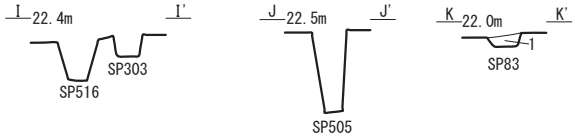
SN12(B-B')
1層　5YR4/4　にぶい赤褐色土　被熱範囲、しまりややあり





硬化範囲(C-C'・D-D')
1層　10YR6/2 灰黄褐色土　　砂塊(φ30㎜)1%、炭化物(φ2㎜)1%
2層　10YR5/1 褐灰色土　　10YR6/3にぶい黄橙色土20%、2.5YR5/1赤灰色土と 2.5YR5/6明赤褐色土20%が硬化面を形成、炭化物(φ2㎜)1%





SP83(K-K')
1層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、V層由来のブロック（黄褐色粘土質シルト10YR5/6）φ3～5㎜を3%、炭化物粒（φ0.1㎜）を8%含む。

SP115(L-L')
1層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、炭化物粒（φ3～5㎜）を5%含む。

SP95(M-M')
1層　10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、炭化物粒（φ1㎜）を3%含む。

SP114(N-N')
1層　10YR5/6 黄褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、炭化物粒（φ0.1㎜）を3%含む。

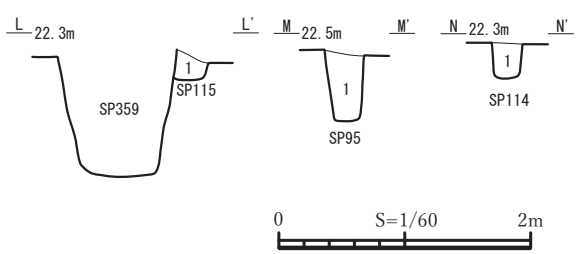
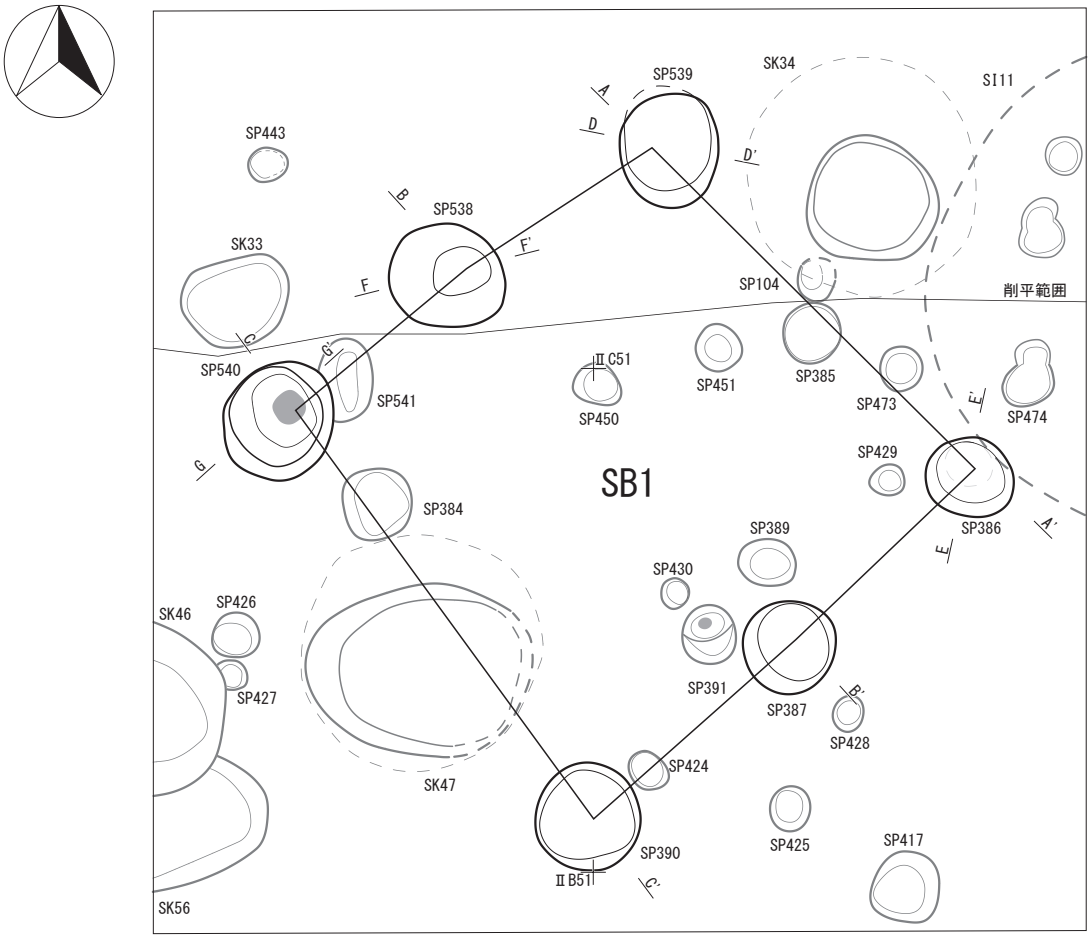
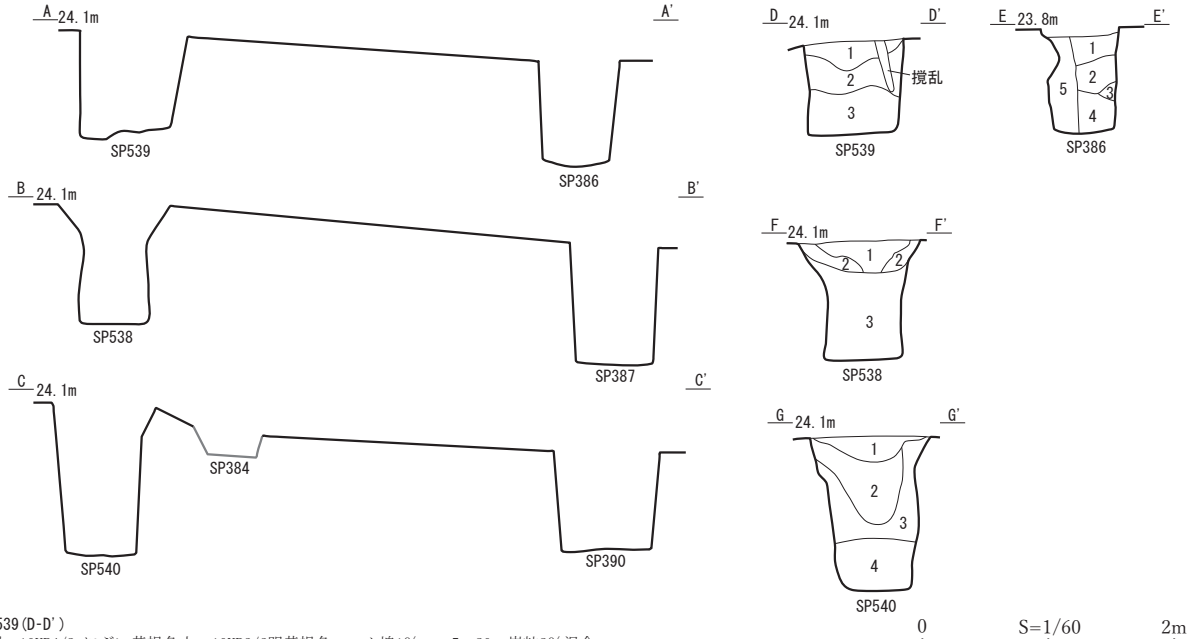


図36　第14号竪穴建物跡





SP539(D-D')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR6/6明黄褐色ローム塊1%、φ5～20㎜炭粒2%混合
2層　10YR4/4 褐色土　東側木根痕部分は10YR6/8明黄褐色ロームが漸移、φ5～20㎜炭粒3%混合
3層　10YR3/4 暗褐色土　10YR6/6明黄褐色ローム粒5%、φ5～10㎜炭粒2%混合

SP386(E-E')
1層　10YR3/4 暗褐色土　ローム粒1%
2層　10YR4/4 褐色土　炭化物1%
3層　10YR5/6 黄褐色土　ローム質土　柱痕
4層　10YR3/4 暗褐色土　ローム3%
5層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム5%、掘方埋土

SP538(F-F')
1層　10YR4/2 灰黄褐色土　φ5～10㎜炭粒1%混合
2層　10YR4/6 褐色土
3層　10YR6/6 明黄褐色土　Ⅳ層土塊多量混合

SP540(G-G')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　φ1～5㎜焼土粒1%混合
2層　10YR4/4 褐色土　φ5～10㎜炭粒、φ1～5㎜焼土粒2%混合
3層　10YR4/6 褐色土　φ1～5㎜焼土粒1%混合
4層　10YR5/4 にぶい黄褐色土　φ5～10㎜炭粒、φ1～5㎜焼土粒2%混合

図37　第１号掘立柱建物跡

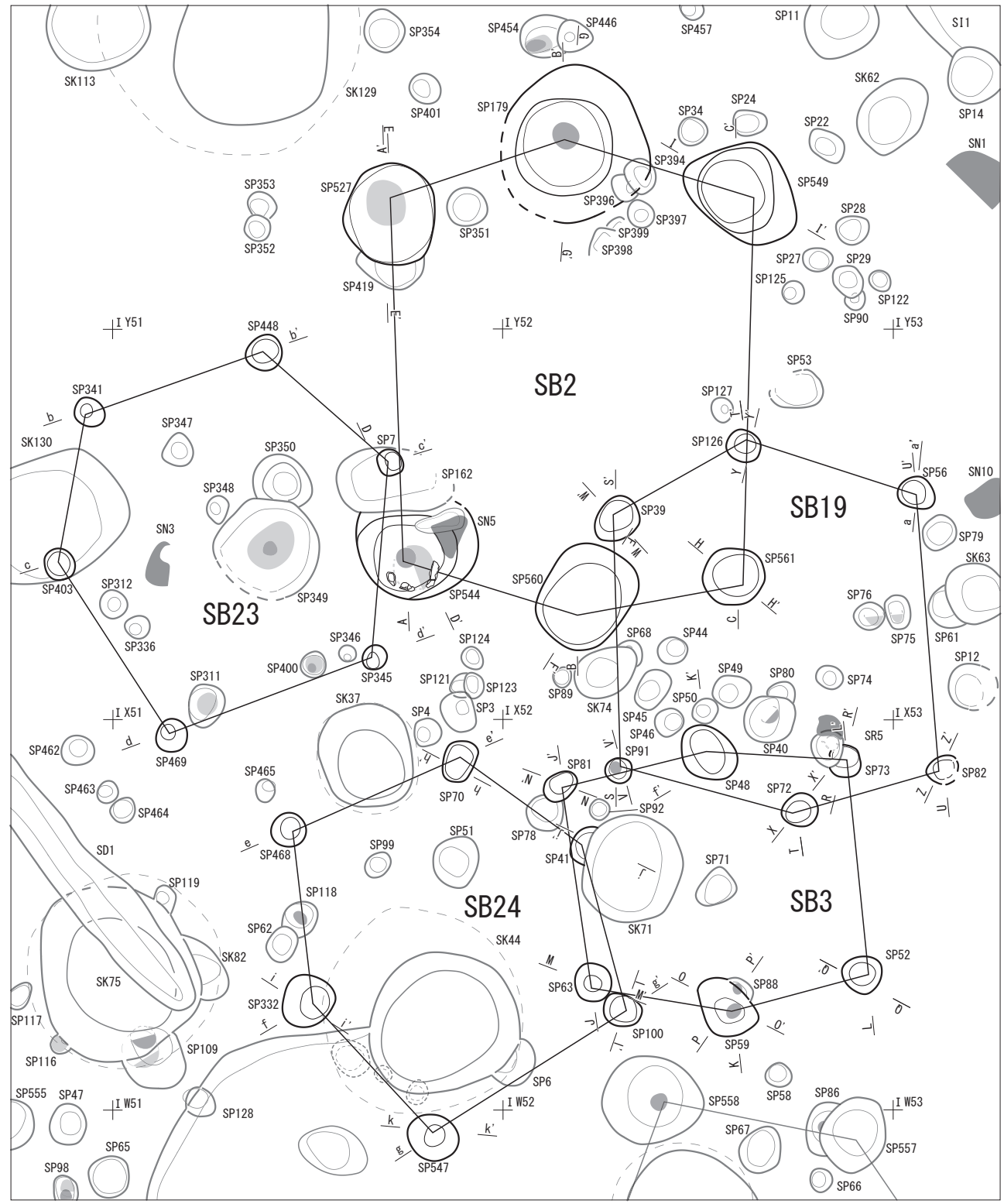
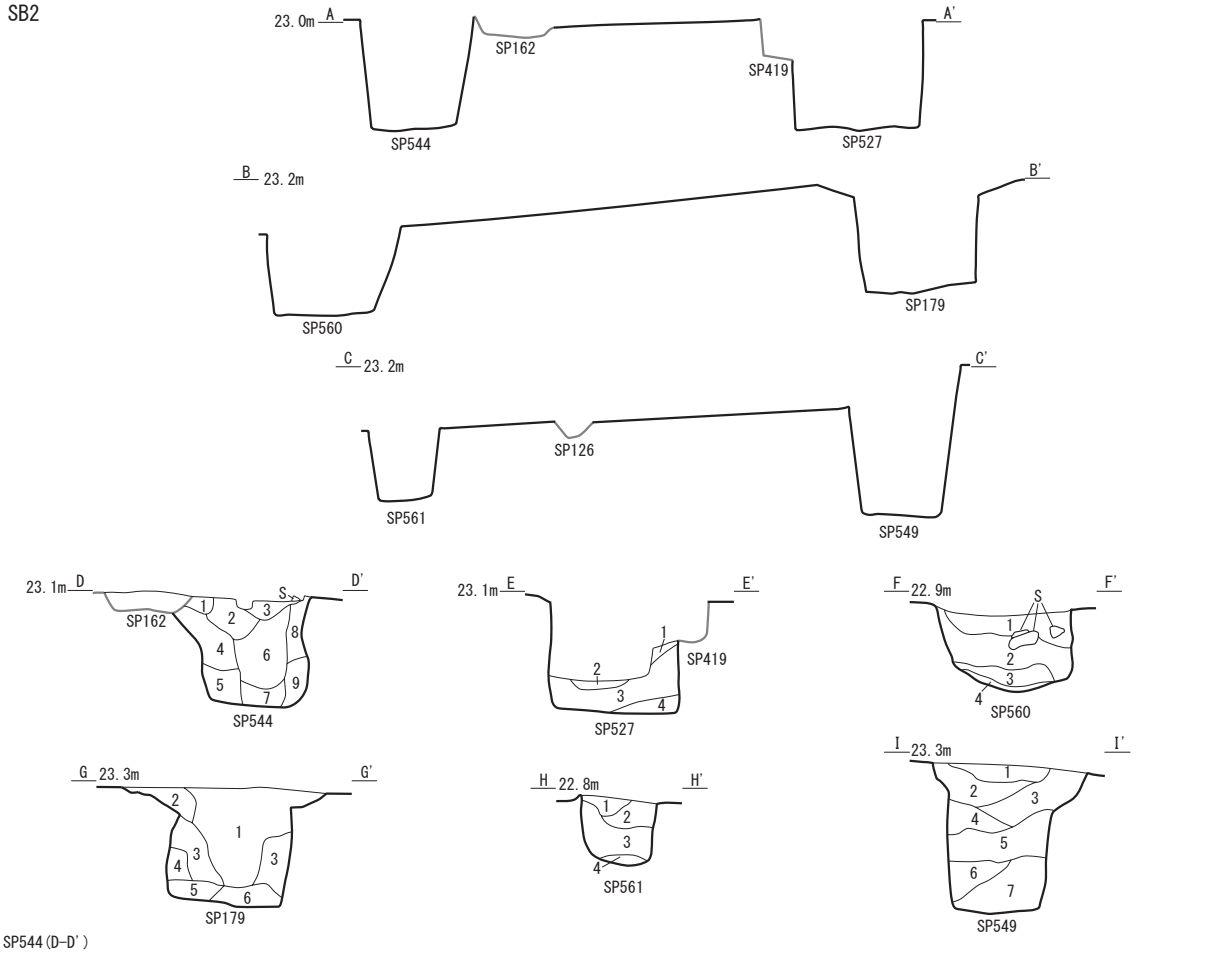


図38　第２・３・19・23・24号掘立柱建物跡(１)

SB2



SP544(D-D')
1層　10YR3/3 暗褐色土　φ1～10㎜炭化物2%、土壌化がみられる
2層　10YR4/6 褐色土　ローム主体土(廃棄層か)、粘性やや弱
3層　10YR3/3 暗褐色土　φ1～10㎜炭化物2%、土壌化がみられる
4層　10YR4/4 褐色土　ロームブロック多数包含、φ1～5㎜炭化物1%、掘方埋土か
5層　10YR4/6 褐色土　ローム主体層、粘性やや弱、掘方埋土か
6層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　φ1～5㎜炭化物・焼土粒2%、柱痕か
7層　10YR4/4 褐色土　φ1～20㎜ロームブロック1%、柱アタリか、粘性やや弱、しまり中
8層　10YR4/4 褐色土　ロームブロック多数包含、φ1～5㎜炭化物1%、掘方埋土か
9層　10YR3/4 暗褐色土　ロームブロック包含、掘方埋土か

SP527(E-E')
1層　10YR4/6 褐色土　10YR3/4 暗褐色土(層下部に帯状に混入)との混合土 10YR6/6明黄褐色砂粒(φ～5㎜)3%、炭化物粒(φ～5㎜)1%
2層　10YR3/4 暗褐色土　10YR6/6明黄褐色砂塊(φ～15㎜)との混合、炭化物粒(φ～2㎜)1%
3層　10YR5/6 黄褐色土　炭化物粒(φ～3㎜)2%
4層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　炭化物粒(φ～3㎜)2%

SP560(F-F')
1層　10YR3/3 暗褐色土　φ1～5㎝の地山ブロック7%、φ10㎜の炭化物3%、粘性中、しまり中
2層　10YR3/2 黒褐色土　φ1～2㎜の地山ブロック3%、φ5㎜の炭化物1%、粘性中、しまり中
3層　10YR3/4 暗褐色土　φ1㎝の地山ブロック15%、φ5～10㎜の炭化物2%、粘性中、しまり中
4層　10YR2/2 黒褐色土　粘性中、しまり中

SP179(G-G')
1層　10YR4/6 褐色土　ローム、炭化物、焼土3%
2層　10YR3/3 暗褐色土　ローム、炭化物、焼土1%
3層　10YR3/4 暗褐色土　ローム、炭化物1%
4層　10YR2/3 黒褐色土　焼土1%
5層　10YR2/2 黒褐色土　ローム5%
6層　10YR4/6 褐色土　ローム質土、上面はアタリか？

SP561(H-H')
1層　10YR3/4 暗褐色土　φ1～2㎝の地山ブロック5%、φ1㎜炭化物1%、粘性中、しまり中
2層　10YR3/3 暗褐色土　φ5～10㎜の地山粒3%、φ1㎜炭化物2%、粘性中、しまり中
3層　10YR2/3 黒褐色土　φ2㎝の地山ブロック2%、φ1㎜炭化物1%、粘性中、しまり中
4層　10YR3/4 暗褐色土　粘性中、しまり中

SP549(I-I')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR2/1黒色土粒3%、φ1～10㎜炭粒1%混合
2層　10YR3/3 暗褐色土　φ1～15㎜炭粒3%、φ1～5㎜焼土粒1%混合
3層　10YR5/4 にぶい黄褐色土　10YR7/4にぶい黄橙ローム破砕塊混合、φ1～5㎜炭粒1%混合
4層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR5/6黄褐ローム粒2%混合
5層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR7/4にぶい黄橙ローム破砕塊3%混合、φ1～5㎜炭粒1%混合
6層　10YR3/3 暗褐色土　10YR5/6黄褐ローム粒1%混合
7層　10YR5/6 黄褐色ローム質土　10YR2/1黒色土粒3%混合

SB3

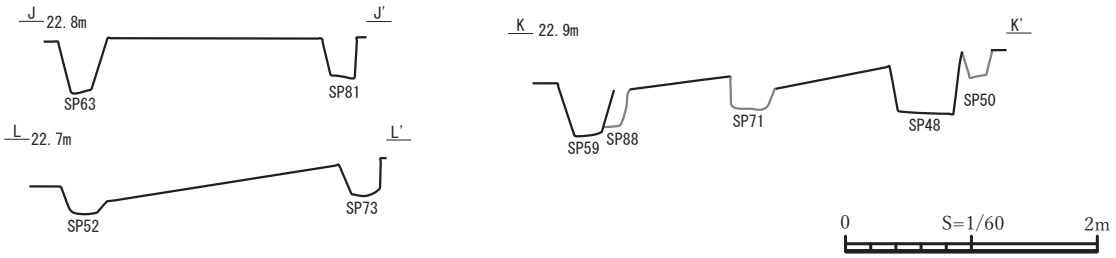
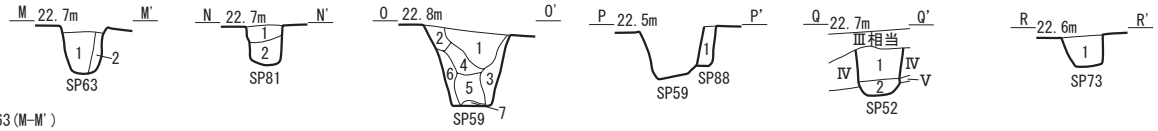


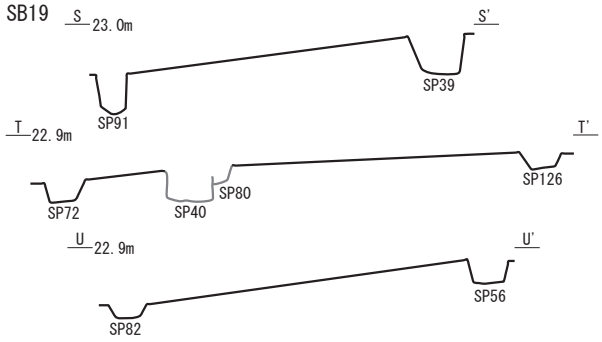
図39　第２・３・19・23・24号掘立柱建物跡(２)

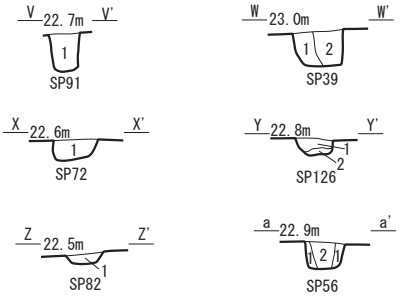


SP63(M-M')
1層　10YR4/4 褐色土　φ1～5㎜焼土粒1%、φ1～2㎜炭化物1%
2層　10YR4/6 褐色土　ローム質土
SP81(N-N')
1層　10YR3/3 暗褐色土　粘性中、しまり中
2層　10YR3/4 暗褐色土　φ2～5cmの地山ブロック15%含む。粘性中、しまり中
SP59(O-O')
1層　10YR3/3 暗褐色土
2層　10YR2/3 黒褐色土　φ1～5㎜炭化物・　ローム粒1%
3層　10YR3/4 暗褐色土　ロームとの混土層、φ1～10㎜ロームブロック5%、掘方埋土か
4層　10YR3/4 暗褐色土　φ1～2㎜炭化物1%、しまりややあり
5層　10YR3/4 暗褐色土　φ1～5㎜ロームブロック2%
6層　10YR3/4 暗褐色土　ロームとの混土層、φ1～10㎜ロームブロック5%、掘方埋土か
7層　10YR3/4 暗褐色土　褐色ローム質土(10YR4/6)との混土層、しまり中、アタリか

SP88(P-P')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　φ1～5㎜炭化物1%、しまりややあり
SP52(Q-Q')
1層　10YR3/3 暗褐色土　φ1cmの地山ブロック5%含む
2層　10YR2/2 黒褐色土　φ1～2cmの地山ブロック15%含む
SP73(R-R')
1層　10YR3/3 暗褐色土　φ5～10㎜の地山粒7%含む。φ5㎜の炭化物1%含む
　　粘性中、しまり中

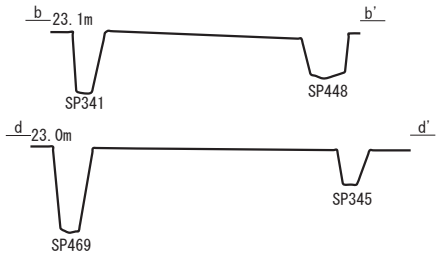
SB19





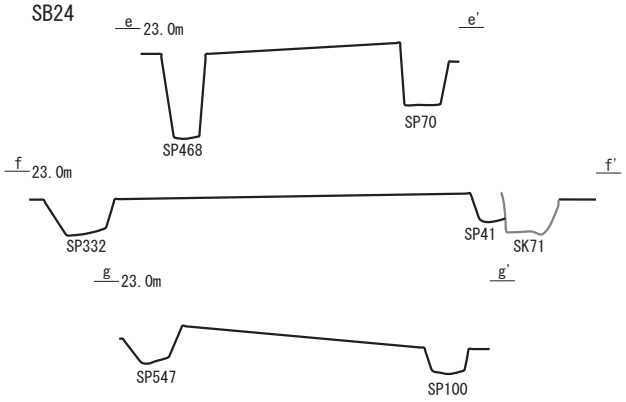
SP91(V-V')
1層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、炭化物粒(φ0.1㎜)1%、
　　ロームブロック(φ10㎜)1%含む
SP39(W-W')
1層　10YR3/4 暗褐色土　φ1～5㎜炭化物1%含む
2層　10YR3/3 暗褐色土　φ1～2㎜ロームブロック3%、φ1～5㎜炭化物1%含む
SP72(X-X')
1層　10YR3/3 暗褐色土　φ5～10㎜の地山粒7%、φ5㎜の炭化物1%、粘性中、しまり中
SP126(Y-Y')
1層　10YR3/3 暗褐色土　φ2㎜の地山粒3%。粘性中、しまり中
2層　10YR3/3 暗褐色土　粘性中、しまり中
SP82(Z-Z')
1層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、ロームブロック(φ3～5㎜)を3%、炭化物粒（φ0.1㎜）を8%含む
SP56(a-a')
1層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、ロームブロック(φ20㎜)を含む
2層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、炭化物粒（φ2～3㎜）を8%含む。柱痕

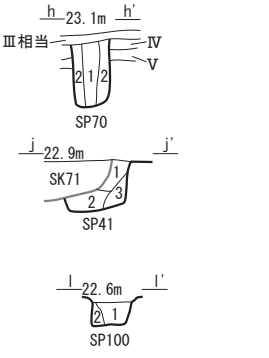
SB23



SP7(c-c')
1層　10YR3/4 暗褐色土　φ1～5㎜炭化物1%
2層　10YR3/4 暗褐色土　φ1～10㎜ロームブロック2%、φ1～5㎜炭化物1%

SB24





SP70(h-h')
1層　10YR3/4 暗褐色土　φ1㎜の炭化物粒1%含む。粘性中、しまり中
2層　10YR5/6 黄褐色土　粘性中、しまり中
SP332(i-i')
1層　10YR4/4 褐色土　ローム質土、φ1～10㎜炭化物2%
2層　10YR4/6 褐色土　ローム質土、φ1～5㎜炭化物1%
SP41(j-j')
1層　10YR3/4 暗褐色土　φ1～5cmの地山ブロック20%含む
2層　10YR3/3 暗褐色土　φ2～5cmの地山ブロック15%含む
3層　10YR5/6 黄褐色土
SP547(k-k')
1層　10YR4/4 褐色土　φ1～5㎜炭化物1%
2層　10YR5/8 黄褐色土　粘性中
SP100(l-l')
1層　10YR4/4 褐色土　φ1～10㎜ロームブロック1%
2層　10YR3/4 暗褐色土　φ1～10㎜ロームブロック2%、φ1～5㎜炭化物1%

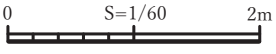
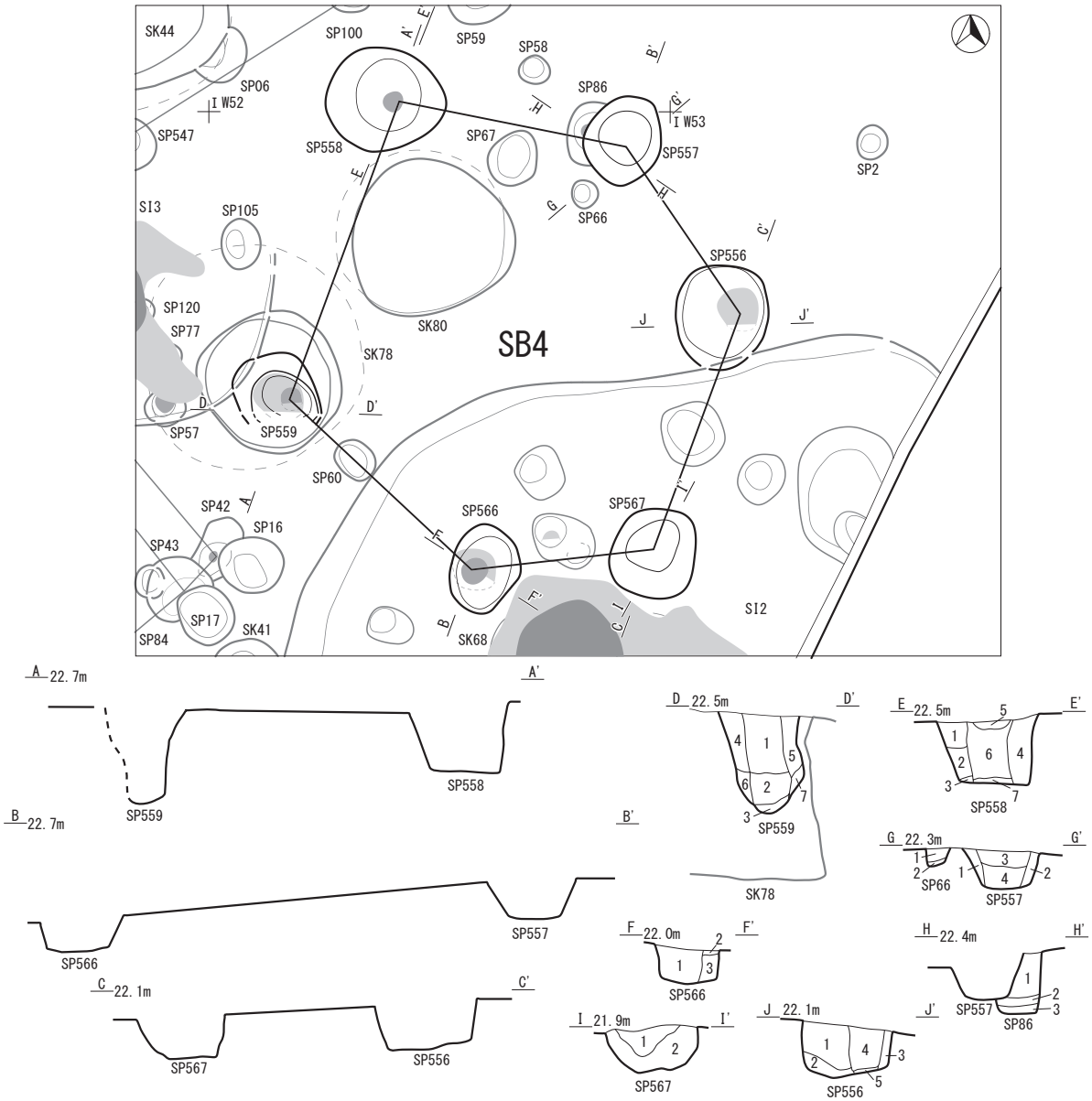


図40　第２・３・19・23・24号掘立柱建物跡(３)



SP559(D-D')
1層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ3～5㎜)を5%、Ⅶ層ブロック(φ5～8㎜)を8%、炭化物粒(φ1㎜)を3%含む、柱痕
2層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ3～5㎜)を8～10%含む、柱痕
3層　10YR6/8 明黄褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック(φ2～3㎜)を5%、炭化物粒(φ1㎜)を5%含む、柱痕
4層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ1～2㎜)を5%、Ⅶ層ブロック(φ5～8㎜)を10%、炭化物粒(φ1～2㎜)を2%含む、掘方埋土
5層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ3～5㎜)を10%、Ⅶ層ブロック(φ5～8㎜)を1%含む、掘方埋土
6層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ1～2㎜)を8%、Ⅶ層ブロック(φ5～8㎜)を3%含む、掘方埋土
7層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、掘方埋土

SP558(E-E')
1層　10YR3/3 暗褐色土　φ1～10㎜炭化物・ロームブロック2%、掘方埋土
2層　10YR3/3 暗褐色土　φ1～5㎜ローム粒・焼土粒1%、掘方埋土
3層　10YR4/6 褐色土　　ローム質土主体、崩落土か
4層　10YR4/6 褐色土　　ローム質土主体、φ1～10㎜ロームブロック2%、掘方埋土か
5層　10YR3/3 暗褐色土　土壌化層
6層　10YR3/4 暗褐色土　φ1～30㎜焼土1%、φ1～10㎜砂礫1%・ロームブロック5%、φ1～5㎜炭化物1%、柱痕
7層　10YR2/3 黒褐色土　φ1～10㎜ロームブロック5%、しまり中(硬化面)

SP566(F-F')
1層　10YR3/3 暗褐色土　φ1～10㎜ロームブロック10%、炭化物・焼土粒・砂礫ブロック1%、柱痕
2層　10YR3/3 暗褐色土　φ1～10㎜ロームブロック1%、φ1～2㎜炭化物1%、掘方埋土
3層　10YR4/6 褐色土　　φ1～10㎜ロームブロック20%、炭化物・焼土粒・砂礫ブロック1%、掘方埋土か

SP557(G-G'・H-H')
1層　10YR3/4 暗褐色土　　ロームとの混土層、φ1～5㎜炭化物1%、掘方埋土
2層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ロームとの混土層、φ1～5㎜炭化物1%、φ1～10㎜ローム1%、掘方埋土
3層　10YR3/4 暗褐色土　　φ1～10㎜炭化物・焼土粒1%、ロームブロック2%、柱痕
4層　10YR3/4 暗褐色土　　φ1～30㎜ロームブロック5%、しまりややあり、柱痕

SP567(I-I')
1層　10YR4/4 褐色土　φ1～10㎜炭化物・ロームブロック1%
2層　10YR4/4 褐色土　φ1～20㎜ロームブロック20%、φ1～5㎜炭化物1%、掘方埋土か

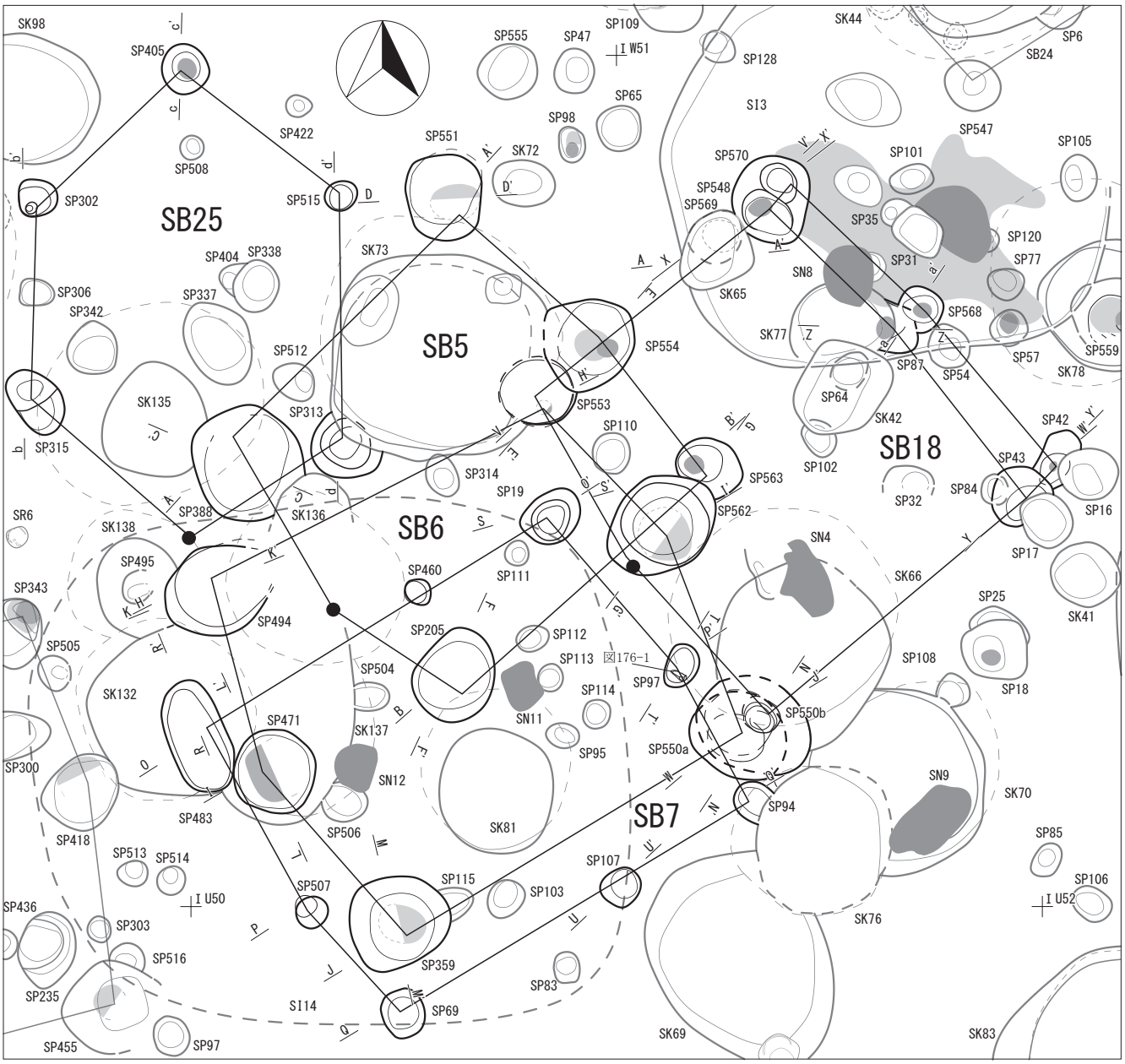
SP556(J-J')
1層　10YR3/4 暗褐色土　φ1～30㎜ロームブロック10%(下部に多い)、φ1～5㎜炭化物2%、掘方埋土
2層　10YR2/3 黒褐色土　φ1～5㎜ロームブロック2%、掘方埋土
3層　10YR3/4 暗褐色土　φ1～30㎜ロームブロック10%、φ1～5㎜炭化物2%、掘方埋土か
4層　10YR3/3 暗褐色土　φ1～5㎜炭化物1%、φ1～10㎜ロームブロック1%、柱痕
5層　10YR3/3 暗褐色土　φ1～20㎜ロームブロック10%、しまり中(硬化)

SP66(G-G')
1層　10YR2/3 黒褐色土　φ1～2㎜炭化物1%、φ1～5㎜ローム粒2%
2層　10YR5/6 黄褐色土　しまり中

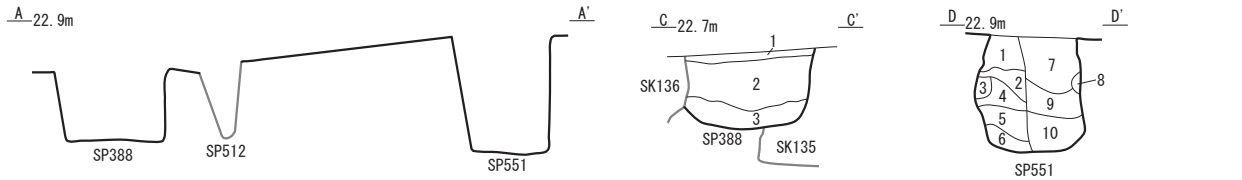
SP86(H-H')
1層　10YR2/3 黒褐色土　ローム混じり、φ1～20㎜ロームブロック1%
2層　10YR4/4 褐色土
3層　10YR2/2 黒褐色土　しまりなし、下部にアタリ

0　S=1/60　2m

図41　第４号掘立柱建物跡



SB5

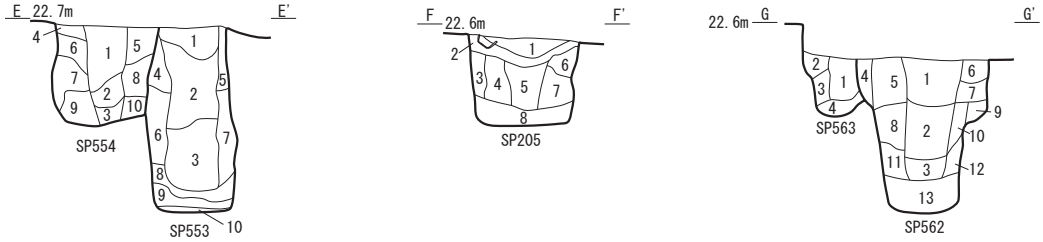


SP388(C-C')
1層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　10YR7/6明黄褐色土5%、炭化物(φ2㎜)1%
2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　炭化物(φ2～10㎜)5%
3層 10YR4/1 褐灰色土　10YR5/3にぶい黄褐色土10%、炭化物(φ2～10㎜)1%

SP551(D-D')
1層 10YR4/4 褐色粘土質シルト　しまり中強、粘性中強、Ⅴ層ブロック(φ2～3㎜)を3%、炭化物粒(φ2～3㎜)を5%含む、掘方埋土
2層 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ2～3㎜)を8%含む、掘方埋土
3層 10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、掘方埋土
4層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック(φ3～5㎜)を5%含む、掘方埋土
5層 10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロックを8%含む
6層 10YR5/8 黄褐色シルト質粘土　しまり中弱、粘性中弱、掘方埋土
7層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、炭化物粒(φ2～3㎜)を5%焼土粒(φ1㎜)を1%、土器を含む。柱痕
8層 10YR5/8 黄褐色シルト質粘土　しまり中強、粘性中強、崩落土
9層 10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ2㎜)を8%焼土粒(φ1㎜)を3%、炭化物粒(φ1㎜)を2%含む。柱痕
10層 10YR5/8 黄褐色シルト質粘土　しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(不整形楕円φ150㎜)を8%含む。柱痕

0　S=1/60　2m

図42　第５・６・７・18・25号掘立柱建物跡(１)



SP553(E-E')

1層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅴ層・Ⅶ層ブロック・炭化物粒・焼土粒(φ1～2㎜)1%、柱痕
2層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅴ層・Ⅶ層ブロック(φ1～2㎜)3～5%、炭化物粒(φ1㎜)3%、柱痕
3層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ～2㎜)5%、柱痕
4層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック(φ5～15㎜)1% Ⅴ層ブロック(φ1～2㎜)3%、炭粒(φ2～3㎜)1%、掘方埋土
5層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック3%、掘方埋土
6層	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、掘方埋土
7層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅴ・Ⅶ層ブロック(φ1～2㎜)3～5%、掘方埋土
8層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック(φ～5㎜)8%、掘方埋土
9層	2.5Y5/4 黄褐色極細粒砂質シルト	しまり中、粘性中、基質はⅦ層由来で、Ⅴ層ブロック10%、掘方埋土
10層	10YR4/6 褐色シルト質粘土	しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック30%、掘方埋土

SP554(E-E')

1層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、下部に礫(φ1～2㎜)5%、柱痕
2層	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	しまり中弱、粘性中弱、下部に炭化物粒(φ1～2㎜)10%、柱痕
3層	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	しまり中弱、粘性中弱、Ⅶ層ブロック(φ1㎜)20～30%、柱痕
4層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中強、粘性中強、炭化物粒(φ2～3㎜)1%、掘方埋土
5層	10YR4/4 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロックと暗褐色粘土ブロック(φ10～20㎜)入れ子状、掘方埋土
6層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中強、粘性強、炭化物粒(φ3㎜)3%、掘方埋土
7層	10YR5/6 黄褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、炭化物粒(φ1㎜)5%、掘方埋土
8層	10YR4/4 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ3～5㎜)10%、Ⅶ層ブロック(φ2～3㎜)2%、掘方埋土
9層	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、3層由来のブロック(φ1～2㎜)10～15%、掘方埋土
10層	10YR3/3 暗褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、炭化物粒(φ10㎜)数個、掘方埋土

SP205(F-F')

1層	10YR3/4 暗褐色土	φ1～20㎜砂礫ブロック1%、φ1～30㎜焼土ブロック2%、φ1～5㎜炭化物1%
2層	10YR3/4 暗褐色土	φ1～5㎜炭化物1%
3層	10YR2/3 黒褐色土	ロームとの混土層
4層	10YR2/3 黒褐色土	ロームとの混土層
5層	10YR3/3 暗褐色土	φ1～15㎜ロームブロック1%、φ1～10㎜炭化物1%
6層	10YR3/4 暗褐色土	ロームとの混土層、φ1～10㎜炭化物1%、φ1～20㎜ロームブロック5%
7層	10YR2/3 黒褐色土	ロームとの混土層
8層	10YR3/4 暗褐色土	φ1～10㎜ロームブロック2%、φ1～5㎜炭化物1%、しまり中(硬化)

SP562(G-G')

1層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ1～3㎜)5%、Ⅶ層ブロック(φ3～5㎜)8%、柱痕
2層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ3～5㎜)5%、炭化物粒(φ1～3㎜)3%、柱痕
3層	10YR4/4 褐色シルト	しまり中弱、粘性中弱、Ⅶ層ブロック(φ10～15㎜)10%、柱痕
4層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ3～5㎜)3%、Ⅶ層ブロック(φ5～8㎜)5%、掘方埋土
5層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック(φ8～20㎜)10%掘方埋土
6層	10YR3/2 黒褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ1～3㎜)8%掘方埋土
7層	10YR4/4 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ1～3㎜)10%掘方埋土
8層	10YR5/6 黄褐色シルト	しまり中弱、粘性中弱、Ⅶ層ブロック(φ10～15㎜)15%、掘方埋土
9層	10YR5/6 黄褐色粘土質シルト	崩落土か
10層	10YR4/4 褐色粘土質シルト	しまり中弱、粘性中弱、Ⅴ層ブロック(φ3～5㎜)15%、掘方埋土
11層	10YR5/6 黄褐色シルト	しまり中弱、粘性中弱、Ⅶ層ブロック(φ10～15㎜)15%、掘方埋土
12層	10YR5/6 黄褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ1～3㎜)10%、Ⅶ層ブロック(φ3～5㎜)8%、掘方埋土
13層	10YR4/6 褐色シルト	しまり中弱、粘性中弱、Ⅶ層ブロック(φ10～30㎜)不整形に30%

SP563(G-G')

1層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ5～8㎜)3%、柱痕
2層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、炭化物粒(φ2～3㎜)を2%、Ⅴ層ブロック(φ2～3㎜)を3%、掘方埋土
3層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、掘方埋土
4層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ3～5㎜)8%

SB6

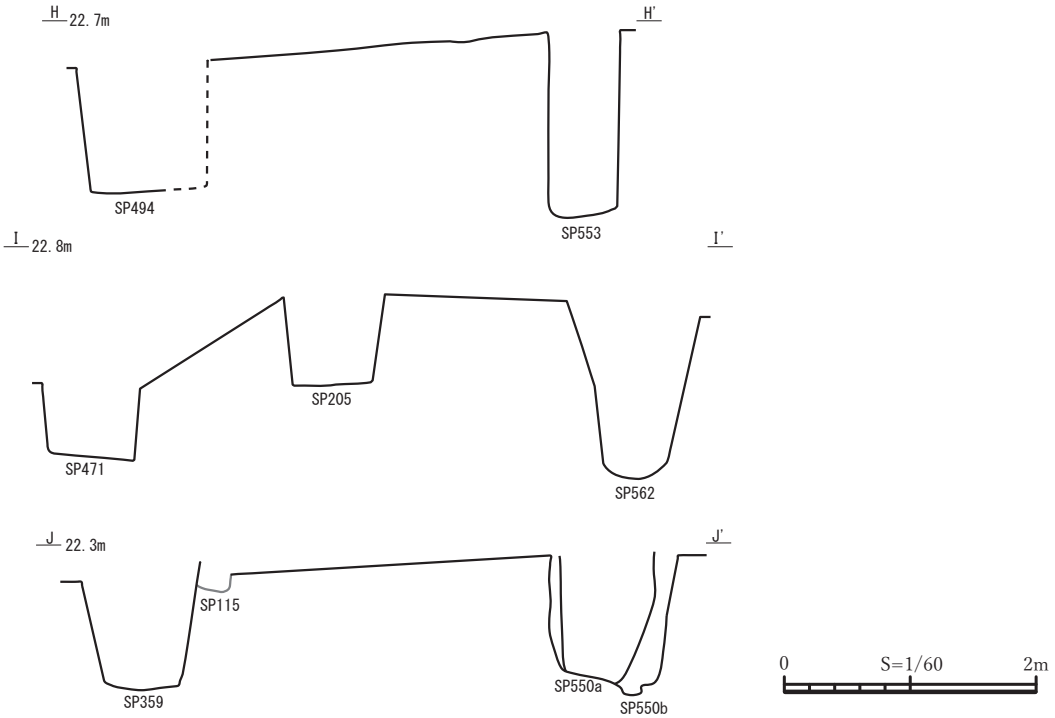
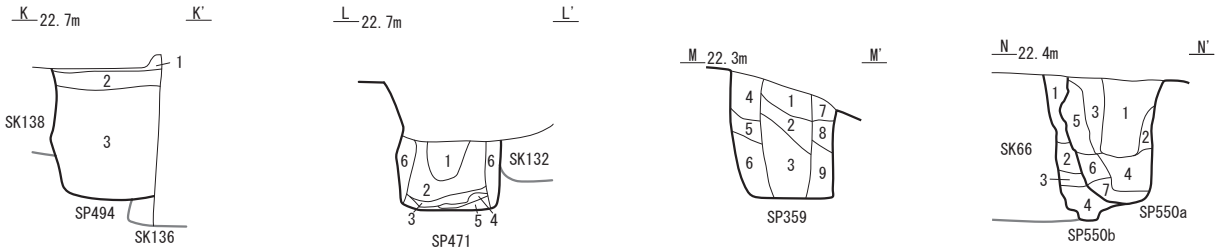
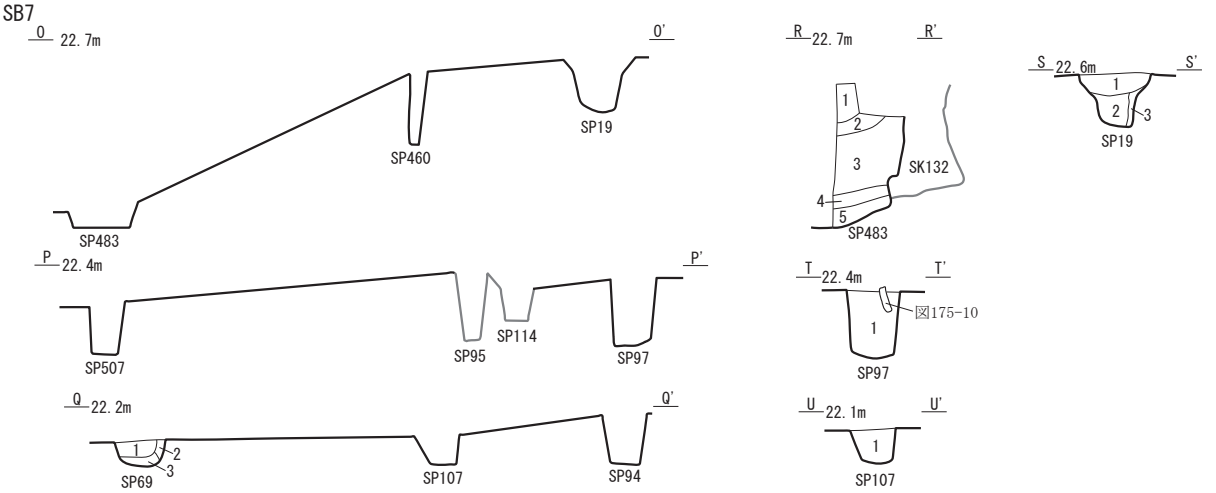


図43　第５・６・７・18・25号掘立柱建物跡(２)



SP494(K-K')
1層　10YR5/2 灰黄褐色土　　ローム(φ10～30㎜)1%、焼土(φ2～5㎜)1%、炭化物(φ2～10㎜)2%(固い)
2層　10YR4/2 灰黄褐色土　　砂塊(φ10～20㎜)2%、ローム(φ5～10㎜)1%、炭化物(φ5㎜)2%(固い)
3層　10YR5/4 にぶい黄褐色土 砂塊(φ10～50㎜)5%、ローム(φ10～20㎜)5%、炭化物(φ5～10㎜)2%
SP471(L-L')
1層　10YR3/2 黒褐色土　ローム(φ5㎜)1%、柱痕
2層　10YR4/2 灰黄褐色土 ローム(φ20㎜)1%、砂塊(φ5～30㎜)1%、柱痕
3層　10YR4/1 褐灰色土　砂塊(φ5～15㎜)2%、炭化物(φ2～5㎜)1%(固い)、柱痕
4層　10YR7/1 灰白色砂　(固い)、柱痕
5層　10YR5/2 灰黄褐色土 ローム(φ5～10㎜)2%、砂塊(φ5㎜)2%、炭化物(φ2㎜)1%(固い)、柱痕
6層　10YR3/3 暗褐色土　砂塊(φ5～30㎜)2%、ローム(φ20㎜)1%、炭化物(φ2㎜)1%、掘方埋土
SP359(M-M')
1層　10YR5/6 黄褐色粘土質シルト しまり中、粘性中、Ⅶ層由来の不整形ブロック(φ5～20㎜)25%、柱痕
2層　10YR5/6 黄褐色粘土質シルト しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック(φ1～2㎜)3%、柱痕
3層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中弱、粘性中弱、Ⅶ層ブロック(φ3～5㎜)8%、柱痕
4層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中弱、粘性中弱、Ⅴ層ブロック(φ1～3㎜)3%、Ⅶ層ブロック(φ5～50㎜)5%、炭化物粒(φ1～3㎜)5%、掘方埋土
5層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中弱、粘性中弱、Ⅶ層ブロック(φ5～50㎜)1%、炭化物粒(φ1～3㎜)1%、掘方埋土
6層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中弱、粘性中弱、Ⅴ層ブロック(φ1～3㎜)8%、Ⅶ層ブロック(φ1～3㎜)5%、炭化物粒(φ1㎜)1%、掘方埋土
7層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中弱、粘性中弱、Ⅶ層ブロック(φ1～3㎜)1%、炭化物粒(φ1㎜)3%、掘方埋土
8層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中弱、粘性中弱、Ⅴ層ブロック(φ1～3㎜)3%、Ⅶ層ブロック(φ3～5㎜)3%、炭化物粒(φ1㎜)1%、掘方埋土
9層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中弱、粘性中弱、Ⅴ層ブロック(φ1～3㎜)3%、Ⅶ層ブロック(φ3～5㎜)3%、掘方埋土
SP550a(N-N')
1層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック(φ10㎜)8～10%
2層　10YR6/8 明黄褐色シルト質粘土 しまり中弱、粘性中弱、Ⅶ層ブロック(φ2～3㎜)8%
3層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、炭化物粒1%、Ⅶ層ブロック(φ1～2㎜)1%
4層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　　しまり中弱、粘性中、Ⅴ層ブロック2%、Ⅶ層ブロック3%、炭化物粒(1～3㎜の長方形)
5層　10YR5/8 黄褐色粘土質シルト　しまり中強、粘性中強、Ⅴ層ブロック(φ2～3㎜)3%、Ⅶ層ブロック(φ2～3㎜)5%
6層　10YR4/6 褐色シルト質粘土　　しまり中弱、粘性中弱、Ⅶ層ブロック(φ2～3㎜)5%
7層　10YR4/6 褐色シルト質粘土　　しまり中弱、粘性中弱、Ⅴ層ブロック(φ2～3㎜)3%、Ⅶ層ブロック(φ2～3㎜)5%、炭化物粒(φ2～3㎜)1%
SP550b(N-N')
1層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ1㎜)3%、Ⅶ層ブロック(φ2～3㎜)1%、炭化物粒(φ2～3㎜)1%
2層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック(φ2～3㎜)10%
3層　10YR3/4 暗褐色極細粒砂質シルト しまり弱、粘性弱、Ⅶ層ブロック(φ3～5㎜)30%
4層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性弱、Ⅴ層ブロック(φ10㎜)20%、Ⅶ層ブロック下部に30%

SB7

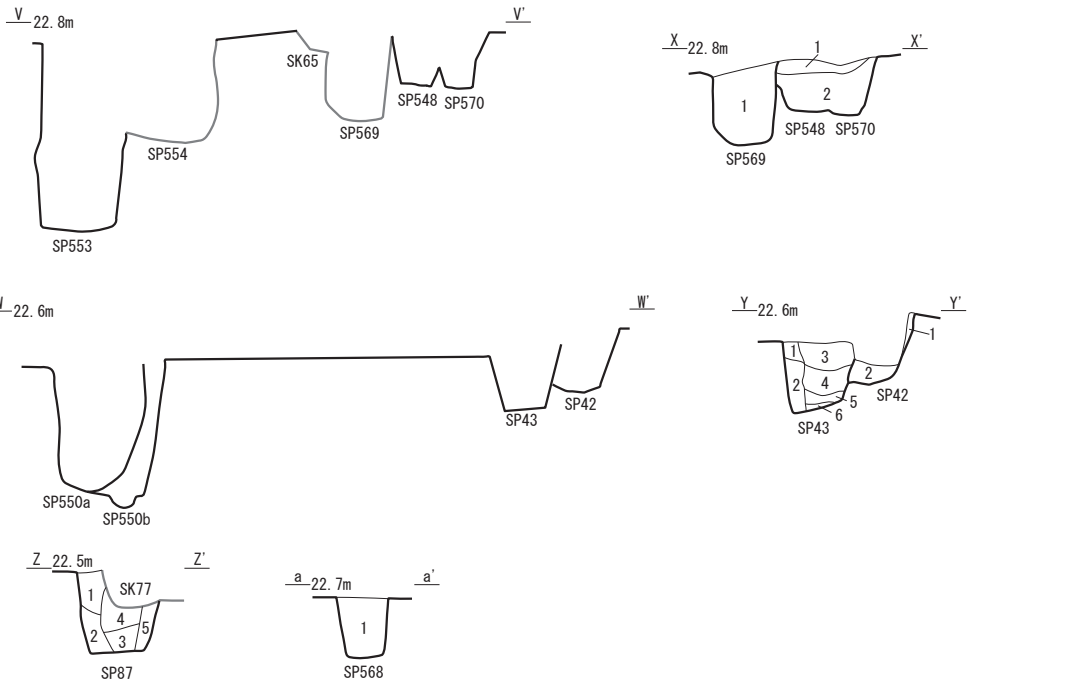


SP69(Q-Q')
1層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト しまり中、粘性中、炭化物粒(φ3～5㎜)を3%、Ⅴ・Ⅶ層ブロック(φ1～3㎜)1%
2層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ1～3㎜)を帯状に含む
3層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ1～3㎜)を帯状に含む
SP483(R-R')
1層　10YR6/2 灰黄褐色土　ローム(φ2～5㎜)2%、焼土(φ10㎜)1%、炭化物(φ2～5㎜)1%
2層　10YR5/1 褐灰色土　　炭化物(φ2～5㎜)3%
3層　10YR5/2 灰黄褐色土　ローム(φ5～10㎜)5%、砂塊(φ10㎜)1%、炭化物(φ2～5㎜)5%
4層　10YR3/2 黒褐色土　　焼土(φ5㎜)2%、炭化物(φ2㎜)1%
5層　10YR7/6 明黄褐色土　砂塊(φ10㎜)3%
SP19(S-S')
1層　10YR4/4 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中強、炭化物粒・ロームブロック(φ1㎜)2%
2層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、ロームブロック1%、柱痕か
3層　10YR5/6 黄褐色粘土質シルト しまり中強、粘性中、下部に2層のブロック(φ2㎜)20%
SP97(T-T')
1層　10YR4/6 褐色粘土質シルト しまり中、粘性中、炭化物粒(φ1㎜)5%
SP107(U-U')
1層　10YR5/6 黄褐色粘土質シルト しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ20～30㎜)10%

0　S=1/60　2m

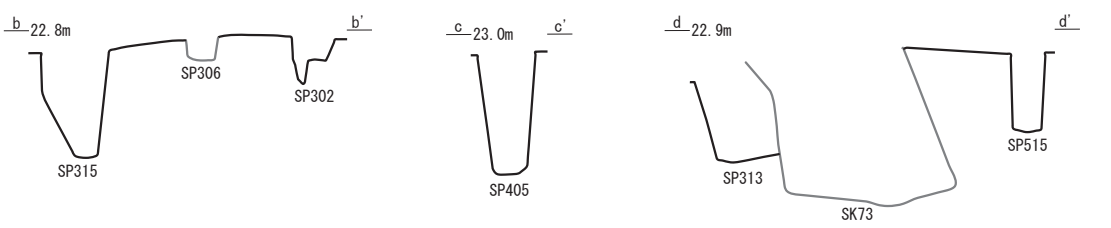
図44　第５・６・７・18・25号掘立柱建物跡(３)

SB18



SP569(X-X')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　φ1～5㎜炭化物・ロームブロック1%
SP548・570(X-X')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　φ1～5㎜炭化物1%
2層　10YR4/6 褐色土　ローム主体層、φ1～2㎜炭化物1%
SP42(Y-Y')
1層　10YR4/6 褐色シルト質粘土　しまり中、粘性中、V層ブロック(φ1～3㎜)3%、炭化物粒(φ2～3㎜)2%
2層　10YR4/6 褐色シルト質粘土　しまり中弱、粘性中弱
SP43(Y-Y')
1層　10YR4/6 褐色シルト質粘土　しまり中、粘性中、炭化物粒(φ1㎜)3%、掘方埋土
2層　10YR5/6 黄褐色粘土質シルト　しまり中強、粘性中強、掘方埋土
3層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、炭化物粒(φ1㎜)3%、柱痕
4層　10YR5/8 黄褐色シルト質粘土　しまり中、粘性中、柱痕
5層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、暗褐色楕円形ブロック(φ30㎜)、柱痕
6層　10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、柱痕
SP87(Z-Z')
1層　10YR4/4 褐色土　φ1～20㎜ローム・砂礫ブロック1%、φ1～5㎜炭化物1%、掘方埋土
2層　10YR4/6 褐色土　ローム質土主体、φ1～10㎜砂礫・ロームブロック1%、しまりややあり、掘方埋土
3層　10YR4/6 褐色土　ローム質土主体、φ1～10㎜砂礫・ロームブロック1%、柱痕
4層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　φ1～10㎜砂礫・ロームブロック1%、φ1～5㎜炭化物1%、柱痕
5層　10YR4/6 褐色土　φ1～20㎜ロームブロック10%、しまり中、掘方埋土
SP568(a-a')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　φ1～5㎜炭化物・ロームブロック1%

SB25



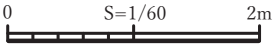
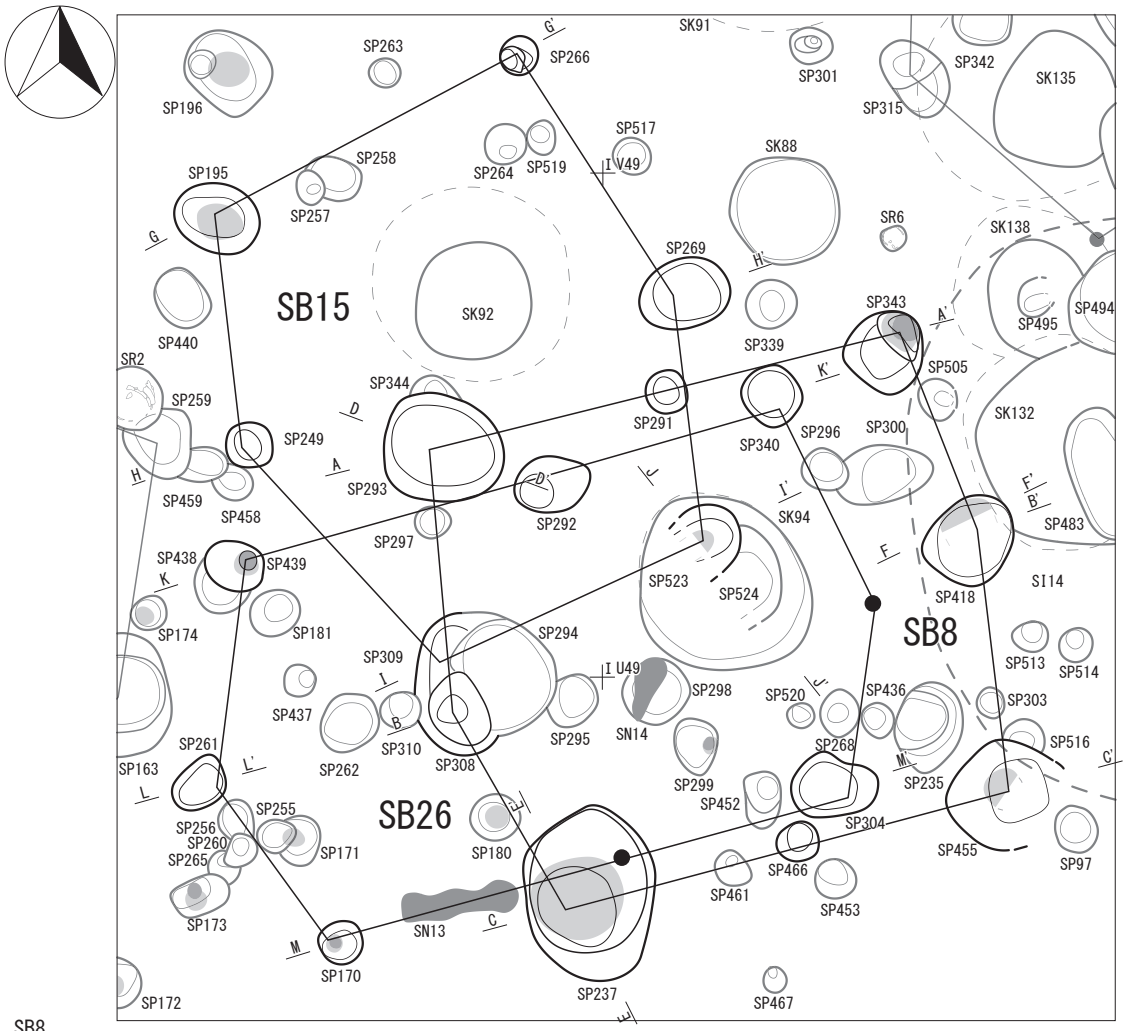
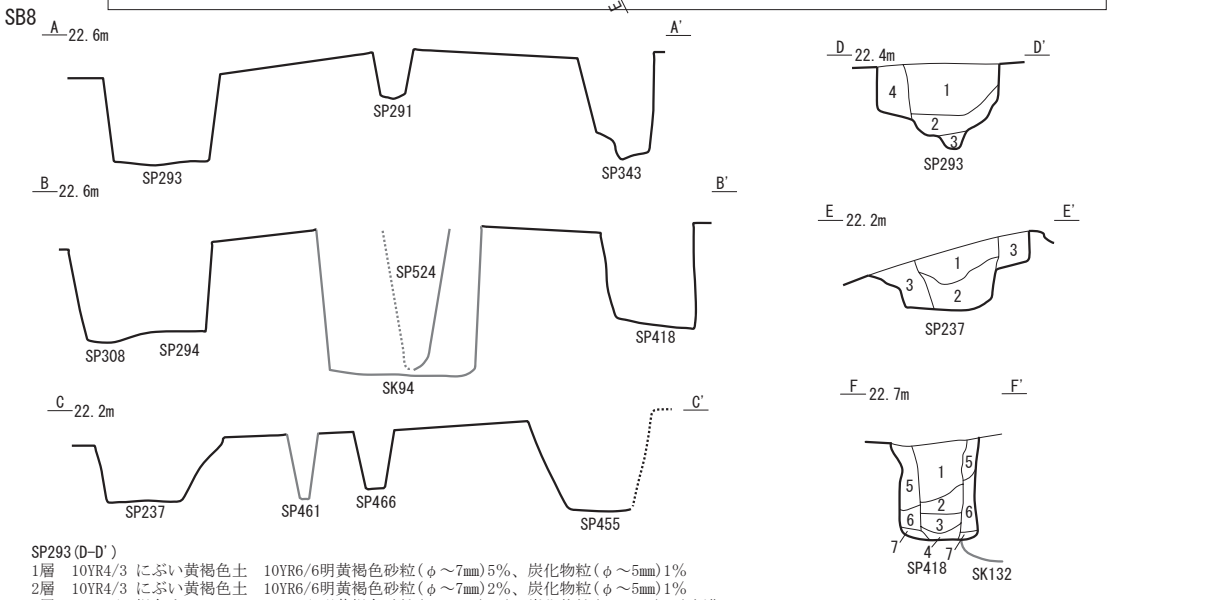


図45　第５・６・７・18・25号掘立柱建物跡(４)





SP293(D-D')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR6/6明黄褐色砂粒(φ～7㎜)5%、炭化物粒(φ～5㎜)1%
2層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR6/6明黄褐色砂粒(φ～7㎜)2%、炭化物粒(φ～5㎜)1%
3層　10YR4/4 褐色土　10YR6/6明黄褐色砂粒(φ～7㎜)1%、炭化物粒(φ～5㎜)1%未満
4層　10YR5/4 にぶい黄褐色土　10YR6/6明黄褐色砂粒(φ～5㎜)3%、炭化物粒(φ～4㎜)1%

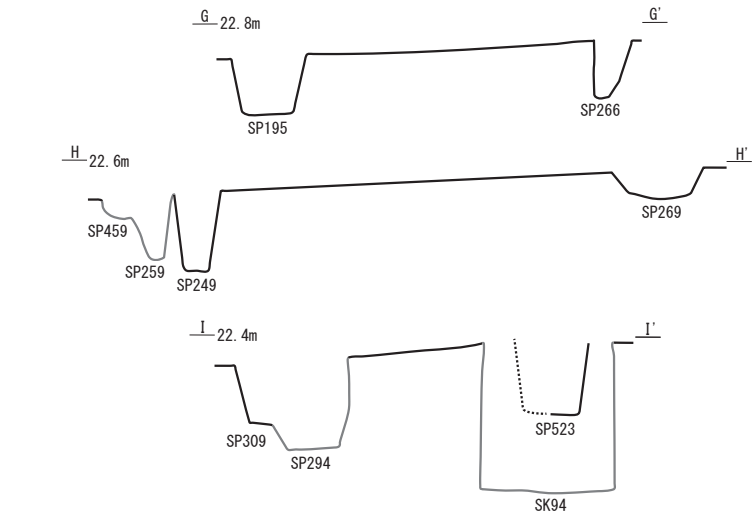
SP237(E-E')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム(φ10～20㎜)2%、砂塊(φ10～30㎜)1%、炭化物(φ2～5㎜)1%
2層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム(φ10～40㎜)5%、砂塊(φ10㎜)1%、炭化物(φ2～5㎜)1%
3層　10YR4/4 褐色土　ローム(φ10～40㎜)7%、炭化物(φ2㎜)1%

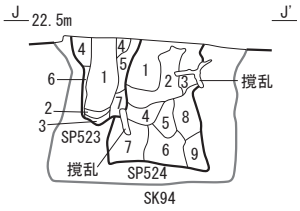
SP418(F-F')
1層　10YR4/2 灰黄褐色土　砂塊(φ10～20㎜)1%、炭化物(φ2～5㎜)1%、柱痕
2層　10YR6/3 にぶい黄橙色土　ローム(φ10㎜)2%、炭化物(φ2～10㎜)1%、柱痕
3層　10YR3/2 黒褐色土　ローム(φ10㎜)1%、炭化物(φ5㎜)1%、柱痕
4層　10YR7/6 明黄褐色土　10YR4/2灰黄褐色土、砂塊(φ20㎜)1%(固い)、柱痕
5層　10YR4/2 灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色土、砂塊(φ20㎜)1%、炭化物(φ5～10㎜)1%、掘方埋土
6層　10YR7/4 にぶい黄橙色土　10YR6/3にぶい黄橙色土30%、砂塊(φ10～20㎜)2%、炭化物(φ2～5㎜)1%、掘方埋土
7層　10YR5/2 灰黄褐色土　炭化物(φ2～5㎜)1%、掘方埋土

0　S=1/60　2m

図46　第8・15・26号掘立柱建物跡(1)

SB15





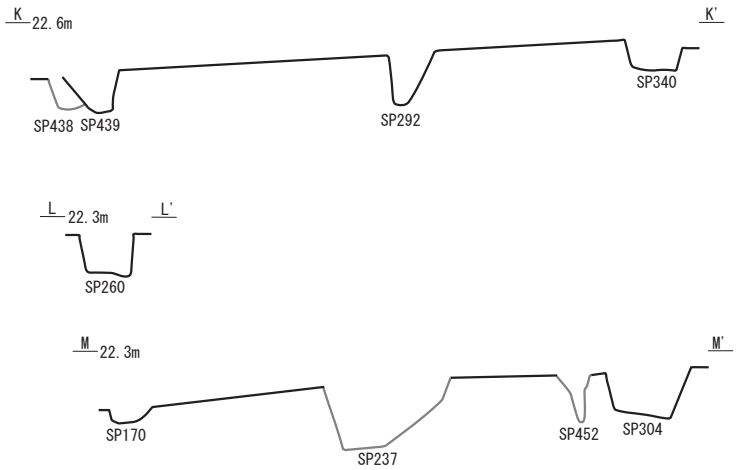
SP523(J–J')

1層	10YR4/2 灰黄褐色土	ローム(φ2～10㎜)2%、炭化物(φ2～5㎜)2%、柱痕
2層	10YR5/1 褐灰色土	10YR7/4にぶい黄橙色土5%(固く粘性あり)、柱痕
3層	10YR7/4 にぶい黄橙色土	10YR6/1褐灰色土(固く粘性あり)、柱痕
4層	10YR5/3 にぶい黄褐色土	ローム(φ5㎜)2%、炭化物(φ2㎜)1%、掘方埋土
5層	10YR3/2 黒褐色土	ローム(φ2～20㎜)5%、炭化物(φ2㎜)5%、掘方埋土
6層	10YR6/4 にぶい黄橙色土	10YR5/3にぶい黄褐色土30%、掘方埋土
7層	10YR5/2 灰黄褐色土	10YR5/3にぶい黄褐色土10%、炭化物(φ1㎜)1%、掘方埋土

SP524(J–J')

1層	10YR5/3 にぶい黄褐色土	10YR7/4にぶい黄橙色土10%、ローム(φ2～5㎜)2%、砂塊(φ5㎜)1%、炭化物(φ2～5㎜)2%
2層	10YR3/1 黒褐色土	ローム(φ2～5㎜)5%、砂塊(φ5㎜)1%、炭化物(φ2～5㎜)2%
3層	10YR5/3 にぶい黄褐色土	ローム(φ2～5㎜)2%、砂塊(φ5㎜)1%
4層	10YR5/4 にぶい黄褐色土	10YR3/2黒褐色土15%、ローム(φ2～5㎜)2%、炭化物(φ2㎜)1%
5層	10YR4/3 にぶい黄褐色土	10YR6/4にぶい黄橙色土10%、炭化物(φ2㎜)1%
6層	10YR6/3 にぶい黄橙色土	10YR7/2にぶい黄橙色粘土10%
7層	10YR8/6 黄橙色土	10YR4/1褐灰色土が筋状に10%、炭化物(φ2～5㎜)1%
8層	10YR5/3 にぶい黄褐色土	10YR7/6明黄褐色土5%
9層	10YR7/6 明黄褐色土	

SB26



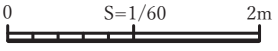
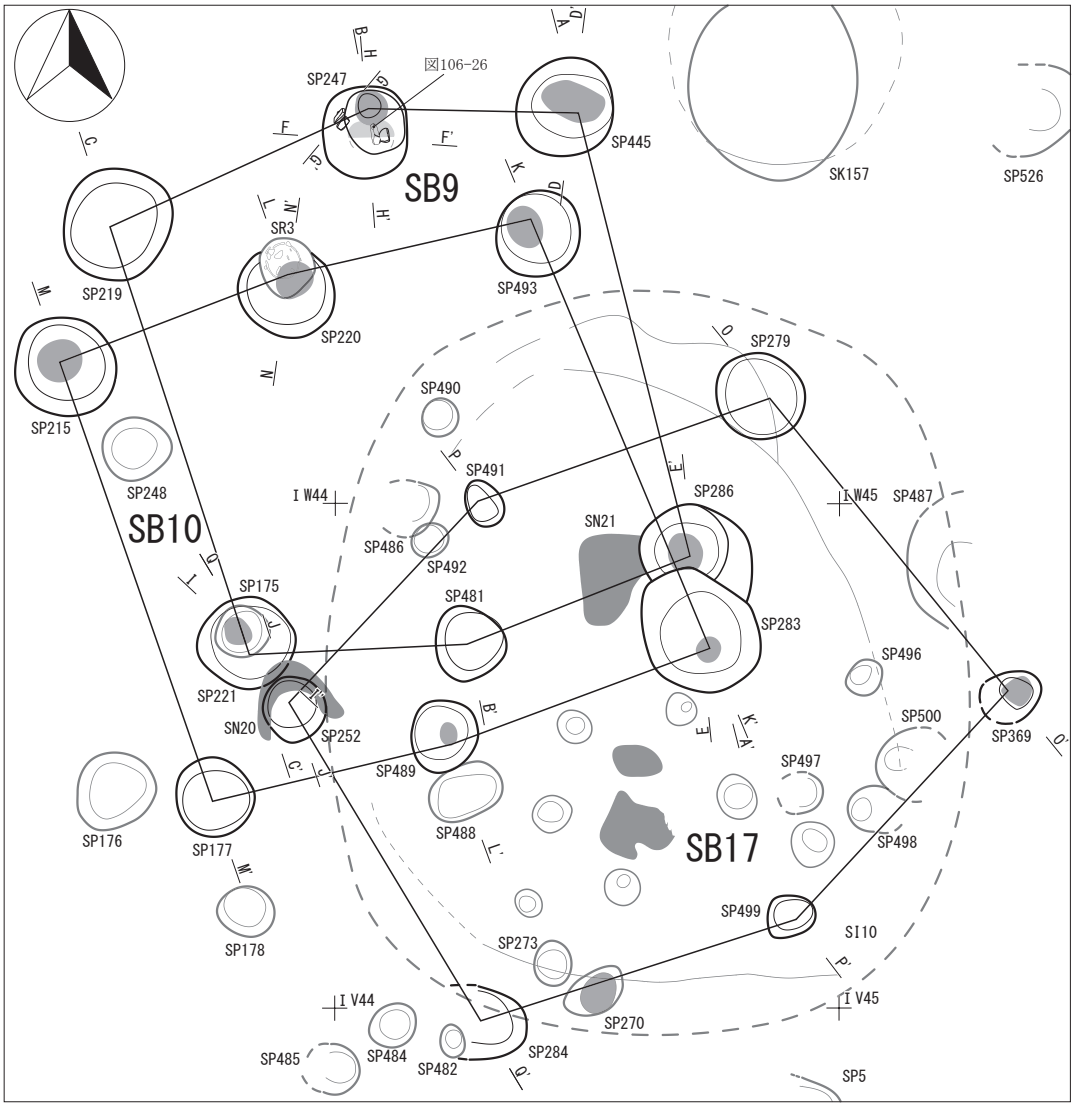
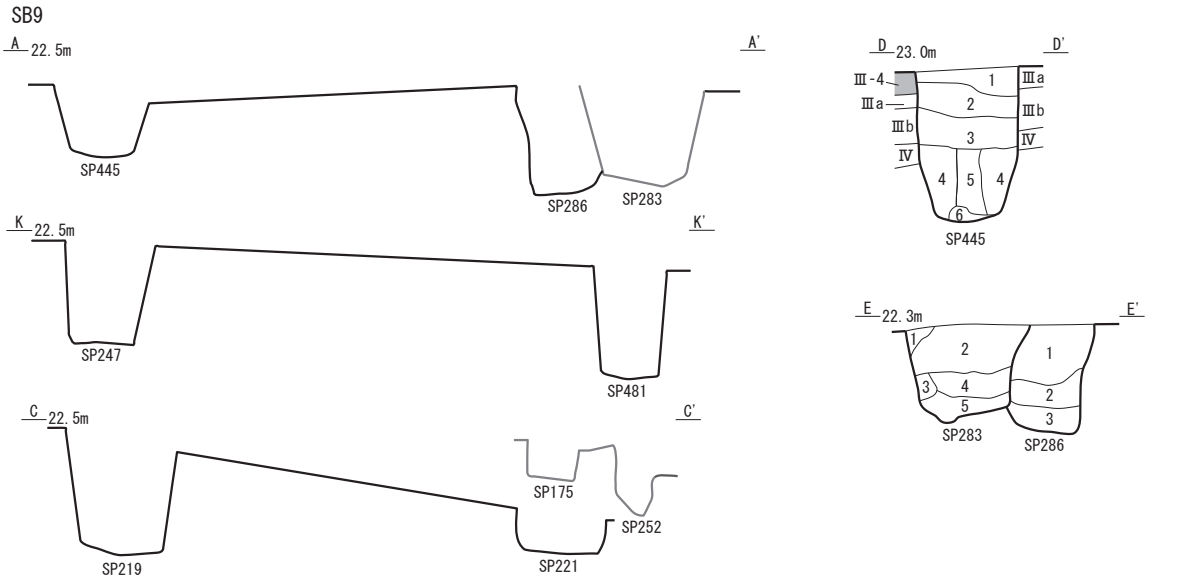


図47　第８・15・26号掘立柱建物跡(２)





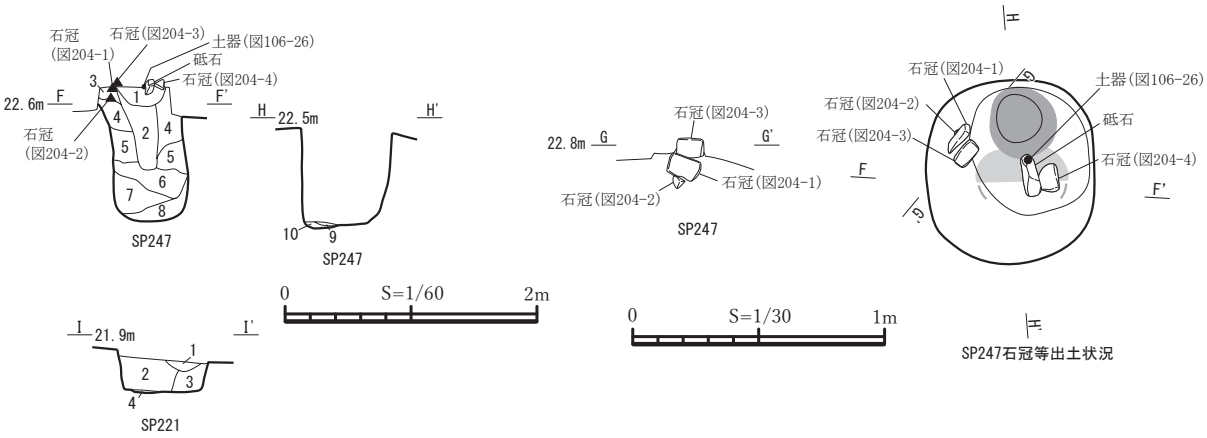
SP445 (D-D')
1層　10YR2/2 黒褐色土 Ⅱ層相当
2層　10YR2/3 黒褐色土 炭化物、ローム3%
3層　10YR2/2 黒褐色土 ローム1%、炭化物1%
4層　10YR4/6 褐色土　ロームとの混合土、掘方埋土
5層　10YR2/3 黒褐色土 炭化物3%、ローム1%
6層　10YR4/4 褐色土　ロームとの混合土、柱アタリ

SP283 (E-E')
1層　10YR2/1 黒色土　ローム1%
2層　10YR3/4 暗褐色土 ローム、炭化物3%
3層　10YR3/3 暗褐色土 炭化物1%
4層　10YR5/6 黄褐色土 ロームとの混合土
5層　10YR3/2 黒褐色土 ローム1%

SP286 (E-E')
1層　10YR3/3 暗褐色土 ローム、炭化物1%
2層　10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック(φ10cm)、炭化物1%
3層　10YR3/2 黒褐色土 炭化物1%、ローム5%

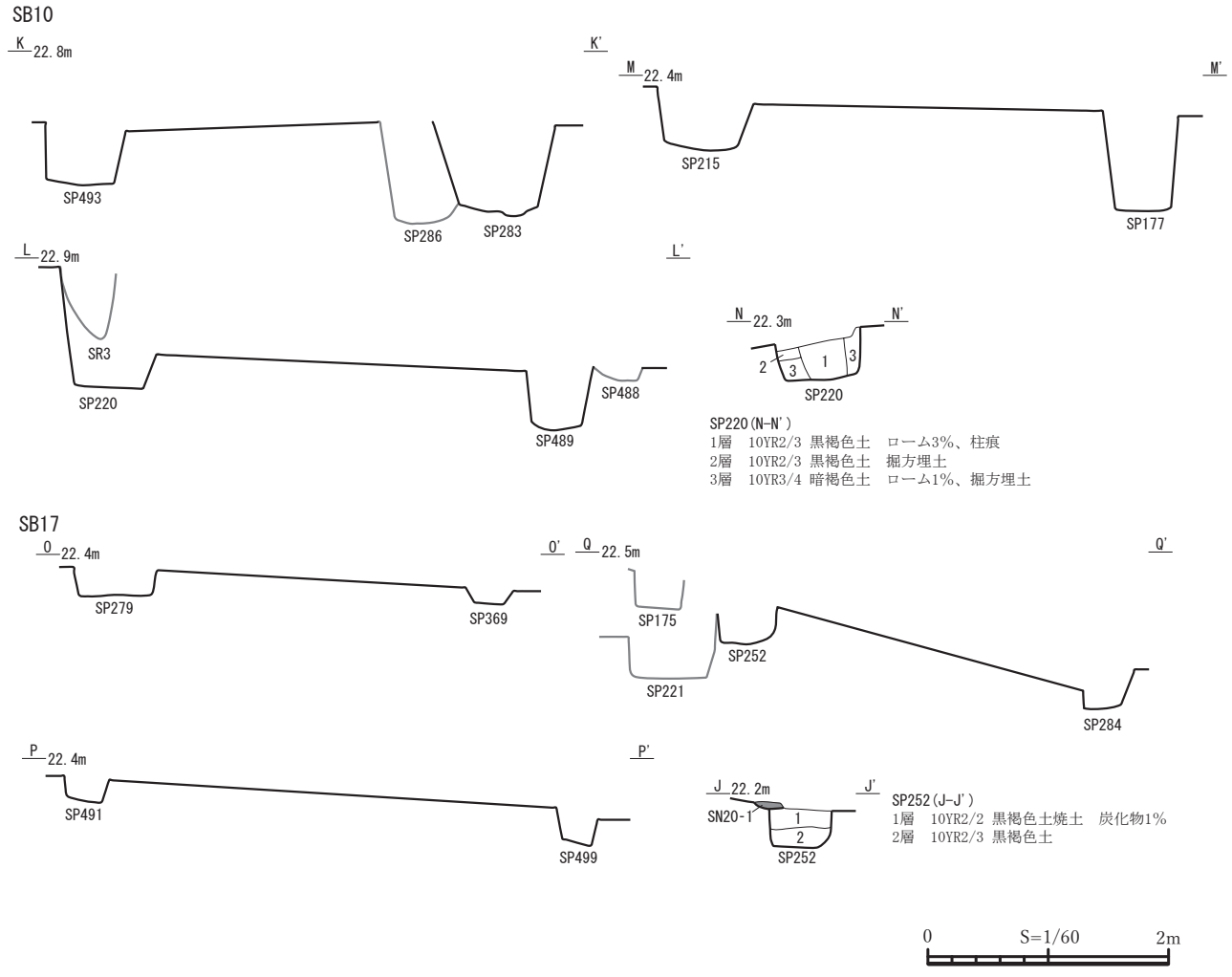
0　S=1/60　2m

図48　第９・10・17号掘立柱建物跡(１)



SP247(F-F'～H-H')
1層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、炭化物粒(φ1～2㎜)2%、黄褐色ブロック(φ1～2㎜)3%、柱痕上層、上部にS1～2を含む
2層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色ブロック(φ1～2㎜)2%、柱痕下層
3層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色ブロック(φ1㎜)1%、掘方埋土
4層　10YR4/4 褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色ブロック(φ2～4㎜)1%、掘方埋土
5層　10YR4/4 褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色土10%、炭化物粒(φ1㎜)1%、掘方埋土
6層　10YR4/4 褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色土3%、掘方埋土
7層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色土粒(φ1～3㎜)5%、掘方埋土
8層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色土粒(φ1～3㎜)8%、掘方埋土
9層　10YR5/6 黄褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中強、10層の土20%下部に多く含む、柱アタリ
10層　10YR3/4 暗褐色粘土　粘性中強、しまり中、9層の土5%、柱アタリ

SP221(I-I')
1層　10YR2/2 黒褐色土　ロームブロック(φ10㎜)混入
2層　10YR2/3 黒褐色土　ローム1%、柱痕
3層　10YR4/6 褐色土　炭化物、焼土1%
4層　10YR2/2 黒褐色土　ローム5%、上面アタリ



SP220(N-N')
1層　10YR2/3 黒褐色土　ローム3%、柱痕
2層　10YR2/3 黒褐色土　掘方埋土
3層　10YR3/4 暗褐色土　ローム1%、掘方埋土

SP252(J-J')
1層　10YR2/2 黒褐色土焼土　炭化物1%
2層　10YR2/3 黒褐色土

図49　第９・10・17号掘立柱建物跡(２)

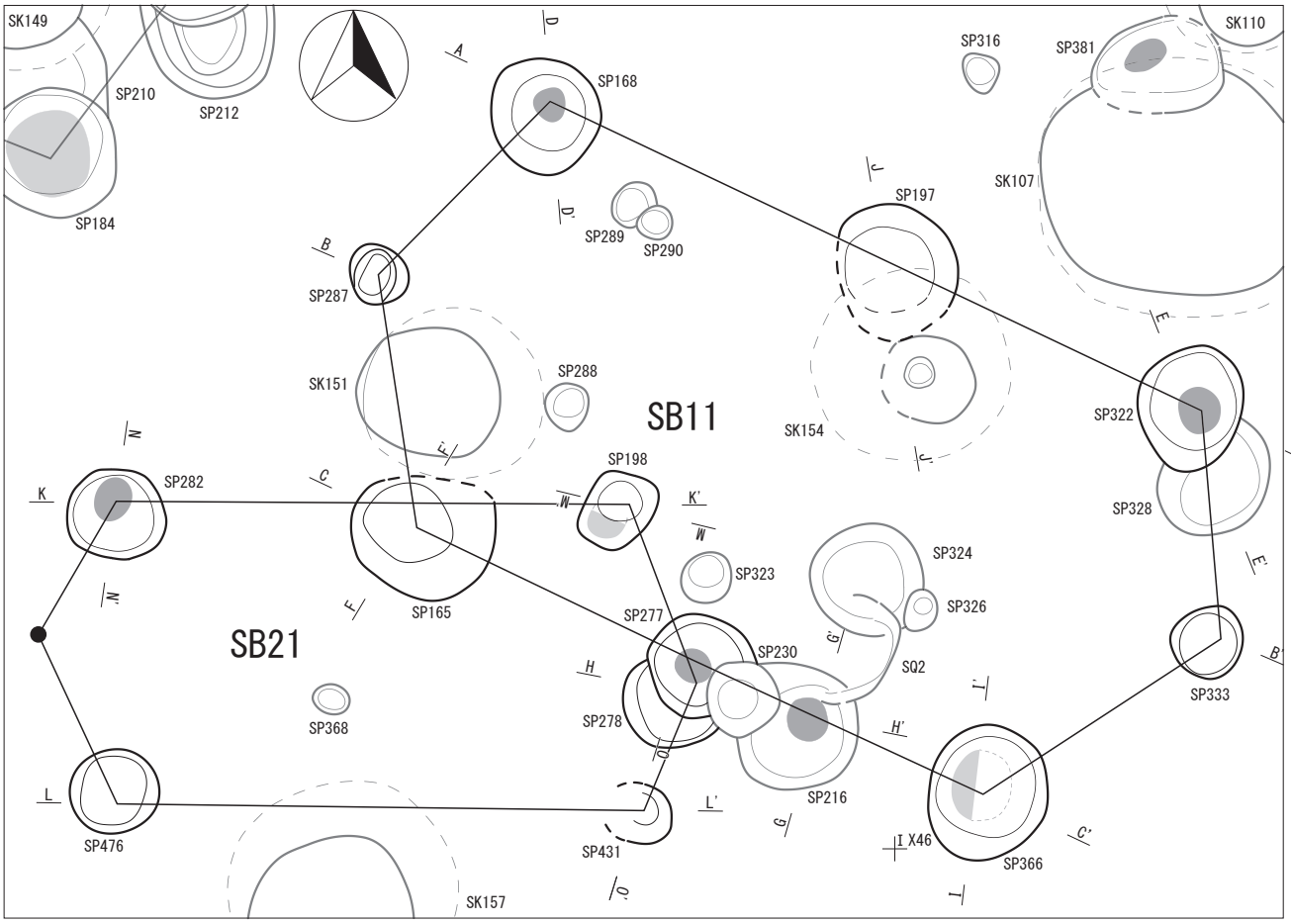
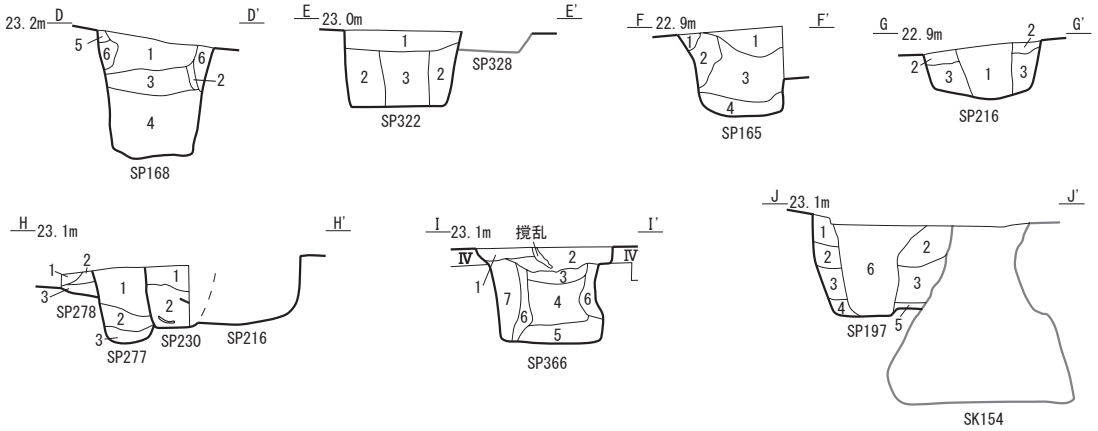


図50　第11・21号掘立柱建物跡(1)



SP168(D-D')
1層　10YR3/3 暗褐色土　炭化物3%、ローム1%
2層　10YR4/4 褐色土　ローム質土、崩落土
3層　10YR2/3 黒褐色土　炭化物1%、ロームブロック(φ5～10㎜)
4層　10YR2/2 黒褐色土　炭化物、ローム1%
5層　10YR3/4 暗褐色土
6層　10YR4/6 褐色土　ローム質土、炭化物1%

SP322(E-E')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム質土
2層　10YR4/4 褐色土　裏込土、ローム質土、掘方埋土
3層　10YR2/2 黒褐色土　ローム10%、柱痕

SP165(F-F')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム、炭化物1%
2層　10YR4/4 褐色土　ローム5%
3層　10YR3/4 暗褐色土　ロームブロック(φ5～10㎜)1%、炭化物1%
4層　10YR3/3 暗褐色土　ロームブロック(φ5～10㎜)3%

SP216(G-G'・H-H')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム、炭化物1%
2層　10YR3/4 暗褐色土　ローム3%
3層　10YR3/3 暗褐色土　ロームブロック3%、炭化物、焼土1%

SP230(G-G'・H-H')
1層　10YR3/3 暗褐色土　炭化物1%
2層　10YR2/2 黒褐色土　炭化物3%

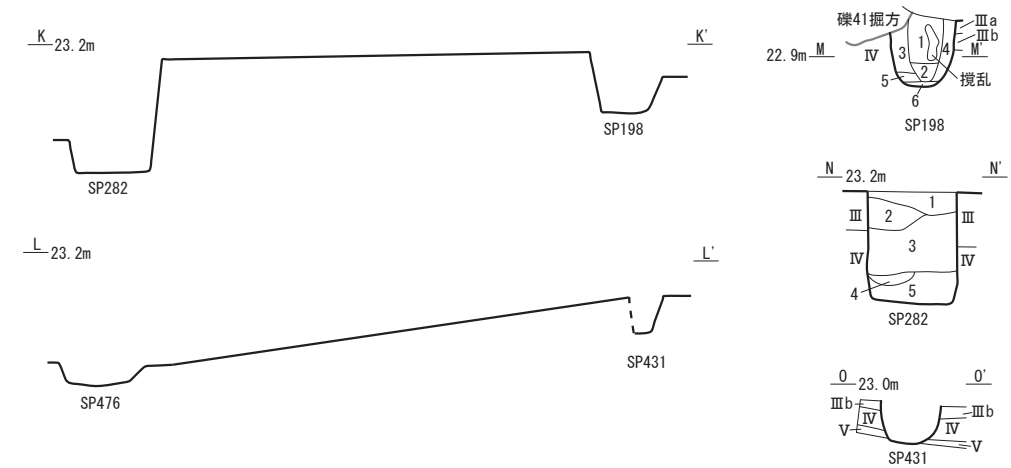
SP277(G-G'・H-H')
1層　10YR2/2 黒褐色土　ローム、炭化物、焼土1%
2層　10YR4/4 褐色土　ロームとの混合土
3層　10YR2/3 黒褐色土

SP278(G-G'・H-H')
1層　10YR4/4 褐色土　ローム質土
2層　10YR3/3 暗褐色土
3層　10YR4/6 褐色土　ローム質土

SP366(I-I')
1層　10YR3/4 暗褐色土　焼土ブロック(φ50㎜)1つ混入
2層　10YR4/6 褐色土　ローム1%
3層　10YR3/3 暗褐色土　炭化物3%、ローム1%、柱痕
4層　10YR3/4 暗褐色土　炭化物、ローム5%、柱痕
5層　10YR2/3 黒褐色土　炭化物1%
6層　10YR4/4 褐色土　ローム質土、ローム、炭化物1%、掘方埋土
7層　10YR4/6 褐色土　ローム質土、ローム1%。掘方埋土

SP197(J-J')
1層　10YR4/6 褐色土　ローム質土、掘方埋土
2層　10YR4/4 褐色土　ローム粒(φ5～10㎜)3%、掘方埋土
3層　10YR4/6 褐色土　ローム粒(φ5～10㎜)1%、掘方埋土
4層　10YR6/6 明黄褐色土　ローム質土、掘方埋土
5層　10YR2/2 黒褐色土　掘方埋土
6層　10YR4/6 褐色土　ローム粒(φ5～10㎜)3%、柱痕

SB21



SP198(M-M')
1層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、炭化物粒(φ0.1～0.2㎜)2%、黄褐色ブロック(φ0.1㎜)1%、柱痕上層
2層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、炭化物粒(φ1㎜)・黄褐色ブロック(φ0.1㎜)1%、柱痕下層
3層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、炭化物粒(φ1㎜)1%、黄褐色ブロック(φ10～15㎜)2%
4層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、炭化物粒・黄褐色ブロック(φ1～2㎜)1%
5層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色ブロック(φ10～15㎜)10%
6層　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中、黄褐色ブロック(φ10～12㎜)5%

SP282(N-N')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム1%
2層　10YR3/4 暗褐色土　ローム10%
3層　10YR4/4 褐色土　ロームとの混合土
4層　10YR2/2 黒褐色土　ロームブロック(φ10㎜)、本層上面アタリ
5層　10YR2/3 黒褐色土　ローム3%

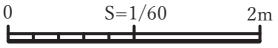
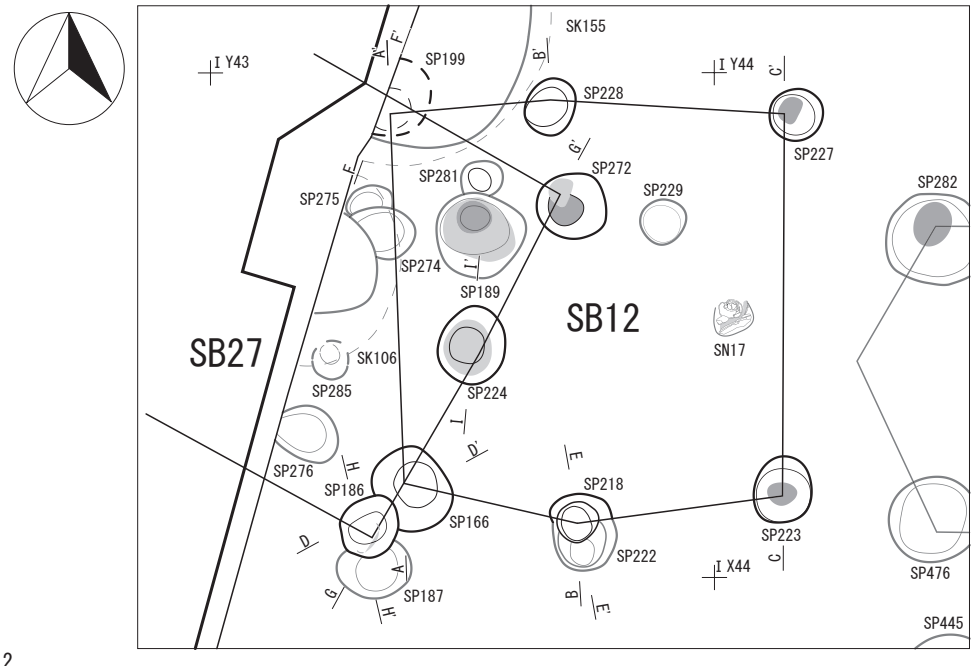
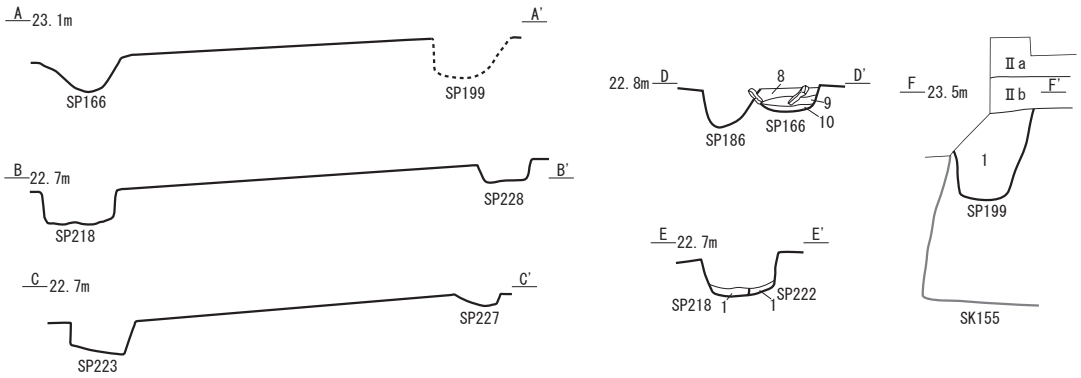


図51　第11・21号掘立柱建物跡(２)

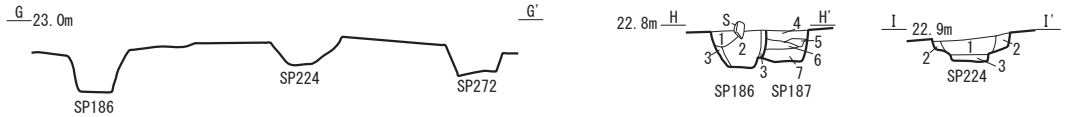


SB12



SP166(D-D')
8層　10YR4/6 褐色シルト　粘性弱、しまり中強、黄褐色ブロック(φ1㎜)2%、炭化物粒・焼土粒(φ1㎜)1%、S-1・2出土層
9層　10YR4/6 褐色シルト　粘性弱、しまり中強、黄褐色ブロック(φ2～3㎜)3%、焼土粒(φ1㎜)1%、S-2出土層
10層　10YR4/6 褐色シルト　粘性弱、しまり中強、黄褐色ブロック(φ3～5㎜)10%
SP218(E-E')
1層　10YR4/4 褐色土　ローム質土、本層上面アタリ
SP222(E-E')
1層　10YR2/2 黒褐色土　ロームとの混合土、本層上面アタリ
SP199(G-G')
1層　10YR3/4 暗褐色土　黄色砂ブロック(φ80㎜)混入

SB27



SP186(H-H')
1層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色ブロック(φ2～3㎜)3%
2層　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色ブロック・炭化物粒(φ1㎜)1%、柱痕
3層　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色ブロック(φ2～3㎜)3%、掘方埋土
SP187(H-H')
4層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、炭化物粒(φ1㎜)1%、黄褐色ブロック(φ1～3㎜)3%
5層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色ブロック(φ1～3㎜)3%
6層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色ブロック(φ1～2㎜)1%
7層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、炭化物粒(φ1㎜)1%、黄褐色ブロック(φ3～4㎜)3%
SP224(I-I')
1層　10YR2/3 黒褐色土　柱痕
2層　10YR4/6 褐色土　掘方埋土
3層　10YR2/2 黒褐色土　ロームとの混合土、上面アタリ

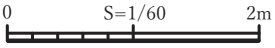
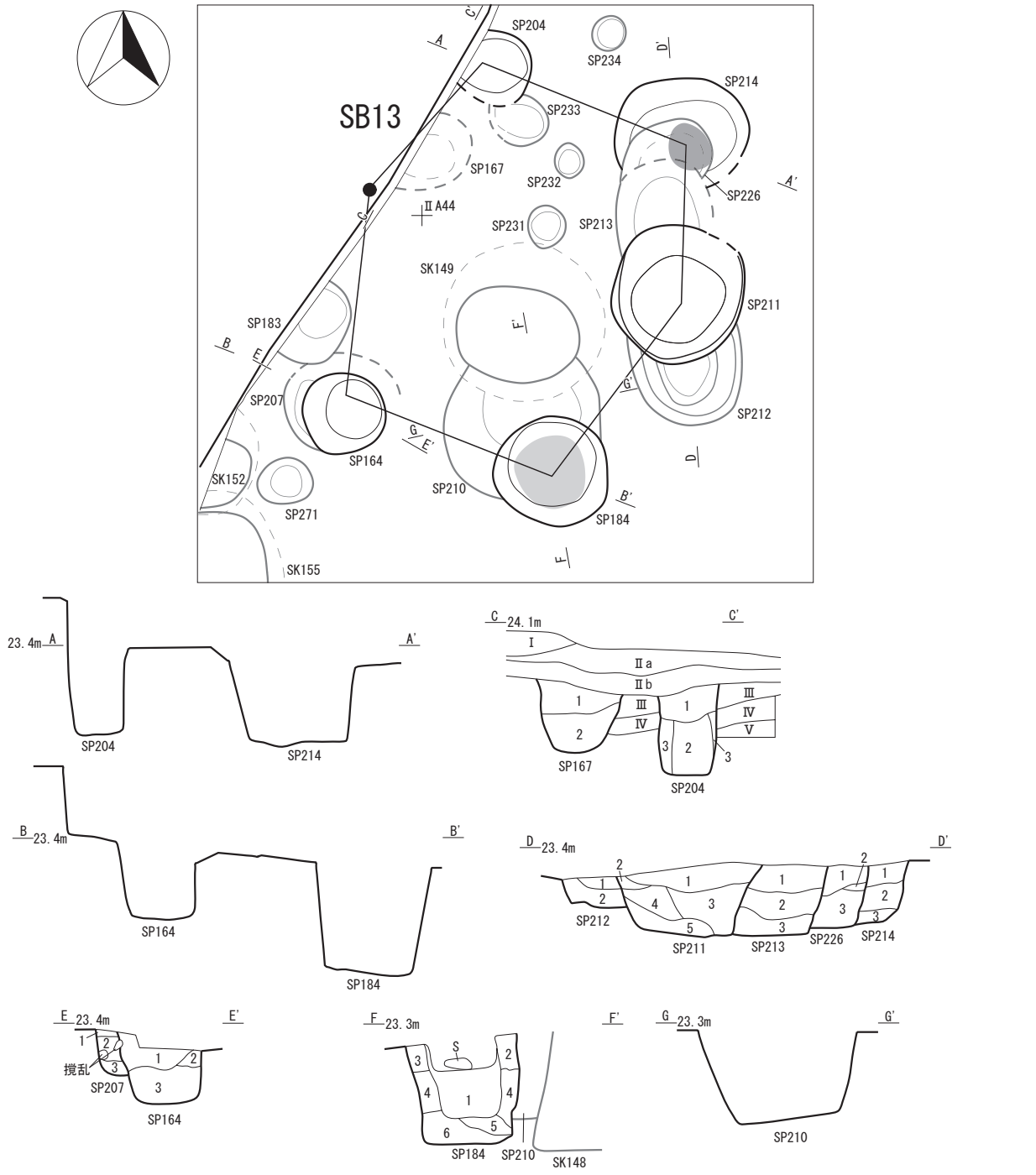


図52　第12・27号掘立柱建物跡



SP167 (C-C')
1層　10YR4/4 褐色土　ローム質土
2層　10YR3/4 暗褐色土　ローム5%

SP204 (C-C')
1層　10YR3/4 暗褐色土
2層　10YR3/3 暗褐色土　柱痕か？
3層　10YR4/4 褐色土　裏込め土か？

SP211 (D-D')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム、砂粒1%
2層　10YR2/1 黒色土
3層　10YR2/2 黒褐色土　ローム1%
4層　10YR3/3 暗褐色土　ローム、砂粒3%
5層　10YR4/6 褐色土　ローム、砂質土

SP212 (D-D')
1層　10YR2/3 黒褐色土　炭化物、ローム1%
2層　10YR4/6 褐色土　ローム質土

SP213 (D-D')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム1%
2層　10YR2/3 黒褐色土　ローム3%
3層　10YR4/4 褐色土　ロームとの混合土

SP214 (D-D')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム、炭化物1%
2層　10YR4/6 褐色土
3層　10YR3/4 暗褐色土　ローム(φ5～10㎜)3%

SP226 (D-D')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム10%
2層　10YR4/6 褐色土　ローム土
3層　10YR2/3 黒褐色土　ローム1%

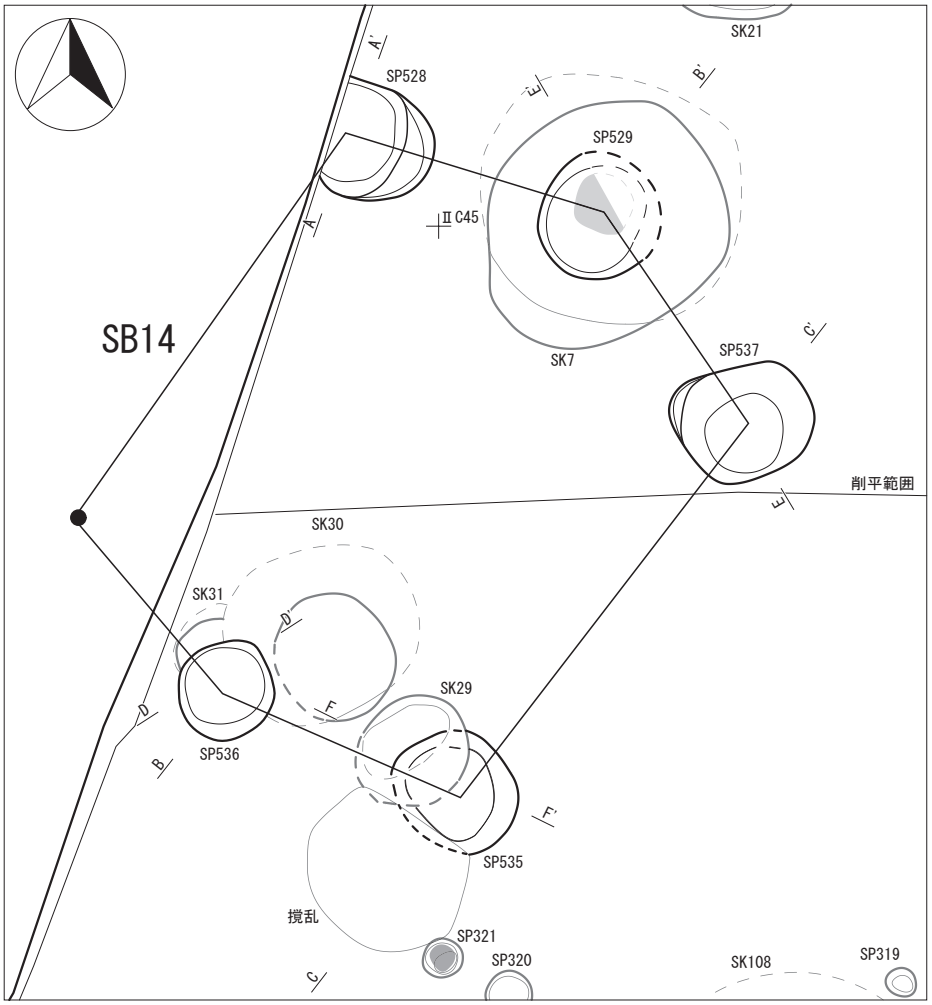
SP164 (E-E')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム、焼土、炭化物1%
2層　10YR4/4 褐色土
3層　10YR2/3 黒褐色土

SP207 (E-E')
1層　10YR4/4 褐色土
2層　10YR3/4 暗褐色土　ローム粒1%
3層　10YR3/3 暗褐色土

SP184 (F-F')
1層　10YR3/4 暗褐色土　砂粒(φ5～10㎜)3%、柱痕
2層　10YR4/6 褐色土　砂質土、掘方埋土
3層　10YR3/4 暗褐色土　砂粒(φ5～10㎜)1%、掘方埋土
4層　10YR4/4 褐色土　砂質土、掘方埋土
5層　10YR5/4 にぶい黄褐色土　砂層
6層　10YR2/3 黒褐色土　砂ブロック(φ5～10㎜)3%

0　S=1/60　2m

図53　第13号掘立柱建物跡



SP528(A-A')
1層　10YR4/4 褐色土　10YR6/6明黄褐色ローム塊(5～30㎜)2%混合
2層　2.5Y6/6 明黄褐色砂
3層　10YR4/6 褐色土　10YR6/6明黄褐色ローム塊(1～5㎜)2%混合
4層　2.5Y4/6 オリーブ褐色砂　φ1㎜炭粒混合
5層　10YR3/3 暗褐色土　10YR2/1黒色土互層、φ5～10㎜炭粒1%混合

SP529 (E-E')
1層　10YR3/1 黒褐色土　10YR5/8黄褐色ローム塊、2.5Y6/6明黄褐色砂混合、耕作トレンチャーの撹乱
2層　10YR4/4 褐色土　2.5Y6/6明黄褐色砂塊上位に混合、φ2～10㎜炭粒1%混合
3層　10YR4/4 褐色土　10YR4/4褐色土と2.5Y6/6～6/8砂塊がほぼ半々で混合

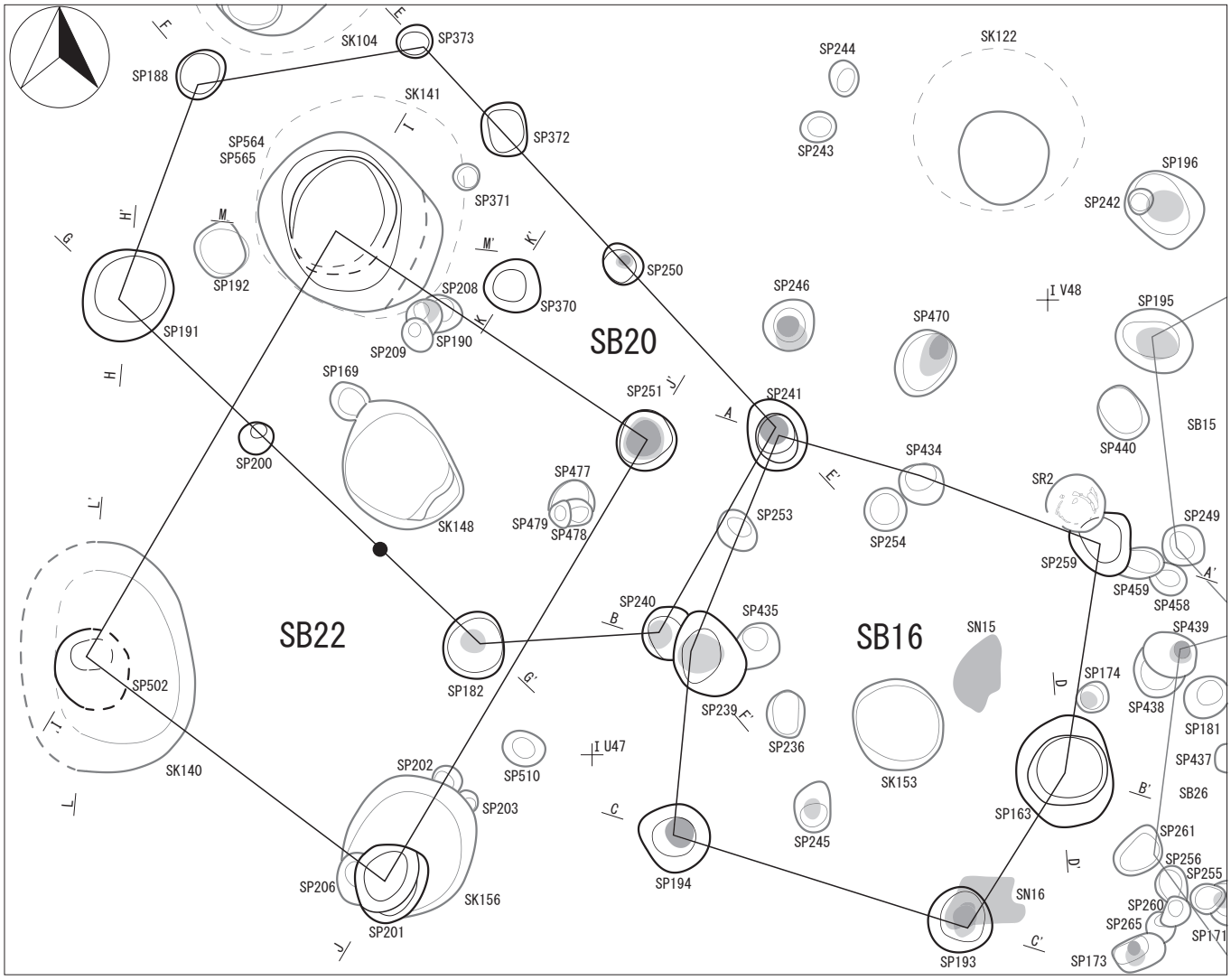
SP535(F-F')
1層　10YR4/6 褐色土　φ1～5㎜炭粒1%混合
2層　10YR4/4 褐色土　φ1～10㎜炭粒5%、φ15㎜焼土粒1%混合
3層　10YR4/2 灰黄褐色土
4層　10YR4/2 灰黄褐色土　10YR4/6褐色土塊15%混合
5層　10YR3/2 黒褐色土　φ1～5㎜炭粒1%混合

SP536(D-D')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム塊5%、φ1～10㎜炭粒3%混合
2層　10YR5/4 にぶい黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム塊10%、10YR7/1灰白色土混合、φ1～5㎜炭粒1%混合、互層状に堆積
3層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR5/4にぶい黄褐色ローム塊10%混合
4層　10YR3/2 黒褐色土　φ1～5㎜炭粒3%混合

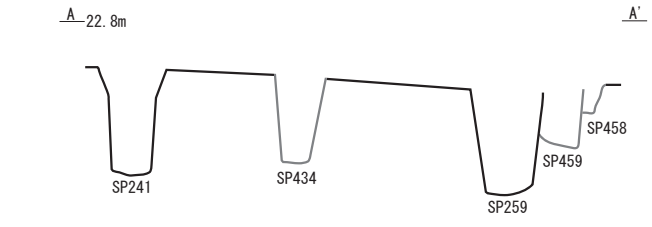
SP537(E-E')
1層　10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色砂塊5%混合、φ1㎜炭粒1%混合
2層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR5/6黄褐色砂塊2%混合
3層　10YR4/6 褐色土　10YR5/8黄褐色砂塊2%混合

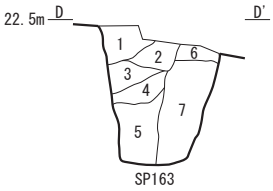
0　S=1/60　2m

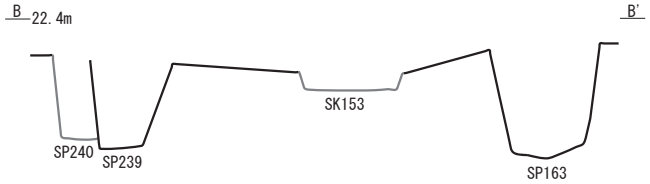
図54　第14号掘立柱建物跡



SB16







SP163(D-D')
1層　10YR4/6 褐色土　　焼土粒、炭化物1%
2層　10YR4/4 褐色土　　10YR6/6明黄褐色砂(Ⅵ層由来) φ5～10㎜1%
3層　10YR3/4 暗褐色土　ローム粒、炭化物1%
4層　10YR4/4 褐色土　　Ⅵ層由来砂ブロック1%
5層　10YR4/6 褐色土　　Ⅵ層由来砂ブロック3%
6層　10YR4/6 褐色土　　10YR6/6明黄褐色砂(Ⅵ層由来) φ5～10㎜1%
7層　10YR5/6 黄褐色土　10YR6/6明黄褐色砂(Ⅵ層由来) φ10～20㎜5%

0　S=1/60　2m

図55　第16・20・22号掘立柱建物跡(１)

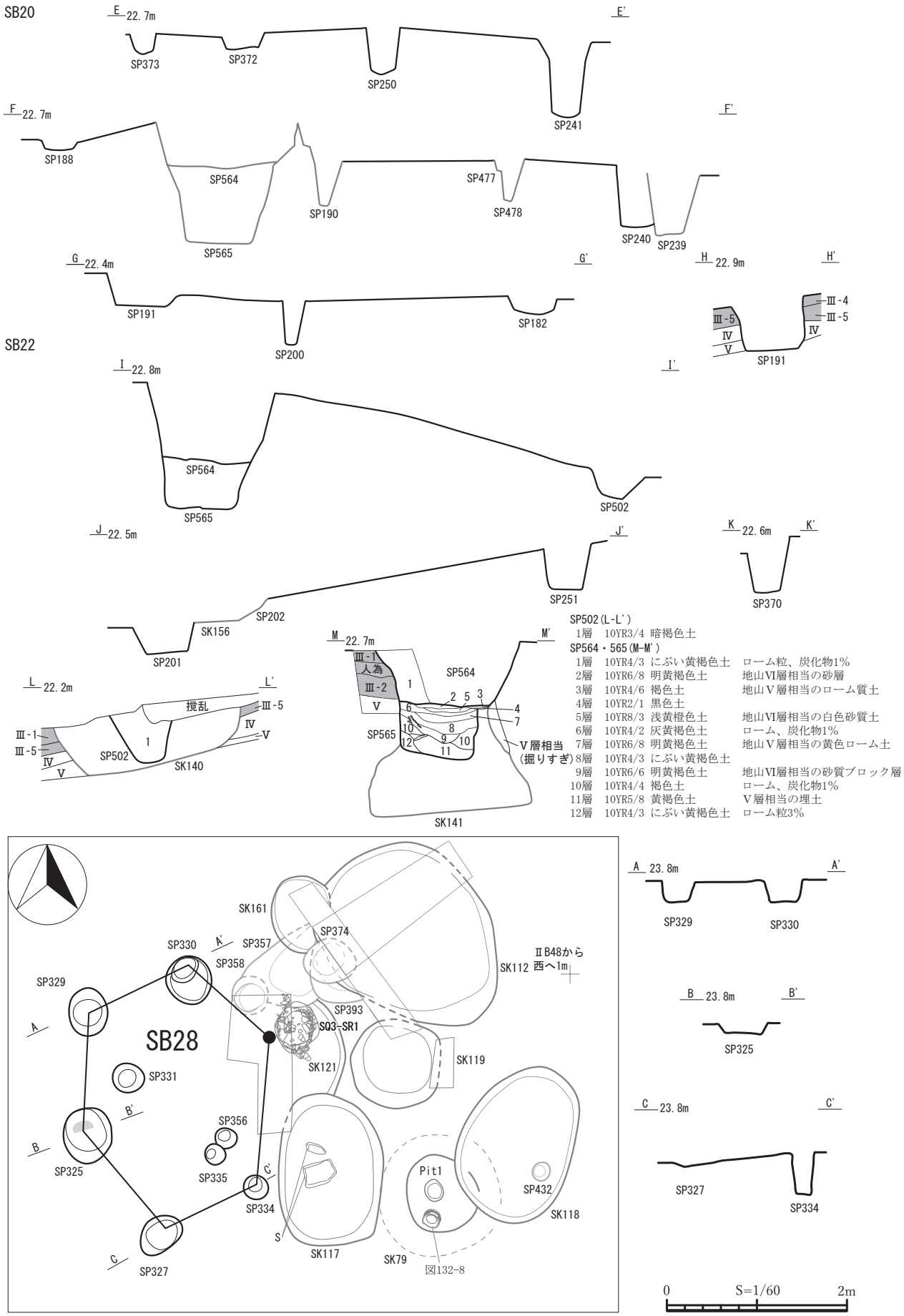
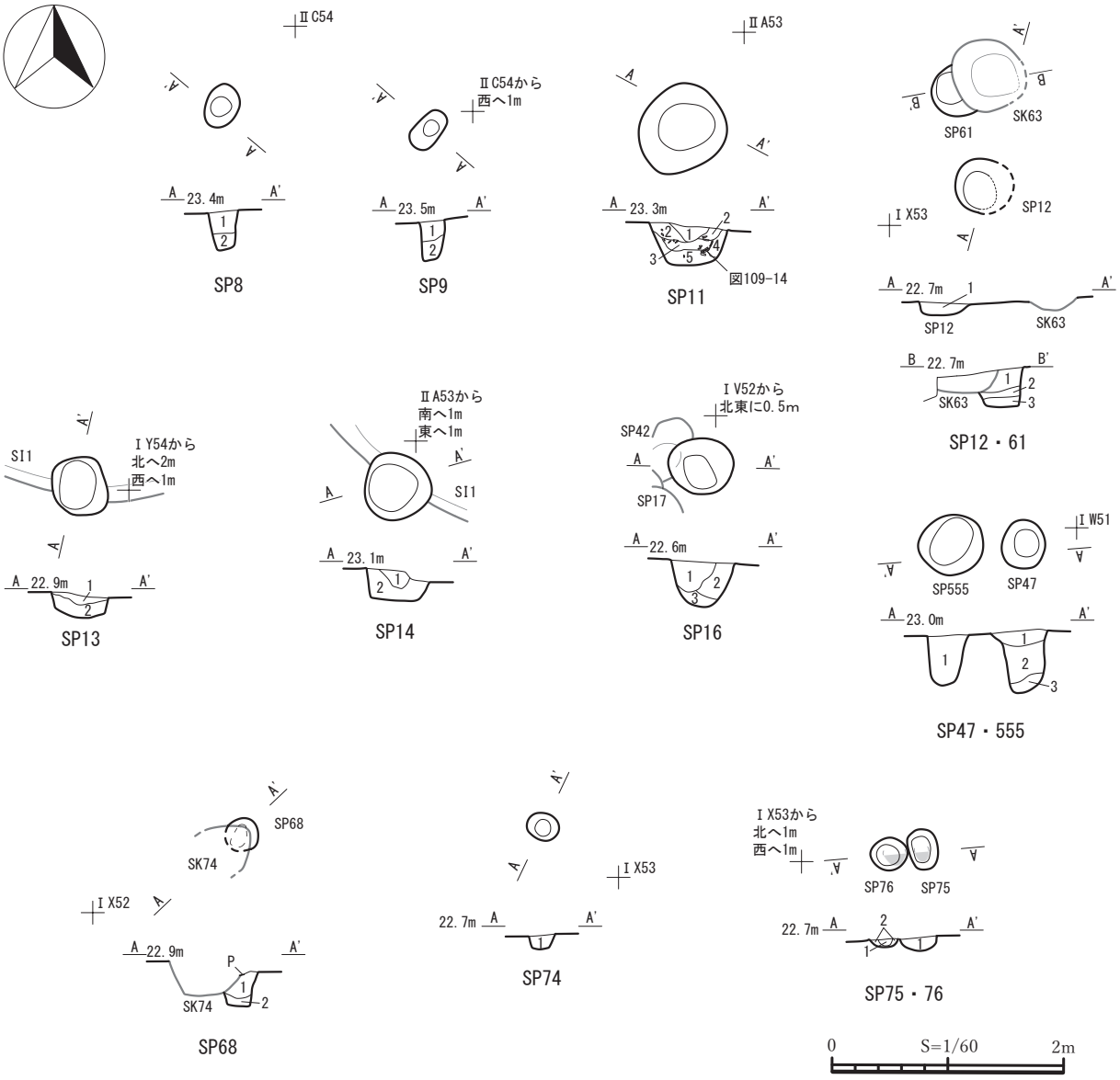


図56　第16・20・22号掘立柱建物跡(２)・第28号掘立柱建物跡



SP8(A-A')
1層　10YR2/2 黒褐色土
2層　10YR3/3 暗褐色土　　φ1～5㎜焼土粒3%混合

SP9(A-A')
1層　10YR2/2 黒褐色土　　φ1～5㎜炭化粒1%混合
2層　10YR4/4 褐色土

SP11(A-A')
1層　10YR3/2 黒褐色土　　φ1～5㎜炭粒1%混合
2層　10YR4/2 灰黄褐色土　　φ1～5㎜炭粒1%混合
3層　10YR3/3 暗褐色土　　φ1～5㎜焼土粒3%混合
4層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　　10YR5/6黄褐色ローム塊混合
5層　10YR3/2 黒褐色土　　φ1～5㎜焼土粒1%混合

SP12(A-A')
1層　10YR3/2 黒褐色土　　φ1～5㎜炭粒1%混合

SP61(B-B')
1層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層ブロック(φ3～5㎜)8%、炭化物粒(φ1～3㎜)3%含む
2層　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中
3層　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層ブロック(褐色粘土質シルト10YR4/6)φ3～5㎜を30～40%

SP13(A-A')
1層　10YR3/2 黒褐色土　　φ1～5㎜焼土粒1%混合
2層　10YR5/4 にぶい黄褐色土　　10YR5/6黄褐色ローム粒1%混合

SP14(A-A')
1層　10YR3/2 黒褐色土　　φ1～5㎜焼土粒1%混合
2層　10YR5/6 黄褐色土　　10YR5/6黄褐色ローム粒1%混合

SP16(A-A')
1層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、ロームブロック(φ10㎜)10%、上部に木根の貫入
2層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、ロームブロック(φ10㎜)2%
3層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、ロームブロック(φ10㎜)1%

SP47(A-A')
1層　10YR4/6 褐色シルト質粘土　　しまり中、粘性中、炭化物粒(φ0.5㎜)3%

SP555(A-A')
1層　10YR4/6 褐色シルト質粘土　　しまり中、粘性中、焼土粒(φ1～3㎜)3%、炭化物粒(φ2～5㎜)5%含む。
2層　10YR4/4 褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、V層由来のブロック(褐色粘土質シルト10YR4/6)8%
3層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　　しまり中、粘性中、炭化物粒(φ2～5㎜)1%

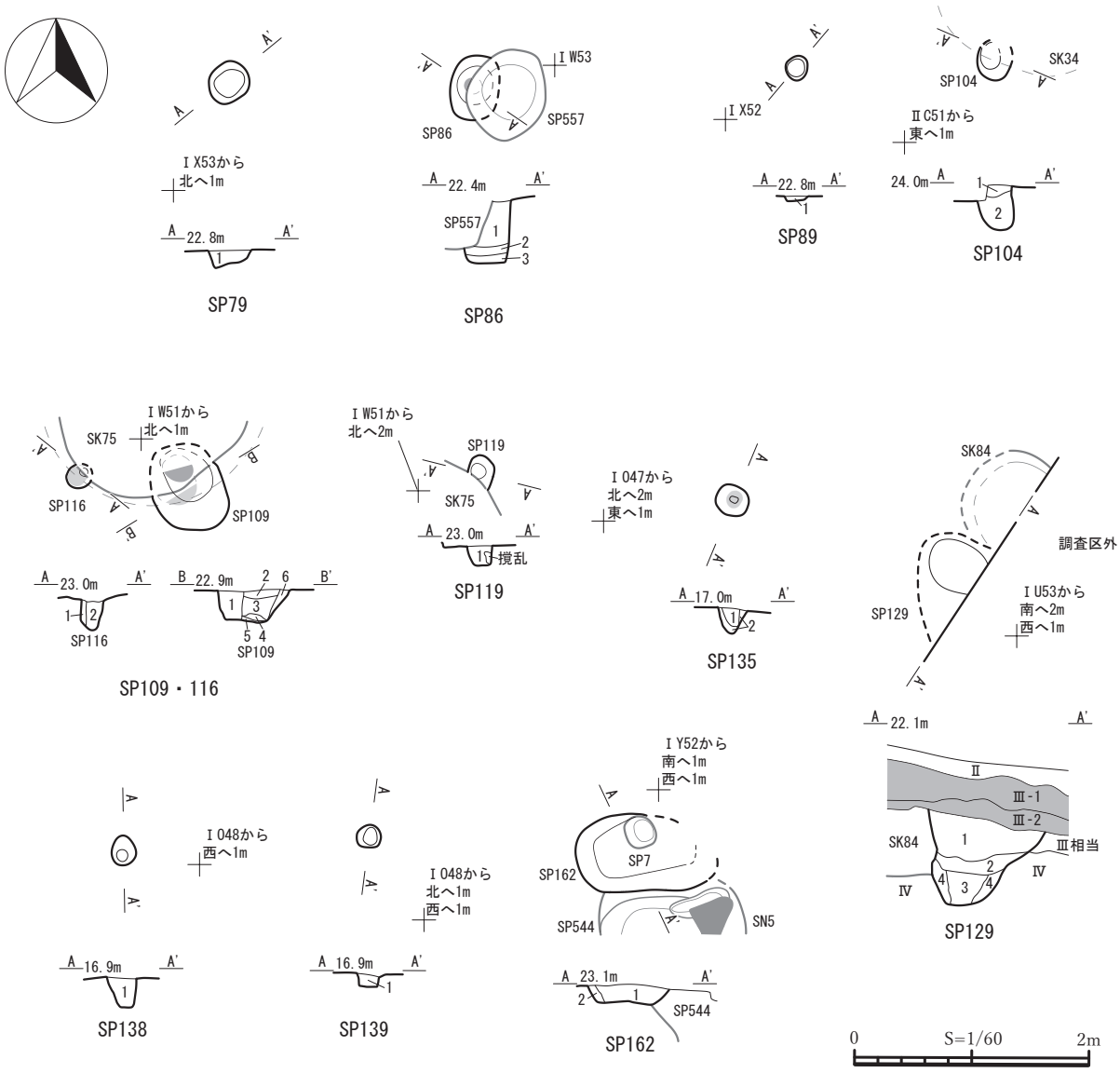
SP68(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色土　　φ1cmの地山ブロック1%、φ1㎜の炭化物1%
2層　10YR3/4 暗褐色土

SP74(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色土　　φ2㎜の焼土2%含む。粘性中、しまり中

SP75(A-A')
1層　10YR2/2 黒褐色土　　柱痕
2層　10YR3/4 暗褐色土　　φ1cmの地山ブロック5%、掘方埋土

SP76(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色土　　φ1～2cmの地山ブロック7%、φ1㎜の炭化物1%、柱痕

図57　ピット(1)



SP79(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色土　φ2cmの地山ブロック5%、φ5～10mmの炭化物1%
粘性中、しまり中

SP86(A-A')
1層　10YR2/3 黒褐色土　ローム混じり、φ1～20mmロームブロック1%
2層　10YR4/4 褐色土
3層　10YR2/2 黒褐色土　しまりなし、下部にアタリ

SP89(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色土

SP104(A-A')
1層　10YR2/2 黒褐色土
2層　10YR3/3 暗褐色土

SP109(B-B')
1層　10YR4/4 褐色土
2層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　φ1～10mm炭化物・ロームブロック1%

SP116(A-A')
1層　10YR4/6 褐色土　φ1～5mm炭化物2%・ローム粒1%
2層　10YR5/6 黄褐色土　ローム質土主体
3層　10YR4/4 褐色土　φ1～5mm炭化物・ローム粒1%
4層　10YR4/2 灰黄褐色土　しまり中、アタリか
5層　10YR5/6 黄褐色土　しまり中、アタリか
6層　10YR4/6 褐色土　φ1～5mm炭化物2%・ローム粒1%

SP119(A-A')
1層　10YR4/4 褐色土　φ1～5mm炭化物1%、ロームブロック1%

SP129(A-A')
1層　10YR4/4 褐色土　Ⅵ層由来の砂30%、φ3mmまでの炭化物1%
粘性、しまり中
2層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　Ⅵ層由来の砂7%、φ5～10mmの炭化物1%
粘性、しまり中
3層　10YR3/4 暗褐色土　Ⅵ層由来の砂10%含む。φ1～10mmの炭化物1%
粘性、しまり中
4層　10YR4/4 褐色土

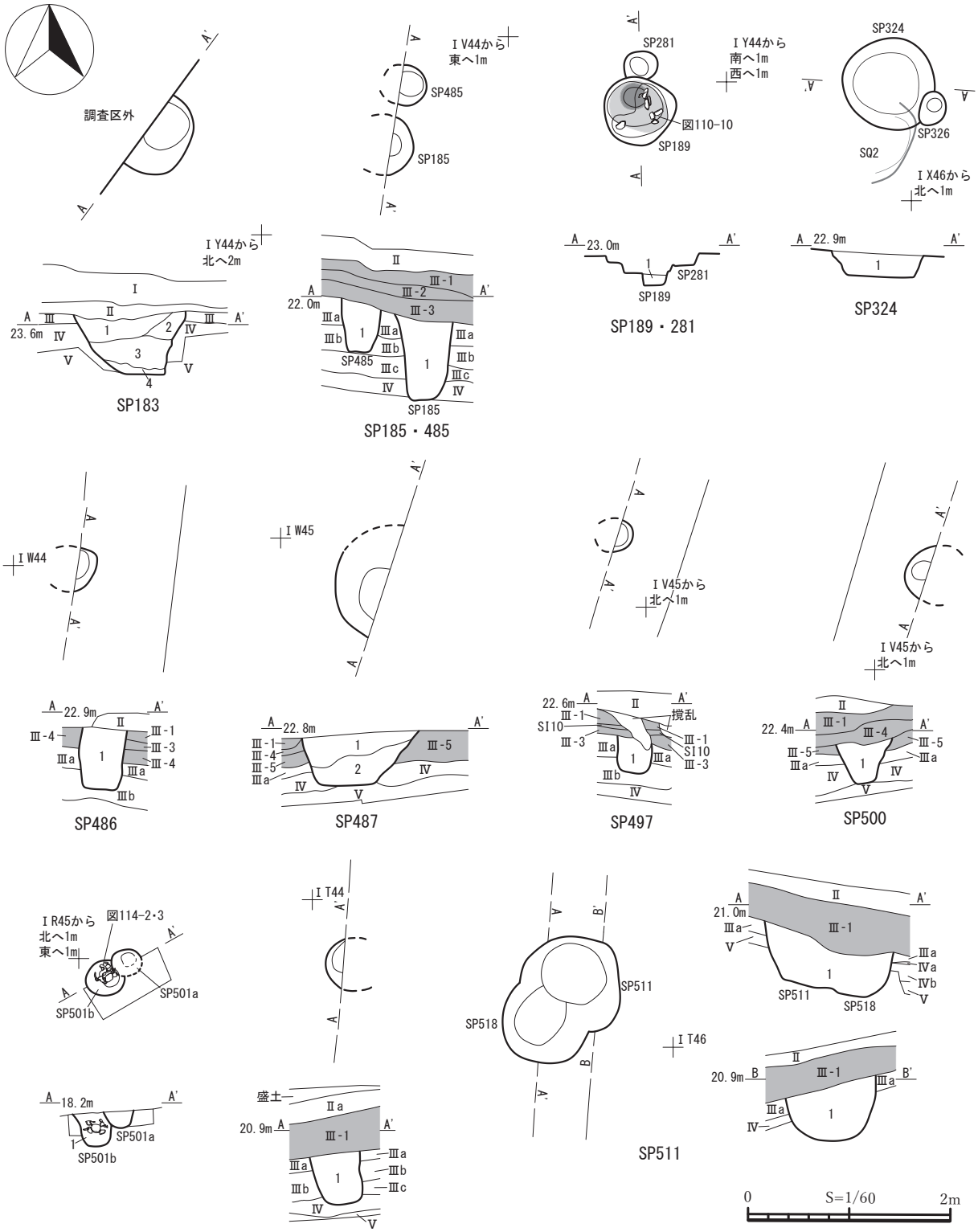
SP135(A-A')
1層　10YR2/2 黒褐色土　φ1mmの地山粒1%含む。粘性中、しまり中、柱痕
2層　10YR3/2 黒褐色土　φ10mmの地山7%含む。粘性中、しまり中、掘方埋土

SP138(A-A')
1層　10YR2/2 黒褐色土　φ5～10mmの地山粒10%、粘性中、しまり中

SP139(A-A')
1層　10YR2/2 黒褐色土　φ5mmの地山粒7%、φ1mmの焼土粒1%、
粘性中、しまり中

SP162(A-A')
1層　10YR2/3 黒褐色土　φ1～5mm炭化物・ロームブロック1%
2層　10YR3/4 暗褐色土　ローム主体層、しまりやや弱

図58　ピット(２)

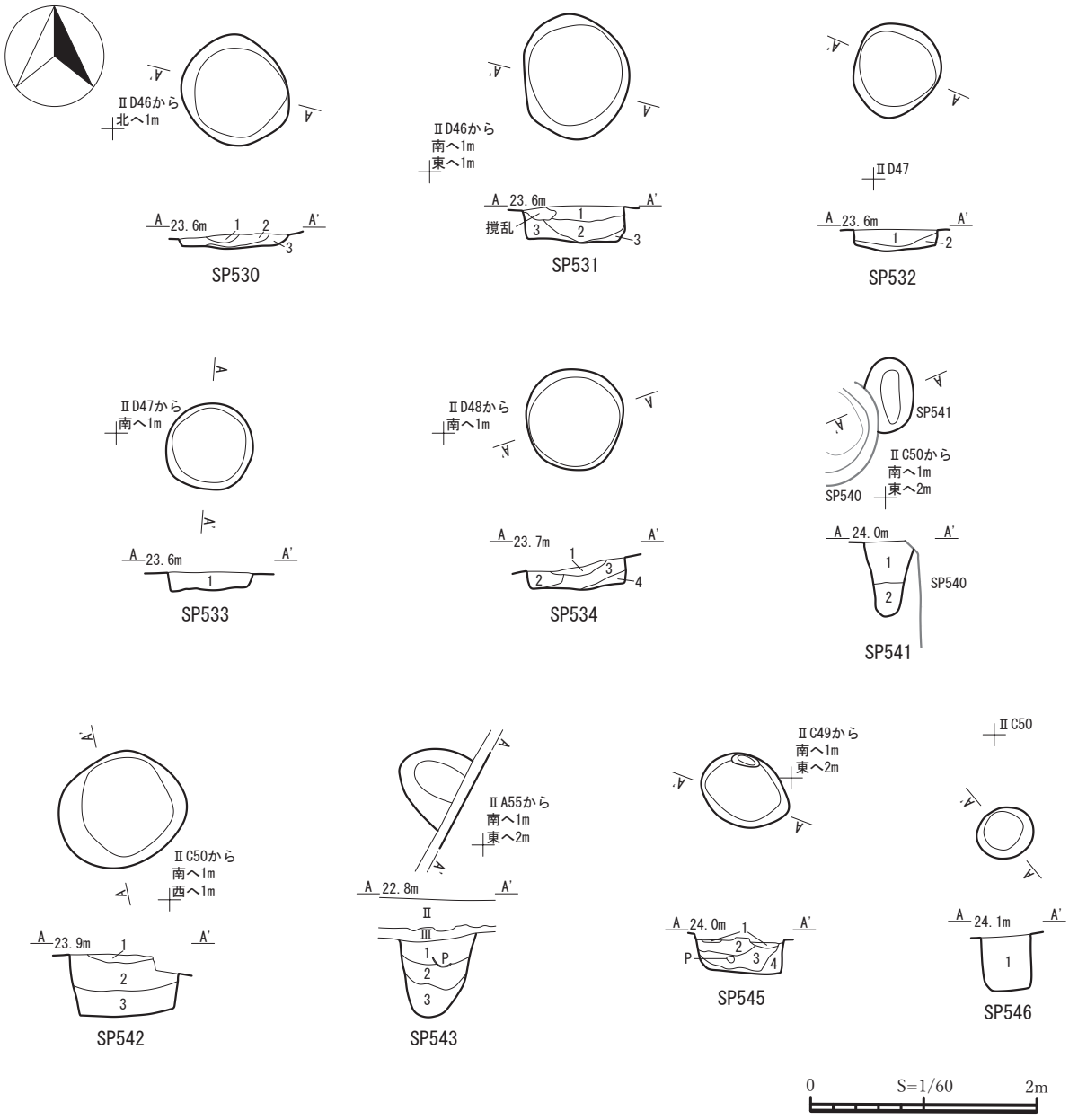


SP183(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム粒1%
2層　10YR3/4 暗褐色土　ローム粒1%
3層　10YR2/3 黒褐色土　ローム粒1%
4層　10YR4/4 褐色土　ローム5%
SP185(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム粒1%
SP485(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム粒1%

SP189・281(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム5%、上面アタリ
SP324(A-A')
1層　10YR4/4 褐色土　ローム質土
SP486(A-A')
1層　10YR4/6 褐色土　ロームとの混合土　粒(φ～2㎜)1%
SP487(A-A')
1層　10YR4/6 褐色土　ロームとの混合土　粒(φ～2㎜)1%
2層　10YR3/3 暗褐色土　ローム、炭化物1%
SP497(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム粒1%

SP500(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム粒1%
SP501b(A-A')
1層　10YR2/3 黒褐色土
SP509(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色土　ローム粒1%
SP511・518(A-A')
1層　10YR2/3 黒褐色土
SP511(B-B')
1層　10YR2/3 黒褐色土

図59　ピット(３)



SP530(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色土　10YR4/6褐色土3%、φ1～5㎜炭粒1%混合
2層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR4/6褐色砂50%、φ1～5㎜炭粒1%混合
3層　10YR4/6 褐色砂　φ1～5㎜炭粒1%混合

SP531(A-A')
1層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR4/6褐色土3%、φ1～10㎜炭粒3%混合
2層　10YR4/6 褐色土　10YR4/3にぶい黄褐色土7%、φ1～5㎜炭粒1%混合
3層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR4/6褐色土7%、φ1～5㎜炭粒1%混合

SP532(A-A')
1層　10YR3/3 暗褐色土　10YR3/4暗褐色土10%、φ1～10㎜炭粒3%混合
2層　10YR3/3 暗褐色土　10YR4/6褐色砂7%混合

SP533(A-A')
1層　10YR4/2 灰黄褐色土　2.5Y6/6明黄褐色砂塊混合、φ5～15㎜炭粒2%混合

SP534(A-A')
1層　10YR5/2 灰黄褐色砂質土　φ5㎜炭粒・焼土粒混合
2層　10YR3/3 暗褐色土　φ10㎜炭粒・焼土粒混合
3層　2.5Y5/4 黄褐色砂　10YR5/8黄褐色ローム塊混合
4層　10YR4/2 灰黄褐色砂質土

SP541(A-A')
1層　10YR3/2 黒褐色ローム質土　10YR5/8黄褐色ローム塊50%混合、φ2㎜炭粒1%混合
2層　10YR4/6 褐色ローム質土

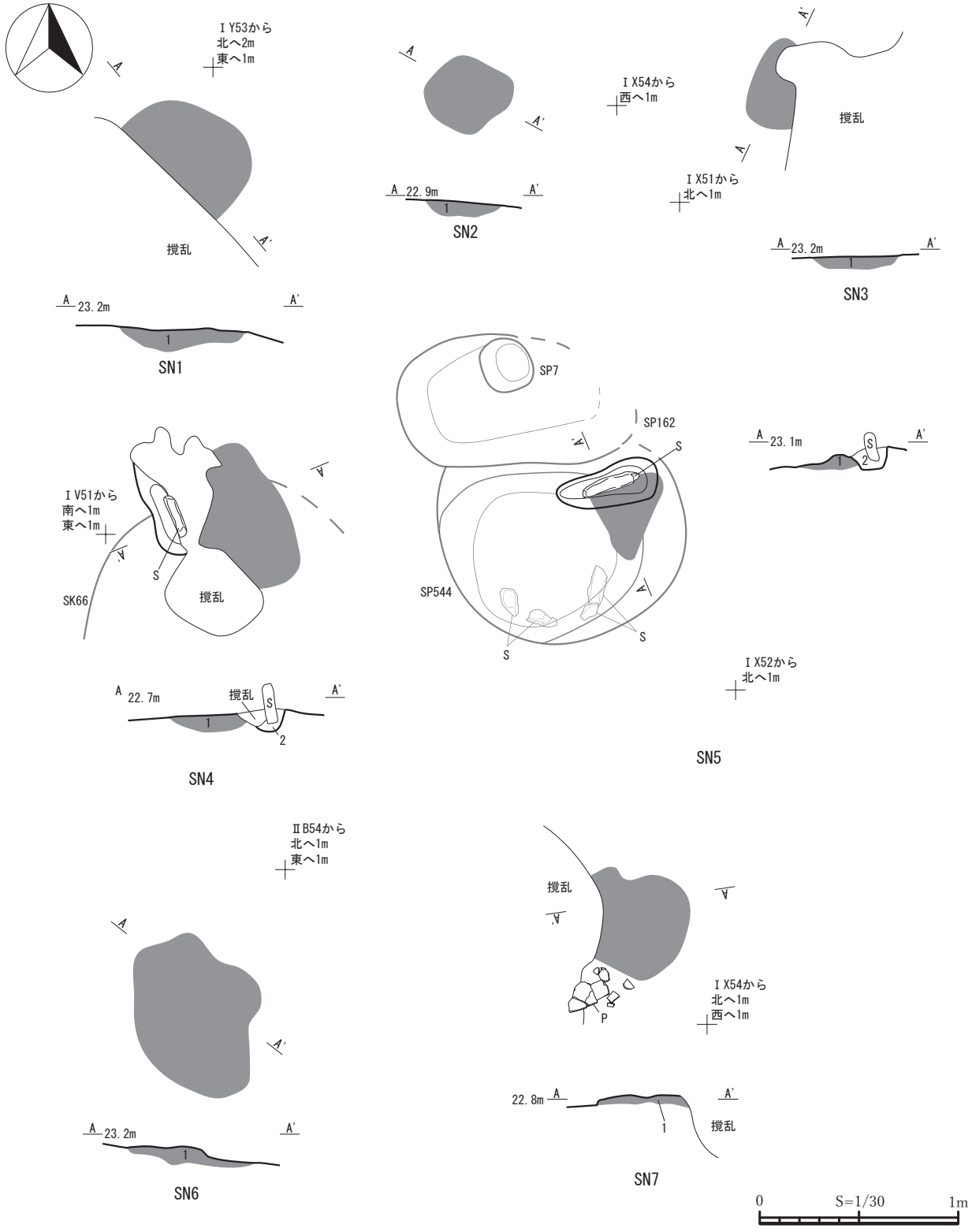
SP542(A-A')
1層　10YR6/6 明黄褐色ローム質土　2.5YR5/8明赤褐色焼土塊(φ10～20㎜)15%混合
2層　10YR6/4 にぶい黄橙色ローム質土　2.5YR5/8明赤褐色焼土塊(φ5～10㎜)7%混合
3層　10YR6/6 明黄褐色ローム質土　2.5YR5/8明赤褐色焼土粒(φ1～5㎜)2%混合

SP543(A-A')
1層　10YR3/2 黒褐色土　10YR6/8明黄褐色ローム粒2%、φ5㎜炭粒1%混合
2層　10YR3/2 黒褐色土　10YR6/8明黄褐色ローム粒2%、φ5㎜炭粒2%混合
3層　10YR4/4 褐色土　10YR6/8明黄褐色ローム塊が斑に混合

SP545(A-A')
1層　10YR3/1 黒褐色土　10YR6/8明黄褐色ローム塊混合
2層　10YR5/4 にぶい黄褐色土　φ10㎜炭粒2%混合
3層　10YR3/4 暗褐色土　φ5㎜炭粒1%
4層　10YR5/8 黄褐色土　10YR4/6褐色土塊混合

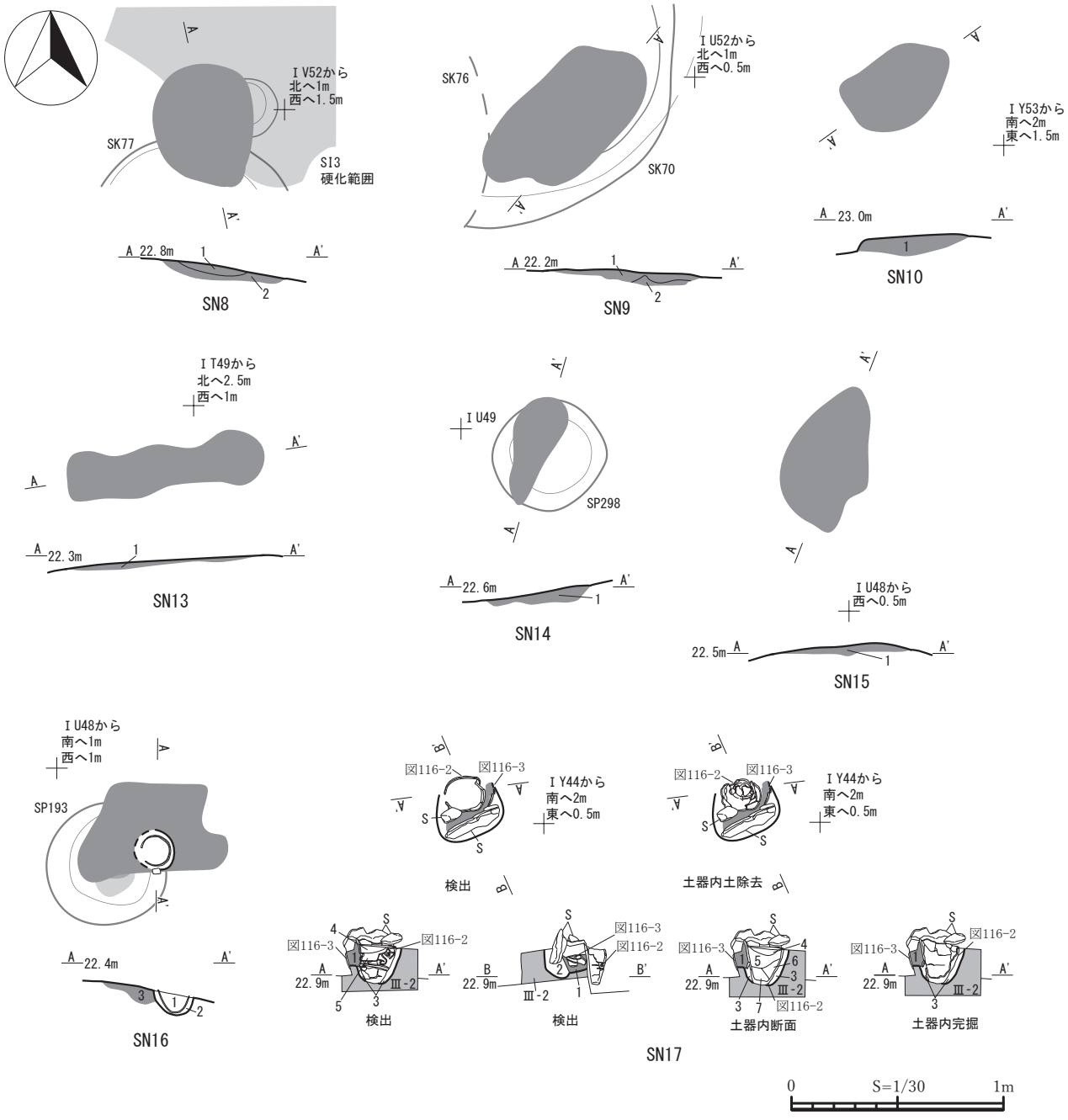
SP546(A-A')
1層　10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒2%、φ5㎜炭粒1%混合

図60　ピット(４)



SN1(A-A')
1層　2.5YR4/6　赤褐色土　部分的に2.5YR5/8～5YR4/6、Ⅲ層の焼成
SN2(A-A')
1層　5YR4/6　赤褐色土　弱いが焼けている被熱範囲、しまりやや弱
SN3(A-A')
1層　7.5YR5/8　明褐色土　Ⅲ層(10YR4/6)が弱く焼けている被熱範囲
SN4(A-A')
1層　7.5YR4/6　褐色土　被熱範囲、しまり中
2層　10YR3/4　暗褐色土　φ1～2㎜焼土粒1%、礫掘方堆積土
SN5(A-A')
1層　7.5YR4/6　褐色土　弱いが焼けている被熱範囲、しまり中
2層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　φ1～2㎜炭化物・焼土粒1%、礫掘方堆積土
SN6(A-A')
1層　5YR5/6　明赤褐色土　5YR5/6～4/6の色調で焼成、西側に薄色、一部黒色土塊(φ10～20㎜)含む
SN7(A-A')
1層　2.5YR5/8　明赤褐色土　φ2㎜の炭化物粒3%

図61　焼土遺構(１)



SN8(A-A')
1層　5YR5/8　明赤褐色土　被熱範囲、しまり中
2層　7.5YR4/6　褐色土　被熱範囲

SN9(A-A')
1層　5YR5/8　明赤褐色土　被熱範囲、しまり中
2層　7.5YR3/2　黒褐色土　焼土混じる

SN10(A-A')
1層　7.5YR5/4　にぶい褐色土　弱い被熱範囲か

SN13'(A-A')
1層　2.5YR5/8　明赤褐色土　φ20㎜の10YR3/2黒褐色土ブロック3%、粘性中、しまり中

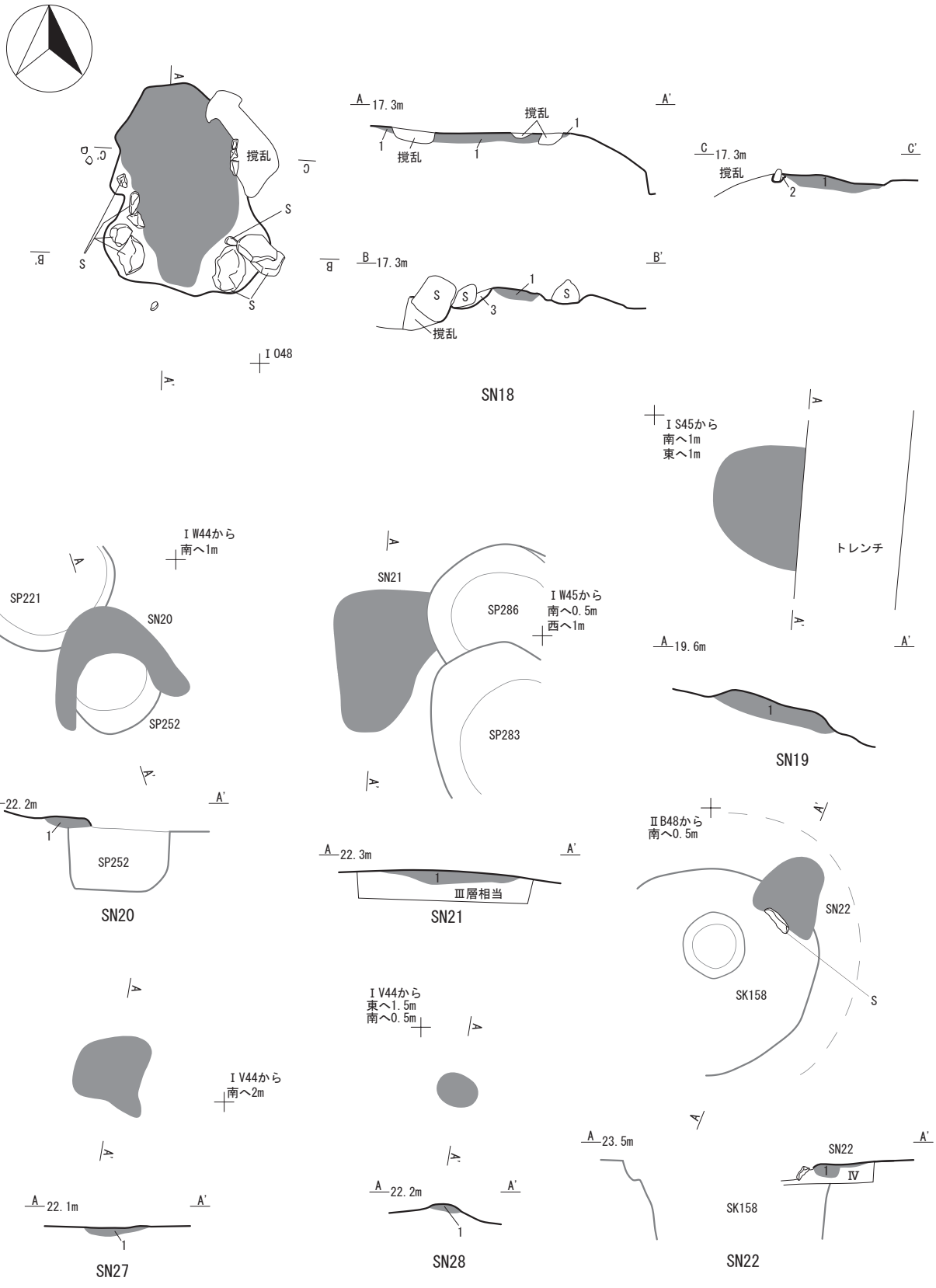
SN14(A-A')
1層　2.5YR6/8　橙色土　粘性中、しまり中

SN15(A-A')
1層　2.5YR6/8　橙色土　粘性中、しまり中

SN16(A-A')
1層　10YR3/4　暗褐色土　φ20㎜地山1%
2層　10YR3/3　暗褐色土
3層　2.5YR5/6　明赤褐色土　被熱範囲

SN17(A-A'・B-B')
1層　10YR4/6 褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、焼土層
2層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色ブロック・焼土粒(φ0.1㎜)1%、礫の掘方
3層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色ブロック(φ0.3㎜)1%、埋設土器の掘方
4層　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性中弱、しまり中弱、炭化物(φ0.2㎜)、焼土粒(φ0.1㎜)1%以下、土器内堆積土
5層　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性中弱、しまり中弱、炭化物(φ0.2㎜)、焼土粒(φ0.1㎜)、黄褐色ブロック(φ0.1㎜)1%
6層　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性中弱、しまり中弱、黄褐色ブロック(φ0.1㎜)1%以下、土器内堆積土の中で混入物が少ない層
7層　10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性中弱、しまり中弱、焼土粒(φ1㎜)、黄褐色ブロック(φ0.1㎜)1%以下、土器内堆積土

図62　焼土遺構(２)

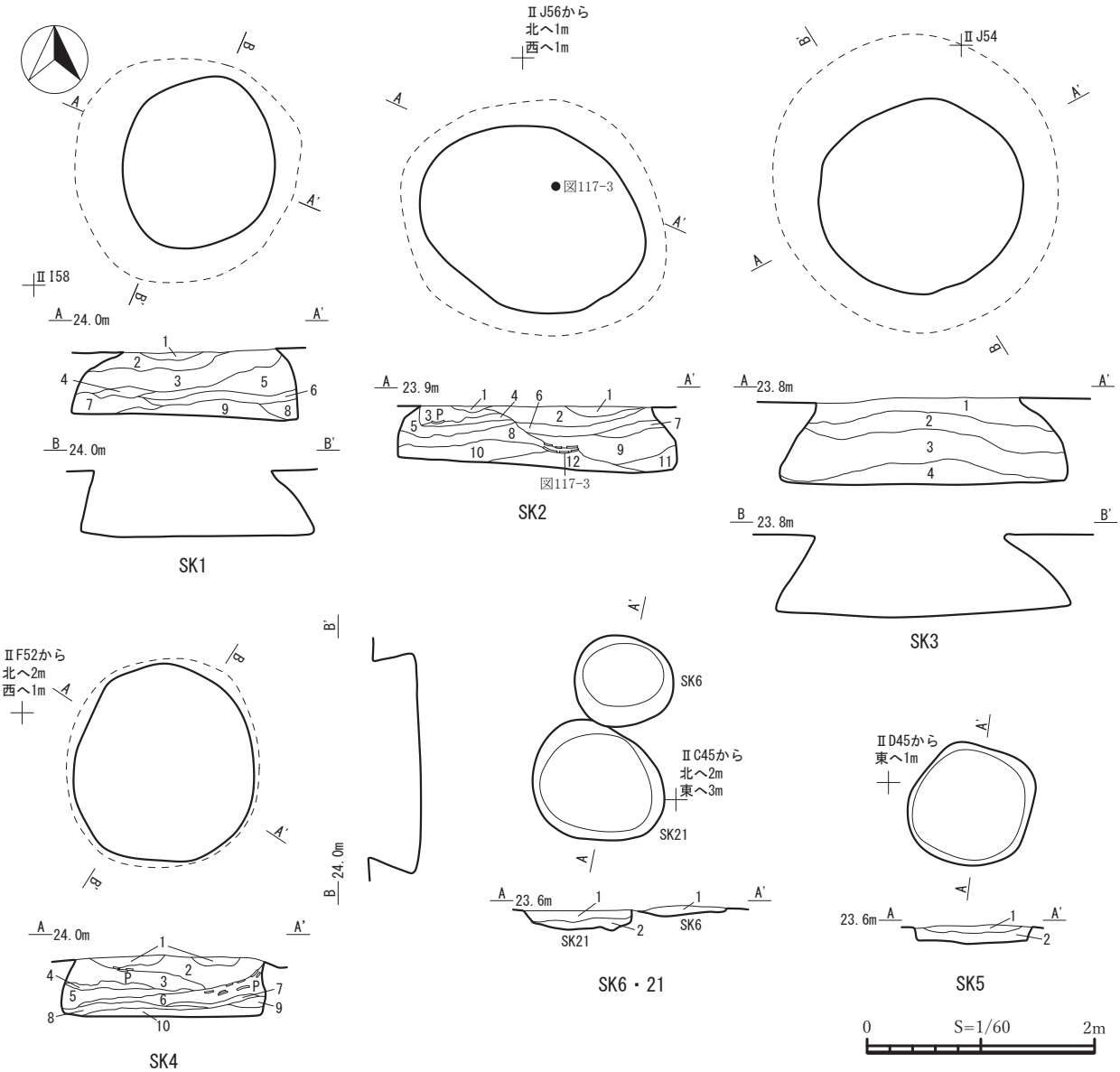


SN18(A-A' B-B' C-C')
1層　7.5YR3/4 暗褐色シルト　焼土、根撹乱多い
2層　10YR2/2　黒褐色シルト
3層　10YR2/2　黒褐色シルト
SN19(A-A')
1層　7.5YR4/4 褐色土

SN20(A-A')
1層　7.5YR4/6 褐色土　被熱層
SN21(A-A')
1層　7.5YR4/4 褐色土　被熱層
SN22(A-A')
1層　7.5YR4/4 褐色土　焼土塊

SN27(A-A')
1層　7.5YR3/4 暗褐色土　焼土、Ⅵ層由来の砂ブロック1%
SN28(A-A')
1層　7.5YR3/4 暗褐色土

図63　焼土遺構（３）



SK1(A-A')

1層	10YR7/6 明黄褐色砂質土	10YR7/8砂質土ブロック混合
2層	10YR4/1 褐灰色シルト	10YR5/6黄褐色土混合(φ2～5㎜炭粒1%)
3層	10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土	7.5YR4/2灰褐色土混合(φ1～2㎜炭粒2%)
4層	10YR6/8 明黄褐色ローム	
5層	10YR4/4 褐色土	10YR6/8明黄褐色ブロック混合(φ1～2㎜炭粒2%)
6層	10YR3/2 黒褐色	10YR2/1黒色土粒(φ1～2㎜1%、10YR6/8明黄褐色粘土粒φ1～3㎜2%)
7層	10YR5/6 黄褐色ローム	10YR4/4褐色土φ1～2㎜2～3%混合
8層	10YR5/8 黄褐色ローム	10YR4/4褐色土φ1～2㎜2～3%混合、9層と漸移
9層	10YR4/4 褐色土	10YR2/1黒色土粒(φ1～2㎜1%、10YR6/8明黄褐色土φ2～5㎜2%、炭粒φ2～5㎜2%)

SK2(A-A')

1層	10YR6/2 灰黄褐色ローム質土	φ1～5㎜炭粒・焼土粒1%混合
2層	10YR3/2 黒褐色土	φ5～30㎜炭粒3%、φ5㎜焼土粒1%混合
3層	10YR5/6 黄褐色ローム	
4層	10YR4/1 褐灰色土	10YR3/1黒褐色土主体、10YR5/6ロームが斑に混合
5層	10YR5/8 黄褐色ローム	
6層	10YR4/4 褐色土	φ1～2㎜炭粒1%、壁際端部は10YR5/6ロームが斑に混合
7層	10YR5/8 黄褐色ローム	
8層	10YR5/6 黄褐色ローム質土	10YR3/2黒褐色土が斑に混合
9層	10YR3/3 暗褐色土	φ5～10㎜炭粒1%、壁際端部は10YR5/6ローム粒(φ5～10㎜)3%混合
10層	10YR5/8 黄褐色ローム	
11層	10YR5/2 灰黄褐色ローム質土	10YR3/1黒褐色土主体、10YR5/8ローム混合
12層	10YR4/4 褐色ローム質土	φ1～5㎜炭粒1%、φ1㎜10YR5/8ローム3%混合

SK3(A-A')

1層	10YR4/3 にぶい黄褐色土	2.5Y5/6砂ブロックを斑状に混合、φ5～20㎜炭化粒3%混合
2層	2.5Y5/6 黄褐色砂土	2.5Y7/6～7/8砂ブロックを斑状に混合、層中央部にφ2～10㎜の炭化粒を含む厚さ20～50㎜の斑状褐色土帯あり
3層	10YR5/8 黄褐色ローム	
4層	10YR3/3 暗褐色土	2.5Y4/3～4/6オリーブ褐色砂と互層をなす

SK4(A-A')

1層	10YR3/1 黒褐色土	10YR7/8黄橙色ロームブロック(20～50㎜)、2.5Y6/8砂ブロック(30㎜)混合、撹乱土
2層	10YR3/4 暗褐色土	φ5～30㎜炭粒3%、10YR6/3～6/6灰色・焼土粒2%混合
3層	10YR4/2 灰黄褐色砂質土	焼土粒1%、壁際に黄褐色ローム塊混合
4層	10YR3/4 暗褐色土	φ1～3㎜炭粒1%混合
5層	2.5Y4/4 オリーブ褐色土	10YR7/8黄橙色ローム粒(φ5～20㎜)、炭粒φ1～10㎜混合
6層	10YR3/3 暗褐色土	φ5～15㎜炭粒3%、10YR6/2灰色混合
7層	10YR2/1 黒色土	炭主体層
8層	10YR4/6 褐色ローム	
9層	10YR4/4 褐色ローム質土	8層土と10層土の混合層
10層	10YR4/3 にぶい黄褐色土	砂質土

SK5(A-A')

1層	10YR3/4 暗褐色砂質土	10YR4/6褐色砂と10YR2/2黒褐色土混合、φ1～10㎜炭粒5%混合
2層	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土	10YR4/6褐色土混合

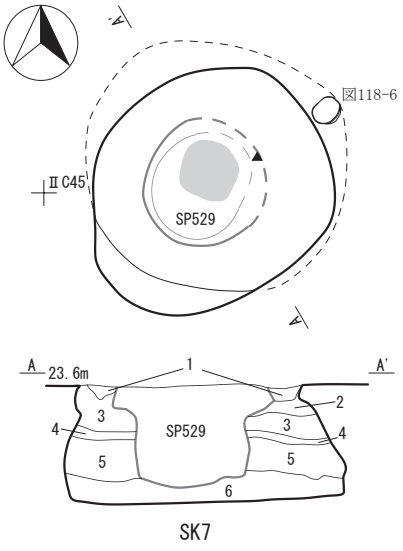
SK6(A-A')

1層	10YR3/3 暗褐色土	10YR4/3にぶい黄褐色土20%、φ10㎜炭粒5%混合

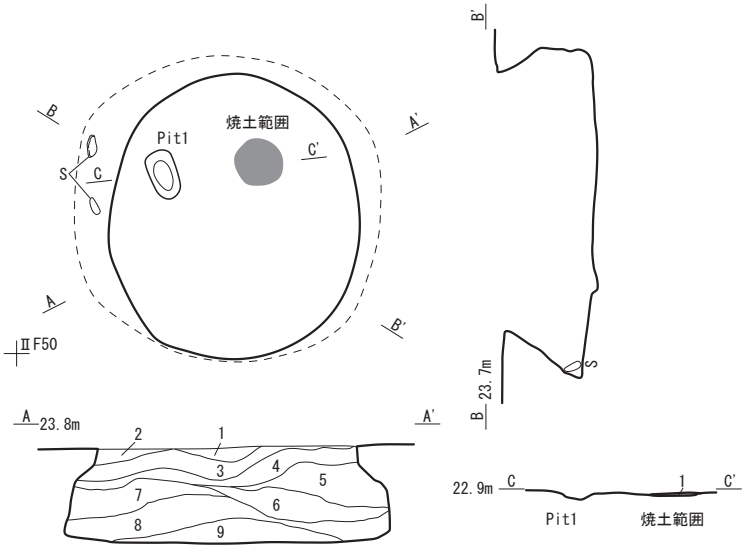
SK21(A-A')

1層	10YR4/4 褐色土	10YR4/6褐色土7%、φ10㎜炭粒5%混合
2層	10YR4/4 褐色土	10YR4/6褐色土20%、φ10㎜炭粒3%混合

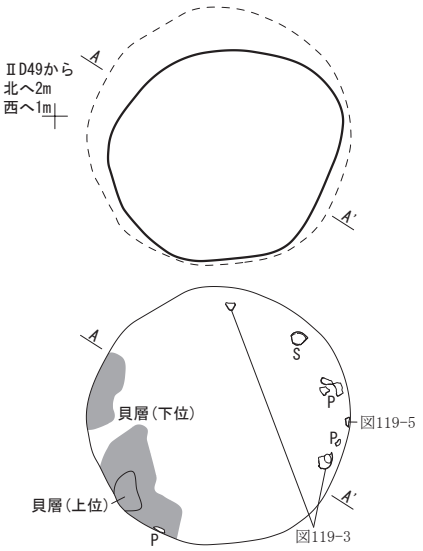
図64　土坑(1)



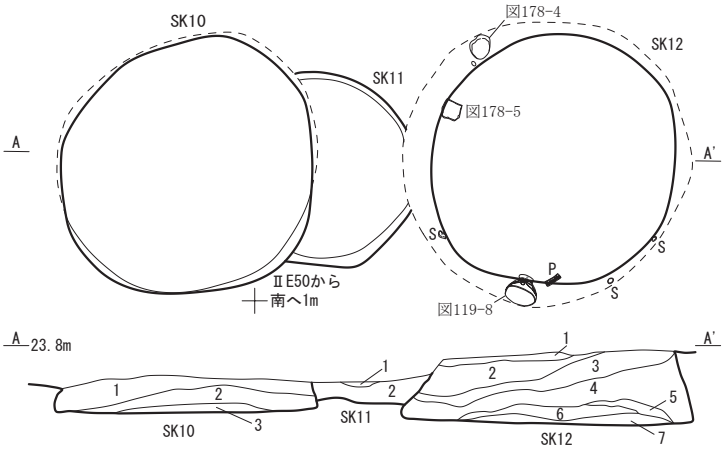
SK7



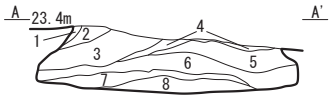
SK8



【堆積土下位～底面出土遺物】



SK10・11・12



SK9

0　S=1/60　2m

SK7(A-A')
1層　10YR3/1 黒褐色土　10YR5/8黄褐色ローム塊、2.5Y6/6明黄褐色砂混合、耕作トレンチャーによる撹乱
2層　10YR5/4 にぶい黄褐色土
3層　10YR5/6 黄褐色ローム質土　10YR4/6褐色ローム、2.5Y6/6明黄褐色砂混合
4層　10YR4/3 にぶい黄褐色土
5層　10YR6/6 明黄褐色ローム質土　10YR4/4褐色土塊、2.5Y5/6黄褐砂色塊、φ2～10㎜炭粒混合
6層　10YR3/4 暗褐色土　10YR5/6黄褐色ロームと互層、2.5Y6/6明黄褐色砂粒、φ10㎜炭粒混合

SK8(A-A')
1層　10YR3/2 黒褐色土　φ1～10㎜炭粒2%、焼土粒1%混合
2層　10YR5/8 黄褐色ローム
3層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　φ1～20㎜炭粒1%、φ2～5㎜焼土粒・ローム粒1%混合
4層　10YR4/4 褐色土　上位に10YR4/4褐色土の混土帯　中位にφ3～5㎜炭化粒が集中、壁際は地山と漸移
5層　10YR5/6 黄褐色土　2.5Y5/4黄褐色砂塊(周壁土)が混合
6層　10YR4/2 灰黄褐色土　φ10～20㎜炭粒1%混合、10YR5/8黄褐色ローム板状堆積(上下層で漸移)
7層　10YR6/6 明黄褐色ローム
8層　10YR3/2 黒褐色土　上部が10YR6/6ローム塊混合
9層　10YR4/6 褐色土　10YR5/6～6/6ロームとの互層

SK8 焼土(C-C')
1層　2.5YR4/8 赤褐色土　2.5Y5/6の黄褐色砂の焼成層

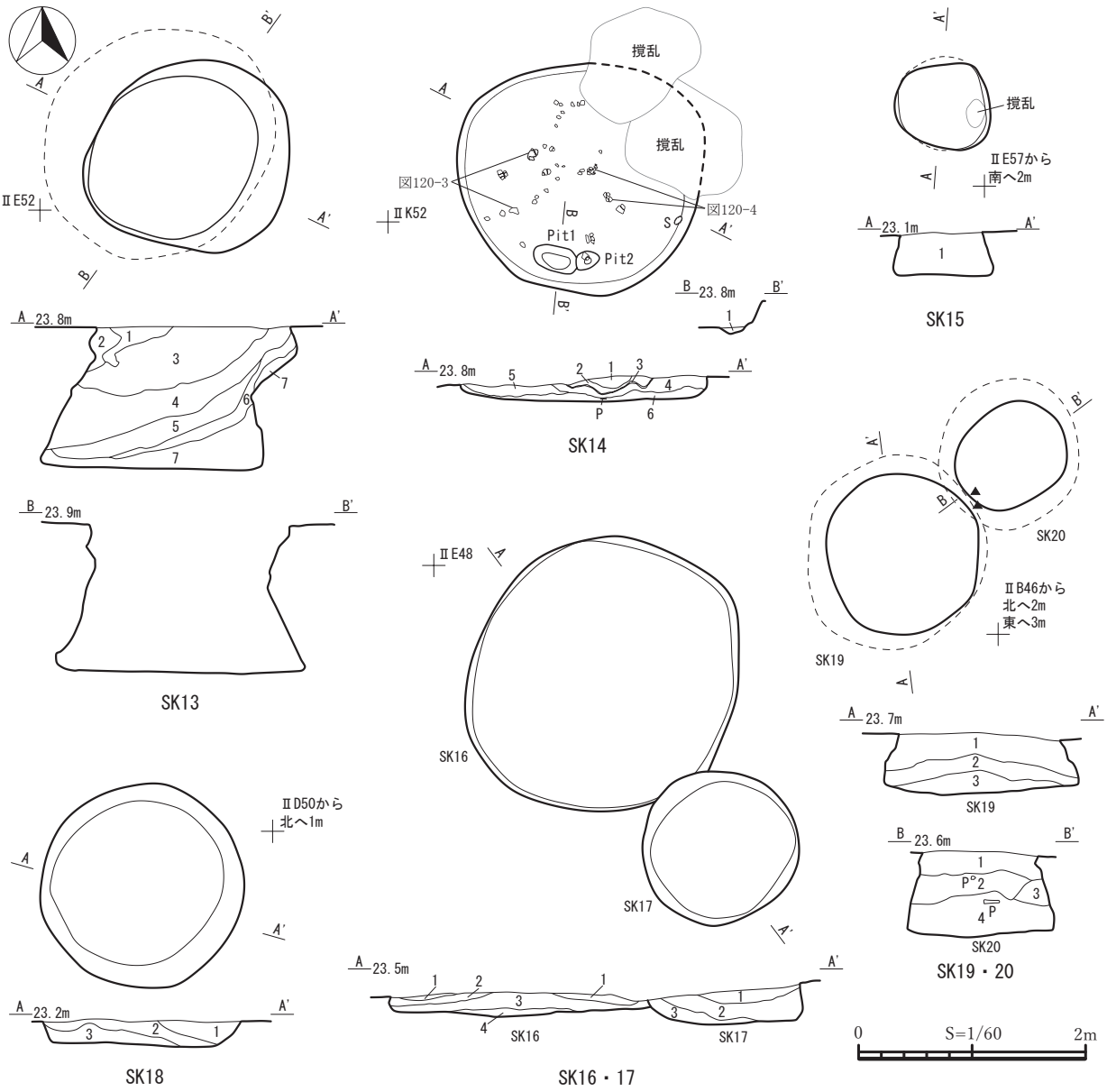
SK9(A-A')
1層　10YR5/8 黄褐色ローム
2層　10YR3/2 黒褐色土　10YR5/8黄褐色ローム粒、2.5Y5/6黄褐色砂混合、φ5～30㎜炭粒7%、φ1㎜焼土粒1%混合
3層　10YR4/4 褐色土　φ10㎜炭粒混合
4層　10YR5/6 黄褐色土　10YR5/8黄褐色ローム塊、10YR4/2灰黄褐色土を斑に混合
5層　10YR5/4 にぶい黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム塊、2.5Y5/6黄褐色砂混合、φ5～20㎜炭粒3%混合
6層　10YR5/3 にぶい黄褐色土　φ5～10㎜炭粒混合
7層　10YR3/3 暗褐色土　炭化物厚さ20㎜の板状層を中心に多量混合
8層　10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム塊斑に混合

SK10(A-A')
1層　10YR5/8 黄褐色ローム質土　2.5Y6/8明黄褐色砂下位主体に混合
2層　10YR3/1 黒褐色土　2.5Y6/8明黄褐色砂、10YR5/8黄褐色ローム粒混合、φ5～10㎜炭粒2%混合
3層　10YR4/1 褐灰色土　10YR5/8黄褐色ローム粒微量混合

SK11(A-A')
1層　10YR3/2 黒褐色土　5YR4/6赤褐色焼土混合
2層　2.5Y5/6 黄褐色砂　10YR5/8黄褐色ローム塊混合

SK12(A-A')
1層　10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色土20%、φ1～5㎜炭粒10%混合
2層　10YR3/3 暗褐色土　10YR5/8黄褐色土10%、φ1～5㎜炭粒5%混合
3層　10YR4/4 褐色土　10YR3/4暗褐色土20%、10YR5/8黄褐色土5%、φ1～3㎜炭粒3%混合
4層　10YR3/3 暗褐色土　10YR6/8明黄褐色土5%、φ1～20㎜炭粒15%混合
5層　10YR4/6 褐色土　10YR3/3暗褐色土10%、φ1～10㎜炭粒1%混合
6層　5YR5/6 明赤褐色土　7.5YR8/1～8/2灰白色粒(φ10㎜)、φ1㎜炭粒3%混合
7層　10YR3/3 暗褐色土　φ1㎜炭粒1%混合

図65　土坑(２)



SK13(A-A')
1層 10YR3/4 暗褐色土　10YR5/6ローム塊と2.5Y5/6黄褐色砂混合
2層 10YR4/6 褐色ローム質土　10YR5/6ローム塊と2.5Y5/6黄褐色砂混合、周壁崩落混合
3層 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂　φ1～3㎜炭粒1%混合
4層 10YR5/6 黄褐色砂質土　2.5Y5/6黄褐色砂60%、10YR5/6黄褐色ローム土40%混合
5層 10YR5/4 にぶい黄褐色土　ローム質
6層 10YR3/2 黒褐色土　10YR5/8黄褐色ローム粒2%混合
7層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR2/3黒褐色土、10YR5/6黄褐色ローム塊混合(一部互層)、φ5～10㎜炭粒

SK14(A-A')
1層 10YR6/4 にぶい黄橙色土　ローム質、10YR4/4褐色土斑に混合
2層 10YR5/6 黄褐色砂　堅く緻密
3層 10YR3/2 黒褐色土　薄層
4層 10YR5/8 黄褐色土　ローム質、φ1～5㎜炭粒2%混合
5層 10YR6/6 明黄褐色ローム
6層 10YR2/3 黒褐色土　φ1～30㎜炭粒3%混合

SK14 Pit1(B-B')
1層 10YR3/4 暗褐色土　φ1～10㎜炭粒10%混合

SK15(A-A')
1層 10YR2/3 黒褐色土　10YR2/3黒褐色土5%、φ1～5㎜炭粒1%混合

SK16(A-A')
1層 10YR5/6 黄褐色土　10YR3/4暗褐色土5%、φ1㎜炭粒1%混合
2層 10YR3/4 暗褐色土　5YR4/8赤褐色土5%、φ1～10㎜炭粒10%混合
3層 10YR3/3 暗褐色土　10YR5/6黄褐色土15%、φ1～10㎜炭粒1%混合
4層 10YR4/4 褐色土　φ1～20㎜炭粒2%

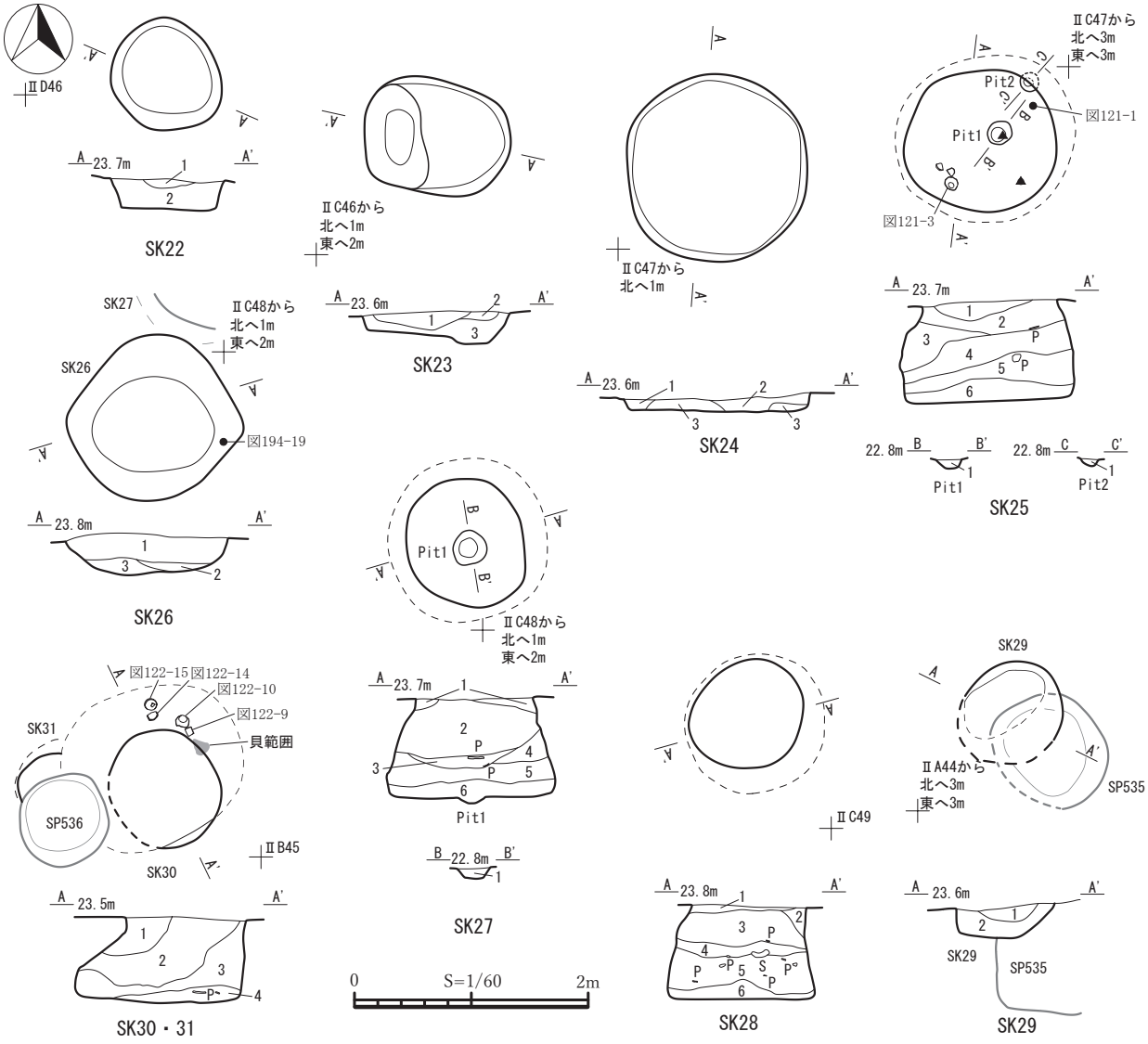
SK17(A-A')
1層 10YR4/4 褐色土　10YR4/6褐色土10%、φ1～10㎜炭粒3%混合
2層 10YR3/2 黒褐色土　φ1～5㎜炭粒2%混合
3層 10YR4/4 褐色土　10YR4/6褐色土5%、φ1～5㎜炭粒1%混合

SK18(A-A')
1層 10YR3/3 暗褐色土　10YR6/6明黄褐色ローム塊、φ10㎜炭粒・焼土粒3%混合
2層 2.5Y6/6 明黄褐色砂
3層 10YR5/8 黄褐色ローム質土　2.5Y6/8明黄褐色砂混合

SK19(A-A')
1層 10YR3/1 黒褐色土　2.5Y6/8明黄褐色砂塊(φ10～50㎜)混合、φ5～20㎜炭粒3%混合
2層 10YR3/3 暗褐色土　2.5Y5/6黄褐色砂粒混合
3層 10YR2/3 黒褐色土　10YR6/8明黄褐色ローム粒、φ1～20㎜炭粒1%混合

SK20(B-B')
1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR6/8明黄褐色ローム粒、φ5～20㎜炭粒2%混合
2層 10YR3/1 黒褐色土　10YR6/8明黄褐色ローム粒(φ2㎜～5㎜)、2.5Y5/6黄褐色砂混合、φ5～10㎜炭粒
3層 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂　10YR4/3にぶい黄褐色土混合
4層 10YR4/4 褐色土　φ1～10㎜炭粒1%混合

図66　土坑(3)



SK22(A-A')
1層 10YR3/4 暗褐色土　10YR4/6褐色土15%、φ10㎜炭粒5%混合
2層 10YR4/6 褐色砂　φ1～5㎜炭粒1%混合

SK23(A-A')
1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR4/6褐色土10%、φ1～5㎜炭粒5%混合
2層 10YR4/6 褐色土　10YR4/3にぶい褐色土20%混合
3層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR4/6褐色土1%、φ1～5㎜炭粒3%混合

SK24(A-A')
1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　2.5Y6/6明黄褐色砂塊混合
2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR6/6明黄褐色ローム塊混合
3層 10YR6/6 明黄褐色ローム

SK25(A-A')
1層 10YR3/3 暗褐色土　2.5YR5/4黄褐色砂混合、φ1～10㎜炭粒2%混合
2層 10YR5/2 灰黄褐色土　2.5YR5/4黄褐色砂塊混合(1層より混合多)、φ1～10㎜炭粒2%混合
3層 10YR4/6 褐色砂質土　2.5YR5/4～5/6黄褐色砂塊混合(1層より多)、φ1～3㎜炭粒1%混合
4層 10YR3/3 暗褐色土　層上部層理付近に、φ5～30㎜炭粒15%混合
5層 10YR5/6 黄褐色土　10YR4/4褐色土混合率多、ローム質
6層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　φ5～10㎜炭粒1%混合

SK25 Pit1(B-B')
1層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　φ5～10㎜炭粒1%混合

SK25 Pit2(C-C')
1層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　φ5～10㎜炭粒1%混合

SK26(A-A')
1層 10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム板状互層混合、φ5～20㎜炭粒2%混合
2層 10YR5/6 黄褐色砂質土　10YR5/6黄褐色ローム、2.5Y4/6オリーブ褐色砂混合
3層 10YR5/4 にぶい黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒混合

SK27(A-A')
1層 10YR5/8 黄褐色ローム　北側は10YR4/3にぶい黄褐色土と混合、一部2.5Y5/6黄褐色砂混合
2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　本層中央部を除き、両側に10YR5/8黄褐色ローム破砕塊が混合、3層中央部層理面上に5Y4/6赤褐色破砕焼土混合
3層 10YR3/1 黒褐色土　φ5～10㎜炭粒、φ5㎜焼土粒5%混合
4層 10YR4/6 褐色ローム質土
5層 10YR3/4 暗褐色ローム質土　10YR5/6黄褐色ローム粒3%混合
6層 10YR5/4 にぶい黄褐色土　2.5Y5/6黄褐色砂塊混合

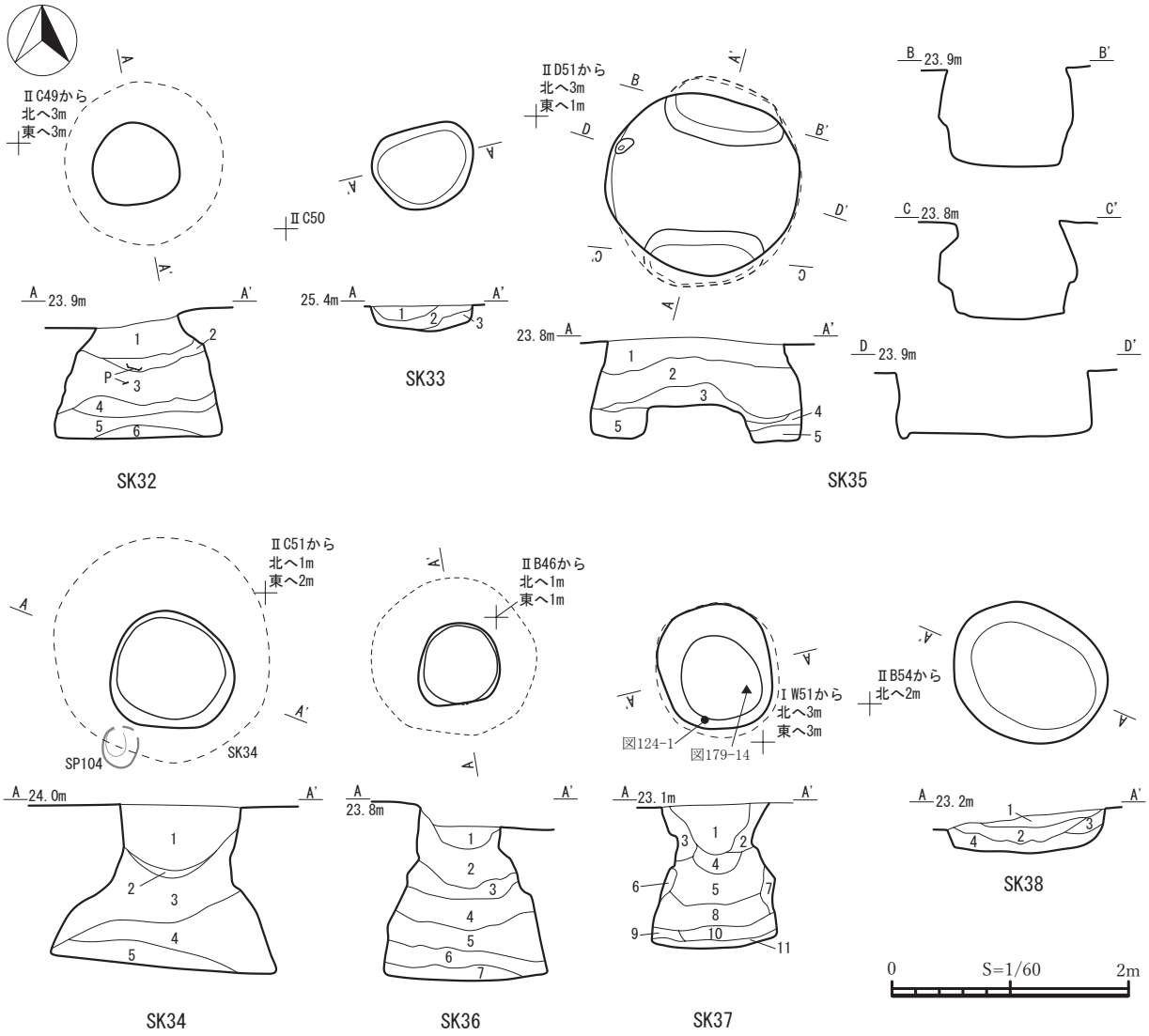
SK27 Pit1(B-B')
1層 10YR5/4 にぶい黄褐色土　2.5Y5/6黄褐色砂塊混合

SK28(A-A')
1層 2.5Y6/6 明黄褐色砂質土　一部10YR4/4褐色土混合
2層 10YR4/6 褐色ローム質土　掘りすぎか？
3層 10YR5/2 灰黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒混合、φ5～10㎜炭粒3%混合
4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒混合(2層より混合多)、φ5㎜炭粒2%混合
5層 10YR3/2 黒褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒混合、φ5～20㎜炭粒5%混合
6層 10YR4/6 褐色ローム

SK29(A-A')
1層 10YR4/6 褐色土　φ1～5㎜炭粒1%混合
2層 10YR4/4 褐色土　φ1～5㎜炭粒3%混合

SK30(A-A')
1層 10YR6/8 明黄褐色土　10YR4/2灰黄褐色ローム10%混合
2層 10YR4/2 灰黄褐色土　φ1～20㎜炭粒3%、φ5㎜焼土粒1%混合
3層 10YR5/8 黄褐色土　φ1～10㎜炭粒3%混合
4層 10YR3/1 黒褐色土　φ1～10㎜炭粒5%混合

図67　土坑（4）



SK32(A-A')

1層	10YR5/4 にぶい黄褐色土	10YR5/6黄褐色ローム粒(φ1～20㎜)7%、φ2～15㎜炭粒2%混合
2層	10YR5/8 黄褐色土	10YR5/3にぶい黄褐色ローム多量混合、φ5～10㎜炭粒1%混合
3層	10YR4/4 褐色土	10YR5/6黄褐色ローム粒(φ1～20㎜)3%、φ5～20㎜炭粒7%混合
4層	10YR4/3 にぶい黄褐色土	10YR5/6黄褐色ローム塊多量混合、φ1～5㎜炭粒1%混合
5層	10YR4/2 灰黄褐色土	φ1～10㎜炭粒1%混合
6層	10YR4/4 褐色土	10YR5/6黄褐色ローム粒(φ1～10㎜)2%混合

SK33(A-A')

1層	10YR3/2 黒褐色土	10YR6/8明黄褐色ローム粒1%、φ2～5㎜炭粒1%混合
2層	10YR4/2 灰黄褐色土	φ2～10㎜炭粒2%混合
3層	10YR5/3 にぶい黄褐色土	φ1～5㎜炭粒1%混合

SK34(A-A')

1層	10YR4/2 灰黄褐色土	10YR6/8明黄褐色ローム粒(φ5～10㎜)3%、φ5～30㎜炭粒5%、φ30～50㎜焼土塊2%混合
2層	10YR6/8 明黄褐色ローム質土破砕塊	10YR3/2黒褐色土粒混合
3層	10YR3/2 黒褐色土	10YR6/8明黄褐色ローム粒(φ5～10㎜)3%、同ローム塊両壁際に混合、φ5～10㎜炭粒混合
4層	10YR4/6 褐色土	10YR6/8明黄褐色ローム粒(φ1～5㎜)1%、φ20㎜焼土塊1%混合
5層	10YR4/3 にぶい黄褐色土	10YR6/8明黄褐色ローム粒(φ1～5㎜)2%、φ5～10㎜炭粒1%混合

SK35(A-A')

1層	2.5Y5/6 黄褐色砂	φ1～5㎜炭粒2%混合
2層	10YR6/6 明黄褐色ローム	同破砕ローム塊(φ10～70㎜そぼろ状)
3層	10YR3/2 黒褐色土	10YR4/6褐色土粒、φ1～5㎜炭粒1%混合
4層	10YR4/4 褐色土	10YR5/6黄褐色ローム塊(φ10～30㎜)、φ1～5㎜炭粒2%混合
5層	2.5Y6/6 明黄褐色砂	

SK36(A-A')

1層	10YR4/3 にぶい黄褐色土	2.5Y6/6明黄褐色砂5%、φ1～5㎜炭粒1%混合
2層	10YR3/3 暗褐色土	10YR5/8黄褐色ローム粒10%混合
3層	10YR4/3 にぶい黄褐色土	2.5Y6/6明黄褐色砂3%、10YR5/8明黄褐色ローム粒2%混合
4層	10YR3/3 暗褐色土	10YR5/6明黄褐色ローム粒3%、φ1～5㎜炭粒1%混合
5層	10YR3/3 暗褐色土	10YR5/8黄褐色ローム粒3%混合
6層	10YR3/2 黒褐色土	10YR5/6黄褐色ローム粒3%混合
7層	10YR3/2 黒褐色土	10YR5/8黄褐色ローム粒2%、φ1～3㎜焼土粒2%混合

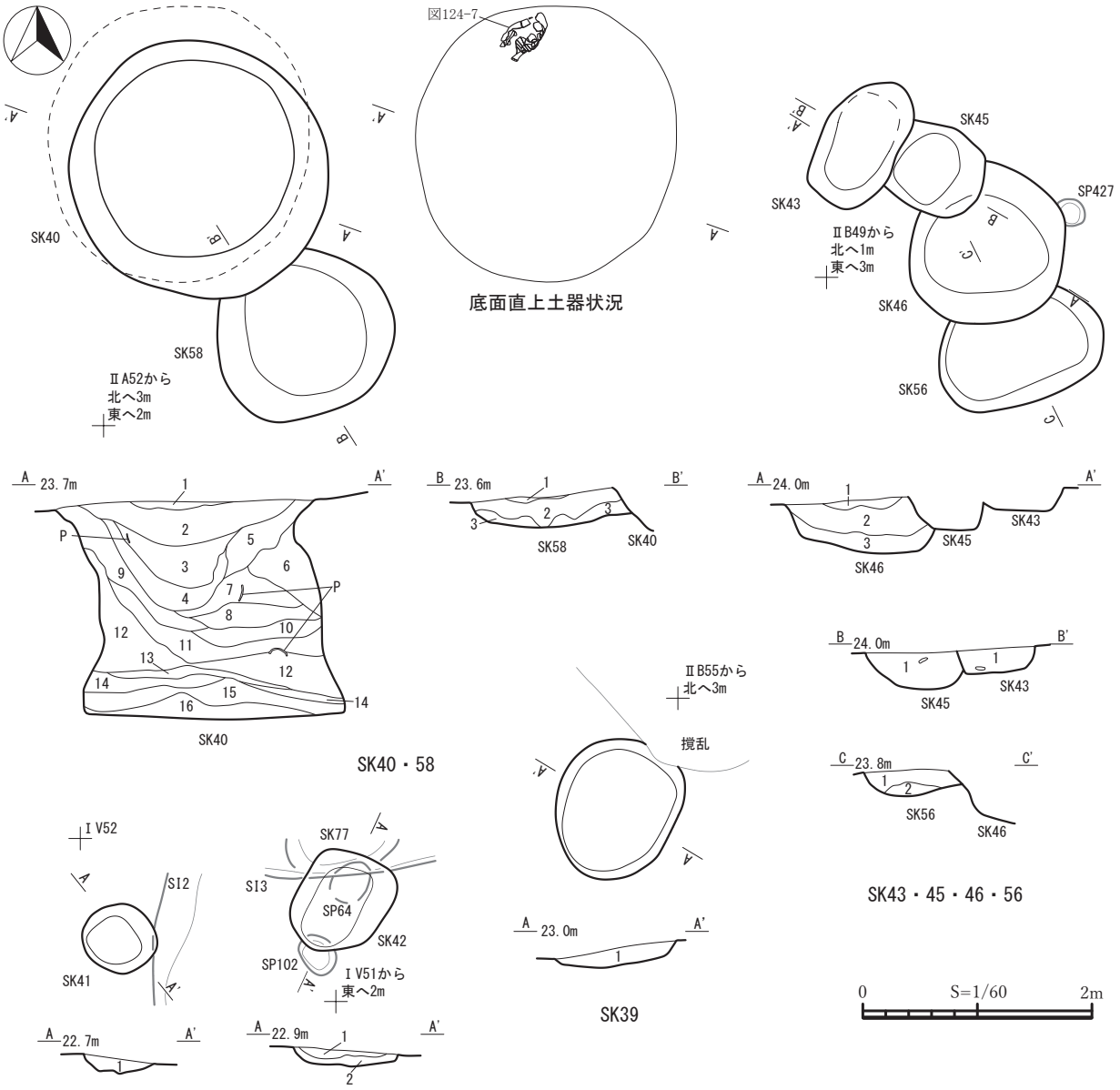
SK37(A-A')

1層	10YR3/3 暗褐色土	φ1～10㎜砂礫ブロック・炭化物1%、φ1～5㎜焼土1%
2層	10YR4/4 褐色土	φ1～10㎜砂礫ブロック・炭化物2%
3層	10YR5/6 黄褐色土	ローム主体層、φ1～5㎜砂礫ブロック・炭化物1%
4層	10YR4/4 褐色土	V層由来のローム、VI層由来の砂多量に含む
5層	10YR4/4 褐色土	ローム主体層、粘性中
6層	10YR5/6 黄褐色土	ローム主体層、壁面崩落土か、粘性中
7層	10YR5/6 黄褐色土	ローム主体層、壁面崩落土か、粘性中
8層	10YR4/4 褐色土	ローム主体層、粘性中
9層	10YR3/3 暗褐色土	砂礫・小礫含む
10層	10YR3/3 暗褐色土	φ1～10㎜炭化物2%、遺物包含
11層	10YR3/4 暗褐色土	φ1～5㎜炭化物1%

SK38(A-A')

1層	10YR3/2 黒褐色土	φ2～5㎜炭粒1%混合
2層	10YR3/1 黒褐色土	10YR5/8黄褐色ローム粒(φ2～5㎜)2%、φ2～5㎜炭粒1%混合
3層	10YR4/1 褐灰色土	10YR5/8黄褐色ローム塊、斑に混合
4層	10YR5/8 黄褐色ローム質土	10YR4/1褐灰色土混合

図68　土坑(５)



SK39(A-A')
1層 10YR3/1 黒褐色土　10YR5/8黄褐色ローム粒(φ2～5㎜)1%、φ2～5㎜炭粒と焼土粒2%混合

SK40(A-A')
1層 10YR2/1 黒色土　φ2㎜炭粒1%混合
2層 10YR3/3 暗褐色土　φ5～20㎜炭粒・焼土粒2%混合
3層 10YR3/1 黒褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒3%、φ5～20㎜炭粒7%、φ2㎜焼土粒1%混合
4層 10YR5/6 黄褐色ローム　Ⅴ層土の破砕塊、10YR3/3暗褐色土の混合層　φ5㎜炭粒2%混合
5層 10YR4/1 褐灰色土　φ5㎜炭粒1%混合、壁際は漸移混合
6層 10YR4/6 褐色ローム質土　10YR3/3暗褐色土混合、φ5㎜炭粒1%混合
7層 10YR4/2 灰黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム破砕塊斑に混合、φ5～10㎜炭粒1%混合
8層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム破砕塊斑に混合、φ5～20㎜炭粒・焼土粒3%混合
9層 10YR3/1 黒褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒5%、φ5～50㎜炭粒・炭化物塊5%、φ5㎜焼土粒3%混合
10層 10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム破砕塊多く、壁際で漸移、φ5～30㎜炭粒3%混合
11層 10YR3/2 黒褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒5%混合、同ローム土壁際に互層、φ5～20㎜炭粒・炭化物塊5%、φ5㎜焼土粒2%混合
12層 10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム破砕塊と10YR3/1黒褐色土が斑状に混合、φ5～10㎜炭粒2%混合
13層 10YR3/2 黒褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒5%混合、φ5～20㎜炭粒・炭化物塊5%、φ5㎜焼土粒2%混合
14層 10YR5/6 黄褐色ローム　板状の10YR5/6黄褐色ローム50%以上で構成
15層 10YR3/3 暗褐色土　Ⅴ層土の板状塊が互層に堆積、10YR5/6黄褐色ローム粒7%、φ1～5㎜炭粒3%混合
16層 10YR2/3 黒褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒5%、φ1～5㎜炭粒2%混合

SK41(A-A')
1層 10YR2/3 黒褐色土　ロームの混土層

SK42(A-A')
1層 10YR2/2 黒褐色土
2層 10YR3/4 暗褐色土　ローム土、φ1～5㎜炭化物・焼土粒1%混入

SK43(B-B')
1層 10YR4/1 褐灰色土　φ1～5㎜炭粒3%混合

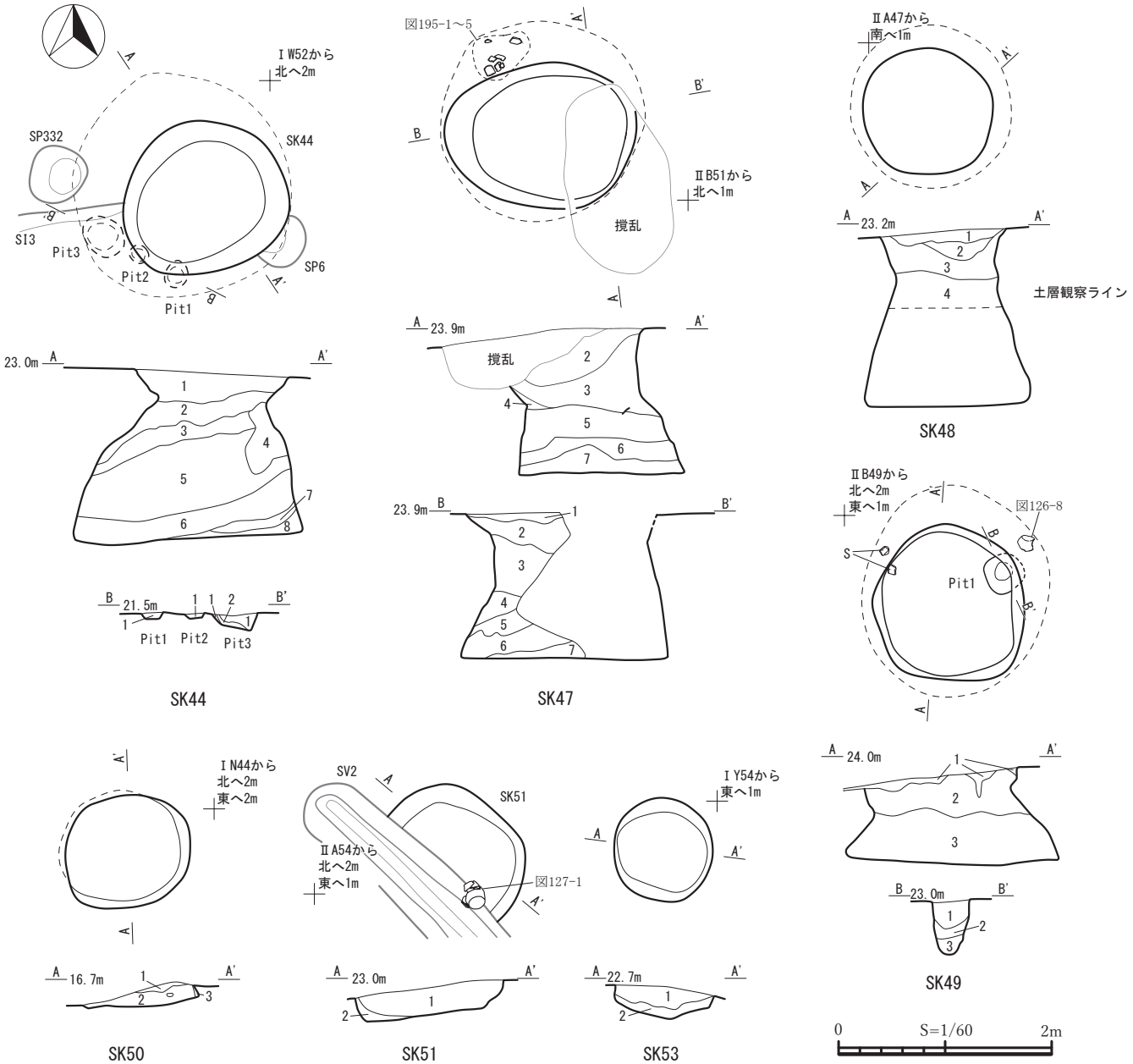
SK45(B-B')
1層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　φ1㎜炭粒1%混合

SK46(A-A')
1層 10YR4/1 褐灰色土　φ5～10㎜炭粒2%混合
2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　φ10～20㎜炭粒2%混合
3層 10YR4/4 褐色土

SK56(C-C')
1層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　10YR2/1黒色土粒3%、10YR5/8黄褐色ローム塊混合
2層 10YR5/6 黄褐色ローム質土

SK58(B-B')
1層 10YR3/1 黒褐色土
2層 10YR3/3 暗褐色土　φ10～20㎜炭化粒3%、φ～5㎜Ⅴ層内ローム粒2%
3層 10YR4/6 褐色土　Ⅴ層土の破砕塊を斑状に混合

図69　土坑(6)



SK44(A-A')
1層 10YR4/4 褐色土　φ1～5㎜砂礫ブロック(Ⅵ層由来)・炭化物・焼土粒1%、上部中央は土壌化により暗褐色土(10YR3/4)を呈する
2層 10YR3/4 暗褐色土　φ1～30㎜砂礫ブロック10%、φ1～5㎜炭化物・焼土粒1%
3層 10YR5/6 黄褐色土　ローム主体層、φ1～20㎜砂礫ブロック10%、粘性中
4層 10YR5/6 黄褐色土　壁面崩落土、粘性中
5層 10YR5/6 黄褐色土　ローム主体層、φ1～10㎜砂礫ブロック2%、粘性中
6層 10YR4/6 褐色土　ローム主体層、粘性中
7層 10YR2/3 黒褐色土　中央付近でローム土との互層を構成、粘性中
8層 10YR4/4 褐色土　ローム主体の薄層、粘性中

SK44 Pit1(B-B')
1層 10YR3/4 暗褐色土　ローム質土を含む、φ1～20㎜砂礫ブロック5%、φ1～5㎜炭化物1%、粘性やや弱

SK44 Pit2(B-B')
1層 10YR3/4 暗褐色土　褐色(10YR4/6)のローム混じる

SK44 Pit3(B-B')
1層 10YR3/4 暗褐色土　ローム質土を含む、φ1～20㎜砂礫ブロック5%、φ1～5㎜炭化物2%、粘性やや弱
2層 10YR4/6 褐色土　ローム主体層、粘性中

SK47(A-A' B-B')
1層 10YR2/1 黒色土　下位10YR4/2灰黄褐色土塊、φ10㎜焼土粒2%混合
2層 10YR4/2 灰黄褐色土　10YR5/8黄褐色ローム破砕塊混合、φ5～10㎜炭粒2%、φ10㎜焼土粒1%混合
3層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　φ5～10㎜炭粒7%混合
4層 10YR5/4 にぶい黄褐色土　10YR5/8黄褐色ローム破砕塊混合
5層 10YR3/2 黒褐色土　10YR5/8黄褐色ローム破砕塊混合、φ10～20㎜炭粒3%混合
6層 10YR4/6 褐色ローム質土　10YR4/6～5/6黄褐色ローム破砕塊層
7層 10YR3/3 暗褐色土　φ5～10㎜炭粒・焼土粒2%混合

SK48(A-A')
1層 10YR2/1 黒色土　ローム1%
2層 10YR2/2 黒褐色土　ローム3%、炭化物1%
3層 10YR4/4 褐色土　炭化物1%
4層 10YR3/4 暗褐色土　ローム1%

SK49(A-A')
1層 10YR3/2 黒褐色シルト　炭化物2%、ローム粒1%
2層 10YR3/3 暗褐色シルト　ローム粒3%
3層 10YR3/3 暗褐色シルト　ローム粒5%

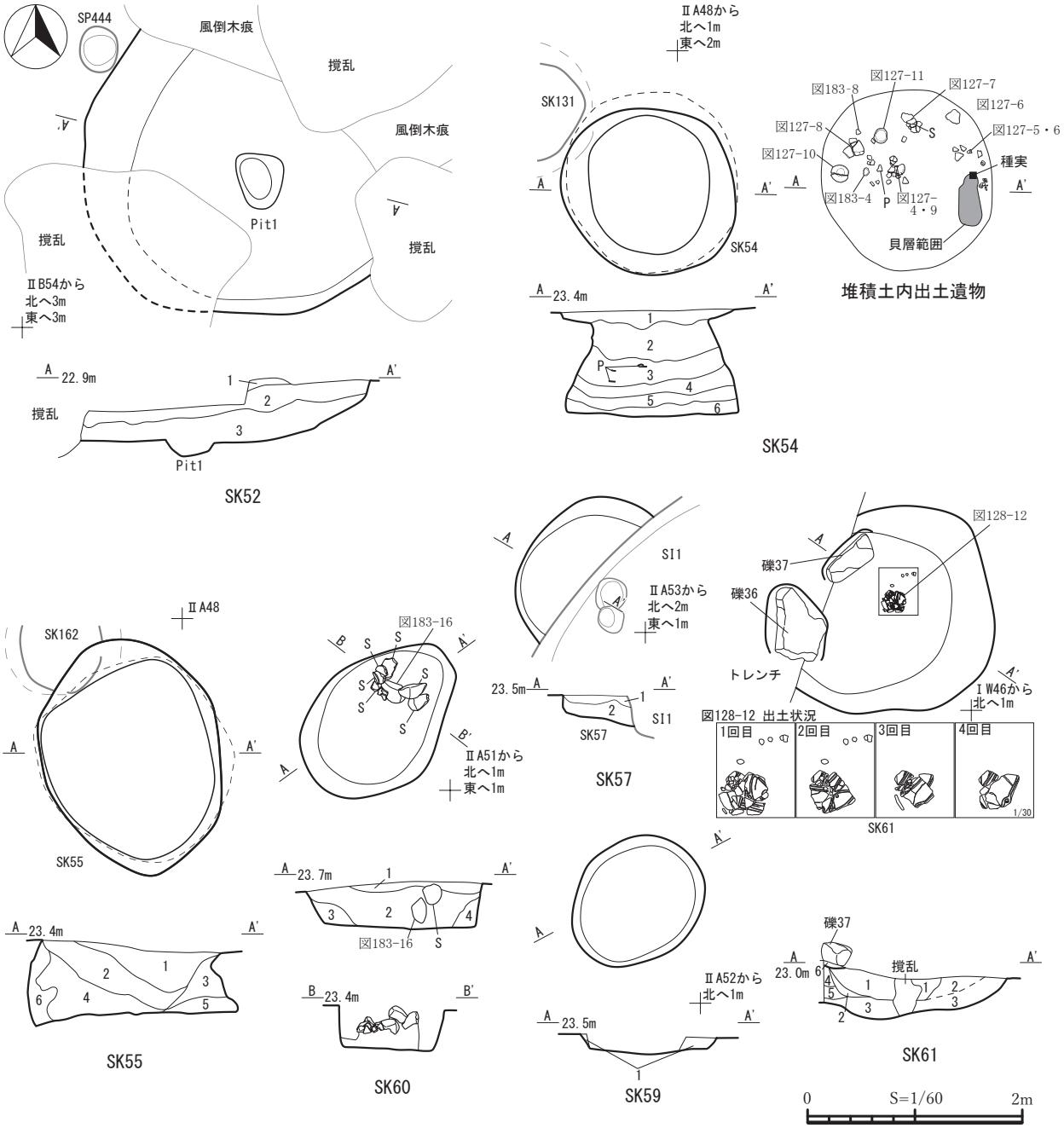
SK49 Pit1(B-B')
1層 10YR3/2 黒褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒1%、φ1～10㎜炭粒2%混合
2層 10YR3/3 暗褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒3%混合
3層 10YR3/3 暗褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒5%混合

SK50(A-A')
1層 10YR2/2 黒褐色シルト　炭化物3%混入、遺物多い
2層 10YR2/3 黒褐色シルト　炭化物5%、焼土粒2%以下混入
3層 10YR4/6 褐色シルト質ローム

SK51(A-A')
1層 10YR4/2 灰黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム破砕塊混合、φ5～10㎜炭粒3%混合
2層 10YR5/4 にぶい黄褐色ローム質土

SK53(A-A')
1層 10YR3/2 黒褐色土　φ5～10㎜炭粒7%、φ5㎜焼土粒1%混合
2層 10YR4/4 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒(φ5～10㎜)混合

図70　土坑(7)



SK52(A-A')
1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒(φ5～10㎜)混合
2層 10YR4/6 褐色土　10YR5/6黄褐色ローム破砕塊多量混合
3層 10YR4/6 褐色土　φ1～20㎜ロームブロック1%、φ1～5㎜炭化物1%

SK54(A-A')
1層 10YR2/2 黒褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒1%混合
2層 10YR5/3 にぶい黄褐色ローム質土　10YR2/2黒褐色土粒3%、10YR5/6黄褐色ローム混合
3層 10YR3/1 黒褐色土　10YR5/8黄褐色ローム粒(φ2～5㎜)1%、φ2～5㎜炭粒2%混合
4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR5/8黄褐色ローム粒(φ2～5㎜)5%、φ2～5㎜焼土粒1%混合
5層 10YR3/3 暗褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒3%、φ5～10㎜炭粒1%混合
6層 10YR5/6 黄褐色ローム質土　φ5～10㎜炭粒1%混合

SK55(A-A')
1層 10YR3/1 黒褐色土　10YR6/4にぶい黄橙色ローム粒3%混合
2層 10YR3/2 黒褐色土　10YR6/6明黄褐色ローム土混合、φ5㎜炭粒1%混合
3層 10YR6/8 明黄褐色ローム質土　10YR3/1黒褐色土5%、φ1～5㎜炭粒1%混合
4層 10YR3/2 黒褐色土　10YR6/6明黄褐色ローム粒2%、φ5㎜炭粒1%混合
5層 10YR5/6 黄褐色ローム質土　φ5㎜炭粒1%混合
6層 10YR4/4 褐色ローム質土　壁崩落土

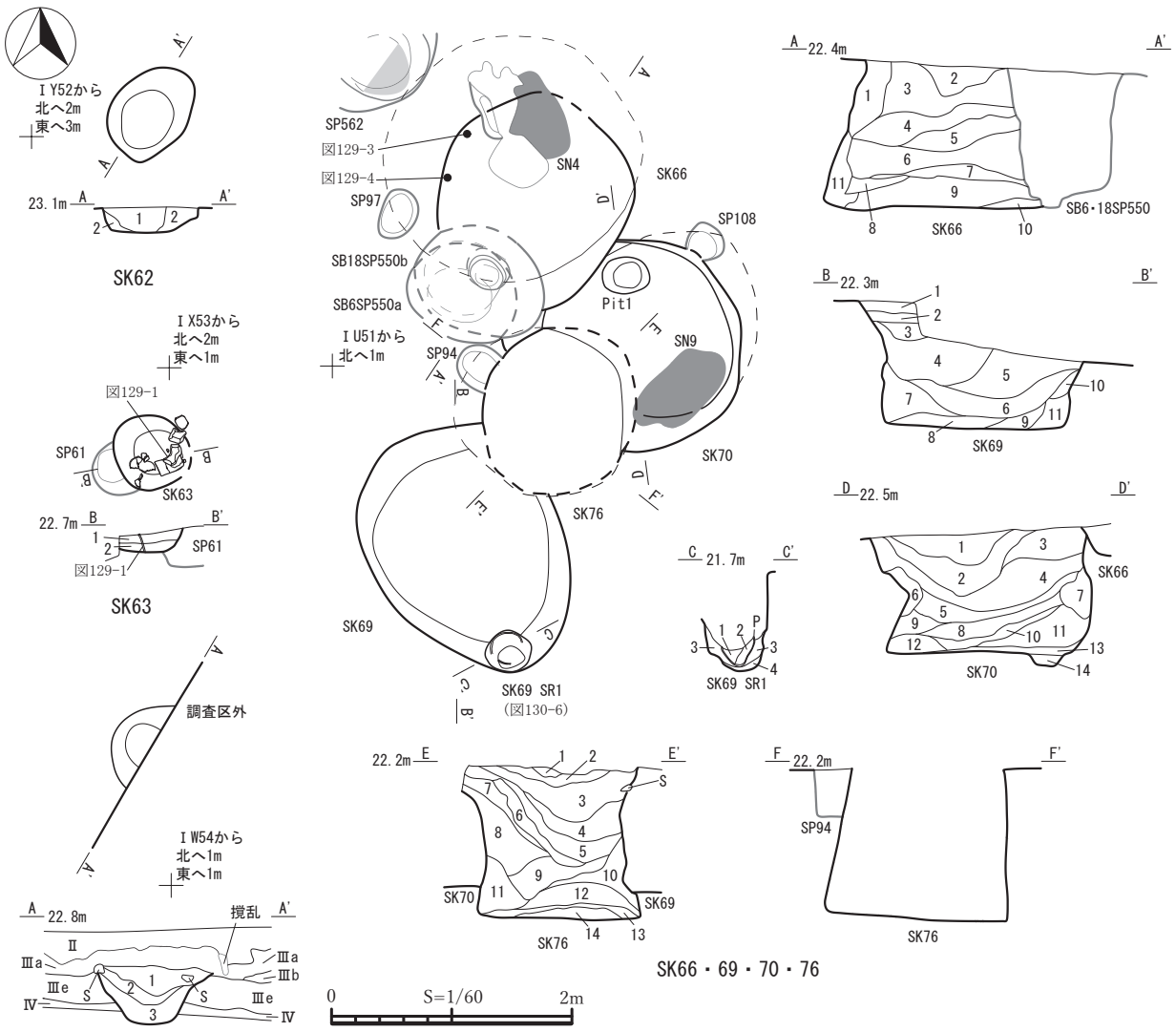
SK57(A-A')
1層 10YR3/2 黒褐色土　φ1～5㎜炭粒2%、φ2㎜焼土塊1%混合
2層 10YR5/4 にぶい黄褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒(φ5㎜)混合、φ2㎜炭粒2%混合

SK59(A-A')
1層 10YR4/6 褐色土 ローム質土

SK60(A-A')
1層 10YR3/3 暗褐色土　φ1～5㎜炭粒1%、焼土塊5～30㎜2%混合
2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR6/8明黄褐色ローム粒2%、φ1～5㎜炭粒1%、φ1～3㎜焼土粒2%混合
3層 10YR4/6 褐色土　φ1～5㎜炭粒1%、焼土塊1～20㎜2%混合
4層 10YR5/6 黄褐色ローム質土　φ1～10㎜炭粒・焼土粒2%混合

SK61(A-A')
1層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中、黄褐色ブロック(φ1㎜)10%
2層 10YR2/3 黒褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中、黄褐色ブロック(φ1㎜)5%
3層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中
4層 10YR4/6 褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中
5層 10YR5/8 黄褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中
6層 10YR3/3 暗褐色シルト　粘性弱、しまり中弱、黄褐色ブロック(φ10㎜)3%、礫37の掘方

図71　土坑(８)



SK62(A-A')
1層 10YR2/2 黒褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒3%、φ1～5㎜炭粒1%混合
2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム粒3%、φ1～5㎜炭粒1%混合

SK63(B-B')
1層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト しまり中、粘性中
2層 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(褐色粘土質シルト10YR4/6)φ10㎜を8%含む

SK64(A-A')
1層 10YR2/3 黒褐色土 φ1～10㎜炭化物5%、φ1～10㎜ロームブロック1%Ⅲ層を掘り込んで構築
2層 10YR2/2 黒褐色土 φ1～10㎜炭化物7%
3層 10YR3/4 暗褐色土 φ1～5㎜炭化物1%
4層 10YR4/4 褐色土 ローム主体層

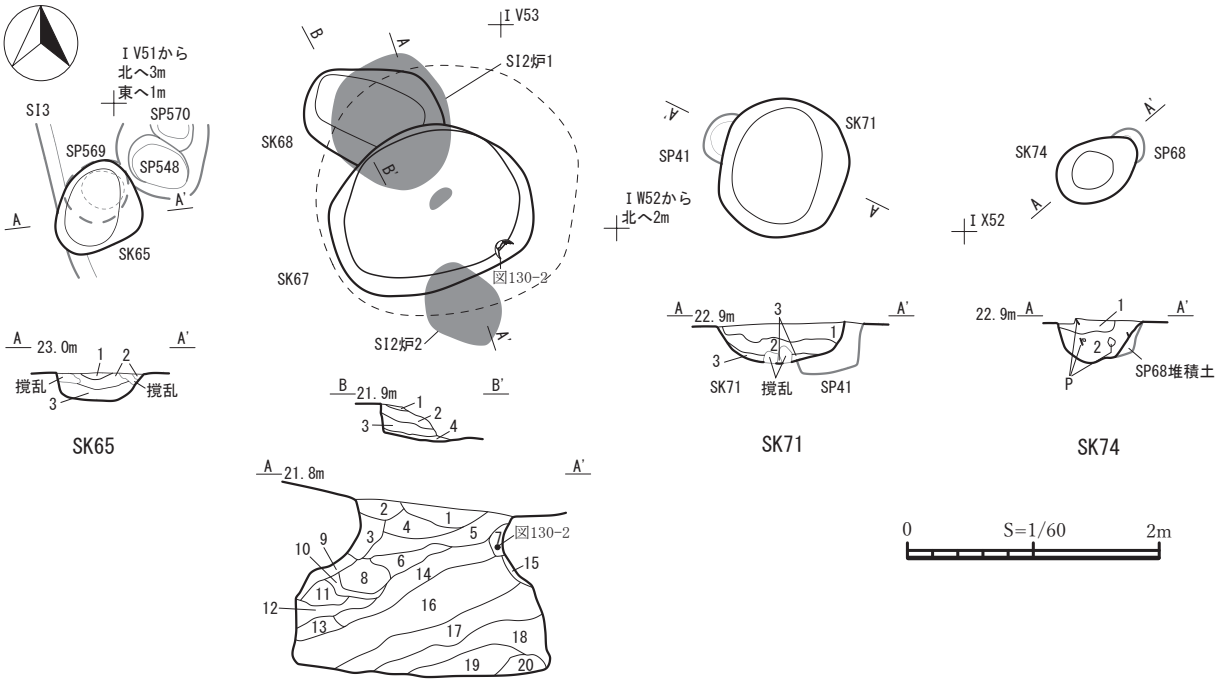
SK66(A-A')
1層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト しまり弱、粘性中強、Ⅴ層由来のブロック(黄褐色粘土質シルト10YR5/6)φ0.5～1㎜10%、下部には縞状
2層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト しまり中強、粘性中強、Ⅴ層由来のブロック3%、Ⅶ層由来のブロック(黄褐色粘土質シルト2.5Y5/6)φ3㎜1%、炭化物粒(φ1～2㎜)1%
3層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト しまり中強、粘性中強、Ⅴ層ブロック(φ1～3㎜)5～8%、Ⅶ層ブロック(φ5～10㎜)下部に多く(10～15%)、炭化物粒(φ1～3㎜)3%含み、南側に混入少ない
4層 10YR6/8 明黄褐色シルト質粘土 しまり中、粘性中、根撹乱と思われる土(褐色10YR4/4)を不整形に南側に多く5～10%含む
5層 10YR5/8 黄褐色シルト質粘土 しまり中、粘性中、根撹乱と思われる土(褐色10YR4/4)不整形に5%
6層 10YR5/8 黄褐色シルト質粘土 しまり中、粘性中
7層 10YR2/2 黒褐色粘土 しまり中強、粘性中強
8層 10YR4/6 褐色シルト質粘土 しまり中、粘性中
9層 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂シルト しまり中弱、粘性中弱、Ⅴ層ブロック1%、Ⅶ層ブロック3%、炭化物粒(φ1㎜)3%
10層 2.5Y5/6 黄褐色極細粒砂質シルト しまり中弱、粘性弱、炭化物粒(φ1㎜)1%
11層 10YR4/6 褐色ローム質土 掘りすぎか?

SK69(B-B')
1層 7.5YR3/4 暗褐色シルト
2層 7.5YR5/6 明褐色粘土質ローム
3層 7.5YR3/3 暗褐色シルト
4層 7.5YR3/4 暗褐色粘土質シルト Ⅵ層起源の10YR6/6明黄褐色砂(φ4㎜)1%φ4㎜炭化物1%
5層 7.5YR3/4 暗褐色シルト 4層より黒味強い
6層 7.5YR4/4 褐色シルト Ⅵ層起源、明黄褐色砂(φ1cm)5%
7層 7.5YR5/6 明褐色ローム
8層 7.5YR4/4 褐色シルト
9層 7.5YR4/3 褐色シルト
10層 7.5YR5/6 明褐色ローム 崩落土、7.5YR5/6明褐色粘土質火山灰土2.5Y6/8明黄褐色砂ブロック(φ2cm)10%
11層 10YR4/6 褐色シルト 2.5Y6/6明黄褐色砂との混合土

SK69SR1(C-C')
1層 10YR6/6 明黄褐色シルト にぶい黄色砂(2.5Y6/4)との混土層、しまりなし
2層 2.5Y5/4 黄褐色土 炭化物(φ1～5㎜)1%混入
3層 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト オリーブ褐色砂(2.5Y4/3)との混土層、炭化物(φ1～10㎜)多量混入
4層 2.5Y7/4 浅黄色粘質シルト

SK70(D-D')
1層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト しまり中、粘性中、Ⅶ層由来のブロック(黄褐色粘土質シルト2.5Y5/6)φ10～15㎜8%、炭化物粒(φ1～3㎜)5%、焼土粒(φ1～3㎜)2%
2層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック(φ10～15㎜)2%、炭化物粒(φ1～3㎜)8%、φ1～3㎜焼土粒5%、φ10～20㎜数個
3層 10YR3/4 暗褐色シルト質粘土 しまり中、粘性中、上部に炭化物粒(φ1～3㎜)8%、下部はⅤ層由来のブロック(褐色粘土質シルト10YR4/6)φ10～15㎜を不整形に含む

図72　土坑(9)



SK70(D-D')

4層	10YR4/4	褐色粘土質シルト　しまり中弱、粘性中弱、Ⅴ層ブロック(φ2～5㎜)上部に3%、(φ10～20㎜)が最下部に向かって10～30%、Ⅶ層ブロック(φ2～5㎜)3%
5層	10YR4/4	褐色シルト質粘土　しまり中弱、粘性中弱、Ⅴ層ブロック(φ3～5㎜)8%、上部により多い
6層	10YR4/4	褐色シルト質粘土　しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック (φ20～25㎜)不整形に10～15%
7層	10YR4/6	褐色シルト質粘土　しまり中弱、粘性中弱、Ⅴ層ブロック(φ1～3㎜)3%
8層	2.5Y4/4	オリーブ褐色シルト質粘土　しまり中弱、粘性中弱、Ⅶ層ブロック(φ5～10㎜)北側に40%、南側に10%
9層	10YR4/4	褐色シルト質粘土　しまり中弱、粘性中弱、Ⅴ層ブロック(φ1～3㎜)3～5%、Ⅶ層ブロック(φ3～5㎜)下部に5%
10層	10YR4/4	褐色シルト質粘土　しまり中弱、粘性中弱、Ⅶ層ブロック(φ3～5㎜)8%
11層	10YR4/4	褐色シルト質粘土　しまり中弱、粘性中弱
12層	10YR5/6	黄褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中
13層	10YR4/4	褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ10㎜)10%
14層	10YR5/6	黄褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、下部は地山(Ⅶ層)との漸移層

SK76(E-E')

1層	10YR5/6	黄褐色シルト　しまり中、粘性中、φ10～20㎜のⅤ層由来ブロック(10YR5/8黄褐色シルト質粘土)8%
2層	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、炭化物粒(φ1㎜)3%、土器含む
3層	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅶ層由来のブロック(φ5㎜を1%、φ1～2㎜炭化物粒4%、φ5～10㎜2%
4層	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロックを不整形に10%、炭化物粒(φ1㎜)1%
5層	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅴ層由来のブロック(φ10～20㎜)数個
6層	2.5Y5/6	黄褐色極細粒砂質シルト　しまり中、粘性中弱、Ⅶ層流入層
7層	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロックとⅦ層ブロック(φ2～3㎜)1%
8層	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ1～2㎜)2%、Ⅶ層ブロック(φ1～3㎜)3%、南側に炭化物粒(φ1㎜)2%
9層	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅴ層ブロック(φ1㎜)1%、Ⅴ層ブロック(φ5～10㎜)帯状に8%、南側に炭化物粒(φ1㎜)2%
10層	10YR4/6	褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中
11層	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト　しまり中弱、粘性中弱、Ⅴ層ブロック2%、Ⅶ層ブロック(φ3～5㎜)上部に1%
12層	10YR5/6	黄褐色極細粒砂質シルト　しまり中、粘性中弱、Ⅶ層ブロック(φ1～3㎜)10%
13層	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中
14層	10YR5/6	黄褐色極細粒砂質シルト　しまり中、粘性中弱、Ⅶ層ブロック(φ1～3㎜)5%

SK65(A-A')

1層	10YR3/2	黒褐色土
2層	10YR3/3	暗褐色土　φ1～5㎜炭化物・焼土粒1%、しまり中
3層	10YR3/4	暗褐色土　φ1～5㎜炭化物2%・焼土粒・白色粘土ブロック1%、しまり中

SK67(A-A')

1層	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、ロームブロック(10YR5/8黄褐色粘土質シルト)φ10㎜3%
2層	10YR2/3	黒褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、明褐色(7.5YR5/8)焼土粒10%、炭化物粒(φ10㎜)3%
3層	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、不整形のロームブロック上部に含む
4層	10YR2/3	黒褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、炭化物粒φ1㎜5%、φ10㎜数個下部に、ロームブロックを下部に縞状に含む
5層	10YR2/3	黒褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、炭化物粒(φ1㎜)3%
6層	10YR2/3	黒褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、炭化物粒(φ1㎜)1%、暗褐色土(10YR3/4)縞状
7層	10YR3/4	暗褐色シルト質粘土　しまり中弱、粘性中、南側に地山ロームとの漸移部あり
8層	10YR4/6	褐色粘土質シルト　しまり中強、粘性中強、フラスコ上部の崩落土層
9層	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中
10層	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中
11層	10YR6/8	明黄褐色極細粒砂質シルト　しまり弱、粘性弱、上部で9層土混在
12層	5Y6/4	にぶい橙色極細粒砂　しまり弱、粘性無、南側に9層土が混在する、地山の崩落土層
13層	5Y6/4	にぶい橙色極細粒砂　粘性無、しまり弱、地山の崩落土層
14層	10YR2/3	黒褐色シルト質粘土　しまり中弱、粘性中弱、炭化物粒φ0.1㎜3%、φ5㎜1%、ロームブロック(φ0.5～10㎜)8～10%、極細粒砂
15層	2.5YR6/6	橙色極細粒砂質シルト　しまり弱、粘性弱、7層土との混土層
16層	2.5YR6/6	橙色極細粒砂質シルト　しまり弱、粘性弱、地山流入層
17層	2.5YR5/6	明赤褐色極細粒砂質シルト　しまり中、粘性弱、地山の流入層
18層	10YR3/3	暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中
19層	2.5YR5/6	明赤褐色極細粒砂質シルト　粘性弱、しまり弱
20層	10YR3/3	暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、褐色シルト質粘土(10YR4/6)の不整形ブロック、南側に19層土を不整形に含む、初期堆積土

SK68(B-B')

1層	10YR4/3	にぶい黄褐色土　貼床層と同様相、しまり中
2層	10YR3/4	暗褐色土　φ1～10㎜ロームブロック1%
3層	10YR3/3	暗褐色土　砂多く含む、φ1～5㎜炭化物1%
4層	10YR5/6	黄褐色土　ローム主体層、粘性中

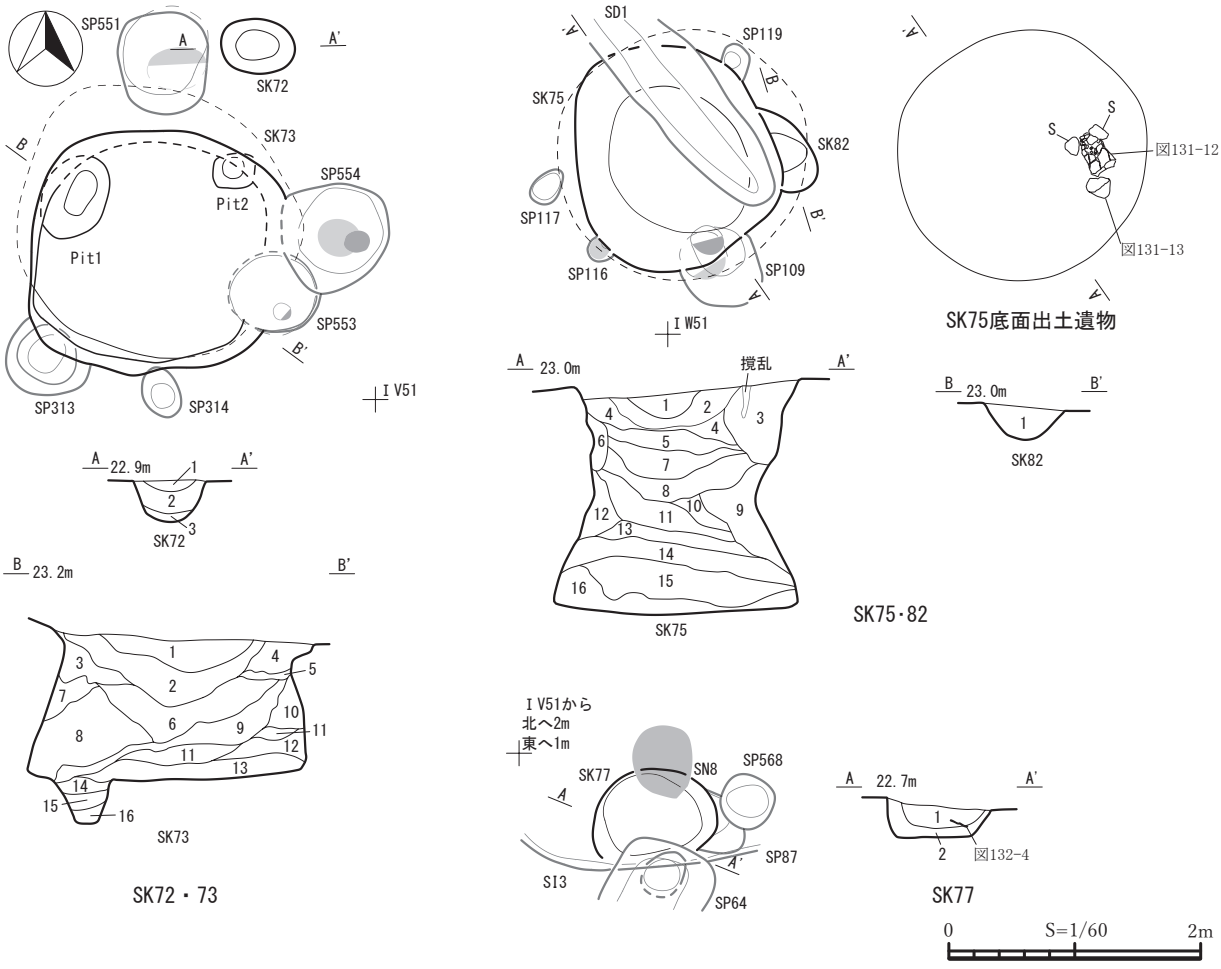
SK71(A-A')

1層	10YR3/4	暗褐色土　φ1～10㎜焼土粒1%、φ1～5㎜炭化物・ロームブロック1%
2層	10YR2/3	黒褐色土　φ1～10㎜ロームブロック1%、φ1～5㎜炭化物2%、部分的にしまる
3層	10YR4/6	褐色土　ローム混じる、しまりやや弱

SK74(A-A')

1層	10YR3/3	暗褐色土　φ1～10㎜炭化物・ロームブロック1%
2層	10YR3/4	暗褐色土　φ1～20㎜ロームブロック2%、φ1～10㎜炭化物1%、遺物多い

図73　土坑(10)



SK72(A-A')
1層 10YR4/4 褐色土　φ1～5㎜炭化物・ロームブロック1%
2層 10YR4/6 褐色土　ロームとの混土層、φ1～5㎜ロームブロック2%・炭化物1%
3層 10YR4/6 褐色土　φ1～20㎜ロームブロック1%、φ1～5㎜炭化物1%

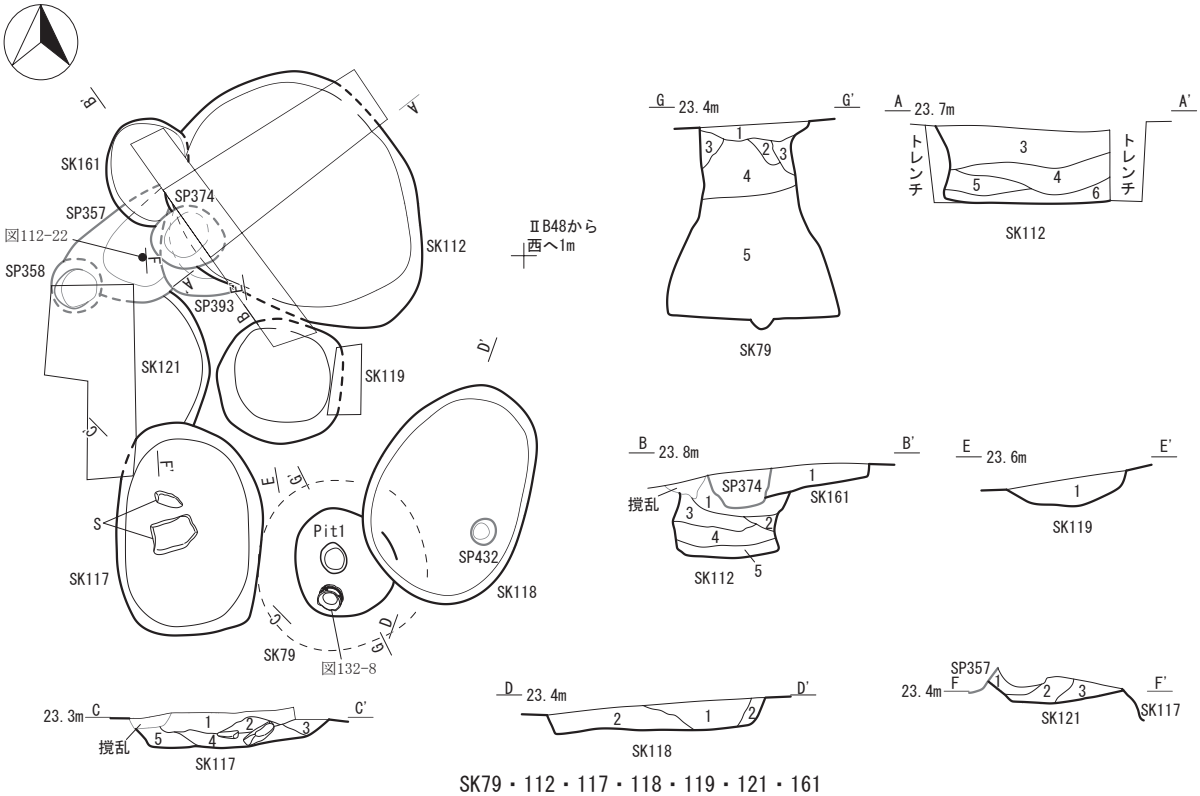
SK73(B-B')
1層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層由来のブロック(10YR5/6黄褐色粘土質シルト)φ0.5～2㎜5～8%、炭化物粒(φ0.1～0.5㎜)3%
2層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層ブロック(φ2～3㎜)3%、Ⅶ層由来のブロック(2.5Y5/6黄褐色粘土質シルト)φ5㎜5%、炭化物粒(φ1～2㎜)1%
3層 10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中強、粘性中、V層ブロック(φ1～3㎜)3%、Ⅶ層ブロック(φ3～5%)2%、炭化物粒(φ0.1～0.3㎜)1%
4層 10YR4/4 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層ブロック(φ0.1～0.3㎜)5%、焼土粒(φ0.1㎜)3%、炭化物粒(φ0.5㎜)7%
5層 10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層ブロック(φ1～2㎜)30～40%
6層 10YR4/4 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック(φ10～30㎜)東側に2%、西側に15%、炭化物粒(φ8～10㎜)5～10%西側に多い、焼土粒(φ0.1～2㎜)3～5%
7層 10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中強、粘性中、Ⅶ層ブロック(φ3～5㎜)2%
8層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、不整形なⅦ層ブロック(φ10～20㎜)20%、V層の崩落土層
9層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック(φ10～20㎜)3%、炭化物粒(φ10～20㎜)東側に多く3%
10層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層ブロック(φ10～15㎜)下部に15%、Ⅶ層ブロック(φ5～8㎜)下部に2%、上部に炭化物粒(φ1㎜)2%
11層 10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、9層由来のブロック(φ20～30㎜)5%
12層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層ブロック
13層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層ブロック(φ2～3㎜)3%、炭化物粒(φ1～2㎜)2%
14層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層由来のブロック(φ10㎜)3%、Ⅶ層由来のブロック(φ10～15㎜)8%、Pit1覆土
15層　5Y6/6　オリーブ色極細粒砂質シルト　しまり中、粘性弱、14層土を筋状に10%、Pit1覆土
16層 10YR4/4 褐色シルト質粘土　しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック(φ10㎜)10%、初期堆積層、Pit1覆土

SK75(A-A')
1層 10YR3/4 暗褐色土　φ1～10㎜炭化物・焼土ブロック1%
2層 10YR3/4 暗褐色土　φ1～10㎜炭化物2%、φ1～20㎜ロームブロック2%、しまり中
3層 10YR4/6 褐色土　ローム質土主体、φ1～5㎜炭化物1%、粘性・しまり中、壁面崩落土か
4層 10YR3/3 暗褐色土　φ1～10㎜炭化物・ロームブロック1%
5層 10YR5/6 黄褐色土　上位は褐色ローム(10YR4/6)主体、φ1～10㎜炭化物1%、粘性中
6層 10YR5/6 黄褐色土　ローム質土主体、粘性中、壁面崩落土か
7層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　上位に10YR4/4褐色土が集中、φ1～5㎜炭化物2%
8層 10YR3/3 暗褐色土　上位に褐色ローム(10YR4/6)が集中、φ1～10㎜炭化物2%、粘性中
9層 10YR4/4 褐色土　ローム質土主体、φ1～20㎜炭化物2%、壁面崩落土か
10層 10YR4/4 褐色土　ローム質土主体、粘性中
11層 10YR3/4 暗褐色土　若干ローム混じり、φ1～20㎜炭化物2%
12層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　φ1～5㎜炭化物1%
13層 10YR4/6 褐色土　φ1～10㎜ローム・砂礫ブロック1%、φ1～50㎜炭化物1%、粘性中
14層 10YR3/4 暗褐色土　10YR4/3にぶい黄褐色土層との互層構造、φ1～10㎜炭化物・ロームブロック・焼土ブロック1%、粘性中
15層 10YR2/3 黒褐色土　上位は褐色ローム(10YR4/4)主体、φ1～5㎜炭化物1%、粘性中
16層 10YR5/6 黄褐色土　ローム質土主体、φ1～30㎜ロームブロック1%、壁面崩落土か、粘性・しまり中

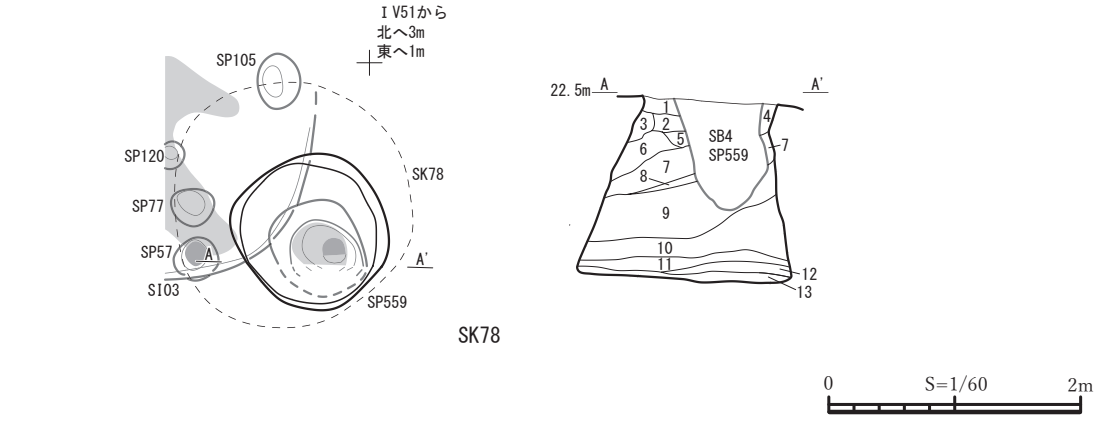
SK82(B-B')
1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　φ1～5㎜炭化物2%、φ1～10㎜ロームブロック1%混入

SK77(A-A')
1層 10YR3/3 暗褐色土　φ1～20㎜炭化物5%、黄褐色砂(10YR5/8)、褐色焼土層(7.5YR4/6)
2層 10YR4/6 褐色土　ローム質土主体、φ1～5㎜炭化物1%

図74　土坑(11)



SK79・112・117・118・119・121・161



SK78

0　S=1/60　2m

SK79(G-G')
1層 10YR3/4 暗褐色土　ローム、炭化物1%
2層 10YR3/3 暗褐色土　ローム、炭化物1%
3層 10YR4/6 褐色土　ローム5%、崩落土
4層 10YR3/4 暗褐色土　ローム1%
5層 10YR4/6 褐色土　砂質土

SK112(A-A'・B-B')
1層 10YR5/6 黄褐色土　ローム、炭化物1%
2層 10YR3/4 暗褐色土
3層 10YR5/8 黄褐色土　ローム質土、炭化物1%
4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム3%、炭化物1%
5層 10YR5/6 黄褐色土　ローム質土
6層 10YR3/3 暗褐色土　炭化物、ローム3%、焼土1%

SK117(C-C')
1層 10YR3/3 暗褐色土　炭化物3%、ローム1%
2層 10YR5/6 黄褐色土　ローム質土、炭化物1%
3層 10YR4/6 褐色土　ローム3%
4層 10YR4/4 褐色土　ローム1%
5層 10YR4/6 褐色土　炭化物1%

SK118(D-D')
1層 10YR3/3 暗褐色土　炭化物、ローム3%
2層 10YR3/4 暗褐色土　炭化物1%

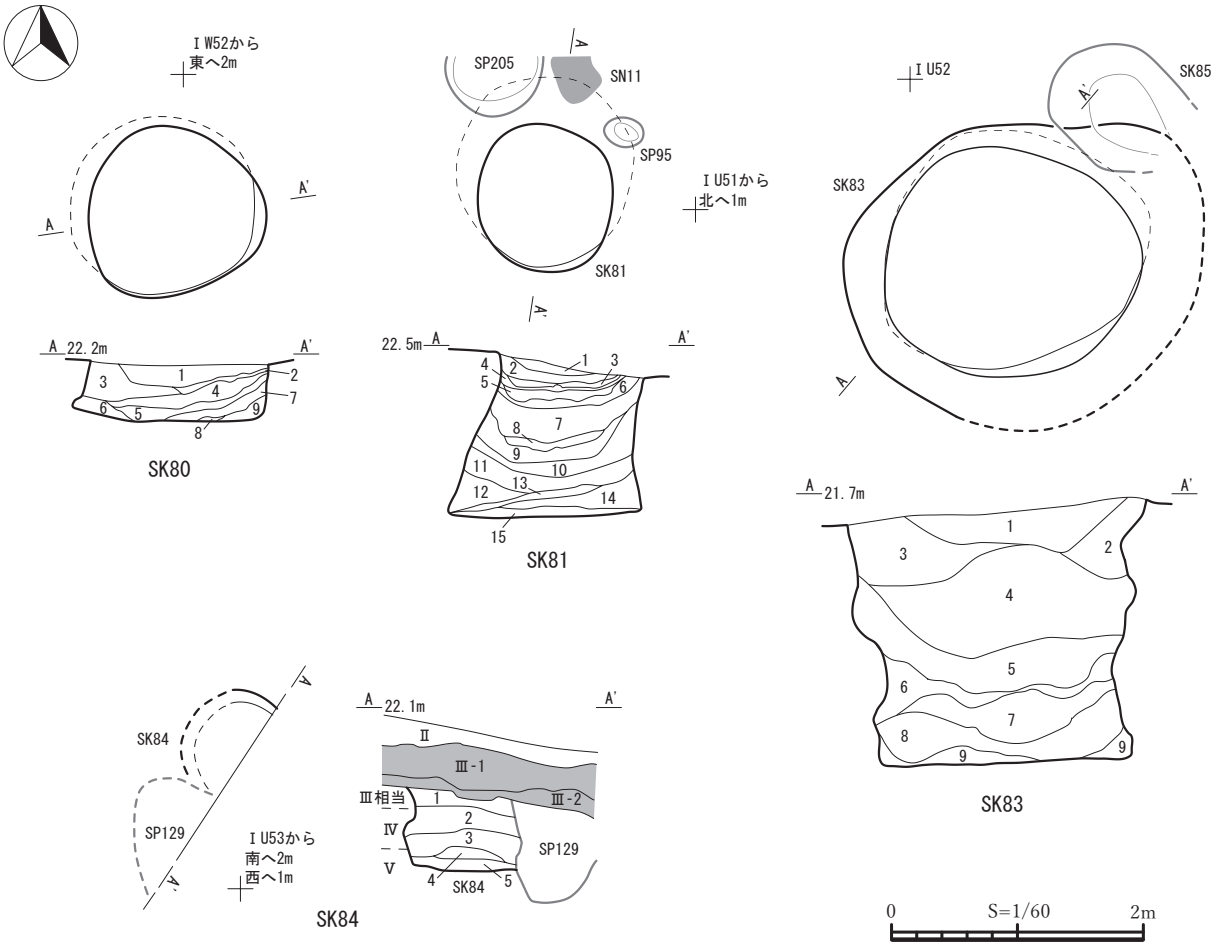
SK119(E-E')
1層 10YR3/4 暗褐色土　炭化物、ローム1%

SK121(F-F')
1層 10YR3/4 暗褐色土　炭化物、焼土1%
2層 10YR4/6 褐色土　ローム質土
3層 10YR3/4 暗褐色土　炭化物1%

SK161(B-B')
1層 10YR3/4 暗褐色土　ローム粒、炭化物1%

SK78(A-A')
1層 10YR4/4 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層ブロック(φ2～3㎜)3%、Ⅶ層ブロック(φ10～20㎜)10%
2層 10YR4/4 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層ブロック(φ2～3㎜)1%
3層 10YR4/4 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層ブロック(φ2～3㎜)3%、Ⅶ層ブロック(φ10～20㎜)1%
4層 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、炭化物粒(φ3～5㎜)1%
5層 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中
6層 10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層ブロック幅1㎜縞状に5%
7層 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中
8層 10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中
9層 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層ブロック50%以上から構成
10層 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、10YR3/4暗褐色粘土質シルトとの混土層
11層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、V層ブロック(φ1～10㎜)1%
12層 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト　しまり弱、粘性中
13層 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト　しまり弱、粘性中

図75　土坑(12)



SK80(A-A')

1層	10YR3/2 黒褐色土	褐色ローム(10YR4/6)との混土層、φ1～10㎜ロームブロック1%
2層	10YR3/4 暗褐色土	
3層	10YR3/4 暗褐色土	φ1～10㎜ロームブロック5%、φ1～5㎜炭化物1%
4層	10YR2/2 黒褐色土	ロームブロック混じり
5層	10YR3/3 暗褐色土	部分的に褐色(10YR4/6)を呈する
6層	10YR3/4 暗褐色土	φ1～20㎜砂礫ロームブロック1%、φ1～5㎜炭化物1%
7層	10YR4/6 褐色土	ローム質土主体
8層	10YR3/1 黒褐色土	
9層	10YR3/4 暗褐色土	ロームとの混土層

SK81(A-A')

1層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、炭化物粒(φ1㎜)3%
2層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、炭化物粒(φ1㎜)1%、焼土粒(φ1㎜)1%
3層	10YR5/6 黄褐色極細粒砂質シルト	しまり中、粘性中、上部の一部に焼土由来の砂ブロックあり
4層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、炭化物粒(φ1㎜)3%
5層	10YR5/8 黄褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、3層の土が上部から10%混入
6層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、炭化物粒(φ1㎜)3%
7層	10YR5/8 黄褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中
8層	2.5Y6/3 にぶい黄色粘土質シルト	しまり中強、粘性中強
9層	10YR4/4 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、炭化物粒(φ1～3㎜)3%、焼土粒を下部に10%、Ⅶ層由来のブロック20%
10層	10YR4/4 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、炭化物粒(φ3㎜)3%、焼土粒(φ0.1㎜)20%
11層	10YR4/4 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、炭化物粒5%、焼土粒8%
12層	10YR4/4 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中
13層	10YR3/3 暗褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、炭化物が帯状に含まれる
14層	10YR4/4 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、炭化物粒5%、焼土粒8%
15層	10YR4/6 褐色粘土質シルト	しまり中、粘性中、焼土粒(φ1㎜)5%

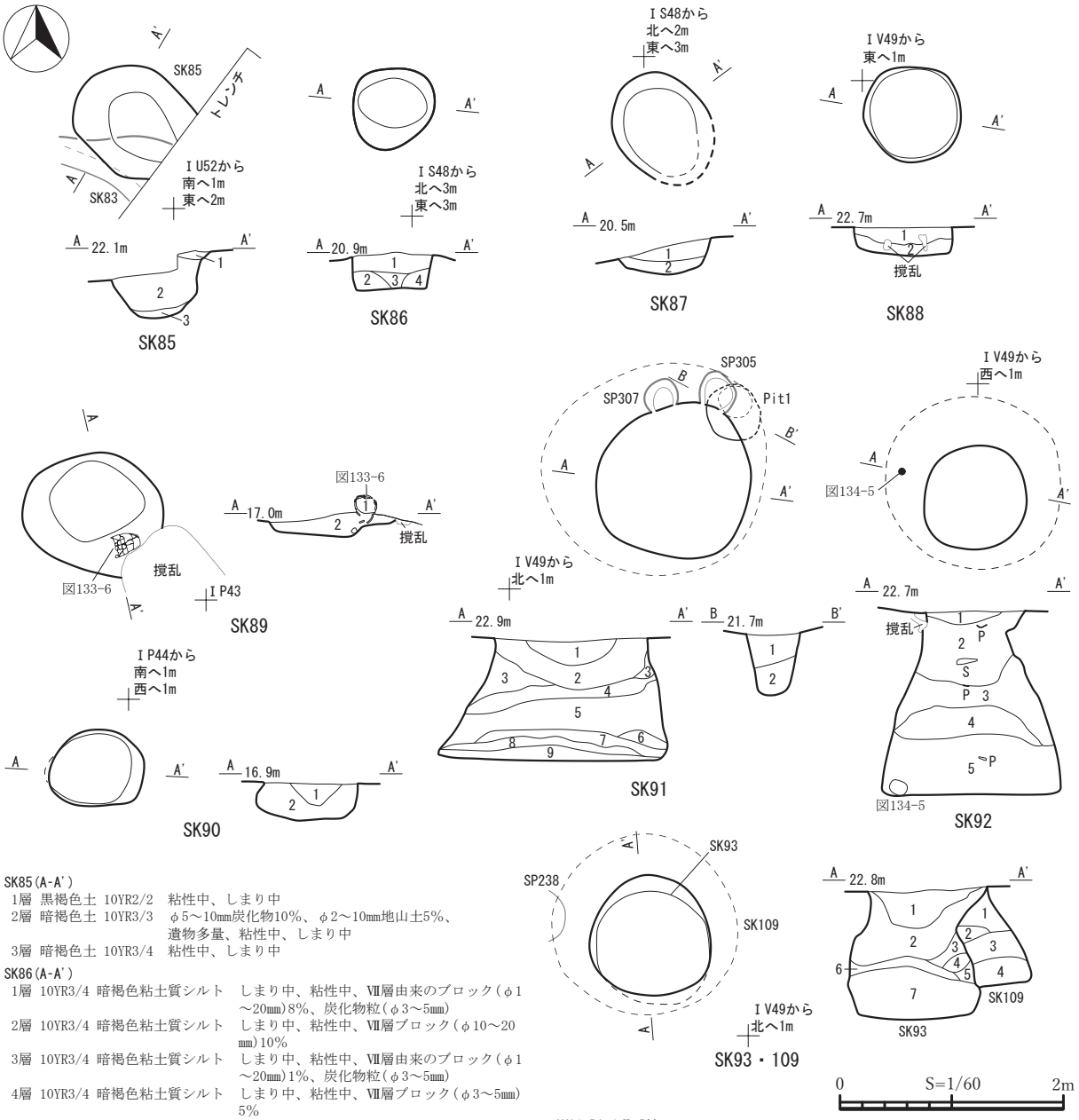
SK83(A-A')

1層	10YR3/3 暗褐色土	しまり中、粘性中、Ⅶ層由来のブロック(φ10～20㎜)1%、φ3～5㎜3%
2層	10YR3/3 暗褐色土	しまり中、粘性中、不整形のⅦ層ブロック(φ10～20㎜)7%、上部に2層土30%(φ30～40㎜)漸移的に含む
3層	10YR4/4 褐色土	しまり中、粘性中、Ⅶ層由来のブロック(φ3～10㎜)7%
4層	2.5Y4/4 オリーブ褐色土	しまり弱、粘性弱、不整形のⅦ層ブロック(φ10～20㎜)3%、黄褐色(10YR5/6)極細粒砂質シルト、黒褐色(10YR2/3)シルトブロック含む
5層	10YR4/4 褐色土	しまり中弱、粘性中弱、黄褐色(10YR5/6)極細粒砂質シルトブロック(φ10㎜)2%、Ⅶ層ブロック(φ3～5㎜)8～10%のほか、褐色(10YR4/6)粘土ブロック(φ20㎜)、暗褐色(10YR3/4)粘性ブロック
6層	2.5Y5/6 黄褐色土	しまり弱、粘性弱、明黄褐色(2.5Y6/6)極細粒砂質シルト不整形ブロック(φ2～3㎜)8%、炭化物粒帯状に5%
7層	10YR5/6 黄褐色土	しまり中強、粘性中強、上部に明黄褐色(2.5Y6/6)極細粒砂質シルトを帯状(2～3㎜)に含む
8層	2.5Y6/6 明黄褐色土	しまり中弱、粘性中弱、黄褐色(10YR5/8)粘土が帯状(5～10㎜)に含む
9層	2.5Y4/6 オリーブ褐色土	しまり弱、粘性弱、黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ1㎜)8%、にぶい黄色(2.5Y6/4)極細粒砂質シルト(φ1㎜)8%

SK84(A-A')

1層	10YR4/4 褐色土	Ⅵ層由来土30%、粘性、しまり中
2層	10YR2/3 黒褐色土	Ⅵ層由来土5%、φ10～20㎜炭化物3%、粘性、しまり中
3層	10YR3/4 暗褐色土	Ⅵ層由来土1%、φ5㎜地山20%、φ2㎜炭化物2%、粘性、しまり中
4層	10YR5/4 にぶい黄褐色土	粘性中、しまり中
5層	10YR5/6 黄褐色土	粘性中、しまり中

図76　土坑(13)



SK85(A-A')
1層 黒褐色土 10YR2/2　粘性中、しまり中
2層 暗褐色土 10YR3/3　φ5～10mm炭化物10%、φ2～10mm地山土5%、遺物多量、粘性中、しまり中
3層 暗褐色土 10YR3/4　粘性中、しまり中

SK86(A-A')
1層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅶ層由来のブロック(φ1～20mm)8%、炭化物粒(φ3～5mm)
2層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック(φ10～20mm)10%
3層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅶ層由来のブロック(φ1～20mm)1%、炭化物粒(φ3～5mm)
4層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅶ層ブロック(φ3～5mm)5%

SK87(A-A')
1層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、Ⅶ層由来のブロック(φ1～3mm)5%、焼土粒(φ1mm)3%
2層 10YR4/6 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中

SK88(A-A')
1層 5YR4/6　赤褐色焼土　10YR4/4褐色土20%、焼土(φ5～40mm)5%、炭化物(φ5mm)2%
2層 10YR3/2 黒褐色土　ローム(φ5～30mm)5%、炭化物(φ5～20mm)2%

SK89(A-A')
1層 10YR2/3 黒褐色土　土器内堆積土
2層 10YR2/2 黒褐色土　φ3mm地山粒2%

SK90(A-A')
1層 10YR2/3 黒褐色土　10～30mm地山ブロック7%
2層 10YR2/2 黒褐色土　3～5mm地山粒3%

SK91(A-A')
1層 10YR4/3　にぶい黄褐色土　ローム(φ5～10mm)1%、砂塊(φ5～10mm)1%、炭化物(φ2～5mm)1%
2層 10YR4/2　灰黄褐色土　ローム(φ5～10mm)2%、砂塊(φ5～10mm)1%、炭化物(φ5～10mm)1%
3層 10YR6/4　にぶい黄橙色土　炭化物(φ2mm)1%
4層 2.5YR5/6 明赤褐色焼土　10YR3/2黒褐色土30%、砂塊(φ10mm)1%、炭化物(φ5mm)1%
5層 10YR5/4　にぶい黄褐色土
6層 10YR7/4　にぶい黄橙色土
7層 10YR3/1　黒褐色土　炭化物(φ2～5mm)1%
8層 10YR5/4　にぶい黄褐色土　10YR3/1黒褐色土5%
9層 10YR3/2　黒褐色土　ローム(φ10～30mm)2%

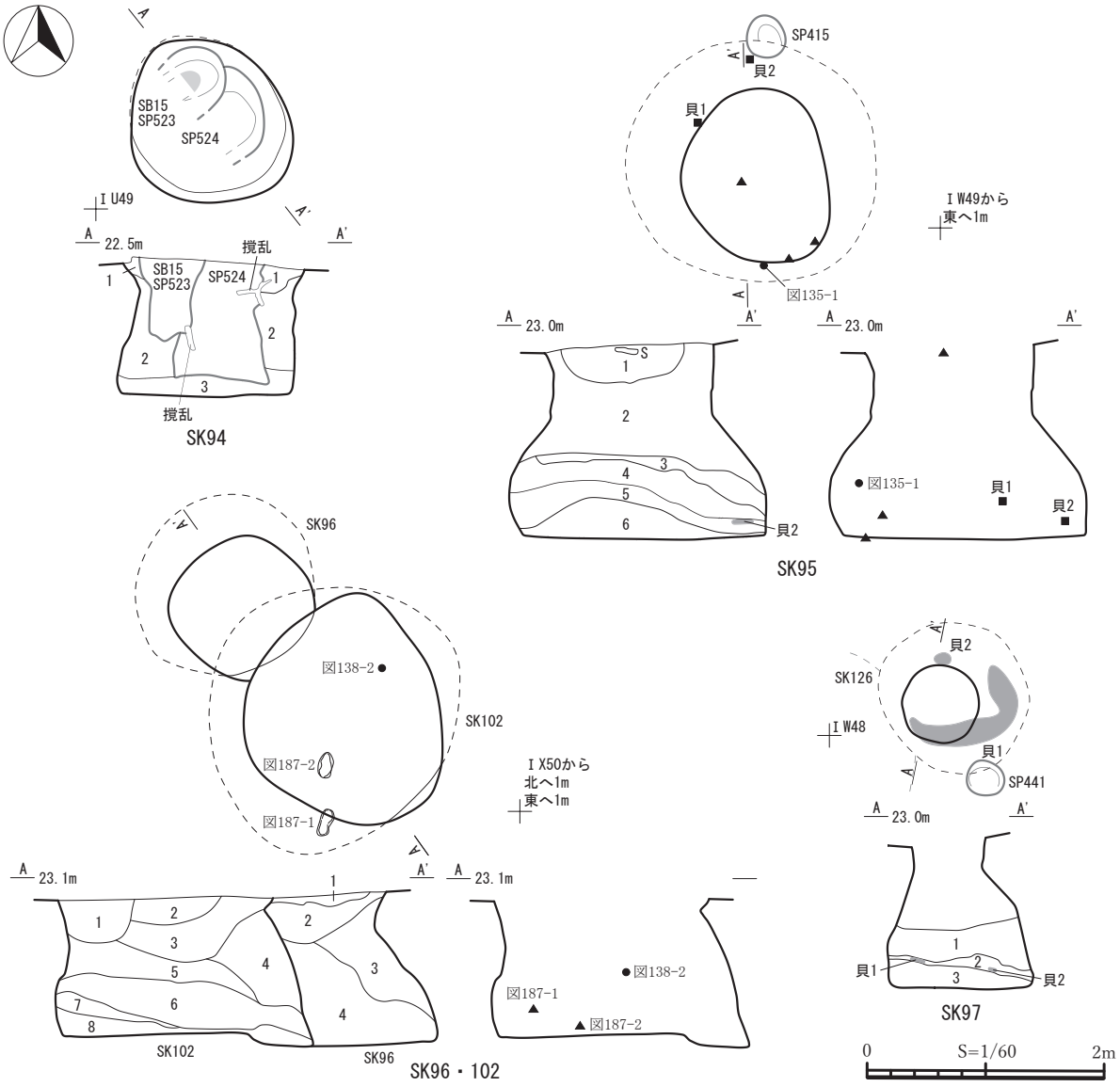
SK91 Pit1(B-B')
1層 10YR4/6 褐色土　10YR3/2黒褐色土30%
2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　2.5Y7/1灰白色砂30%

SK92(A-A')
1層 10YR3/2 黒褐色土　ローム(φ10～30mm)1%、炭化物(φ2～5mm)1%
2層 10YR6/6 明黄褐色土　10YR4/2灰黄褐色土40%、炭化物(φ2～10mm)2%
3層 10YR4/2 灰黄褐色土　ローム(φ50mm)1%、砂塊(φ50mm)1%
4層 10YR5/2 灰黄褐色土　2.5Y7/4浅黄色土が上面で筋状に15%、焼土(φ10mm)2%、炭化物(φ2～5mm)1%
5層 10YR5/1 褐灰色土　10YR6/4にぶい黄橙色土30%、10YR4/1褐灰色土が筋状に10%、炭化物(φ5～10mm)5%

SK93(A-A')
1層 10YR3/2 黒褐色土　ローム(φ1mm)1%、焼土(φ1mm)1%、炭化物(φ2～10mm)5%(固い)
2層 10YR4/2 灰黄褐色土　10YR6/4にぶい黄橙色土15%、焼土(φ10mm)1%、炭化物(φ2～10mm)2%(上面は固い)
3層 10YR4/4 褐色土　10YR5/2灰黄褐色土20%、炭化物(φ5mm)1%
4層 10YR3/1 黒褐色土　ローム(φ5mm)1%
5層 10YR3/2 黒褐色土　炭化物(φ2～5mm)1%
6層 10YR4/1 褐灰色土　砂塊(φ10mm)1%、焼土(φ10mm)1%、炭化物(φ2～10mm)2%
7層 10YR3/2 黒褐色土　10YR4/1褐灰色土20%、ローム(φ10mm)2%、炭化物(φ2～10mm)1%

SK109(A-A')
1層 10YR6/6 明黄褐色土　10YR5/1褐灰色土10%、炭化物(φ2mm)1%(固い)
2層 10YR5/1 褐灰色土　炭化物(φ5mm)1%
3層 10YR4/1 褐灰色土　10YR5/4にぶい黄褐色土が壁際に5%、炭化物(φ5mm)1%
4層 10YR4/2 灰黄褐色土　ローム(φ5～30mm)5%、炭化物(φ2～5mm)1%

図77　土坑(14)



SK94(A-A')
1層 10YR5/2 灰黄褐色土 ローム(φ2㎜)2%、砂塊(φ5㎜)1%、炭化物(φ2～5㎜)1%
2層 10YR6/6 明黄褐色土
3層 10YR4/6 褐色土 10YR7/2にぶい黄橙色粘土が筋状に20%、炭化物(φ5㎜)2%

SK95(A-A')
1層 10YR6/4 にぶい黄橙色土 炭化物(φ5㎜)1%
2層 10YR3/2 黒褐色土 10YR7/6明黄褐色土20%、10YR3/1黒褐色土が上位で筋状に10%、炭化物(φ10～20㎜)5%
3層 10YR7/4 にぶい黄橙色土
4層 10YR5/3 にぶい黄褐色土 炭化物(φ10㎜)2%
5層 10YR4/1 褐灰色土
6層 10YR4/3 にぶい黄褐色土

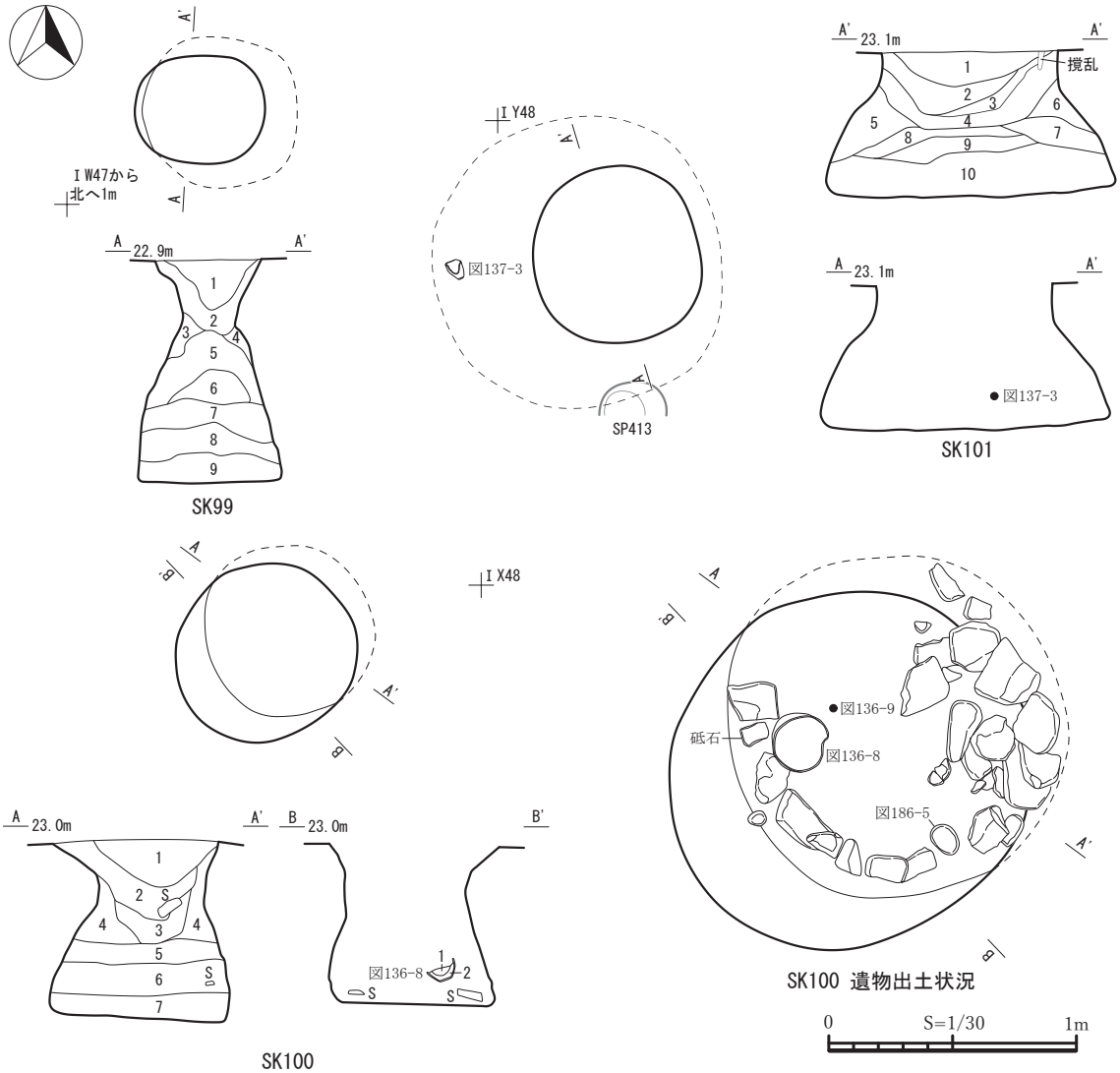
SK96(A-A')
1層 10YR3/1 黒褐色土 炭化物(φ5㎜)1%
2層 10YR5/3 にぶい黄褐色土 炭化物(φ2㎜)1%
3層 10YR6/4 にぶい黄橙色土
4層 10YR7/4 にぶい黄橙色土 10YR4/2灰黄褐色土40%

SK102(A-A')
1層 10YR4/2 灰黄褐色土 ローム(φ10～20㎜)2%、炭化物(φ2～10㎜)2%(固い)
2層 10YR4/2 灰黄褐色土 炭化物(φ2～5㎜)1%
3層 10YR5/3 にぶい黄褐色土 10YR6/6明黄褐色土15%、炭化物(φ5～10㎜)1%
4層 10YR5/3 にぶい黄褐色土 10YR6/6明黄褐色土20%
5層 10YR4/2 灰黄褐色土 10YR4/1褐灰色土15%、10YR6/4にぶい黄橙色土5%、ローム(φ10㎜)2%、炭化物(φ5～10㎜)2%
6層 10YR4/2 灰黄褐色土 10YR6/4にぶい黄橙色土30%、10YR7/6明黄褐色土10%、2.5YR6/8橙色焼土5%、10YR4/1褐灰色土が筋状に5%、炭化物(φ10㎜)2%
7層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物(φ5㎜)1%
8層 10YR4/2 灰黄褐色土 10YR7/4にぶい黄橙色土5%、炭化物(φ5㎜)1%

SK97(A-A')
1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR8/4浅黄橙色土5%、炭化物(φ5～20㎜)1%
2層 10YR4/1 褐灰色土 炭化物(φ5～10㎜)1%、貝殻20%
3層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物(φ5～20㎜)1%

SK98(A-A')
1層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 ローム(φ10～50㎜)2%、焼土(φ10～20㎜)1%、炭化物(φ5～10㎜)2%(固い)
2層 10YR4/1 褐灰色土 10YR5/4にぶい黄褐色土10%、炭化物(φ5～10㎜)5%
3層 10YR5/6 黄褐色土 10YR4/1褐灰色土10%、炭化物(φ5～10㎜)1%

図78　土坑(15)



SK99(A-A')
1層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　砂塊(φ10㎜)1%、炭化物(φ2～5㎜)1%
2層 10YR5/4 にぶい黄褐色土　10YR7/4にぶい黄橙色土5%、炭化物(φ2～5㎜)1%
3層 10YR6/4 にぶい黄橙色土
4層 10YR5/4 にぶい黄褐色土　ローム(φ20～50㎜)40%
5層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　炭化物(φ5㎜)1%
6層 10YR4/2 灰黄褐色土　炭化物(φ2～5㎜)1%
7層 10YR6/4 にぶい黄橙色土　炭化物(φ2～5㎜)1%
8層 10YR3/2 黒褐色土　炭化物(φ2～5㎜)1%
9層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　炭化物(φ2～5㎜)1%

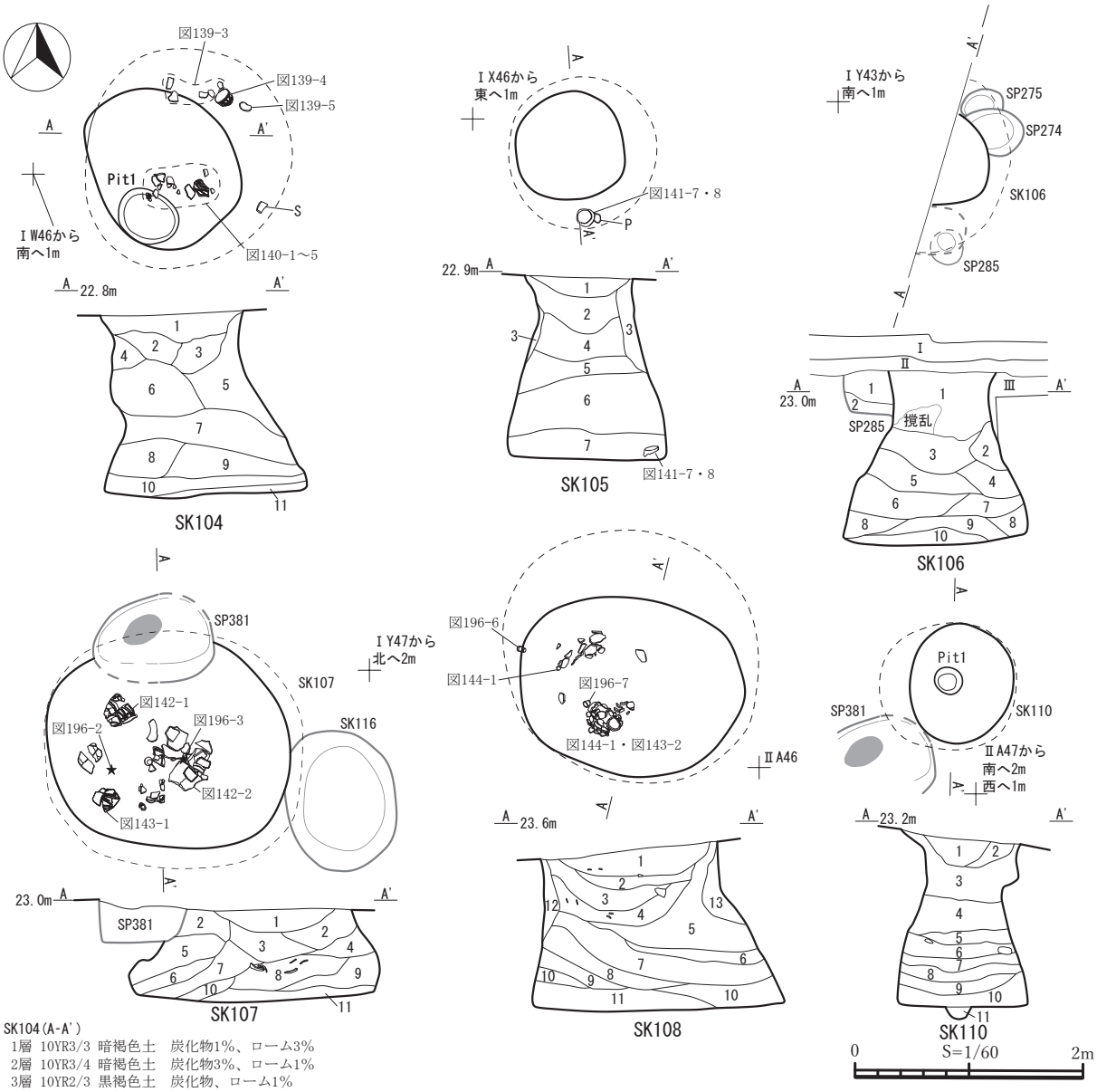
SK100(A-A')
1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR6/4にぶい黄橙色土10%、ローム(φ20㎜)1%、炭化物(φ2～10㎜)2%
2層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　10YR4/1褐灰色土10%、炭化物(φ2～5㎜)2%
3層 10YR6/6 明黄褐色土　10YR5/2灰黄褐色土5%、炭化物(φ5～20㎜)1%
4層 10YR4/2 灰黄褐色土　10YR6/4にぶい黄橙色土5%、炭化物(φ2～5㎜)1%
5層 10YR4/1 褐灰色土　炭化物(φ5㎜)1%
6層 10YR5/4 にぶい黄褐色土　10YR4/2灰黄褐色土20%、炭化物(φ5～20㎜)5%
7層 10YR4/6 褐色土　炭化物(φ2～10㎜)2%

SK100(B-B')
1層 10YR5/4 にぶい黄褐色土
2層 10YR4/1 褐灰色土　炭化物(φ2～5㎜)1%

SK101(A-A')
1層 10YR4/2 灰黄褐色土　ローム(φ10㎜)1%、炭化物(φ2～5㎜)2%
2層 2.5Y7/4 浅黄色土　10YR4/2灰黄褐色土30%、砂塊(φ20～30㎜)1%、炭化物(φ2㎜)1%
3層 10YR4/6 褐色土　2.5Y7/4浅黄色土、炭化物(φ2～5㎜)1%
4層 10YR5/4 にぶい黄褐色土　炭化物(φ5～10㎜)1%
5層 10YR4/2 灰黄褐色土
6層 10YR3/2 黒褐色土　炭化物(φ2～10㎜)1%
7層 10YR4/2 灰黄褐色土　10YR5/6黄褐色土10%、炭化物(φ2～5㎜)1%
8層 10YR4/1 褐灰色土　10YR4/2灰黄褐色土、炭化物(φ10～20㎜)5%
9層 10YR3/2 黒褐色土　ローム(φ20～30㎜)10%、炭化物(φ2～20㎜)2%
10層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　10YR7/4にぶい黄橙色土、炭化物(φ2～5㎜)2%

SK103(A-A')
1層 10YR6/3 にぶい黄橙色土　10YR8/1灰白色粘土5%(固い)
2層 2.5Y7/2 灰黄色砂　10YR7/6明黄褐色土10%
3層 10YR5/2 灰黄褐色土　砂塊(φ20～30㎜)2% 炭化物(φ10㎜)1%
4層 10YR4/1 褐灰色土　炭化物(φ5㎜)1%
5層 10YR5/4 にぶい黄褐色土

図79　土坑(16)



SK104(A-A')
1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物1%、ローム3%
2層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物3%、ローム1%
3層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物、ローム1%
4層 10YR4/4 褐色土 ローム質土、崩落土
5層 10YR3/4 暗褐色土 ロームとの混合
6層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物1%、ローム3%
7層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物5%
8層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物5%
9層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物1%
10層 10YR2/2 黒褐色土 ローム、炭化物3%
11層 10YR4/4 褐色土 ロームとの混合

SK105(A-A')
1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム1%
2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム1%、焼土1%
3層 10YR4/4 褐色土 ローム質土
4層 10YR3/3 暗褐色土 ローム、炭化物3%
5層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物、ローム5%
6層 10YR4/4 褐色土 ローム土、埋戻し土か?
7層 10YR2/3 黒褐色土

SK106(A-A')
1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム、炭化物3%
2層 10YR4/4 褐色土 ローム質土、崩落土
3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム5%、炭化物1%
4層 10YR3/3 暗褐色土 ロームとの混合土
5層 10YR2/3 黒褐色土 ローム、炭化物3%
6層 10YR3/4 暗褐色土 ローム5%、炭化物、焼土1%
7層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物1%
8層 10YR2/3 黒褐色土 ローム10%
9層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%
10層 10YR2/2 黒褐色土 ローム1%

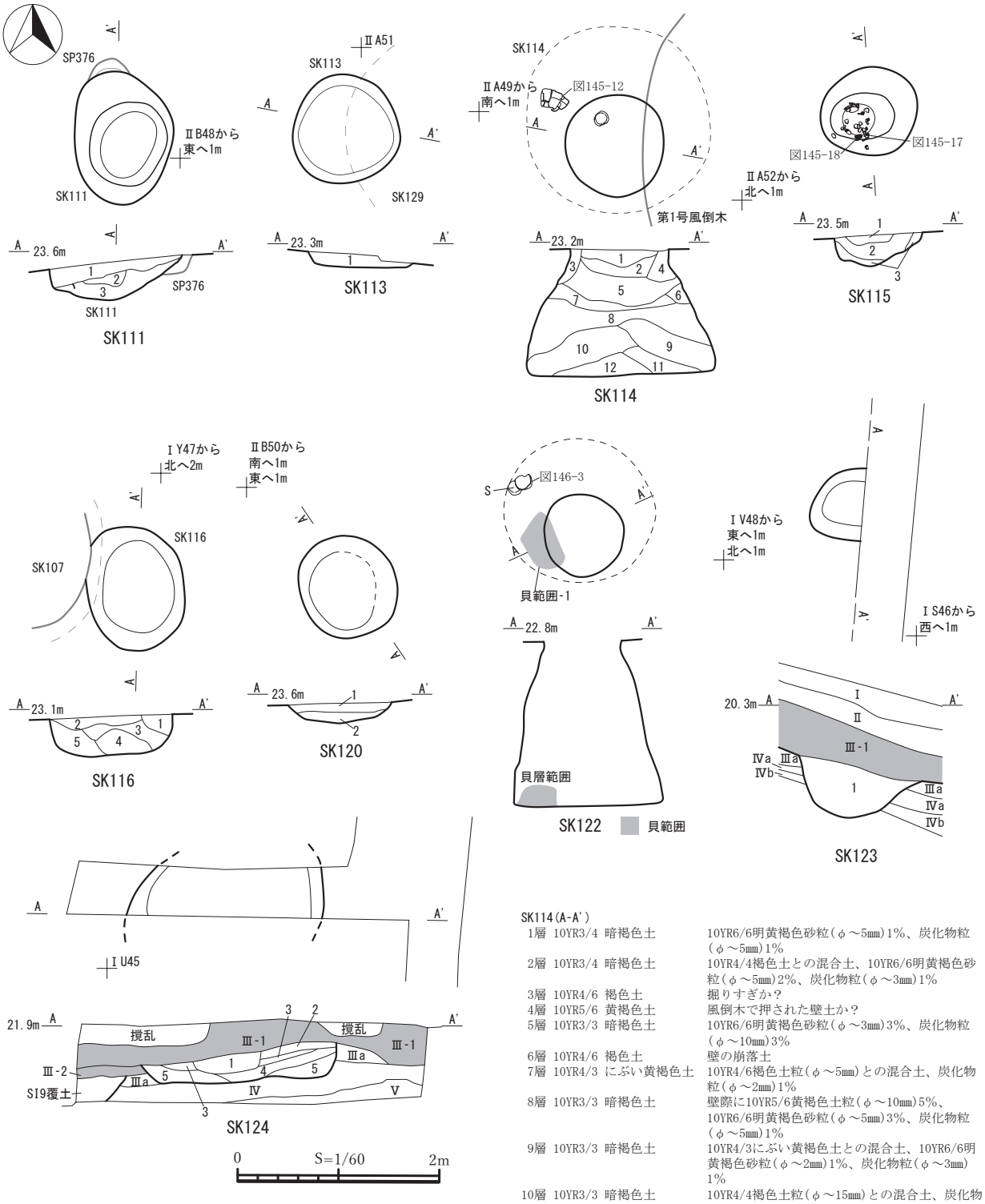
SP285(A-A')
1層 10YR4/4 褐色土 ローム、炭化物3%
2層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物1%

SK107(A-A')
1層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物3%、ローム・焼土1%
2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム3%、炭化物1%
3層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物3%
4層 10YR3/4 暗褐色土 ローム5%
5層 10YR4/4 褐色土 ロームブロック(φ20cm)、ローム3%
6層 10YR6/6 明黄褐色土 ローム質土
7層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物、ローム3%
8層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物5%、ローム1%
9層 10YR4/4 褐色土 ローム5%
10層 10YR5/6 黄褐色土 ローム質土
11層 10YR3/3 暗褐色土 ローム1%

SK108(A-A')
1層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物3%、ローム1%
2層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物1%
3層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物5%、ローム1%
4層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物3%、ローム1%
5層 10YR4/4 褐色土 ローム10%、炭化物1%
6層 10YR3/4 暗褐色土 ローム7%、炭化物1%
7層 10YR7/6 明黄褐色土 基本層の砂層
8層 10YR4/6 褐色土 ローム10%、炭化物1%
9層 10YR2/3 黒褐色土 ローム1%
10層 10YR5/6 黄褐色土 ローム質土
11層 10YR2/2 黒褐色土 ローム3%
12層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 ローム質土、炭化物1%
13層 10YR6/6 明黄褐色土 ローム質土

SK110(A-A')
1層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物3%、ローム1%
2層 10YR4/4 褐色土 炭化物1%
3層 10YR4/6 褐色土 炭化物1%、ロームブロック(φ5～20mm)
4層 10YR4/4 褐色土 炭化物、ローム3%
5層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物1%
6層 10YR4/4 褐色土 ローム5%
7層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物1%
8層 10YR5/6 黄褐色土 炭化物1%
9層 10YR3/3 暗褐色土 ローム1%
10層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック3%
11層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%

図80 土坑(17)



SK111(A-A')
1層 10YR4/4 褐色土　炭化物3%、ローム1%
2層 10YR3/4 暗褐色土　ローム3%
3層 10YR3/3 暗褐色土　炭化物3%

SK113(A-A')
1層 10YR3/4 暗褐色土　ローム1%、炭化物3%

SK115(A-A')
1層 10YR2/3 黒褐色土
2層 10YR3/3 暗褐色土　炭化物3%、ローム1%
3層 10YR4/6 褐色土　ローム質土

SK116(A-A')
1層 10YR4/6 褐色土　ローム質土
2層 10YR3/3 暗褐色土　ローム1%、炭化物1%
3層 10YR3/4 暗褐色土　ローム1%
4層 10YR3/3 暗褐色土　炭化物1%
5層 10YR4/4 褐色土　砂質強い

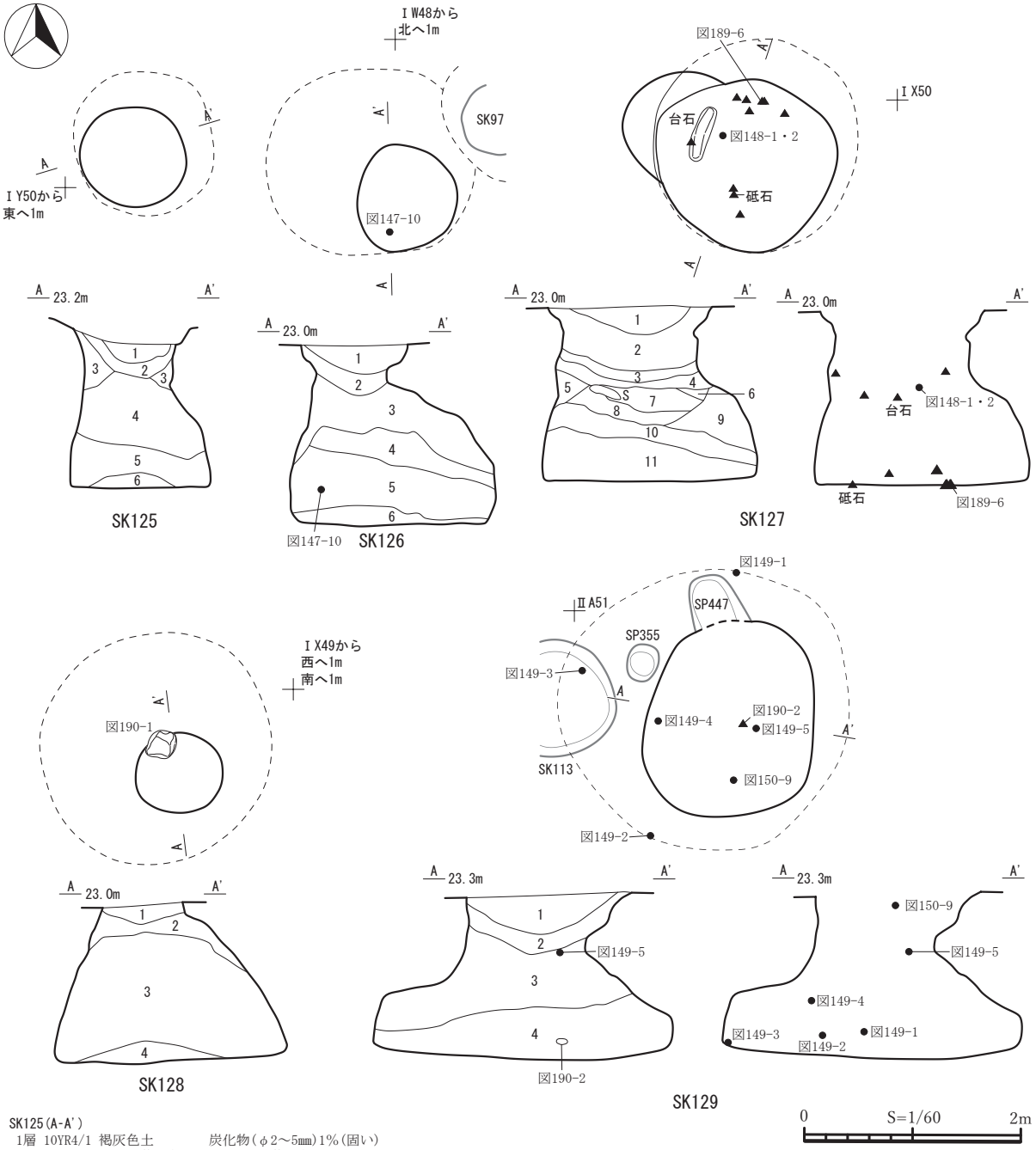
SK114(A-A')
1層 10YR3/4 暗褐色土　10YR6/6明黄褐色砂粒(φ～5mm)1%、炭化物粒(φ～5mm)1%
2層 10YR3/4 暗褐色土　10YR4/4褐色土との混合土、10YR6/6明黄褐色砂粒(φ～5mm)2%、炭化物粒(φ～3mm)1%
3層 10YR4/6 褐色土　掘りすぎか?
4層 10YR5/6 黄褐色土　風倒木で押された壁土か?
5層 10YR3/3 暗褐色土　10YR6/6明黄褐色砂粒(φ～3mm)3%、炭化物粒(φ～10mm)3%
6層 10YR4/6 褐色土　壁の崩落土
7層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR4/6褐色土粒(φ～5mm)との混合土、炭化物粒(φ～2mm)1%
8層 10YR3/3 暗褐色土　壁際に10YR5/6黄褐色土粒(φ～10mm)5%、10YR6/6明黄褐色砂粒(φ～5mm)3%、炭化物粒(φ～5mm)1%
9層 10YR3/3 暗褐色土　10YR4/3にぶい黄褐色土との混合土、10YR6/6明黄褐色砂粒(φ～2mm)1%、炭化物粒(φ～3mm)1%
10層 10YR3/3 暗褐色土　10YR4/4褐色土粒(φ～15mm)との混合土、炭化物粒(φ～7mm)1%
11層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR3/3暗褐色土との混合土、焼土粒(φ～3mm)2%
12層 10YR3/3 暗褐色土　10YR6/6明黄褐色土粒(φ～3mm)3%、炭化物粒(φ～3mm)1%

SK120(A-A')
1層 10YR3/2 黒褐色土　炭化物1%
2層 10YR4/6 褐色土　ローム質土

SK123(A-A')
1層 10YR3/4 暗褐色土

SK124(A-A')
1層 10YR2/1 黒色土
2層 10YR6/6 明黄褐色土
3層 10YR6/3 にぶい黄橙色土　白色ローム主体土
4層 10YR3/3 暗褐色土
5層 10YR2/2 黒褐色土

図81　土坑(18)



SK125(A-A')
1層 10YR4/1 褐灰色土　炭化物(φ2～5㎜)1%(固い)
2層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　10YR6/6明黄褐色土、炭化物(φ2～5㎜)1%(固い)
3層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　10YR6/4にぶい黄橙色土、ローム(φ20㎜)2%、炭化物(φ2㎜)1%
4層 10YR5/2 灰黄褐色土
5層 10YR4/1 褐灰色土　10YR7/3にぶい黄橙色土、炭化物(φ5～10㎜)1%
6層 10YR6/4 にぶい黄橙色土

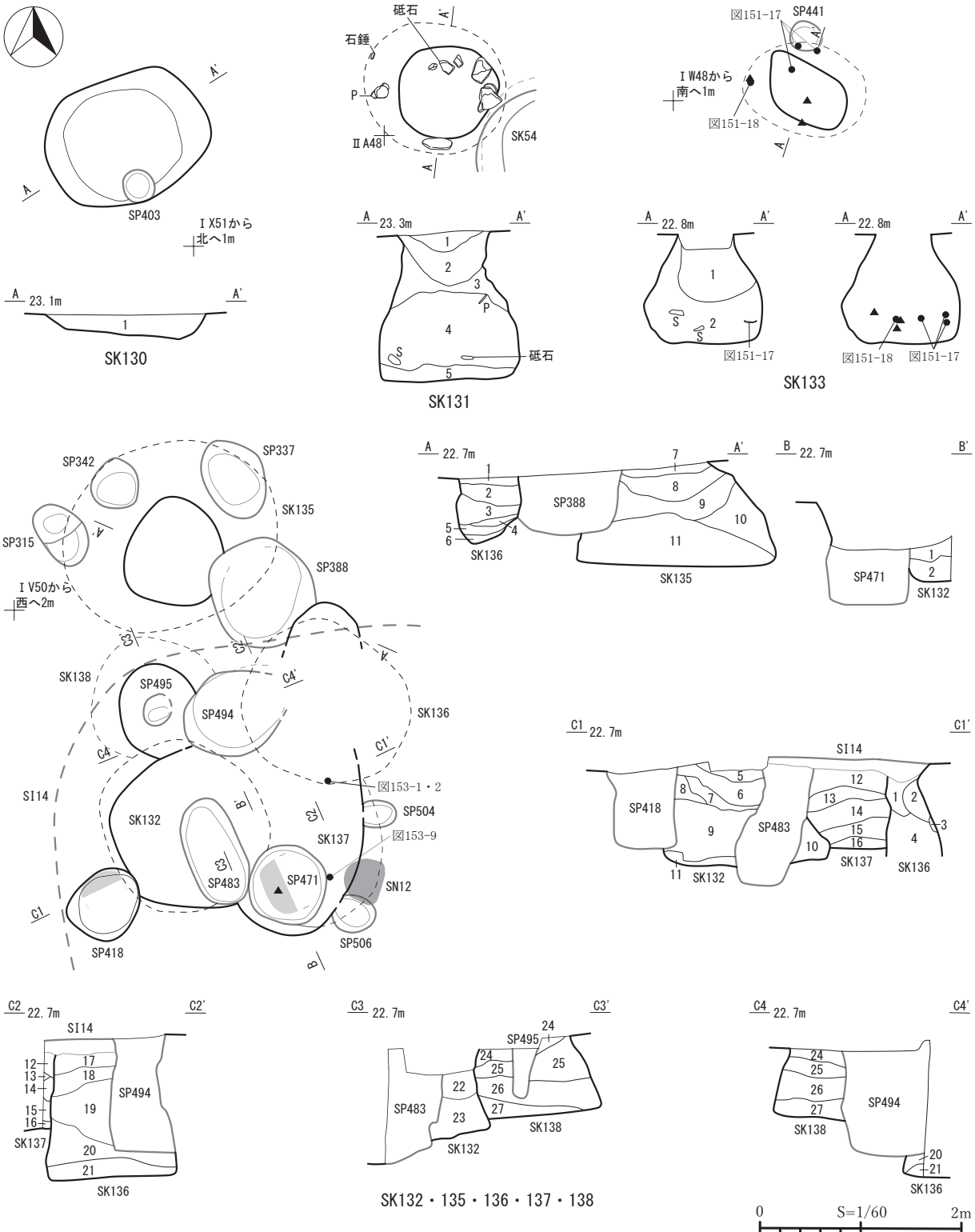
SK126(A-A')
1層 10YR4/2 灰黄褐色土　10YR6/6明黄褐色土5%、炭化物(φ2㎜)1%(固い)
2層 10YR5/2 灰黄褐色土　ローム(φ10～20㎜)1%、砂塊(φ10㎜)1%、炭化物(φ2㎜)1%(固い)
3層 10YR3/2 黒褐色土　2.5Y7/2灰黄色砂がブロック状に15%、炭化物(φ5㎜)1%
4層 10YR7/6 明黄褐色　2.5Y7/2灰黄色砂20%、10YR4/2灰黄褐色土15%、炭化物(φ5～10㎜)1%
5層 10YR3/2 黒褐色土　ローム(φ10～20㎜)5%、砂塊(φ10～20㎜)2%、炭化物(φ5～10㎜)2%
6層 10YR5/6 黄褐色土

SK127(A-A')
1層 10YR5/1 褐灰色土　10YR6/6明黄褐色土が筋状に10%、炭化物(φ2～5㎜)1%(固い)
2層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　10YR7/4にぶい黄橙色土5%、炭化物(φ2～10㎜)5%(固い)
3層 10YR4/1 褐灰色土　10YR5/2灰黄褐色土5%、炭化物(φ10～20㎜)5%
4層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　焼土(φ10㎜)1%、炭化物(φ5～10㎜)2%
5層 10YR4/3 にぶい黄褐色土
6層 10YR4/1 褐灰色土　炭化物(φ10㎜)1%
7層 10YR3/1 黒褐色土　炭化物(φ2～10㎜)1%
8層 10YR7/6 明黄褐色土
9層 10YR5/1 褐灰色土　10YR5/4にぶい黄褐色土20%、炭化物(φ10～20㎜)1%
10層 10YR4/1 褐灰色土　10YR5/1褐灰色土15%、10YR6/4にぶい黄橙色土15%、2.5Y7/1灰白色粘土5%、炭化物(φ10～20㎜)2%(互層堆積)
11層 10YR6/6 明黄褐色土　10YR5/2灰黄褐色土20%、2.5Y7/1灰白色粘土(φ150㎜)1%、炭化物(φ10㎜)2%

SK128(A-A')
1層 10YR6/3 にぶい黄橙色土　炭化物(φ2～5㎜)1%(固い)
2層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　10YR7/3にぶい黄橙色土40%
3層 10YR7/3 にぶい黄橙色土
4層 10YR5/1 褐灰色土

SK129(A-A')
1層 10YR3/2 黒褐色土　焼土(φ5㎜)1%、炭化物(φ5～15㎜)2%(固い)
2層 10YR4/2 灰黄褐色土　ローム(φ5～20㎜)2%、炭化物(φ2～5㎜)1%
3層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　ローム(φ10～100㎜)3%、炭化物(φ5～30㎜)3%
4層 10YR6/3 にぶい黄橙色土　10YR4/1褐灰色土30%、10YR8/4浅黄橙色土10%、炭化物(φ10～20㎜)5%(互層堆積)

図82　土坑(19)



SK130(A-A')
1層 10YR4/2 灰黄褐色土　ローム(φ10～20mm)2%、炭化物(φ2～5mm)2%(固い)

SK131(A-A')
1層 10YR3/2 黒褐色土　焼土(φ5～10mm)1%、炭化物(φ2～15mm)1%
2層 10YR5/2 灰黄褐色土　ローム(φ10～50mm)2%、炭化物(φ2～5mm)2%
3層 10YR4/2 灰黄褐色土　ローム(φ10mm)1%、炭化物(φ2mm)1%
4層 10YR4/1 褐灰色土　10YR5/4にぶい黄褐色土30%、10YR7/4にぶい黄橙色土10%、焼土(φ2～15mm)1%、炭化物(φ2～15mm)15%(互層堆積)
5層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　10YR3/2黒褐色土15%、炭化物(φ2～10mm)1%

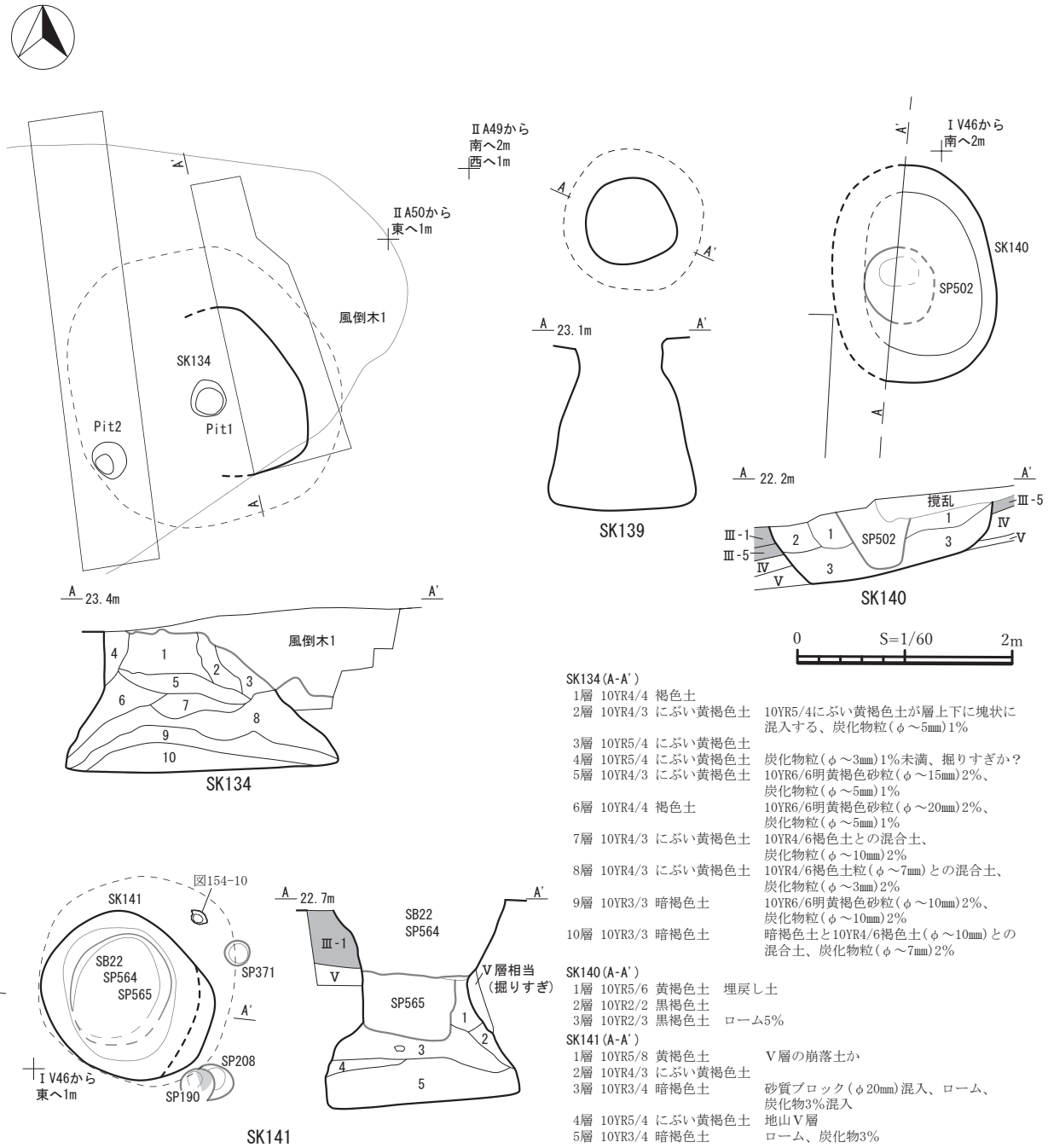
SK133(A-A')
1層 2.5Y7/2 灰黄色砂　10YR4/1褐灰色土30%、10YR6/4にぶい黄橙色土15%、焼土(φ5～15mm)1%、炭化物(φ2～5mm)1%(互層堆積)
2層 10YR4/2 灰黄褐色土

SK135・136(A-A')
1層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　炭化物(φ2～5mm)1%(固い)
2層 10YR4/2 灰黄褐色土　10YR4/1褐灰色土15%、ローム(φ10～50mm)3%、炭化物(φ2mm)1%(固い)
3層 10YR4/1 褐灰色土　炭化物(φ2mm)3%
4層 10YR5/2 灰黄褐色土
5層 10YR4/1 褐灰色土　炭化物(φ2mm)3%
6層 10YR5/3 にぶい黄褐色土
7層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム(φ5～20mm)2%、炭化物(φ5mm)1%
8層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　10YR4/3にぶい黄褐色土20%、ローム(φ10～30mm)5%、炭化物(φ2mm)1%
9層 10YR6/3 にぶい黄橙色土　ローム(φ10mm)1%、炭化物(φ2mm)1%
10層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　ローム(φ10～30mm)5%、砂塊(φ20mm)1%、炭化物(φ2mm)1%
11層 10YR4/1 褐灰色土　10YR5/3にぶい黄褐色土20%、ローム(φ10～30mm)5%、砂塊(φ10～20mm)3%、炭化物(φ2～5mm)3%

図83　土坑(20)

SK132(B-B')
1層 10YR7/6 明黄褐色土　10YR4/2灰黄褐色土5%
2層 10YR4/1 褐灰色土　ローム(φ5～30mm)2%、炭化物(φ2～10mm)2%
※1・2層はC-C'の10層

SK132・136・137・138(C1-C1', C2-C2', C3-C3', C4-C4')
1層 10YR5/2 灰黄褐色土　ローム(φ5mm)1%、砂塊(φ5mm)1%、炭化物(φ2mm)1%
2層 10YR6/4 にぶい黄橙色土　ローム(φ5mm)1%、炭化物(φ2mm)1%
3層 10YR8/2 灰白色土
4層 10YR4/2 灰黄褐色土　10YR4/1褐灰色土10%、ローム(φ5～10mm)2%、砂塊(φ10mm)1%
5層 10YR6/3 にぶい黄橙色土　ローム(φ5～10mm)3%、炭化物(φ2～5mm)1%
6層 10YR4/2 灰黄褐色土　ローム(φ10～15mm)2%、灰白色粘土(φ5～15mm)1%、炭化物(φ2～5mm)1%
7層 10YR4/1 褐灰色土　炭化物(φ2～10mm)3%
8層 10YR5/2 灰黄褐色土　砂塊(φ5～10mm)1%、炭化物(φ5～10mm)2%
9層 10YR4/2 灰黄褐色土　10YR7/6明黄褐色土がブロック状に30%、砂塊(φ10mm)1%、炭化物(φ5～10mm)2%
10層 10YR4/2 灰黄褐色土　ローム(φ10～50mm)3%、炭化物(φ5～20mm)2%、
11層 10YR3/2 黒褐色土　焼土(φ10mm)2%、砂塊(φ20mm)1%、炭化物(φ5～10mm)1%
12層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　焼土(φ5mm)2%、砂塊(φ10mm)1%、炭化物(φ2～5mm)3%
13層 10YR5/1 褐灰色土　炭化物(φ2～5mm)1%
14層 10YR6/6 明黄褐色土　10YR5/2灰黄褐色土30%、炭化物(φ10mm)1%
15層 10YR4/1 褐灰色土　ローム(φ5～20mm)2%、炭化物(φ2～5mm)3%
16層 10YR6/6 明黄褐色土
17層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　砂塊(φ5mm)1%、炭化物(φ5～10mm)1%
18層 10YR4/2 灰黄褐色土　砂塊(φ10mm)1%、焼土(φ5mm)1%、炭化物(φ5mm)1%
19層 10YR5/3 にぶい黄褐色土　10YR4/1褐灰色土が筋状に5%、ローム(φ10mm)2%、砂塊(φ10mm)1%、炭化物(φ5～10mm)2%
20層 10YR4/2 灰黄褐色土　10YR6/6明黄褐色土が下位で筋状に5%、ローム(φ5～10mm)5%、炭化物(φ5mm)1%
21層 10YR3/1 黒褐色土　10YR6/6明黄褐色土がブロック状に30%、炭化物(φ5mm)1%
22層 10YR5/2 灰黄褐色土　ローム(φ2～5mm)2%、砂塊(φ10mm)1%、焼土(φ5mm)1%、炭化物(φ2～10mm)2%
23層 10YR5/2 灰黄褐色土　10YR6/4にぶい黄橙色土30%、ローム(φ10～20mm)5%、炭化物(φ2～10mm)3%
24層 10YR4/2 灰黄褐色土　ローム(φ5mm)1%、炭化物(φ2～5mm)1%
25層 10YR5/2 灰黄褐色土　ローム(φ5～10mm)2%、炭化物(φ5mm)2%
26層 10YR4/1 褐灰色土　10YR5/2灰黄褐色土20%、ローム(φ5～20mm)5%、砂塊(φ10mm)1%、炭化物(φ5～20mm)3%
27層 10YR6/4 にぶい黄橙色土　10YR4/1褐灰色土が筋状に5%、炭化物(φ2～5mm)1%

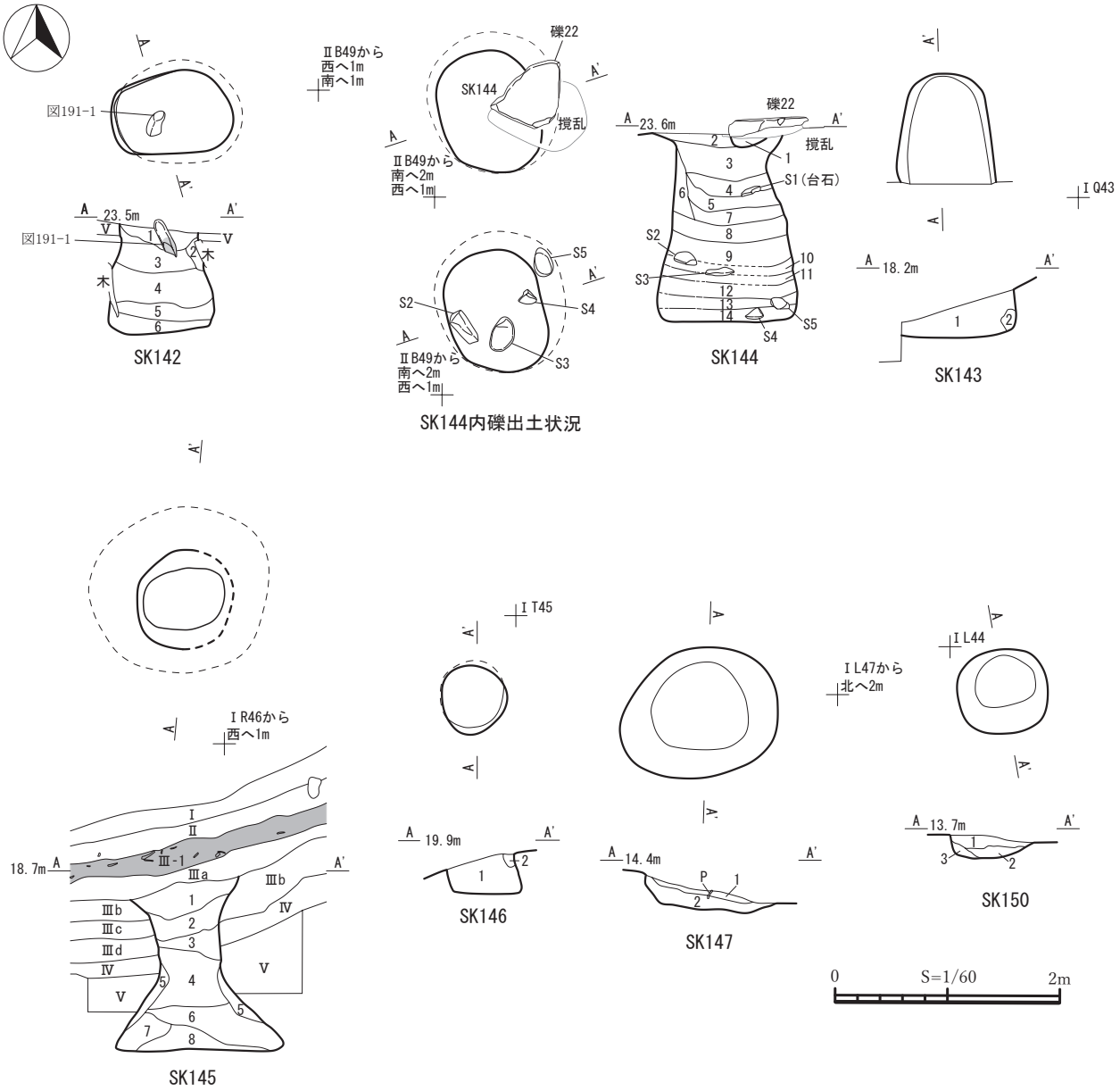


SK134(A-A')
1層 10YR4/4 褐色土
2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR5/4にぶい黄褐色土が層上下に塊状に混入する、炭化物粒(φ～5mm)1%
3層 10YR5/4 にぶい黄褐色土
4層 10YR5/4 にぶい黄褐色土　炭化物粒(φ～3mm)1%未満、掘りすぎか?
5層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR6/6明黄褐色砂粒(φ～15mm)2%、炭化物粒(φ～5mm)1%
6層 10YR4/4 褐色土　10YR6/6明黄褐色砂粒(φ～20mm)2%、炭化物粒(φ～5mm)1%
7層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR4/6褐色土との混合土、炭化物粒(φ～10mm)2%
8層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　10YR4/6褐色土粒(φ～7mm)との混合土、炭化物粒(φ～3mm)2%
9層 10YR3/3 暗褐色土　10YR6/6明黄褐色砂粒(φ～10mm)2%、炭化物粒(φ～10mm)2%
10層 10YR3/3 暗褐色土　暗褐色土と10YR4/6褐色土(φ～10mm)との混合土、炭化物粒(φ～7mm)2%

SK140(A-A')
1層 10YR5/6 黄褐色土　埋戻し土
2層 10YR2/2 黒褐色土
3層 10YR2/3 黒褐色土　ローム5%

SK141(A-A')
1層 10YR5/8 黄褐色土　Ⅴ層の崩落土か
2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土
3層 10YR3/4 暗褐色土　砂質ブロック(φ20mm)混入、ローム、炭化物3%混入
4層 10YR5/4 にぶい黄褐色土　地山Ⅴ層
5層 10YR3/4 暗褐色土　ローム、炭化物3%

図84　土坑(21)



SK142(A-A')
1層 10YR2/3 黒褐色土　しまり弱、粘性弱、φ1～10㎜炭化物1%、根が混じる
2層 10YR4/4 褐色土　しまりなし、粘性弱、壁面崩落土
3層 10YR3/4 暗褐色土　しまり弱、粘性弱、φ1～5㎜炭化物2%、φ1～10㎜ロームブロック1%
4層 10YR3/2 黒褐色土　しまり弱、粘性弱、φ1～5㎜炭化物・ローム粒1%
5層 10YR3/4 暗褐色土　しまり弱、粘性弱、φ1～20㎜炭化物・ロームブロック2%
6層 10YR3/1 黒褐色土　しまり弱、粘性弱、φ1～20㎜ロームブロック1%

SK143(A-A')
1層 10YR2/2 黒褐色土　炭化物(φ1～3㎜)2%
2層 10YR6/6 明黄褐色土　10YR2/2黒褐色土10%

SK144(A-A')
1層 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中、炭化材φ1～5㎜、黄褐色ブロックφ1㎜3%、礫22の構築層
2層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中
3層 10YR4/4 褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中、黄褐色ブロックφ2㎜2%
4層 10YR4/4 褐色シルト質粘土　混入物なし、S1を含む
5層 10YR4/4 褐色シルト質粘土　黄褐色ブロック(φ3㎜)1%、炭化物粒1㎜2%
6層 10YR4/4 褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中
7層 10YR4/6 褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中
8層 10YR4/6 褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中
9層 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土　粘性中強、しまり中
10層 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中弱、炭化物粒(φ0.2㎜)3%、黄褐色ブロック(φ0.1㎜)1%、S2出土層
11層 10YR4/4 褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中、炭化物粒(φ1㎜)1%、S3出土層
12層 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト　粘性中、しまり中弱、炭化物粒(φ0.5㎜)3%、黄褐色ブロック(φ0.3㎜)1%
13層 10YR4/6 褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中、炭化物粒(φ2㎜)1%、S4・5出土層
14層 10YR5/6 黄褐色シルト質粘土　粘性中、しまり中弱

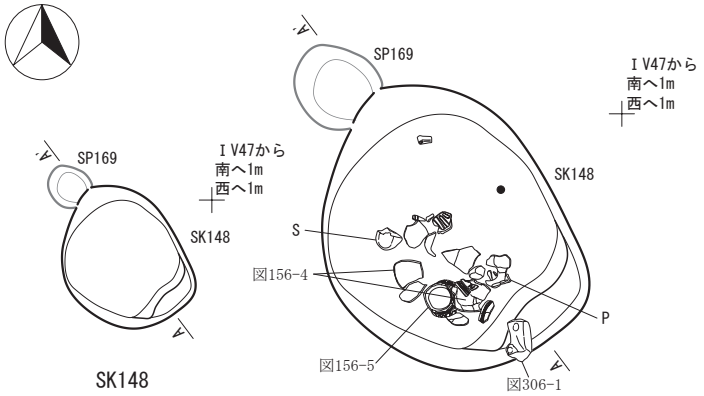
SK145(A-A')
1層 10YR2/2 黒褐色土　ローム1%
2層 10YR2/3 黒褐色土　ローム2%
3層 10YR3/3 暗褐色土　ローム1%
4層 10YR2/2 黒褐色土　ローム3%
5層 10YR4/6 褐色土　壁崩落土
6層 10YR2/3 黒褐色土　Ⅵ層由来の砂ブロック(φ5～10㎜)5%
7層 10YR3/4 暗褐色土　ロームブロック(φ5～10㎜)10%
8層 10YR4/6 褐色土　ローム主体土、崩落土か

SK146(A-A')
1層 10YR3/1 黒褐色土　浮石(φ5㎜)1%
2層 10YR6/4 にぶい黄橙色土

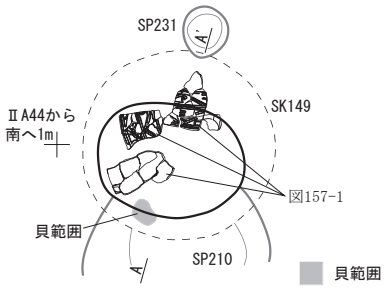
SK147(A-A')
1層 10YR3/3 暗褐色土　φ3㎜地山粒3%、粘性中、しまり強
2層 10YR3/4 暗褐色土　φ10～20㎜地山粒10%、φ1～20㎜焼土粒5%、粘性中、しまり強

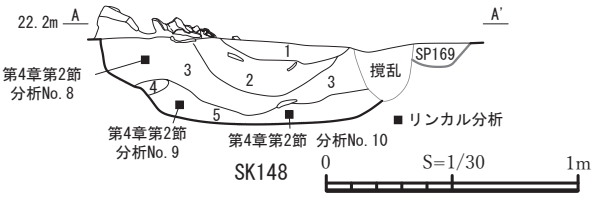
SK150(A-A')
1層 10YR2/1 黒色土　10YR5/6黄褐色ローム粒3%混合
2層 10YR3/1 黒褐色土　10YR5/6黄褐色ローム粒3%、φ2㎜炭化物粒1%混合
3層 10YR4/6 褐色土　10YR3/2黒褐色土粒5%混合

図85　土坑(22)

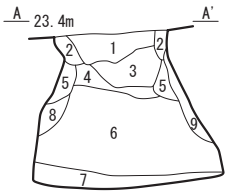


SK148遺物出土状況

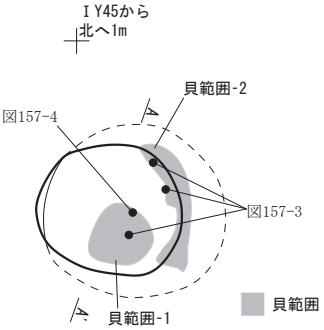


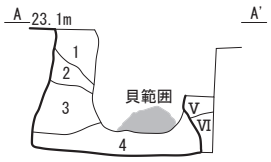


SK148

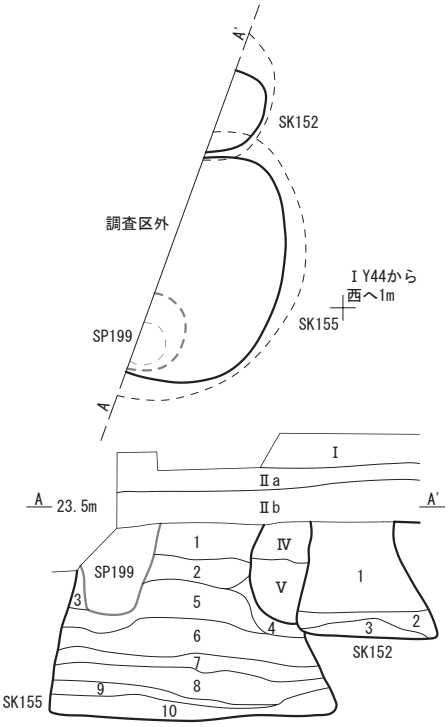


SK149

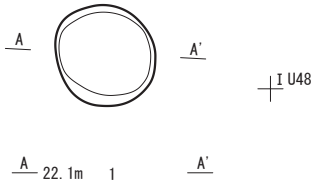




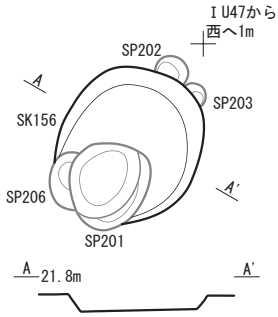
SK151



SK152・155



SK153



SK156

0 S=1/60 2m

SK148(A-A')
1層 10YR4/6 褐色土　炭化物1%
2層 10YR3/4 暗褐色土　炭化物1%
3層 10YR4/4 褐色土　炭化物、ローム粒1%
4層 10YR5/8 黄褐色土　崩落土
5層 10YR2/3 黒褐色土　炭化物1%

SK149(A-A')
1層 10YR3/3 暗褐色土　砂粒(φ5㎜)1%、ローム粒1%
2層 10YR3/4 暗褐色土　砂粒(φ5～10㎜)1%、炭化物1%
3層 10YR3/2 黒褐色土　砂粒(φ5～10㎜)3%
4層 10YR3/3 暗褐色土　砂10%、砂・ローム・暗褐色土の混合土
5層 10YR4/6 褐色土　砂質土
6層 10YR6/6 明黄褐色土　砂層
7層 10YR3/4 暗褐色土　遺物包含層、貝(ハマグリ)出土
8層 10YR3/3 暗褐色土
9層 10YR5/6 黄褐色土　壁の崩落土

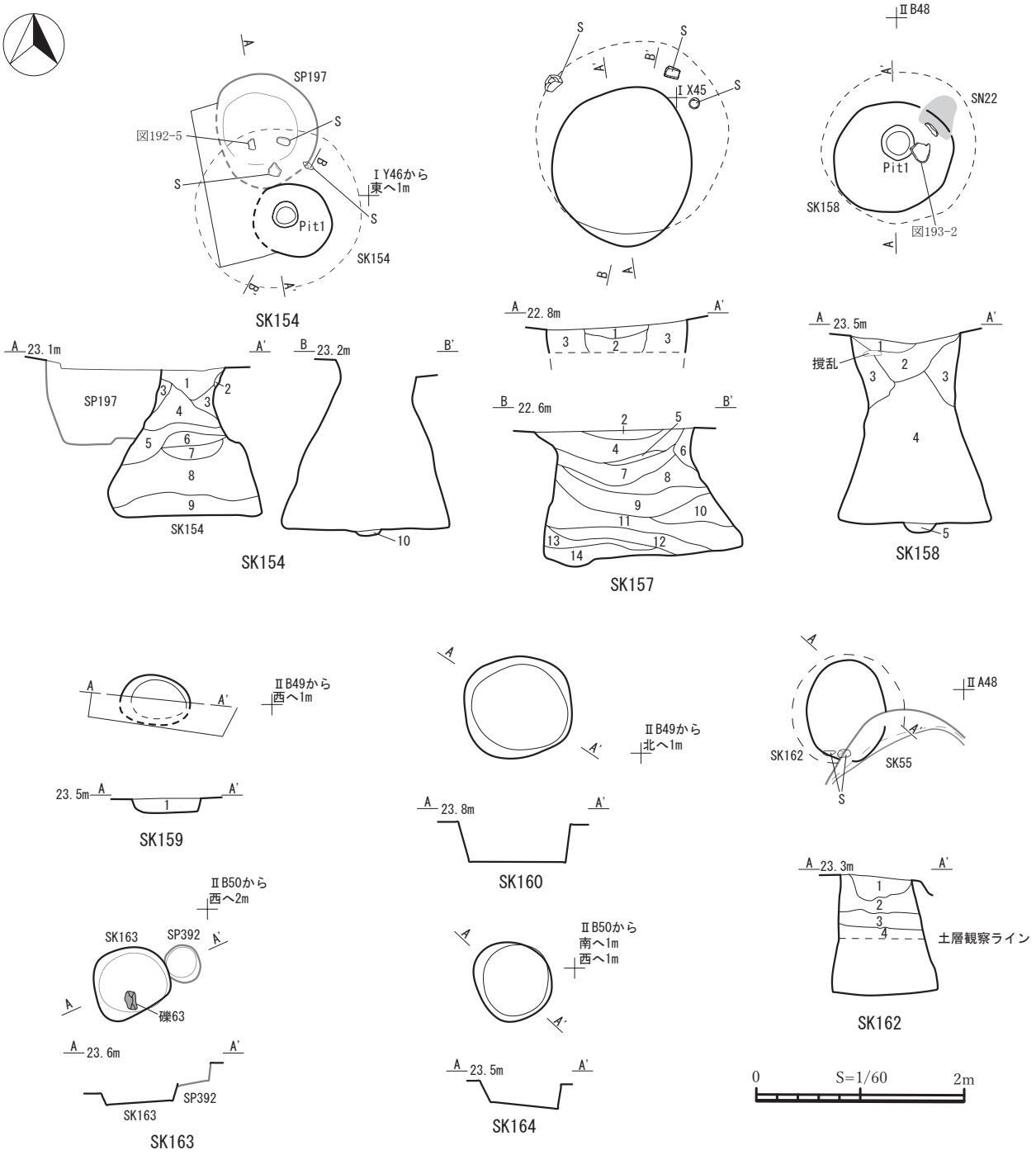
SK151(A-A')
1層 10YR3/4 暗褐色土　焼土粒1%
2層 10YR3/3 暗褐色土　ローム1%
3層 10YR4/4 褐色土　ローム質土
4層 10YR2/2 黒褐色土　ローム1%

SK153(A-A')
1層 10YR3/2 黒褐色土　ローム(φ10～20㎜)5%、砂塊(φ10～20㎜)2%、焼土(φ5㎜)1%、炭化物(φ3㎜)1%

SK152(A-A')
1層 10YR3/2 黒褐色土　炭化物3%、焼土、ローム粒1%、砂ブロック(φ5～10㎜)1%
2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土　炭化物1%、砂ブロック(φ3～5㎜)1%
3層 10YR2/2 黒褐色土　ローム1%

SK155(A-A')
1層 10YR3/4 暗褐色土　炭化物1%
2層 10YR4/6 褐色土　ローム粒1%、砂ブロック(φ3～5㎜)1%
3層 10YR4/4 褐色土　ローム質土、壁の崩落土
4層 10YR4/6 褐色土　ローム、炭化物、焼土1%
5層 10YR5/6 黄褐色土　砂層
6層 10YR4/6 褐色土　砂層
7層 10YR2/2 黒褐色土　ローム10%
8層 10YR4/4 褐色土　ロームとの混合土
9層 10YR2/2 黒褐色土　ローム3%
10層 10YR4/4 褐色土　ロームとの混合土

図86　土坑(23)



SK154(A-A'・B-B')
1層 10YR3/4　暗褐色土　炭化物1%、ローム1%
2層 10YR4/6　褐色土　崩落土
3層 10YR4/6　褐色土
4層 10YR3/4　暗褐色土　ローム粒(5～10㎜)1%、炭化物1%
5層 10YR3/3　暗褐色土　ローム粒(5～10㎜)1%
6層 10YR3/2　黒褐色土　焼土粒1%、炭化物1%
7層 10YR5/6　黄褐色土　ローム土
8層 10YR3/3　暗褐色土　ローム粒(5～10㎜)3%、炭化物1%
9層 10YR3/4　暗褐色土　炭化物1%
10層 10YR4/6　褐色土　ロームとの混合土

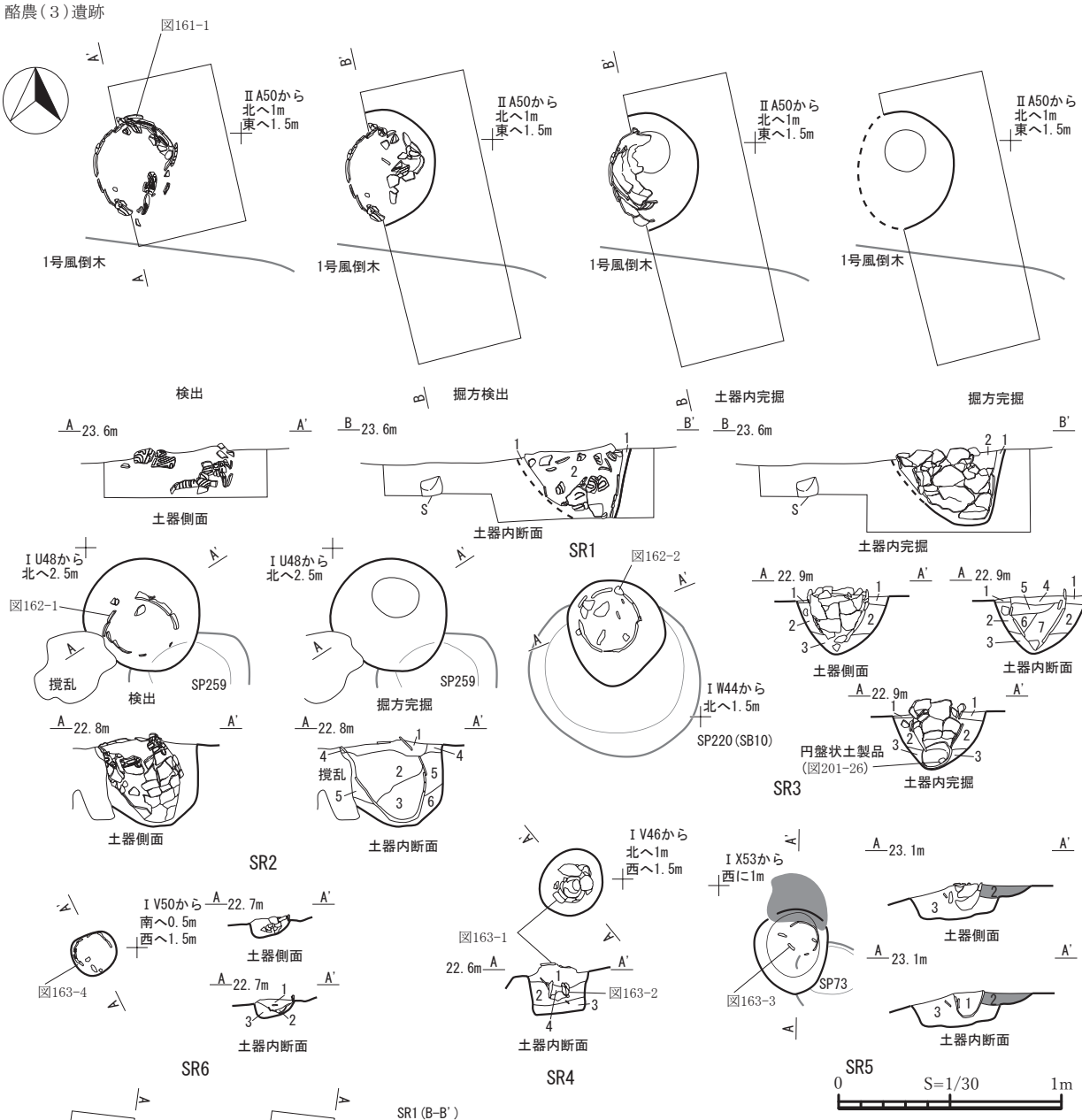
SK157(A-A'・B-B')
1層 10YR4/4　褐色土　ローム埋戻し土
2層 10YR3/3　暗褐色土　炭化物3%
3層 10YR3/3　暗褐色土　ローム、炭化物1%
4層 10YR3/4　暗褐色土　ローム、炭化物1%
5層 7.5YR4/6 褐色土　廃棄焼土
6層 10YR4/4　褐色土　ローム質土、崩落土
7層 10YR3/3　暗褐色土　ローム10%、炭化物1%
8層 10YR2/2　黒褐色土　炭化物1%
9層 10YR3/4　暗褐色土　ローム10%、炭化物1%
10層 10YR3/3　暗褐色土　ローム5%
11層 10YR2/2　黒褐色土　炭化物、ローム5%
12層 10YR3/4　暗褐色土　ローム質土
13層 10YR2/2　黒褐色土　炭化物5%
14層 10YR4/4　褐色土　ローム土、崩落土

SK158(A-A')
1層 10YR2/1　黒色土
2層 10YR4/3　にぶい黄褐色土　炭化物1%
3層 10YR5/8　黄褐色土　ローム質土
4層 10YR3/4　暗褐色土　炭化物1%
5層 10YR2/2　黒褐色土　ローム5%

SK159(A-A')
1層 10YR4/6　褐色土　炭化物、ローム1%

SK162(A-A')
1層 10YR4/4　褐色土　焼土、炭化物1%
2層 10YR4/6　褐色土　砂質土
3層 10YR4/3　にぶい黄褐色土　砂質土
4層 7.5YR4/6 褐色土　廃棄焼土層を含む

図87　土坑(24)



SR1(B-B')
1層　10YR5/4 にぶい黄褐色ローム質土　地山Ⅴ層に酷似、φ2㎜炭粒1%混合、掘方
2層　10YR5/3 にぶい黄褐色ローム質土　φ1㎜炭粒2%混合、土器内堆積土

SR2(A-A')
1層　10YR2/2 黒褐色土　φ1㎜の炭化物1%含む。粘性中、しまり中
2層　10YR3/4 暗褐色土　φ1～3㎜の炭化物5%含む。粘性中、しまり中
3層　10YR3/3 暗褐色土　粘性中、しまり中
4層　10YR3/2 黒褐色土　粘性中、しまり中
5層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　φ1㎜の炭化物1%含む。粘性中、しまり中
6層　10YR5/6 黄褐色土　φ3㎜の地山粒7%含む。粘性中、しまり中

SR3(A-A')
1層　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、掘方
2層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、白色パミス、掘方
3層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、白色パミス、炭化物粒(φ0.1㎜)1%、掘方
4層　10YR3/4 暗褐色シルト質粘土　しまり中弱、粘性中弱、黒褐色土(10YR2/3)筋状に混入、土器内堆積土
5層　10YR3/4 暗褐色シルト質粘土　しまり中弱、粘性中弱、炭化物粒(φ0.1㎜)1%、土器内堆積土
6層　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土　しまり中、粘性中、ローム粒(φ0.5～1㎜)10%、炭化物粒(φ0.5㎜)3%　土器内堆積土
7層　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土　しまり中、粘性中、ローム粒(φ0.5～1㎜)1%、炭化物粒(φ0.5㎜)3%　土器内堆積土

SR4(A-A')
1層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、掘方
2層　10YR4/4 褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、掘方
3層　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、掘方
4層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト　しまり中、粘性中、土器内堆積土

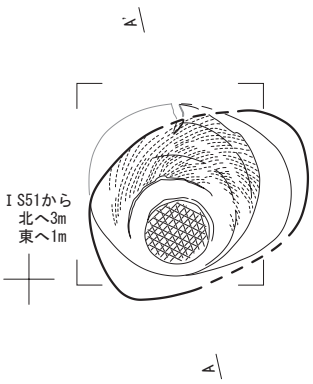
SR5(A-A')
1層　10YR3/4　暗褐色土　φ1～5㎜炭化物・焼土粒1%
2層　7.5YR4/4　褐色土　廃棄焼土
3層　10YR3/3　暗褐色土　φ1～5㎜焼土粒・ロームブロック1%

SR6(A-A')
1層　10YR3/4 暗褐色シルト質粘土　しまり中、粘性中弱、木根の貫入、地山ブロックを含む。土器内堆積土
2層　10YR2/3 黒褐色シルト質粘土　しまり中弱、粘性中、土器内堆積土
3層　10YR4/6 褐色シルト質粘土　しまり中、粘性中、根撹乱を多く含む、掘方

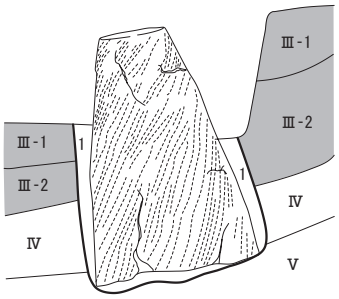
SR9(A-A')
1層　10YR2/1 黒色シルト
2層　10YR2/1 黒色シルト

SR10(A-A')
1層　10YR3/2 黒褐色土(Ⅲ層相当)
2層　10YR3/2 黒褐色土
3層　10YR5/2 灰黄褐色土

図88　土器埋設遺構(１)

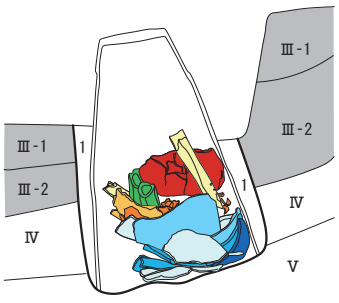


A　21.0m　A'



土器側面・堀方断面

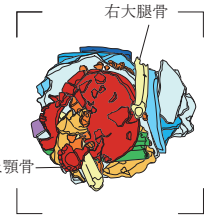
A　21.0m　A'



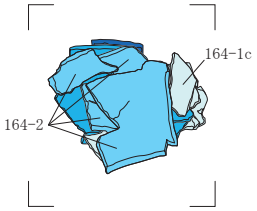
土器内見通し

SR7(A-A')
1層　7.5YR3/4 暗褐色土　Ⅲ-1層よりやや明るい。
粘性、しまり中。

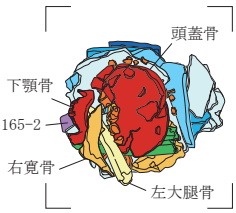
土器内部の人骨・土器累積状況



最上部（土器底部側）から



人骨・図164-1a除去後



上顎骨・右大腿骨除去後

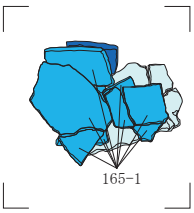
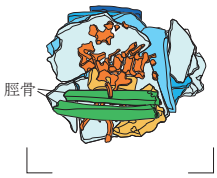


図164-1c・2除去後



頭骨・右寛骨・左大腿骨除去後

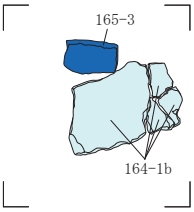
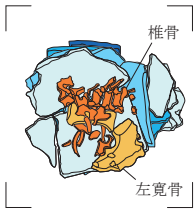
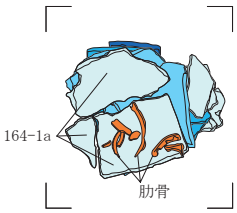


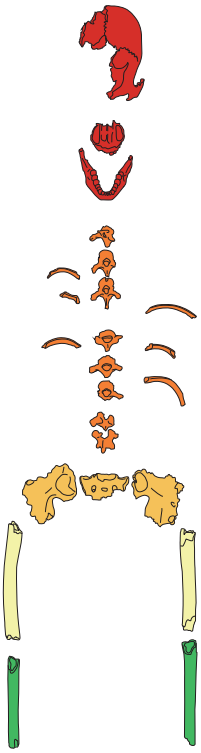
図165-1除去後



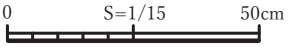
脛骨等除去後



左寛骨・仙骨・椎骨除去後

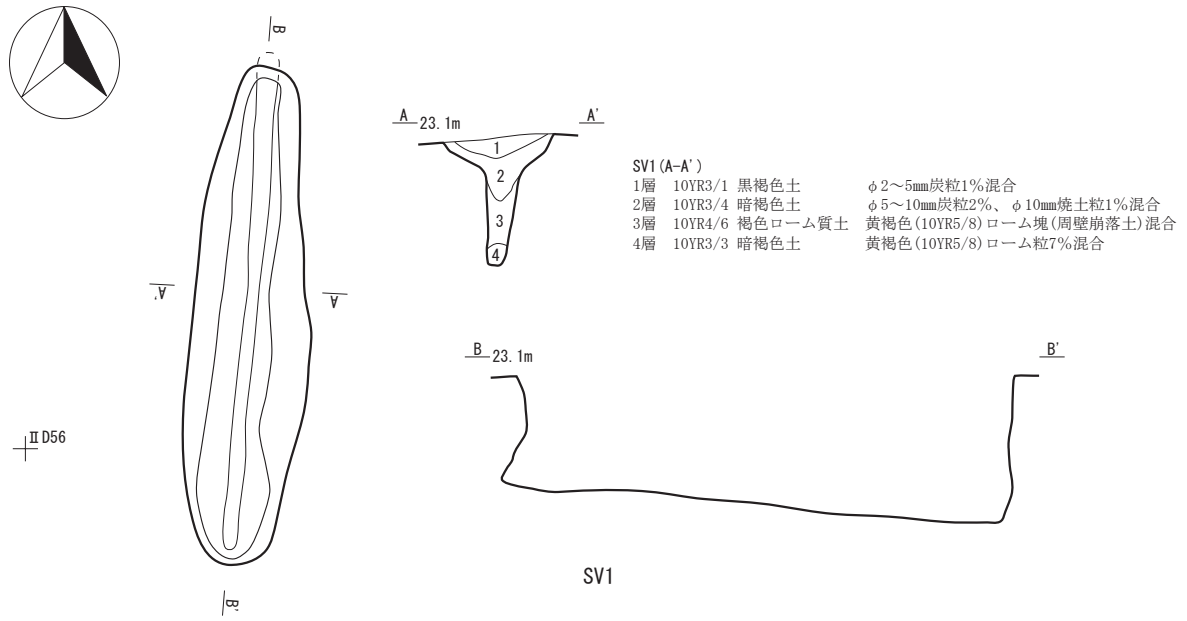


土器内埋納人骨



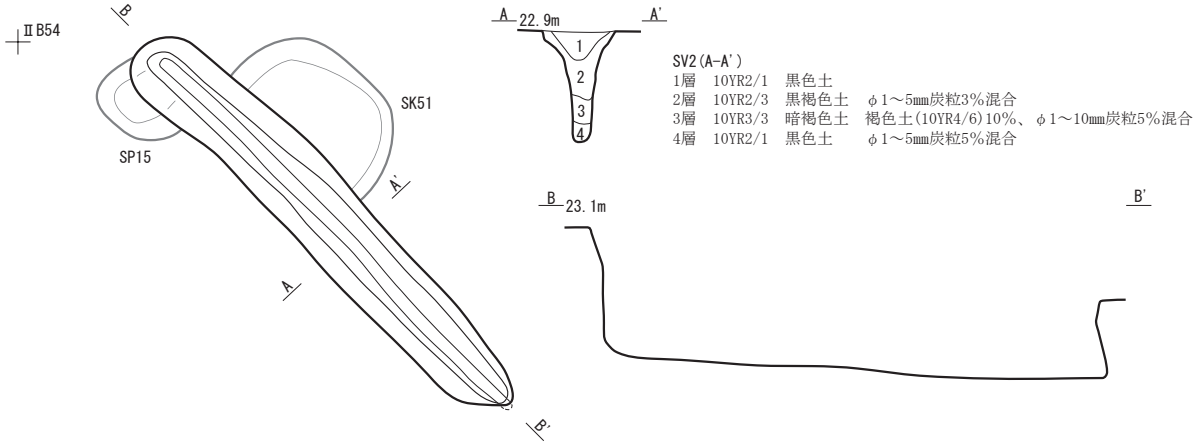
SR7

図89　土器埋設遺構（２）



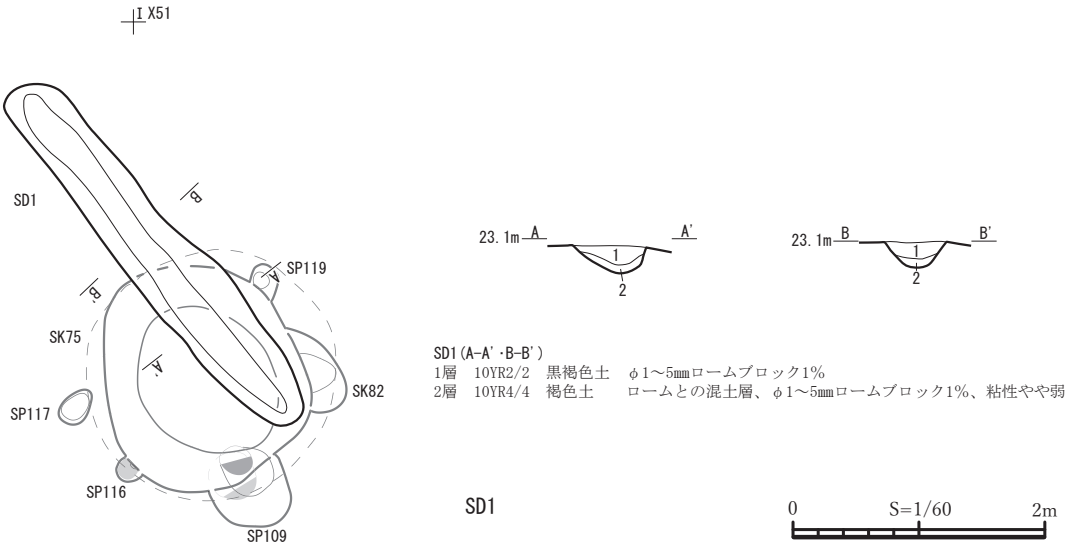
SV1(A-A')
1層　10YR3/1 黒褐色土　　φ2～5㎜炭粒1%混合
2層　10YR3/4 暗褐色土　　φ5～10㎜炭粒2%、φ10㎜焼土粒1%混合
3層　10YR4/6 褐色ローム質土　黄褐色(10YR5/8)ローム塊(周壁崩落土)混合
4層　10YR3/3 暗褐色土　　黄褐色(10YR5/8)ローム粒7%混合

SV1



SV2(A-A')
1層　10YR2/1　黒色土
2層　10YR2/3　黒褐色土　φ1～5㎜炭粒3%混合
3層　10YR3/3　暗褐色土　褐色土(10YR4/6)10%、φ1～10㎜炭粒5%混合
4層　10YR2/1　黒色土　　φ1～5㎜炭粒5%混合

SV2



SD1(A-A'・B-B')
1層　10YR2/2　黒褐色土　φ1～5㎜ロームブロック1%
2層　10YR4/4　褐色土　　ロームとの混土層、φ1～5㎜ロームブロック1%、粘性やや弱

SD1

0　S=1/60　2m

図90　溝状土坑・溝跡

図 91　環状列石出土土器

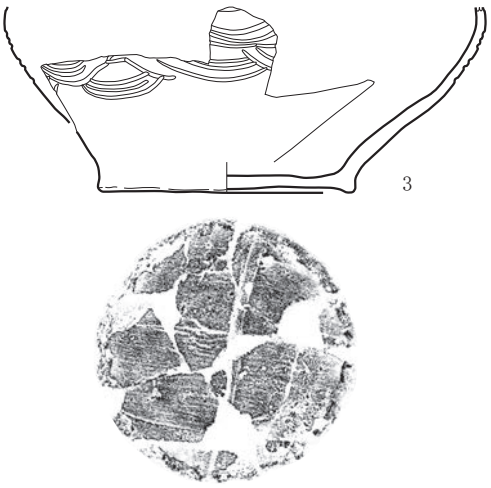
SQ3SR1

0 S=1/3 10cm

図 92　配石遺構出土土器（１）

SQ3SR2

SQ3SR3



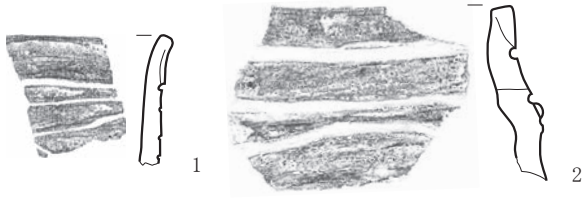
0　S=1/3　10cm

図 93　配石遺構出土土器（２）

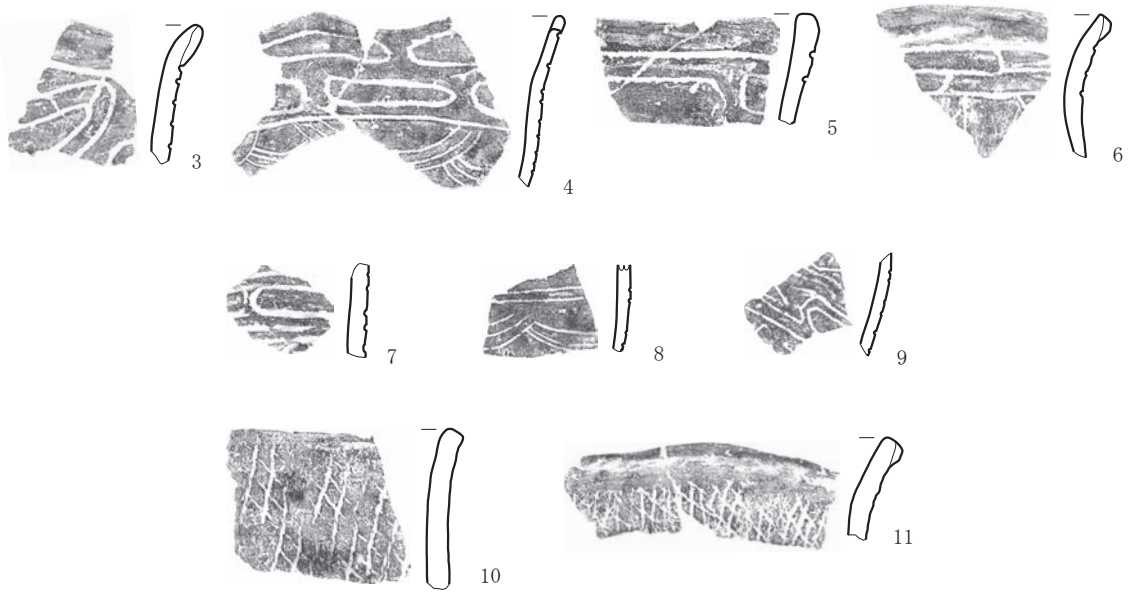
SQ3SR1＋SR2＋礫 12

図 94　配石遺構出土土器（３）

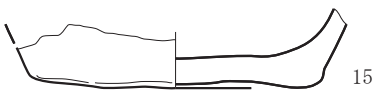
SQ3 礫 15



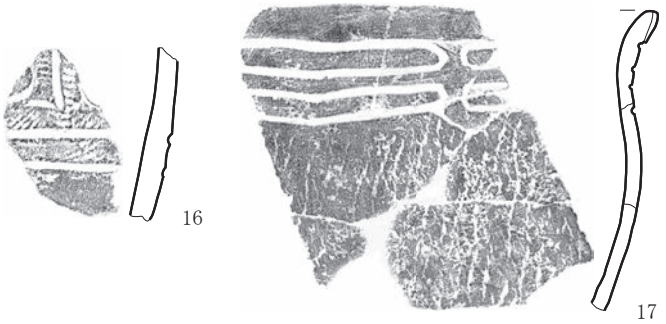
SQ3



SQ4 礫 46



SQ4



0　S=1/3　10cm

図 95　配石遺構出土土器（４）

SQ4SR1

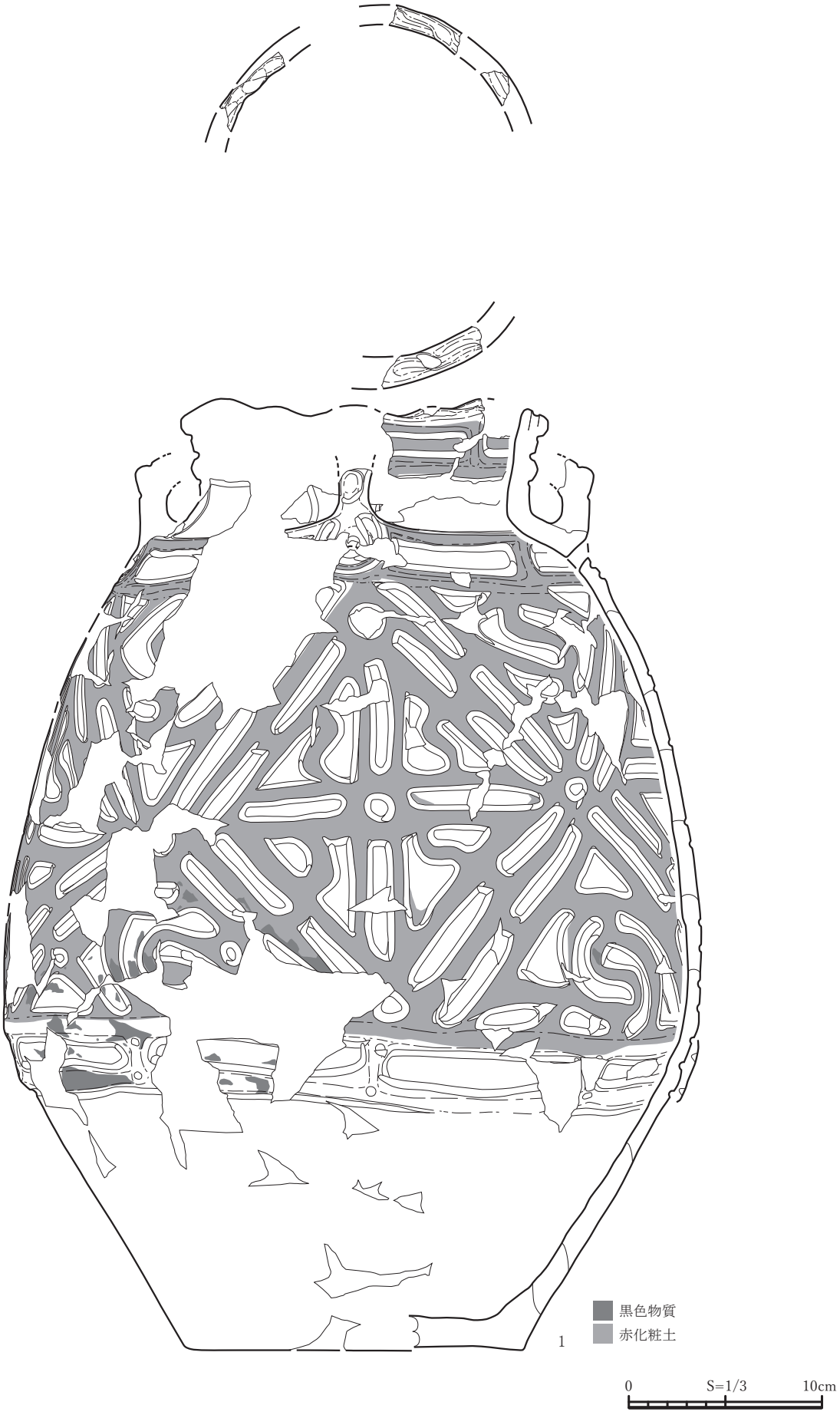


図 96　配石遺構出土土器（５）

SI1

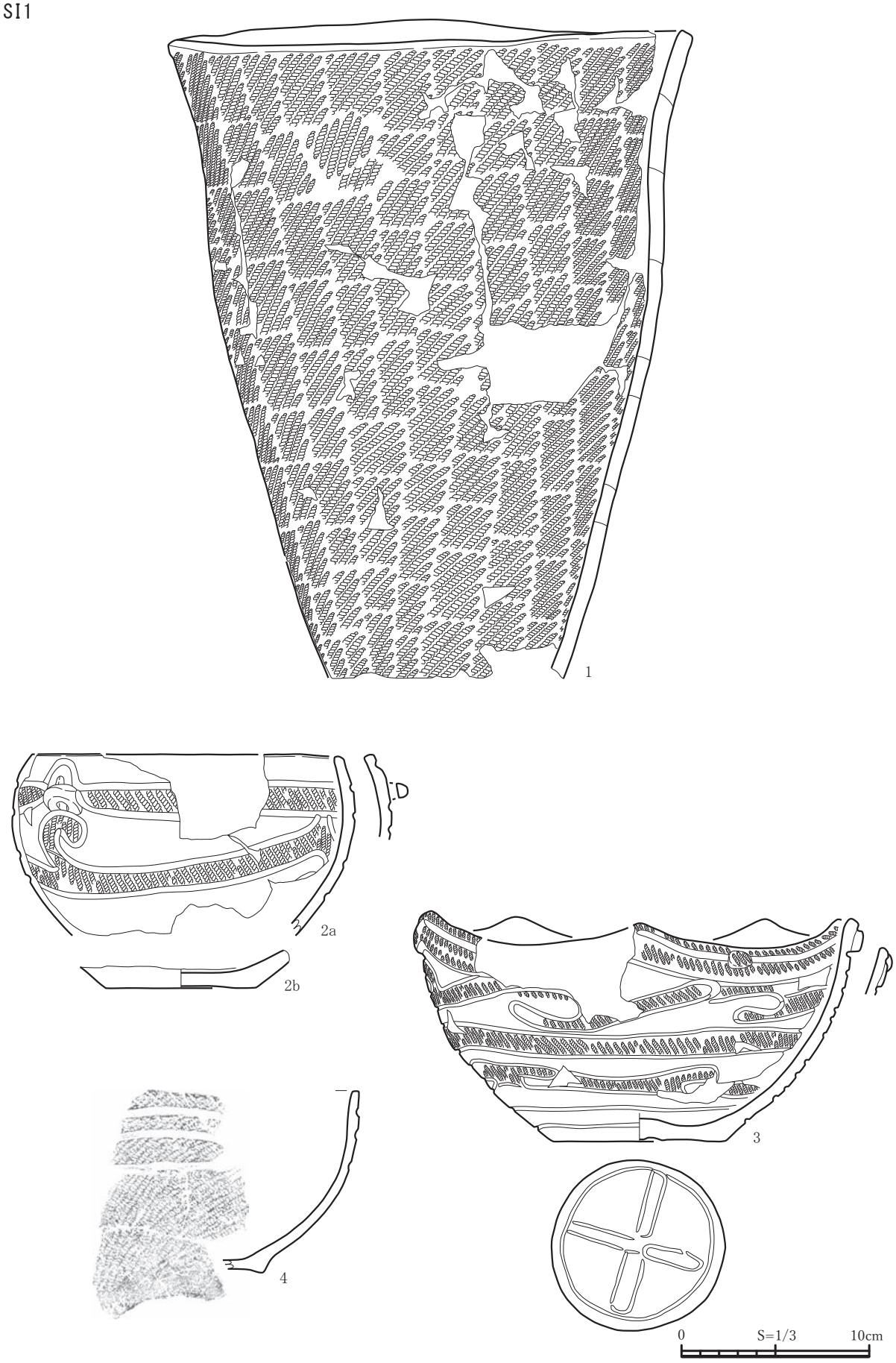


図 97　竪穴建物跡出土土器（１）

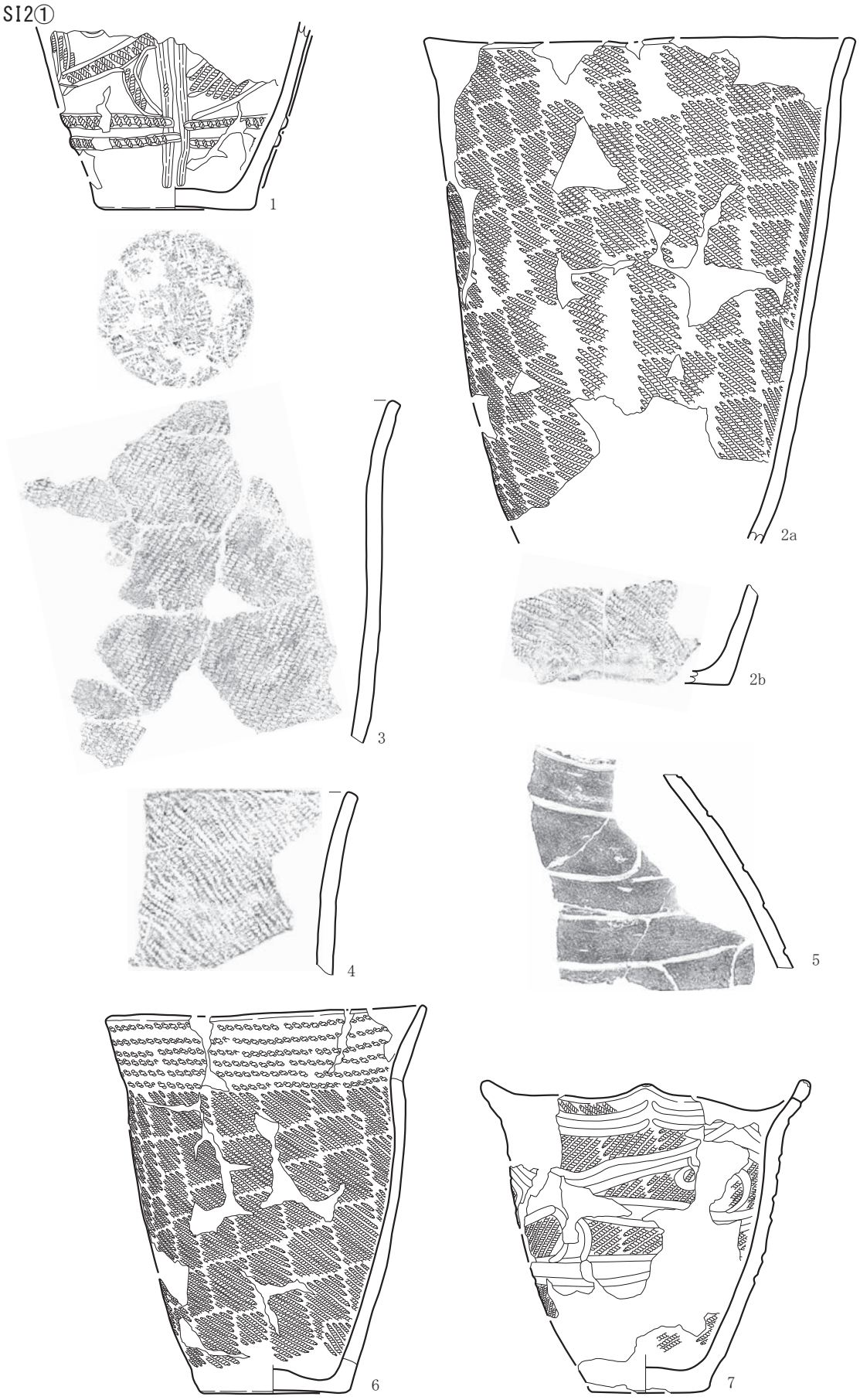


図 98　竪穴建物跡出土土器（２）

0　S=1/3　10cm

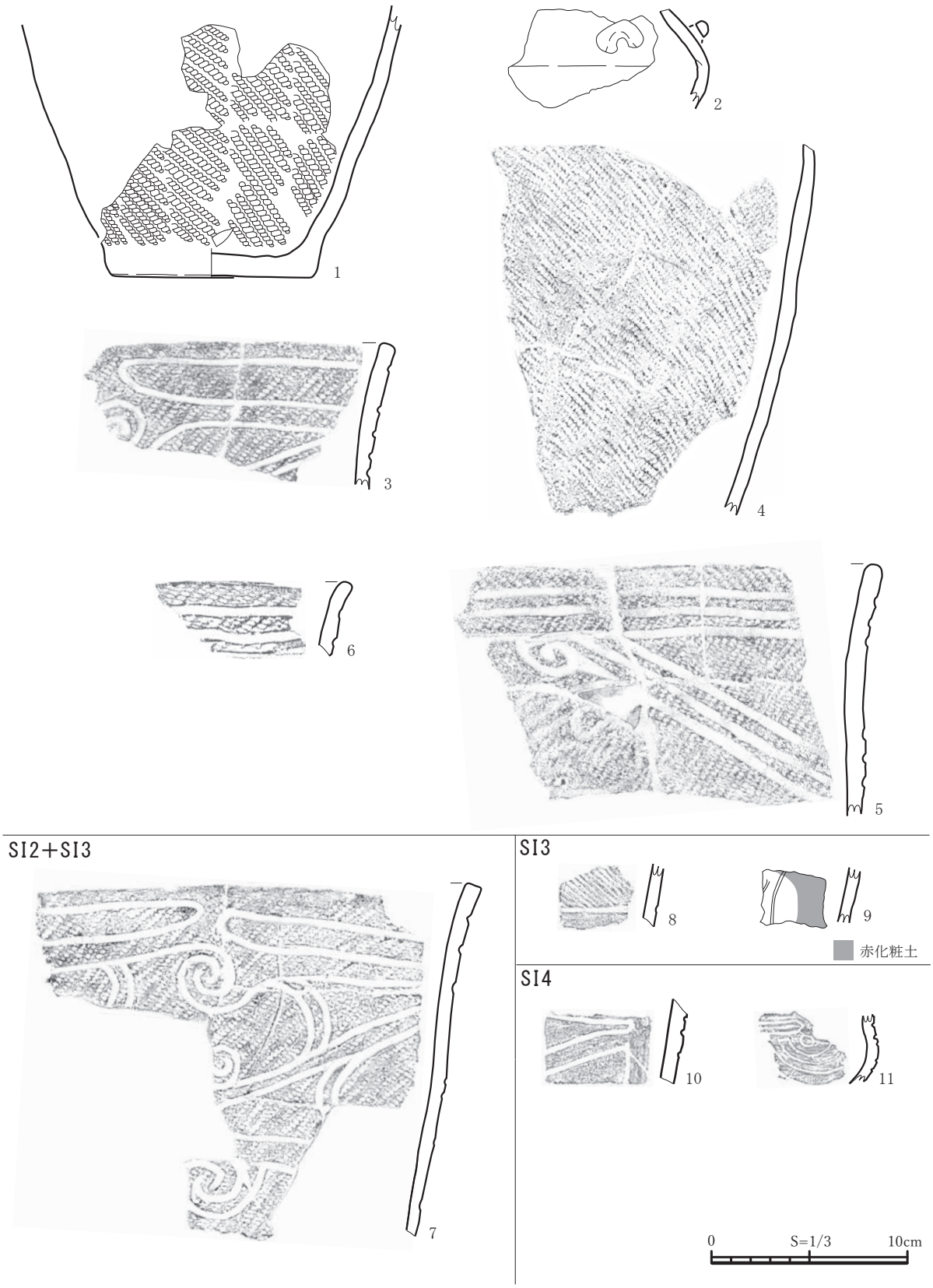


図 99　竪穴建物跡出土土器（３）

SI5

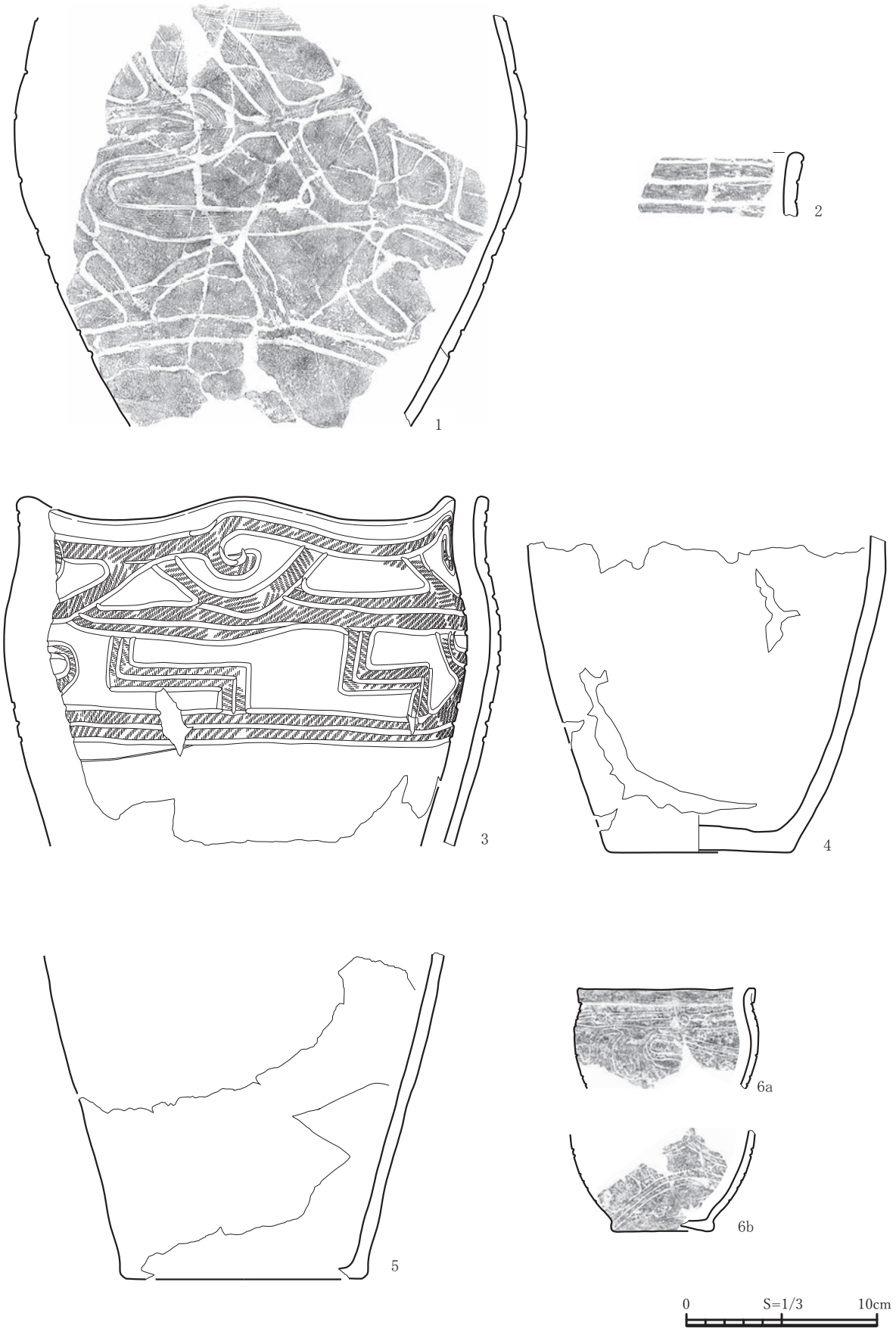


図 100　竪穴建物跡出土土器（４）

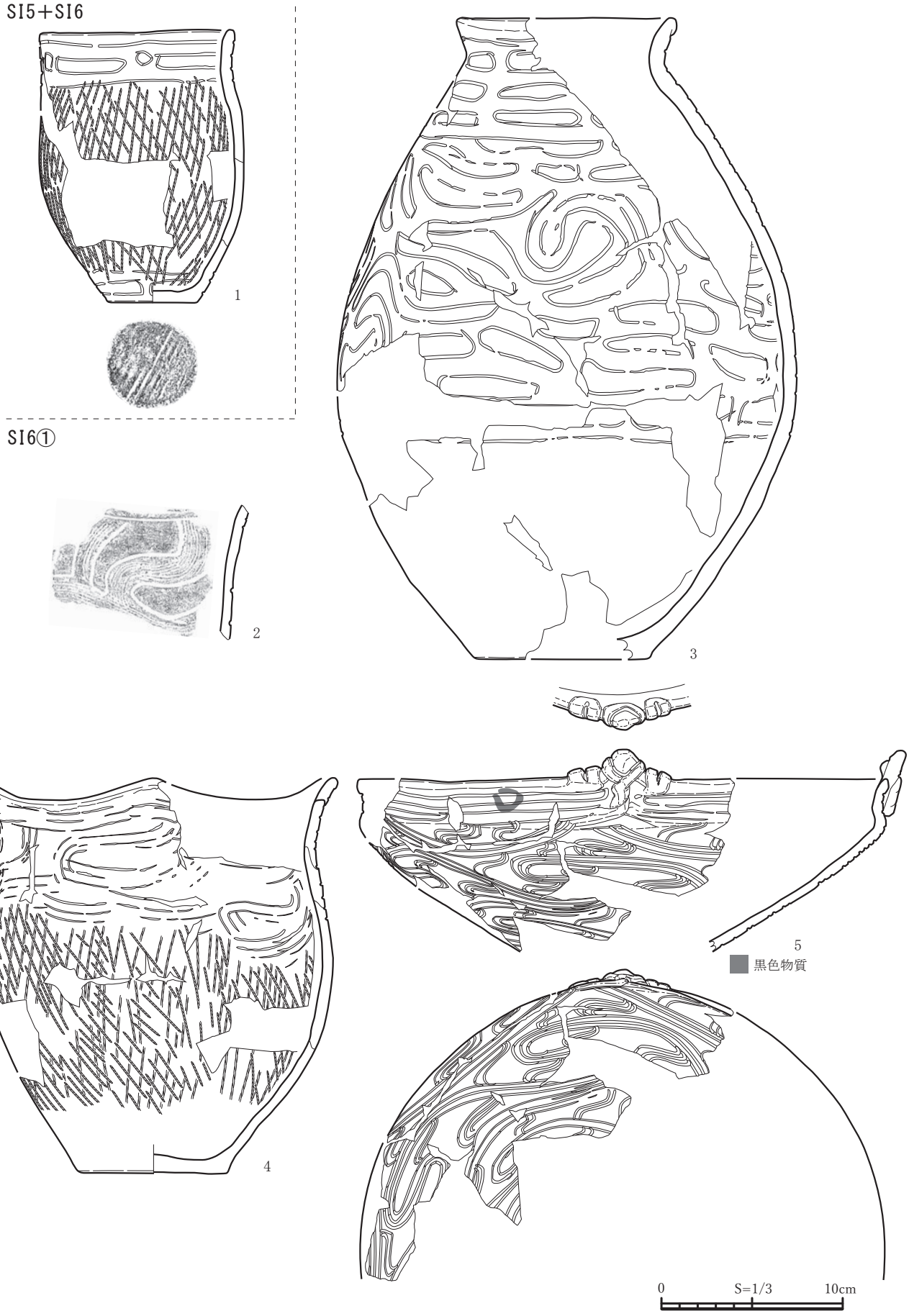
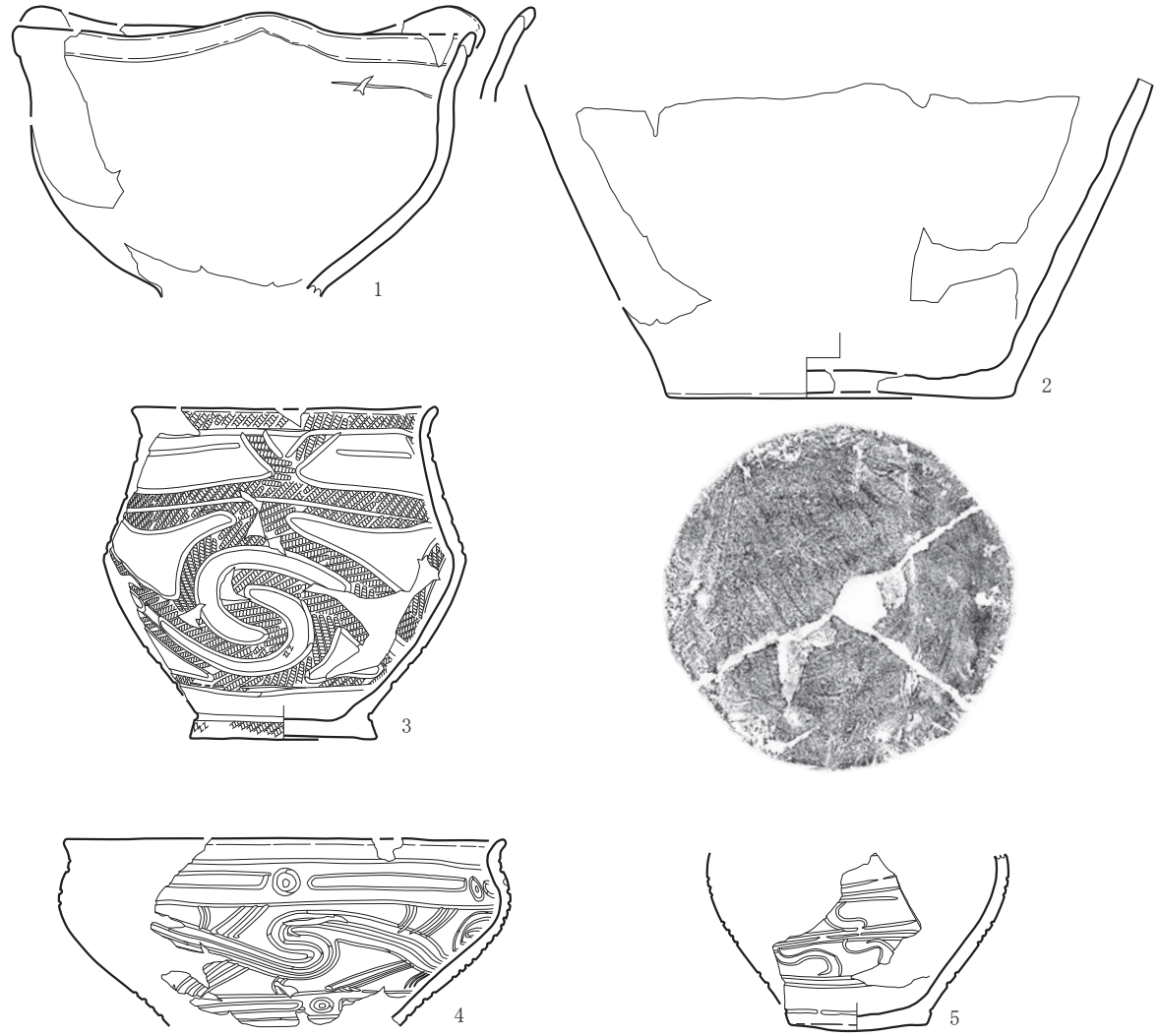
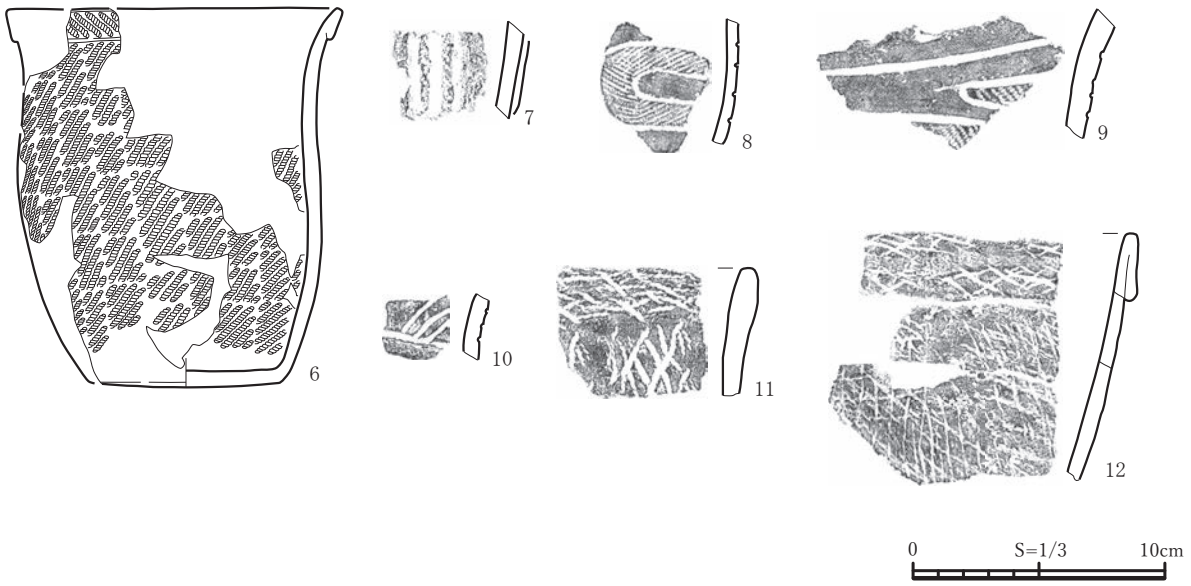


図 101　竪穴建物跡出土土器（５）

SI6②



SI7



0 S=1/3 10cm

図 102　竪穴建物跡出土土器（６）

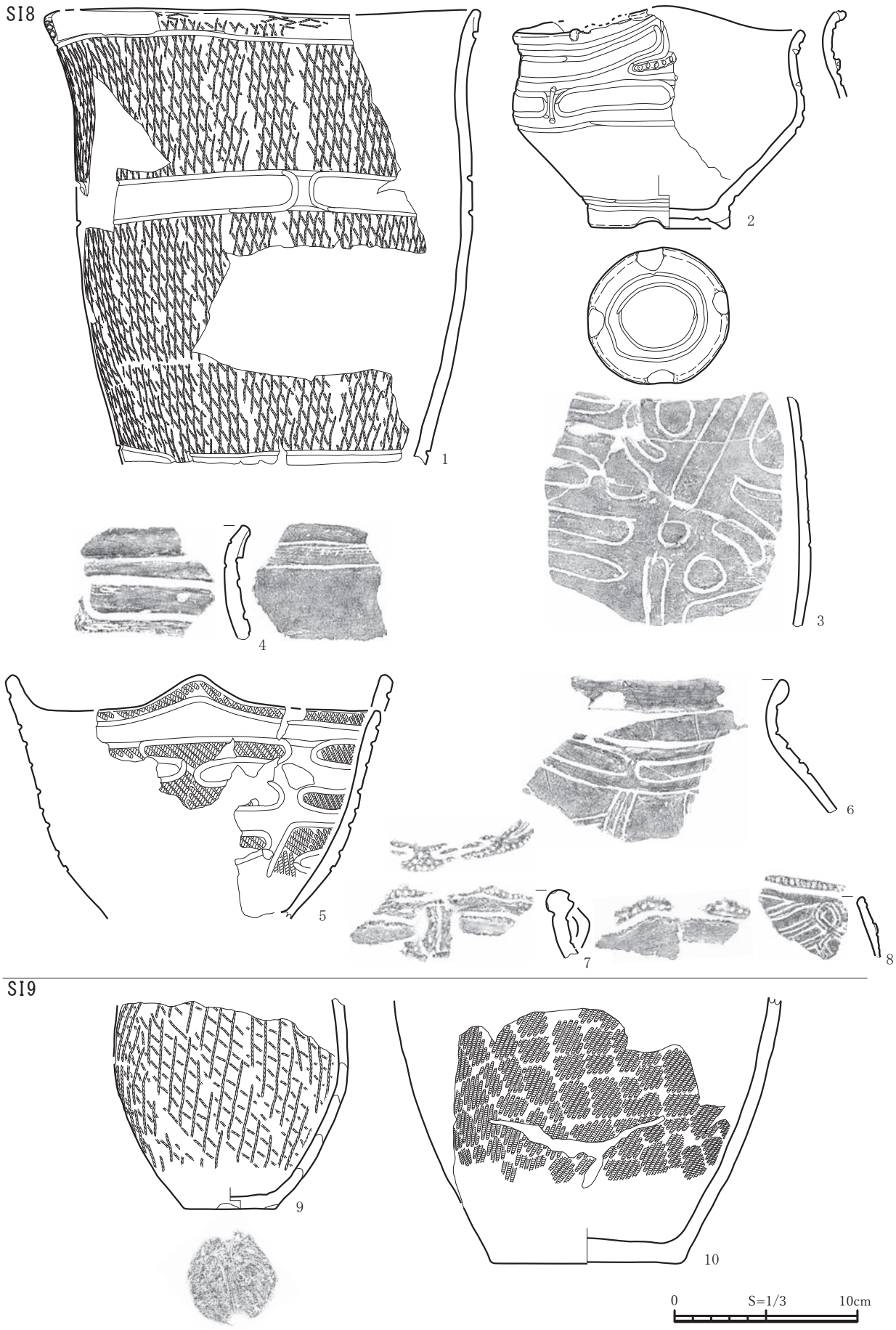


図 103　竪穴建物跡出土土器（７）

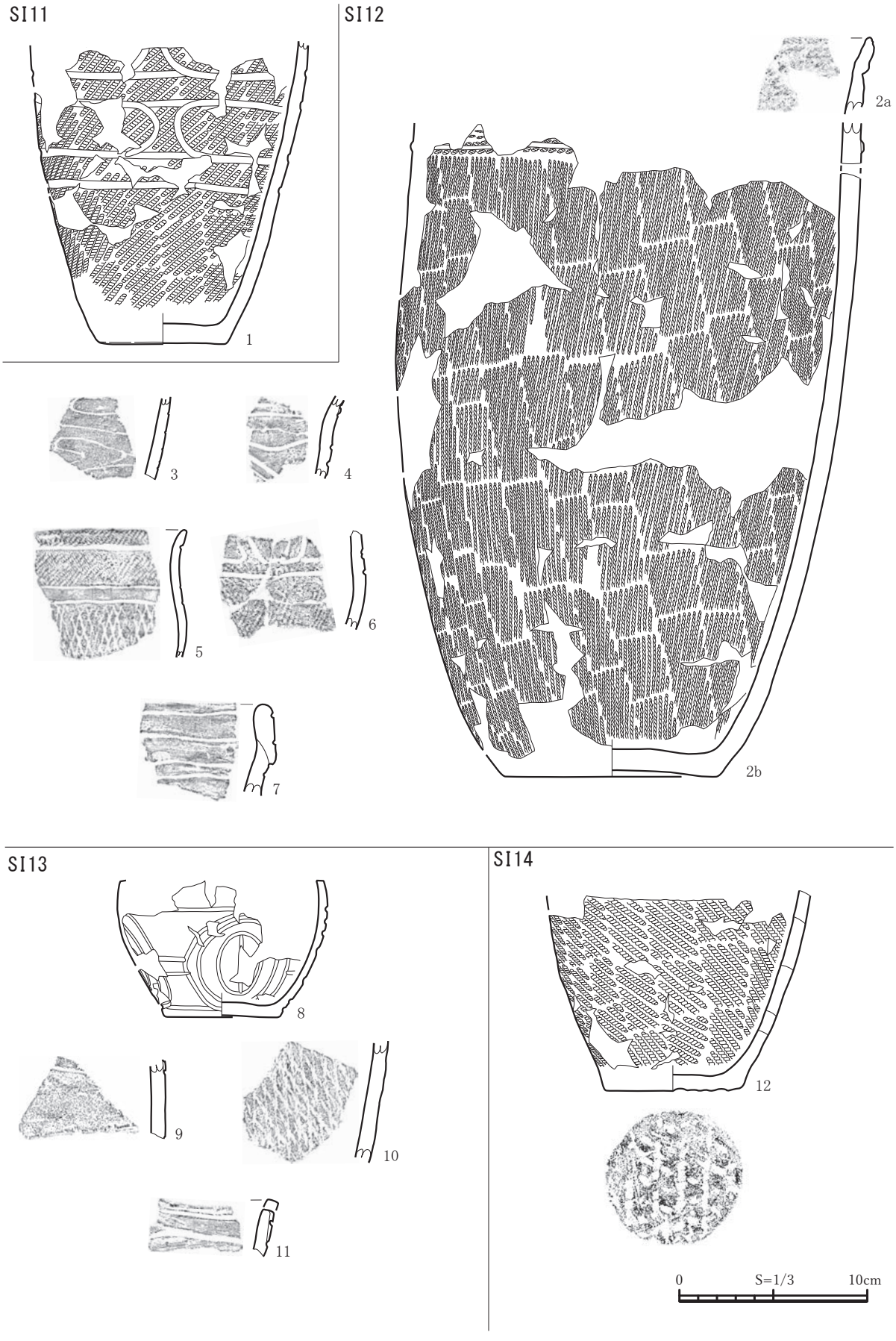


図 104　竪穴建物跡出土土器（８）

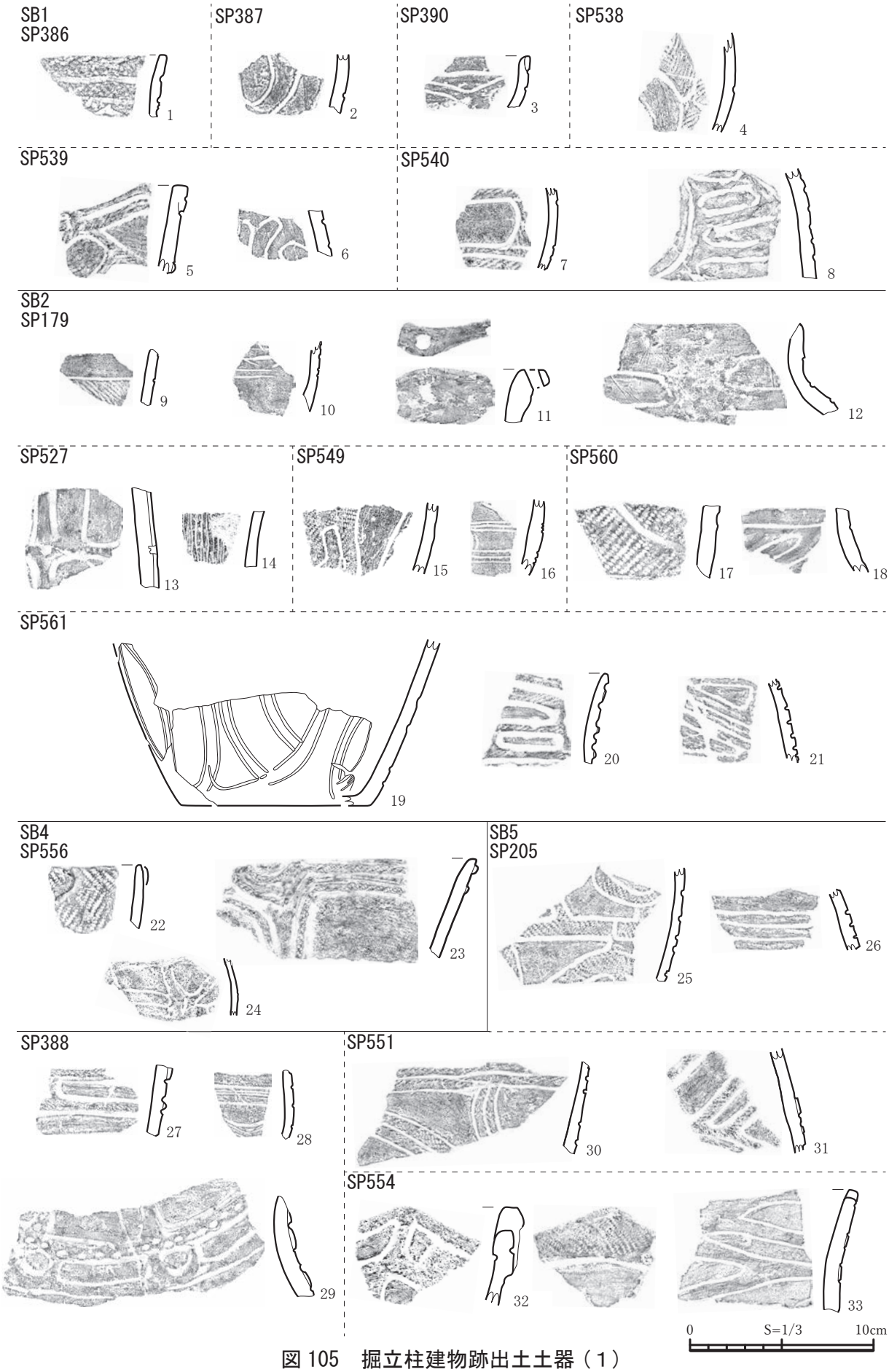


図 105　掘立柱建物跡出土土器（１）

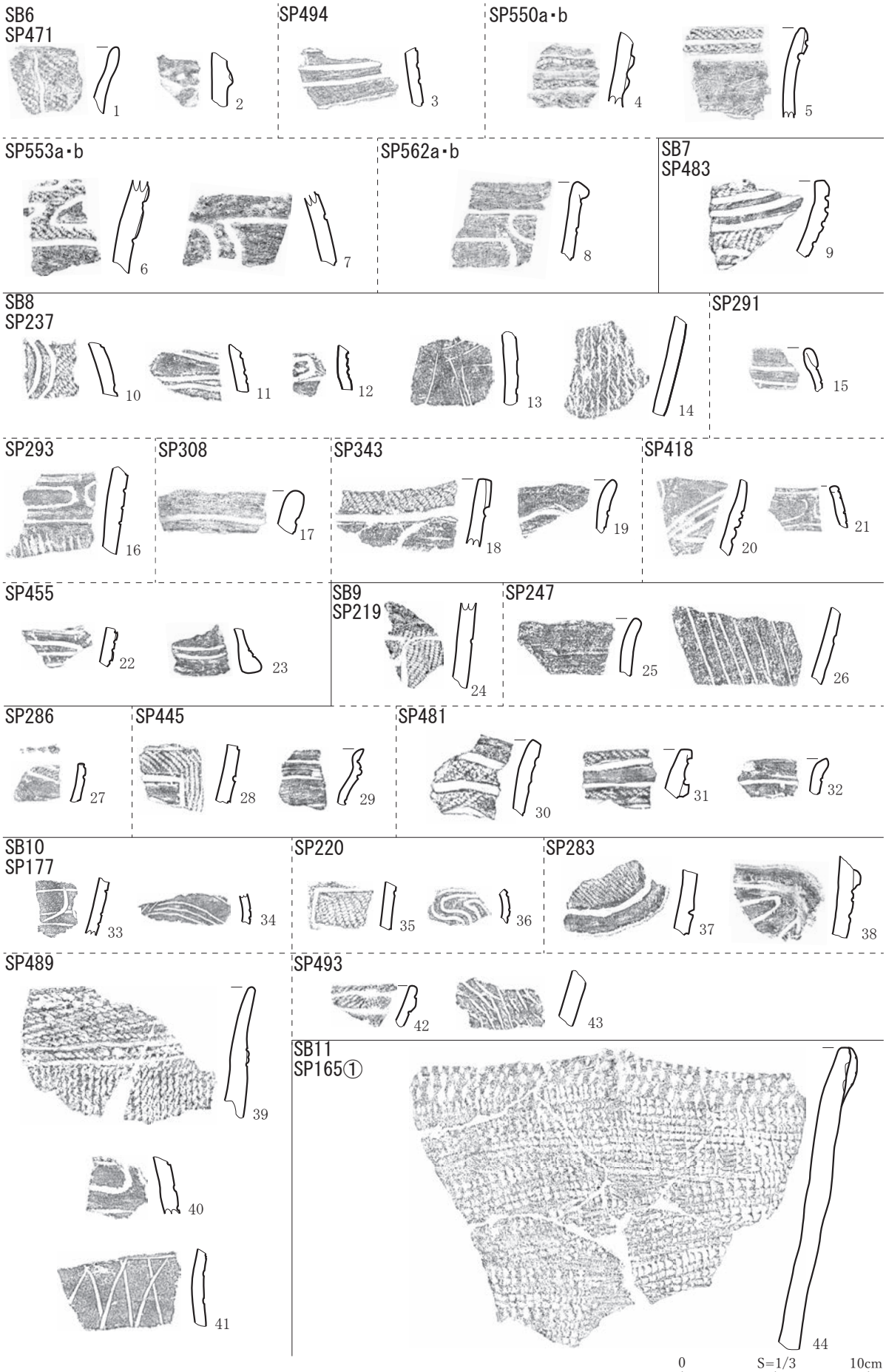


図 106　掘立柱建物跡出土土器（２）

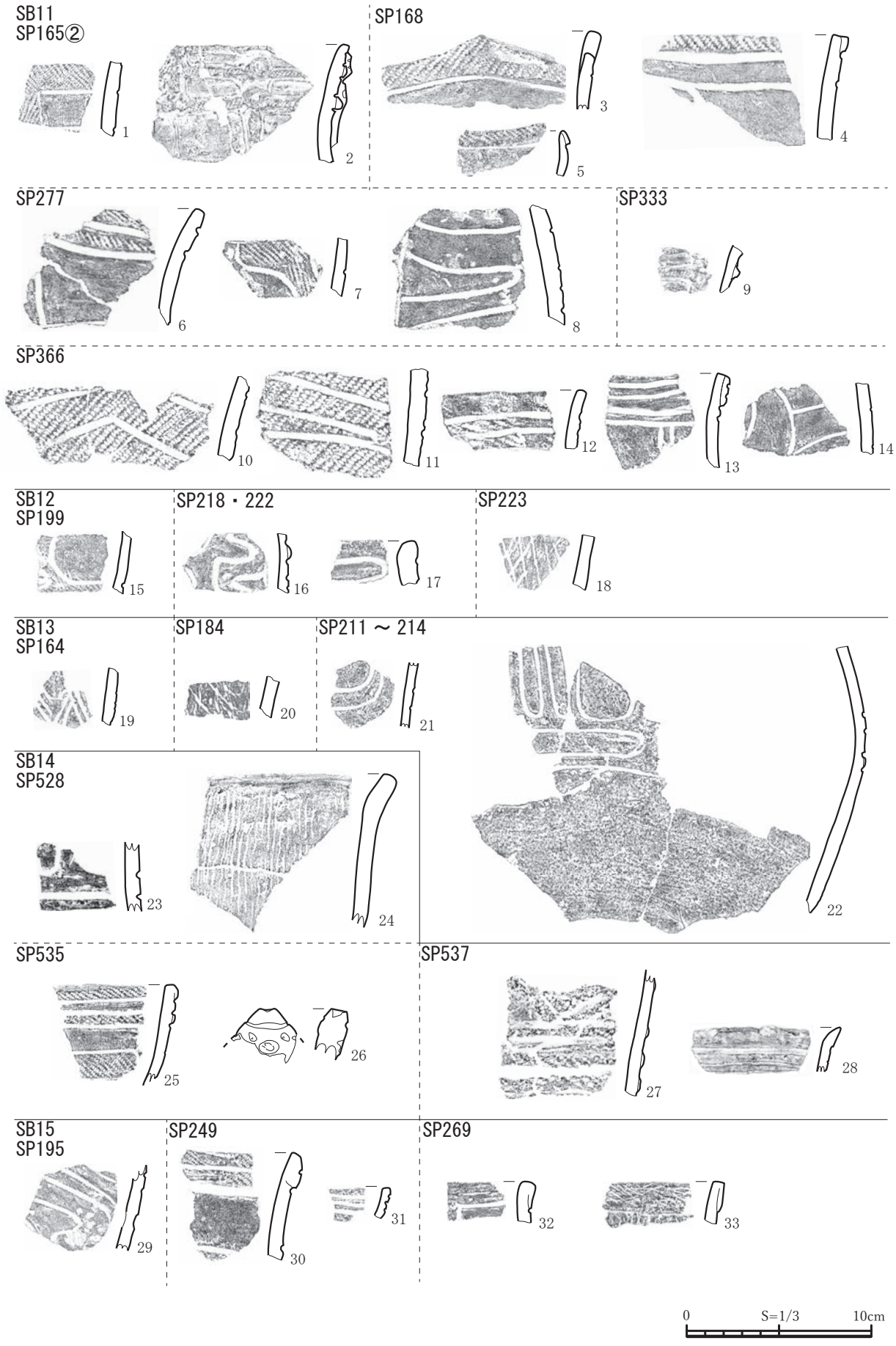


図 107　掘立柱建物跡出土土器（３）

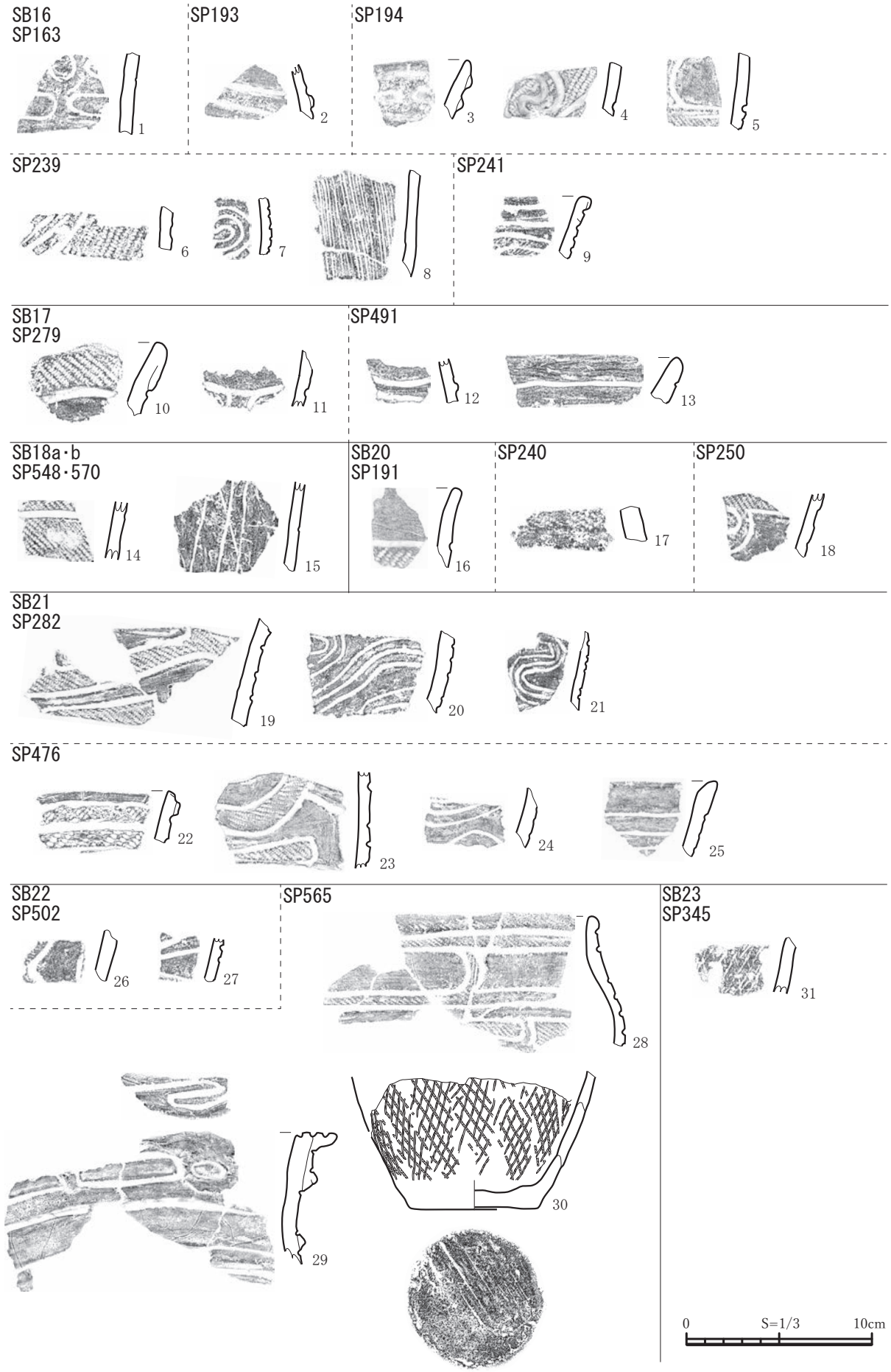


図 108　掘立柱建物跡出土土器（４）

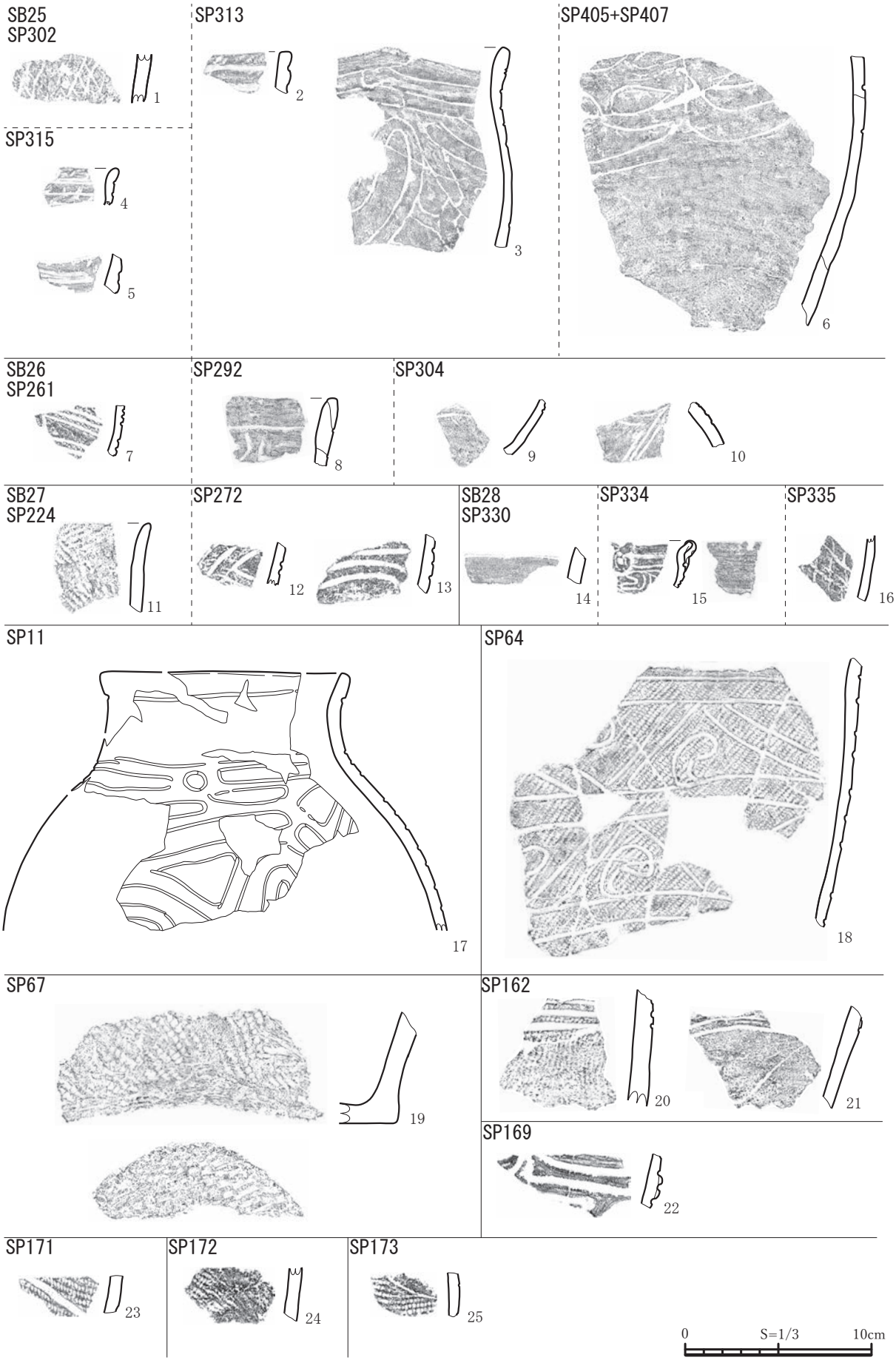


図 109　掘立柱建物跡出土土器（５）・ピット出土土器（１）

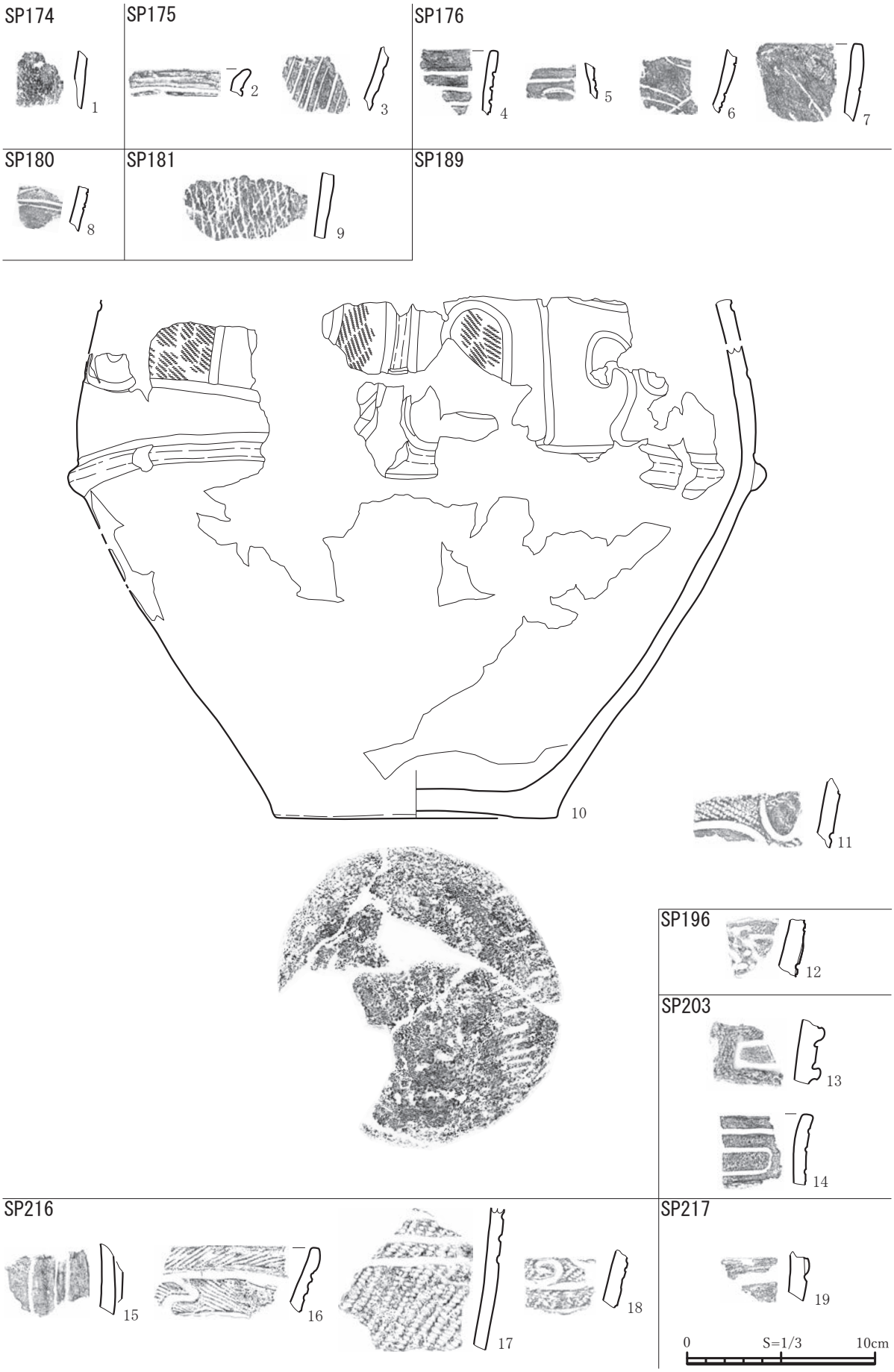


図 110　ピット出土土器（２）

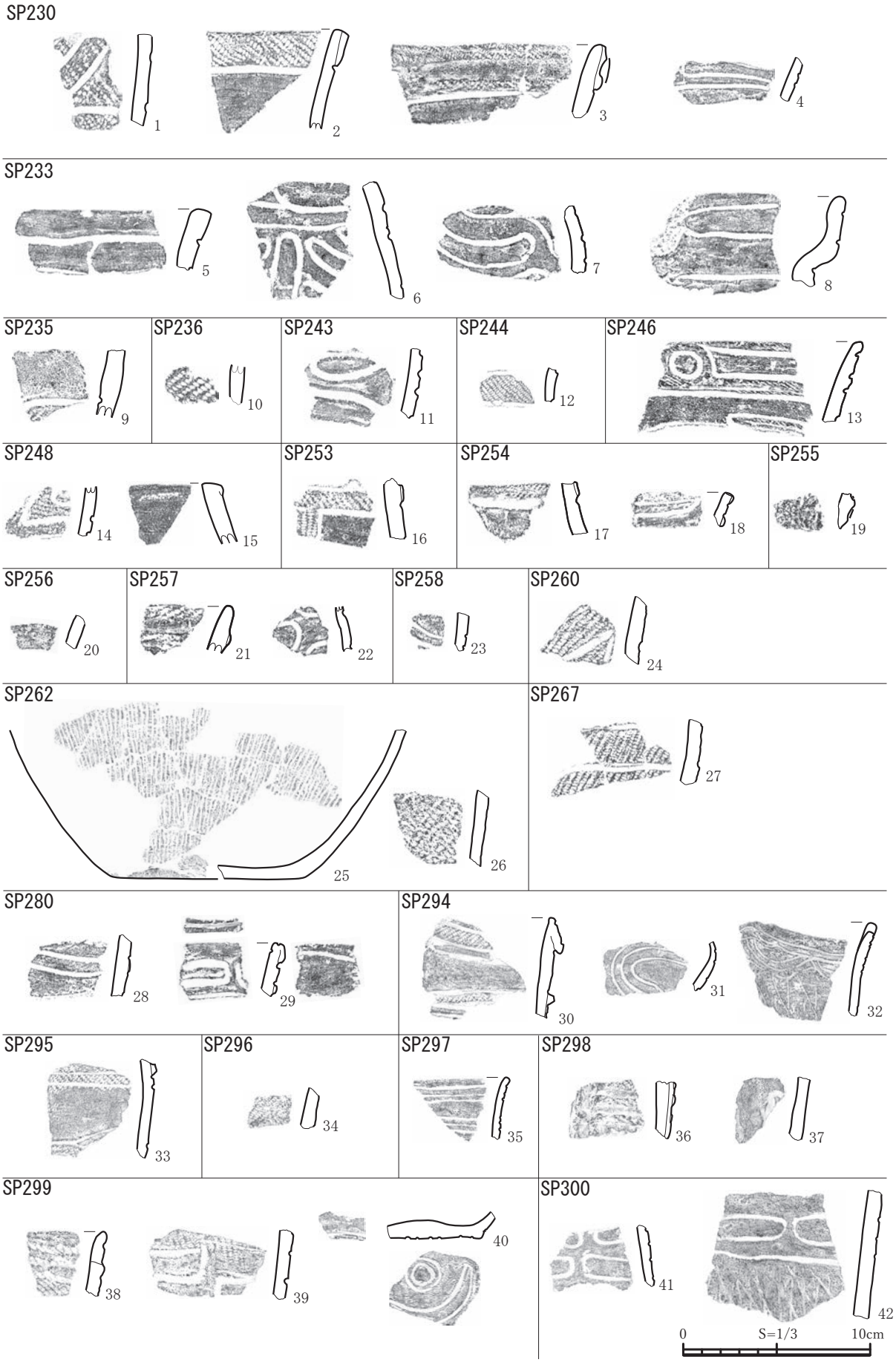


図 111　ピット出土土器（３）

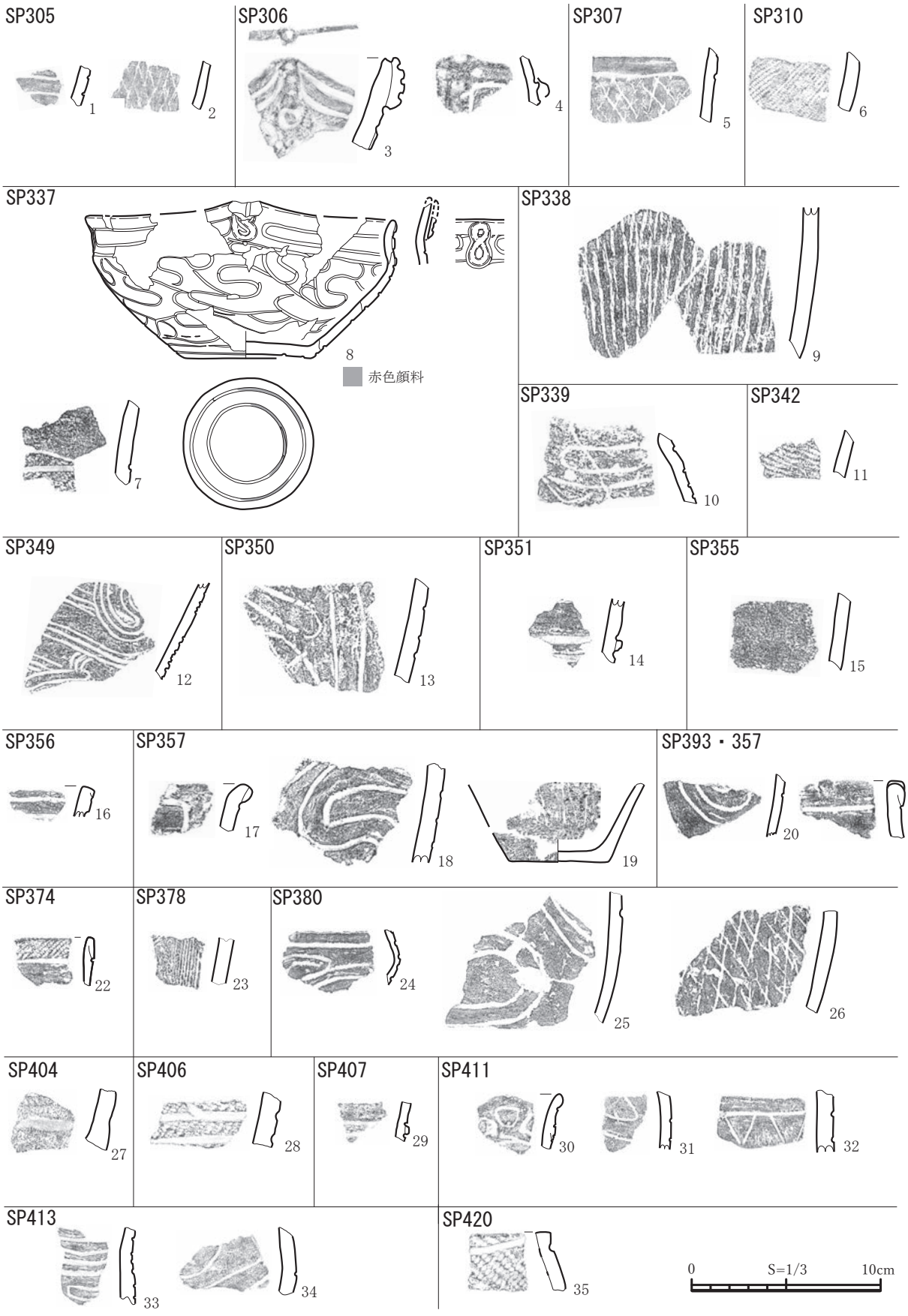


図 112　ピット出土土器（４）

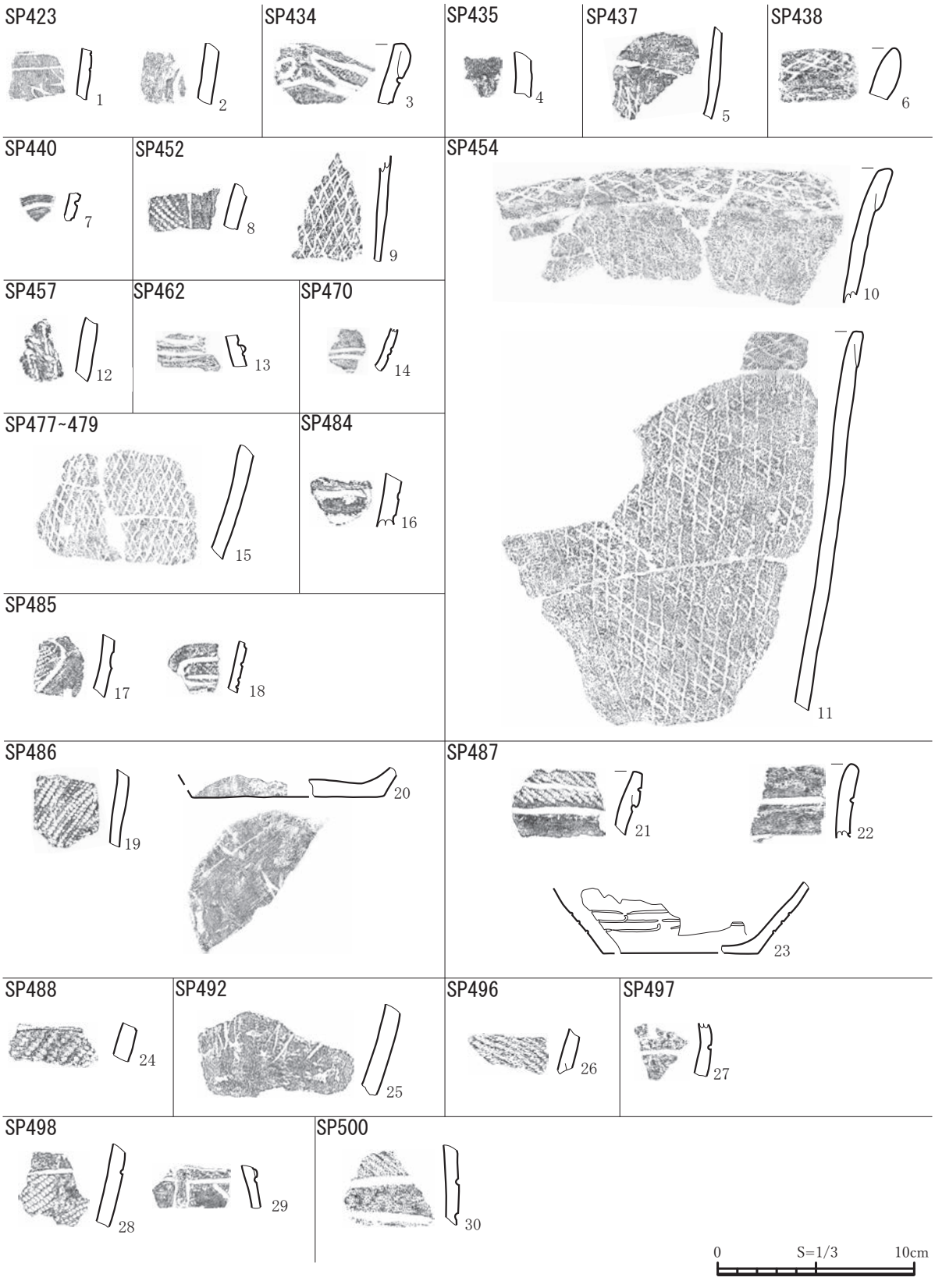
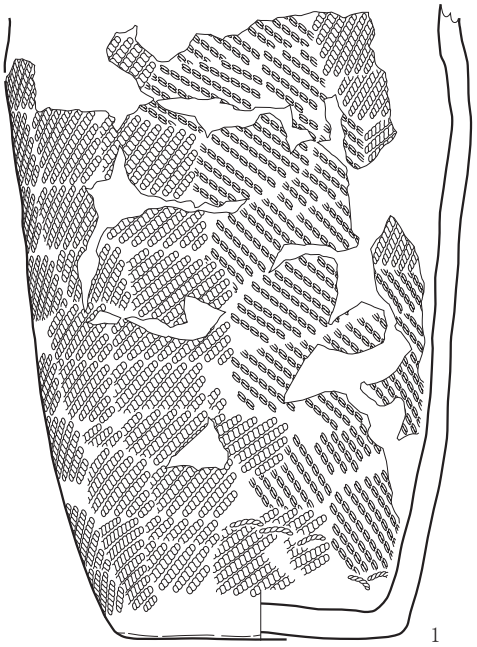
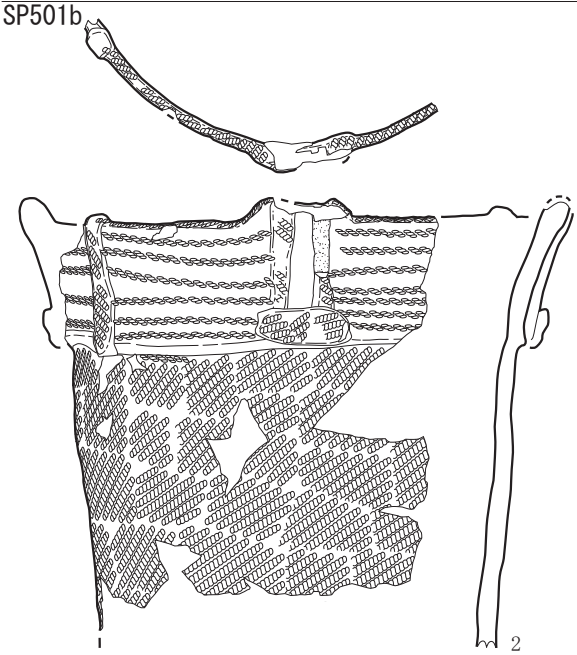


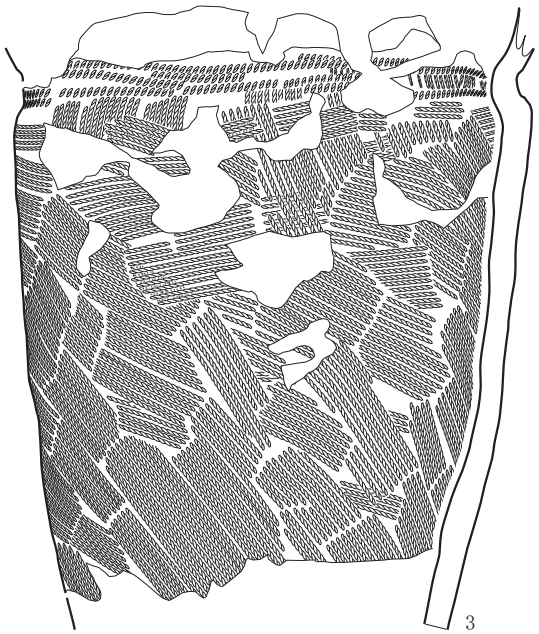
図 113　ピット出土土器（５）

SP501a

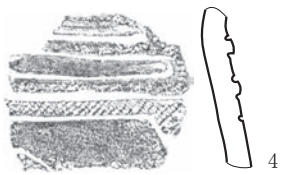


SP501b





SP511①



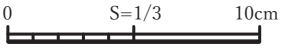
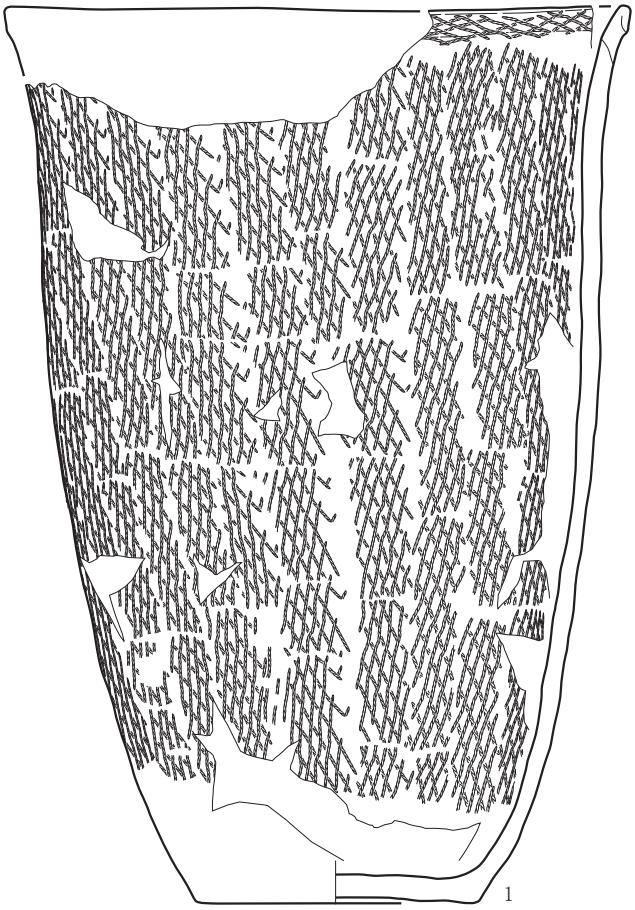


図 114　ピット出土土器（６）

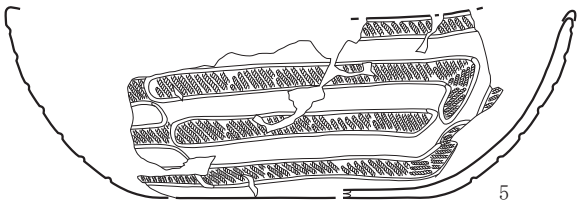
SP511②＋ST1



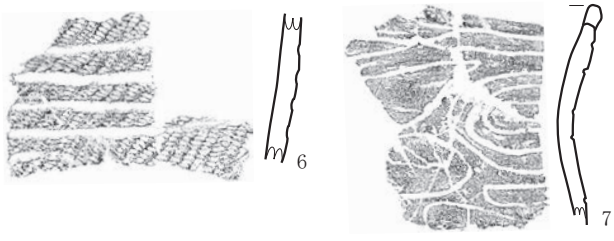
SP531

SP534

SP543

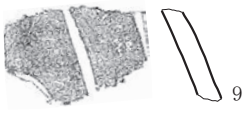


SP545



SP546

SP555



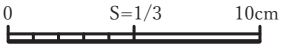


図 115　ピット出土土器（７）

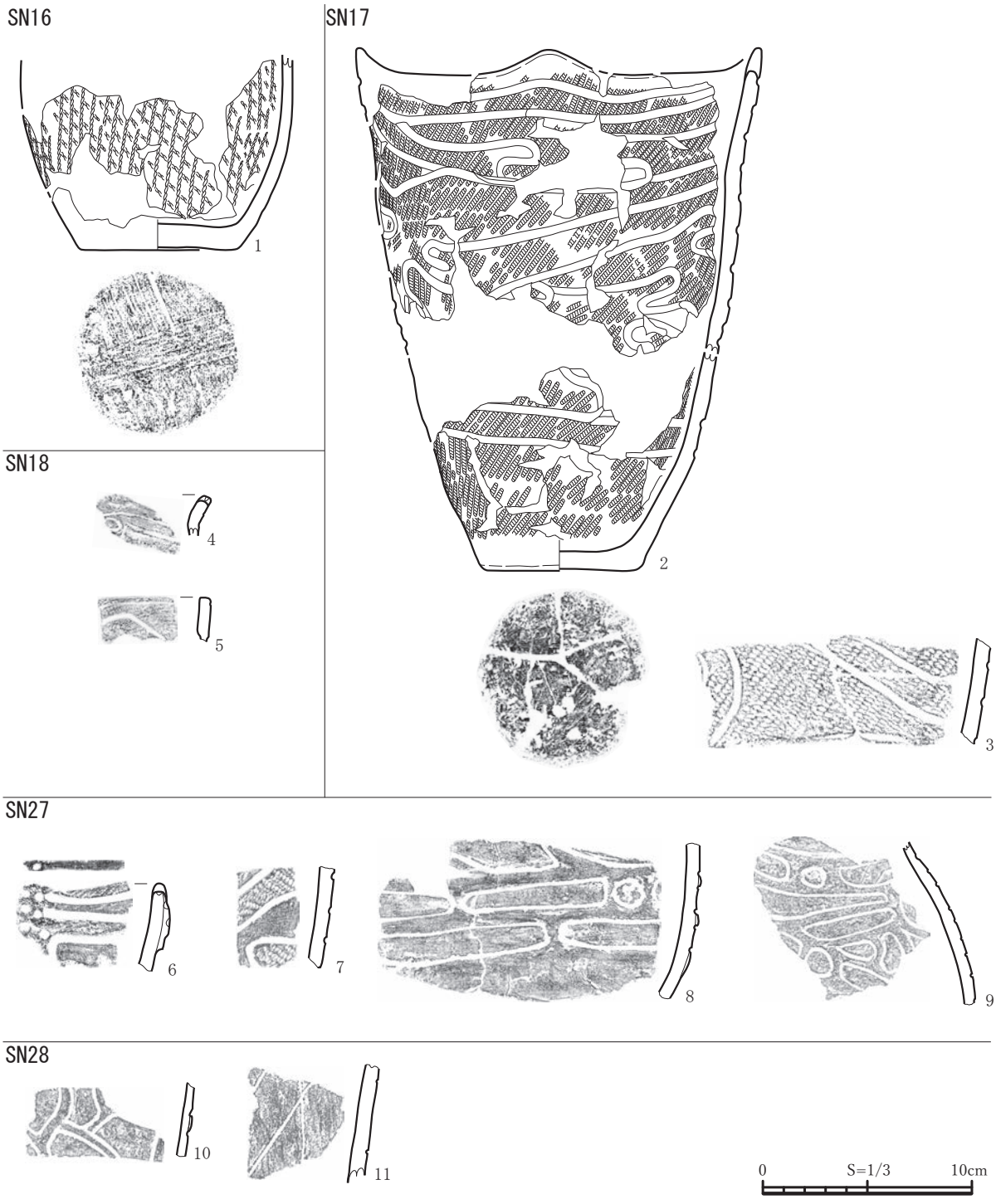


図 116　焼土遺構出土土器

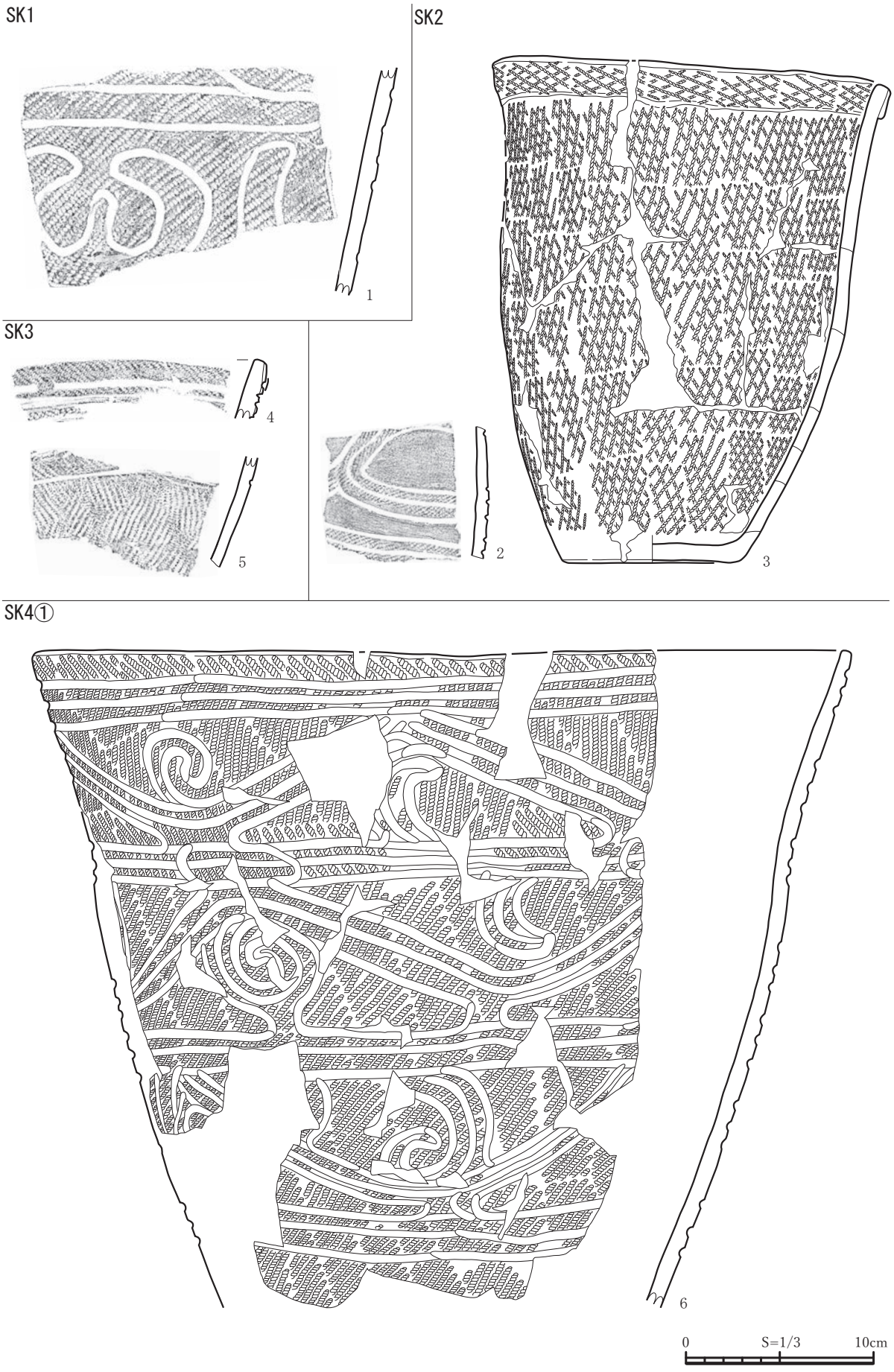


図 117　土坑出土土器（１）

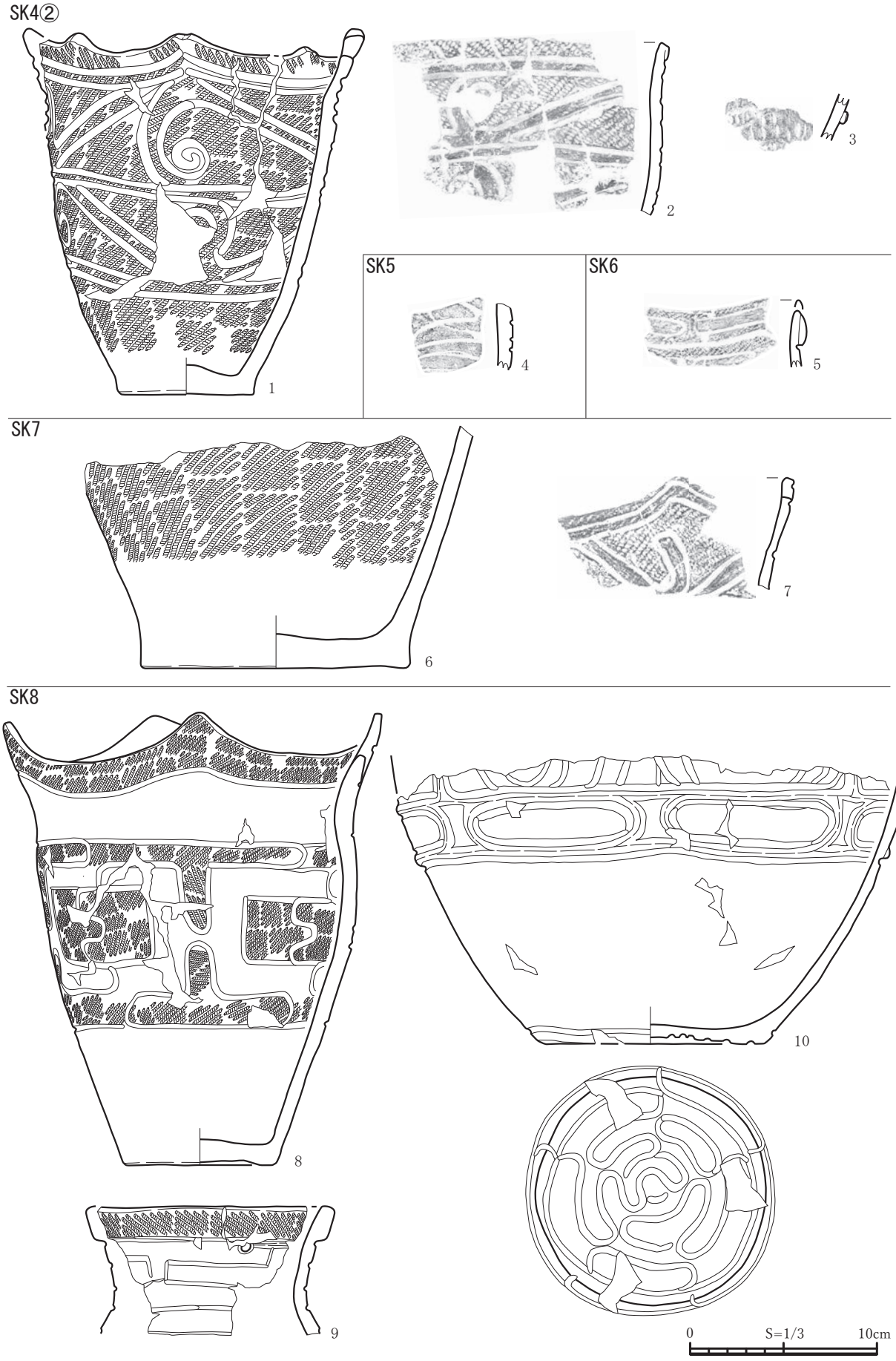
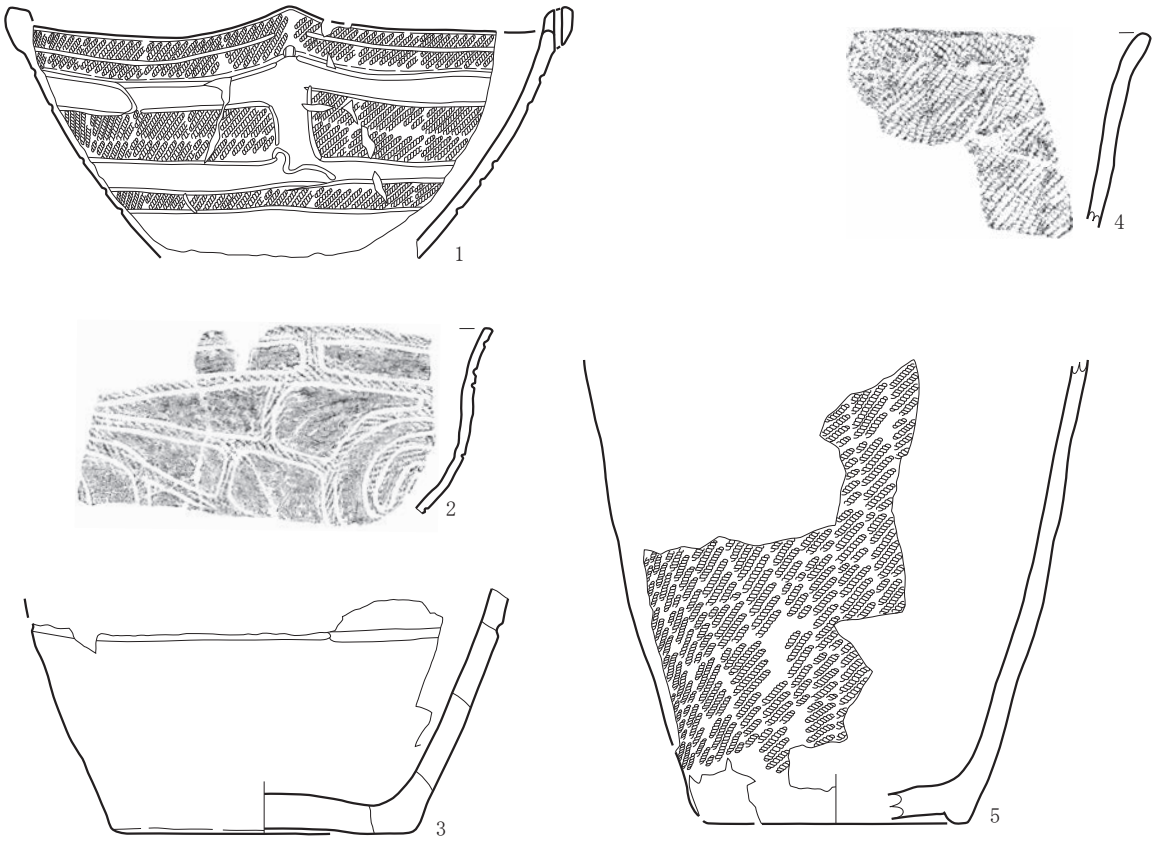
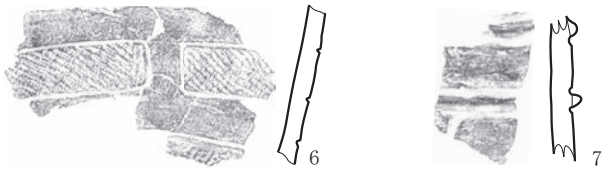


図 118　土坑出土土器（２）

SK9



SK11



SK12

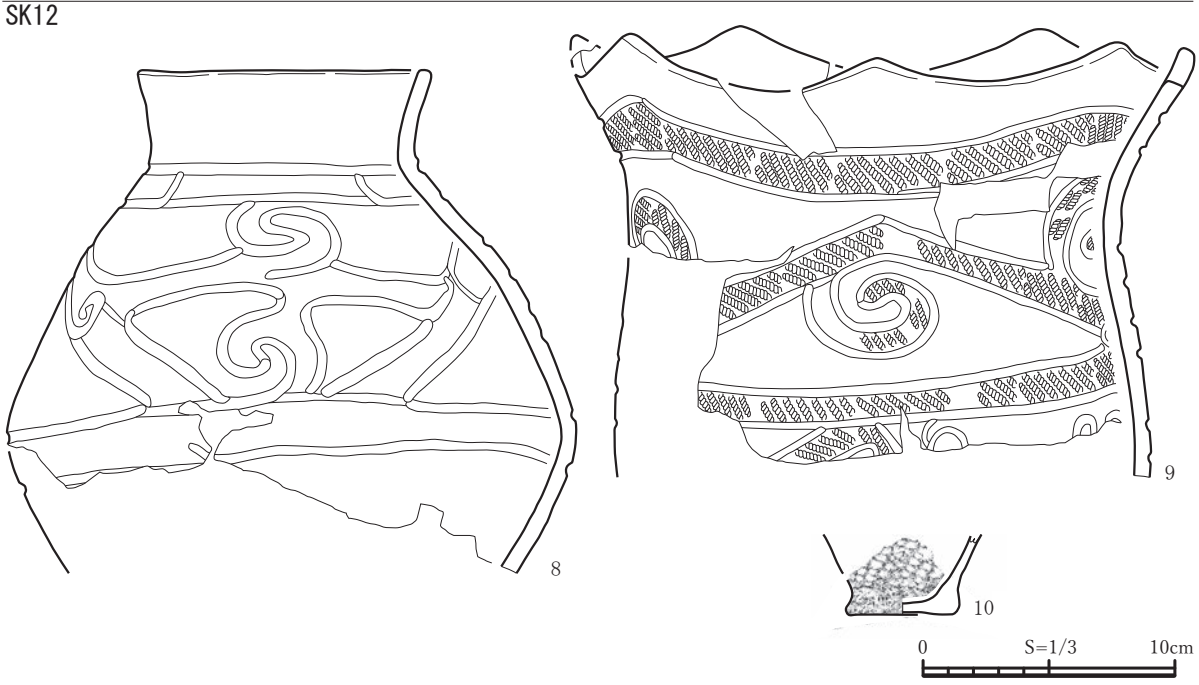


図 119　土坑出土土器（３）

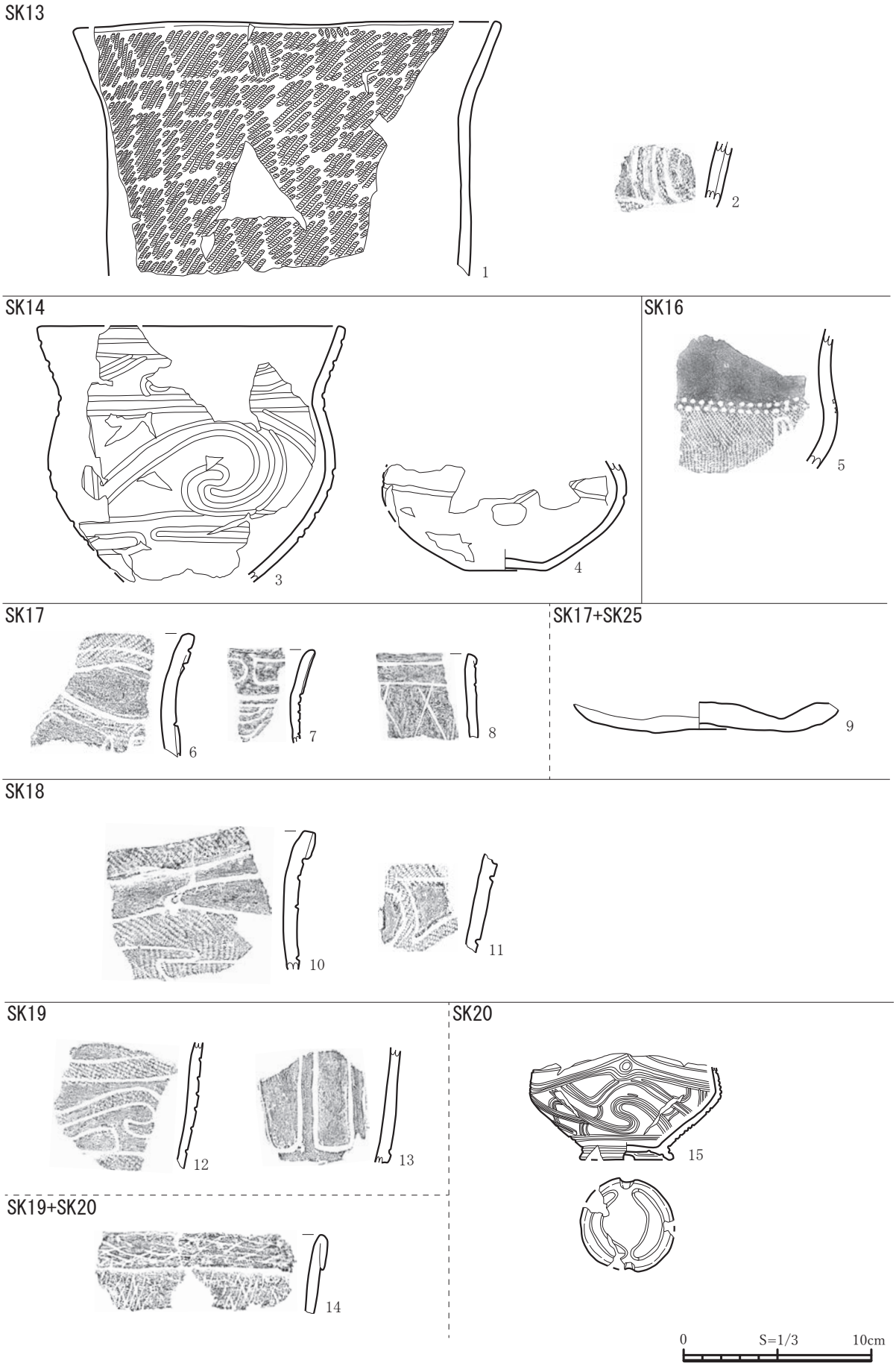
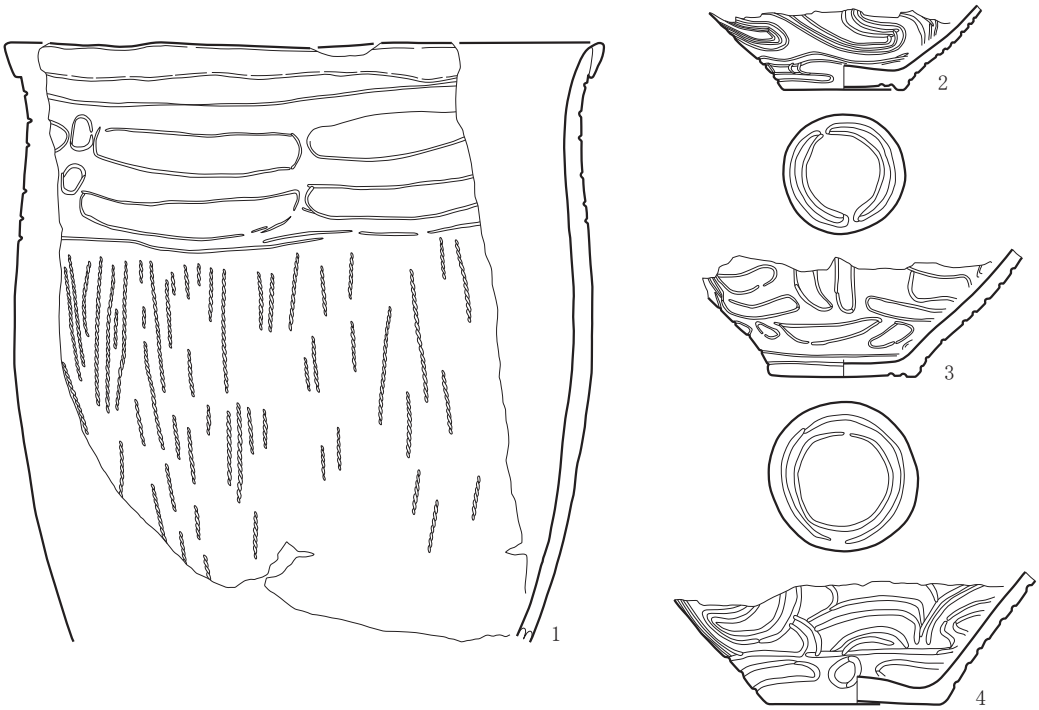


図 120　土坑出土土器（４）

SK25



SK26

SK27

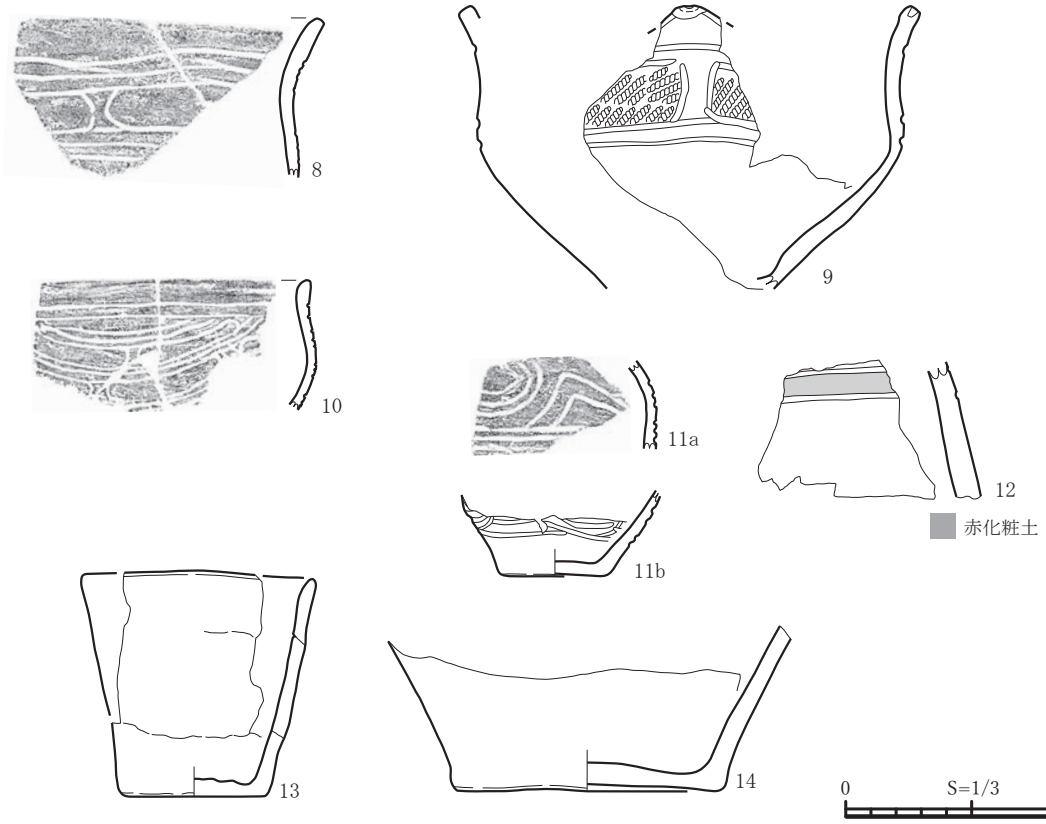
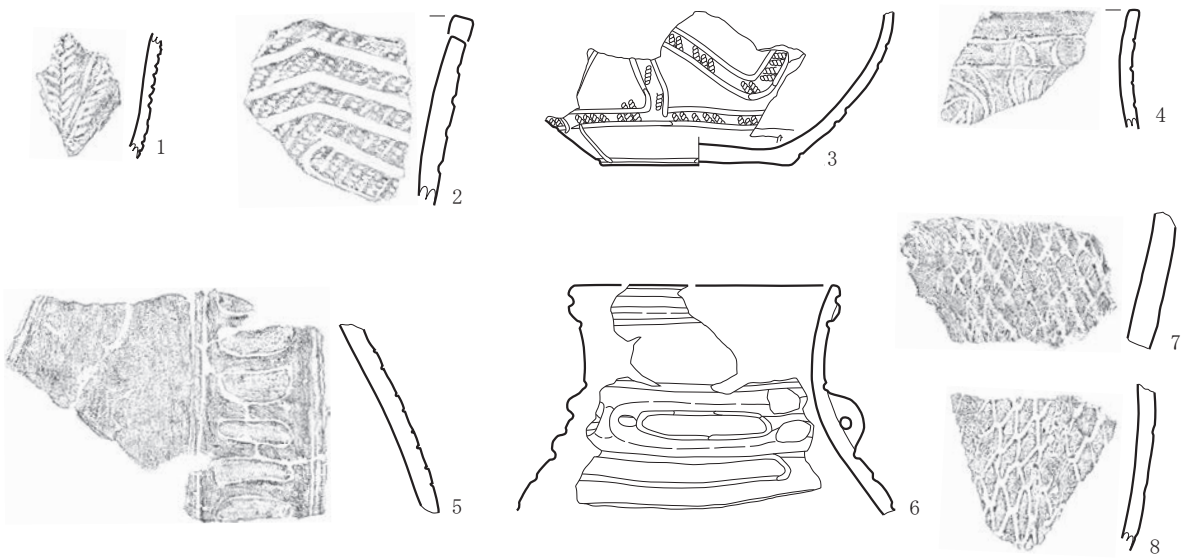


図 121　土坑出土土器（５）

SK28



SK30

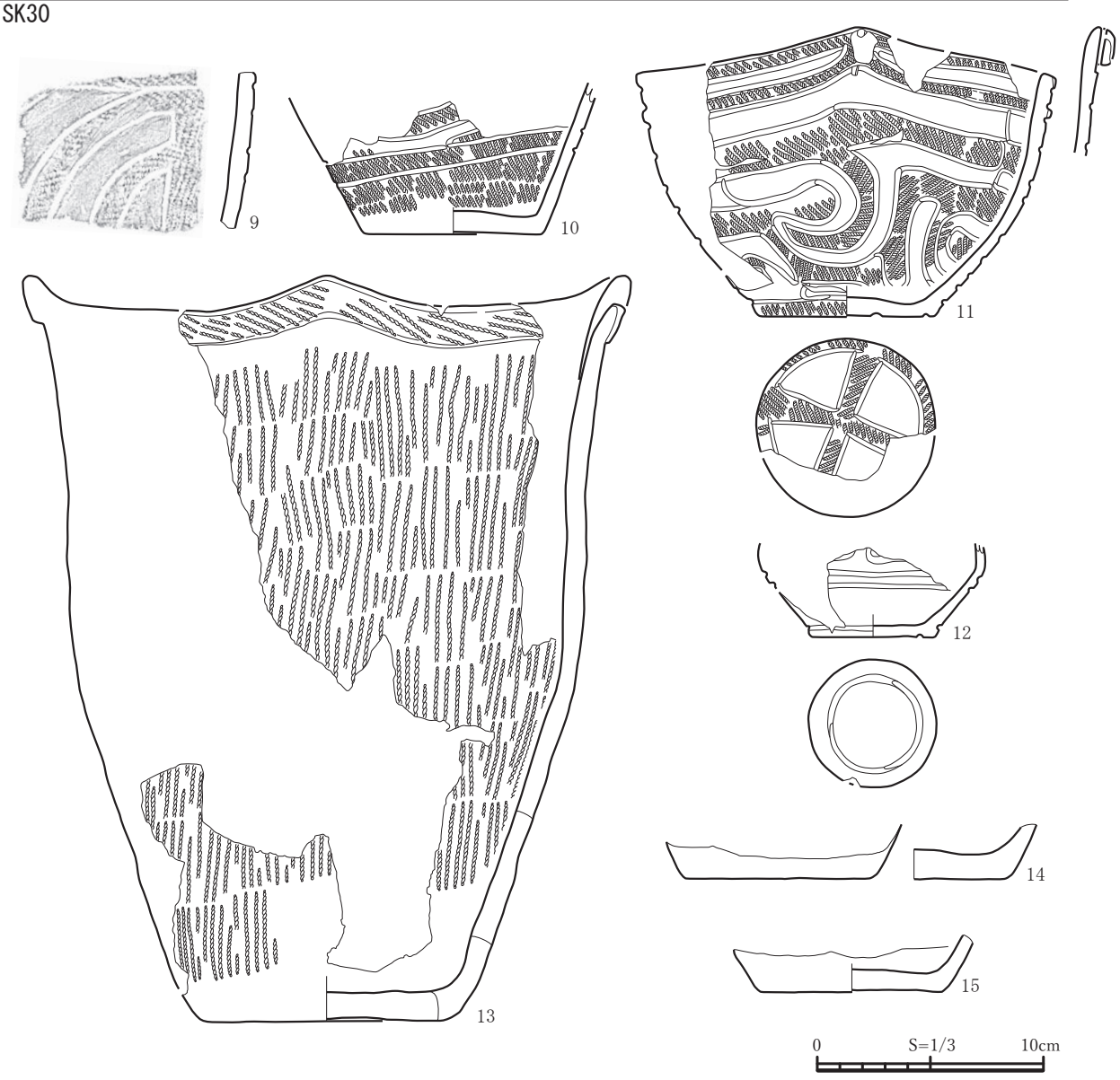


図 122　土坑出土土器（６）

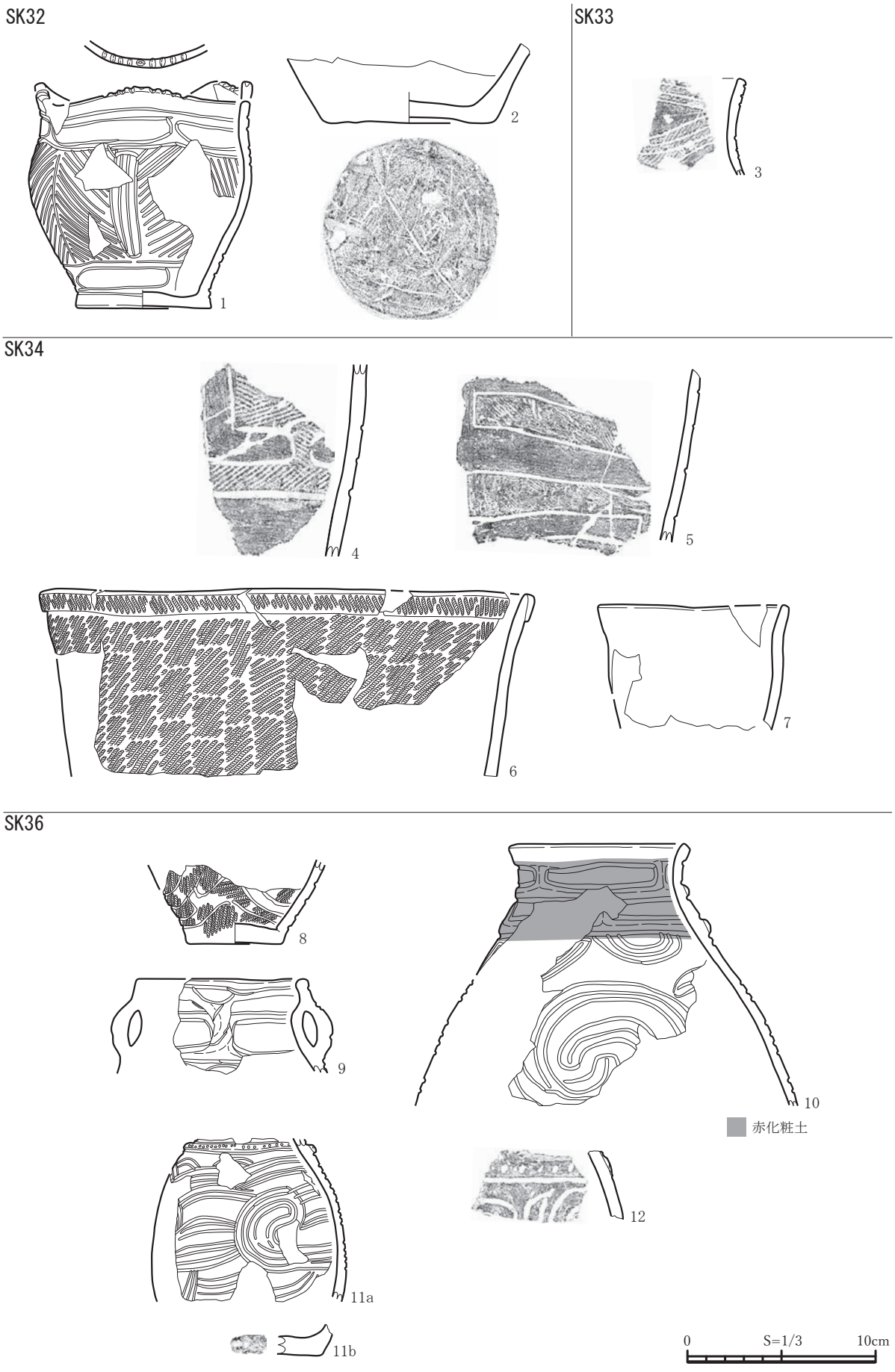
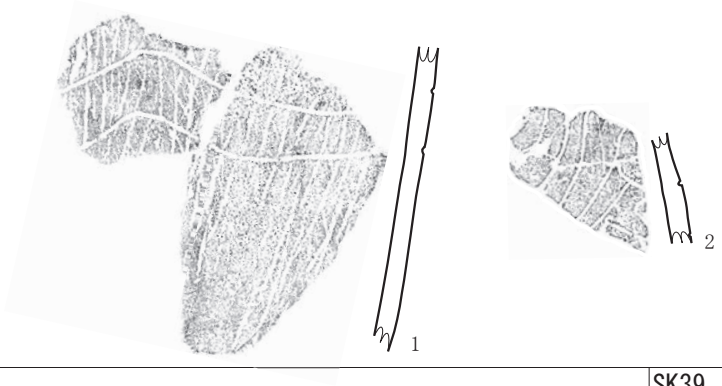


図 123　土坑出土土器（７）

SK37



SK38

SK39

SK40①

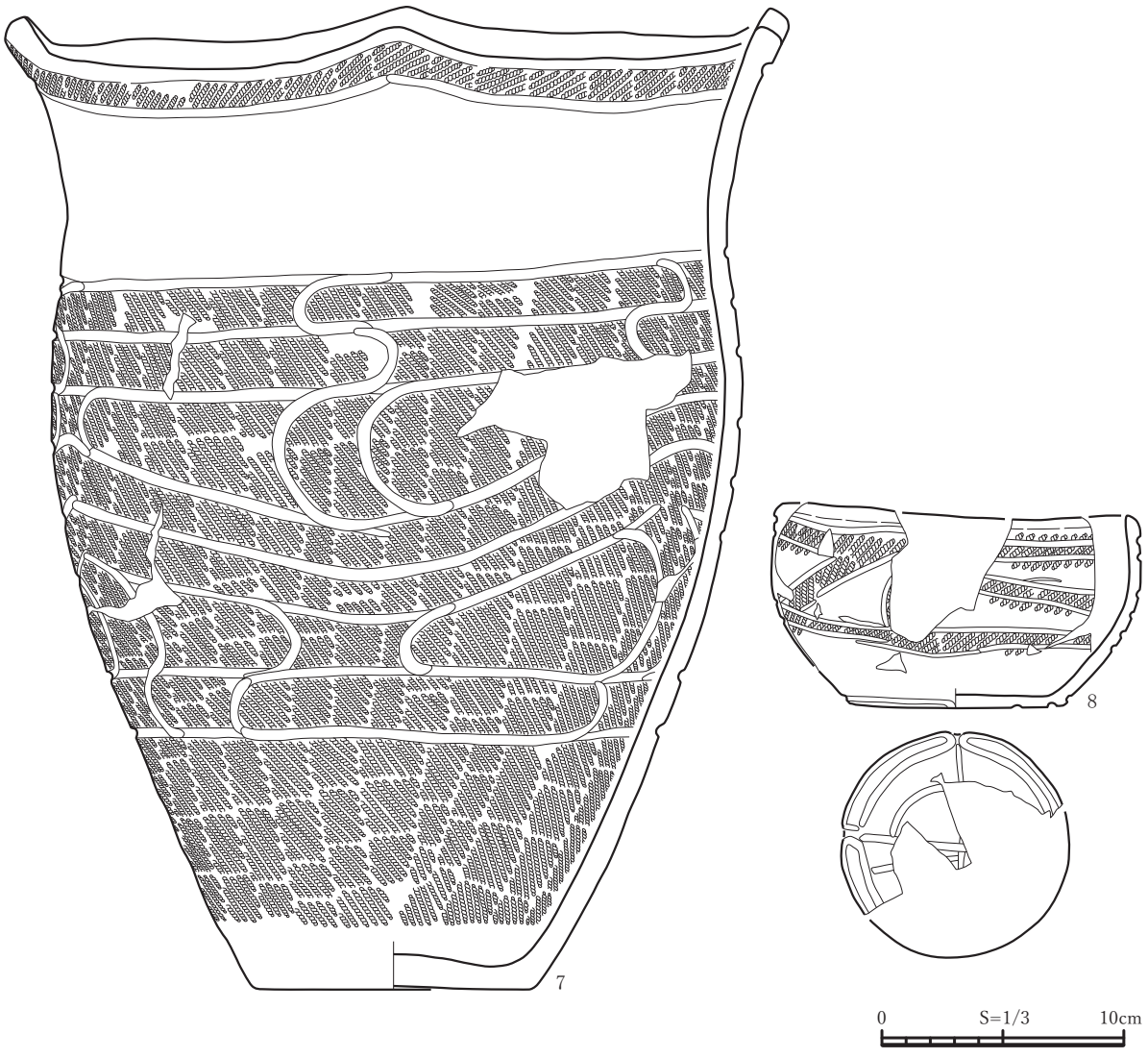
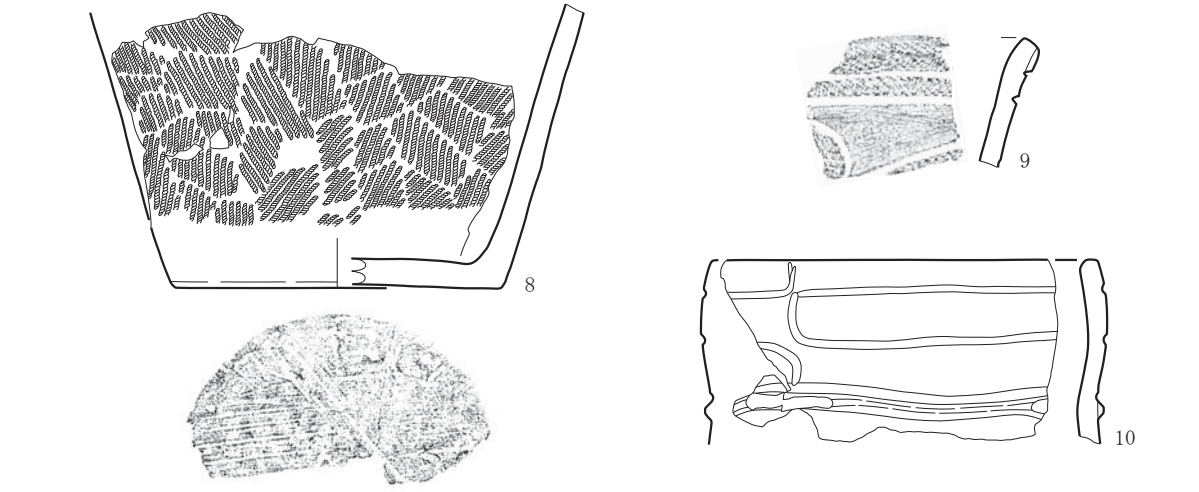


図 124　土坑出土土器（８）

図 125　土坑出土土器（９）

SK47

SK49



SK50

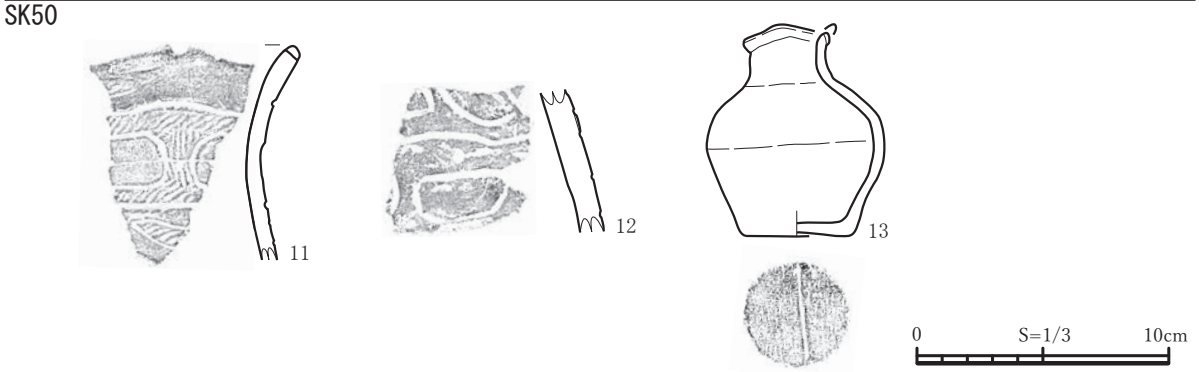


図 126　土坑出土土器 (10)

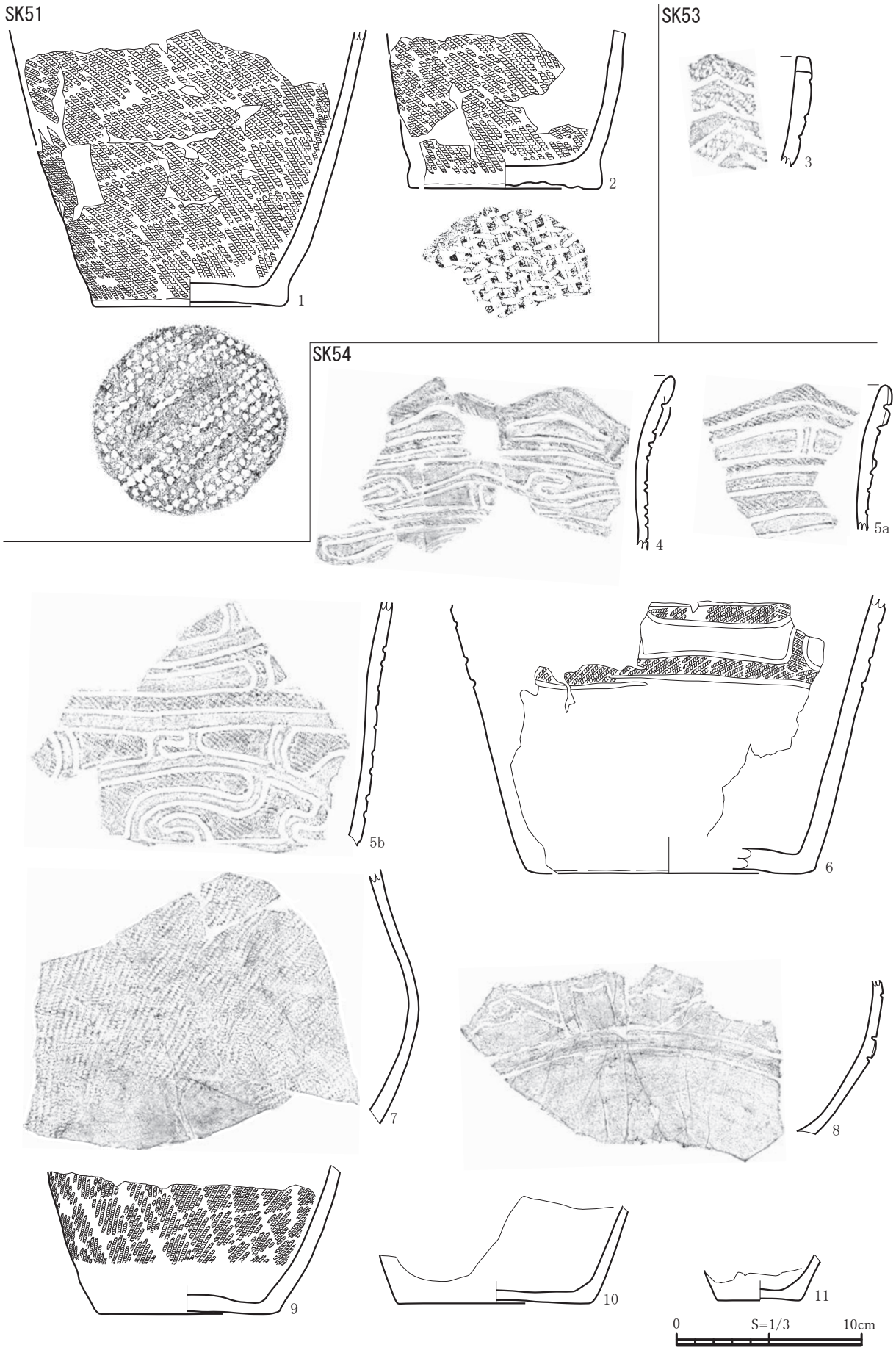
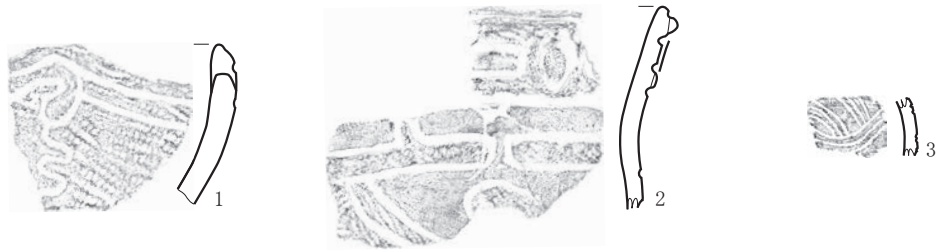
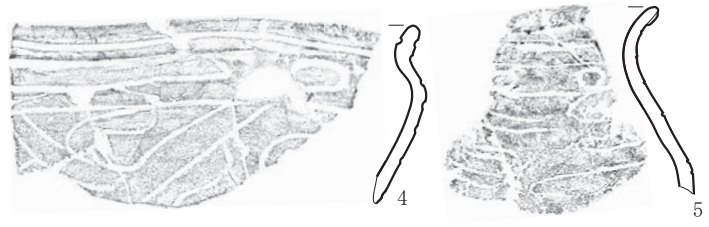


図 127　土坑出土土器 (11)

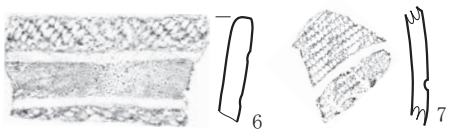
SK55



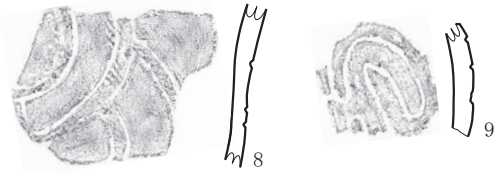
SK56



SK57



SK58



SK60

SK61

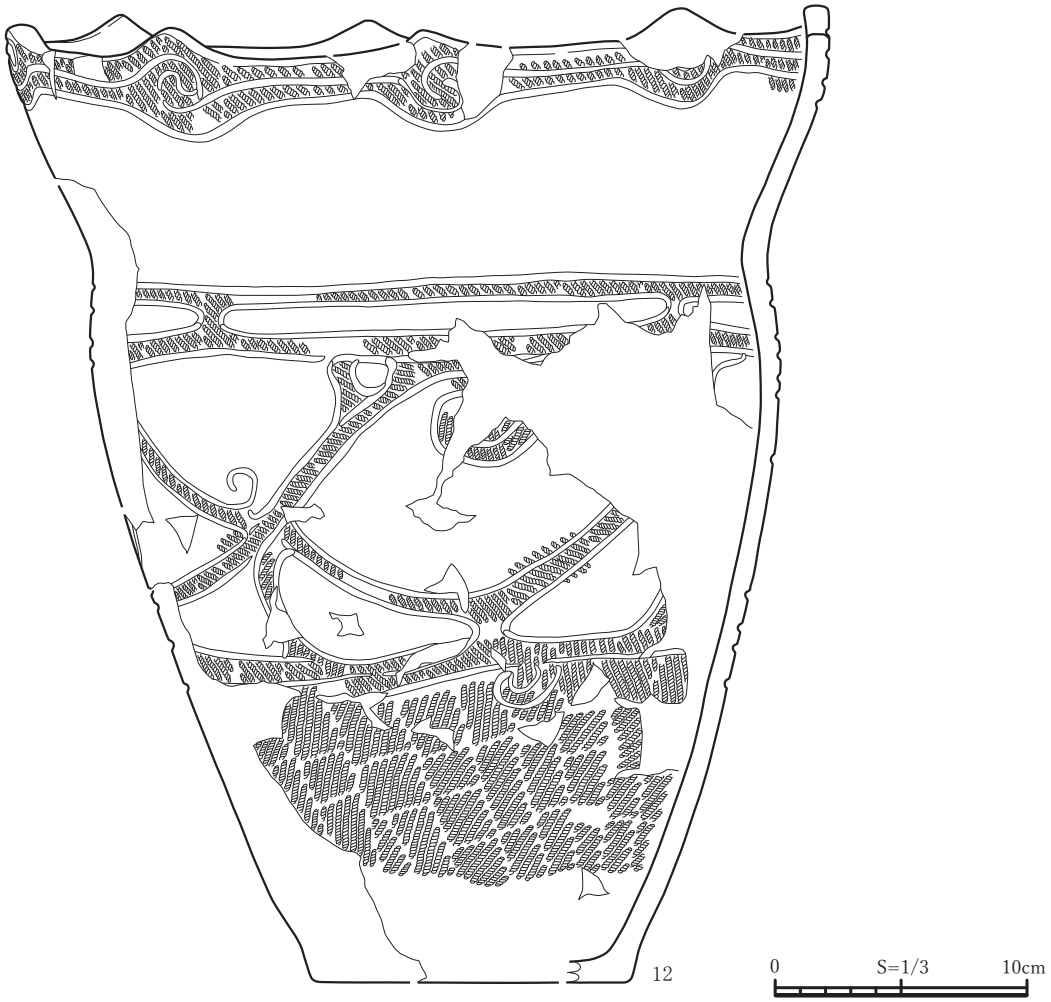


図 128　土坑出土土器 (12)

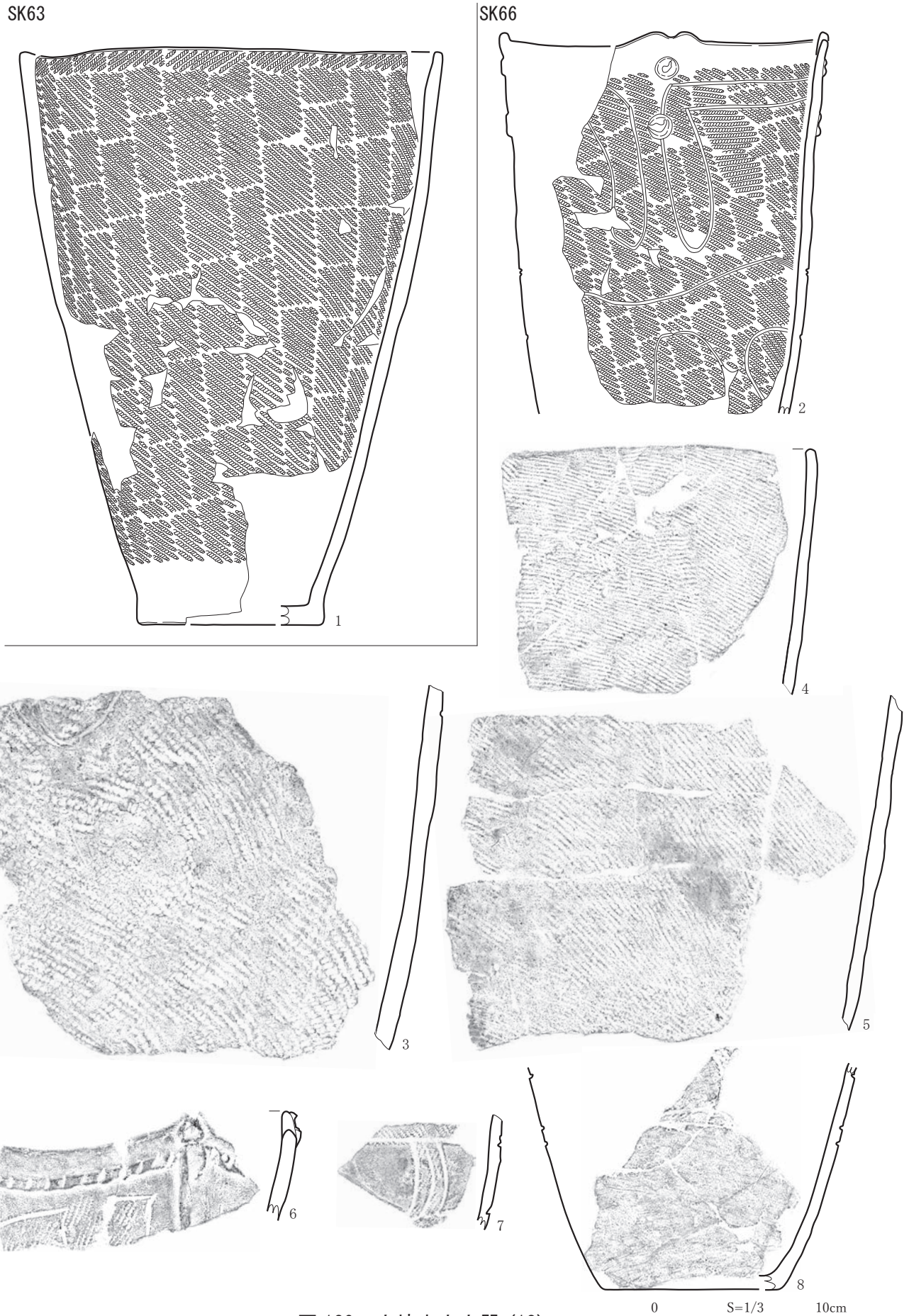
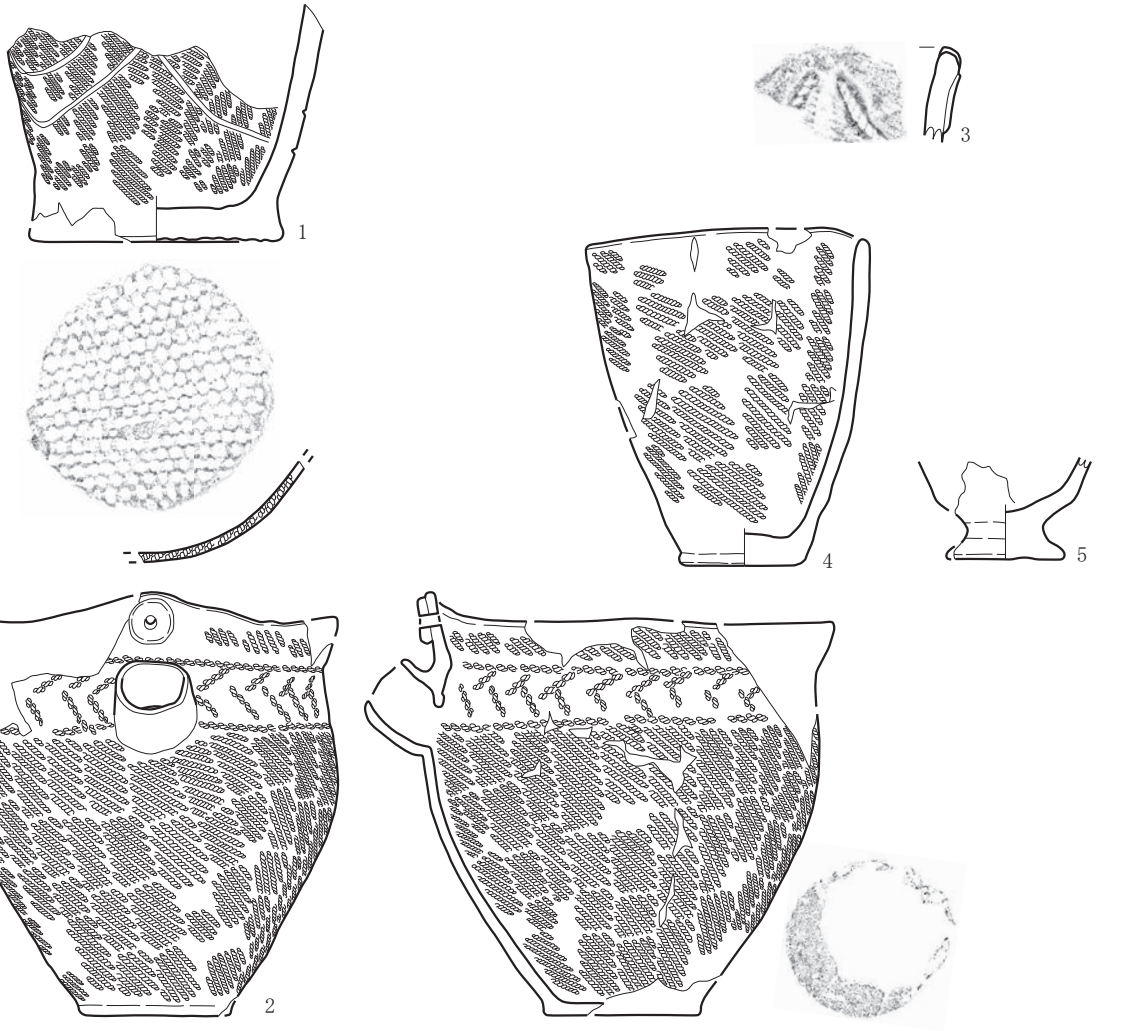


図 129　土坑出土土器 (13)

SK67



SK69

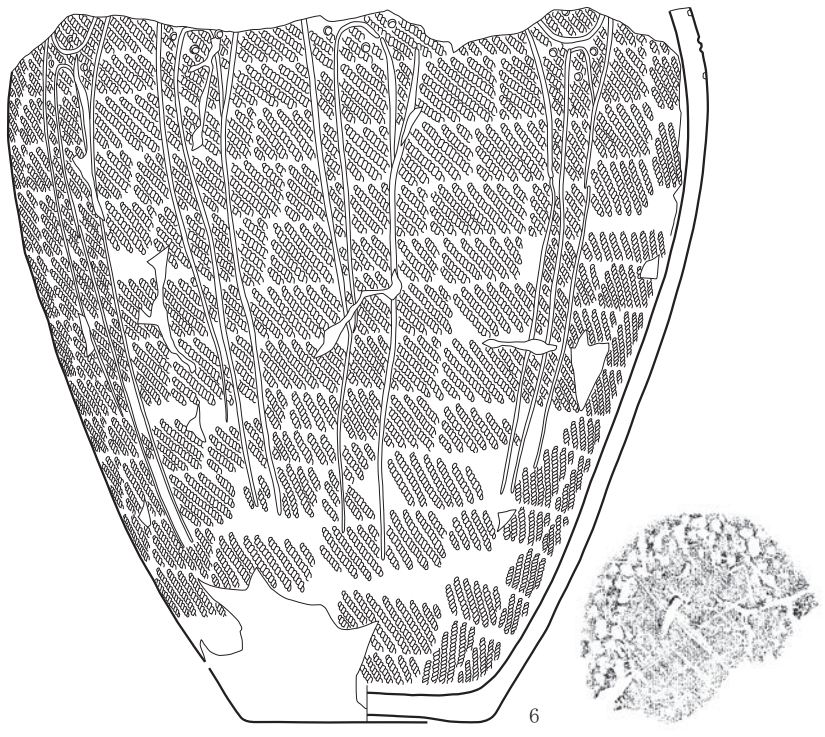


図 130　土坑出土土器 (14)

0　S=1/3　10cm

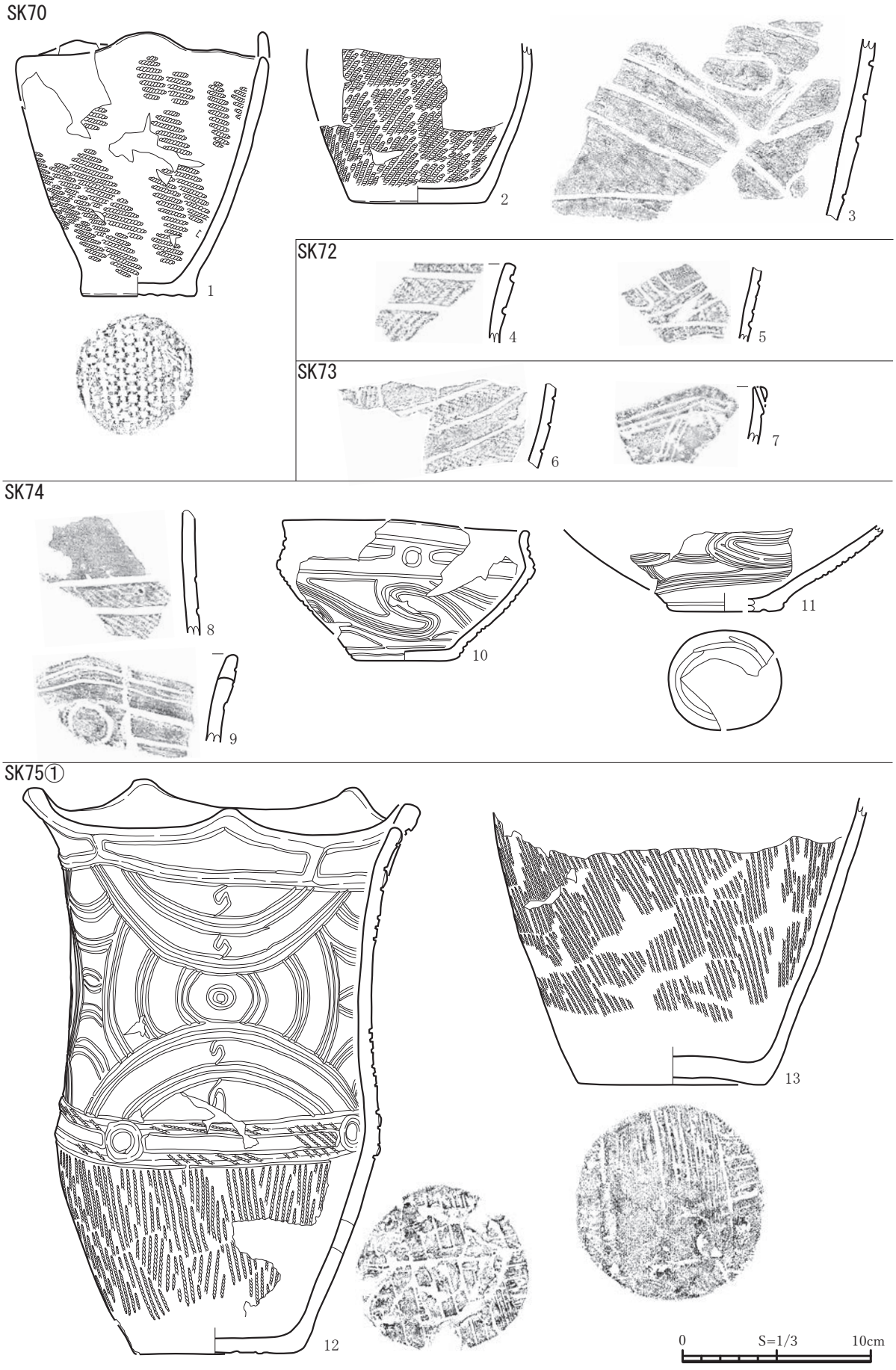
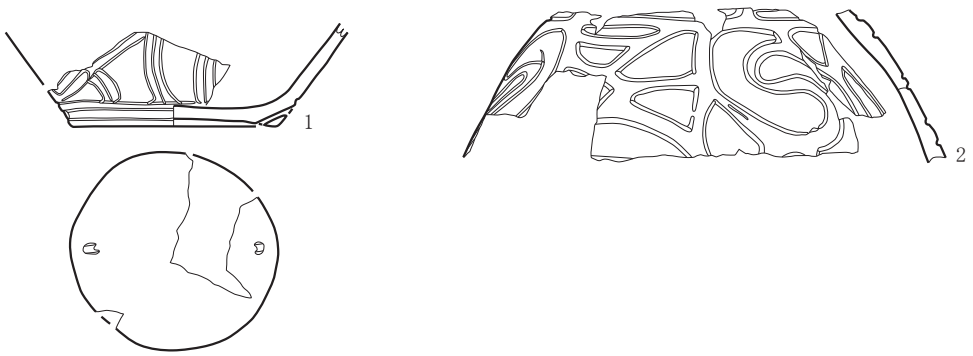


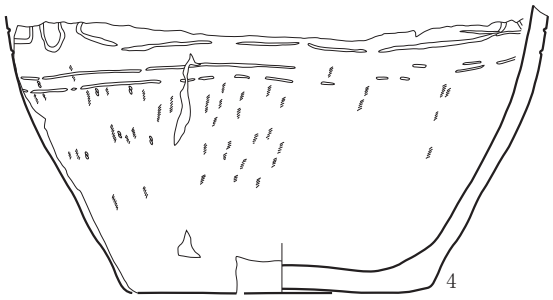
図 131　土坑出土土器 (15)

SK75②

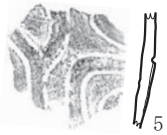


SK76

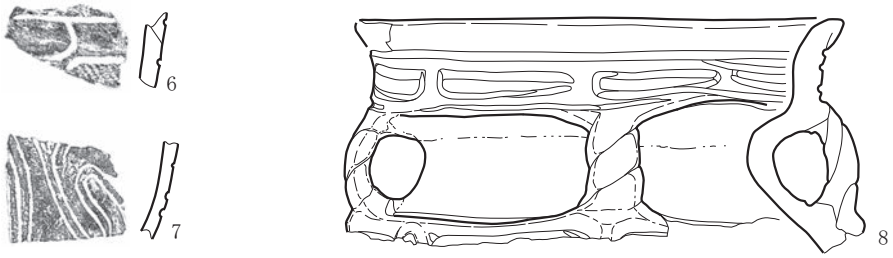
SK77



SK78

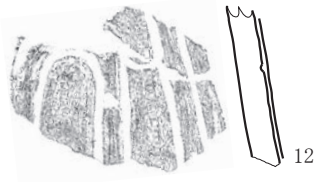


SK79



SK81

SK81＋SB5 SP205



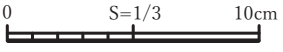


図 132　土坑出土土器 (16)

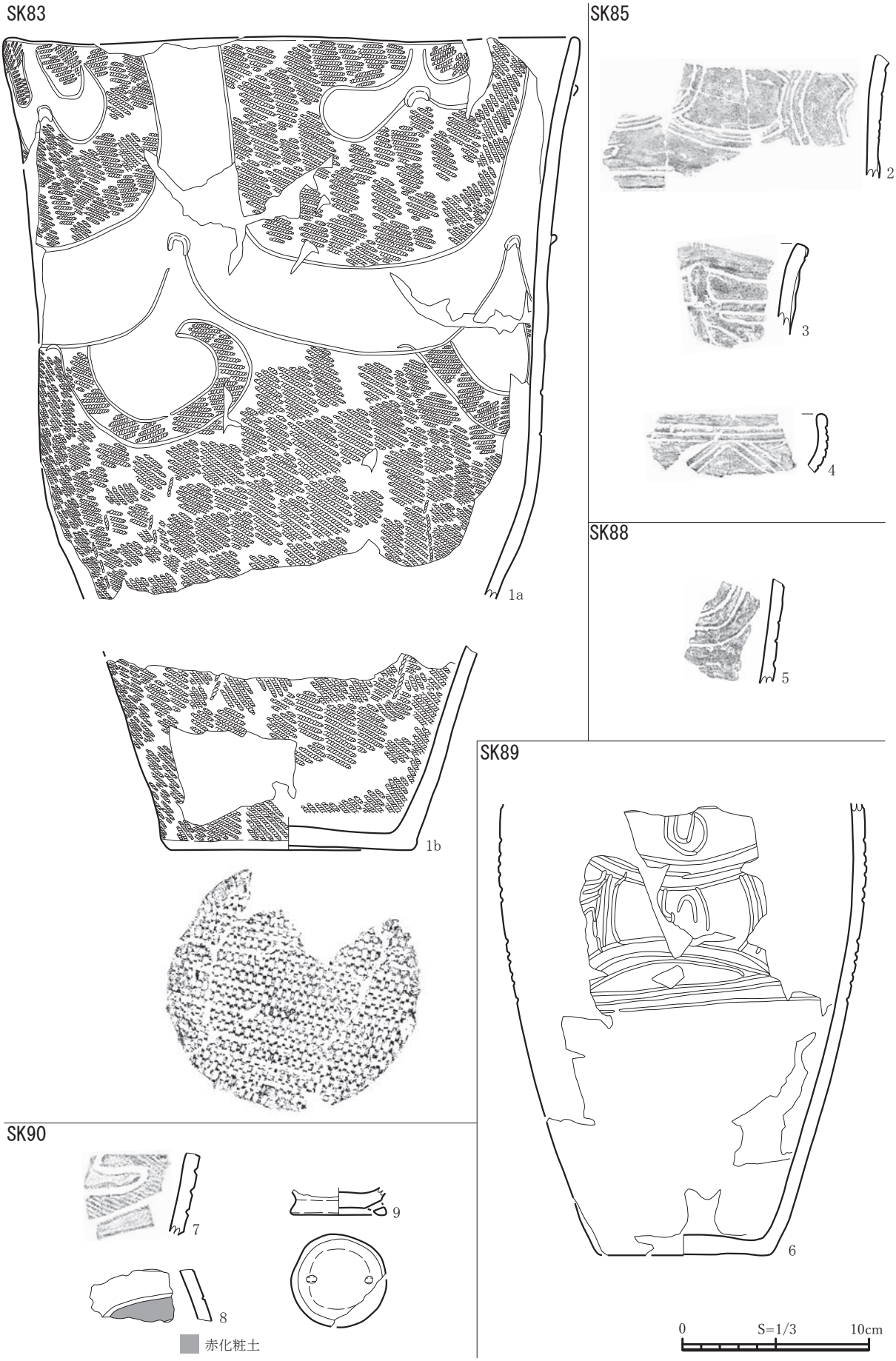


図 133　土坑出土土器 (17)

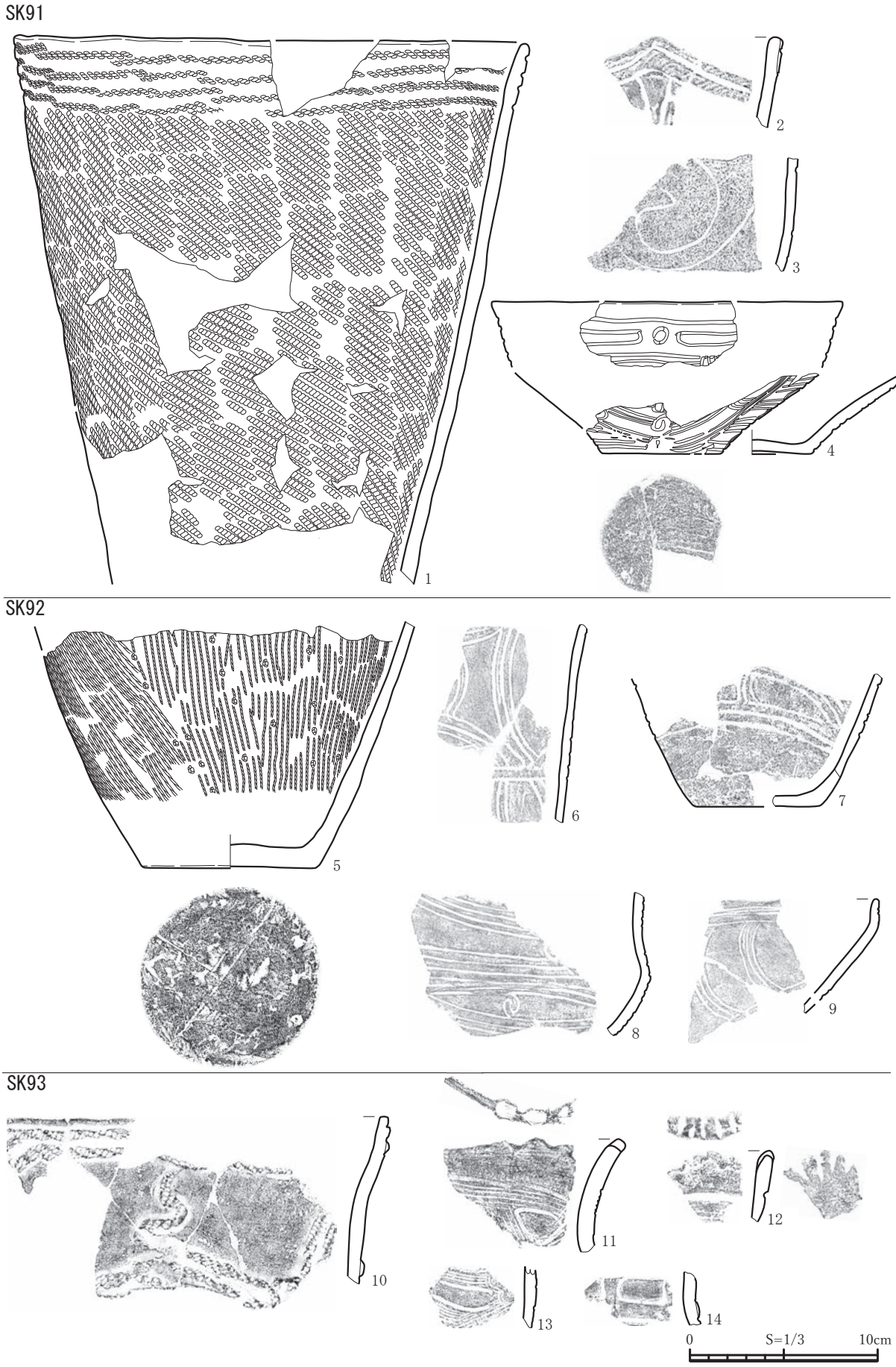
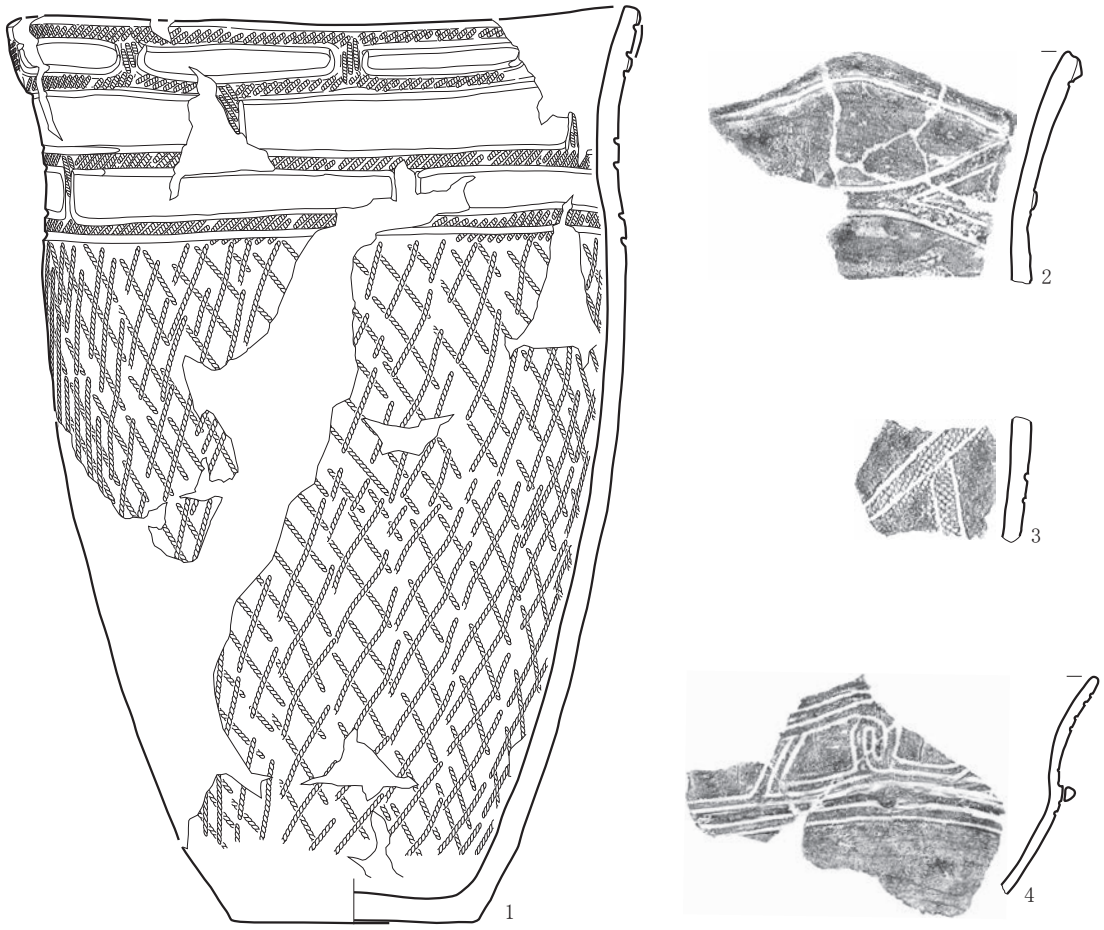
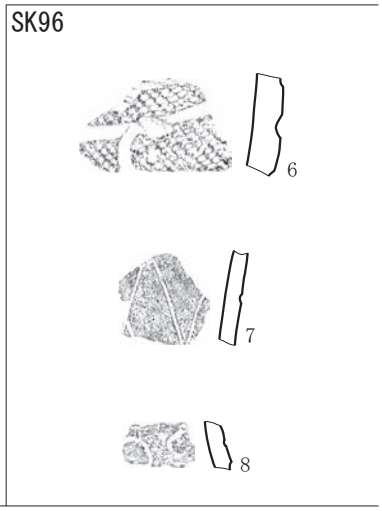


図 134　土坑出土土器 (18)

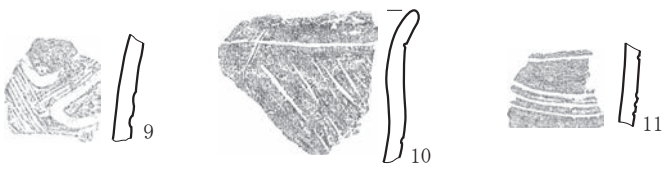
SK95



SK96



SK97



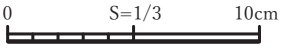


図 135　土坑出土土器 (19)

SK98

SK99

SK100①

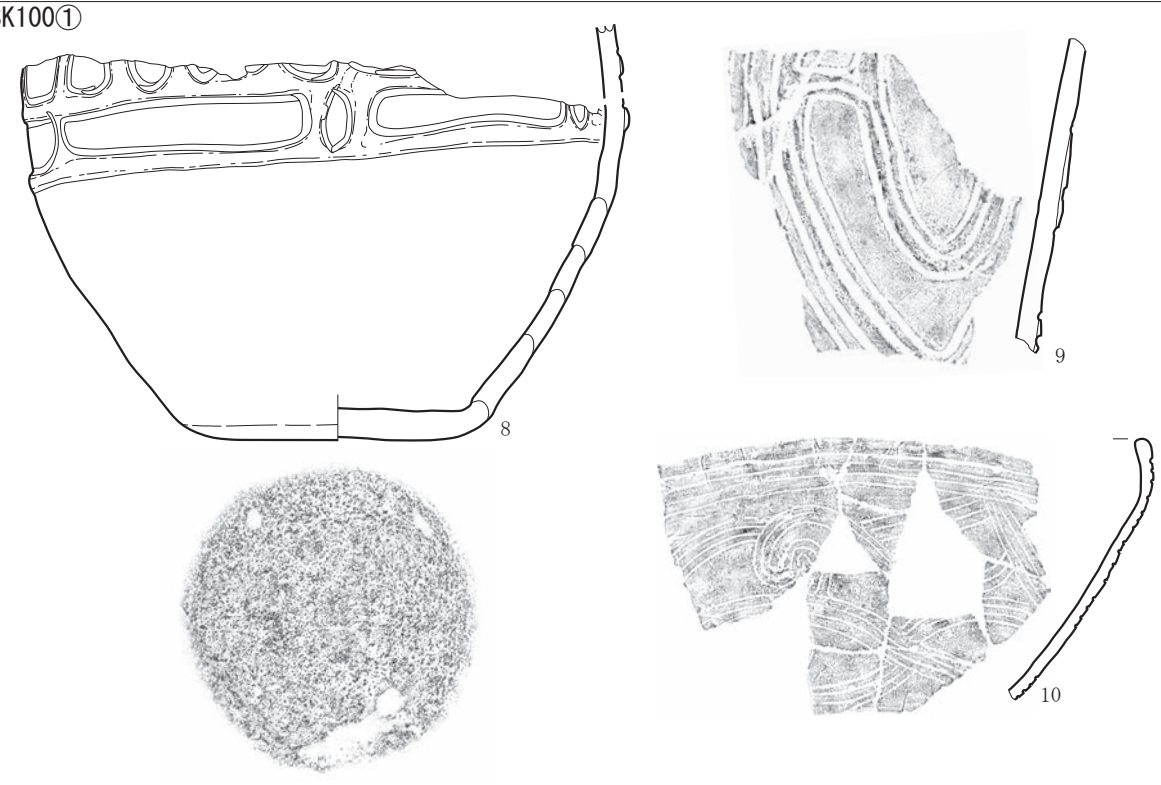


図 136　土坑出土土器 (20)

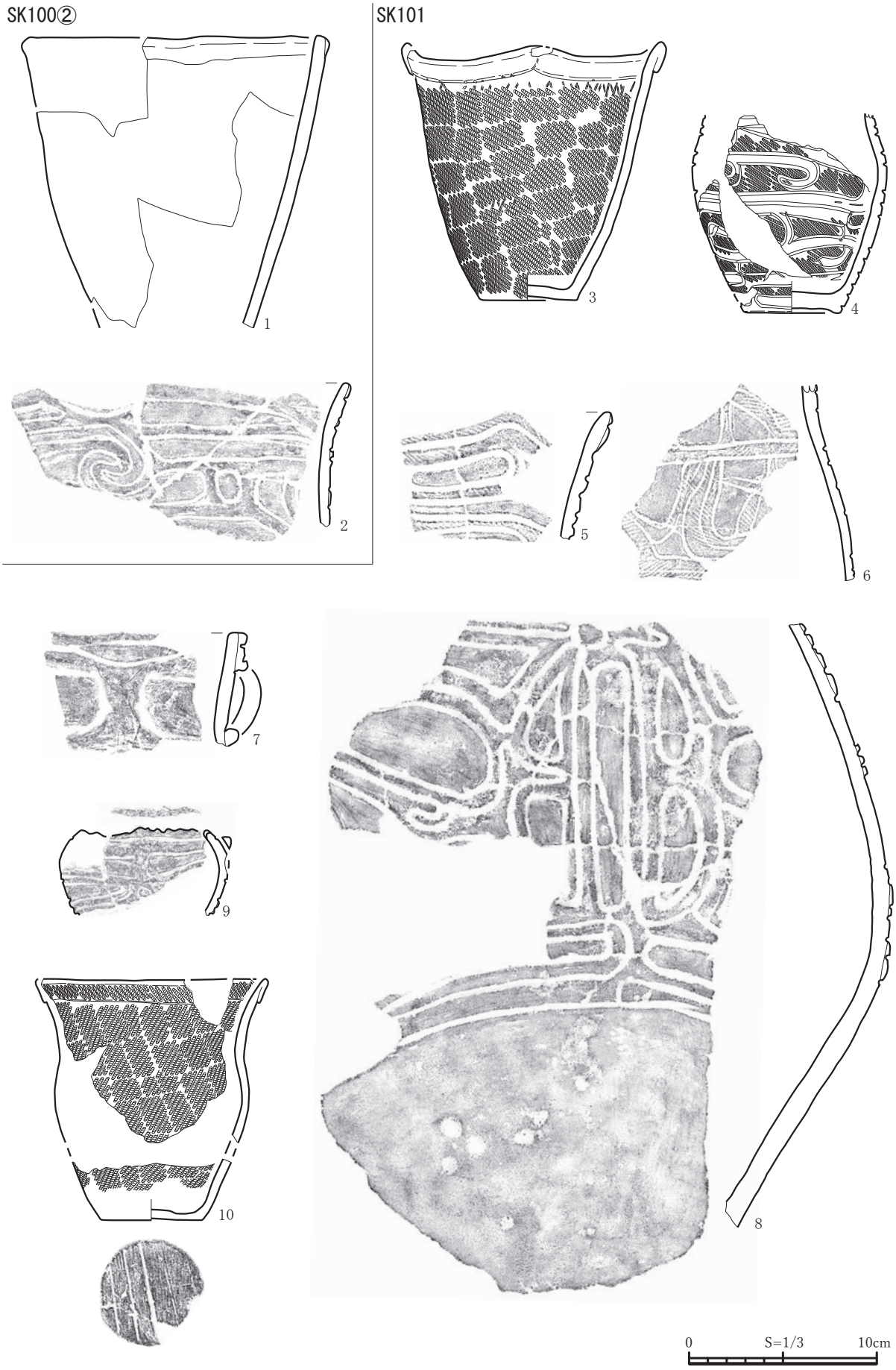


図 137　土坑出土土器 (21)

SK102

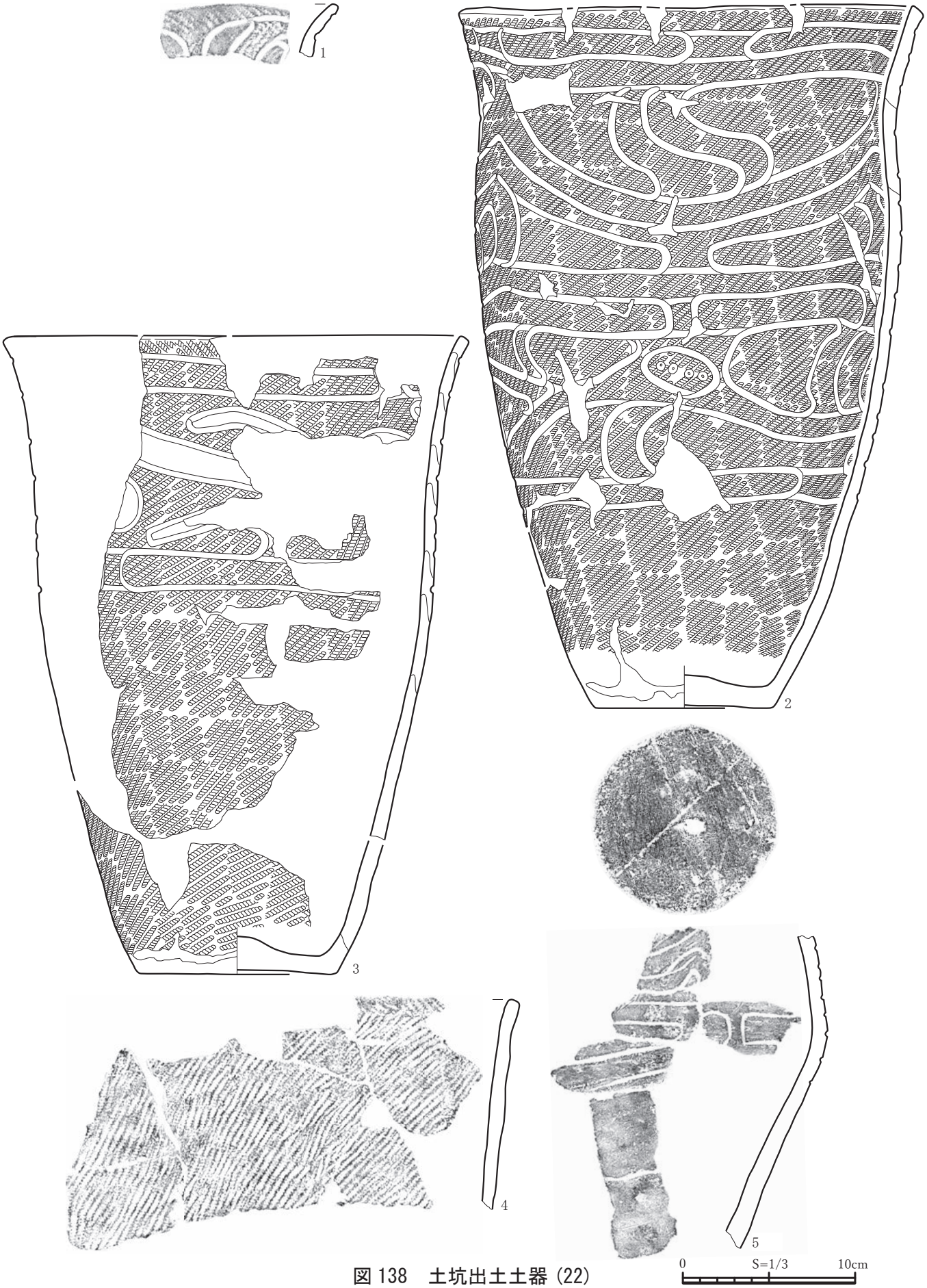
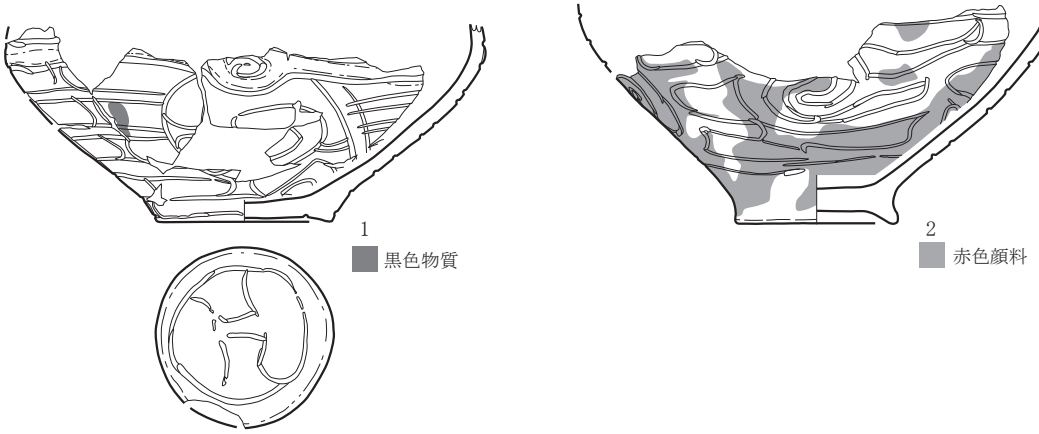


図 138　土坑出土土器 (22)

SK103



SK104①

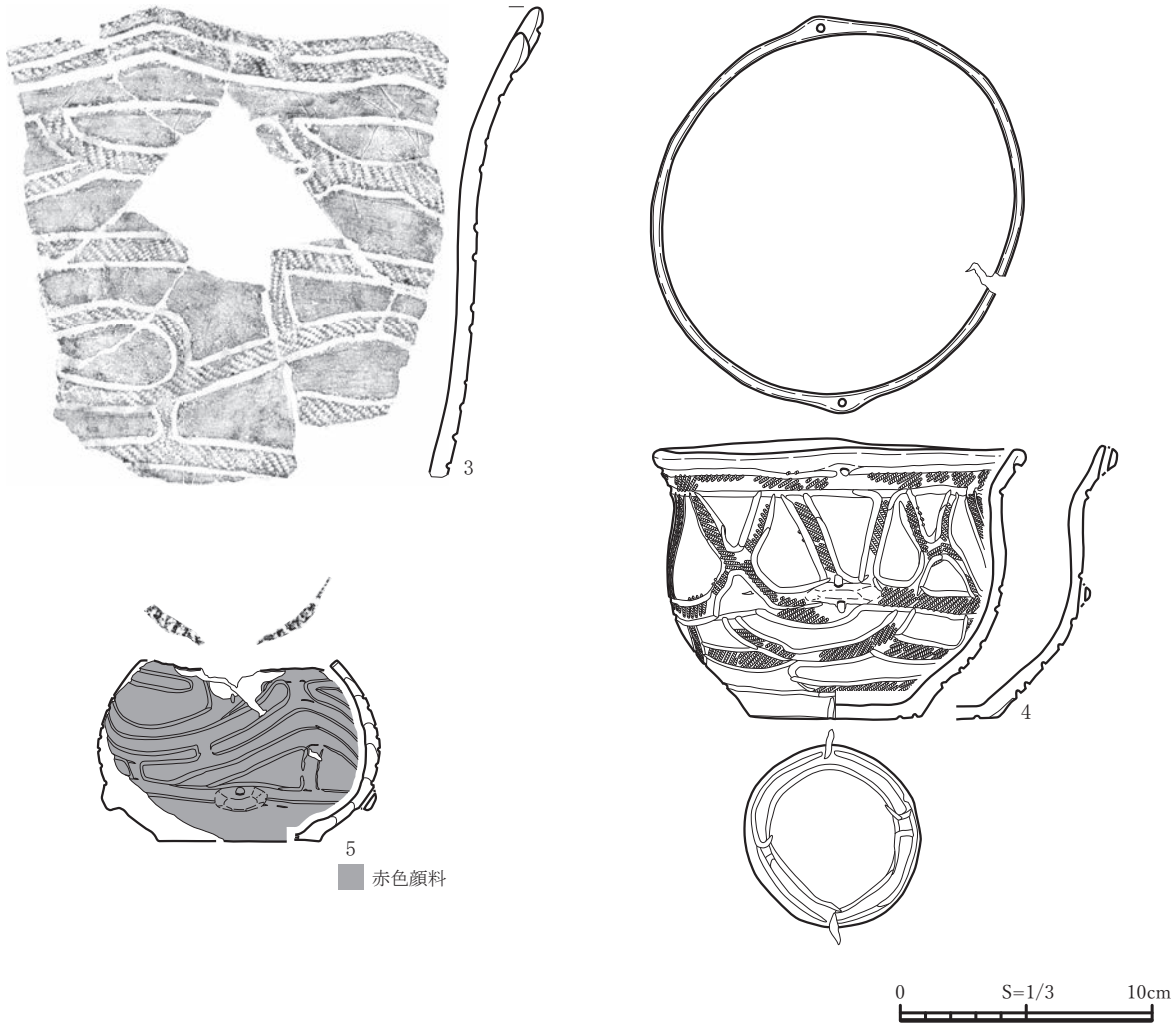


図 139　土坑出土土器 (23)

SK104②

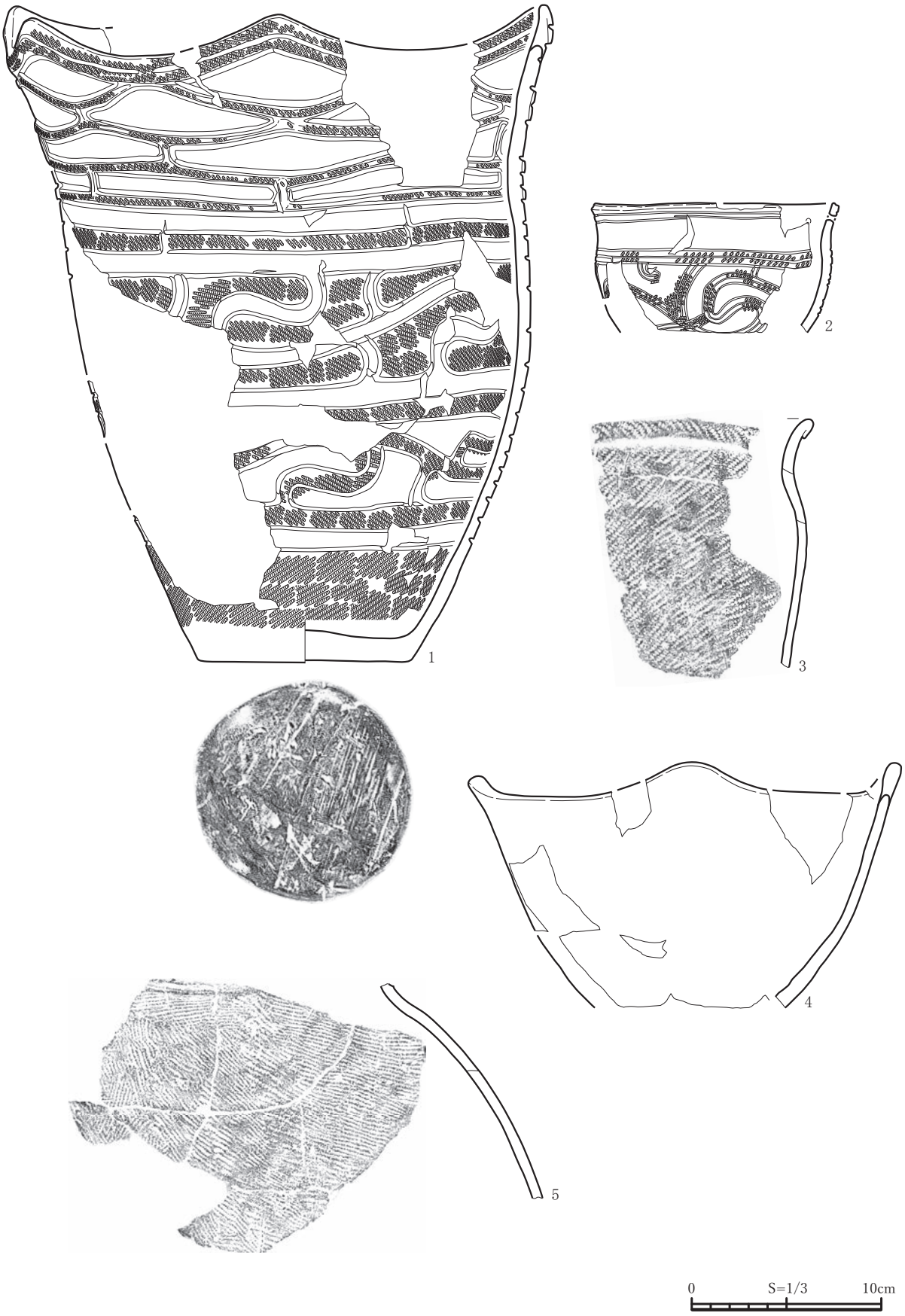
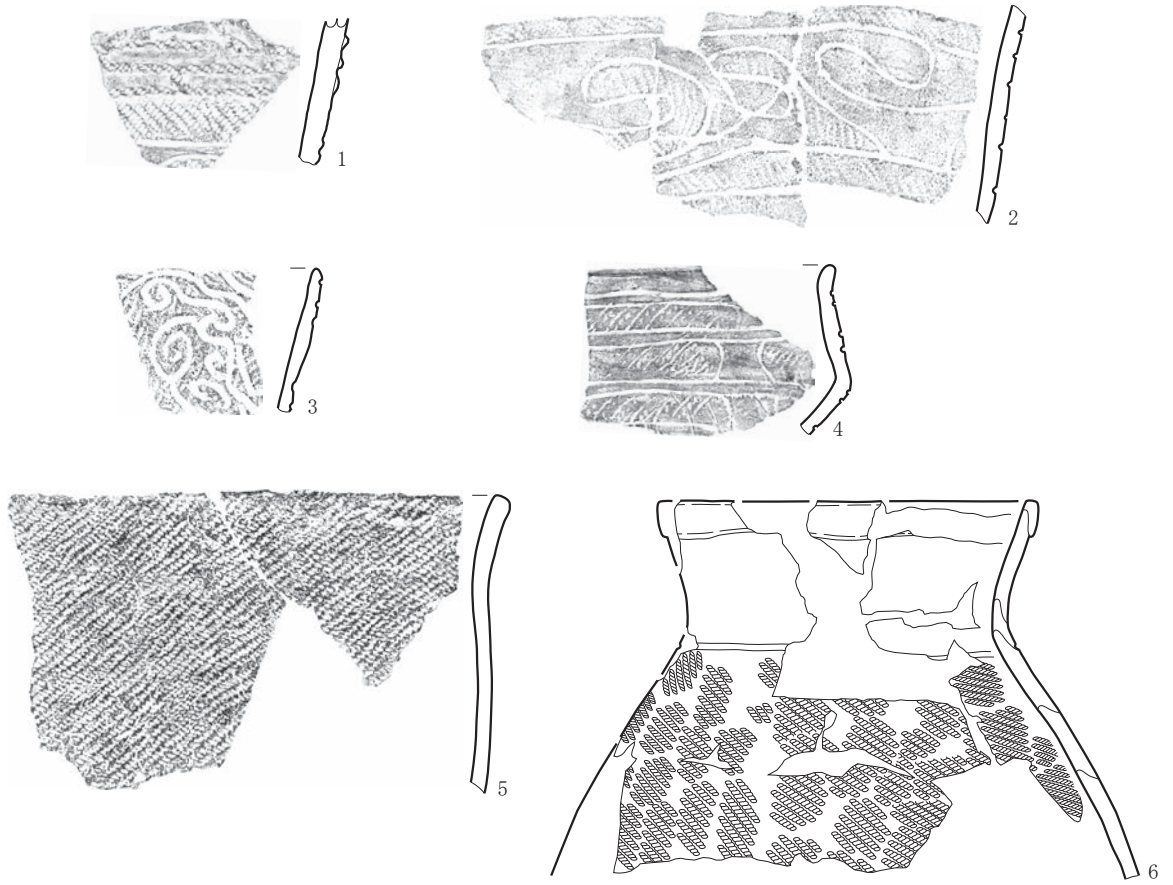


図 140　土坑出土土器 (24)

SK104③



SK105

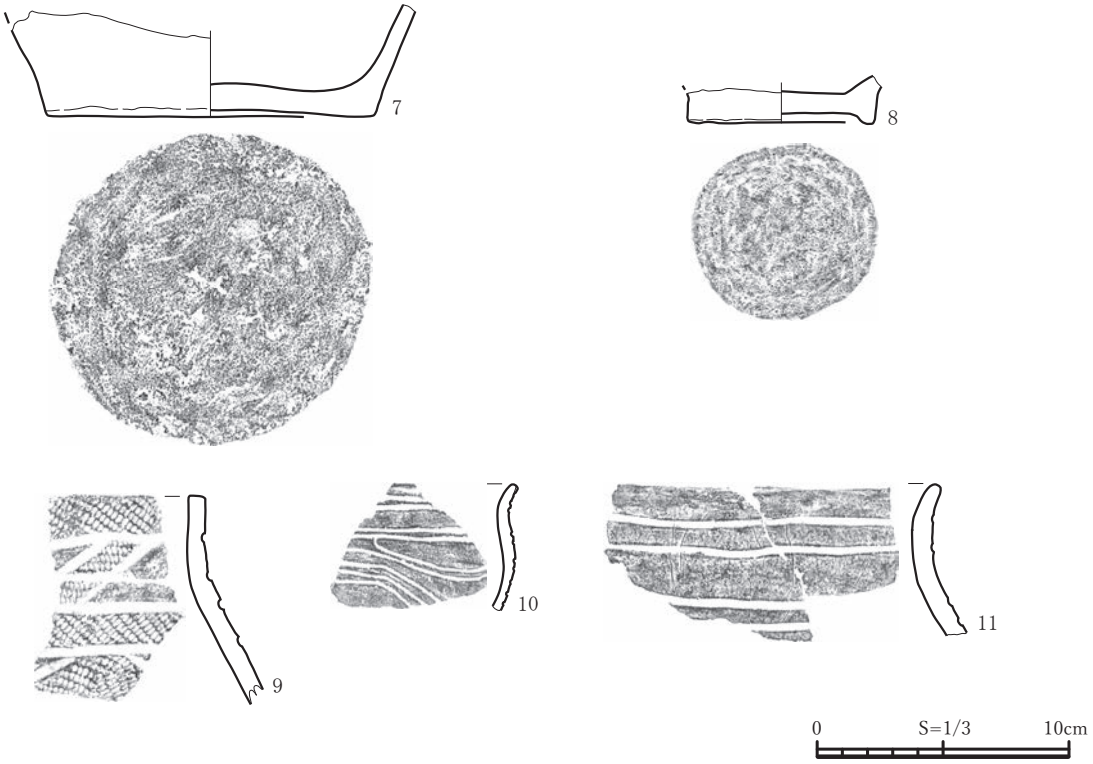


図 141　土坑出土土器 (25)

SK107

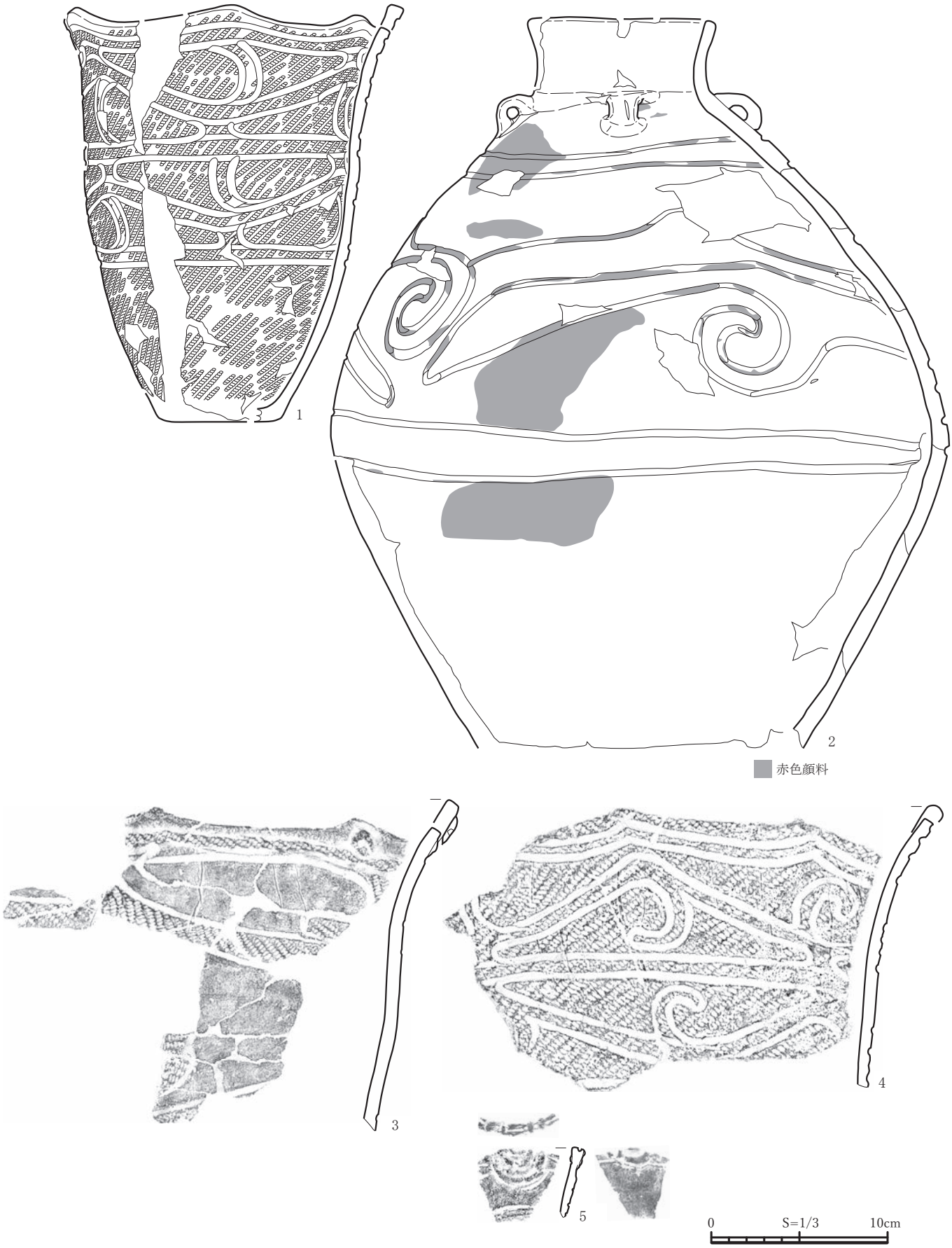
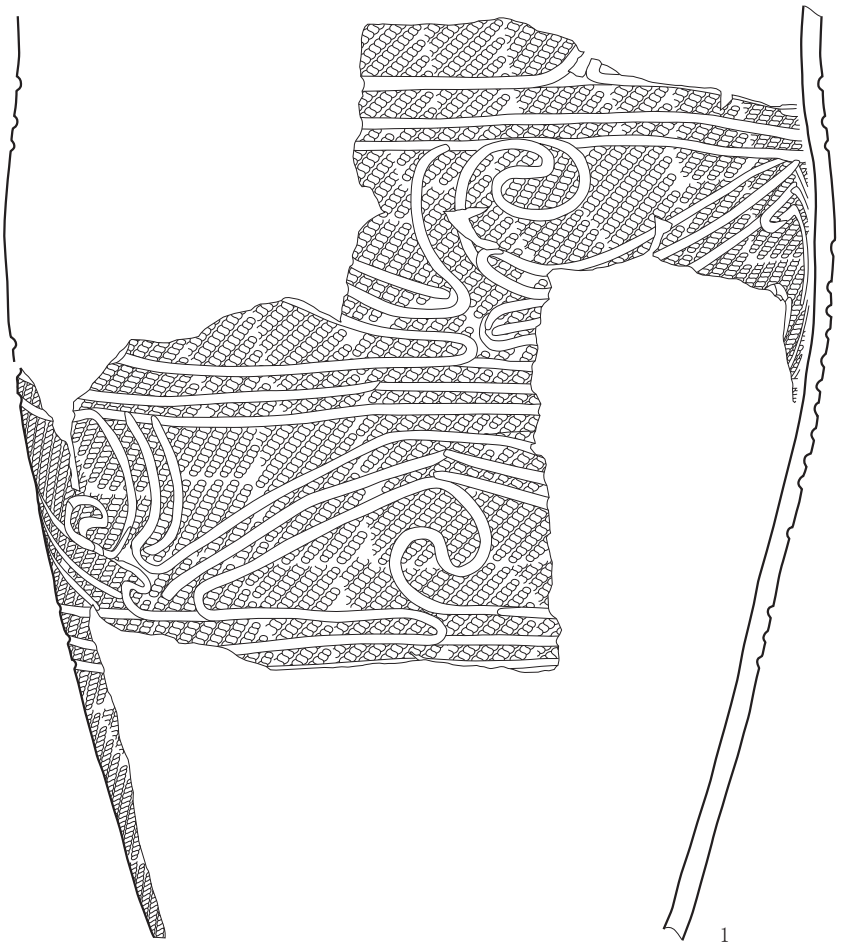
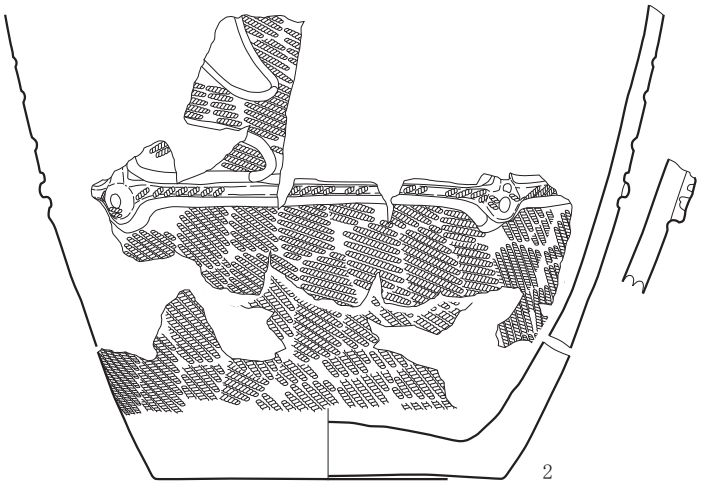


図 142　土坑出土土器 (26)

SK107･108



SK108①



0　S=1/3　10cm

図 143　土坑出土土器 (27)

SK108②

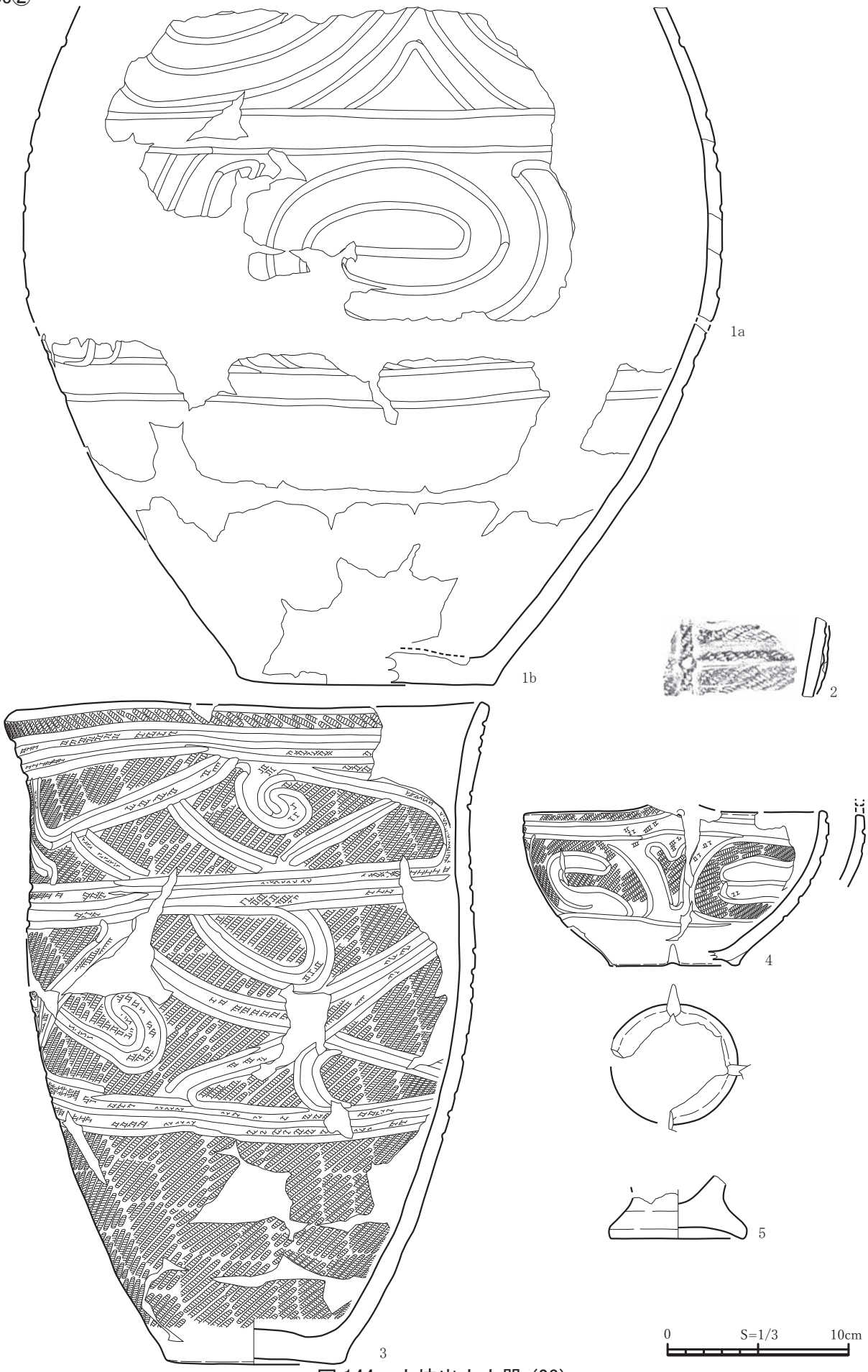


図 144　土坑出土土器 (28)

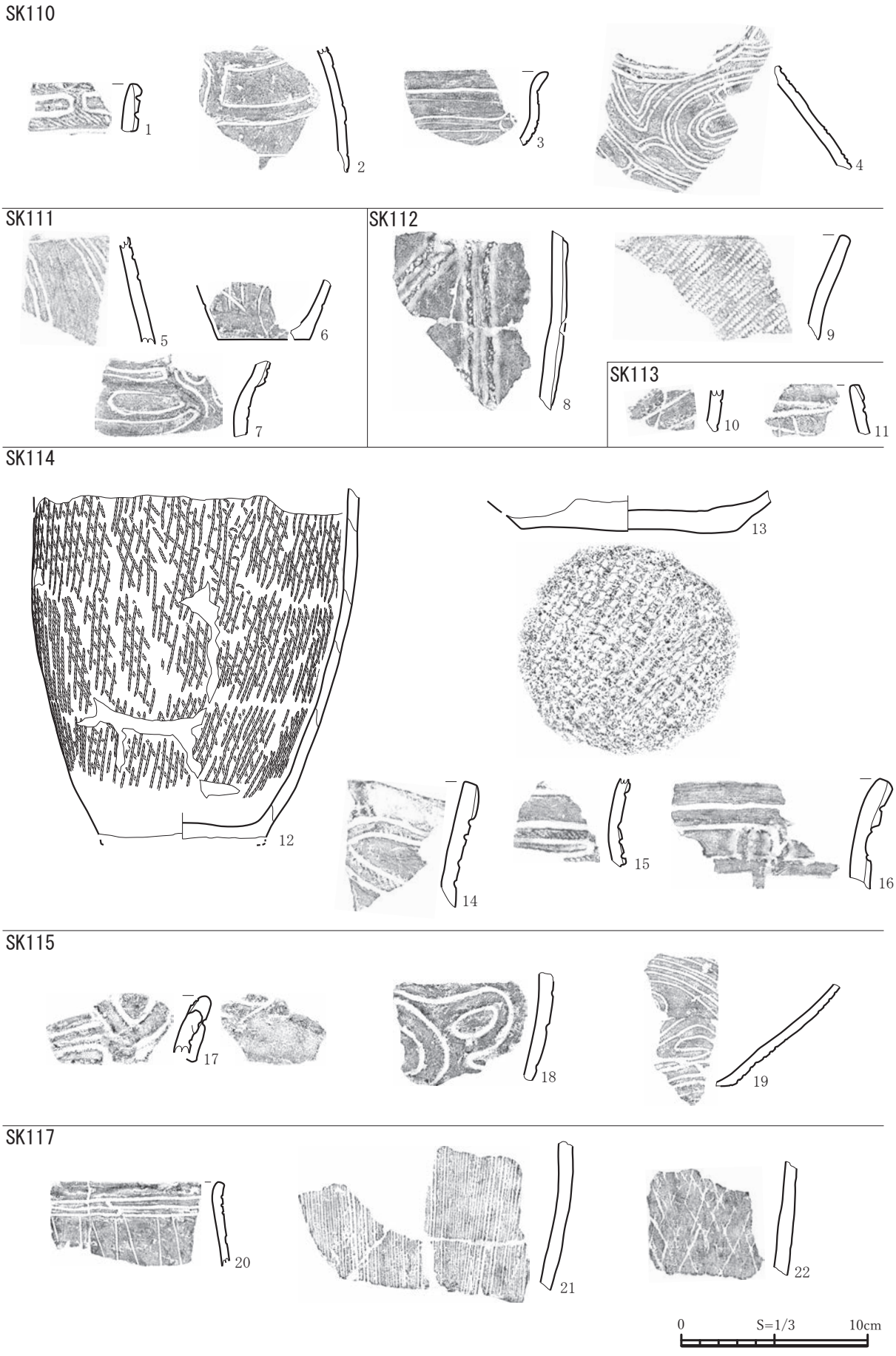


図 145　土坑出土土器 (29)

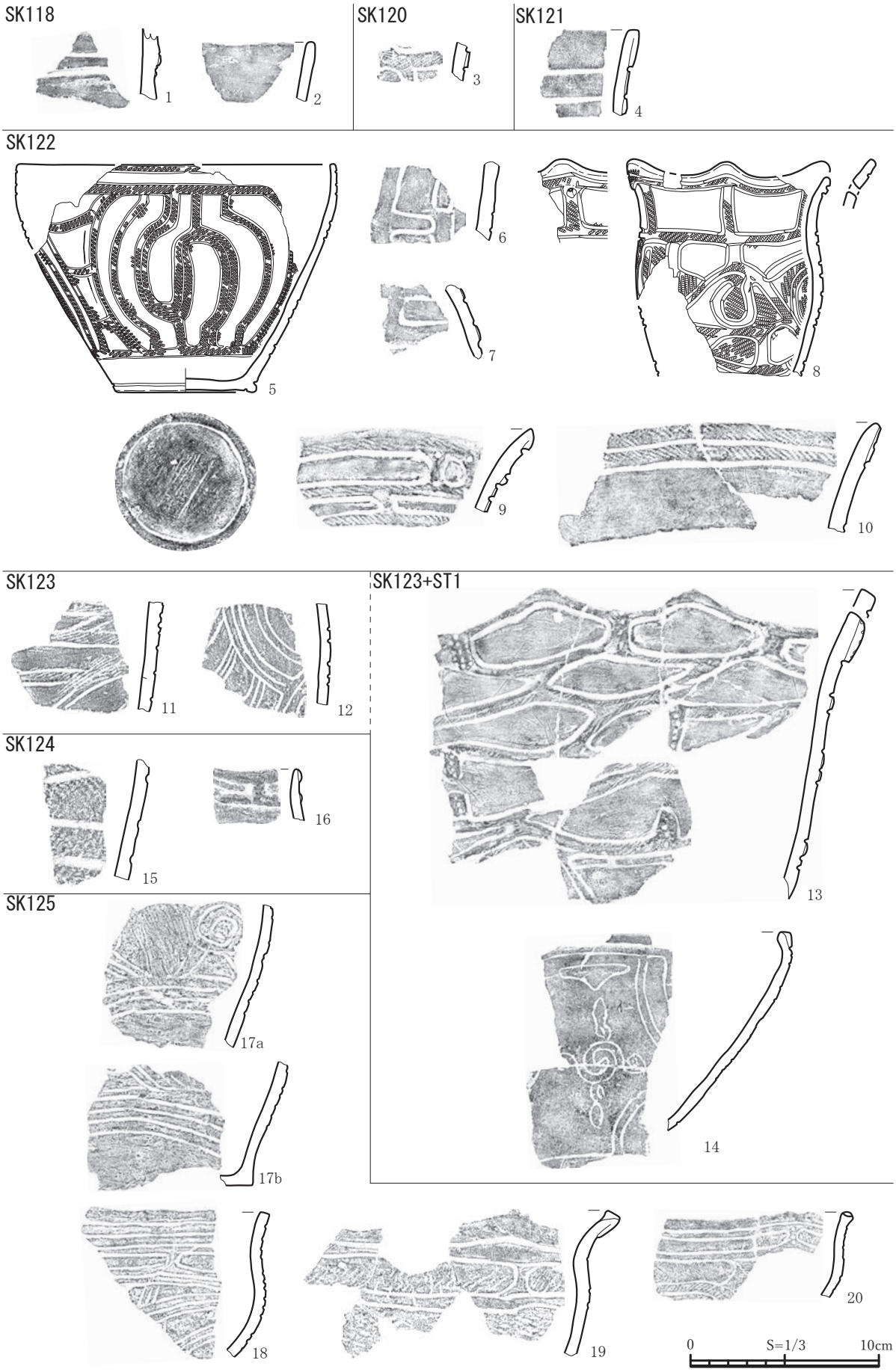


図 146　土坑出土土器 (30)

図 147　土坑出土土器 (31)

SK127②

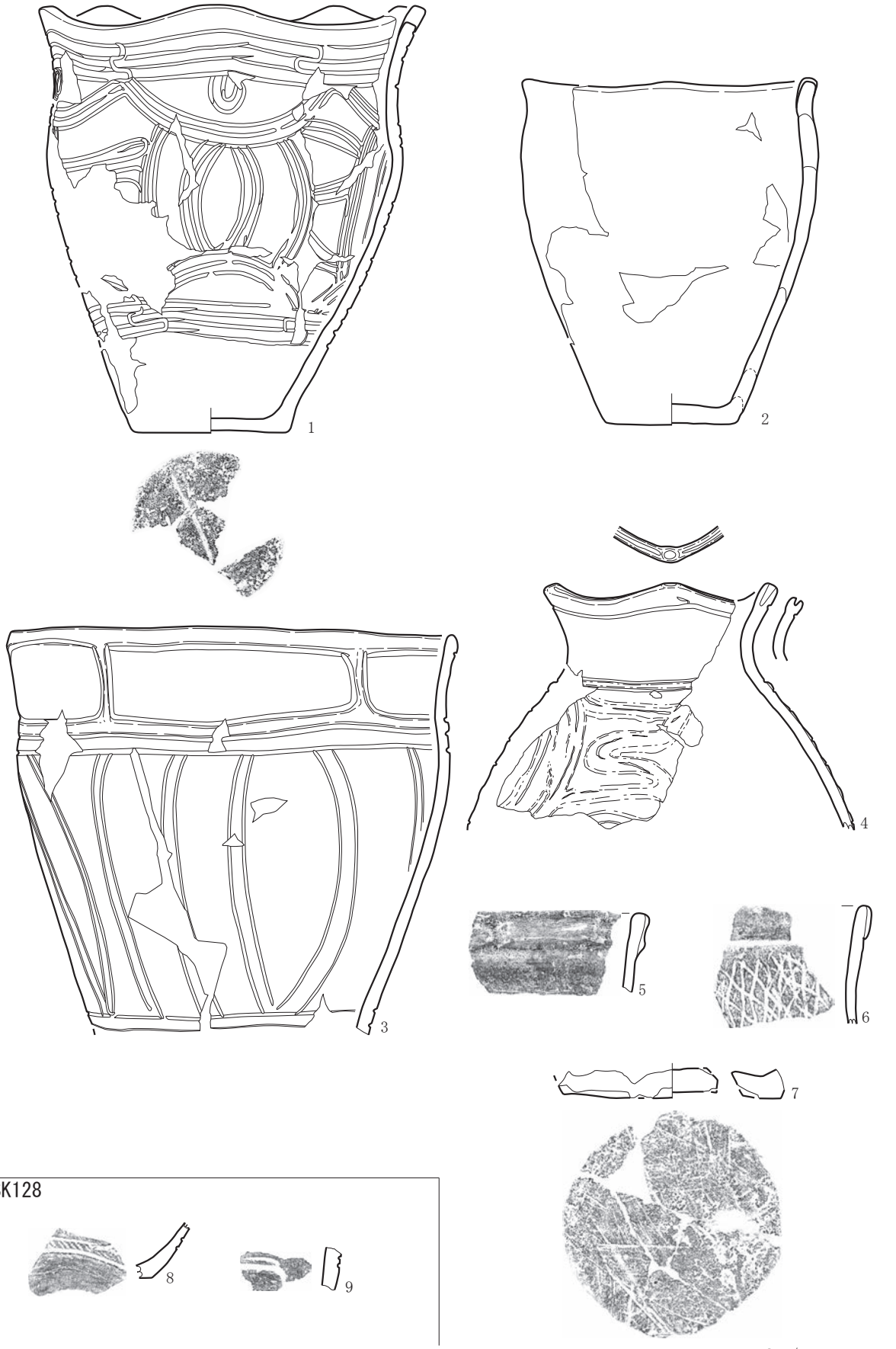


図 148　土坑出土土器 (32)

SK129①

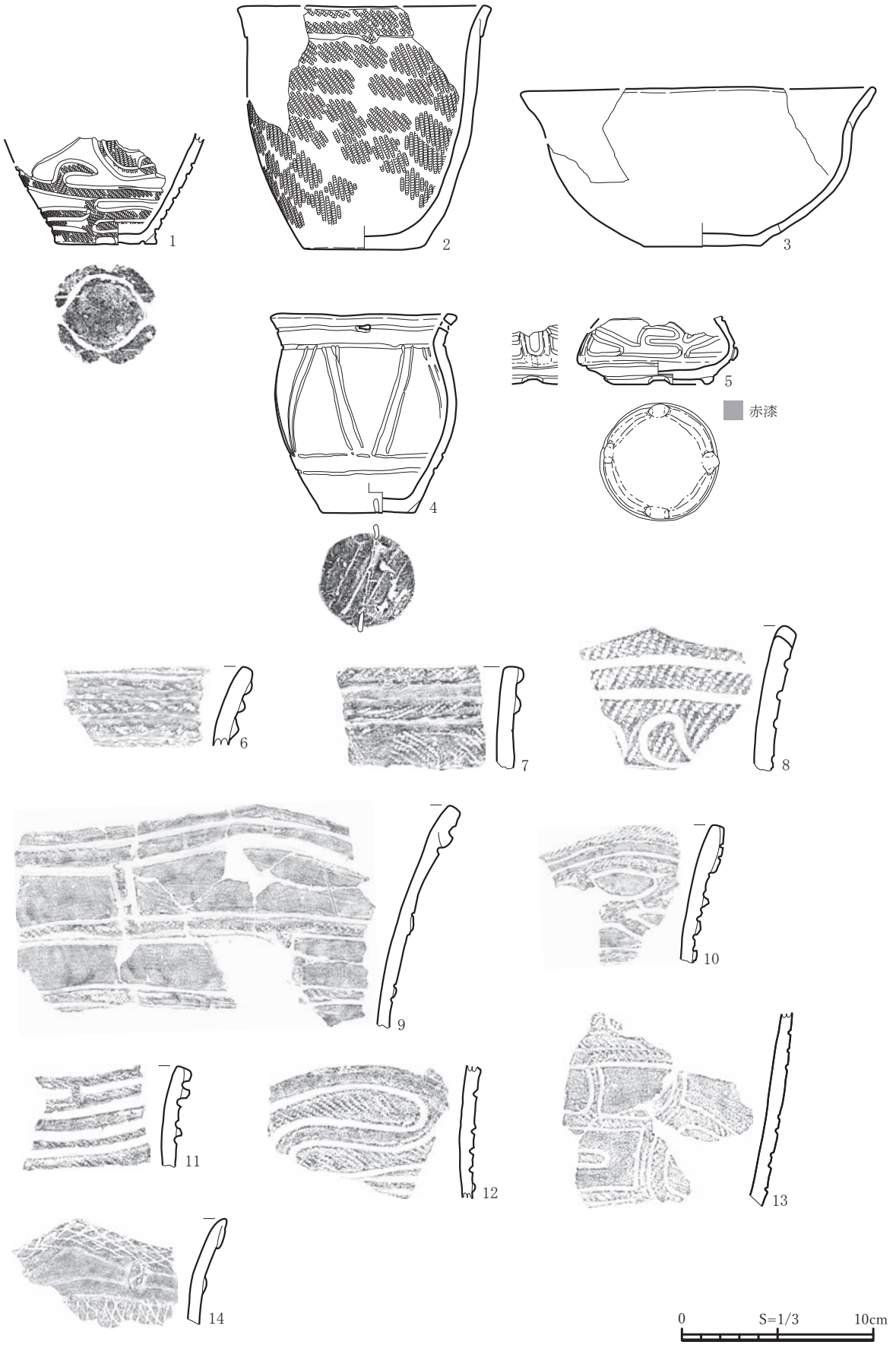


図 149　土坑出土土器 (33)

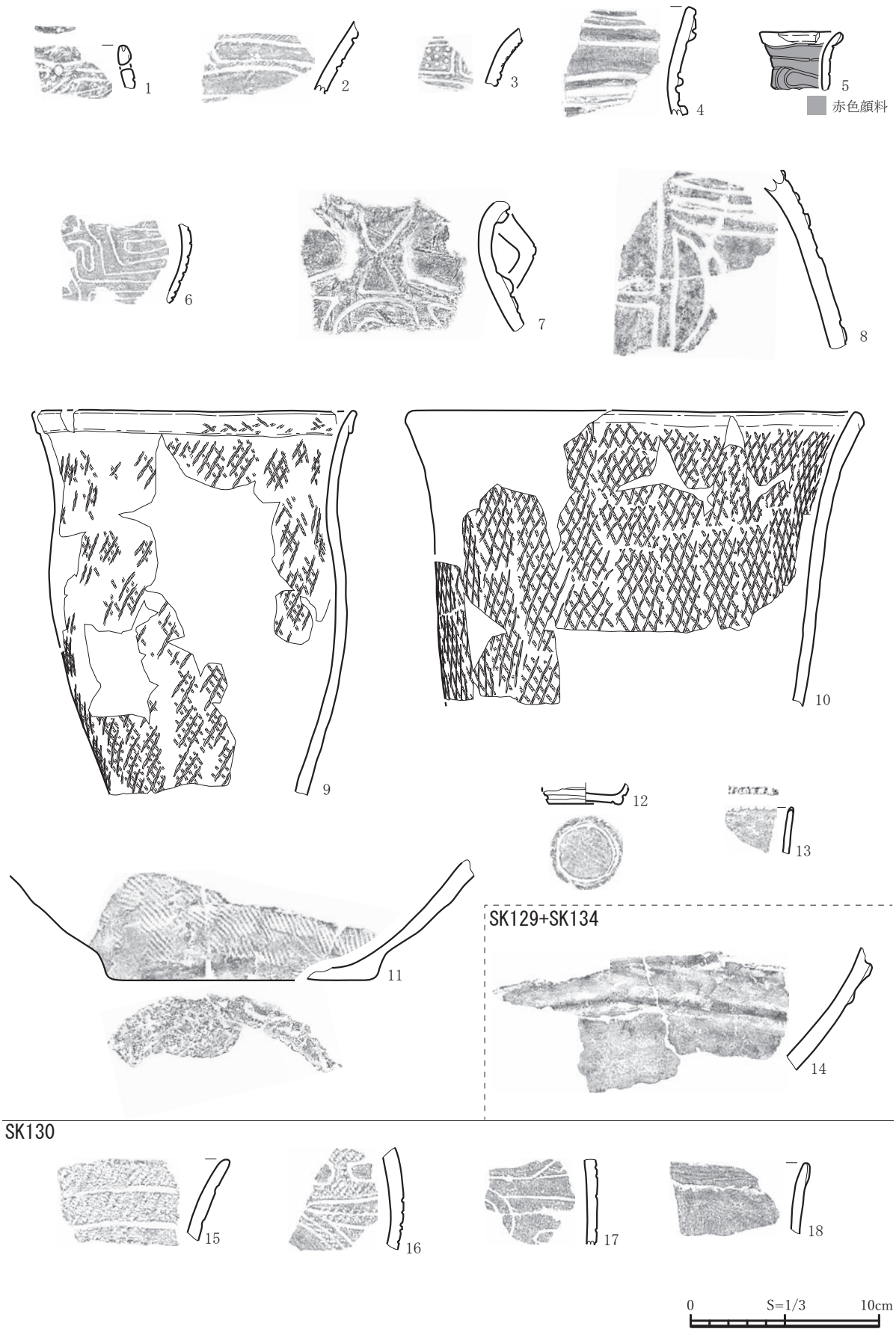
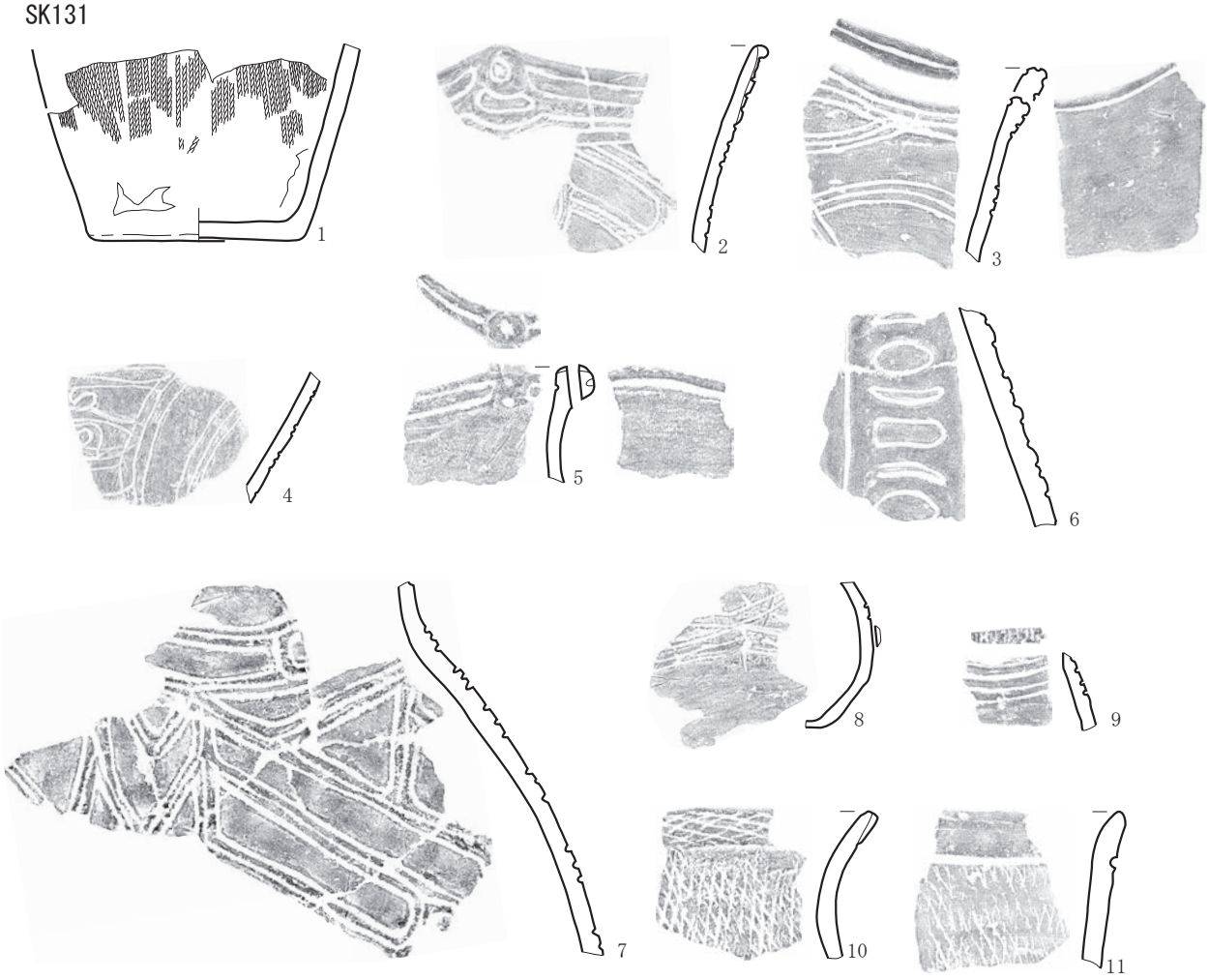
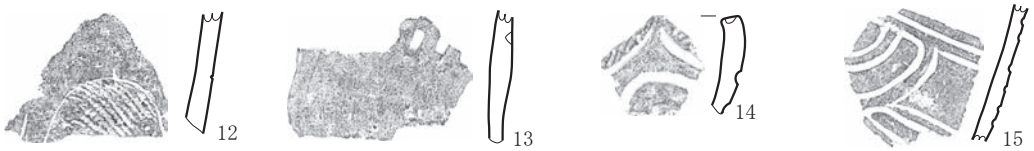


図 150　土坑出土土器 (34)

SK131



SK132



SK132+SB7 SP483

SK133①

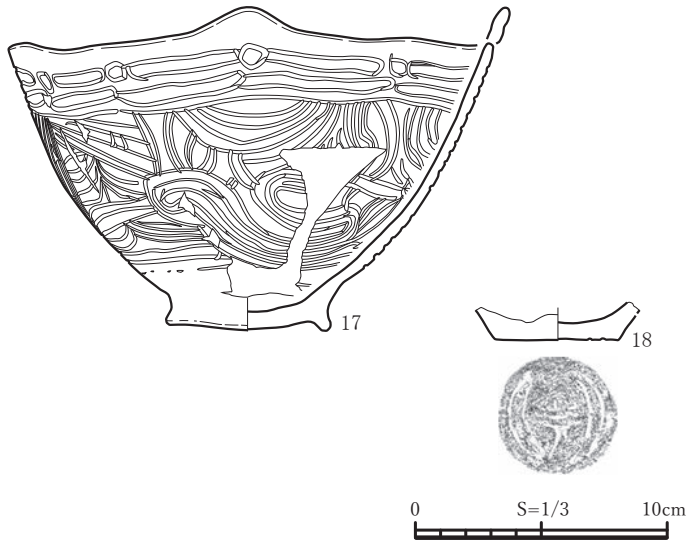
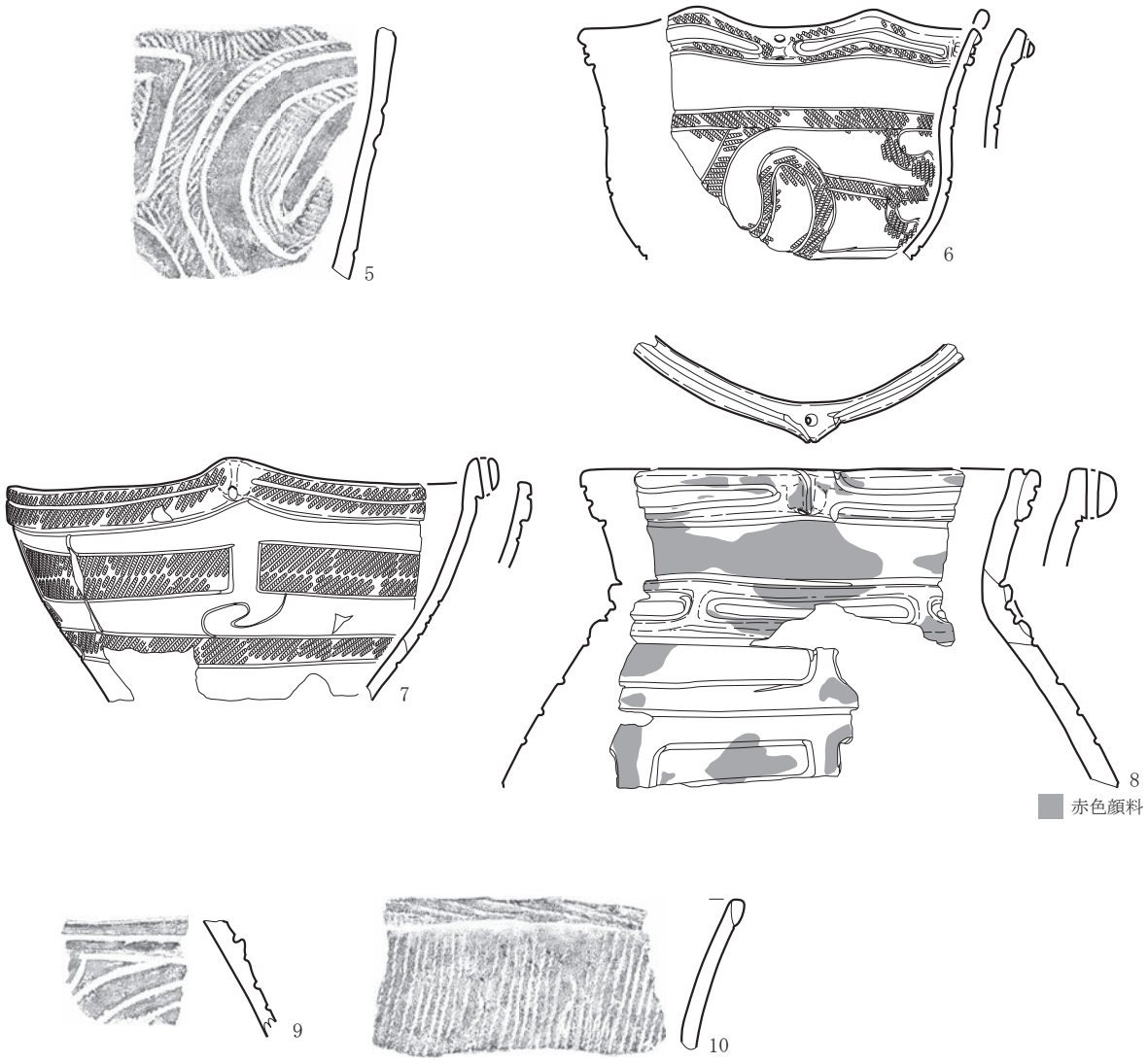


図 151　土坑出土土器 (35)

SK133②

SK134



SK135

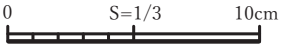


図 152　土坑出土土器 (36)

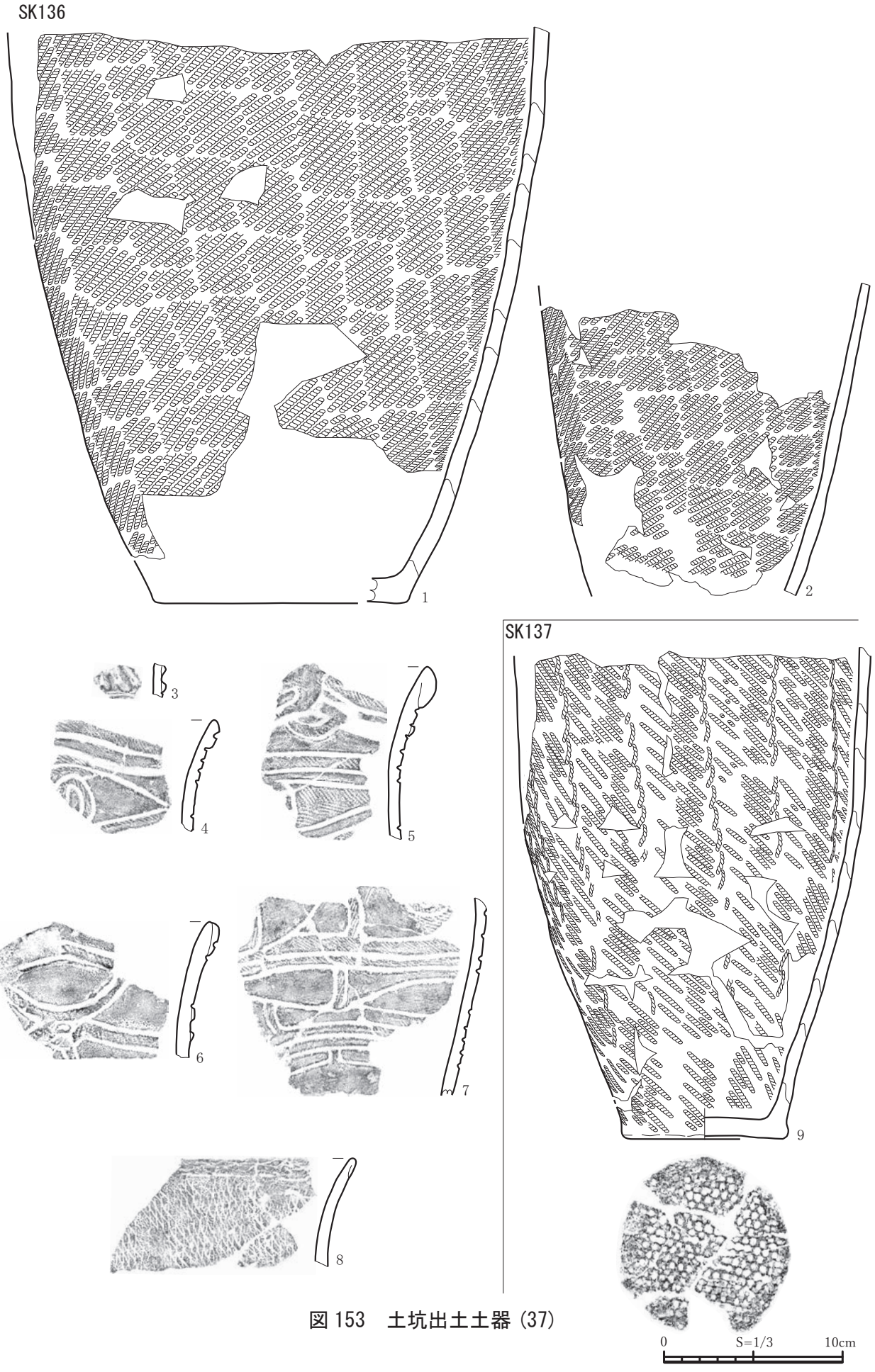
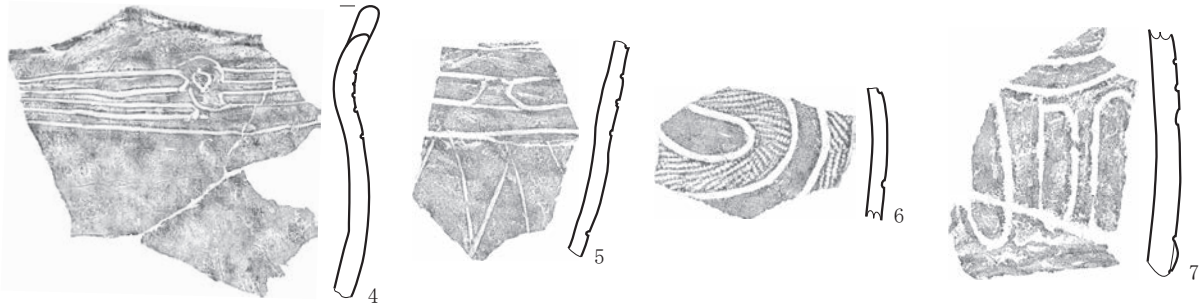


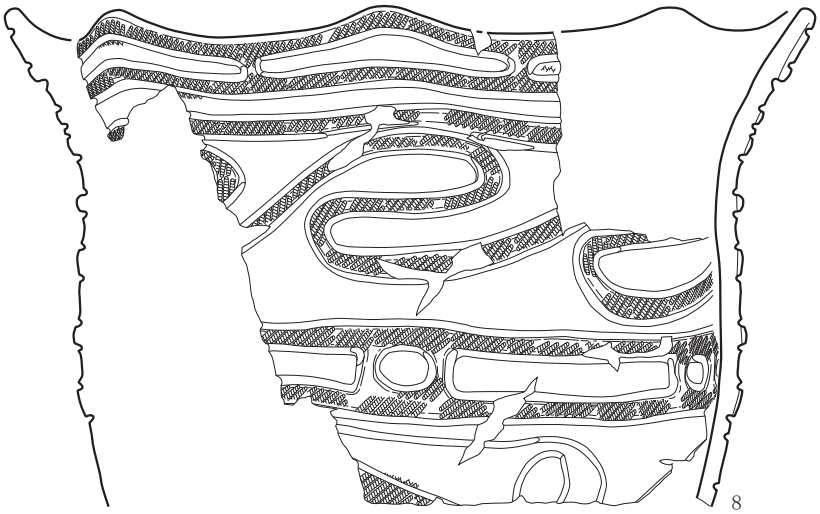
図 153　土坑出土土器 (37)

SK138

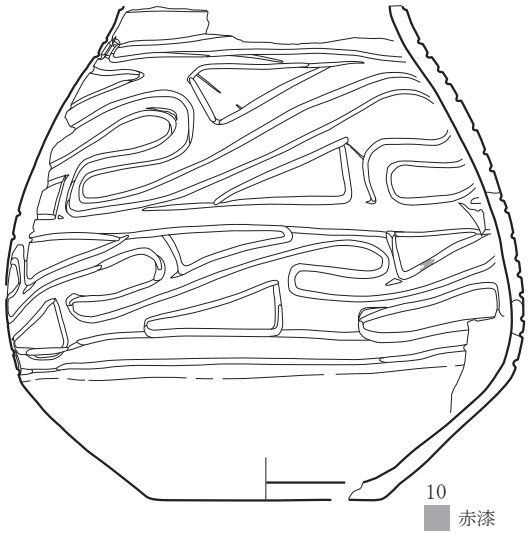
SK139



SK141+SB22SP564・565



SK141



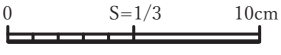
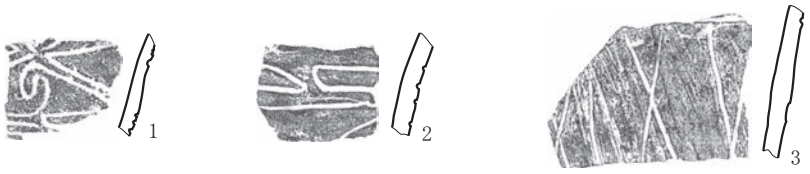
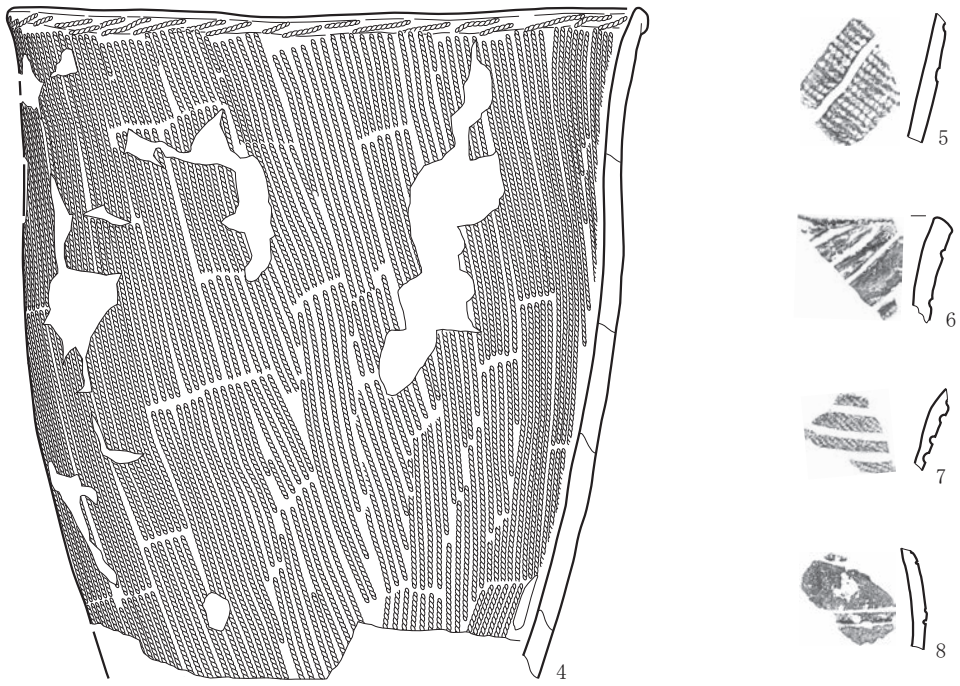


図 154　土坑出土土器 (38)

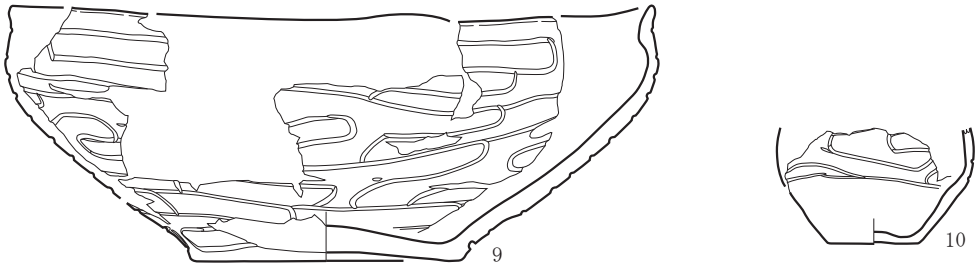
SK142



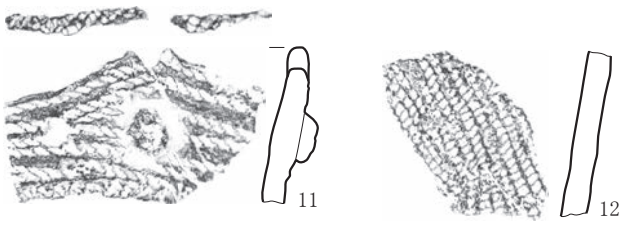
SK143



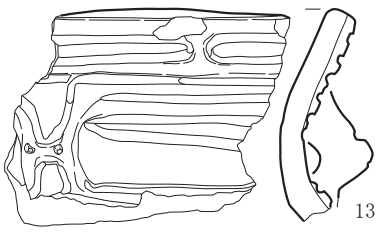
SK144



SK145



SK146



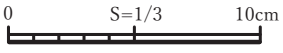
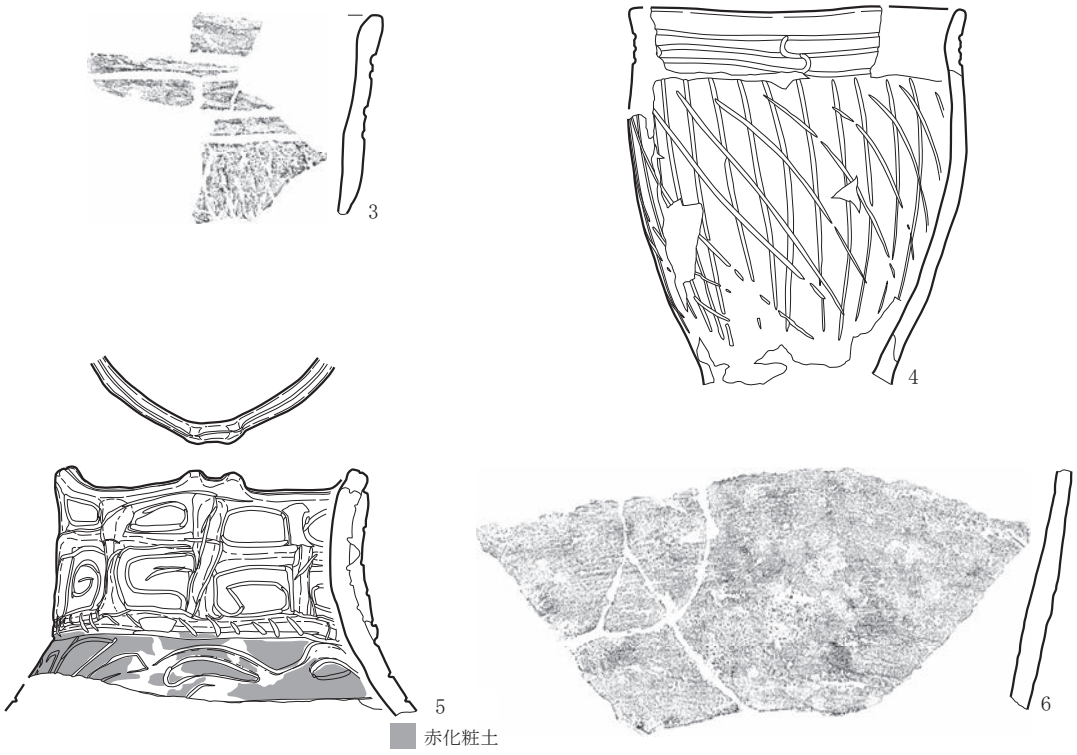


図 155　土坑出土土器 (39)

SK147

SK148



SK148＋ST1

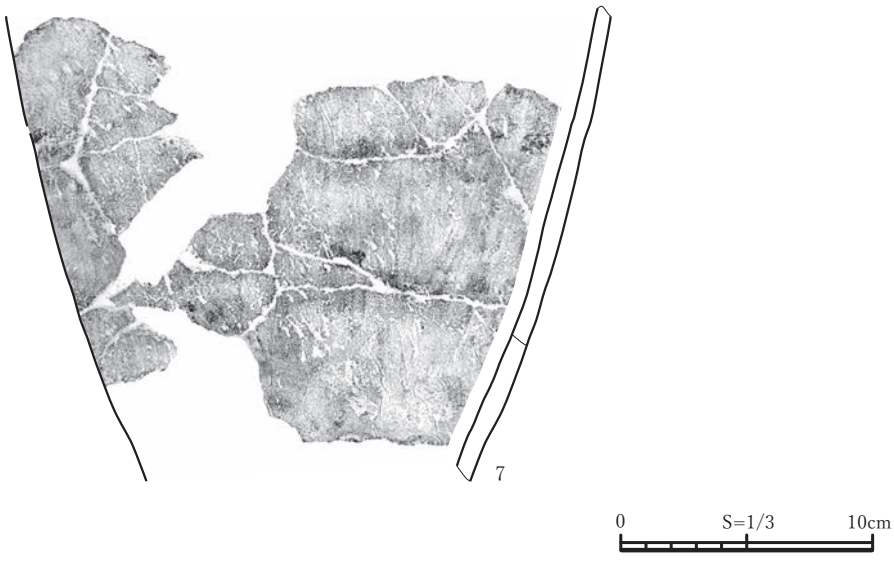
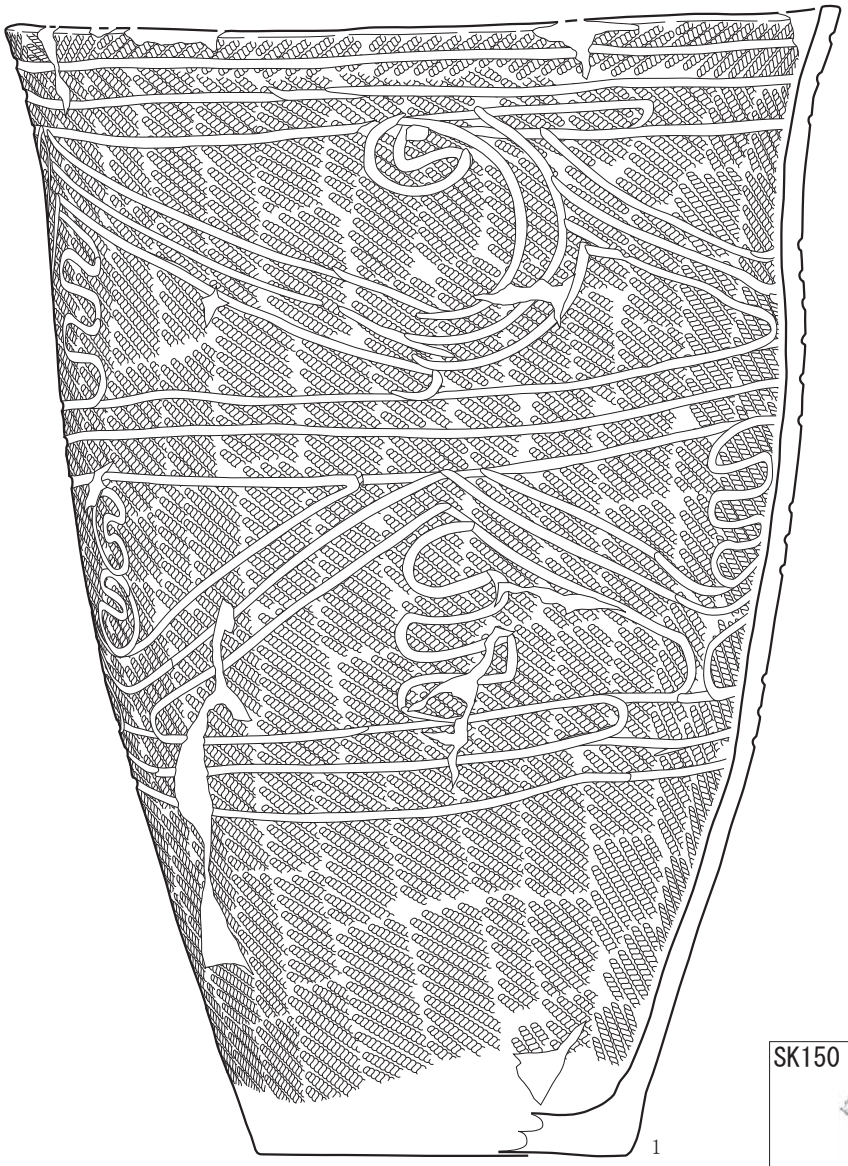


図 156　土坑出土土器 (40)

SK149



SK150

SK151

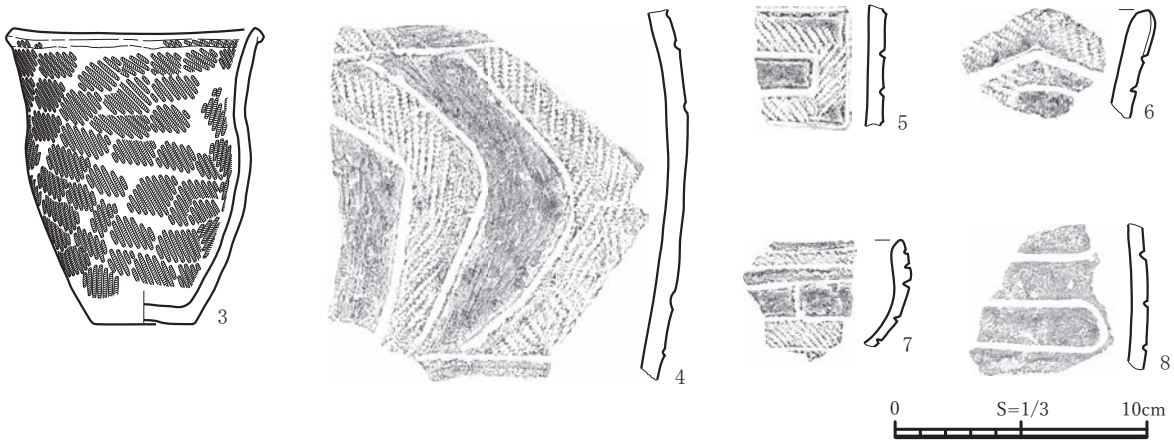
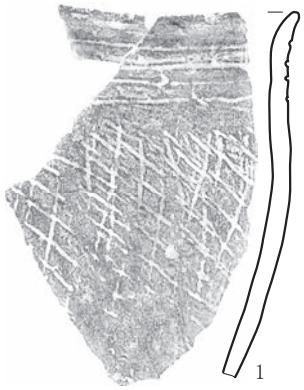
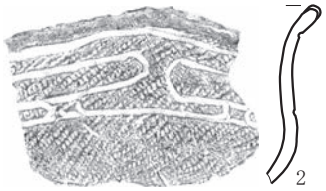


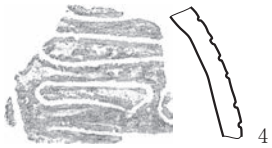
図 157　土坑出土土器 (41)

SK154

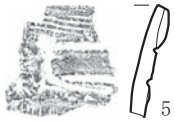

1


2

3

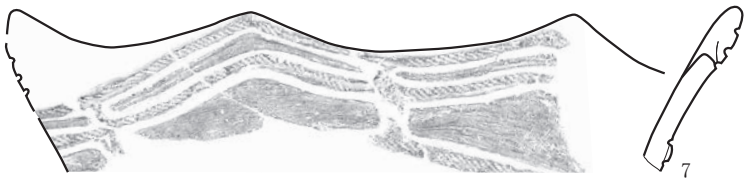

4

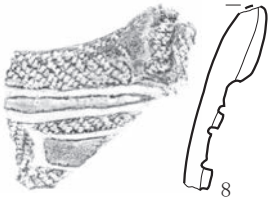
SK156

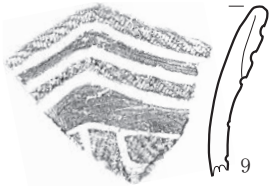

5

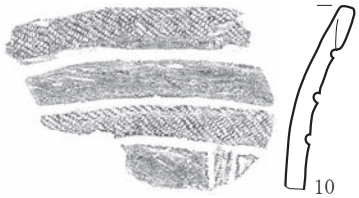
6

SK157①


7

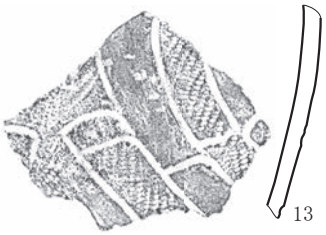

8


9


10

11

12


13

14

0 S=1/3 10cm

図 158　土坑出土土器 (42)

SK157②

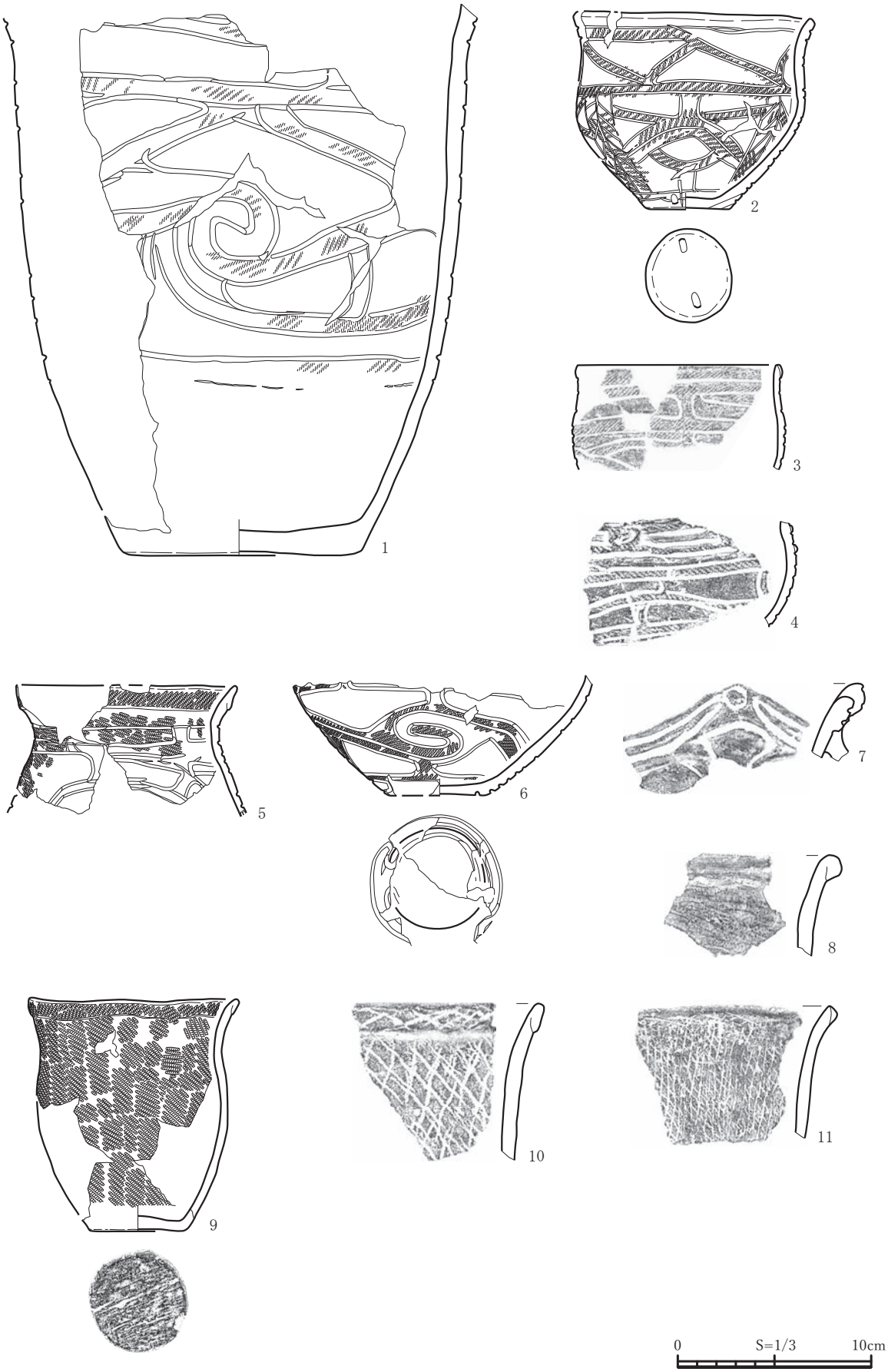
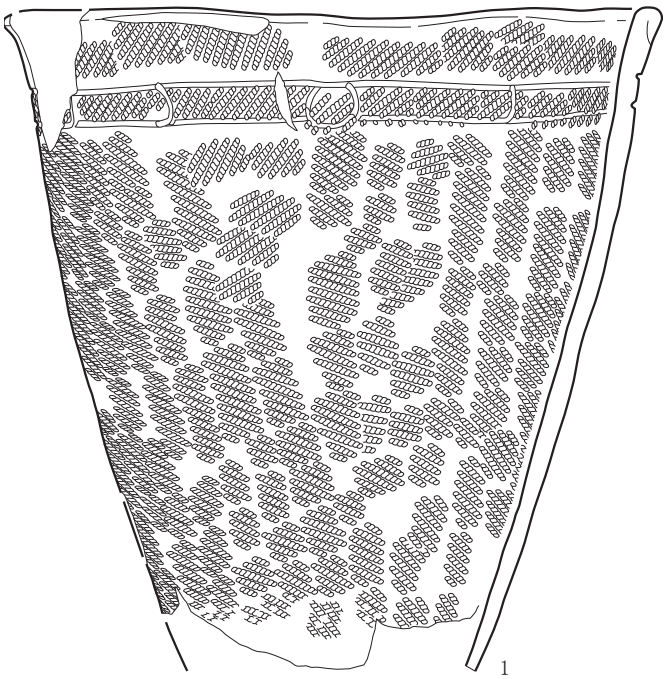
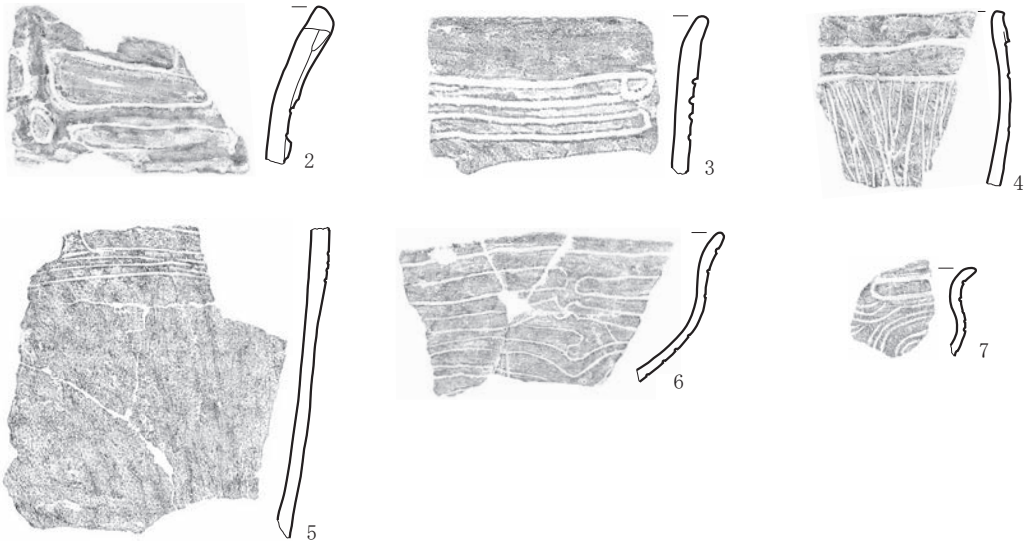


図 159　土坑出土土器 (43)

SK157＋ST1



SK158



SK160

SK161

SK162

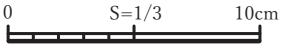
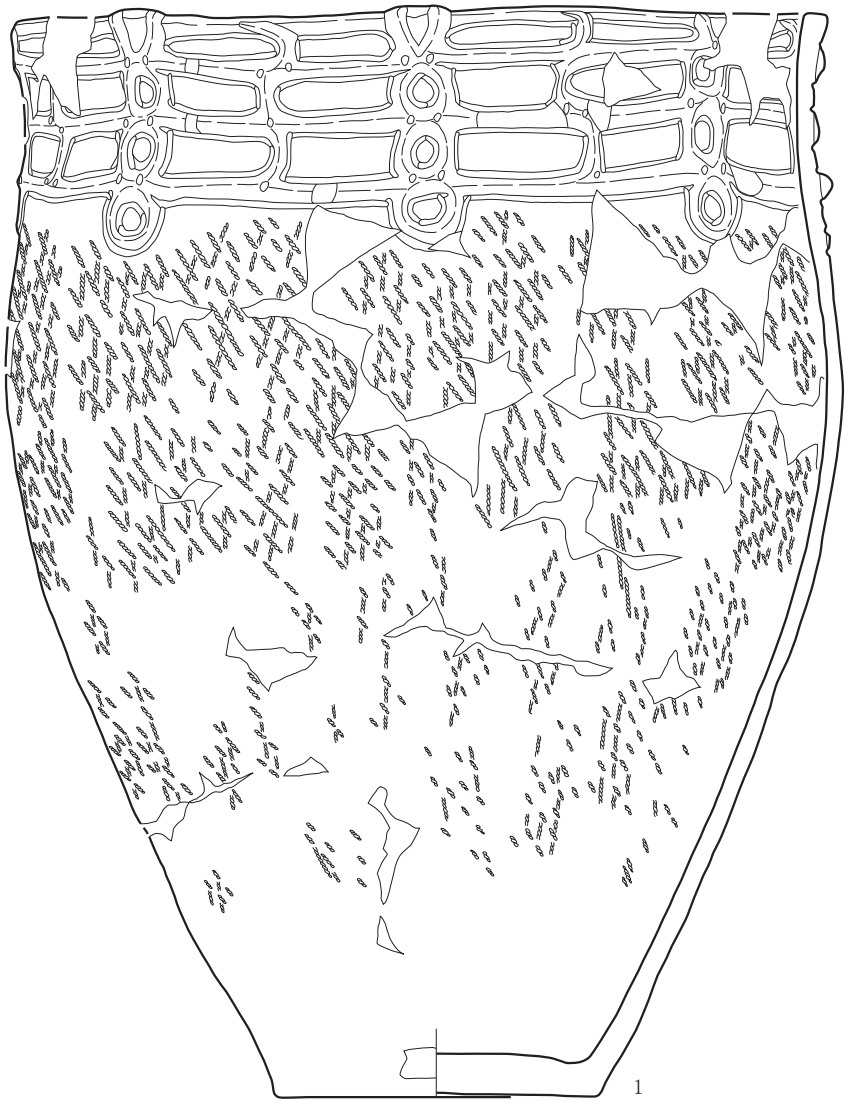


図 160　土坑出土土器 (44)

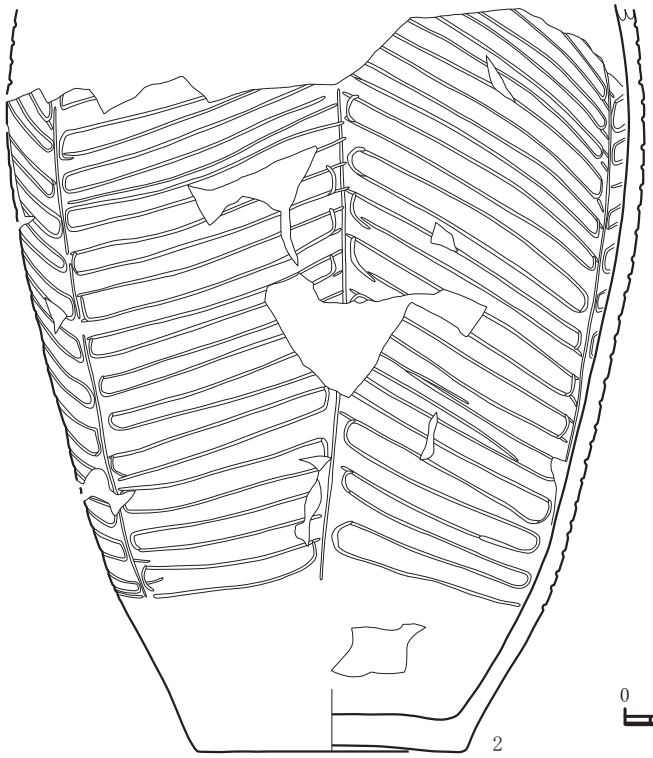
SR1

図 161　土器埋設遺構出土土器（１）

SR2



SR3



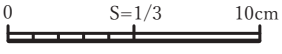


図 162　土器埋設遺構出土土器（２）

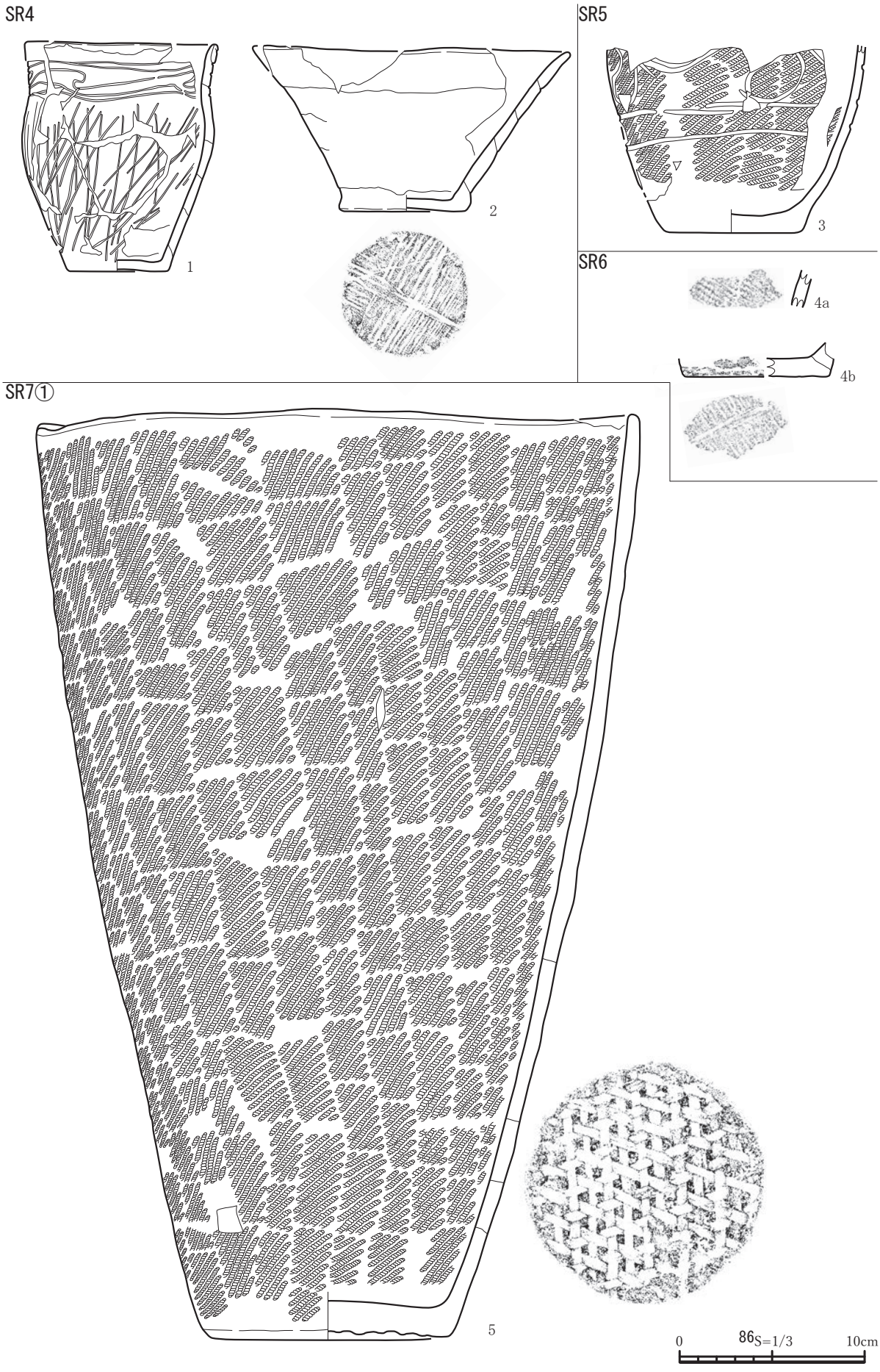
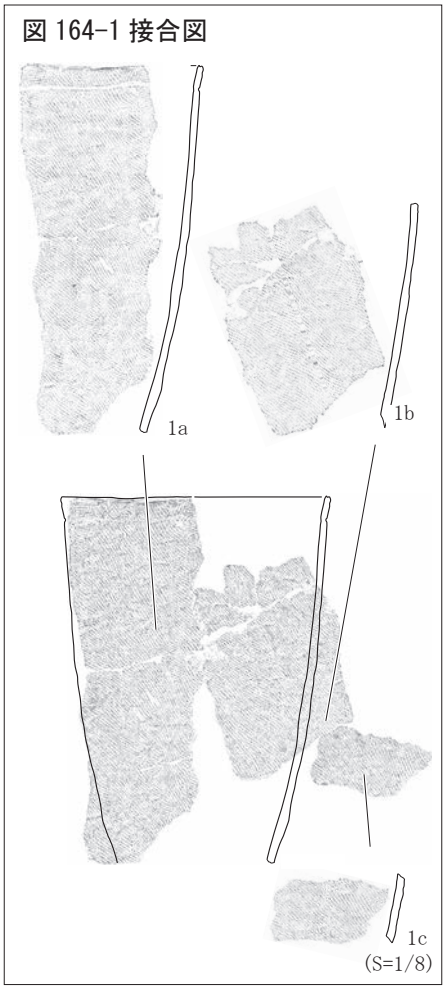
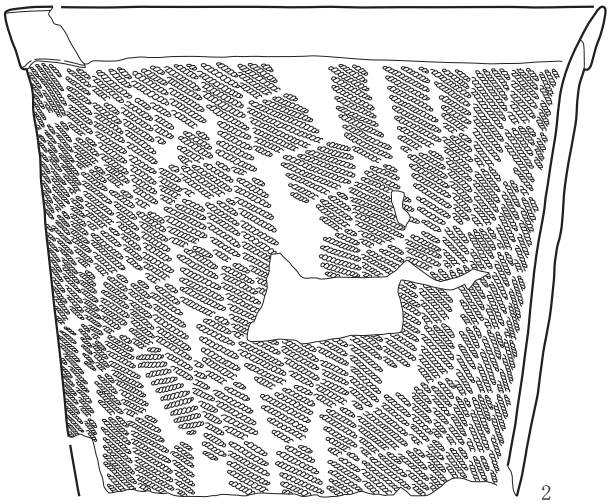
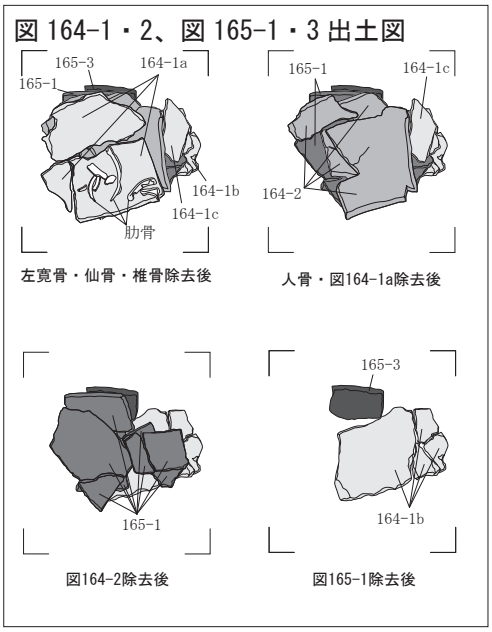


図 163　土器埋設遺構出土土器（３）

SR7②



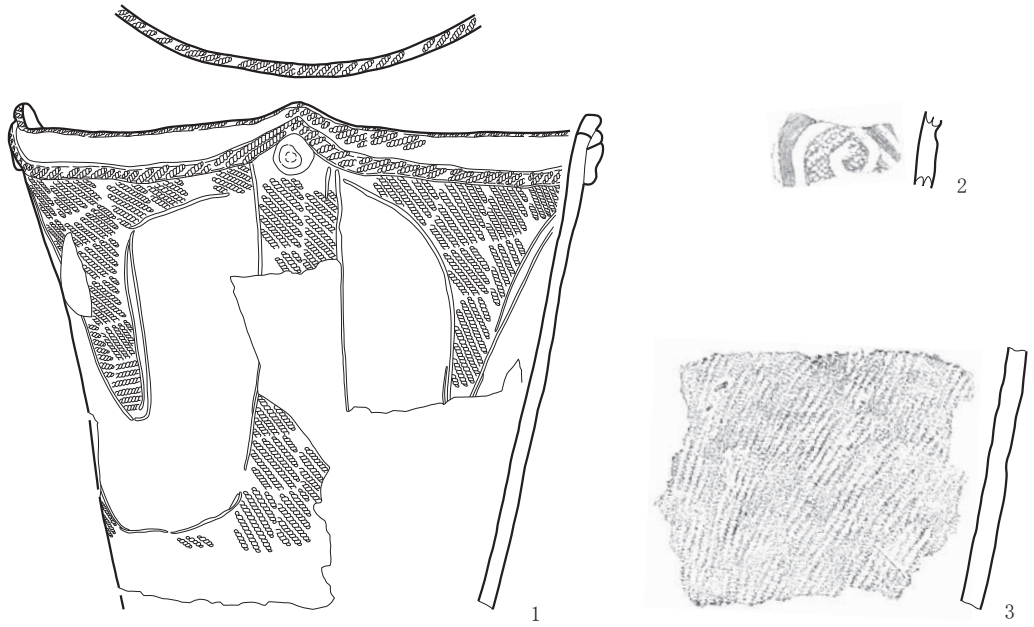




0 S=1/3 10cm

図 164　土器埋設遺構出土土器（４）

SR7③



SR9

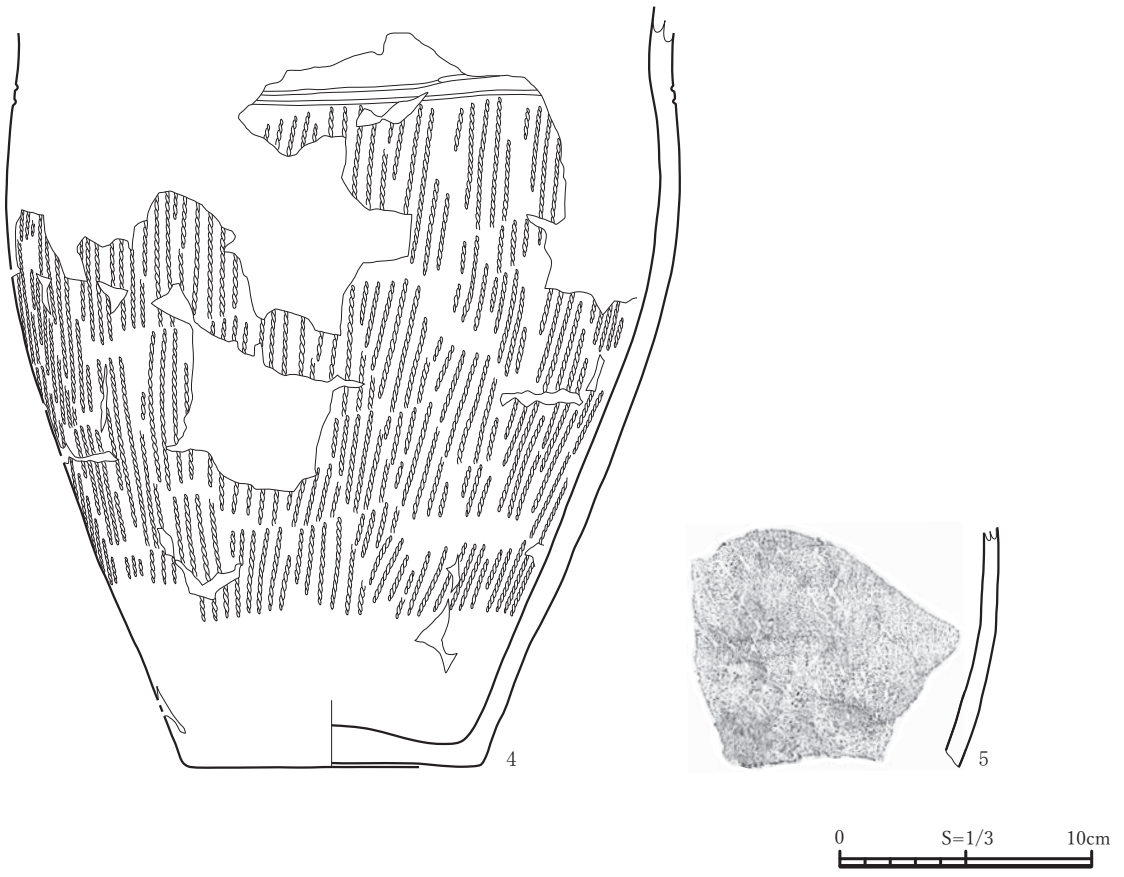


図 165　土器埋設遺構出土土器（５）

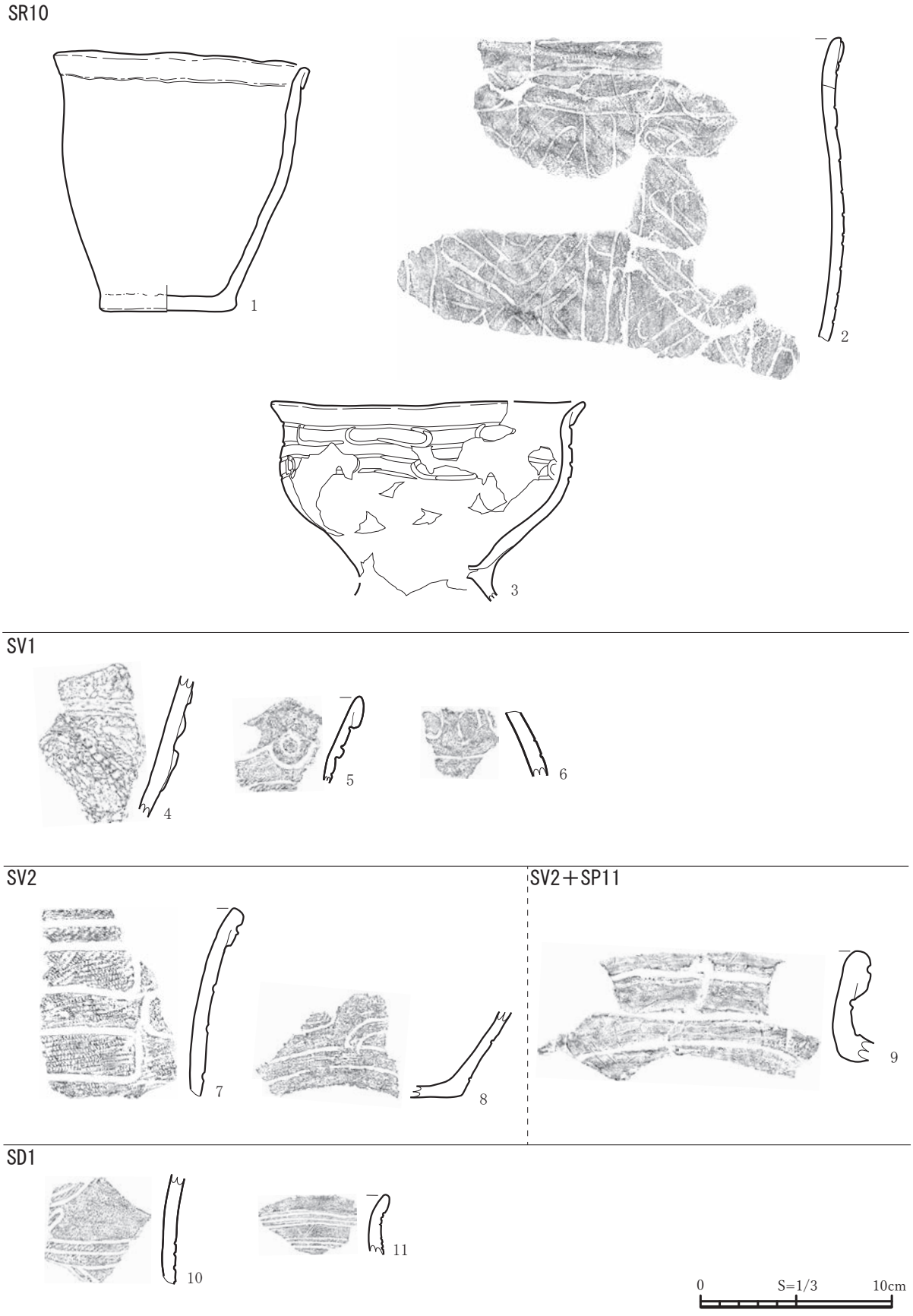


図 166　土器埋設遺構出土土器（６）・溝状土坑・溝跡出土土器

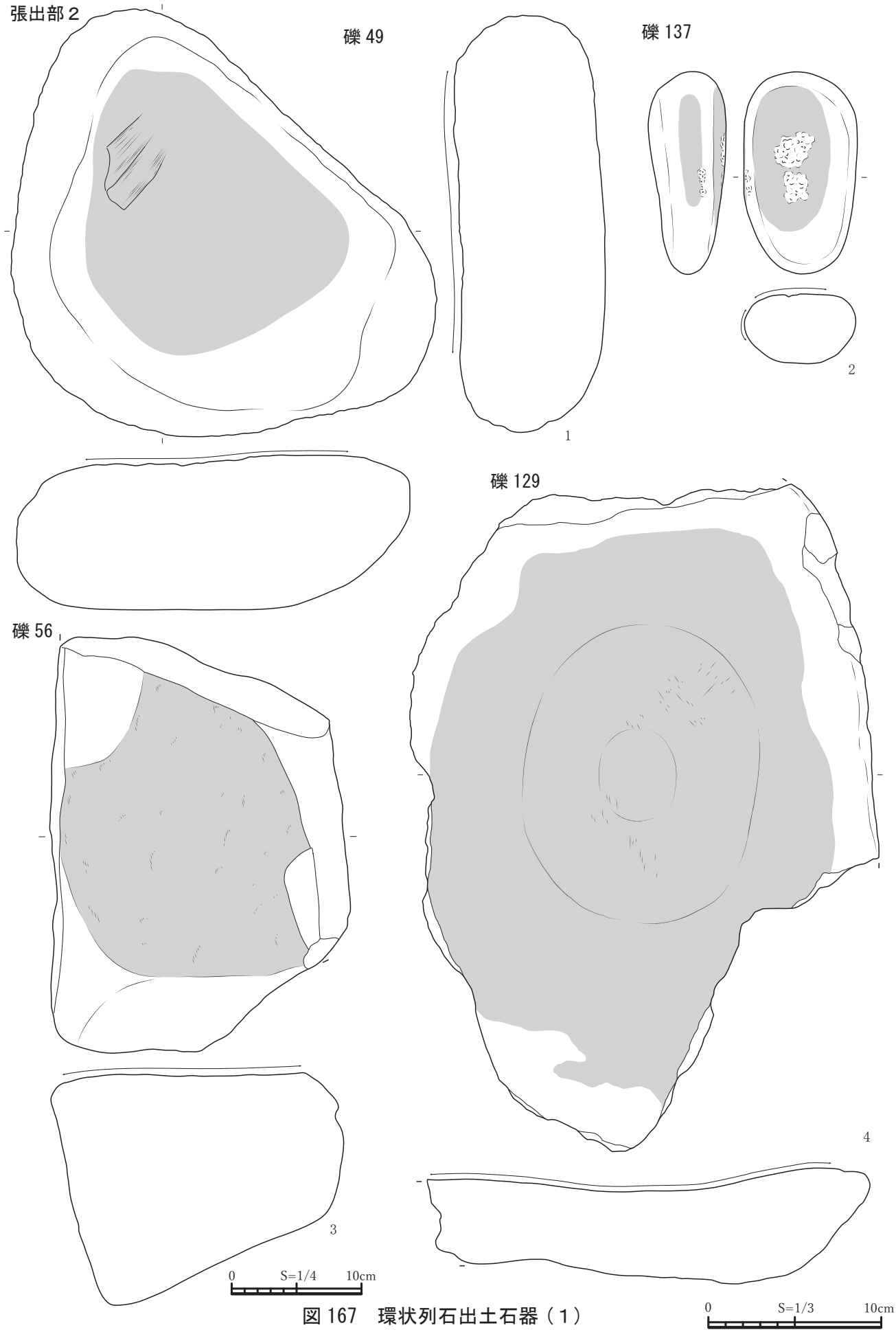
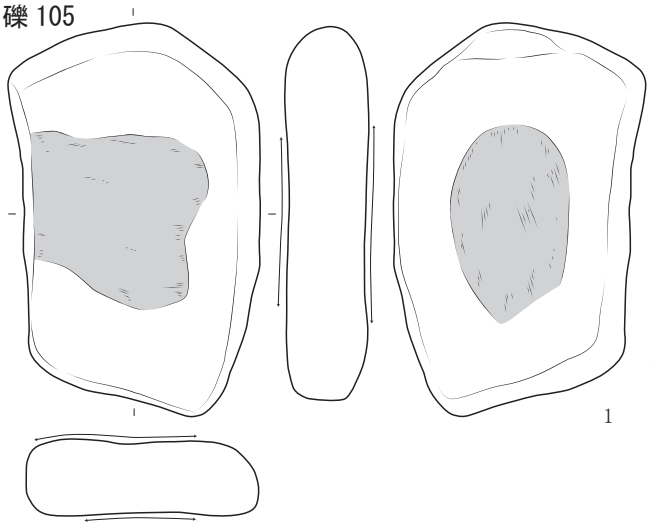


図 167　環状列石出土石器（１）

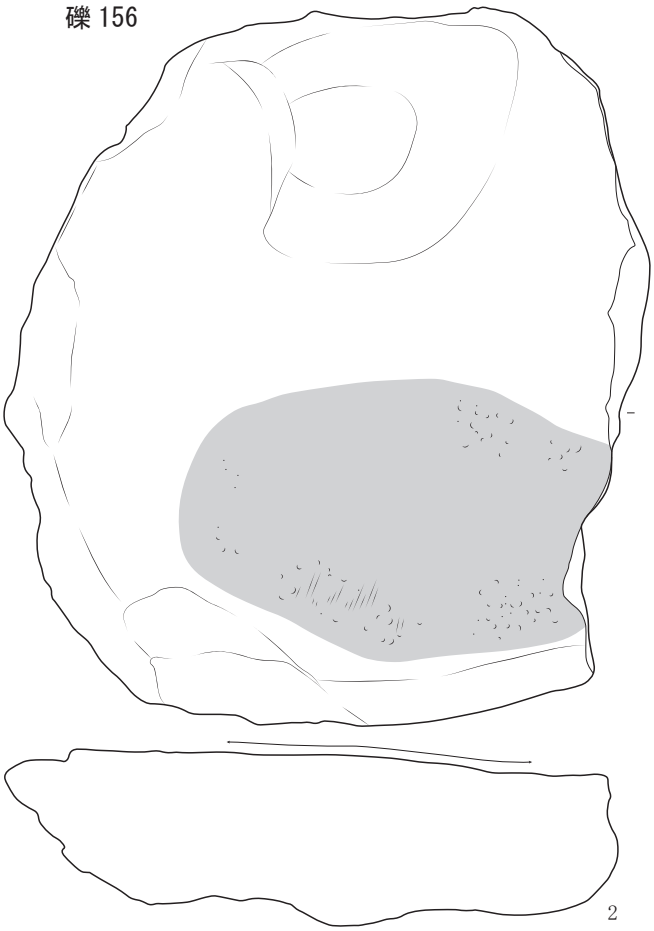
張出部３

礫 105



1

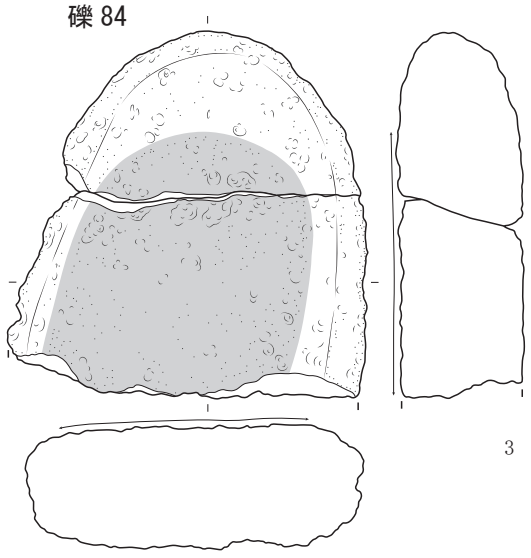
礫 156



2

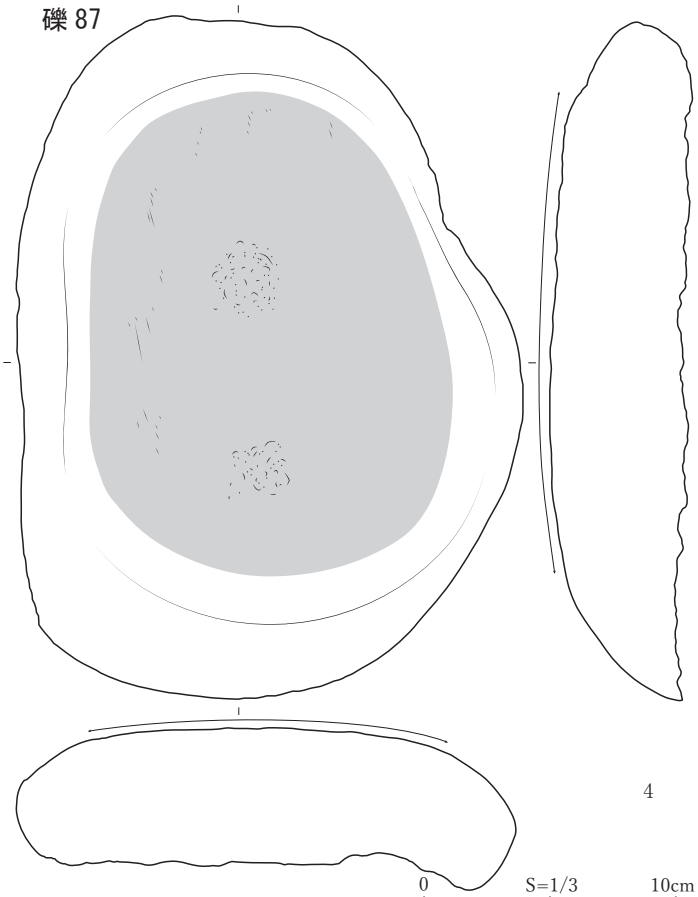
構成礫

礫 84



3

礫 87



4

0 S=1/3 10cm

図 168　環状列石出土石器（２）

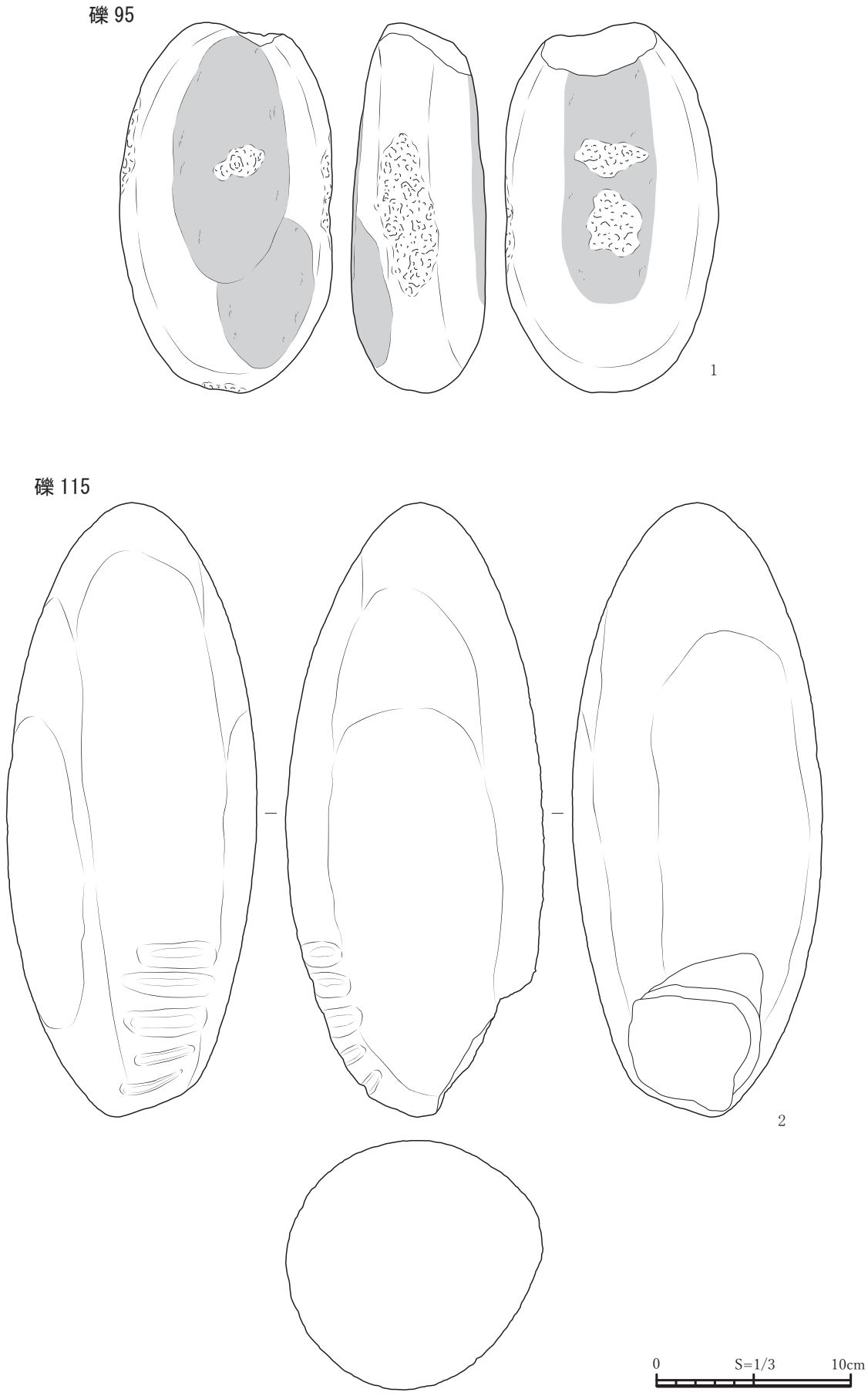


図 169　環状列石出土石器（３）

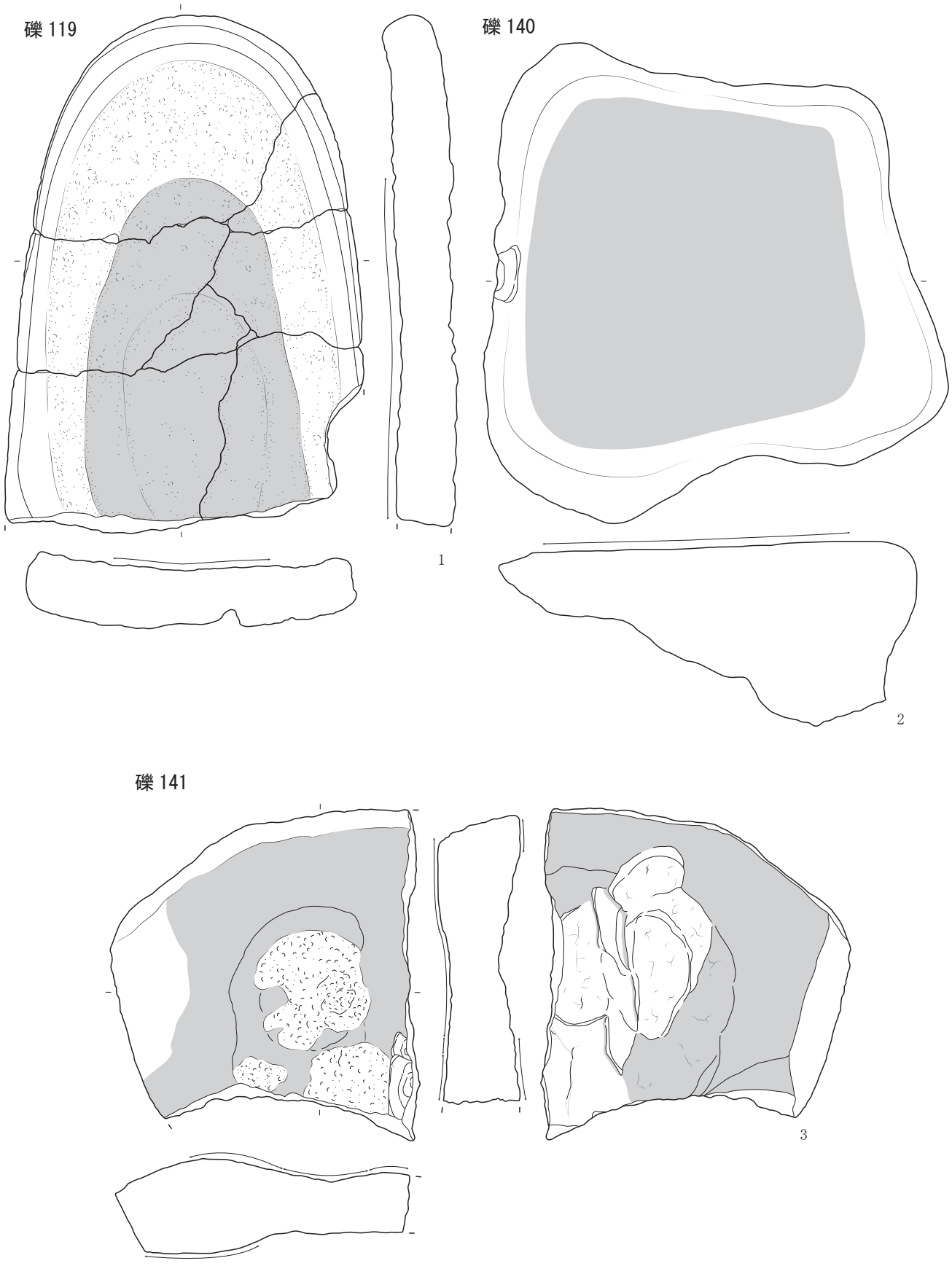


図 170　環状列石出土石器（４）

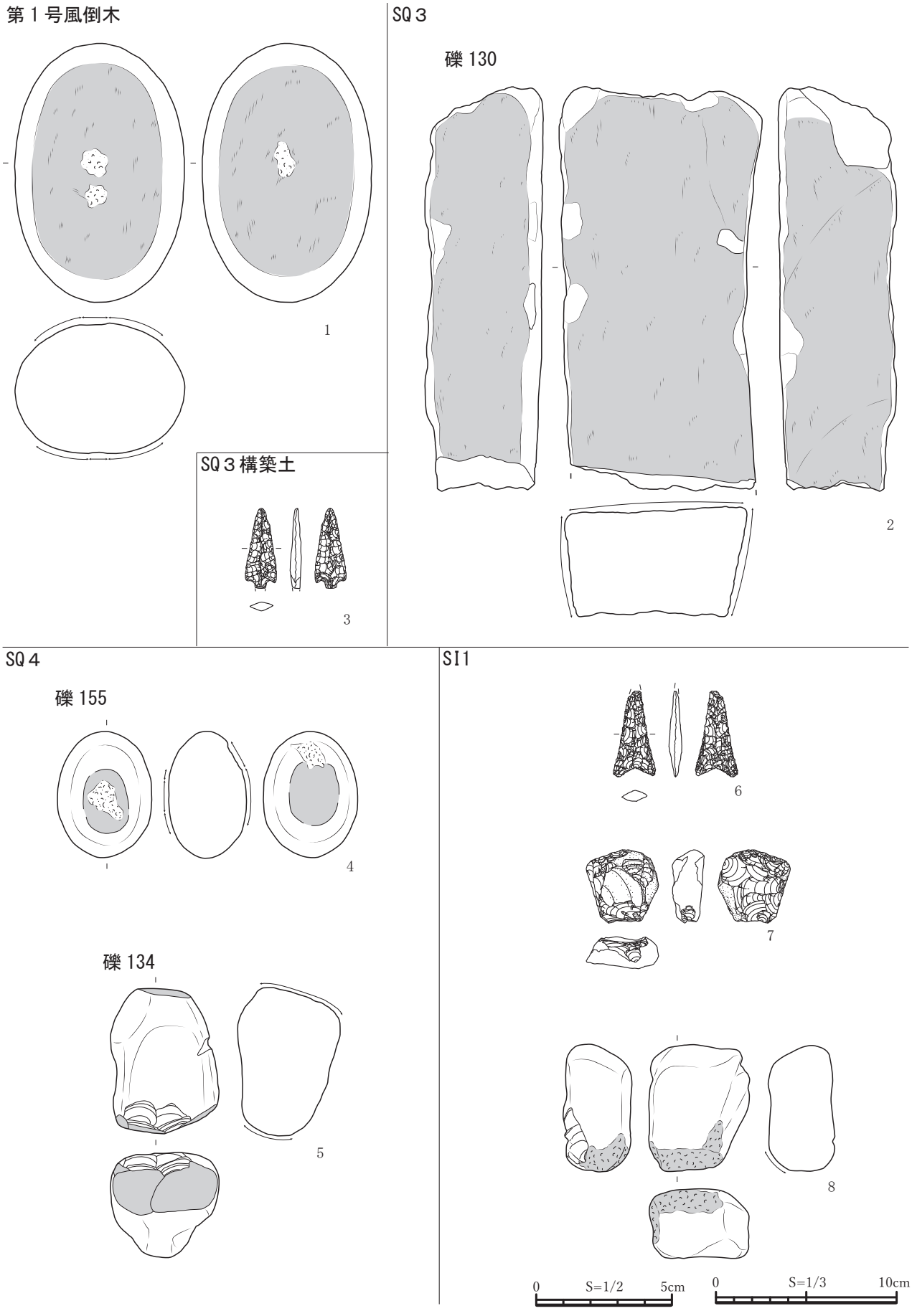


図 171　環状列石出土石器（５）・配石遺構出土石器

SI2

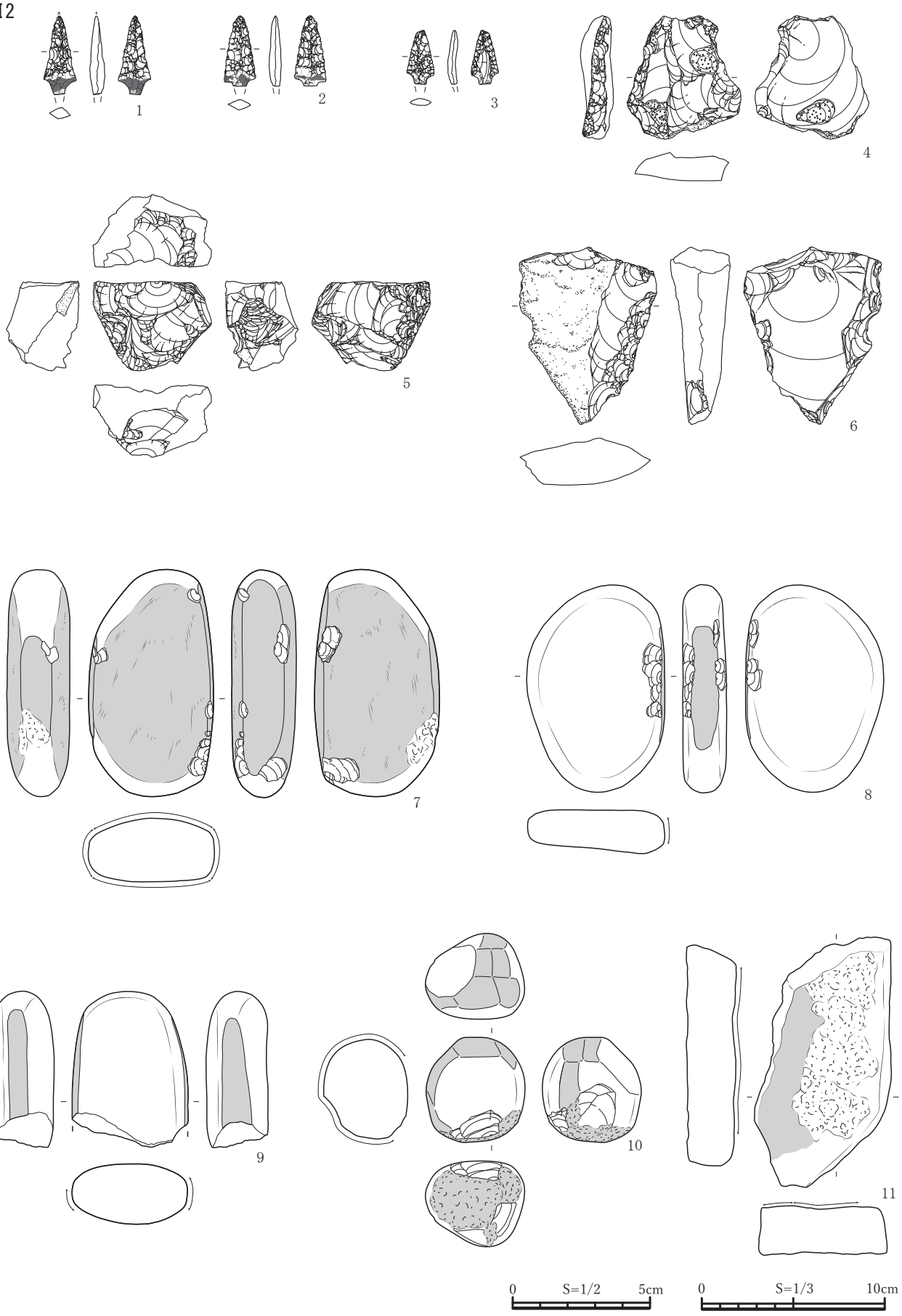


図 172　竪穴建物跡出土石器（１）

図 173　竪穴建物跡出土石器（２）

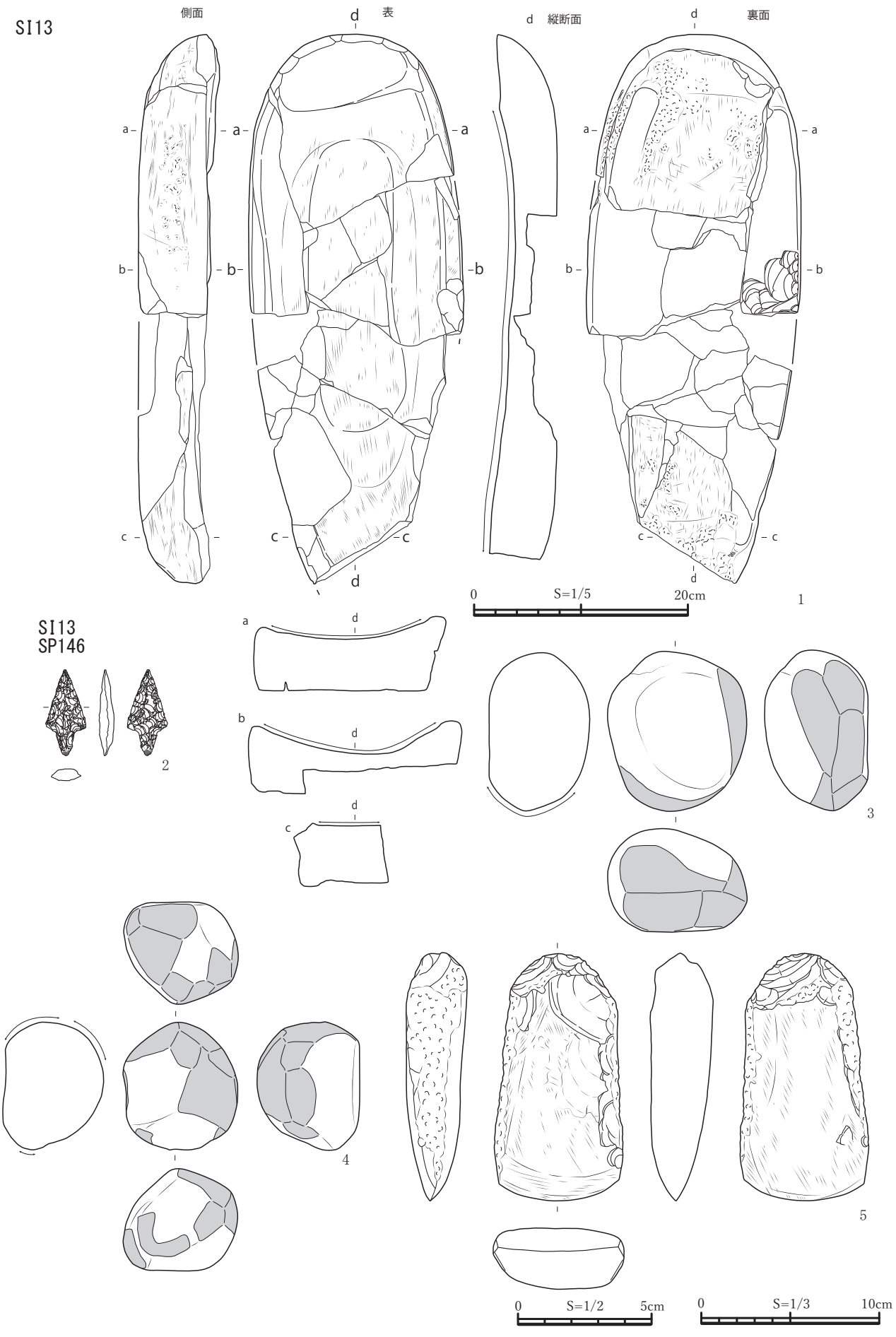


図 174　竪穴建物跡出土石器（３）

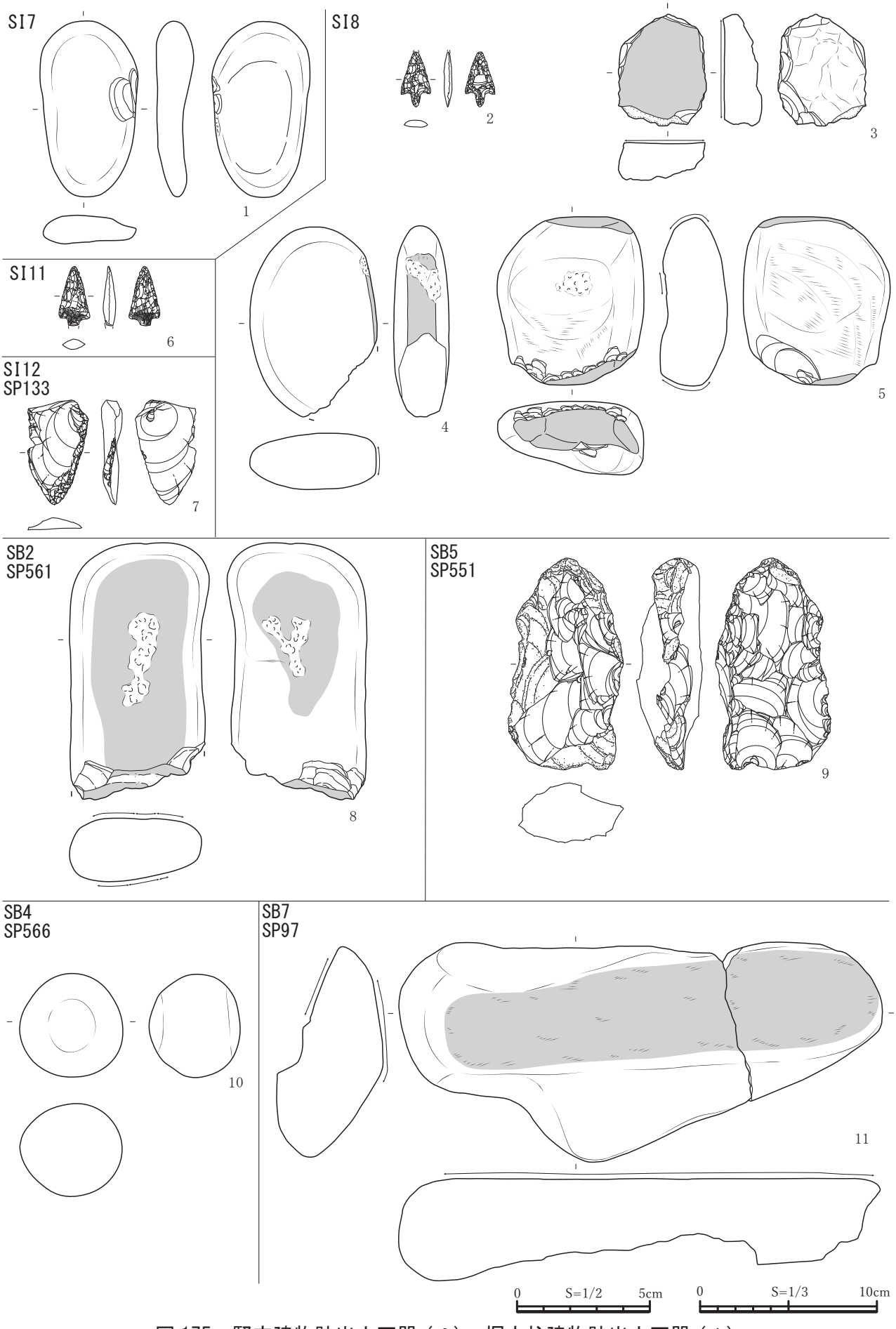


図 175　竪穴建物跡出土石器（４）・掘立柱建物跡出土石器（１）

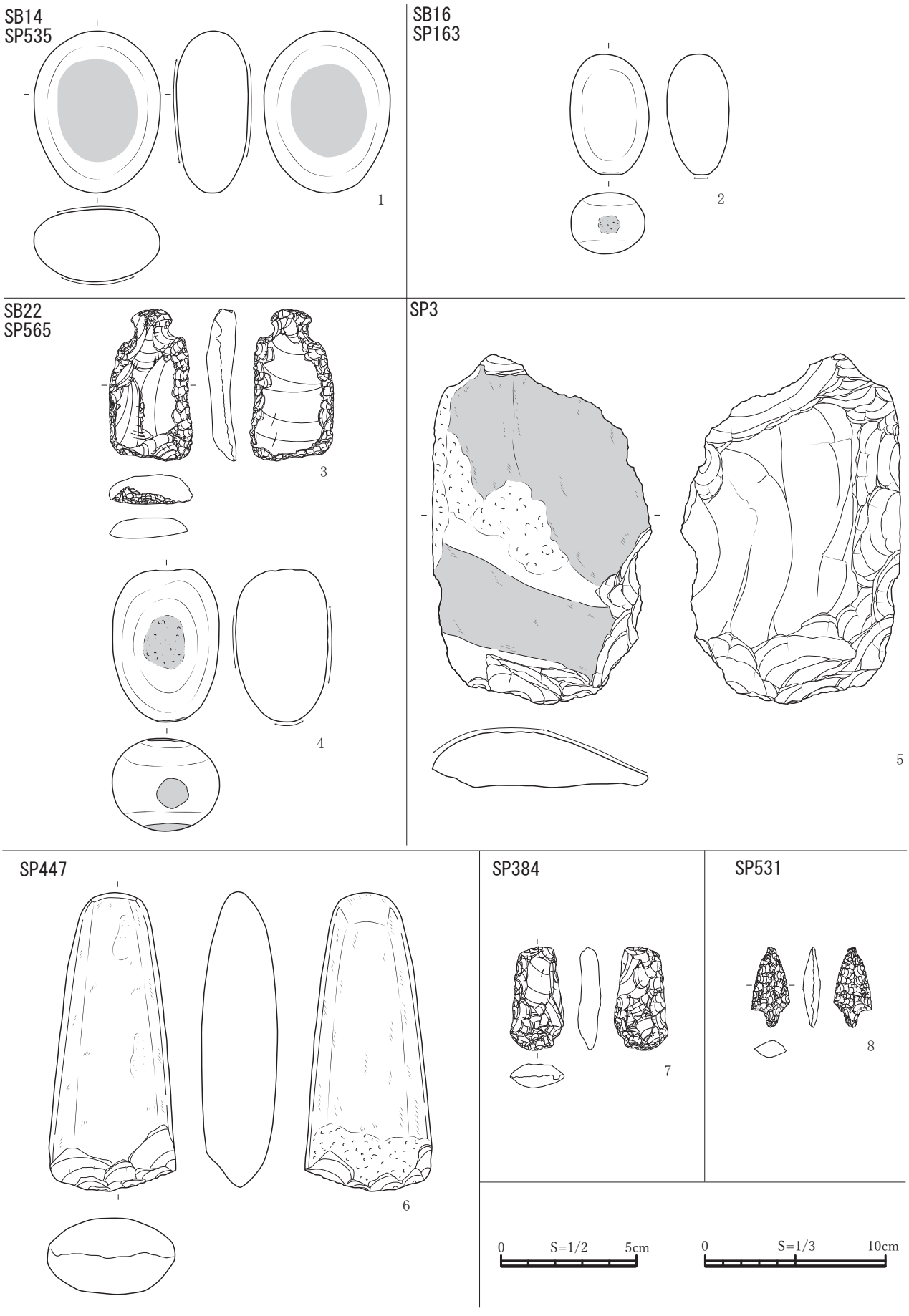


図 176　掘立柱建物跡出土石器（２）・ピット出土石器（１）

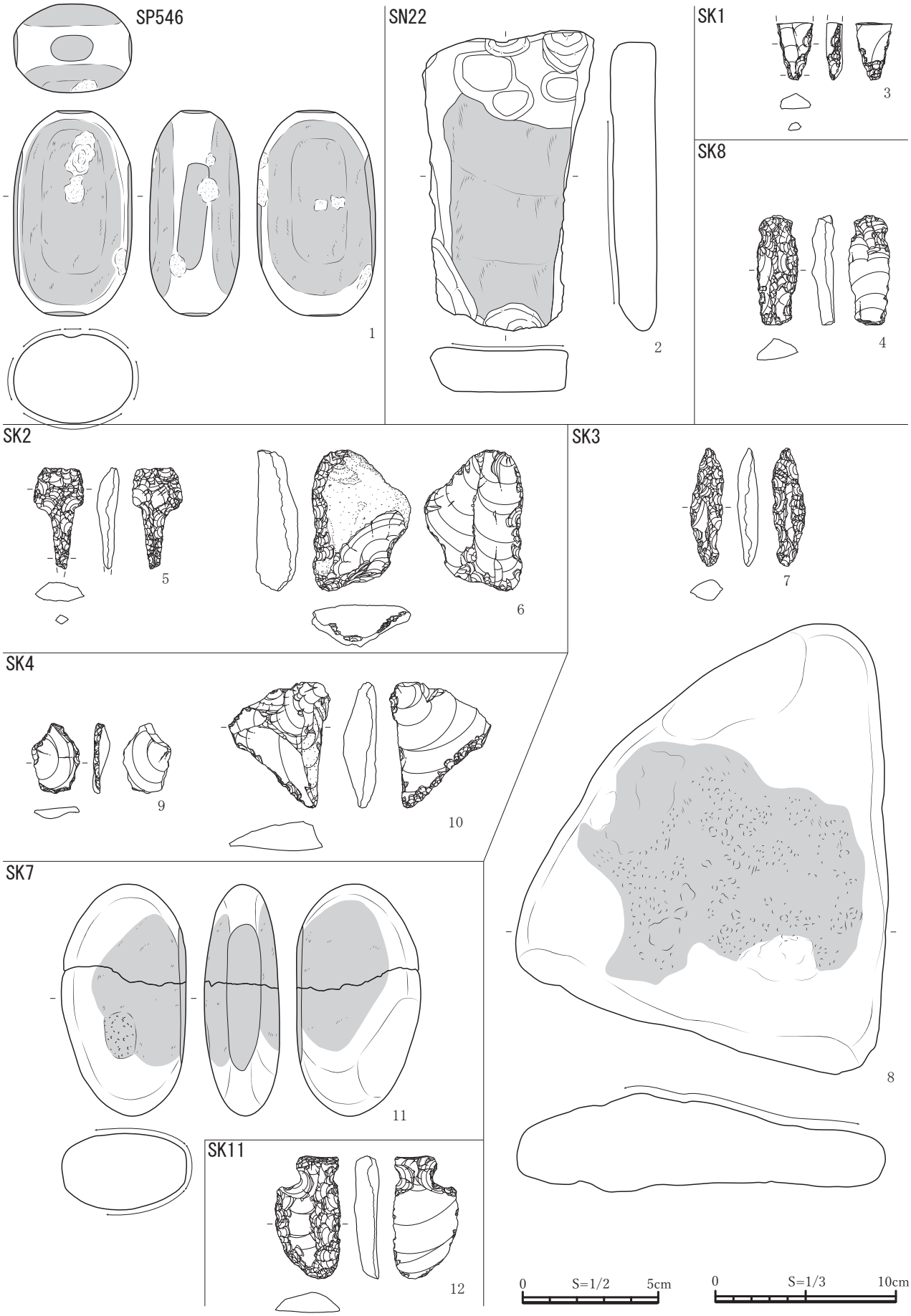


図 177　ピット出土石器（２）・焼土遺構出土石器・土坑出土石器（１）

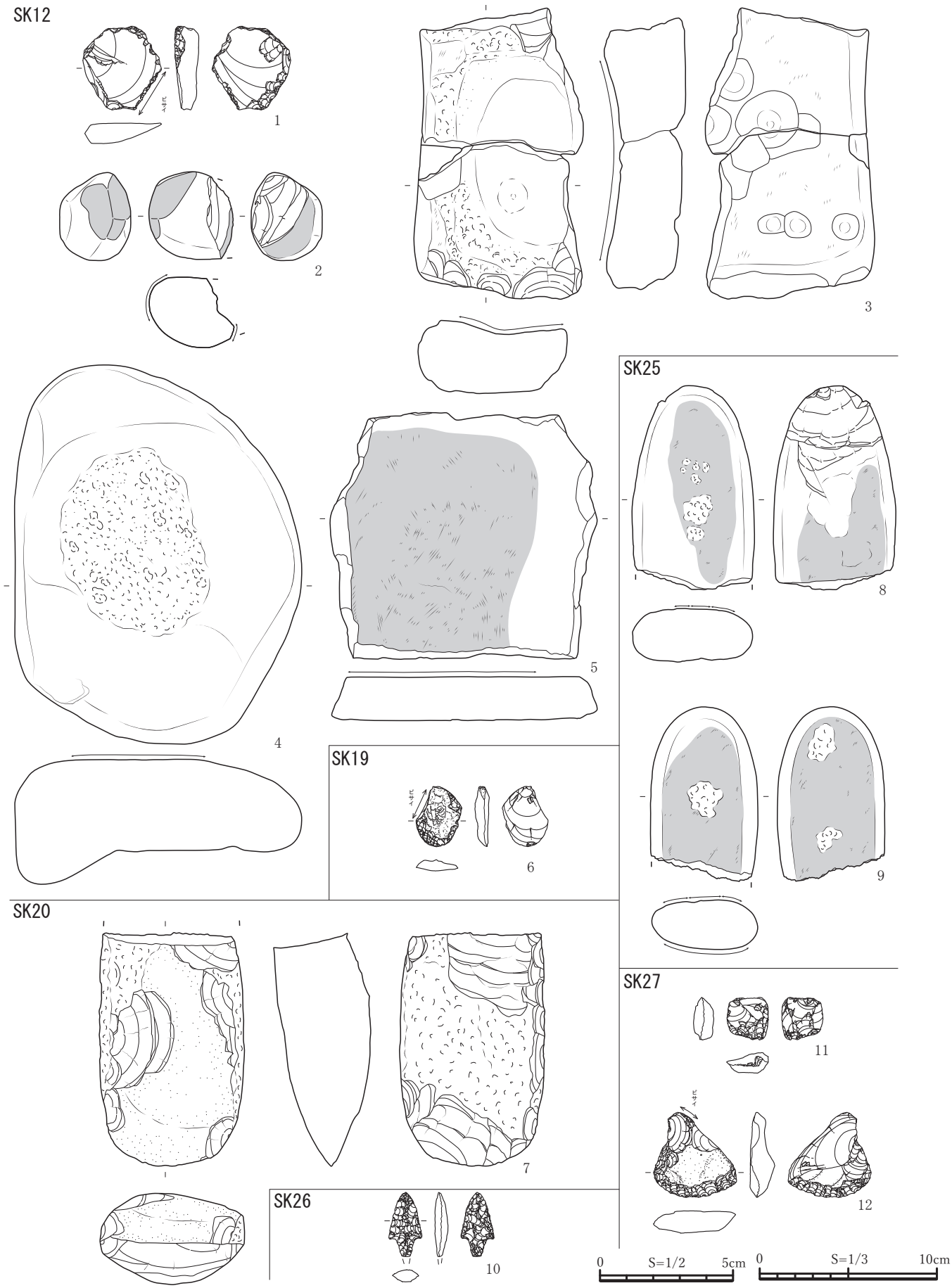


図 178　土坑出土石器（２）

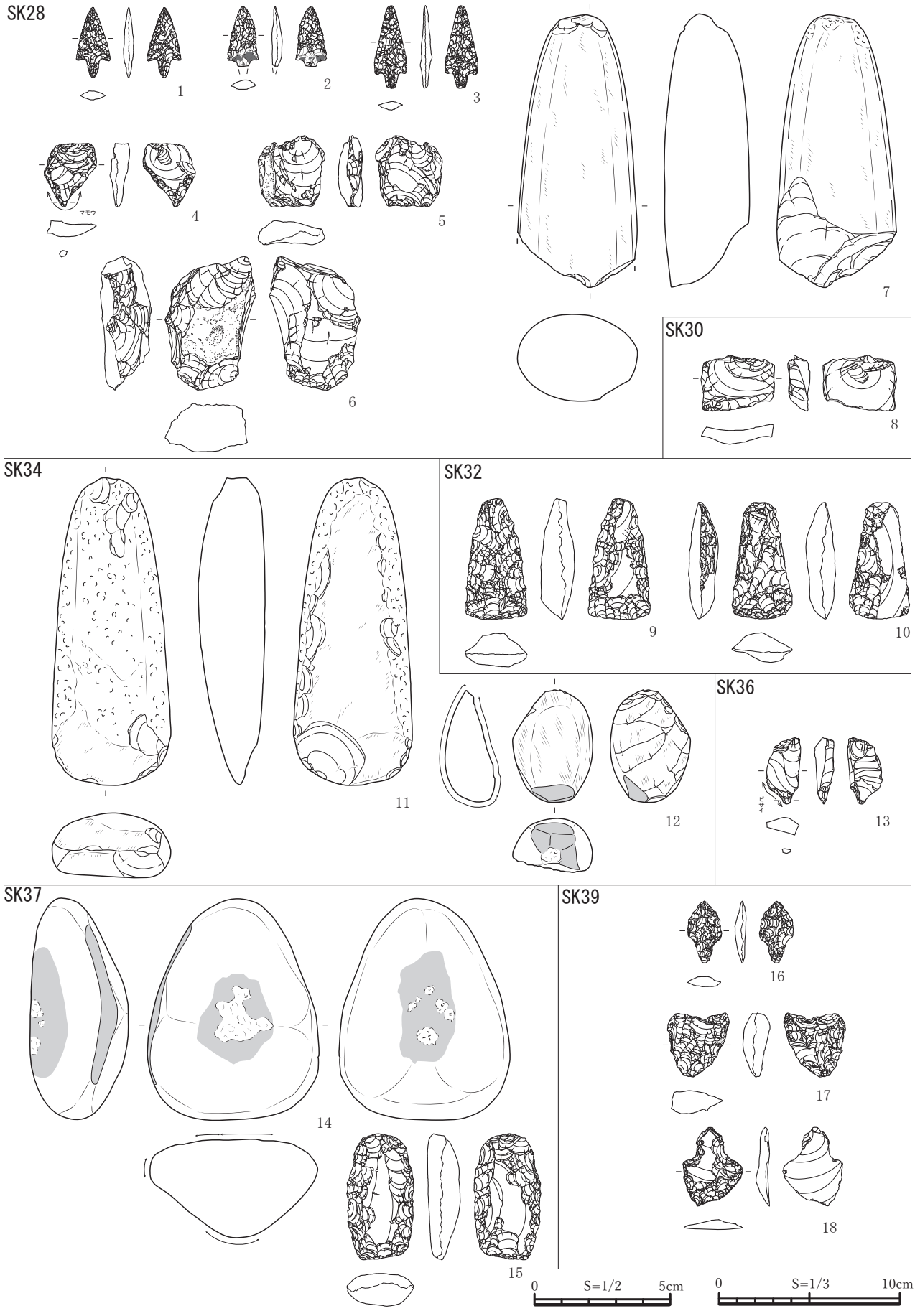


図 179　土坑出土石器（３）

SK40

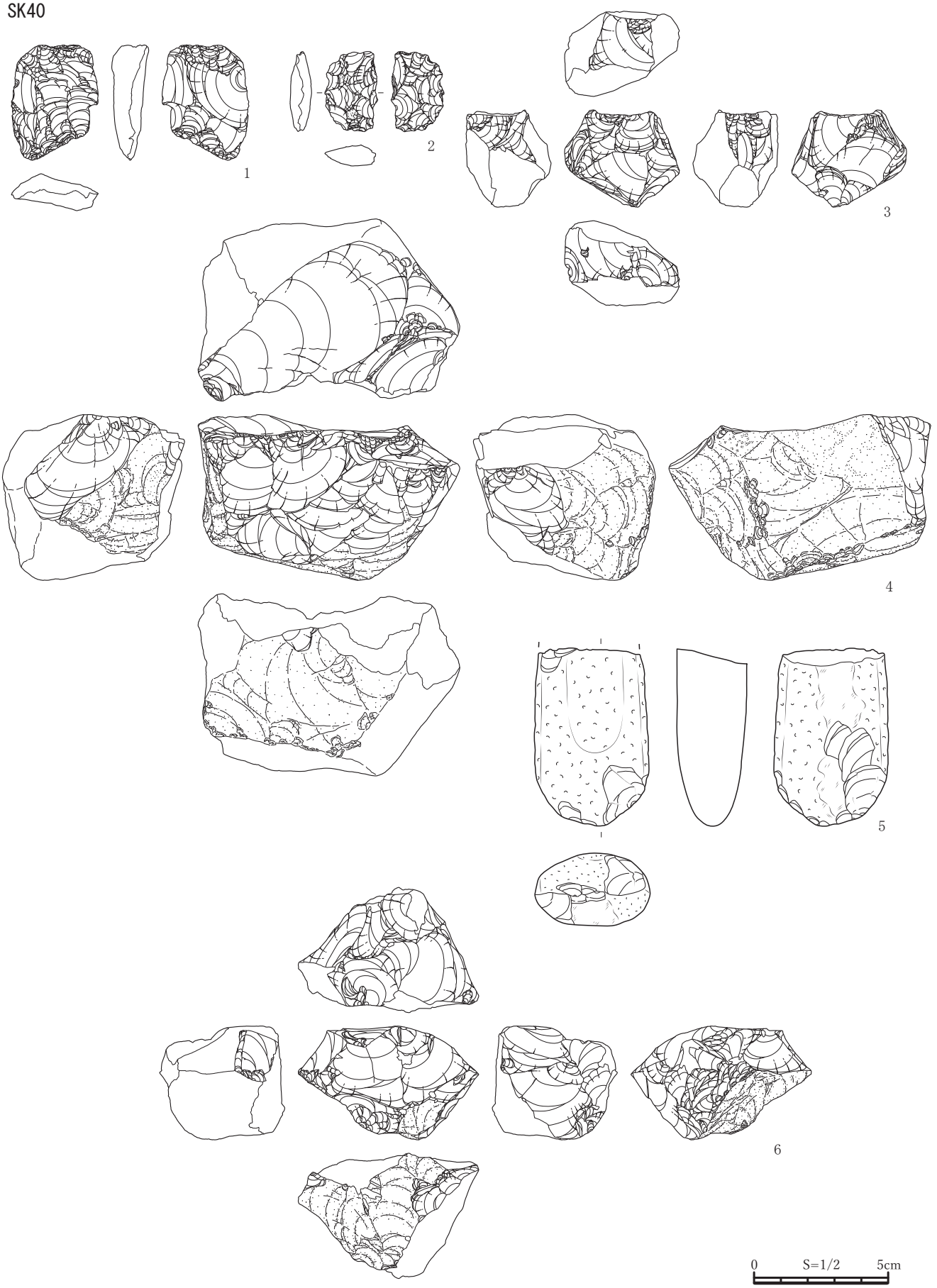


図 180　土坑出土石器（４）

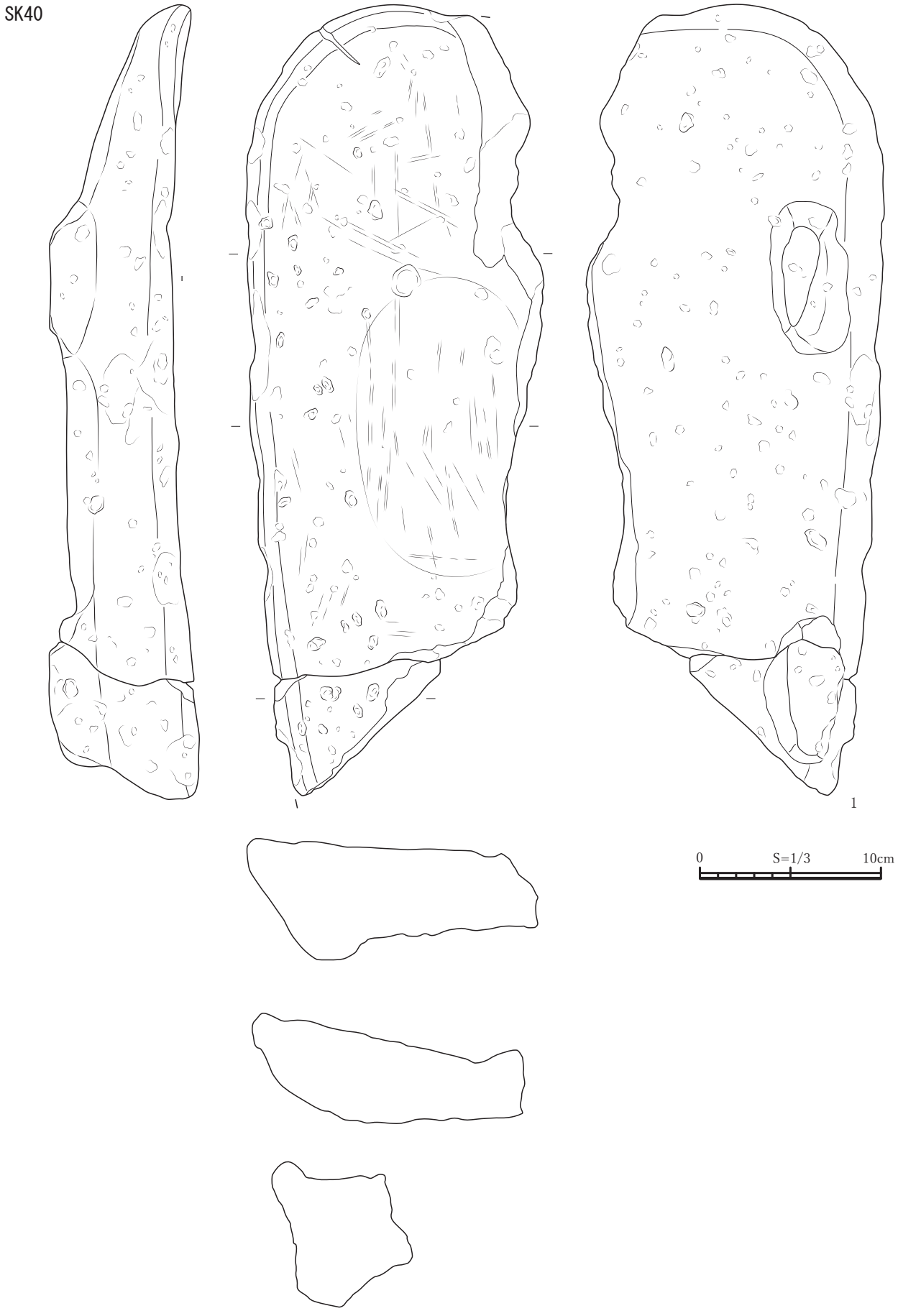


図 181　土坑出土石器（５）

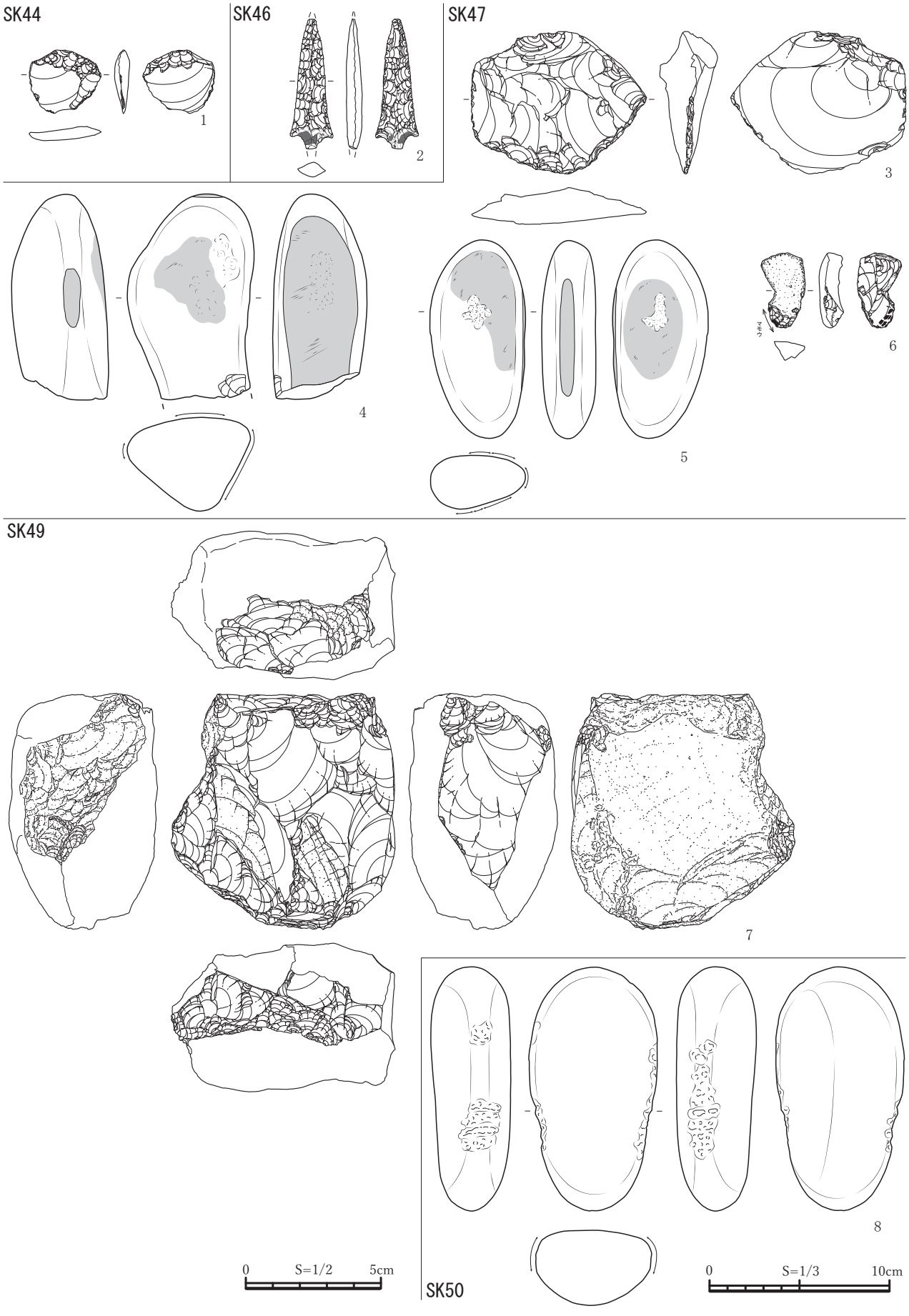


図 182　土坑出土石器（6）

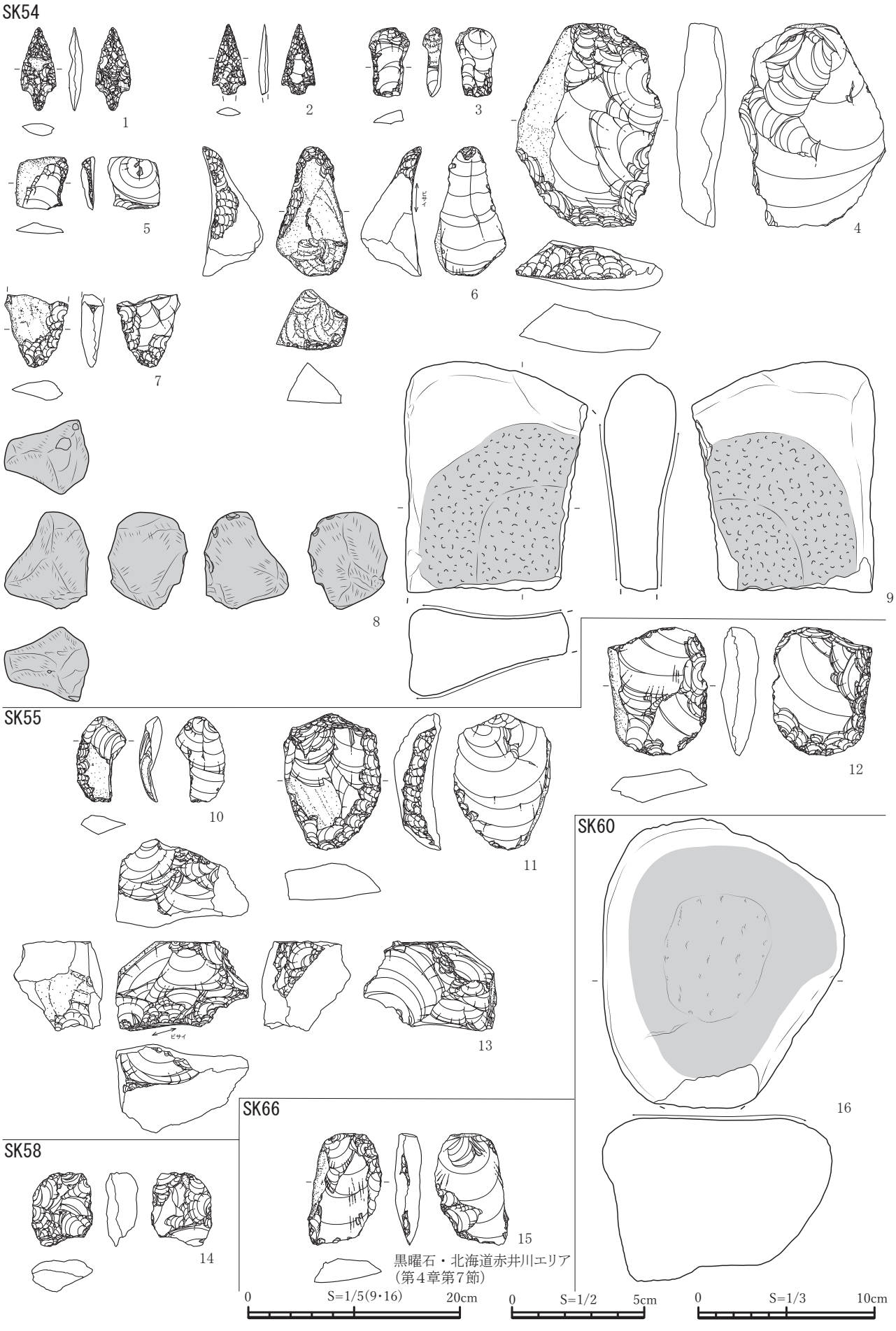


図 183　土坑出土石器（７）

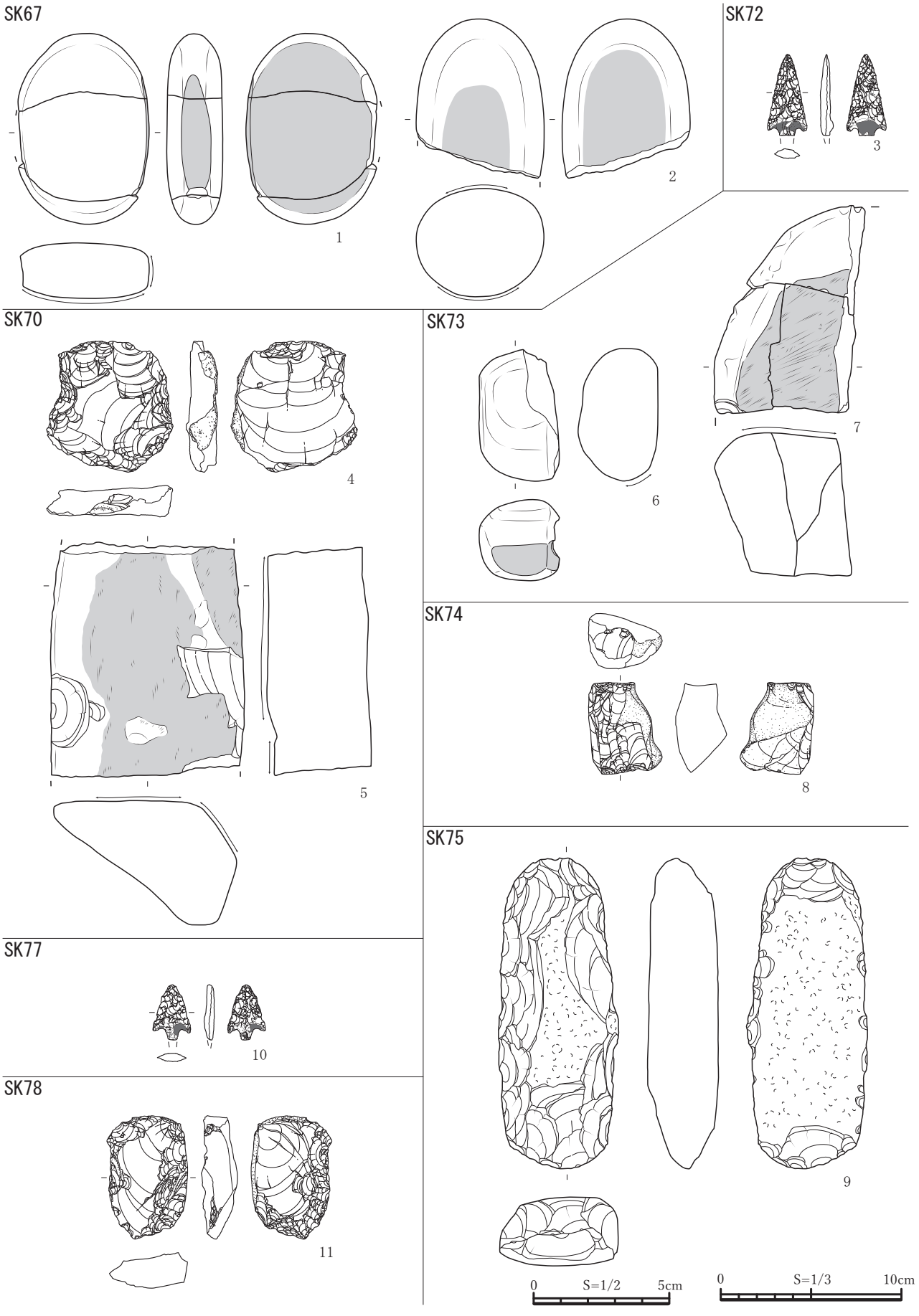


図 184　土坑出土石器（８）

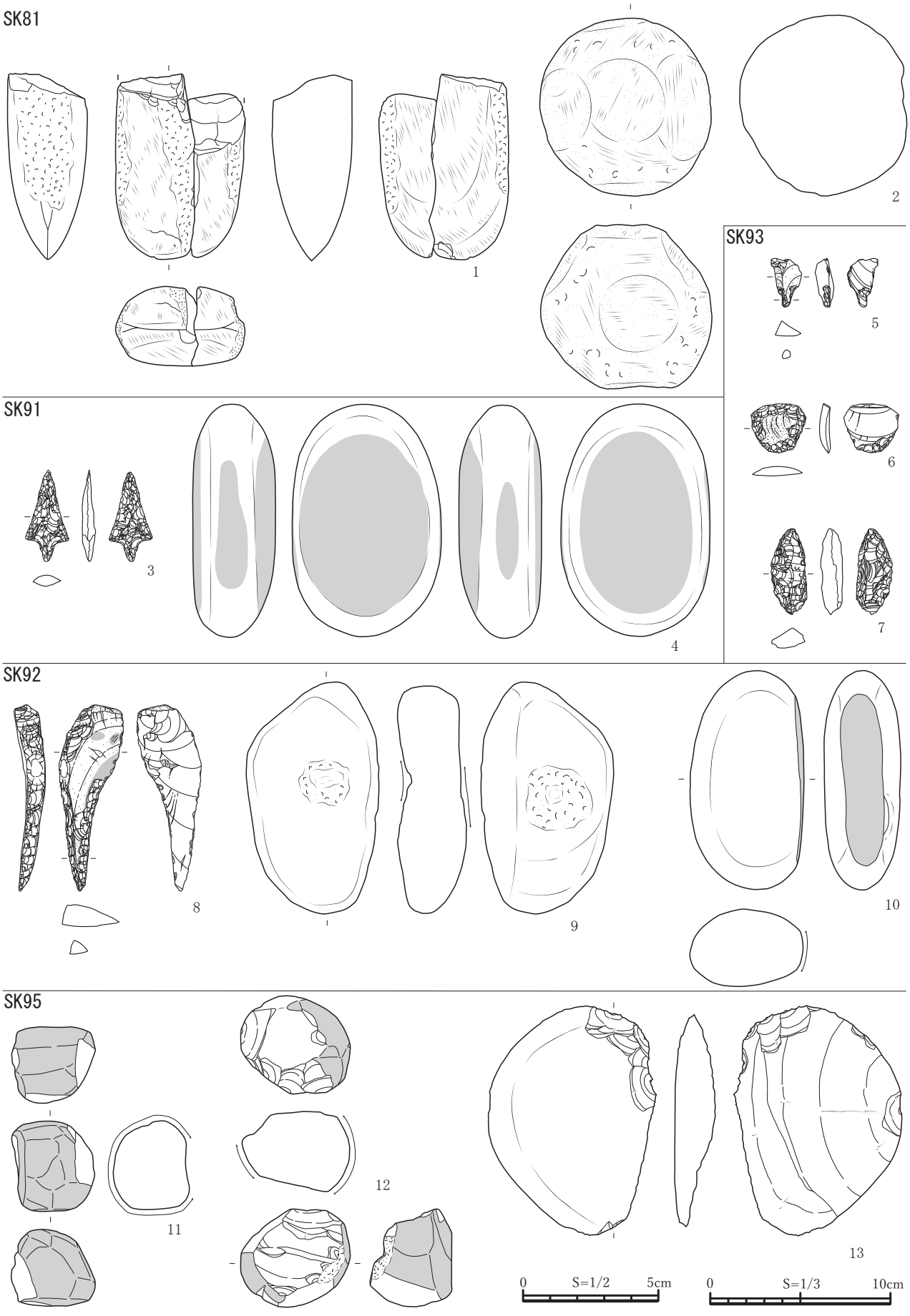


図 185　土坑出土石器（９）

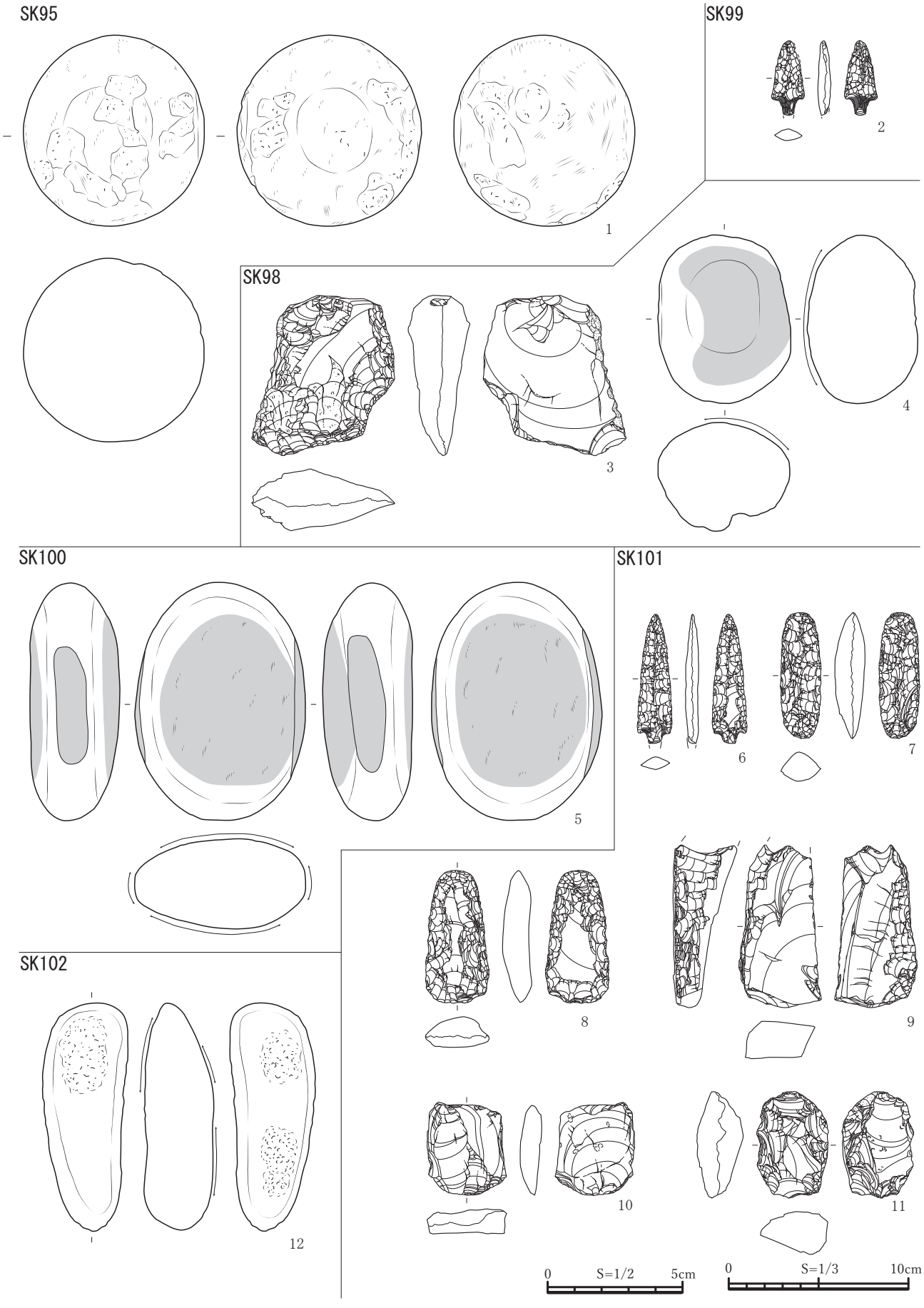


図 186　土坑出土石器 (10)

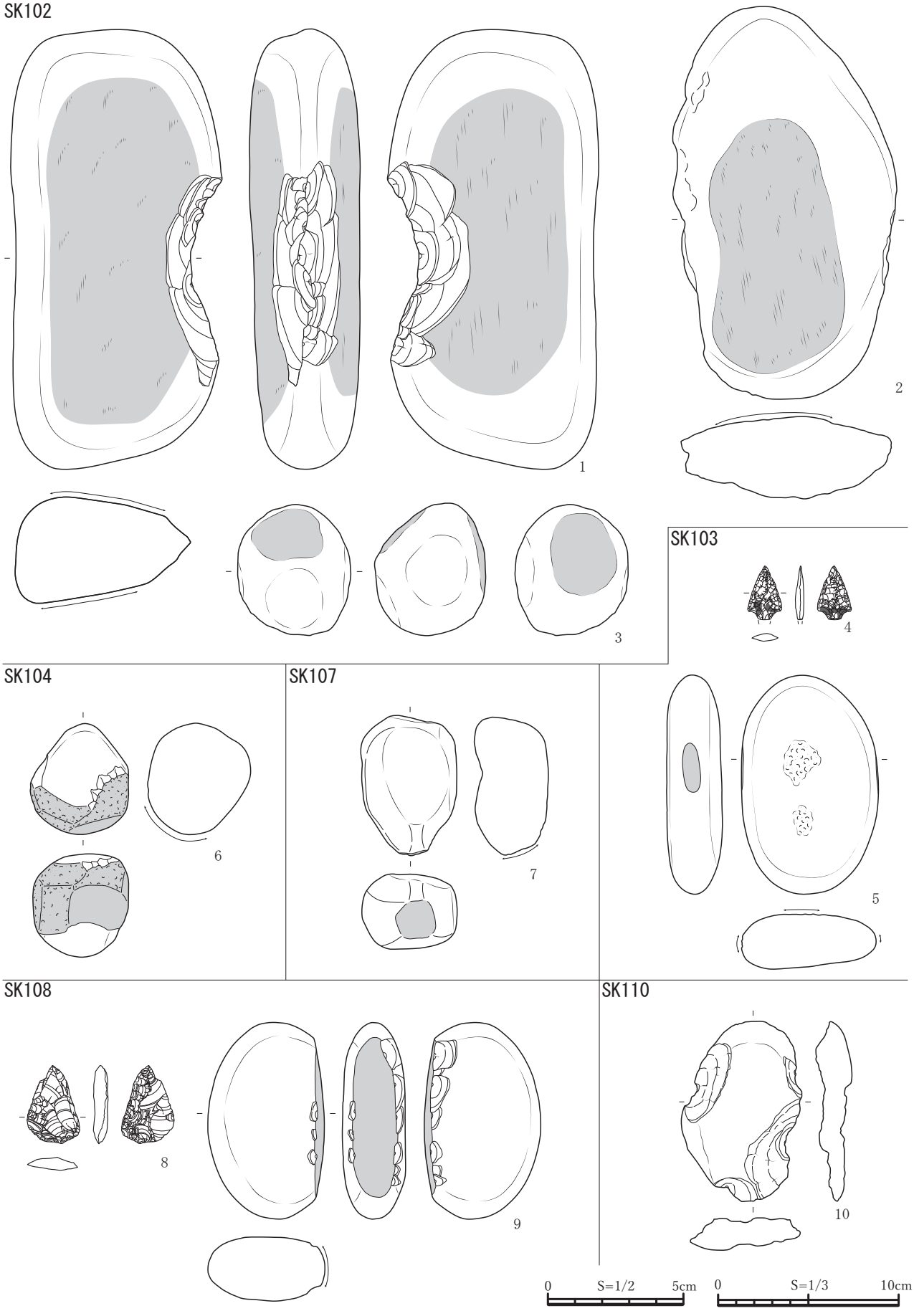


図 187　土坑出土石器 (11)

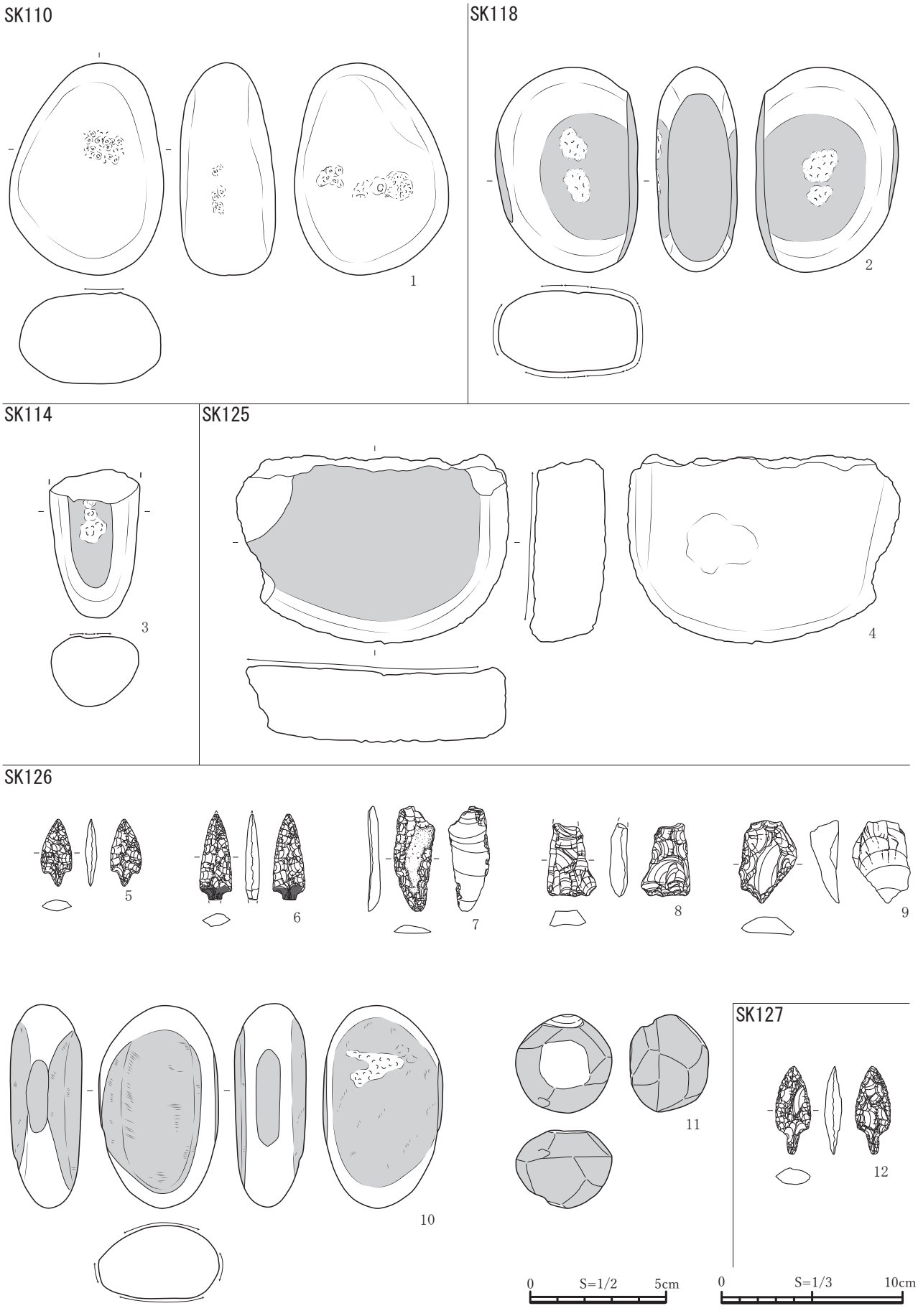


図 188　土坑出土石器 (12)

SK127

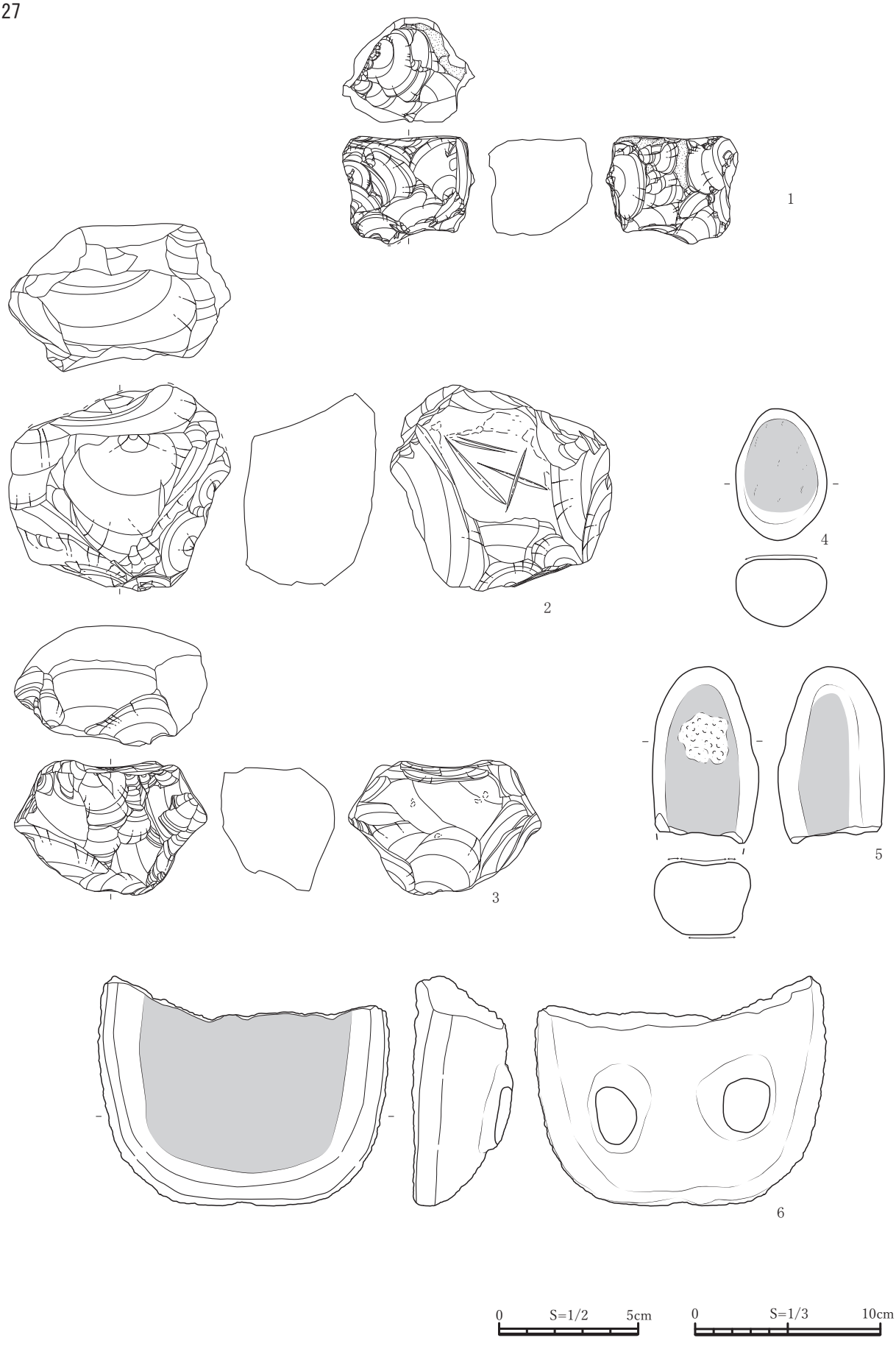
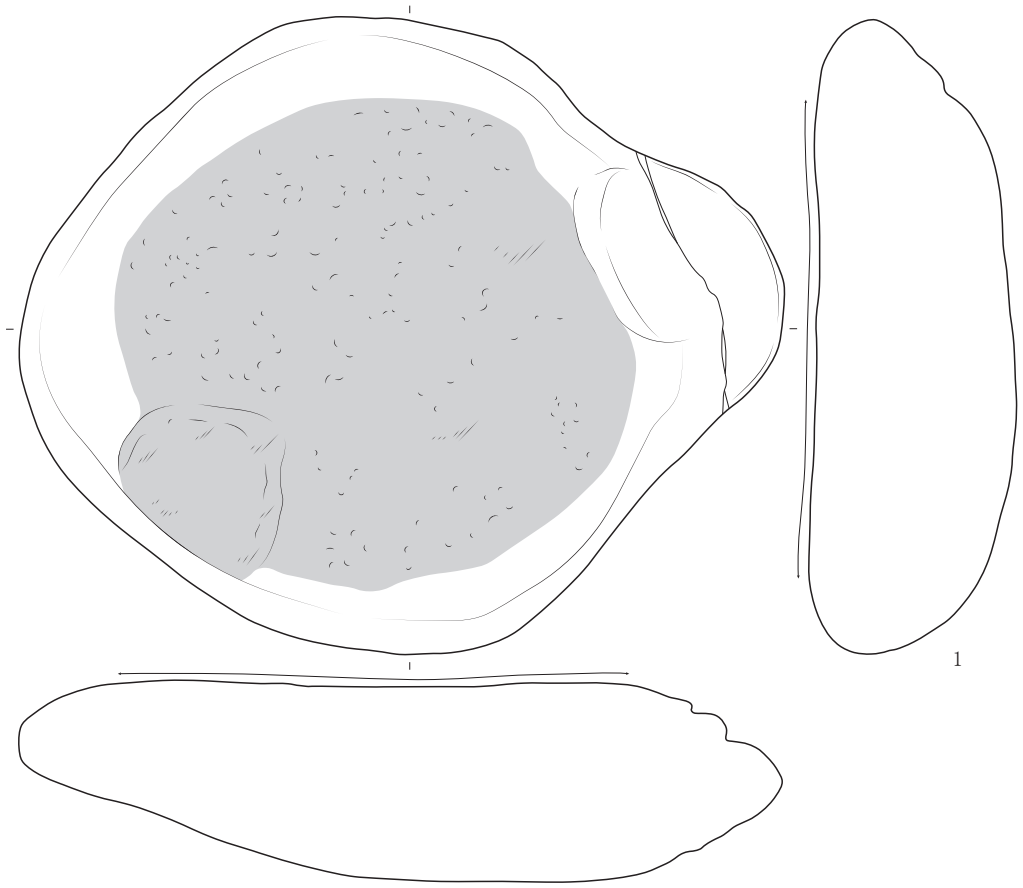
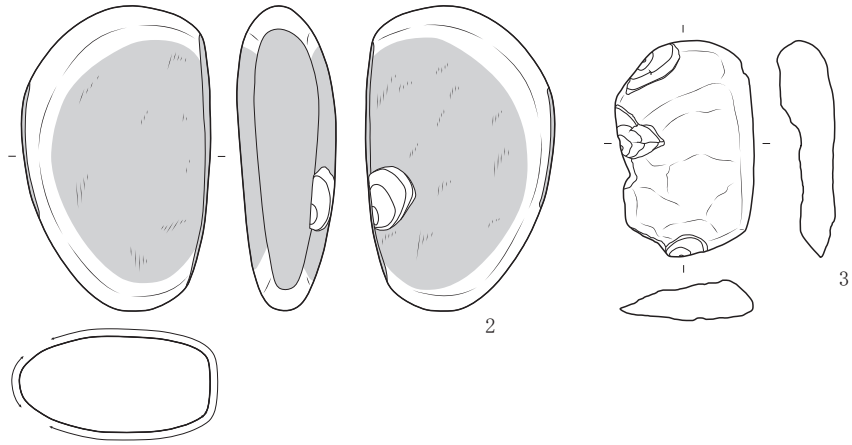


図 189　土坑出土石器 (13)

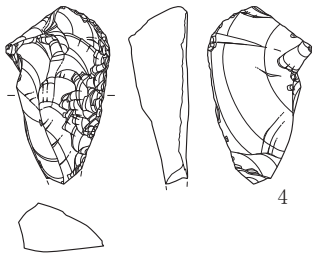
SK128



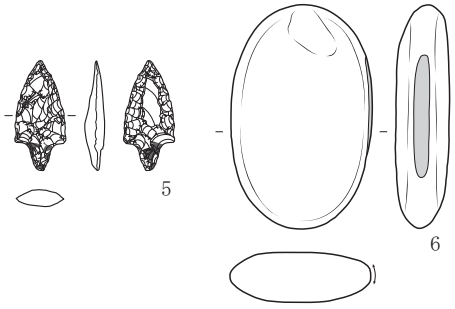
SK129



SK130



SK131



SK132

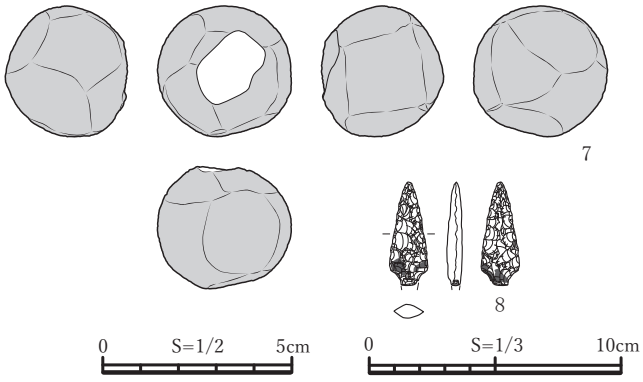


図 190　土坑出土石器 (14)

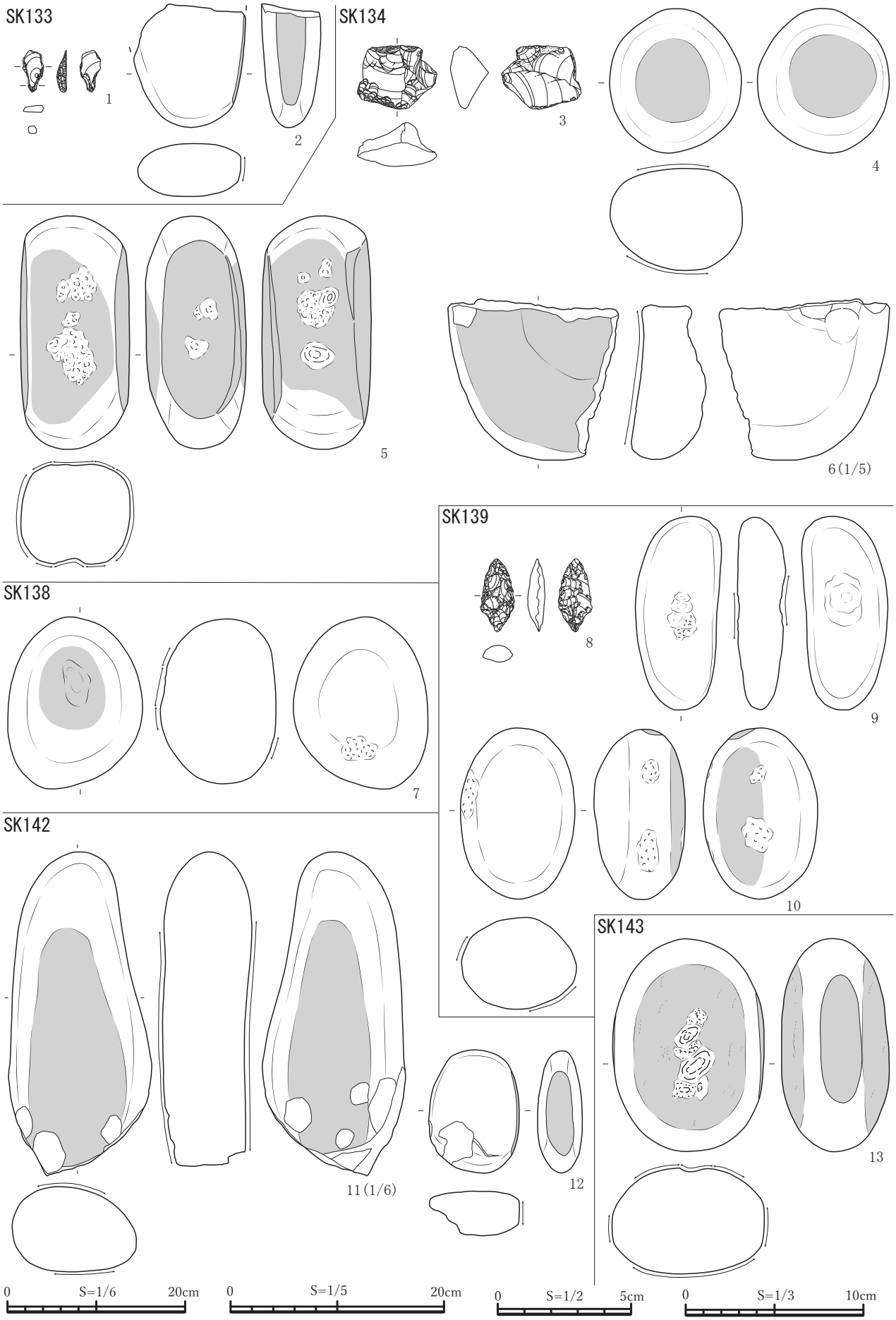


図 191　土坑出土石器 (15)

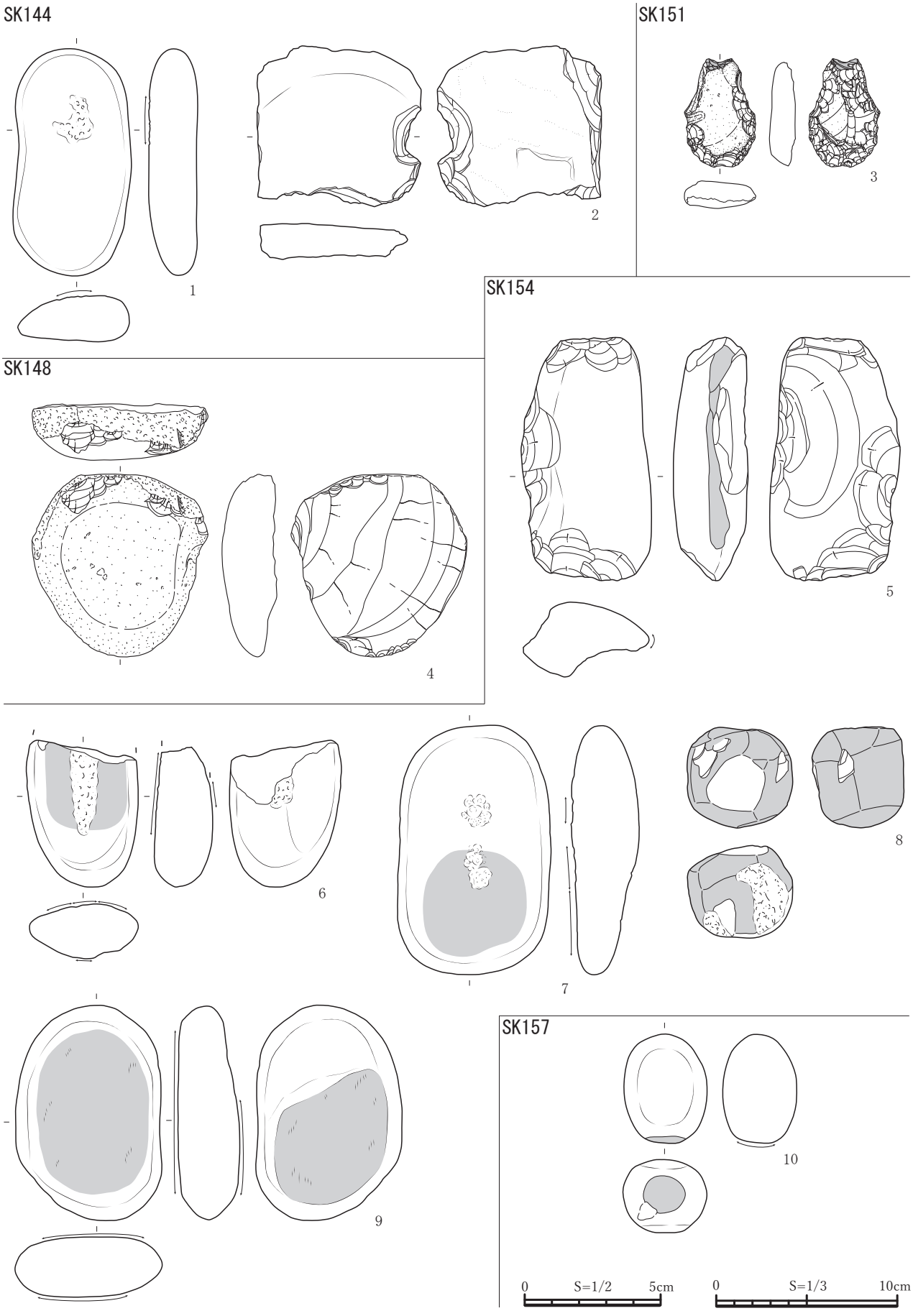


図 192　土坑出土石器 (16)

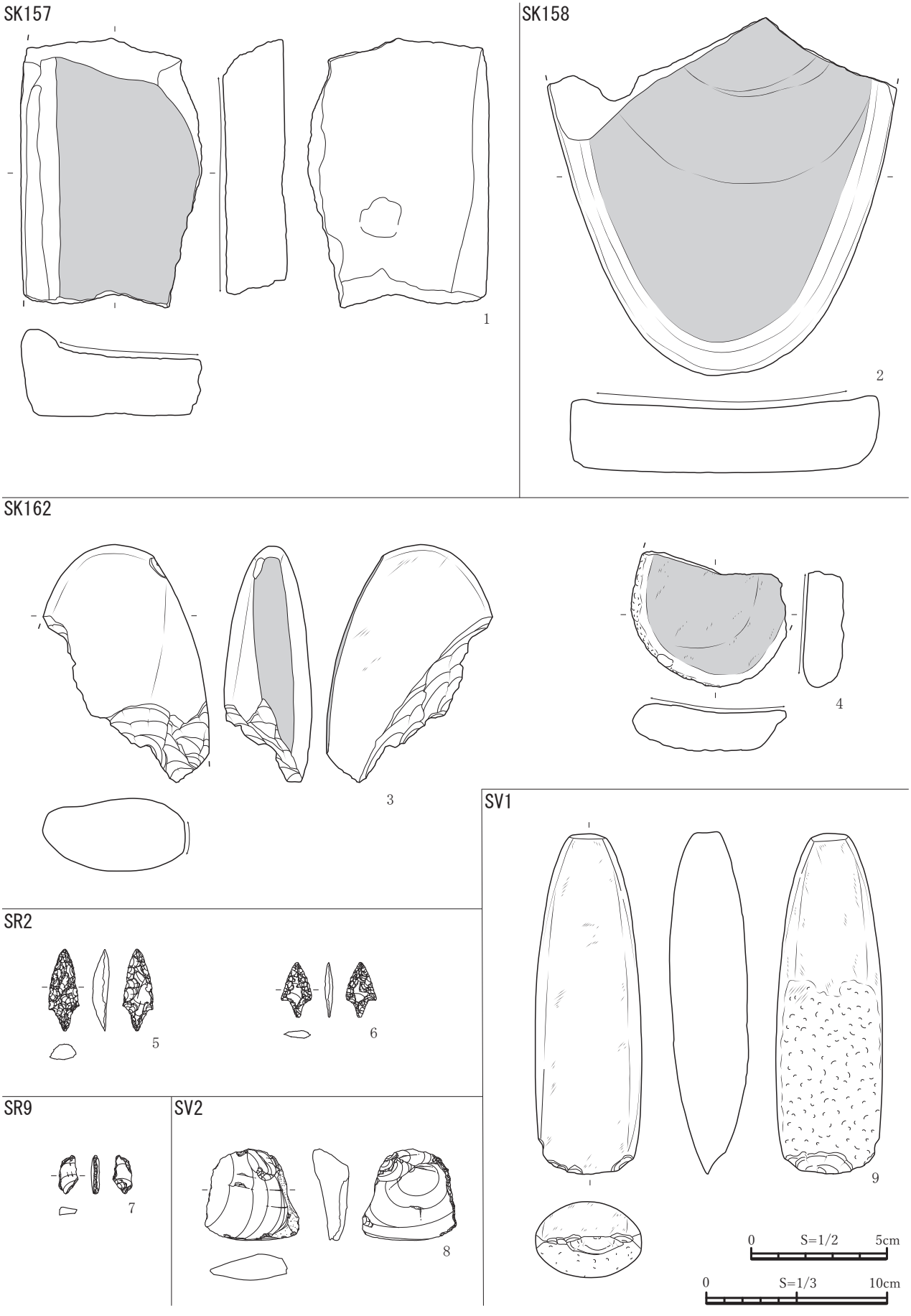


図 193　土坑出土石器 (17)・土器埋設遺構出土石器・溝状土坑出土石器

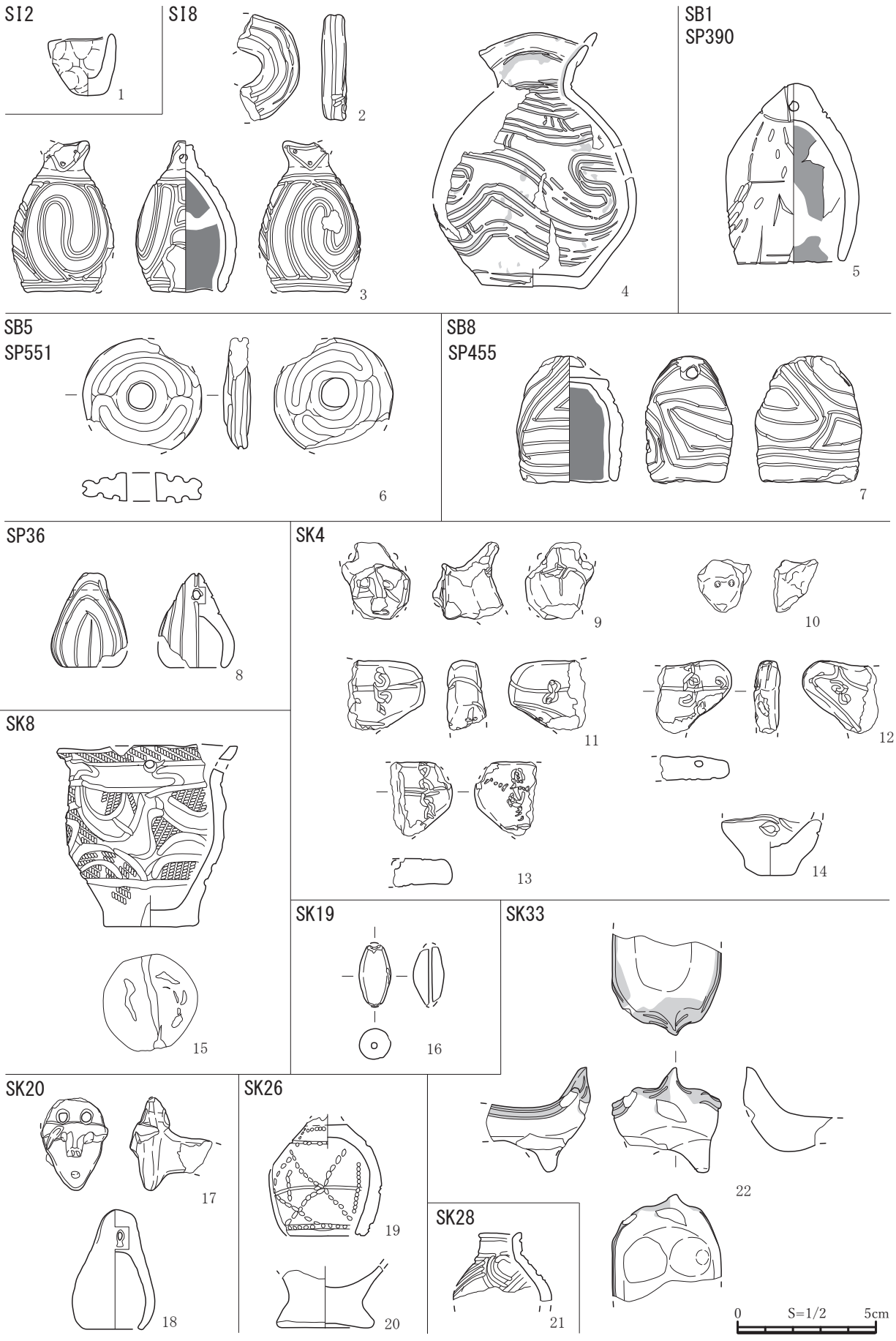


図 194　遺構内出土土製品（１）

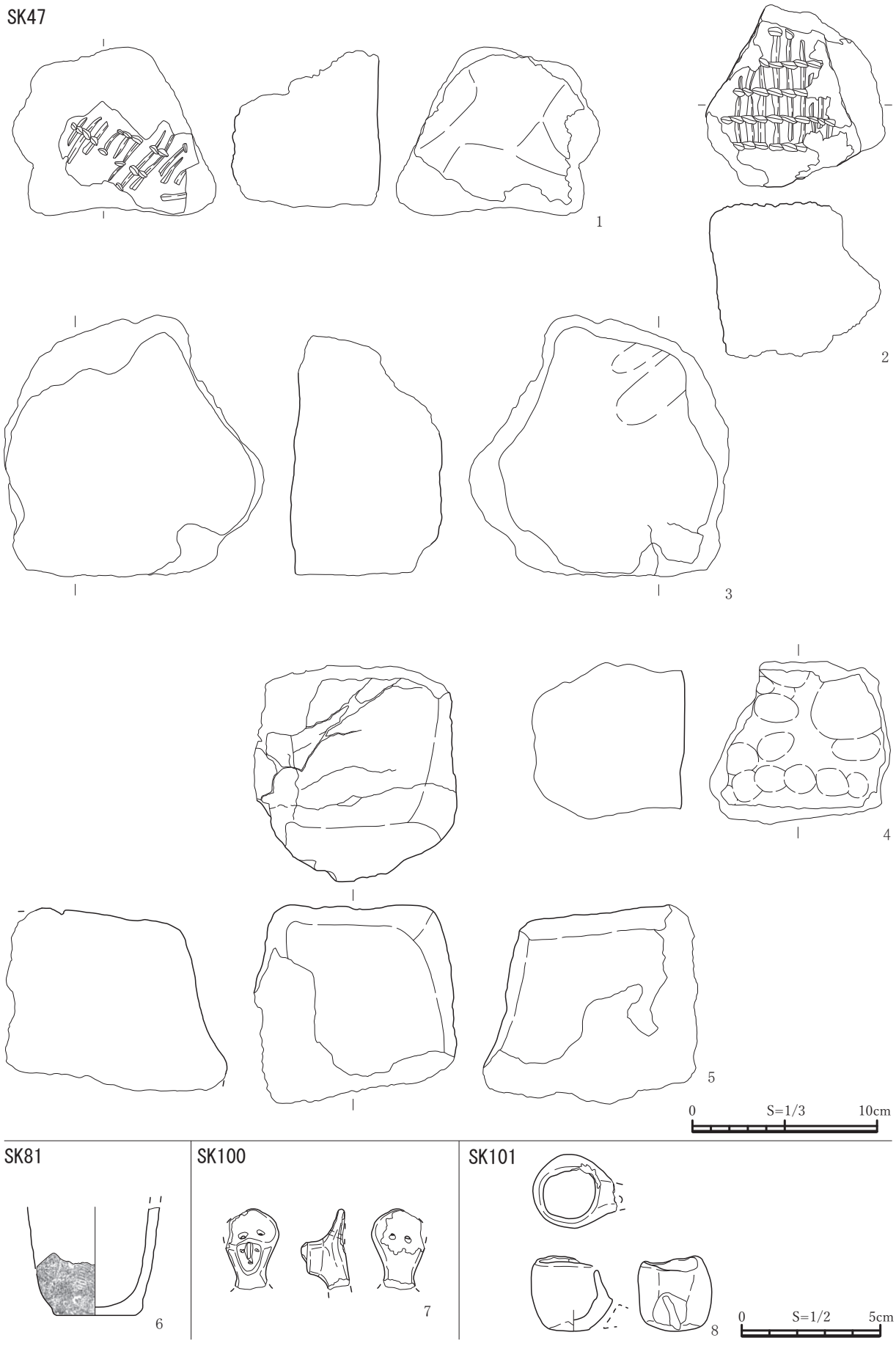
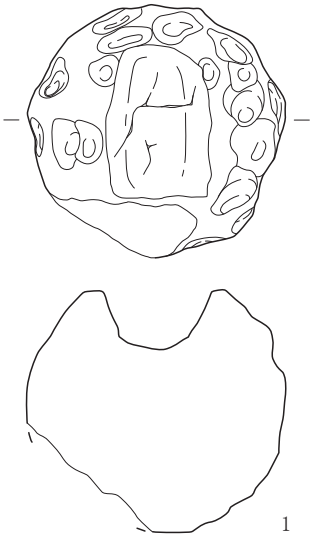
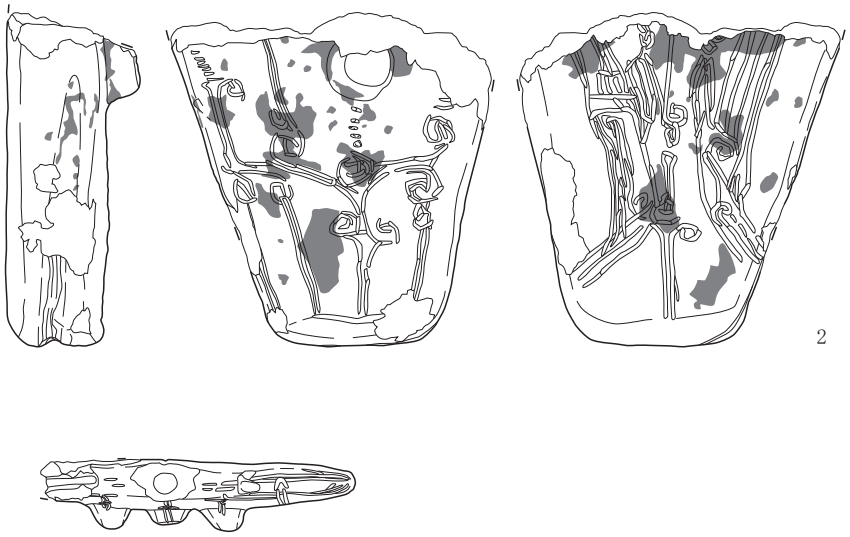


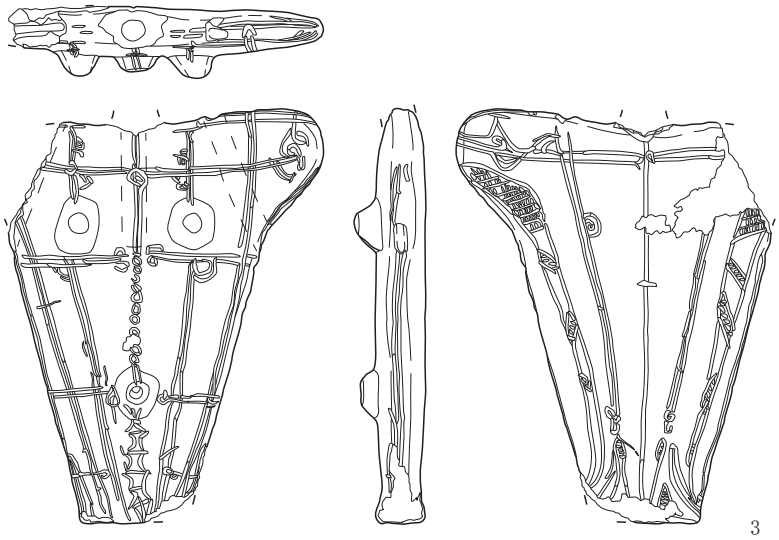
図 195　遺構内出土土製品（２）

SK101

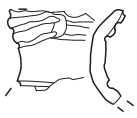


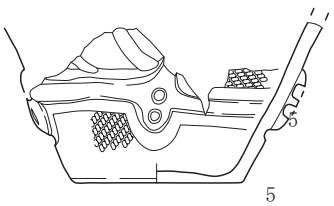
SK107

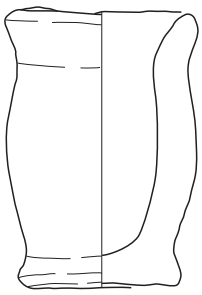


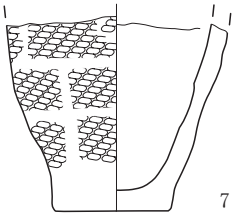


SK108

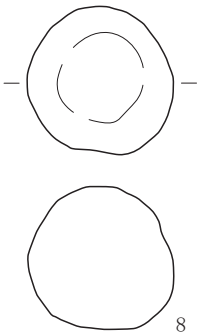




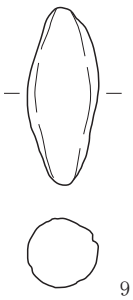


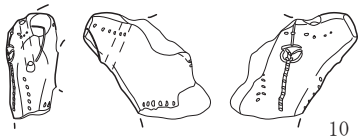


SK126

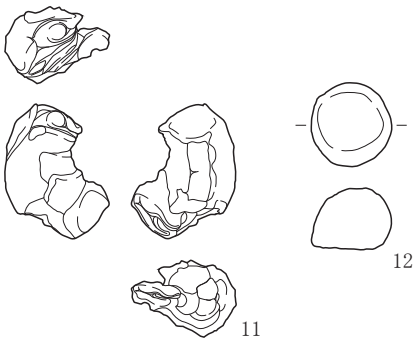


SK132

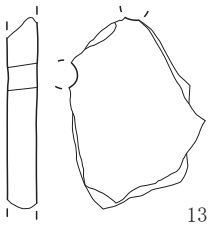




SK133



SK145



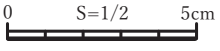


図 196　遺構内出土土製品（３）

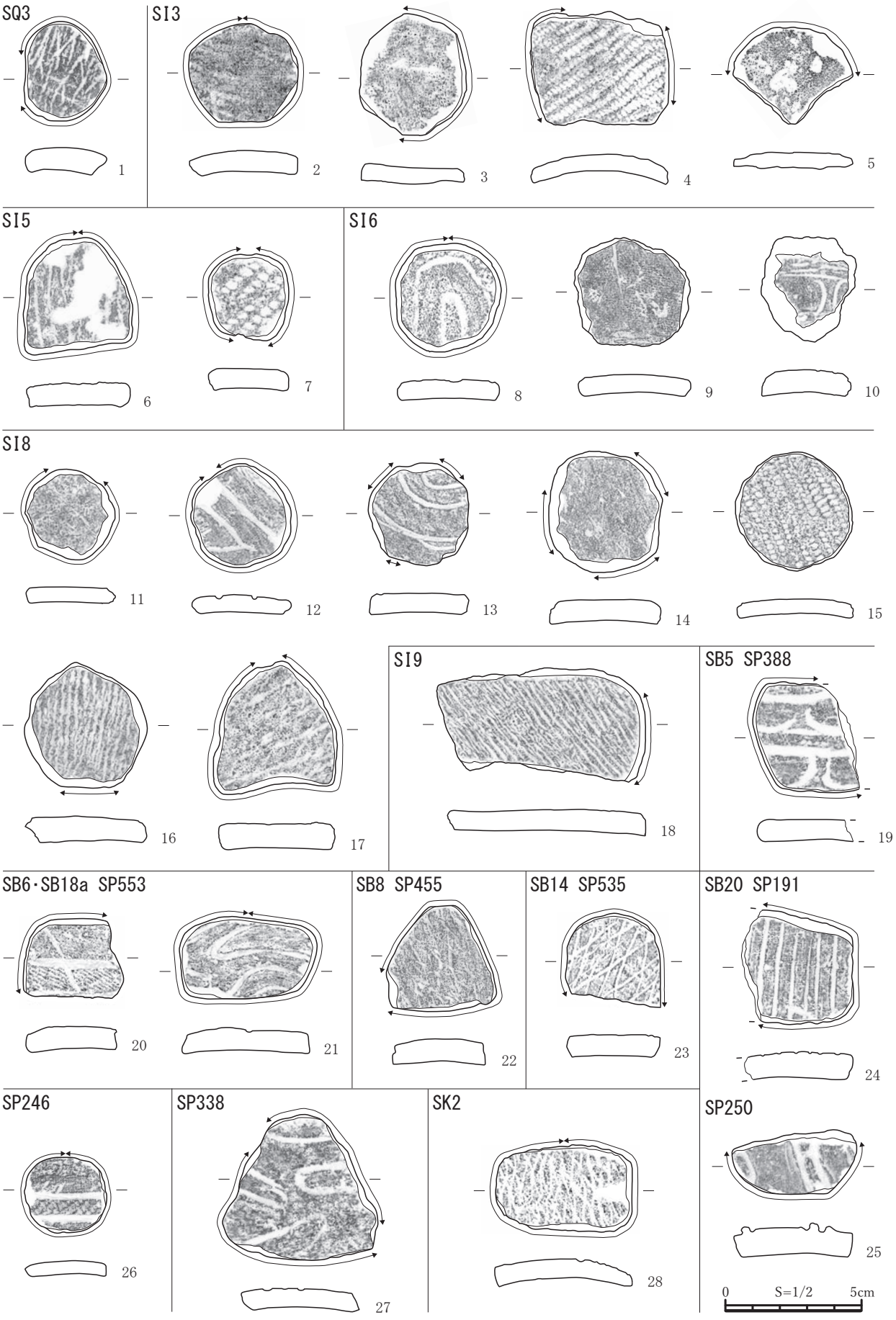


図 197　遺構内出土土器片利用土製品（１）

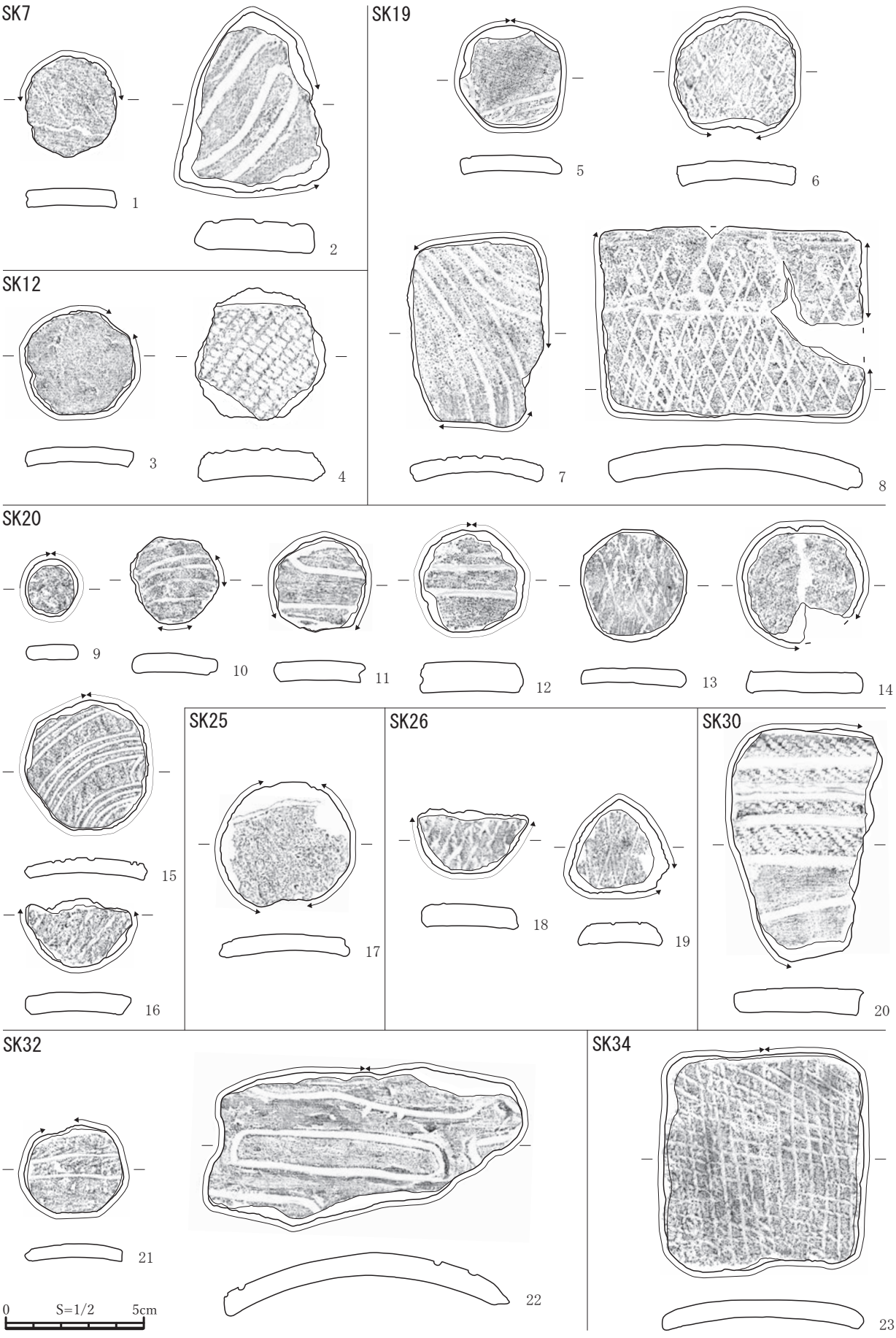


図 198　遺構内出土土器片利用土製品（２）

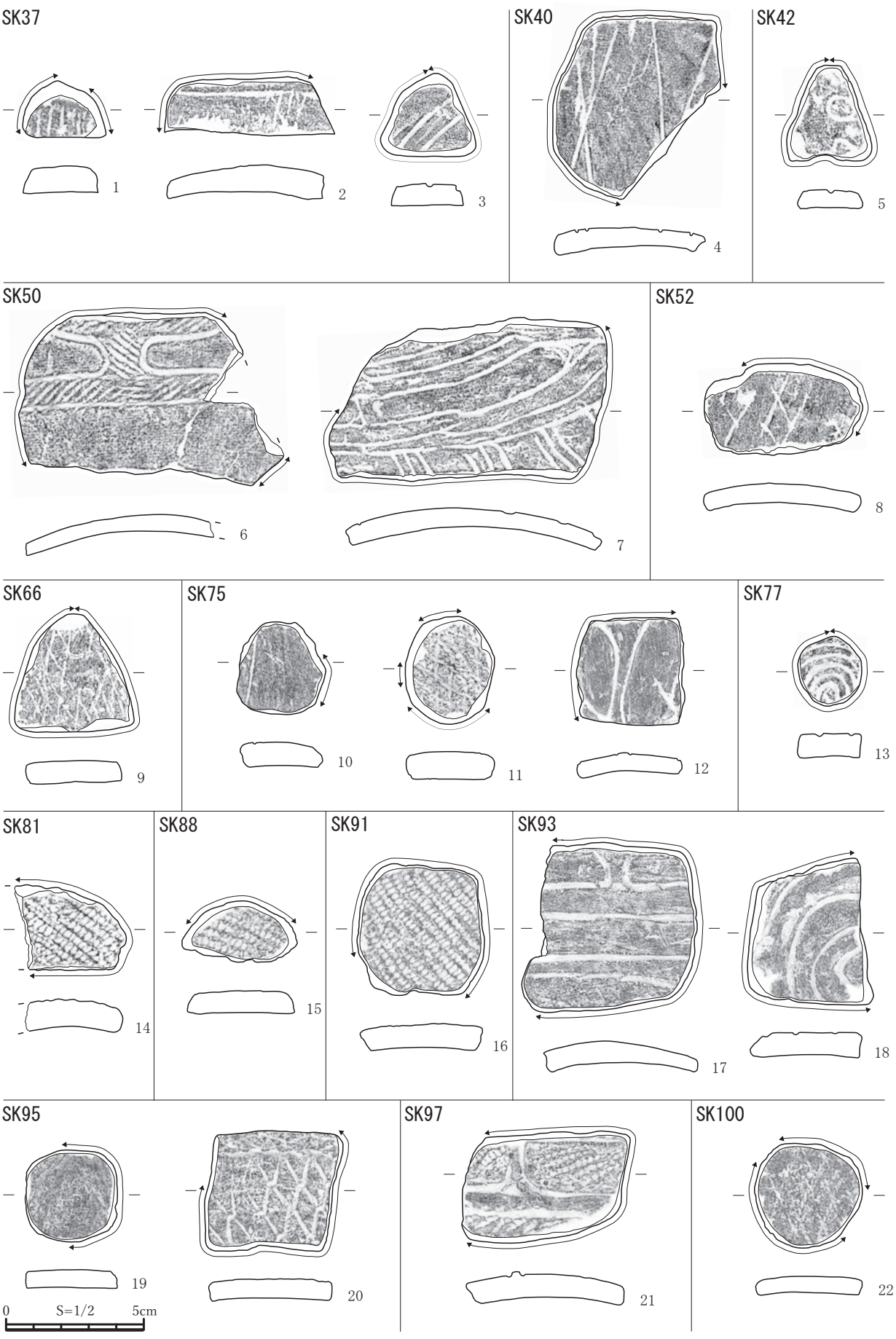


図 199　遺構内出土土器片利用土製品（３）

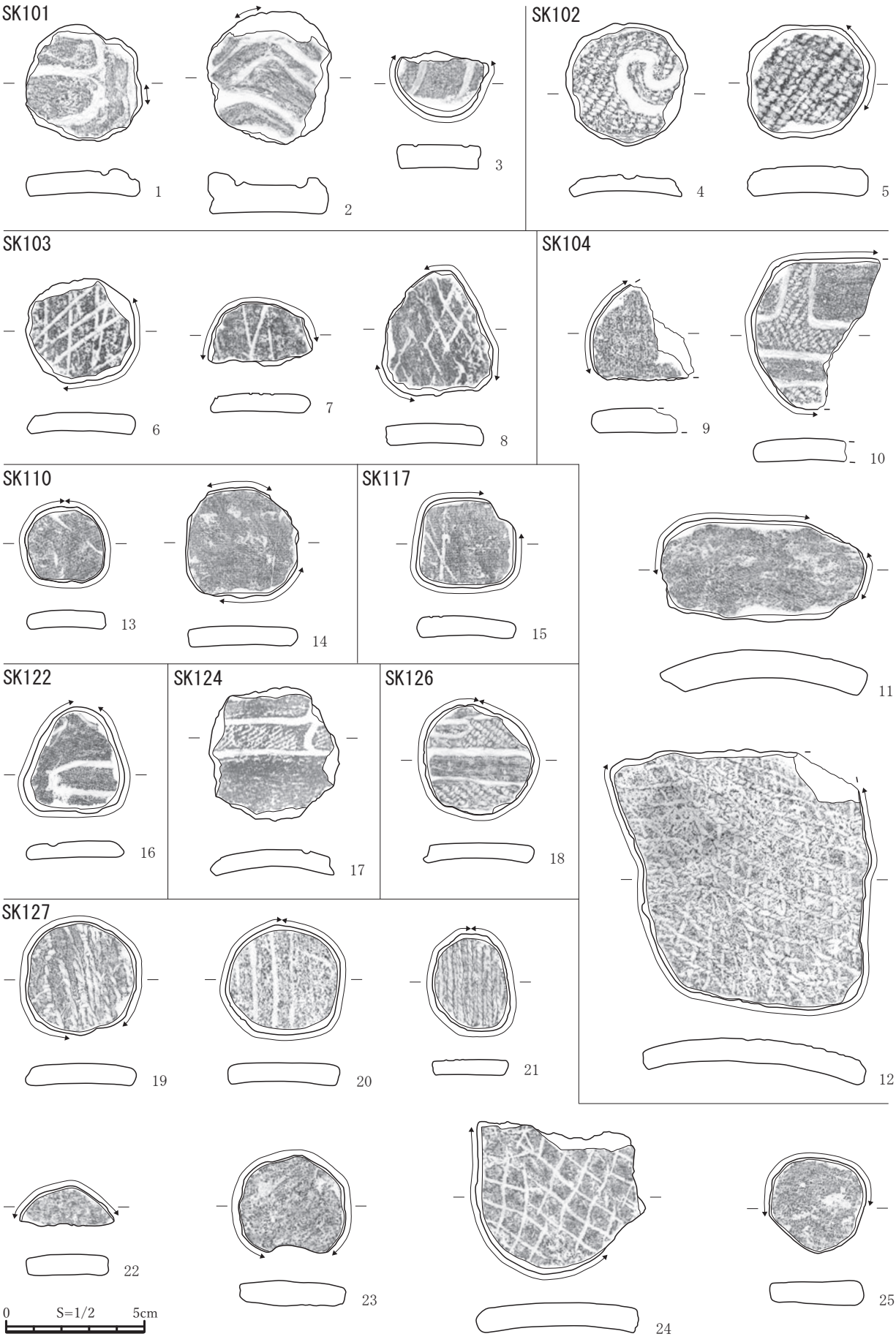


図 200　遺構内出土土器片利用土製品（４）

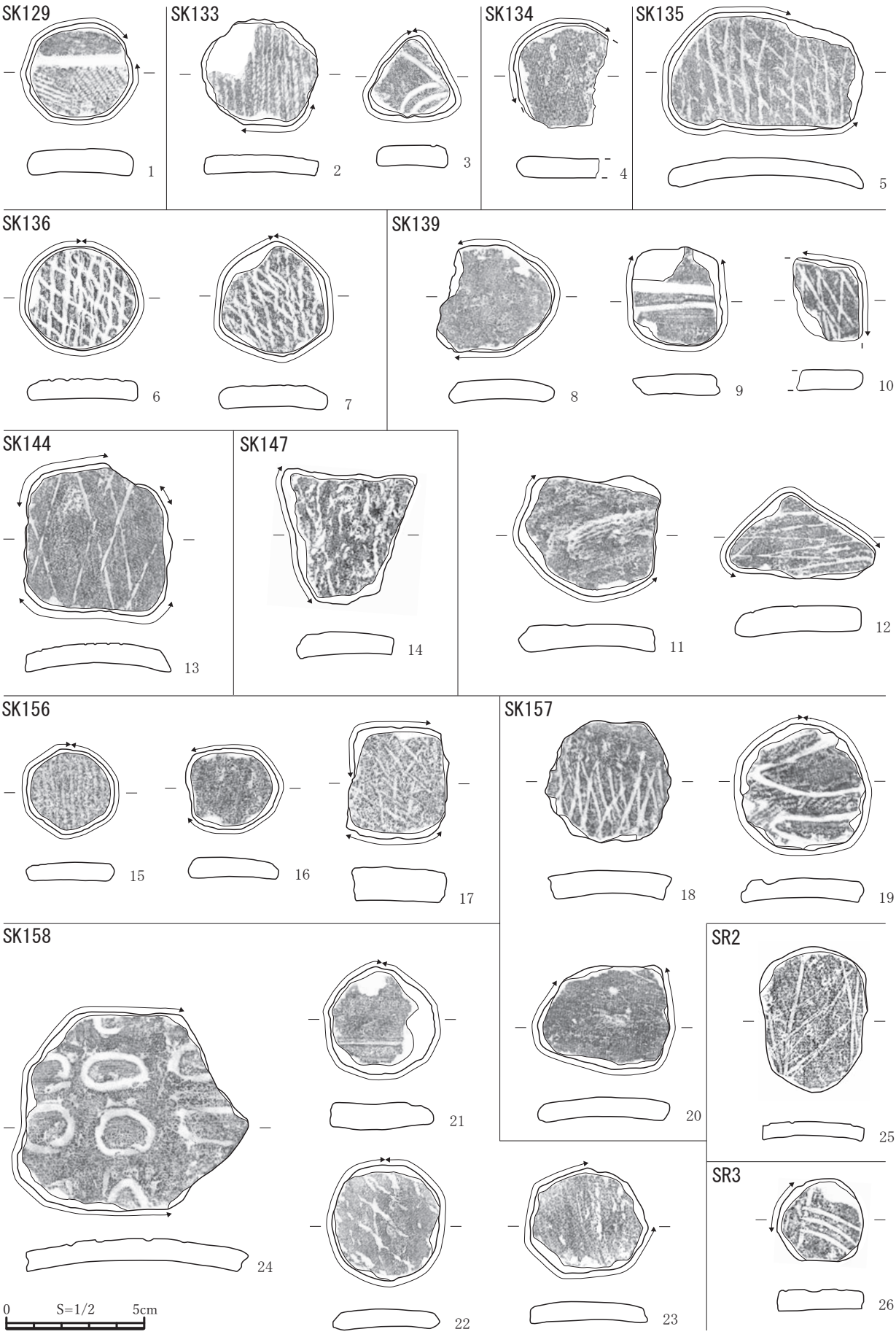


図 201　遺構内出土土器片利用土製品（５）

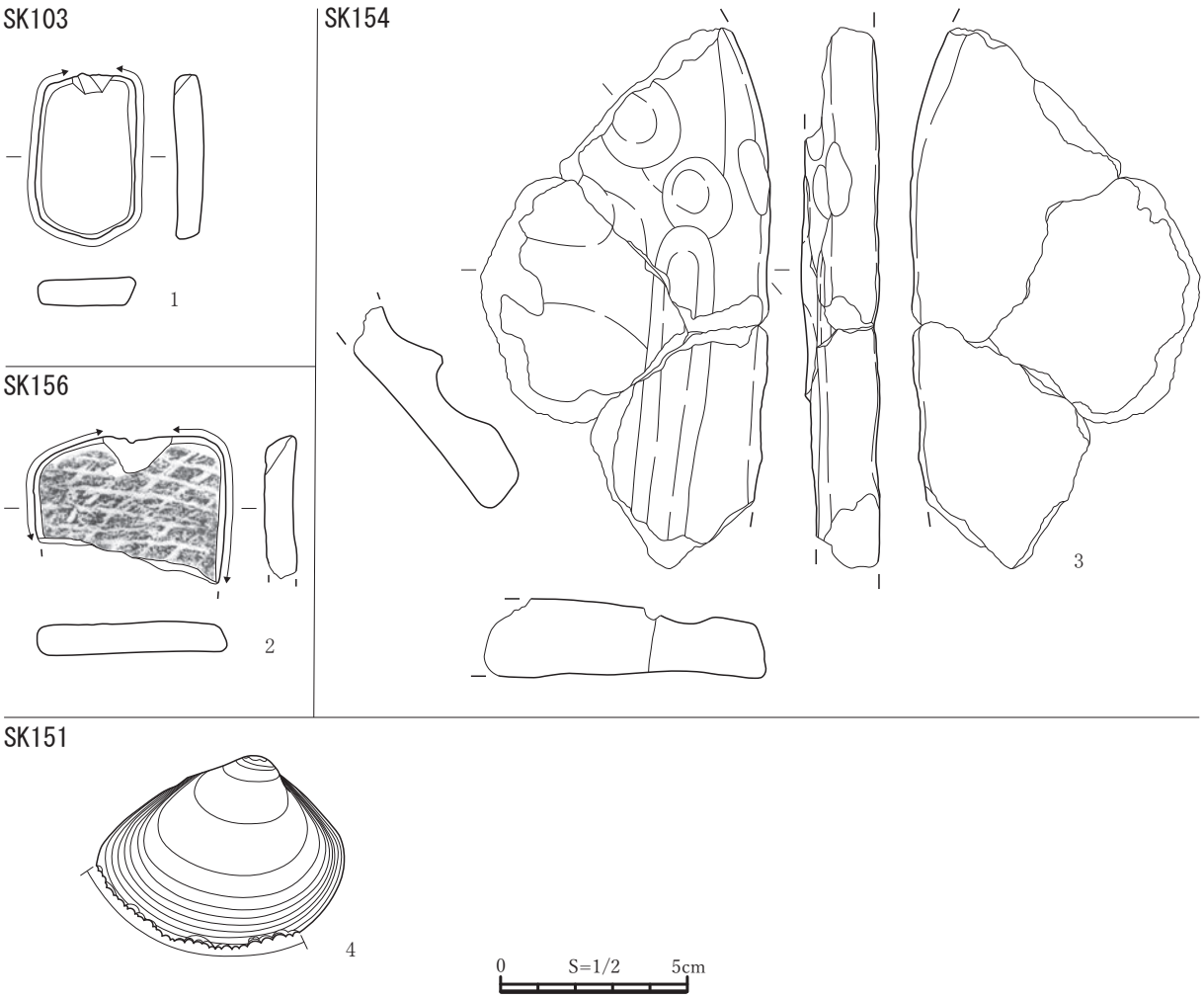


図 202　遺構内出土土器片錘・足形付土版・貝製品

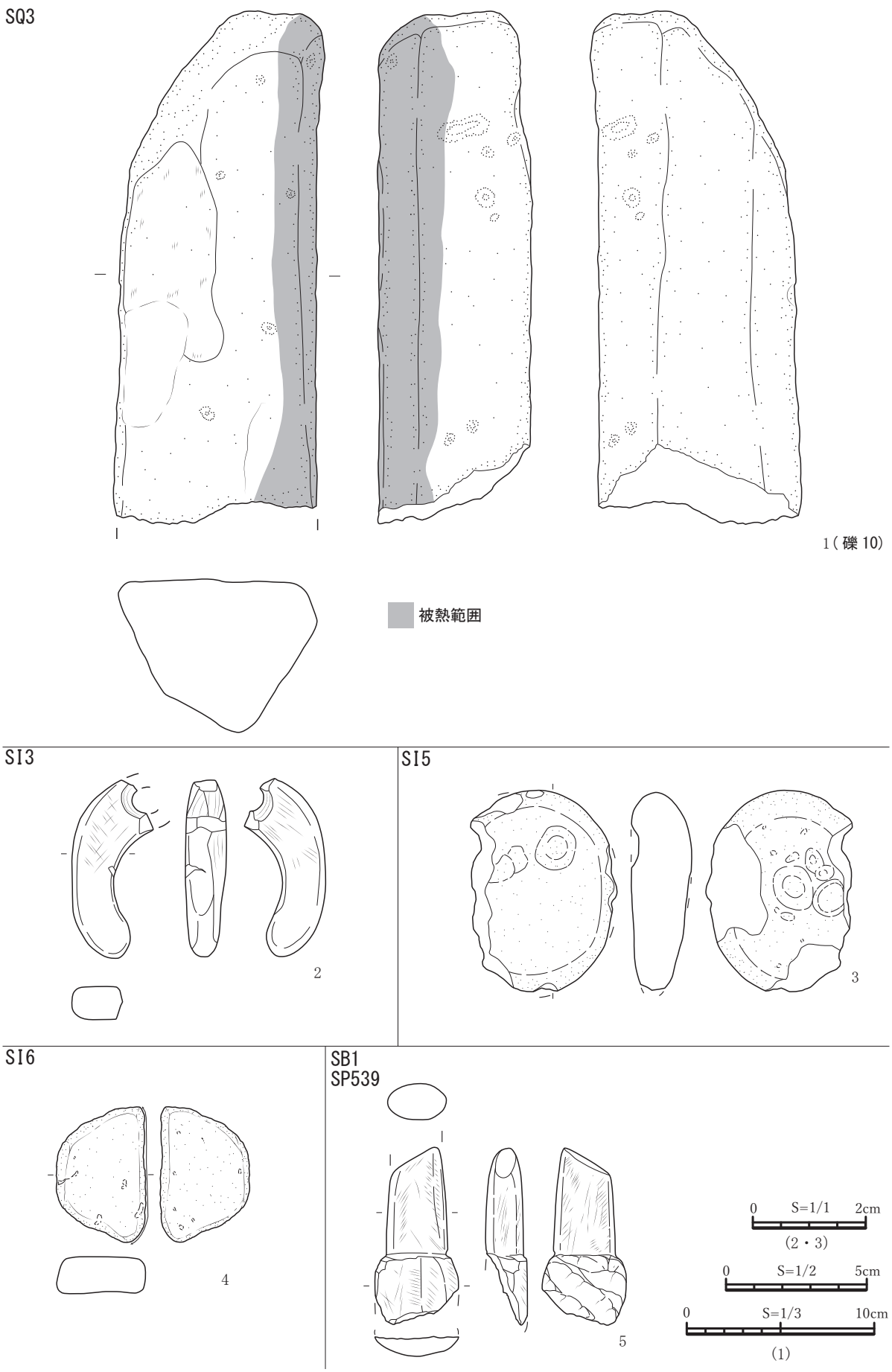


図 203　遺構内出土石製品（１）

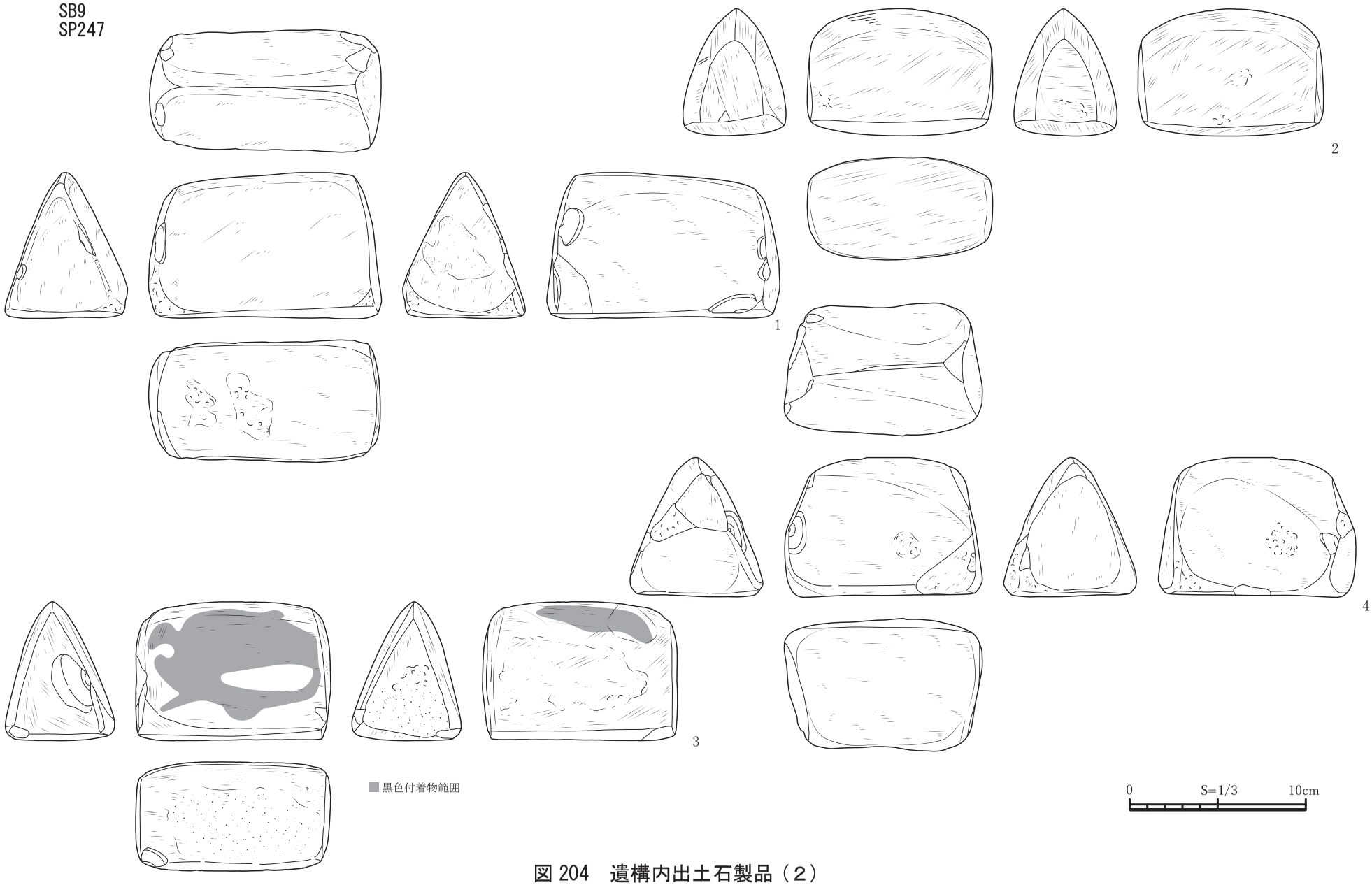


図 204　遺構内出土石製品（2）

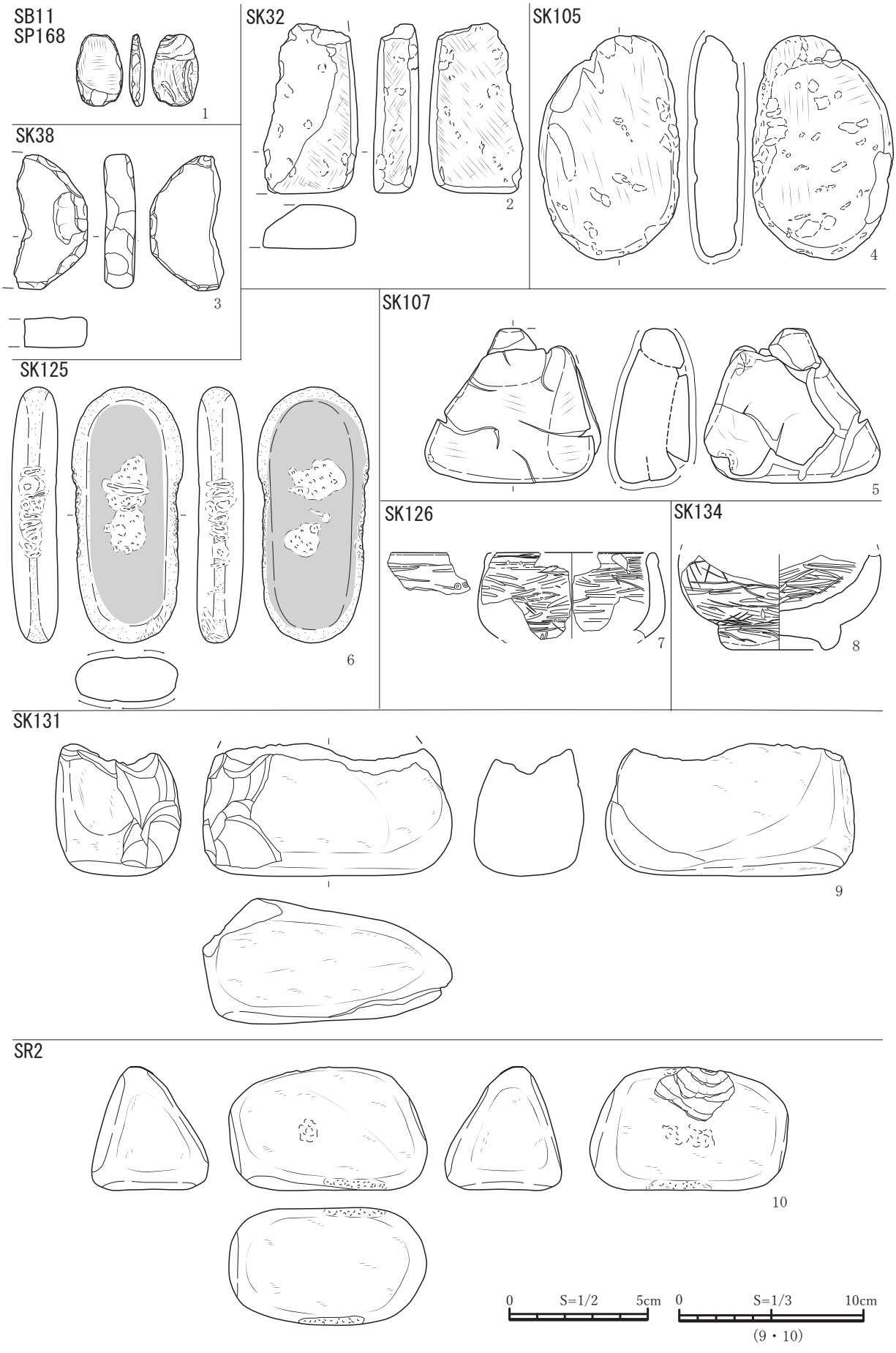


図 205　遺構内出土石製品（３）

報 告 書 抄 録

ふりがな	らくのうかっこさんいせき
書名	酪農(３)遺跡
副書名	国道279号むつ南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第641集
編著者名	折登亮子、長谷川大旗、野村信生、小山浩平、秦光次郎、佐々木雅裕
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038-0042　青森県青森市大字新城字天田内152-15　TEL 017-788-5701
発行機関	青森県教育委員会
発行年月日	2024年３月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系（ＪＧＤ２０１１） 北緯	世界測地系（ＪＧＤ２０１１） 東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
らくのうかっこさんいせき 酪農(３)遺跡	あおもりけん　しおおあざたなぶ 青森県むつ市大字田名部 あざうちだちない 字内田地内	02208	208048	41° 16′ 57″	141° 13′ 59″	20200512 ～ 20201030 ・ 20210615 ～ 20211126	4,485	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
酪農(３)遺跡	散布地	縄文時代 早期中葉	なし	縄文土器	吹切沢式か
	集落	縄文時代 前期後葉 ～ 後期前葉	環状列石　1 配石遺構　4 竪穴建物跡　14 掘立柱建物跡　28 ピット　366 焼土遺構　22 土坑　164 土器埋設遺構　9 溝状土坑　2 溝跡　1 捨て場　1	縄文土器(前期～後期) 石器 土製品(土偶・土器片製円盤等) 石製品(垂飾等) 貝製品(貝刃) 動物遺存体(獣骨・鳥骨・魚骨・貝) 人骨　種実類	・後期初頭～前葉の環状掘立柱建物跡と、後期前葉(十腰内Ⅰ式第１段階)の環状列石(配石遺構を伴う) ・後期初頭古段階の再葬土器棺墓 ・捨て場から四脚付土器、大型土偶が出土

要約

酪農(3)遺跡は、田名部低地帯に面する標高20m前後の海成段丘上に位置する。調査区南側には小規模な沢を挟み、本遺跡と同時期の環状集落である内田(1)遺跡が所在する。調査の結果、縄文時代前期末葉、中期後葉～後期前葉の集落跡が確認された。

前期末葉（円筒下層d2式）の集落は、調査区南側の斜面地や緩斜面地に、竪穴建物跡を構成する可能性があるピット、土坑、土器埋設遺構が数基構築され、小規模なものである。中期後葉に再び集落が形成され始め、後期前葉まで継続する。調査区中央の平場・緩斜面地には、各時期の竪穴建物跡やフラスコ状土坑が構築される。平場周辺の斜面地や沢は捨て場となり最終的には平坦地となる。後期初頭に入ると、平場や周辺に作りだされた平坦地に掘立柱建物跡が構築され始め、最終的には環状を呈する。後期前葉（十腰内Ⅰ式第１段階）には、円環基調の主体部と西に直線的に延びる張出部をもつ、103点の礫で構成される環状列石が構築される。後期前葉（十腰内Ⅰ式第２段階）には、前段階まで捨て場として使用された斜面地を掘り込んで竪穴建物跡が構築されるが、後続する遺構・遺物は確認されない。

環状列石には配石遺構が伴い、土器埋設遺構と巨礫が組み合い、葬制に関する遺構とみられる。竪穴建物跡は所属時期に幅があるものが多いが、特定できるものでは後期初頭新段階が４棟・後期前葉が５棟、と多い。掘立柱建物跡は長方形・正方形を基調とし張出部をもつ六角形や樽形があり、同地点での建て替えが確認される。土坑のうちフラスコ状土坑は98基あり、10基で動物遺存体（ハマグリ・アサリ等二枚貝主体）が出土し、そのうち第151号土坑では歯（ヒト?）の出土が確認された。第69号土坑内には中期後葉（最花式）の土器埋設遺構、第60・100・131号土坑内には配石、第35号土坑内には２つの小土坑が構築され特筆される。捨て場中の第７号土器埋設遺構は、後期初頭古段階（牛ヶ沢(3)式）の完形の深鉢と土器片を組み合わせて埋設しており、内部に人骨が埋葬される再葬土器棺墓である。捨て場では土器型式ごとに地点を変えつつ廃棄が継続しており、特に後期初頭新段階の小牧野３期はこれまでに例を見ない出土量である。部分的には、クルミを主体とする堅果類の廃棄が確認された。また、類例が少ない四脚付土器の他、切断壺形土器、人面付土器、狩猟文土器、覆付土器や、遠距離接合の石皿、大型の土偶、多量の土器片利用土製品等が出土した。

青森県埋蔵文化財調査報告書第641集

酪　農　（３）　遺　跡

－国道 279 号むつ南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告－

【第１分冊　本文編１】

発行年月日　2024年３月15日

発　　行　青森県教育委員会

編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042　青森県青森市大字新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701　FAX 017-788-5702

印　　刷　青森県コロニー印刷

〒030-0943　青森県青森市幸畑字松元 62-3

TEL 017-738-2021　FAX 017-738-6753

この印刷物は300部作成し、印刷経費は３分冊あわせて１部あたり31,460円(うち県負担14,157円)です。